緋弾のアリア―緋弾を守るもの

草薙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
緋弾のアリア―緋弾を守るもの

【Ｎコード】
Ｎ５３７５Ｒ

【作者名】
草薙

【あらすじ】
空から女の子が降ってくると思うか？

東京武偵高に通う椎名優希はその日、運命的な出会いの場に居合わせることになる。
神崎・Ｈ・アリアと遠山キンジの出会いの場に・・・

「この依頼受けてもらえるかな？　アリアの護衛を」

プロローグ―運命の出会い（前書き）

緋弾のアリアが好きで投稿しました。
文章は下手ですが温かい目で見ていただけると幸いです。
この小説をクリックしていただいたあなたに感謝します。

プロローグ―運命の出会い

―空から女の子が降ってくると思うか？

少なくても俺、椎名　優希はそう思わない。
なぜなら、そんな事態は異常事態に決まっているからで武偵である俺はそれを、見過ごせないからだ。

「おい、糞ガキ、今度サボりやがったら殺すからな！」

マスターズの鬼武偵の折檻も怖いが何より留年だけはしたくない。
だからこそ、今日から巻き込まれ体質を改善するのだ。

「さて、今日も気合入れていくか！」

３丁の銃をそれぞれ装備し、
部屋を出て鍵をかけてから腕時計を見る。
時刻は７時５７分、もうバスは間に合わない時間だ。
なら自転車で行くかと俺は自転車置き場に向かうのだが俺はこのバスに乗れなかったことを後悔半面、幸運半面だったと生涯で語る。

それから数分後、俺は半泣きだった。

「そのチャリには爆弾が仕掛けてありやがります」

機械的な妙な声、聞き覚えがあるようなその声。

「チャリを　降りやがったり　減速　させやがると　爆発　しやがります」

「なんでだ！　ちくしょおおお！」

俺は怒鳴りながら自分の自転車を並走するタイヤつきのかかしみたいな乗り物に向けて怒鳴った。
その乗り物にはスピーカーと短機関銃が装着されている。
銃に手を伸ばそうとして嫌な予感がしてサドルの裏に何かがあった。
ぞっとしてそれをなでるとプラッチック爆弾だと確信した。
これじゃ、この変な乗り物を破壊したとしても・・・
いや、破壊した方がいいのか？
とりあえず助けを・・・
と、携帯に手を伸ばすと

「助けを求めてはいけません　携帯を使用した場合も爆発しやがります」

ああ、そうかよ了解だ。

伸ばした手を止めて俺は悪態をついた。

まずいぞ、チャリジャックで死ぬなんてお笑いにもならないじゃないか
武偵を志した日から死ぬ覚悟はできているがこんな情けない死に方は嫌だ！

「加速させてください。　増加が認められない場合爆発しやがります」

まじかよちくしょう！

俺はペダルを踏む力を入れて自転車をわずかに加速させる。
とりあえず人気がない場所に・・・
そう思って前を見た時だった。
俺と同じように自転車をこいでいる人が見えた。
って、あれキンジじゃねえか何してんだ？
あ、あいつもかよ！

昔、といってもそんなに前じゃないが強襲科つまり、アサルトでよくコンビを組んでいた友人だ。
彼の兄が事故で亡くなり、ショックだったのかアサルトをやめ探偵科、つまりイケスタに転科していった遠山　キンジもまた、俺と同じようにチャリジャックに合っているのだった。
俺はとりあえず彼の横に自転車をつけ

「ようキンジおはよう」

「優！　お前もか！」

一瞬で自分と同じ状況に陥っているとキンジは理解してくれたようだった。

とはいえ、どうしようもないのが現状だが・・・

「どうしよう？　これ？」

半笑いで俺は自転車を指さした。

「人気のない所に向かってるんだが・・・」

「そこで爆死なんて嫌だぞ俺は！」

「じゃあ、どうすんだよ！」

「とりあえず、誰かが気付いてくれるまで第2グランドをぐるぐる回るのはどうだ？」

「それしかないか・・・」

キンジは諦めたように言うと武偵高の第2グランドへ自転車を向ける。

ほぼ、並走するように俺も続きやがて、グランドが見えてきた。

金網越しに見たが誰もいないようだ。

「なあ、キンジ短い人生だったなぁ」

「おい優！　もうあきらめたのかよ」

「嫌、だって俺だけならなんとかなるよたぶん。　でも、キンジも同時に助けるとなるとなぁ・・・」

そう、実の所打開策はある。

俺の特技を使えば俺だけなら助かるのだが・・・

「おい！　見捨てるのか優！」

「いや、だからそうしたくないから困ってるんじゃないか」

どうするかなと思っていた時、俺とキンジは信じられないものを見たグランドの近くにある7階建ての女子寮の屋上に女の子が立っていたのだ。

遠目にも分かるピンクのツインテールがいきなり屋上から飛び降りた。

「えええええ！」

俺とキンジは仰天してその光景を見た。

少女はバラグライダーを展開してゆっくりとこちらに向かってくる。

「ば、馬鹿こっちにくるな！　この自転車には爆弾が・・・」

キンジが慌てた様子で言っている。

少女が左右の太もものホルスターから黒と銀の大型拳銃を抜いた。

あ、あの銃、俺と同じ銃だな。

「ほら、そこの馬鹿ども！　さっさと頭を下げなさいよ」

2丁拳銃の水平撃ち。

俺とキンジの横に張り付いていた乗り物はばらばらになってぶっ壊れた。

おお、すごい腕だ。

少女は2丁拳銃をホルスターに戻すとさらに近づいてくる。

あ、まさかこの子俺達を助ける気か？
一瞬で、少女がやることを理解した俺は少女に向け怒鳴る。

「おいあんた！　俺は助かる方法がある！　こいつを助けてやってくれ！」

そういうと俺は少女の進行方向から離れるため右にハンドルを切る。

「ちょ、ちょっと！　待ちなさいよ！」

後ろから少女の声が聞こえてくるが俺は無視して全力疾走した。
振り返るとやはりと言うべきか少女が逆さ吊りの姿勢になっている。
キンジを受け止めて自転車だけ進ませ爆発させる気なのだろう。
一時を置いて後方で爆発が起こった。
爆風を背中に受けて俺の自転車が加速する。
うわ！　あぶねえ！

こけそうになりながら競輪選手と同等ぐらい出てる自転車はみるみる川に迫る。
ミスしたら死ぬよな絶対。

俺は右手を川の前に生えている枯れた木に向かい向けボタンを押しこむと同時に爆発するような反動と共にワイヤーが飛び出し木に巻きつく。
そして、ペダルを最後に踏み込むとワイヤーに引っ張られ自転車から離れる。
ボタンをもう一回押しこんでワイヤーが俺の体をひっぱりあげる。
自転車は川に落ちたかと思った瞬間、巨大な水しぶきが川に現れる。
あれが、けつの下で爆発したらと思うとぞっとする。
ワイヤーにぷらぷら揺られながら衝撃に強いデジタル時計を見ると

まだ、時間は問題なかった。
まあ、全力疾走したのだから時間短縮にはなったか・・・

「たく、キンジ達大丈夫かな?」

そういや、これニュースでやってた武偵殺しの手口にそっくりじゃねえか。
また、巻き込まれたのか俺?

「あ、自転車・・・」

命は助かったが1万円で買った自転車は廃車らしかった。
買ってまだ、2か月しか乗ってないのに・・・
ため息をつきながら俺はワイヤーを回収し腕の中の器具に戻すととぼとぼと校舎に向かい歩き出すのだった。

ここ、武偵高こと武偵高校はレインボーブリッジ南に浮かぶ南北およそ2キロ・東西500メートルの長方形をした人口島である。
学園島と言われているこの島は武偵の総合脅威聞く機関である。
武偵とは凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国際資格で武偵免許を取ったものは武装を許可され逮捕権を有するなど警察に近い活動ができる。
警察と違うのは金をもらうことで武偵法の許す範囲ならどんな荒事

でもこなす。
ようは、便利屋だ。
ちなみに、武偵には武偵憲章というものが存在しその1条はこうだ。
『仲間を信じ、仲間を助けよ』
ようはあの少女はこれに従ってキンジを助けたのだろう。
そこでだ。

「なんじゃこりゃ？」

俺がそこに着いた時、全て終わっていた。
いや、始まりか？
先ほど俺とキンジを追いまわしていた乗り物の残骸が散らばる仲先ほどの少女が後ずさるキンジに突進している。
2つの日本刀だ。
まてよ、2丁拳銃に2つの刀ってことは双剣双銃かよ。
ってあれは！

キンジがはっとして右を向いた。
あれに気付くってことはお前、ヒステリアモードか。　あの子でなんかしたな？

「待て！アリア」

怒りで血が上ってるのか少女・・・アリアというらしい少女は気付いていない。
茂みから機関銃を装備した乗り物が飛び出してきたのだ。
キンジがアリアに向け走り出した。
かばう気か！？
俺はとっさに右手を前に突き出した。

腕に衝撃が走りワイヤーは飛び出すと同時に機関銃が発射された。
飛び込むようにアリアにタックルしたキンジ達がいた場所に射線が横切る。
同時にワイヤーが乗り物に絡みつき俺は引き戻しのボタンを押しこむとホルスターのガバメントではなくデザートイーグルを取りだしぶっ放つ。
迫撃砲のような轟音と共に乗り物がばらばらになる。
うん、破壊力だけなら抜群だなこいつは
自動式拳銃では最強クラスの破壊力のこの銃は俺は今のような速度ではなく破壊力を求められる時に使用している。
はっとして、殺気を感じ見ると乗り物が3体4体と現れる。

「キンジ！アリア！」

俺は巻きついた右手のワイヤーを切断するとグリップに炎のイメージで描かれた黒の装飾のガバメント2丁を2人に投げる。
2人は状況が読めたのかガバメントを受け取ると応戦し乗り物を破壊していく。
そして、最後のデザートイーグルの1撃により破壊される。
周りを確かめたが打ち止めのようだった。

「なんて日だよ今日は」

デザートイーグルを太ももものホルスターにしまいながら俺は再びため息をついた。
とおもったらキンジが走りだした。
一瞬、遅れてアリアが声を張り上げる。

「強猥男は神妙に・・・わきゃお！？」

ステーンと倒れたアリアが踏んだのは銃弾のようだった。
なんであんなとこに？

「こ、このみゃおきゃ！？」

再びステーン転ぶアリア、おいパンツ見えたぞ。

「優、逃げるぞ」

すれ違いざまキンジが言ってきたので俺も走り出す。
おい、ヒステリアモードだけあって早いな。
追いつくの苦労するじゃないか。
それでも、なんとかついていきながら

「キンジ何やったんだよあの子に？　ヒステリアモードで強猥男ってまさか・・・」

「誤解だ」

キンジは短く返しながらガバメントを俺に渡してくる。
あ、そういえばアリアに貸したガバメントどうしよう？
振り返るとツインテールを揺らしながら両手の腕をぶんぶん振っているアリアが見えた。
うーん、今話しかけたら切られそうだな。
まあ、手段はあるかと思いながら走っているとアニメ声の怒声が空に響き渡る。

「このひきょう者！　でっかい風穴あけてやるんだからぁ！」

これが後の長い付き合いになる遠山キンジ　神崎・H・アリア　椎

名優希の硝煙にまみれた最悪の出会いだった。

プロローグ―運命の出会い（後書き）

椎名　優希

学科　強襲科
武器　炎の装飾ガバメント2丁
　　DE　1丁
　　バタフライナイフ等
　　特殊ワイヤー

キンジ達と同じ武偵高に通う2年生、キンジの友人で強襲科ではコンビを組んでいたこともあり仲が良い。
名前もそうだが、顔も女性のように綺麗なため、そのことでからかうと激怒する。
武器はワイヤーと2丁拳銃を組み合わせて戦う中距離型で中距離限定ならキンジのヒステリアモードとも互角以上に渡り合える。
しかし、近距離戦は苦手で、そこに持ち込まれればば大抵は負けてしまう。
接近させずに中距離で決めることに特化しておりワイヤーもそのためのものでワイヤー射出用の装置を体のいたるところに隠し持っている。
DEは切り札として持ち歩いている。
不幸体質で事件や事故に関わることも多いためか困っている人を見捨てられずその性格が災いし、Aランクの強襲科にあるにも関わらず単位が足りていないと言う事態にも陥っている。
本気で戦ったことがないとされ、その真のランクはSランクに匹敵すると言う噂もある。
実家は日本では剣の名門の家だが本人には接近戦の才能は皆無であると言われており、銃による武偵での活動を行い、実家からは勘当

同然になっている。
本作ではめでたくアリアの奴隷となるオリジナルキャラである。

第０１弾　３Ｐ疑惑　（前書き）

基本的に原作のストーリーをなぞっていこうと考えています。

第０１弾　３Ｐ疑惑

「いやぁ、不幸だったなキンジ」

クラス分けで俺とキンジは２－Ａだった。
教室に入るなり机に突っ伏してしまったキンジに話かまくるが落ち込んで反応を返してこない。
まあ、無理もないこいつは女性にヒステリアモード見せたがらないからな。
ヒステリアモードとは正式にはヒステリア・サヴァン・シンドローム一定以上の恋愛時脳内物質が分泌されるとそれが常人の３０倍以上の量の神経伝達物質を媒介し大脳・小脳・脊髄といった中枢神経系の活動を劇的に亢進させる。
その結果、判断能力や思考力が劇的に上昇するいわゆるスーパーモードになるわけだ。
すごい能力なのにその発動条件が性的に興奮することだから余計嫌っている。
なんでも中学の時、ひどい目にあったらしいのだがあまり、それをキンジは語りたがらない。
まあ、想像はつくけどな。

「おう、優にキンジ！　お前らもＡか！」

声のした方を見ると車輌科、つまりロジの武藤　剛気が右手を上げながら歩いてきた。
また、こいつと同じクラスかよ。

「相変わらず元気だなお前」

俺が言うと武藤はキンジを指さし

「どうしたんだ？　星伽さんと一緒のクラスになれなかったのが悲しいとか？」

「武藤・・・今の俺に女の話題は振るな・・・」

本気で怒ってるらしく武藤が一歩引いた。
ちなみに星伽白雪はキンジの幼馴染で何回かキンジのついでに御飯を作ってもらったこともある。
まあ、一言で言うなら大和撫子だな。
少しだけヤンデレが入っているが・・・

「まあ、いいや。　優お前、進級できる単位あったんだな」

「春休み中にクエスト受けまくってなんとかな。　最後の方はかなり運がよかった」

実は０．１単位足りずにお前留年なと言われたのだがその日、運よく？銀行強盗に出くわしそれをぼこぼこにして逮捕したら単位をくれたのである。
いやあ、銀行強盗様様だな
あ、そういや神崎ってどこのクラスなんだろ？　ガバメント返してもらわないと・・・

「先生、私あいつらの真ん中に座りたい」
結論から言えば問題はあっさり解決した。
クラスメイトの黄色い悲鳴が響く中、神崎・H・アリアが同じクラスになったからだ。
かわいそうにキンジ怯えてるぞ。
一体何したんだ？

「な、なんでだよ」

「なんか知らないけど諦めろキンジ。　諦めて死ね」

「アサルトの連中のようなことというな！」

「いや、俺アサルトなんだが・・・」

「そうだったな・・・」

キンジが頭を抱える。
うーん、いじめすぎたか？
ちなみにアサルトには死ね言う言葉があいさつになっている。
あそこでは友達に合ってもよう、まだ生きてたのか？　さっさと死んでくれと
普通の高校生なら精神崩壊するようなことを平気で言いまくるとんでもない学科でもある。
死ねと言う言葉に違和感がない俺もアサルトに染まってるな。

「よ、よかったなキンジ、優、なんか知らんがお前らにも春がきたみたいだぞ。　先生、俺喜んで席かわりますよ」

武藤がいそいそと席を変わる。
黄色い悲鳴は続いている。

「キンジ、これ、さっきのベルト」

そこへ、アリアが歩いてくるとベルトをキンジに投げ捨て俺の机には炎の装飾が施されたガバメントをゴトリと置いた。
うん、銃は投げたら駄目だからな。緊急事態以外はね。

「優、返す」

待て、いきなりあだ名かよ。　まあ、名乗ってなかったからまあいいか
しかし、キンジベルト貸すなんて本当に何したんだよお前。
その時、
その推測をしてくれるものが現れた。

「理子分かった！　分かっちゃった！　これフラグばっきばっきに立ってるよ」

キンジの左に座っていた峰理子が、がたんと席を立つ。

「キー君してない！　そして、ベルトをツインテールさんが持ってた！　これ謎でしょ！　謎でしょ！　でも理子には推理で来た！　できちゃった！　あれ？　ユーユーの銃は何かな？何かな？　あ！　分かっちゃった！」

大体アリアと同じくらいの小柄のこの子は探偵科、つまりインケスタで？1のおばかさんだ。

制服もごすろり風に改造している

ちなみにキー君やユーユーはこいつがつけたあだ名だ。
どうでもいいがユーユーはやめてくれまじで

「キー君は彼女の前でベルトを取る何らかの行為をした！　そして、彼女の部屋にベルトを忘れてきた。　でも、ユーユーがそこに銃をもって乱入！　そして、彼女と！　３Ｐ！
つまり、３人は彼女を挟んで恋愛の真っ最中なんだよ」

待て！待て！　３Ｐってなんだよ！　そんな馬鹿な推理誰が信じ・・・

「き、キンジと優がこんな可愛い子といつのまに」「影の薄い奴らだと思ってたのに」「３Ｐなんてふけつだわ」

忘れてた。
ここは武偵高なんだからこいつらならこうなるよな。

「お、お前らなぁ」

キンジが頭を抱えて机に突っ伏した瞬間

ずぎゅぎゅん！

鳴り響いた2発の銃声が教室に響きみんなぴたりと止まる。
真っ赤になったアリアが銃を撃ったのだ。

「れ、恋愛なんてくだらない！」

いや、３Ｐを先に否定してくれ頼むから。
あーあ、壁に穴あいてるぞ
馬鹿理子はすすすと席に戻ると着席
ちなみに、銃は必要以上に発砲しないとルールにあるがしてはいけないとはないとはない。
まあ、自己紹介中に銃をぶっ放したのはアリアが初めてだと思うが・・・

「全員覚えておきなさい！　そんな馬鹿なこと言う奴には・・・」

耳にタコができるぐらいその後聞かされるその言葉をアリアは言い放つ

「風穴あけるわよ！」

第０２弾　奴隷宣告

昼休みになると同時に質問攻めに合うのはわかっていた俺は窓から飛び出し例のワイヤーで隣の校舎に飛んで逃げた。
後ろからキンジの悲鳴が聞こえてきたが許せ友よ。

「さてと」

念のためもう一つ校舎を飛んで屋上に腰を落として昨日買っておいた梅のおむすび６つを取り出す。
包みを破りながら携帯のメールを確認していると今朝のチャリジャックの周知メールが送られてきていた。
ご丁寧に写真まで添付されている。
モザイクかけてるが、俺達を知ってる、やつならばればれだろ。
というか見てたなら、助けろよ。
まあ、武偵高２年となれば危機は自分できりぬけろと言う方針の教務課、つまりマスターズが助けてくれると考えるのは甘いのか・・・
それにしてもなんだろうなあの子？
俺は今日初めて会ったアリアを思い出してみる。
昨年の３学期に転入してきたらしいということしかわからないが何をする気なんだ？
まあ、とりあえず成り行きに任せるかな。

「うわ！」

３つ目のおにぎりを口に入れて４つ目に手を伸ばそうとした瞬間、
俺は仰天して後ずさった。
なぜなら、人形のような少女がそこにいたからだ。
壁を背にしてロシアの古い狙撃銃を肩にかけ、カロリーメイトを口

に入れている。
確かドラグフ狙撃銃だったな。

「れ、レキ」

俺はその少女の名前を呼ぶが彼女は無反応。
ただ、カロリーメイトを口に入れている。
通称、ロボットレキ、美人は美人だが無愛想で無口。
耳には何を聞いているのか授業中でもヘッドホンを付けている。
しかし、何より特徴的なのは武偵としての腕だ。
彼女はSランクの武偵なのである。
所属は狙撃科、つまり、スナイプである。
熱狂的なファンもいるらしいが正直、俺はこいつが苦手だった。
だって、何話しかけてもあまり反応してくれないし。

「れ、レキも昼飯か？」

コクリと首だけが動く。
うーん、反応してくれるだけましか？

「いつもここで食べてるのか？」

フルフルと首が左右に振られる。

「じゃあなんでここに？」

「風がそういったから」

「風？」

コクリ
その後、俺が何話しかけてもレキは反応してくれなかった。
いたたまれなくなった俺はまたなと逃げるように屋上を後にするのだった。

自転車が爆発してしまったのでバスでアサルトの寮に帰るか迷いながら俺は探偵科の寮の前に来ていた。
大きめのカバンを持って部屋のベルを押す。

「はい？」

「よう、キンジ遊びに来たぜ」

「優か？　あがれよ」

「おじゃしまーすと」

律儀に挨拶してキンジの部屋に入るがこの部屋には彼しかない。
元々、４人部屋だがキンジがインケスタに転入した時期等の問題で今は1人で使っているらしい。
うーん、うらやましいぜ。
とはいえ、個室は一応あるんだが風呂を独占できたりリビングを独占できるのはうらやましすぎる。
アサルトの連中と同室になるテレビの奪い合いで銃撃戦になること

も珍しくないからな。

「その荷物、今日は泊っていく気か？」

「いや、それがさ同室の馬鹿がリビングでテレビ吹き飛ばしたから俺の部屋しばらく使えないんだよ。　しばらく泊めてくれねえ？テレビの優先権は譲るからさ」

「相変わらずだなあそこは・・・」

キンジが思いだしたのかため息をつく。
うん、気持ちは分かるぜキンジ俺だって部屋に戻ったらリビングが黒こげになってるなんて思わないよ。
あいつら風呂まで破壊しやがったからな。
アサルトにもまともな奴はいるにはいるがあんまりいないんだよ。

「さて、ゲームしようぜ」

いそいそと俺はテレビに配線を繋いでいく。
ソフトは空戦のゲームで戦闘機がミサイルを撃つゲームだ。
キンジもソファーに座るとリモコンを手にそれを見ている。

「ところでさ、キンジ戻る気はないのか？」

セットを続けながら俺は言った。
元論、アサルトへだ。

「何度も言ってるだろ。　俺は来年の４月に武偵の世界から足を洗うんだ」

「残念だな。　俺はお前とチーム組みたかったのに」

「優なら他にいい奴と組めるだろ」

いや、それは違うぜキンジ、お前ほど優秀な武偵はそうそういないんだ。
不知火とか実力者はいるが組むならお前がいい。
あれ？　なんか言い方が変な気もするがとにかく残念なんだよ俺は

「そういえばアリアのことなんだが」

話を無理やり変えるようにキンジが口を開く。

「なんか俺達の資料を漁ってたらしいぞ」

「まじかよ。　ストーカじゃねえか」

一体何がしたいんだよと思いながら俺はゲームを起動した。
うん、Ｆ１５でいくか。
おい、キンジＦ２２は卑怯だろ。
そういや、朝の爆弾事件どうなったんだろうな？
あれのせいでアリアと・・・

ピンポーン

「ん？」

俺はチャイムのした方を見てからキンジを見るが彼は居留守を使う気らしかった。
いや、何か考えて聞こえていないのか？

ピンポンピンポーン

おいおい、キンジ何考えてんだ？集中しすぎだろ

ピポピポピポピポピピピピピピンポーン

キンジが顔を上げる。

ああ、居留守使いたかったんだなやっぱ

「誰だよ」

キンジはだるそうに立ち上がると玄関に向かう。

面白そうだったので後ろから俺もついていく。

そして、ドアが開くと

「遅い！　あたしがチャイムを押したら5秒以内に出ること！」

両手を腰に当て、赤紫色の目をぎぎんとつりあげたのは

「か、神崎！？」

制服姿の神崎・H・アリアだった。

「アリアでいいわよ」

キンジを押しのけて部屋に入ってくるもんだから俺とアリアの目があった。

「やっぱり優もいたのね。　ちょうどいいわ」

「へ？」

間抜けにも変な声を出してしまったぜ。
キンジの制止の声も無視しアリアはトイレに入っていってしまった。
トランク中に入れておきなさいという言葉を残して
俺が外を見るとなるほど、車輪付きのブランド物のトランクがある。
仕方ない運んでやるか。
うお、なんだ重いぞこれ
キンジも廊下に女物のトランクがあってはまずいと思ったのか2人
でリビングに運ぶとちょうどアリアがトイレから出てきて部屋の様
子を見まわしている。

「あんた達2人暮らしなの？」

「いや、俺は一時的に今日から住むだけなんだが」

「まあいいわ」

何がいいんだよ。
アリアは窓のそばまで行き夕日を背に浴びながら振り返ると俺たち
を指さした。

「キンジ、優。あんた達あたしの奴隷になりなさい！」

っと奴隷宣告しやがった。
まじかよ。

第０３弾　Ｓランク以上のクエスト

さすがの俺も目が点になったぞ。
キンジも目が点になってるし。
だって、いきなり奴隷になれだぞ？　ありえないって

「ほら！　さっさと飲み物ぐらいだしなさいよ！　無礼な奴ね！」

その宣告をしたアリアはぽすっとソファーに座ってしまう。

「コーヒー！　エスプレッソ・ルンゴ・ドッピオ！　砂糖はカンナ！　１分以内！」

すみませんエスプレッソまでしかわかりません。
心の中で俺は謝ると目でこいつ簡単に諦める感じじゃねえぞとキンジにアイコンタクトをとる。
彼もそれを承知してかインスタントコーヒーをアリアに出した。

アリアは不思議そうにコーヒの匂いを嗅いだりしてから

「これ本当にコーヒー？」

「それしかないんだからありがたく飲めよ」

「変な味、ギリシャコーヒに似てるけどちょっと違う」

駄目だそれすら俺知らねえぞ。
コーヒーってインスタント以外にもあることは知ってたが名前が全く分からん。

と、インスタントコーヒーを飲んでコーヒー好きとか思っていた過去の自分を殴り飛ばしながら俺はコーヒーをすすった。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。　それにその・・・お前を怒らせるようなことを言ってしまったのは謝る。　でもなんでだからってここに押し掛けてくる？」

アリアは目だけをキンジに向け

「分からないの？」

「分かるかよ！」

いらだった様子で言うキンジ
ああ、なんとなくだけど俺はわかった。
まあ、あの状態のキンジ見たらな。
面白いから黙ってよ。

「優も分からない？」

今度はアリアは俺に目を向けてきた。
なんというか猫を印象させる子だなこの子。

「さあ？　俺馬鹿だし」

「あんたたちならすぐわかると思ったのに。　んー、そのうち思い当たるでしょ、まあいいわ」

よくねえ！
キンジと俺は心の中で同時に叫んだ。

「おなかすいた」

そして、盛大に話題を変えやがったぞ
あ、なんかそのソファーの手すりにもたれかかるしぐさかわいいな。
キンジ大丈夫かな？
見るとキンジは顔を赤くして顔をそらしている。

「なんか食べ物はないの？」

「ねーよ」

「ああ、おにぎりならあるぞ」

俺が言うとアリアが考え込むしぐさを取った。

「おにぎり？」

「まあ、賞味期限昨日切れだがまだ・・・」

「風穴あけられたいの？」

「すみません」

俺は素直に謝る。
確かに女の子に賞味期限切れを進めるのはどうかと思う。
あれ、レキのせいで食べ損ねた残りものだしな。

「じゃあ、コンビニに買いに行くかキンジ」

いつも俺達はそこで飯を買っている。
まあ、泊りに来た時だけだけど

「こんびに？　ああ、あの小さなスーパーのことね。　じゃあ、行きましょう」

「じゃあってなんでじゃあなんだよ」

「馬鹿ね食べ物を買いに行くのよもう、夕食の時間でしょ」

夕日が落ちて行き電気の光だけが頼りの世界になるこの時刻、俺はキンジの寮の屋上にいた。
焼肉弁当がなければ任せる。　ただし、キノコ関連はやめてくれと言ってからキンジと別れて屋上に来たのである。
風に当たりたかったのもあるがなんか今日はいろいろありすぎた。
チャリジャックにあったり、奴隷にされたりとか・・・

「はー、結局、徹底的に巻き込まれてるじゃないか俺」

アリアがあんなことを言うのはおそらく何か理由があるのだろう。
理由教えてくれたら手伝うかもしれないのに。

ピロロロロ

ん？　メールか？
俺は携帯電話を取り出すとメールを開いた。

「なんじゃこりゃ？」

差出人は不明。メアドはあるがめちゃくちゃな文字列だ。
タイトルはSランク以上クエストの依頼
開いてみると電話番号と一緒に何か書いてあった。

『君の近くにいる人が君の知らない所で死ぬのが嫌なら』

とだけあった。
なんだこれは？
電話しろということか？
普段なら無視するところだが今日はいろいろありすぎている。
これもまた、重大な局面なんじゃないか？
電話しなければ俺の知る誰かが俺の知らない場所で死ぬ。
冗談じゃないぞくそったれ

ピっと電話番号を押し発信ボタンを押しこむ
コール音が3回し接続の音が耳を鳴らす。

「誰だお前は？　どうして俺のメアドを知っている？」

「椎名　優希・・・」

変えられたものだろうその声は機械的、朝の乗り物と同種かと思ったがこんな音誰でも作れることから頭の端に追いやる。

「君に依頼を頼みたい」

「クエストか？　そんなもの学校を通じて言えよ。　俺より優秀な人間が対処してくれるさ」

「君の近くにいる人が君の知らない所で死ぬのが嫌ならこの依頼を受けなくてはならない」

脅迫かよ
舌打ちしながら

「内容による。　犯罪に手を染めるのは嫌だからな」

「それに関しては心配はいらない。　まっとうな依頼だ」

「で？」

「とある人物の護衛を頼みたい。　報酬は前金で１００万」

「はっ？」

とんでもない金額に俺は心臓が止まりそうになった。

「月に５０万ずつ依頼が完了するまで君の口座に降り込もう。成功報酬は・・・」

「ま、待てよ！俺はAランクの武偵だぞ！　その護衛対象の敵はなんなんだよ」

「それは言えない。　君は彼女に向かう敵を排除してくれればいい。それに・・・」

女の護衛かよ。

「私は君が隠している切り札を知っている」

嘘か本当か・・・だとしたらこいつは何者だ？
一瞬実家の連中が頭に浮かぶがあいつらとは勘当状態である。
それに切り札は知らないはずだ。

「お前・・・何者だ？」

かすれた声で言う

「それは言えないと言った。では、聞かせてもらえるかな？」

「何を？」

「この依頼受けてもらえるのかな？　アリアの護衛を」

「1つだけ条件を付けたしたい」

「何かな？」

「・・・」

それを言うと電話の相手はすぐに答えを返してきた。

「いいだろう引き受けてやるよアリアの護衛をな」

後に死ぬほど後悔しつつもあの決断は間違ってなかったという決断の瞬間だった。

第０４弾　一方通行

一体どういうことだこれは！
俺は絶望的な状況に目を白黒させた。

３人でテーブルに座りアリアとキンジが並び俺がキンジの正面という配置だ。
キンジはハンバーグ弁当でアリアはももまんという謎のまんじゅうを食べている。
そして、俺の前にあるのは松茸弁当だった。
おいおい今、４月だぞ！
そして、俺はキノコ関連が大嫌いだ。

「おい、キンジ！　キノコ関連やめてくれって言っただろ」

「それしかなかったんだ」

「なら、そのハンバーグ弁当よこせ！」

「これは俺のだ。　ついてこなかった優が悪い」

くそったれ！　なんてことだ。
なら、この際謎の食べ物で妥協しよう。

「アリア、ももまんとこれを・・・」

「嫌」

一言で断られた。

くそ・・・レキじゃないがカバンに入れてあるカロリーメイトで今日は我慢するか
俺はカバンからチーズ味のカロリーメイトを取り出してぼそぼそと食べ始める。
松茸は冷蔵庫に入れておいた。
明日、キンジに食べてもらうか腐るかの運命だお前は俺は絶対食わんからな

「・・・ていうかな奴隷ってなんなんだよ」

お、さっそく本題か？5つ目のももまんを食べていたアリアがキンジの方を向いたぞ

「アサルトであたしのパーティーに入りなさい。　そこで一緒に武偵活動するの」

「何言ってんだ俺は、アサルトが嫌で武偵高で一番まともなイケスタに転科したんだぞ。　それにこの学校からも、一般高校に転校しようと思ってる。　武偵事態やめるつもりなんだよ。　それによりによってあんなとち狂った所に戻るなんて無理だ」

おい、キンジよ俺もアサルトだぞ。
まあ、とち狂ってると言う点は否定できんが

「あたしには嫌いな言葉が3つあるわ」

「聞けよ人の話を」

「『無理』『疲れた』『めんどくさい』この3つは人間の持つ無限の可能性を押しとどめるよくない言葉。　あたしの前では2度と使

わないこと」

アリアは指についた餡を舐めながら

「2人はそうね・・・あたしと同じフロントがいいわ」

おいおい、フロントっていや武偵のパーティーで最前衛の位置じゃねえか。

しかも、怪我の確立はかなり高い。

「よくない！　そもそもなんで俺と優なんだ？優だけじゃダメなのか？　こいつはアサルトだし丁度いいじゃないか」

こらキンジ！友達を売るな！　昼休みに見捨てた仕返しかよ！

「太陽はなぜ昇る？　月はなぜ輝く？」

おいおい、この子人の話聞く気ないのか？　話がいきなりとんだぞ

「キンジは質問ばっかの子供みたい。　仮にも武偵なら情報を集めて推理しなさいよね」

「ようは何か事情があるんだろ？」

俺は電話の相手を思い出しながら言った。

あの電話の内容から推測してこの子が戦っている。あるいは戦おうとしている相手は強大な敵なのだ。

「その事情を推理してみなさい」

うーん、そうきたかどうしようかな？

「それは分からんが１つ言っとくと俺はＡランクの武偵だぞ？　もっと強い奴がいるだろう」

「そうくるの優？　あたし知ってるのよあなたの秘密」

げっ！　まさか、あれを知ってるのか！　だとしたら厄介だぞ

「ど、どこでそれを知ったんだ？」

「質問するより推理してみなさい」

駄目だ分からん。　謎と言えば・・・あ！

「これか？」

俺はそう言って右手の制服をまくる。　そこには金属の筒のようなものが取り付けられている。　特殊仕様のワイヤーだ。

「正解、優アサルトでそれ使ってるの見たことない。　本気で戦ってない証拠よ」

そうか、朝のあれでとっさに使ったのを見られたわけね。

そうかそっちなら問題ない。

「ただ、戦闘で使いにくいだけさ」

「どうかしらね？」

駄目だこの子完全に気付いていやがる。
ワイヤーの戦闘はもう、完全に解禁した方がいいかもしれん。
プライベートと鍛錬の時しか使っていなかったんだがまあいいか。
だが、まだアリアと組むと決めたわけじゃないぞ。

「とにかくだ！」

お！　キンジが強気にでたぞ

「帰ってくれ！　優は仕方ないがお前は帰れ！」

「まあ、そのうちね」

「そのうちっていつだよ」

「何が何でも入ってもらうわ！　私には時間がないの、うんといわないなら」

「言わねーよ。　どうするつもりだやってみろ」

「言わないなら泊っていくから」

ハハハ、キンジお前頬がひきつってるぞ。
しかし、この子面白いな。
純粋に護衛対象じゃなくてもいてもいい気がしてきたな
それに、護衛するなら近くにいた方がいいしな。
そして、依頼主様の条件はこうある。
アリアに君が護衛していることを気付かれてはならない。
護衛対象に護衛の意志を伝えないのは難しいんだが相手はさらにこ

う付け加えた。
四六時中一緒にいる必要はない。
君の目の届く範囲、そして彼女が助けを求めて来た時助けてあげてほしい。

「ちょっちょっと待て！　何言ってんだ！　帰れうぇ」

きたねえ！　キンジてんぱりすぎだ！　ハンバーグ吐き出すなよ！

「うるさい！　泊ってくったら泊ってくから！　長期戦になることも想定済みよ」

アリアが指してるのはトランクだ、ああ、お泊りセットだったんだな

「なあ、アリア俺は別に・・・」

パーティーに入ってもいいぜと言おうとしたのだが

「―でてけ！」

これは、キンジじゃないアリアだ。
ここキンジの部屋だぞ

「な、なんで俺が出てかなきゃいけないんだよ！　ここはお前の部屋か！」

「分からず屋にはお仕置きよ！　外で頭を冷やしてきなさい！　しばらく戻ってくるな！」

猫のようにフカーと威嚇しながら言うアリアは目が細くなれば猫そ

のものだぞ。

「何してんのよ優？」

「へ？」

キンジが蹴りだされ、アリアが俺を睨みつけてるぞ。

「さっさと出て行きなさい！　風穴あけるわよ！」

俺もかよ！

こうして、キンジと俺は夜の外へと追い出されるだった。

とほほだな

第０５弾　前門にヤンデレ　後門にツンデレ

たく、なんでこうなるんだ？

「ありえんだろあいつ」

「まあ、確かにな」

俺はキンジに相槌をうちつつ雑誌をめくっている。
お、このアクセサリーいいな。
ネットにあるかな？

「優はどうするんだ？　あいつと組むのか？」

俺は顔をあげ

「んー、そうだな。　あの子面白い子じゃないか、組んでもいいかなって思ってる」

「じゃあ、お前らだけで組んでくれ。　俺を巻き込むな」

「そりゃ無理だろ？　あの子、キンジと俺を両方とも奴隷にしたいらしいからな」

「なんでこんなことになったんだ・・・今日は最低な日だ」

「まあ、確かに最低な日だけどあの子に会ったのはなかなか刺激的かな？」

「優はアサルトなんだから知ってたんだろ？」

「いや、キンジも知ってる通りアサルトではワイヤー封印してるからSランクのアリアに目を向けてもらえることなかったよ」

「前から思ってたんだがなんでワイヤーを使わないんだ？」

「さあな？」

切り札はここぞと言う時まで隠しておくもんだと昔、俺は教えられた。

運が良ければ相手は過小評価してくれるかもしれないし切り札で戦況を変えることも可能かもしれない。

本来俺の戦闘スタイルはワイヤーで変幻自在に立ちまわり相手を圧倒することにある。

広い場所や狭すぎる場所は不利になるが広く、障害物が多い場所は俺の最高の戦場と言っていい。

「そろそろ戻るか？」

数十分ほど立ち読みしてからキンジが言った。

そうだな、コンビニで立ち読みも限界がある。

俺も雑誌を戻してキンジが律儀に1冊雑誌を買うのを見ながらコンビニを後にする。

「じゃあ、お先」

「あ！　優！」

キンジの声を無視して俺はワイヤーをキンジの部屋のベランダに絡

めるとさっと巻き戻して一気に上昇する。
うーん、このワイヤーやっぱり便利だな。
装備科のあの子に感謝しないとな。
ベランダから部屋に入るがアリアの気配がない
まさか、帰ったのか？
なら、キンジが帰る前に風呂でも沸かして入ろうかな
そして、風呂の扉を開けた俺は死ぬほど後悔する。

ちゃぽん

風呂場から音がした
見れば曇りガラスの向こう側で電気がついている。

ちょっ！まじかよ！
焦って周りを見ると洗濯かごに制服と拳銃と日本刀が覗いていた。
そして、トランプ柄の・・・
こ、殺される！　ここにいたら間違いなく殺される。
俺はそっとふろ場から出ると逃げるんだぁとばかりに玄関に忍び足で迫る。
丁度、そこにキンジが帰ってきた。

「おい！　優、俺より先に・・・」

「シー」

俺はキンジがドアを閉めたのを見てから武偵に通じる指信号で

アリア　風呂　危険と送った。
キンジ冷や汗をかきながらドアに手の伸ばしたその瞬間

・・・ピン、ポーン・・・

ありえん！ありえんだろこれは！この慎ましやかなチャイムは

（し、白雪だ！）

俺とキンジは指信号するまでもなく意思疎通した。
てんぱった俺はふらついてドアにごんと手を当ててしまう。
しまったぁ！

「き、キンちゃんどうしたの？　大丈夫？」

だめだもう、居留守は使えねえ！
諦めたようにキンジがドアを開くとそこには巫女装束の白雪が立っていた。
うーん、相変わらず美人だな

「あ、優君もいたんだ」

「あ、ああ」

かすれた声で俺は言う。
まずいぞこの状況は

「な、なんだよお前その格好は」

バスルームを見ながら言うキンジ、おい！　気づかれたらまずいぞ！

「あっ・・・これ、私授業で遅くなっちゃって・・・キンちゃんに御夕飯作って届けたかったから、着替えないで来ちゃったんだけど・

・・い、嫌なら着替えてくるよっ」

「いや、別にいいから」

まあ、キンジがバニーガールになれとかいっても平気でやりそうな子だからな。

それが、正解だ。

白雪は超能力捜査研究科という学科に所属しているが俺もよくあそこはわからん。

白雪は優等生らしいんだが超能力って電気でも飛ばすのか？

「ねえ、キンちゃん、朝出てた自転車爆破事件の周知メールってキンちゃんのこと？」

おい、白雪さんおれもいたんですよ。　相変わらずキンジ一筋かよ。くそう、ＤＥで撃ち抜いてやろうか幸せ者め

「あ、ああ俺だよ」

おお、キンジが白雪が１０センチ飛び上がったぞ。

ワイヤーもないのにな

「だ、大丈夫？　怪我とかなかった？　手当てさせて」

「俺は大丈夫だから触んな」

「は、はい、でもよかったぁ無事で。それにしても許せないキンちゃんを狙うなんて！　私絶対犯人を八つ裂きにしてコンクリ・・・じゃない、逮捕するよ」

こ、こえええ。駄目だこの子だけは絶対に敵にしないようにしないと東京湾に沈められる。

「し、白雪！　大丈夫だってここでは日常茶飯事のことだろ？　この話は終わろう」

俺は慌てて言う。

「は、はい、えっと・・・はい」

ふぅ、キンジの前だとすぐ聞く子だよなぁ
アリアにも見習ってほしいよ本当に。
素直なアリアか・・・

『優ごめんなさい』

アリアが可愛く謝るのを想像してみたがだめだ、想像できん

「でも、今夜のキンちゃん達少し変だよ」

「へ、変？　どの辺が？」

キンジぃ！冷静になれ！

「なんかいつもより冷たい気が・・・」

「し、白雪すまん！　俺達ゲームしててさ。　いいとこなんだ。それで早くゲームに戻りたくてさ」

「ゲーム？」

俺の言い訳に白雪は首を傾げたが納得してくれたようだった。

「じゃあ、これ」

白雪がもじもじと持っていた包みを渡してくる。

「筍ごはん作ったの、今旬だし、それに私明日から今度は恐山に合宿でキンちゃんの御飯作ってあげられないから」

「ああ、ありがとありがと、よし、用事は済んださあ、帰ろうな」

ぐあああ筍かよ！　まあ、キンジ中心だからしかたねえな

「い、一日に2食も作っちゃうなんて、　な、なんか私お嫁さんみたいだね・・・って何言ってるんだろ私。　あは、あはは変だね。　うん。　キンちゃんどう思う？」

「わ、分かったからお引き取りください白雪さん」

「分かったって・・・それはつまりキンちゃんお嫁・・・」

おいキンジ！　やばいぞ今後ろで水の音がしたぞ！アリアが出てくる！

「？　中に誰かいるの？」

やばい！やばいぞ！

「中に誰もいませんよ」

なんで敬語なんだ！　ばれるだろ馬鹿キンジ！

「キンちゃん？　優君？　私に何か隠してることない？」

「「ないない！」」

2人ではもる。

ばれるって！

「そう、よかった」

ようやく白雪が背を向けて帰っていく。

ふぅ、白雪でよかった。

よし！

俺とキンジはがっつポーズしつつ風呂場に走る。

次は後門の狼をなんとかしなければ

風呂の途中に帰ってきたのがばれたら殺される。

武器を没収しとこう

後に考えればさっさと外に逃げればよかったのだが俺達は余裕がなかった。

風呂に駆け込みアリアの制服が入ったかごに手を突っ込んだ瞬間、

風呂場のドアが開いた。

一瞬、俺とキンジとアリアは目を合わせ沈黙時は止まる。

ああ、いいにおいがするなと場違いに考える俺とたぶんキンジ

ツインテールをほどいてロングヘアーになっていた全身つるぺたなアリアは

「へ、変態！」

ばっと右手で胸を左手でお腹の下を隠した。
そして、俺たちの手が制服に突っ込まれてるのを見て鳥肌をたてている。
やばい！　弁解しないとまずいぞ！

「「ち、ちが！」」

キンジと同時に弁解しようと手をあげるが
キンジの手にした日本刀の鞘にパンツ
俺の手にしたホルスターにブラが
小さなトランプのマークがいっぱいプリントされた子供っぽい・・・

「死ねぇ！」

キンジが腹を蹴り飛ばされたのをみて俺は死の恐怖を感じて転げるように逃げようとリビングに飛び出した。

「逃がすか！　ど変態！」

素っ裸のまま、飛び出してきたアリアは俺がワイヤーで窓から逃げるより先に股間をけり上げてきた。
悲鳴をあげて俺は意識を失った。
神よ、俺何かしたのか？

第０６弾　アリアＶＳ優希

「バカキンジほら起きる！」

朝の鍛錬から帰ってきた俺が聞いたアリアの第一声はそれだった。
部屋からは朝ご飯の催促をするアリアの声と抗議するキンジの声が聞こえてくる。
うーむ、とりあえず汗を流してカロリーメイトをかじっているとアリアがとキンジが玄関に向かってくる。

「うまいことといって逃げるつもりね」

風船みたいにむくれてアリアはキンジの腕にかみついてしまう。

「やだ逃がすもんか！　キンジ達は私の奴隷だ！」

ハハ、俺も奴隷かよ

困り果てたキンジをみてから

「なあ、アリア俺と登校しないか？　どうせキンジとは教室で会うんだからさ」

「優と？」

アリアはキンジと優を見比べたがやがて

気か変わるかもしれないから外まで考えると結局外までキンジに引

きずられるように出て行った。
うーん、キンジうらやましい気がするぞ。
嫌、俺はロリコンじゃないからな。

とはいえ、同じバスなのは変わらない。
アリアとキンジ、俺と3人の乗ったバスは難なく学校に到着し、5時間目は専門教科の授業になる。
つまり、アサルトの授業になるわけで・・・

まじか

今、俺はアリアと一対一の勝負を強いられている。
それもこれもマスターズの不良教師、蘭豹の気まぐれからだ。
アリアが俺にいきなり勝負を申し込むと蘭豹の野郎、おうやれやれの一言だもんだ。

「優、あんたの本当の実力ここで見せなさい」

ガバメント2丁を構えるアリア。
まじかよ、アサルトの連中が見てる所であまり、ワイヤーは使いたくないが・・・
ここでアリアの絶望されたら護衛できなくなるかもしれない。
アリアに勝たないまでもそれなりの戦績は残さなくては

「おら！　始めろ！　糞ガキ共」

蘭豹の開始の宣告と共にアリアが発砲した。

ああ、分かったよ本気でやってやる。
ワイヤーを発射し右斜め上に飛んだ俺は飛びながらガバメントを3連射する。
アリアはそれをかわしつつ発砲するがワイヤーを外し勢いを削いだ俺には当たらない。
ちっ、一撃で決まらねえな。
アリアはさらに2発発砲してくる。
直撃コースだが俺はそれを同時に発射した銃弾で弾く。
アリアと俺の銃技はほぼ互角と仮定する、ならワイヤーで勝利をもぎ取るしかない。
どこぞのクモ男のように俺は右に左にグランドを駆け巡る。
アリアは狙いをしぼれないようで右に左にガバメントを揺らしている。
補足しておけば俺のワイヤーは壁にめり込ませて固定する。
何点かバージョンがあるが今日はめり込ませてもとれる機構が付いているワイヤだ。
ワイヤーの先端は矢のような形になっている。

ドドドン

「あ！」

一発の銃弾がアリアの右肩をかすめた。
いけるかとさらに4発撃ったところで弾切れ。
カートリッジを入れ替えれるすきにアリアが日本刀を構え突進してくる。
俺は空中に向けワイヤーを発射した瞬間、アリアの右手に黒のガバメントがあるのを見た。
上空への予想位置へ発砲。
くそったれ！

俺はワイヤーを高速で巻き戻すと右にワイヤーを撃こんで巻き戻す。
強烈な力に引かれて右に無理やり軌道を変える。
今度は邪魔されないようにＤＥでアリアをけん制した。
アリアはそれをかわす。
どうでもいいが、怖い！
すでに２０メートルぐらい上空で俺はワイヤーの制動のみで飛び回っている。
落ちたら助かる高さじゃないぞ。
ＤＥをしまい空中でガバメントのカートリッジを押しこんでから地上に落下する勢いをワイヤーで殺す。
右のワイヤーのみなので動きは制限される。
地上に降り息を吐きながら攻略手段を探る。
互いに銃を構えながら動かない。
ちくしょう、強いじゃないか。
アリアは小柄なだけに簡単に当てられる相手ではない。
じゃりっと砂を踏み、一歩動く。
接近戦に持ち込まれれば勝敗は明らかになる。

と、ここでアリアが先に動いた。
２丁拳銃から続けざまに２発
そして、風のようにこちらに突進してくる。
接近戦か！
俺はワイヤーで距離を稼ごうとと発射した瞬間、１０発の銃声が響いた。

「なっ！」

なんとアリアは残弾を全てワイヤー先端の突起物に命中させたのだ。
計算が狂いワイヤーが失速し天井に届かない。

「終わりよ！」

ガバメントをホルスターに収めアリアは日本刀を抜き放つと一気に加速し。剣を振り下ろした。

「っそたれ！」

ギイインという音が響き渡る。
日本刀とガバメントがぎりぎりと押し合いになる。
銃をクロスさせてアリアの一撃を防いだので後が続かない。
嫌、俺は巻き戻っていたワイヤーを発射し右に飛ぶ。
押し合いの格好のまま撃ったので右にただ、飛んだだけだったが距離は稼げた。
と思って振り返った瞬間、アリアの日本刀が迫っていた。
足にワイヤーが巻かれてる。
くそ、準備してやがったな
俺はアリアを引っ張ってしまったらしい。

ガバメントを向けようとした瞬間

「そこまでだ糞ガキ共！」

蘭豹の制止の声。
見るとアリアの日本刀は俺の首に突き付けられている。
俺の・・・負けだ。
こいつやっぱり強い。
仮にアリアが敵になるなら殺すぐらいの気でいかないと負けるのは俺だろう。
改めてアリアの評価を高める俺だった。
だが、アリアは俺を見下ろしながら

「この程度なの？」

「え？」

なんだ？　何かアリアが悲しそうだぞ。

「私の見込み違いだったの・・・　優？」

こうして、後悔を残した俺とアリアの一騎打ちは短いながらも俺の敗北で終わるのだった。

俺はアリアを失望させちまったんだ。

第07弾　アリア観察記録

その翌日の女子寮の前の温室で俺とキンジは理子を待っていた。

「聞いたぞ優、アリアに負けたんだってな」

「ああ・・・」

アリアを失望させてしまった・・・俺は少し落ち込んでいるんだ

「やっぱり、アリアと組むのか？」

「さてな？」

俺はアサルトの授業が終わる前にアリアに言ったことを思い出す。

「協力してやるよ」

不思議そうにアリアは振り返る。

「キンジをお前の奴隷にするの手伝ってやるっていってるんだよ」

「いいの？」

友達でしょ？という目を向けてくる。

まあ、確かにそうなんだがこの件は俺にとっても利点が多いのだ。

まず、俺はキンジにアサルトに戻ってきてほしい。

これは、アリアも同じだろう。

これが一つの利点

二つ目はアリアに内緒だが護衛の件だ。
キンジがいれば敵がどんな奴でも勝率はかなり上がる。
これが３つ目の利点。
そして、最後の利点は俺がこの子を気に行ってきてる点だな。
まだ、正式には組むと決めてないが・・・

「俺もキンジにはアサルトに戻ってきてほしいと思ってるんだ。
利点もあるんだよ」

「それじゃあ・・・」

アリアは俺をとことん利用してキンジを陥落させようと考えたらしい。
うん、スパイの気持ちがわかるね。

そして、今に至るのだが・・・

「キンジは何してたんだ今日？」

「猫探しだ。　０．１単位のＥランクの依頼をこなしてた」

「ふーん」

探しものとか俺苦手なんだよな。

「キーくーん！　ユー――――――――ユー――――」

温室の入り口から理子が右手を振りながら軽いステップでこちらにやってくる。
なんでユの間が俺だけ長いんだ？

「理子」

「よう」

キンジと俺はそれぞれ口を開く。
うーん、馬鹿理子だが、こいつ相変わらず美少女だよなアリアと同じ小柄なくせにふたえのめはきらきら大きく緩いウェーブのかかった髪はツーサイドアップ。ふんわり背中に流した髪に加えてツインテールを増設した欲張りな髪型である。

「相変わらず改造制服だな、そのひらひらはなんなんだ？」

「ゴスロリってやつだろ？」

俺が言うと理子は

「これは武偵高の制服白ロリアレンジだよ。キー君、ユーユーいい加減ロリータの種類ぐらい覚えようよぉ」

「きっぱり断る！　お前は制服を何着持ってるんだ？」

おいおい指で数えるほど持ってるのか？
武偵高の制服は防弾制服だから結構高い。
まあ、金があれば簡単に手に入るし手を加えることも不可能ではないのだが・・・

「理子、こっちを向け。　いいか？　ここでのことはアリアには秘密だぞ」

「うー！　らじゃー！」

びしっと敬礼のまねごとをする理子にキンジが紙袋を渡した。
ああ、あれか・・・俺も買いに走らされたなぁ・・・秋葉原まで俺行ってきたんだぞ

「うわあああ！『しろくろっ！』と『白詰草物語』と『妹ゴス』だよおおお！」

ぴょんぴょんと兎のように跳ねながらぶんまわしているのはＲ１５指定のギャルゲーだ。
こいつ、オタクなんだよ実はゴスロリとかのギャルゲーは大好きという困りもの
身長が身長なので自分では買えなかったそうだ。
中学生に間違えられたんだぜ？　ハハハ、アリアなら小学生だなキンジの奴アリアの情報を集める気だな？
まあ、俺も護衛対象の情報は欲しいから丁度いい

「あ・・・これとこれはいらない、理子はこういうの嫌いなの」

ん？２とか３とか書いてある奴だな。

「なんでだよ？」

決して安くないからな当然の答えだ。

「違う。　2とか3とか蔑称。　個々の作品に対する侮辱。嫌な呼び方」

ん？なんか今、理子一瞬表情が悲しそうに見えたぞ。
気のせいかな？

「まあ、　とにかく続編以外のゲームはくれてやる。　その変わりこの間依頼した通り、アリアについて調査したことをきっちり話せよ」

「―あい！」

理子は馬鹿なんだがネット中毒患者でノゾキ、盗聴盗撮、ハッキング等のいかにもインケスタ向けの能力を持っているから情報収集能力がずば抜けて早い。
実際、何度か俺も理子に依頼している。
そのたびにゲームを探し回っているんだが・・・

「ねーねー、キ―君とユーユーは尻にしかれてるの？　彼女のプロフィールぐらい自分で聞けばいいのに」

「彼女じゃねえよ」

おいおい、キンジよおかしいだろ俺達2人がまるでアリアと付き合ってるみたいな言い方だぞ理子の言い方だと

「えー2人はアリアを取り合って結局どっちとも付き合うことにしたって噂だよ？
寮からアリアと出てきてアリアファンクラブが2人とも殺すって息まいてたんだ。　がおー」

「指で角をつくらなくていい」

ああ、まあ寮から女の子と出てきたらそう見えなくもないわな

「ねえねえどこまでしたの？」

「どこまでって？」

「３Ｐ」

「馬鹿するか！」

「嘘つけぇ健全な若い男女のくせに。　アリア挟んで毎晩えっちいことを・・・」

そんな満面の笑みで言われてもなぁ・・・

「お前はいつもその方面に話を飛躍させる。　悪い癖だぞ」

「ちぇ」

「それより、本題だアリアの情報、そうだな・・・アサルトでの評価を教えろ」

「ユーユーもある程度は知ってると思うけどランクはＳだって、Ｓランクって２年では片手で数えるぐらいしかいないんだよ」

それは知ってる。

Ｓランクの連中とやり合うのは毎回大変だからな。

ワイヤー封印してたから勝った回数もそれほど多くない。
あいつら俺の弱点知ってるしな。

「理子より小さいくせに徒手格闘もうまくてね。　流派はボクシングから関節技までなんでもありの・・・えーと、バーリー・・・バーリー・・・バリっ・・・」

「バーリ・トゥードか？」

「そうそうそれそれ！　イギリスでは縮めてバリツって呼ぶんだって」

「拳銃とナイフはもう天才の領域、どっちも二刀流なの。　両効きなんだよあの子」

「それは知ってる」

「じゃあ、２つ名も知ってる？」

アリアの奴２つ名まで持ってるのかよ。
あれは優秀な武偵自然とつくものだからな。
俺は持ってないけど。
知らないと言う顔をすると
理子はにやりと笑う

「カドラのアリア」

武偵用語では２刀流のことはタブラというようはカドラは４つの武器ということだ。
俺の場合ワイヤーもあるから何個武器携帯かは決まってないけどな。

「笑っちゃうよね。　双剣双銃だってさ」

何が笑いどころか分からないんだが

「アリアの武偵としての活動の実績はどうなんだ？」

俺が聞くと

「あ、それはすごい情報があるよ。今は休職してるみたいなんだけどアリアは１４歳からヨーロッパ各地で武偵として活躍してててね・・・」

目と声を少しシリアスにしながら

「・・・その間１度も犯罪者を逃がしたことがないんだって」

「まじか？」

そりゃすげえ

「狙った相手を全部捕まえてるんだよ。　それも９９回ともたった１度の強襲でね」

「なんだそれ？」

キンジが絶句しているな。

まあ、普通、武偵に回ってくる犯罪者は凶悪な連中が多いからな。

俺もＡランクと言われて受けたクエストの犯罪者捕まえるの結構苦労したしな。

どのみち断ってても逃げられないってことかアリアからは

「他には・・・体質とかは？」

「うーんとね。　アリアってお父さんがイギリス人とのハーフなんだよ」

「てことはクォーターか」

日本人離れしてるわけだ。

「そう、でイギリスの方のミドルネームが『H』家なんだよね。すごく有名な一族らしいよ。　おばあちゃんはディムの称号を持ってるんだって」

なんだって！　てことはアリアは貴族のお嬢さんじゃねえか。ディムはイギリス王家から女性に与えられる称号だからな。キンジもびっくりした顔でいる。

「でも、アリアはH家の人たちとうまくいってないみたいなんだよね。　だから家の名前を言いたがらないんだよ。　理子は知っちゃってるけどあの一族はちょっとねぇ」

H？　うーん、思い当たることないなぁ。　そもそも日本の有名な家の名前ぐらいは分かるが外国はあんまり関わらないからな

「教えろ！　ゲームやっただろ」

「理子は親の七光とかそういうの大嫌いなんだよぉ。　まあ、イギリスのサイトでもググれば当たりぐらいは付くんじゃない？」

「俺英語駄目なんだよ」

俺も駄目だ。　世界に出て働くんだから勉強はしてるんだがなかなかな・・・

「がんばれや！」

キンジの背中を叩こうしたらしい手が彼の腕時計を弾いた。

あ、曲がってる。

壊れたな

「うあーっ！　ご、ごめーーん！」

「別に安物だからいいよ。　台場で１９８０円で買った奴だ」

俺の時計はいくらだったかな？　ネットで購入したからな。

「だめ！　修理させて！　理子にいっぱい修理させて！　依頼主の持ち物壊したなんて言ったら理子の信用問題に関わるから」

そういうと、理子は胸の谷間にキンジの時計を入れてしまう。

で、でかいな。アリアとは段違いのでかさだ。

「キンジ他には？」

「い、いやもういい。　行くぞ優」

「あいよ」

まあ、このままだとお前ヒスルしな。妥当な判断だ。
じゃなと俺は理子に右手を挙げて温室を後にするのだった。
ちなみにいうと理子の下着は金色だった。
ちなみにだがな

第０８弾　ロボットレキ地獄を制す

理子やキンジと別れた俺はそのまま、寮には帰らず学内をうろついていた。
まあ、さっさと帰るのは簡単なんだがな。

俺は屋上に出ると風に当たりながらごろりと寝転がると情報を整理した。
まず、アリアの護衛を俺に依頼してきた奴はおそらくだが、アリアのことをよく知っているはずだ。
となると家の関係者と言う線も考えられるがＨ家ね・・・
本気で調べたらわ分かるかも知れんがな・・・

キイイイイ

ん？

その時、屋上の鉄製のドアが開く音が響いた。
振り返るとそこにいたのはドラグノフ狙撃銃を背負ったレキだった。
相変わらず無表情だなお前は

「レキか？　お前もまだ、残ってたんだな」

「・・・」

レキは何も言わずに俺の隣まで来ると屋上から見える海を見ている。
ううん、やっぱりこの子苦手だよ。
何か言ってくれたらいいのに・・・

「そ、そうだ一緒に飯でも食いにいかないか？」

何言ってんだ俺は！　レキが承諾するはずないだろ

「・・・・」

レキは俺を見ると

「構いません」

ほらことわ・・・え？

「今何て・・・」

「いいといいましたが？」

つまり、晩御飯はレキと食うことになったわけだ。

なんでこんなことに・・・

それから１０分後、俺とレキは学園島の中にあるラーメン屋に来ていた。

この時間、学生たちが込み合う中席を確保した俺達はメニューを見ながら

走り回っていたバイトの女の子を捕まえて

「俺はギョーザとチャーハンと味噌ラーメン。　この子には一番高いメニューを」

「かしこまりました！　お客様チャレンジャーですね」

はっ？　何が？

聞き返す前にバイトの子は行ってしまう。

むぅ、あまり考えないでいいか

「・・・・」

「・・・・」

おいおい、話が弾まないぞ！　俺はこういう子、苦手なんだよ！

早く料理よ来てくれ！

「そ、それにしても珍しいなレキが飯を食いに行こうなんていう誘いに乗るの」

「風がそう言いました」

風？　なんだそれは？　宗教なのか？

「風ってなんだ？」

「風は私の頭から直接響いてくる。　遥か故郷から」

駄目だ訳がわからんぞ。

俗にいう不思議ちゃんか？

「おまたせしましたぁ！」

バイトの女の子が一気に御飯を持ってくる。

レキの前にも・・・

「なんじゃそりゃ！」

俺は絶句した。

レキの前におかれたラーメンは真っ赤で煮えたぎっていた。

「本店自慢の地獄ラーメンでございます」

「じ、地獄ラーメンだって！」

確かに真っ赤なそのラーメンは地獄そのものだ。

レキはじっとしれを見つめている。

「ちなみにいくら？」

「はい♪一万円です」

「いっ！」

俺の財布には３０００円しか入っていない。

どう考えても足りない。

「れ、レキお前いくら持ってる？」

「カードならあります」

駄目だ！　こんなボロラーメン屋クレジットが使えるわけがねえ！
アリアの護衛の報酬百万が口座にあるがもう、しまってるぞ。
コンビニに・・・駄目だカードも通帳も部屋だ」

「時間は３０分です。　スープも飲み干せたらただになります」

「なんだって!?」

地獄に仏とはこのことだ。
しかし、俺の前には味噌ラーメン、チャーハン、餃子が並んでいる。
駄目だ、俺は食えんぞ

「れ、レキ頼む！　食えるよな」

「・・・」

レキはそれに答えず割り箸を割ると麺を咥えちゅるちゅると食べ始めた。
そして、５分後

「ば、馬鹿な」

バイトのお姉さんは驚愕した様子でレキを見ている。
続いてスープをごくごくと飲んでいく。
ありえん、からしを直接飲むようなもんだぞ！　大丈夫なのかレキ！

そして、レキは器を置くと

「私の感覚ですがあなたが計測を始めてから１２分０３秒です」

「よっしゃ！　レキよくやった！」

俺は感動に涙しながらレキに向けガッツポーズをとった。

「くっ、店を始めてから初めての敗北・・・いいでしょう。負けを認めましょう！　あなた達はただです！」

よくわからんが勝ったぞ。

味のしない食事を終えてこの世界にあれを食べれる物がいるとはとか言ってがっくり膝を落とした店主を見ながら俺達はラーメン屋を後にした。

てか、

分かれ道でレキは俺の方を向いた。

「ごちそうさまでした優さん」

「いや、どちらかというとレキにおごってもらったようなもんだぞ」

「優さん。　また明日」

「おう！　またいつか御飯食べに行こうぜ」

その時、俺は上機嫌だったんだ。

絶対絶命の状況から好転したもんだから・・・

レキがくると振り返る。

その顔は無表情だが街灯に照らされるの顔は前へ小さく動くのだった。

そして、レキはドラグノフを肩に女子寮の方へ歩いて行った。
うーん、レキも謎だが辛いの大丈夫だったんだな改めて知ったよ。
さて、帰るか。
俺は探偵科の寮に向かい歩き出すのだった。

第09弾　キンジ陥落

「あんたならあたしの奴隷にできるかのしれないの！　アサルトに戻ってあたしから逃げた実力をもう一度見せてみなさい」

「あれは・・・あの時は偶然うまく言っただけだ。　俺はEランクの大したことない男なんだよ」

「嘘よ、あんたは入学試験の成績Sランクだった」

おいおい、部屋に戻るなりなんだこれは？
リビングの方からキンジとアリアの怒鳴り合いが聞こえるぞ。
キンジの入学試験時か・・・俺もあいつと戦ったが正直、少し本気を出したんだが負けたんだよな。　ワイヤーの戦闘もその時、キンジにばれた。
全ての切り札を出したんじゃいんだが切り札1だけじゃヒステリアのキンジには勝てん。
その時、受験生を始め、まぎれていた教官も全て俺とキンジが倒したため、入試当時俺とキンジはSランクだった。
ワイヤーを封印したから俺は1年の時Aに下がったけどな。
アサルトのSランクって言うのは特殊部隊一個中隊に匹敵する戦闘力と言う意味だから仕方ないのだが・・・

「つまり、あれは偶然じゃなかったってことよ！　あたしの直感に狂いはないわ！」

「と、とにかく・・・あ、優」

キンジが俺に気付いたらしい。

「遅い！　どこ行ってたのよ優」

「ああ、いやレキと晩飯食ってた」

「よくレキが承諾したな」

キンジは話題を変えるチャンスだと思ったのか話に乗ってくる。

「まあ、しょうだ・・・」

「キンジ！　あたしの話は終わってないわよ！」

駄目だ、狙われたら逃げることは難しいぞキンジ

「と、とにかく今は無理だ！　出てけ！」

ああ、キンジ自爆だぞその言葉

「今は？　ってことは条件でもあるの？　行ってみさいよ協力してあげるから」

うーん、その協力ってアリア分かってないから言えるんだよな。
ヒステリアモードを発現させるならキンジを性的に興奮させる必要があるからな。
例えばキスするとか胸を触らせるとか下着を見せるとかまあ、この子が進んでできるとは思えんことばかりだぞ。
ほら、キンジも想像したから顔赤くなってやがる。

「教えなさい！　その方法！　ドレイに上げる賄い代わりに手伝っ

てあげるわ」

ずずいとアリアがキンジに迫る。
やばいな、ヒステリアになったら・・・
いや、むしろあのモードの方が陥落させやすいかもしれんがな。
あの状態では女の子の頼み事はほとんど断らないからな。
ま、潮時だぜキンジお前が選びなヒステリアになって承諾するか素のまま承諾するかだな

「キンジ、お前の負けだ」

俺が言うとキンジは裏切り者と言う目で見たが状況判断で妥協したらしい。

「1回だけだぞ」

「1回だけ？」

ちっ、無条件降伏しやがらねえか。
これを気にアサルトに戻ってきてくれるんじゃないかと思ったんだがな

「戻ってやるよアサルトに　ただし組んでやるのは1回だけだ。
戻ってから最初に起きた事件をお前と一緒に解決してやる。　それが条件だ」

「・・・」

「だから、転科じゃない自由履修としてアサルトの授業を取る。
それでもいいんだろ？」

キンジ、お前の考えは分かる。
組んでもいいかなと思いながらも切り札を隠す俺と違い。
お前は組みたくないからヒステリアモードではない通常モードでアリアを失望させる気だな？
通常モードなら俺より弱いからなお前。

「いいわ。　この部屋から出て行ってあげる」

アリアもついに妥協したか

「あたしも時間がないしその一件であなたの実力を見極めることにする。　もちろん、優あなたももう1度だけ見極めさせてもらうわ。
優も入学試験はSだったんだから」

仕方ねえな・・・なんかこの子に絶望されるのは激しく嫌なんだ。
護衛の件もあるがやってやるかな。

「どんな事件でも1件だぞ」

「OKよ。　その代りどんな大きな事件でも1件よ」

「分かった」

「ただし、手抜きしたら風穴あけるわよ。　優も！」

「ああ、約束する全力でやってやるよ」

「はいはい」

キンジと俺が言うのだった。
でも、久しぶりにキンジと組めるんだな。
俺は事件の神様がいるならどうか大きな事件が来ますようにと願うのだった。
だって、どうせなら暴れ回りたいだろ？

第１０弾　明日なき学科強襲科

アサルトいって言うのは１００人に９７人しか卒業できない。
まあ、必ずしもそうではないし１００人全員が卒業できた年もあるにはあるらしい。
それはおいといて、この学科の訓練で命を落としたり依頼中に命を落としたりとその３人の理由はそれぞれだ。
もちろん、３人以上の時もあるのだが・・・
ん？　キンジが入ってきたな。
ハハハ、囲まれてるな。
こちらまで声が届いてくるぞ

「おーぅ！　キンジ！　お前は絶対帰ってくると信じてたぞ！さあ、ここで１秒でも早く死んでくれ！」

「まだ死んでなかったのか夏海！　お前こそ俺よりコンマ１秒でも早く死ね！」

「キンジぃ！　やっと死にに帰ってきやがったか！　お前みたいな間抜けはすぐ死ねるぞ！　武偵っていうのは間抜けから死んでいくからな」

「じゃあ、なんでお前が生き残ってんだよ村上」

あれはアサルト流のあいさつなのだ。
死ね死ねと言うのがおはようやこんばんはと同義なのがここなのだ。
俺も行くか

「キンジぃ！　俺は嬉しいぜ！　さあ、死の世界にＧＯだ」

「何言ってんのか分からねえよ！　お前こそ爆発に巻き込まれて死ね優！」

もみくちゃにされながらもみんな楽しそうだ。
ハハハ、アサルトは死ぬ確率は確かにあるが楽しいんだよな。
みんな、キンジに一目置いてるからな

夕方、アサルトを出ると俺は笑いながらキンジに話しかけていた。

「ハハハ、面白かったなキンジ」

「だから戻りたくなかったんだ」

キンジは肩を落としてるな。
諦めろ。
お前はアサルトに戻る宿命なんだ。
アリアと俺の包囲網はすでに完成してるぜ。

「お、アリア」

「何？」

キンジが顔を上げると校門の前にいたアリアがこちらにかけてくる。
キンジを俺挟むように歩き始める。

「あんた、人気者なんだねちょっとびっくりしたよ」

「こんな奴らに好かれたくない」

「おい！　キンジ！俺も含まれてるのかよそれ」

「当たり前だ」

くそ、ずばっと言いやがった。
アリアはそんな俺達を見ながら

「あんたって人付き合い悪いし、ちょっとネクラ？って感じもするんだけどさ・・・ここのみんなは・・・あんたや優には一目置いてる感じがするんだよね」

そうだな、それは入試の時のあれを覚えてるからじゃねえか？
教官を含めて最後に俺とキンジは対立し、まさしくSランク武偵の戦いを繰り広げ結果、俺は負けた。
誤解すんなよ？切り札は1つしか見せてねえからな。
アリアはちょっと視線を地面に下ろしながらキンジを見る。

「あのさキンジ」

「なんだよ」

「ありがとね」

「何をいまさら・・・」

小声ながらも心底うれしそうにするアリア

むう、キンジなぜかお前にむかつく。

「勘違いするなよ。　俺は仕方なくここに戻ってきただけだ。事件を1件解決したらすぐにインケスタに戻る」

「分かってるよでもさ」

「なんだよ？」

「アサルトの中を歩いているキンジなんかかっこよかったよ」

キンジ、顔が赤くなってるぞ

「あたしになんかアサルトでは誰もよってこないからさ、実力差がありすぎて誰も近寄ってこられないのよ・・・まあ、あたしは『アリア』だからそれでもいいんだけど」

まあ、確かにな。

記憶をたどればアリアは確かに転校してからも一人でいた。

かわいいだのという噂を聞いて俺もアリアは見ていたがあいつは浮いていた。

実力ね・・・

俺はかつて言われた師匠の言いつけを守り、本気を出さない。

出せば、きっとアリアと並べるだろう。

でも、本気で戦うことはもう、できない。

できなくなってしまった。

「『アリア』って、オペラの『独奏曲』って意味もあるんだよ。1人で歌うパートって意味なの―1人ぼっち・・・あたしはどこの武偵高でもそう。　ロンドンでもローマでもそうだった」

「それで俺達を奴隷にして女王様にでもなるつもりか？」

俺が聞いてやるとアリアはクスクスと笑った。

「あんたおもしろいこと言えるじゃない」

「そうか？」

「うん」

うーむ、アリアの笑いのつぼがわからんぞ

「キンジはアサルトに戻った方が生き生きしてる。　昨日までのあんたは自分に嘘をついているみたいでくるしそうだった。　今の方が魅力的よ」

「そんなことは・・・ない」

ハハハ、キンジ今度お前の部屋にワイヤー仕込んでやる。
死ね
俺がアサルト風のあいさつを気持ちで言うとキンジは

「俺と優はゲーセンに寄っていく。　お前は1人で帰れ！　ていうかそもそも今日から女子寮だろ。　一緒に帰る意味がない」

あ！そうだったな。　今日こそエース●ンバットの空中戦にけりをつけてやるぜ。
せっかくだから、ゾンビゲームのあれも決着をつけるか？
余談だがこの学園島にあるゲーム設備の特にシューティング系は日本一の高レベルである。
理由は言うまでもないだろう。

「バス停までは一緒ですよーだ」

アリア嬉しそうだな。
たく、この子を失望させて何やってんだろなおれは

「ねえ、げーせんって何？」

「ゲームセンターの略だ。　そんなことも分からないのか？」

「帰国子女なんだからしょうがないじゃない。　じゃあ、あたしもいく。　今日は特別に一緒に遊んであげるわ。　ご褒美よ」

「いらねえよ。　そんなのご褒美じゃなくて罰ゲームだろ」

いやいや、キンジ女の子と遊べるなんて最高じゃないか。
アリアは可愛いし。
まあ、胸は残念だが顔は可愛い。
彼女いない歴と年齢が一致する俺が言うことじゃないが・・・
っておいお前ら！
俺を置いていくように2人は早歩きを始めた。
正確にはキンジが早歩きを始めアリアがそれを追い加速加速
ついに全速力になる2人を見て俺は悲鳴を上げた。

「お前らゲーセンに行くだけで競争するな！」

まったく、こいつらといると体力がいくらあってもたらねえよ
などと思いながら俺は2人とゲーセンに入るのだよ。

第１１弾　レオポン争奪戦

ありえんこいつら早すぎるだろ。
ぜえぜえと息を吐きながら俺はゲーセンの柱に背を預けた。
うええ、気持ち悪い。
１キロ以上全速力で走ったらこうなるわな。
一応、アサルトで動き回った後なんだぞ。
タフな奴らだ。

そのキンジとアリアは興味深そうにクレーンゲームを見ている。
なんだその中のぬいぐるみ？
おいおい、アリアよ口を逆三角形にしてよだれはやめろ。

「かわいー・・・」

「やってみるか？」

キンジが言うとアリアの顔がぱっと輝く。

「できるの？」

「やり方を教えてやろうか？」

コクコクと頷くアリア。
今日は素直だなアリア。
俺はその場を離れて千円を小銭に変える。
フフフ、アリアの護衛の金を下ろしたから今日の俺は金持ちだぜ。
まあ、高額な買い物もしたから使いまくれないんだがな。

戻るとアリアが今度こそ本気の本気と言いまくっていた。
ハハハ、とれないんだな?
見かねたのかキンジが何か言おうとした時

「ここは俺に任せろ」

ずいっと前に出てアリアをどかす。
プライドの高いアリアは当然のごとく反発するが強引に押しのけた。
俺の実力を見せてやるぜ。

10分後
俺は、地面に両手をつけていた。

「全然だめじゃない優」

アリアの呆れたような声

「一万円は使ったぞ」

憐れむように言うのはキンジだ。
く、くそうこんなはずでは。

「もう一回だ!」

「やめとけって! 今度は俺がやるよ」

俺はアリア同様にぎゃぎゃー言ったが結局、キンジに押しのけられて見る羽目になる。
くそう、キンジも一万ぐらい使って敗北を味わうがいい。
ハハハだ。

だが、その願い敵わずキンジの操るクレーンは人形を掴みあげた。
落ちろ！落ちろ！落ちろぉ！
邪念を送り込むが人形は上がっていく。

「キンジ見て！３匹釣れてる」

ば、馬鹿な

「キンジ放したらただじゃおかないわよ」

「もう、俺にどうこうできねえよ」

「あ、あ！　入る！　行け行け！」

くそ、こうなったらやけだ！いけえええええ！
クレーンが開く、一匹が落ち２匹３匹と引きづり込まれるように落ちて行った。

「やった！」

「っしゃ！」

「ナイス！」

無意識に本当に無意識にパチイと俺達はハイタッチしてしまった。

「「「あ」」」

目と目が合い俺達は目を背ける。
くそう、負けたのになんだこれは

アリアは―

「ま、まあ馬鹿キンジにしては上出来ね」

取り出し口から人形を3匹わしづかみにし取り出す
タグにはレオポンと名前があった。
知らないキャラだな。

「かぁーわぁいいー！」

ぎゅううとアリアはレオポンを思いっきり抱きしめている。
レオポオオン！逃げるんだ！　破裂するぞ
と内心思いながら
この子も年相応の女の子なんだなと思った。
何かがこの子の本音を曲げている。
そんな直感があった。
やはり、護衛の件に関係があることはほぼ間違いない。
理子に調べてもらう手もあるがこいつは独自の調査した方がいいかもしれない。
もしかしたら・・・もしかしたらだが、あいつに関わることなのかも知れない。

炎の中、銀髪を熱風に揺らしながらその紅い目を俺に向けるあいつ。
俺が武偵になることを決め、必ず逮捕することを誓ったそいつと繋がるなら・・・

「キンジ、優！」

はっとして顔を上げるとアリアが俺とキンジに人形を押しつけてきていた。

「3人で分けましょう。　キンジの手柄だけど優も1万円使ったからご褒美よ」

釣り目気味の細目をにっこり細めたアリアに俺は不覚にもドキッとしてしまった。
ちくしょう可愛いじゃねえか

「なんだか悔しいけどな」

俺とキンジはレオポンを受け取りながらそれが携帯のストラップになっていることに気付いた。
キンジがつけ始めたので俺もつけ始めるとアリアもつけ始めたぞ。
おいおい、俺ら3人ストラップ無しだったのか。
まあ、俺は1月前にちぎれたからそのままにしといたんだがな。

「先につけた方が勝ちよ」

何い！アリアめ、俺に負けの屈辱を増やす気か！　くそ！　勝つぞ！」

やけになって必死に押し込もうとするがこの紐太いぞ！　設計者でてこい！

結果はまあ、アリア、俺、キンジという順番だった。
まあ、ほぼ同時だったんだがな・・・

その後、俺達はゲーセンのゲームをあそびつくして帰ったんだが財布を確認すると１０円しかなかったんだよ。
泣きたいぜ。

第１２弾　緊急事態

ふあ
欠伸をしながら俺は時計を確認する。
時刻は午前５時だ。
２段ベッドを降りながら向かいの２段ベットにアリアがいないのを見てトレーニング用の服に着替えてキンジの部屋を出る。
３０分ほど、ランニングしてからアサルトの訓練場に行く。

うーん相変わらずひとがいないな。

俺は普段人に見せない訓練をしてだがこいつは空間認識力を高める訓練だ。
ワイヤーの戦術はワイヤーの使い方を謝るわけにはいかない。
俺の場合、切り札はあるがこのワイヤーの戦術が基本なのは変わらないのだ。
よし、今日は別の手段を・・・
それがいけなかった。
俺はこの日、ワイヤーの操作をミスり両手にぶつけのだ。
おかげで痛みで両手がずきずき痛む。

家に帰りシャワーを浴びてからソファーで仮眠しているとキンジが起きてきた。
俺は両手に手袋をつけており

「ん？なんだそれは優」

「気分だよ。　気にすんな」

と俺がいうとキンジは納得したらしい。
ふぅヒステリアならばれてたな確実に・・・

寝ぼけまなこに今何時だと聞くと時間はまだまだ、余裕だった。
なら寝るかと仮眠したのだが・・・

なぜなんだ・・・
7時58分のこの時間バスは混む。
しかも、今日は雨だ。
さっき振りだしやがったんだよ。
予測はできたはずなにのに・・・

「やった！　乗れた！　やった！やった！　よう、キンジ、優おはよう」

く、くそう、武藤のやろう万歳してやがる。

「の、乗せてくれ武藤！時間が！」

俺とキンジが必死に言うが奴は残酷だった。

「そうしたいところだが無理だ！　満員！　お前ら自転車で来いよ」

駄目だ！　俺たちの自転車は爆発しちまったんだよ！

「無理なもんは無理だ！　大人しく遅刻するんだな」

「くそ！　悪魔め！てめえなんか呪われろ！」

ちくしょう！　武藤！てめえ呪いが降りかかるぞ！くそったれええ

え！
俺の悲鳴むなしく扉が閉まってしまった。
もうだめだ・・・おしまいだ

結局バスにはのれず、俺とキンジはとぼとぼと道を歩いていた。

「なぁ、キンジ最悪だなこれは・・・」

「いうな、分かってる」

学校に行ったら救護科に行こうと思ってたんだが
いっそのこと1時間目はふけてゲーセンでもいくかと思った瞬間、
キンジの携帯がなった。

「もしもし」

キンジがレオポンの携帯をストラップを引っ張り出る。

「キンジ今どこ？　優はいる？」

ん？アリアか？

「アサルトのすぐそばだ。優も隣にいるぞ」

ん？　時刻は完全に1時間目だぞ？　なんかあったか？
キンジは携帯をスピーカーモードにしていった。

「丁度いいわ！　すぐそこでC装備に武装して女子寮の屋上に来なさいすぐに！」

「なんだよアサルトの授業は5時間目だろ？」

「授業じゃないわ事件よ！　あたしが来ると言ったらすぐ来なさい！」

おいおいまじかよ。
C装備ってのはヘルメットや防弾ベストなどのいわゆる強襲用の装備だ。
俺の奴はワイヤーも仕込むからわずかに形が違う。
優希専用C装備ってやつだな。

事件か・・・
アリアの言い方からしてろくな事件じゃねえぜキンジ
俺はにやりとしてキンジと屋上に出ると通信機を怒鳴りつけるアリアそして、階段の廂の下に知った顔を見つける。

「ようレキお前もアリアに呼ばれたのか？」

「・・・」

置物のように微動だにしない。
無視しないでレキさん！
レキの肩をとんとんと叩くとようやくレキはヘッドホンを外してこちらを見上げてきた。

「飯食った以来だな。　アリアに呼ばれたんだろ？」

「はい」

抑揚のないレキの声。

「いつも何の音楽聴いてんだ？　一回聞いてみたかったんだ」

「音楽ではありません」

「じゃあなんなんだ？」

キンジも興味があるのか聞いてくる。

「風の音です」

分からねえ

レキがドラグノフ狙撃銃を肩にかけ直した。

「時間切れね」

通信を終えたアリアが俺たちの方を見る。

「もう1人ぐらいSランクが欲しかったとこだけど他の事件で出払ってるみたい」

アリアの中では俺ら全員Sランクなんだな・・・って

なんだ？両手がずきずき痛むぞ

アリア達に見えないように手袋をそっとめくると赤くはれ上がっている。

ヤバいな、ひびでも入ってなきゃいいんだが・・・

グーパーしてみたがなんとか動くが長時間戦えるか？

「・・・」

うわ！

思わず心の中で悲鳴をあげてしまった。

レキが俺の手をじっと見つめていたのだ。

黙ってろよと指信号でレキに伝えるとレキはこくりと頷いた。

まあ、こいつならあえて言わないだろう。

手袋をつけ直して振り返る。

さて、何の事件なんだろうな・・・

やっぱり軽いのがいいけどアリアがＳランク扱いする４人のチームの事件なんだから楽じゃないだろうな・・・はぁ

第１３弾　バスジャック事件

「バスジャックだって！」

ここは、ヘリの中、装備の確認をしながら俺達はアリアの説明を聞いていた

「武偵高の通学バスよあんた達の寮の前に7時５８分に止まった奴」

ワハハ、まじかよ文字通り天罰だ武藤め！　ってそれどこじゃねえか

「犯人は車内にいるのか？」

緊迫した状況だと理解したのかキンジが尋ねる。

「分からないけどたぶんいないでしょうね。　今回のバズジャックもたぶん同一犯。　あんたたちの自転車に爆弾を仕掛けた犯人と同じ犯人ね」

「ちょうどいいな。　俺もあの犯人は捕まえてやるって思ってたんだ。　どうやってこの情報を掴んだんだアリア？　東京武偵局も動いてるんだろ？」

東京武偵局と言えば当然のことながらＳランクの武偵も保有する集団だ。

それより早く動けるアリアは一体・・・

「奴は毎回減速すると爆発する爆弾をしかけて自由を奪い。　遠隔操作でコントロールするの。　でも、その操作に使う電波にパター

ンがあって今回もあんた達を助けた時もその電波をキャッチしたのよ。　東京武偵局は動いてるわ。　でも、相手は動き回るバスよ？　準備が必要だわ」

「でも、武偵殺しは逮捕されたはずだぞ？」

「それは真犯人じゃないわ」

どうして断言できるんだアリア？

まあ、こうして事件は起こってるが模倣犯って線もまだ、ある。

どうして、そうやって・・・

犯人・・・犯人・・・えっとニュースで見たような・・・

か・・・か・・・かんざ・・・駄目だ思いだせねえ。

後、一文字だと思うんだが

「とにかく！　事件はもう、起きている！　作戦目的は車内にいる全員の救助」

「リーダーをやりたきゃやれ！　でも状況をもっと・・・」

「武偵憲章１条仲間を信じ仲間を助けよ！　被害者は武偵高の仲間よ！　それ以上に説明はいらないわ」

だから、諦めろキンジ。

この子は１度発射されたら止まらない砲弾見たいな子なんだよ。

「とにかく、救出すればいいんだろ？　ハハハ、キンジご愁傷様大事件だ」

「キンジこれが約束の最初の事件になるのね」

キンジはがくりと肩を落としながら

「大事件だな。　俺はとことんついてないよ」

「約束は守りなさい。　あんた達が実力を見せてくれるの楽しみにしてるんだから」

でもなぁ・・・キンジのこの状況じゃなぁ・・・

一瞬アリアのスカートでもめくってキンジに見せてやろうかと考えたがC装備はスカートじゃないんだよな残念だが

俺はキンジを見るといいのかとアイコンタクトで訪ねるとキンジはいいんだよと無言で返してきた。

「見えました」

レキの声に俺達は防弾窓の下を見る。

台場の町が見えるがバスなんて見えない。

「どこだレキ！」

おれが怒鳴ると

「ホテル日光を右折しているバスです。　窓に武偵高の生徒達が見えています」

「よ、よくわかるわねあんた、視力いくつよ？」

「左右共に6．0です」

お前はアフリカの原住民かとと突っ込みながらアリアが作戦を説明する。

「パラシュートでバスの上に降りる。あたしはバスの外側をチェックするからあんたは周囲を警戒。　優は先行して車内の様子を調べてきて」

なるほどな、ワイヤーで3次元的な動きができる俺にうってつけの任務ってわけだ
にしても、この子強襲で全てかたをつける気か・・・
理子の言ってた情報も正しいわけだがお前が独奏曲（アリア）なのが分かったよ。

「先行する！」

俺はそういうとヘリから飛び降りパラシュートを開いた。

見る見るとバスが迫ってくる。
雨もあって操作を慎重にしてからパラシュートを外しワイヤーをバスの屋上に発射。
その瞬間、俺は激痛に右手をぶれさせた。
しまった！

ワイヤーはバスの横を抜けて地面に突き刺さる。

バスが行ってしまう。
俺は落下していく。
距離的に死にはしないがバスが追えない。

『何やってるのよ優！』

レキの報告を受けたらしいアリアが通信機越しに怒鳴りつけてくる。
大丈夫だ問題ない。
俺はとあるゲームのセリフを言いながらワイヤーを戻し空中から街灯に向けてワイヤーを発射しめり込ませて引き戻す。
ようは引っ張って上空に飛び、ワイヤーを外してどこぞのクモ男のように前進したわけだ。
バスを捉えた。
今度こそワイヤーを撃ちこみ、バスの屋上にドンと音を立てて着地した瞬間、雨で足を滑らせて転んだ。

「うわ！」

ワイヤーがめり込んでるのでひっくりかえっただけで済んだがカッコ悪いこと
空を見上げるとアリア達が降下してくる所だった。
俺は、伸縮棒のついたミラーで仲を確認してから右手のワイヤーをめり込ませたまま車内に侵入する。
バスの中は騒ぎになっていたが俺を見ると何か言い始めた。
聞きえねえよ。

「優！」

見ると見知った顔だったので俺は嫌みたっぷりに

「よう武藤、早い再会だったな！」

「あ、ああちくしょう。　俺はなんでこんなバスに乗っちまったんだ」

「友達見捨てた罰だ」

「優、この子だ」

武藤の指した女の子が泣きそうな顔で携帯を差し出してくる。

「し、椎名先輩助けて」

あん？　なんだ？
差し出された携帯を耳に当てると

「速度を落としやがると爆発しやがります」

くそったれあいつだ。
機械的なその声は俺の自転車を吹き飛ばした武偵殺し。
やはり、真犯人は捕まってないのか？

「優！　状況を説明しなさい！」

アリアの声が通信越しに聞こえてくる。

「アリアの予想通りだ。　遠隔操作されてる！　爆弾は！」

「バスの下にプラッチック爆弾！　このバスなんか簡単にけし飛ぶ量よ」

「アリア！　後方から！」

「え？」

キンジの警告とアリアの戸惑いの声が通信機からもれる。

見ると後方から1台のオープンカーが距離を取っている所だった。
追突してきたのか
しかも、無人かよ！
その座席には俺達を追いまわしたあの乗り物が・・・
やべえ！

「みんな伏せろ！」

みんなが伏せた瞬間機関銃が車内にぶち込まれる。
1発が俺の右腕のワイヤーの発射機構に当たる。

「ぐぅ！」

しゃれにならないぞこの激痛。
ひびでも入ってんのか？

「優！どうした！」

俺の声が聞こえたんだろう。
キンジの声が聞こえてくる。

「大丈夫だ・・・それよりアリ・・・」

ぐらっとバスが変な揺れ方をしたので慌てて運転席を見ると運転手がハンドルにもたれかかるように倒れていた。
運転で避けられなかったのかよくそ！

「武藤！運転変われ早く！」

ヘルメットを投げながら俺が言うと武藤は慌ててそれを頭につけて運転席に座る。

「俺この間改造車がばれて1点しかもう、違反できないんだぞ？」

「ハハハ、友達見捨てた罰だ。　速度違反で免停だな」

俺はワイヤーを戻しながら言うと後ろから武藤の怒声が響いてきた。

「落ちやがれ引いてやる！」

やだよ

第１４弾　役立たずの奴隷達

バスは高速でレインボーブリッジに入っていく。
おいおいまじかよ！こんなもの都心で爆発したら大惨事だぞ！

「キンジ！　アリアはどうした！」

ワイヤーで上に戻ると同時にアリアもキンジの力を借りて昇ってくるとこだった。

「アリア！ヘルメットはどうしたんだ！」

キンジが怒鳴る。

「さっき、ルノーにぶつけられた時ぶち割られたのよ！　優はヘルメットどうしたのよ！」

「武藤に渡してきた。　あいつが運転してるんだ」

「優！　アリア！」

キンジの声に俺は慌てて振り向くと猛スピードでルノ―が突っ込んでくる。

「くそったれが！」

破壊力を求められると判断した俺がデザートイーグルを引き抜くと発砲。
迫撃砲のような轟音と共にルノーのエンジンを撃ち抜き機関銃が発

射されるがそれは明後日の方へそれる。
くそ！　銃のそのものも破壊するはずだったんだがぶれた。
手の怪我は深刻の部類だ。
しかも、今のデザートイーグルの洒落にならない反動でびりびりと震え、もう撃てない。
手の感覚がないのだ。

「後ろ！　伏せないさいよ馬鹿！」

振り返るともう1台ルノ―がこちらに前から来る。
しまった。
デザートイーグルを向けようとするが手が動かない。
アリアがキンジにタックルして被弾音が2つ鮮血が飛び散った。
ごろごろとアリアが転がってくる。

「アリア！」

俺は両手が動かないので覆いかぶさるようにアリアを受け止める。
今撃たれたら終わり・・・
死ぬのか俺は・・・
そう、思ったが銃撃はこない。
見ると機関銃が破壊されている。
アリアが交差の時にやったらしい。

パアァン
パアァン
その時、2発の銃の音が聞こえてきた。
音に続いてルノ―がスピンを始めガードレールにぶつかり爆破炎上した。
見るとヘリが並行してきている。

レキか！

『私は1発の銃弾』

レキのお決まりのセリフだ。
撃つ時、レキは集中のため言う言葉だと俺は思っている。

『銃弾は人の心を持たない。　故に、何も考えない』

「ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

銃声が3発、

「私は1発の銃弾」

続けて1発
バスの鹿から部品が落ちて転がっていく。
部品から火花があがり宙を飛び、ガードレールを飛び越え海に落ちて行った。

遠隔操作されてたのだろう。
海中に落ちた爆弾は巨大な水しぶきを上げた。
さすがだな、レキ
俺はレキの方を見てから駆け寄ってきたキンジにアリアを渡した。

「優？」

キンジが俺の方を見てからアリアの応急処置を始める。

額から血がでてる・・・
くそ、早く病院に・・・
バスは次第に減速して止まった。
情けないな・・・
アリアの護衛を請け負っておきながらこのざまかよ・・・
もしも、次があるなら・・・
今度こそ・・・
だから、アリア・・・死ぬな
死なないでくれ・・・

第１５弾　アリアの失望

「君こんな手でよくデザートイーグル撃てたものだよ」

「へへへ」

翌日、俺は苦笑いしながら武偵病院の一室で、手の手当てを受けていた。
ひびこそ入っていなかったが手が炎症を起こし、かなり、まずい状態だったらしく
塗り薬を渡されおまけに包帯でぐるぐる巻きにされてしまった。
１週間は銃を持つのも禁止、もちろん、他の武装も禁止されてしまった。

「さてと・・・」

診察を終えた俺は病院の１室に向かった。

神崎・Ｈ・アリアと書かれたその部屋のドアを開く。
病室はロビーが挟んだ個室だった。
すげえ、初めて見たぜＶＩＰなんて待遇。

「・・・」

丁度、部屋からはレキが出てくるところだった。
お見舞いに来たんだな。
俺は黙って包帯ぐるぐる巻きの手を見せるとレキは立ち止りそれをじーと見ていたがやがて興味を無くしたのかドアの外に出て行ってしまった。

見るとロビーに飾られている花の中にレキよりとかかれたものがあった。
ま、いいか
「よう、アリ・・・」
「あ・・・」
俺とアリアは一瞬視線が交差する。
そして、沈黙、なぜなら着替えをしようとしたらしいアリア様はトランプ柄のブ・・・
「か、風穴ぁ！」
「ぎゃあああああああ！」
ドドドン
ガバメントの三連射を防弾制服にもろに受け俺は悲鳴を上げて床をのたうち回った。
痛いって！　防弾制服の上からでもバッドで殴られたぐらいの衝撃があるんだぞ！
しかも、ガバメントは大口径だ！　デザートイーグルほどじゃないがな。
がるるるとライオンのような声をあげさっとパジャマを着直したアリアを見て俺はあっと声をあげてしまう。
アリアの額に一瞬見えてしまった。
額の傷は真っ赤に浮き立ってしまい2発の銃弾はアリアのおでこを2本の交差する線のような傷後を残しいつも自慢するように露出さ

せていたおでこを台無しにしている。
俺の視線に気づいたのかアリアはばっと手を傷跡に当てて近くにあった包帯でそれを隠してしまった。

「な、何しに来たのよ優！　お見舞い？」

顔を赤くしながらアリアはガバメントを俺に向けながら言った。
撃たないでください。

「あ、ああ怪我の治療だよ」

手を見せてやると今、気付いたのか

「その怪我どうしたの？」

ああ、レキ言わないでくれてるんだな。
秘密という観点から言えばお前は最高だな。

「バスジャックの時に切ったんだよ。　ざっくりいったからしばらく使うなだとさ」

「そう、それで何しに来たの優？　お見舞いなら私の状況がわかったでしょ？　軽傷よ」

無意識なのか分からない。
だが、アリアはそっと自分の額に触れた。
女の子にあの傷はきついだろうな・・・

「悪かった・・・」

無性に謝りたい気分だった。
朝の怪我さえなければ・・・
あの後に及んでも俺は本気を出しきっていなかったこと・・・
あれは、俺の責任だ。

「武偵憲章に従っただけ。　仲間を信じ仲間を助けよ。　あたしはそれにっしたがっただけ」

「武偵憲章か・・・」

俺もあの項目は2番目に好きだ。
1番は違うんだけどな。
でも・・・

「もう、用は済んだでしょ？　さっさと出て行って・・・」

「アリア！　俺は！」

全てをぶちまけたかった。
切り札や護衛なんかどうでもいい。
この子を失望させたくない！
だが、次の言葉は俺の言葉を躊躇させちまったんだ。

「優・・・私の見込み違いだったんだね・・・キンジも・・・私にはもう時間がないのに・・・」

時間？
それは、パズルのピースみたいなもんだ。
今までの記憶を頼りに俺は推測してみた。
真犯人・H家・時間がない・・・そして・・・

駄目だ、まだわからない。

「優、もう私に関わらないで。　欲しいならお金でも払う」

「いらねえよそんなもん！」

俺は反射的に怒鳴り返していた。
くそ、なんでこんなにイライラすんだよ。
なんだよこの無力感は！
これじゃあの時と同じじゃねえか！

「優、　一つ分かったことがあるわ」

アリアは俺を見ながら

「あたしが探していた人はあなたたちじゃなかった」

くそ・・・
その言葉は俺にとって重すぎる言葉だったんだ。

第16弾　アリア護衛イギリスへの道

あの後、アリアと別れた俺は屋上で電話をかけていた。
3コールの後に出た男の機械的な声。

「報酬は気に行ってもらえたかな？」

先日送り届けられたもののことを言っているのだろう。

「あれは返す。　俺は依頼を果たせそうにない」

「ふむ」

相手は一瞬沈黙し

「アリアに失望されたのかな？」

どうしてわかると思ったが少し考えればわかることだ。
こんな電話をする時点で・・・

「ああ、俺はアリアに失望された。　護衛はもう続けられない」

「なるほど、では一つ条件を加えよう」

「条件？」

「アリアの護衛だ。　君は彼女につき従いイギリスに行って欲しい」

「イギリスだって？」

アリアの祖国はイギリスだ。
あの状況では帰国してしまう可能性は十分に考えられる。

「アリアが乗る飛行機のチケットは私が手配しよう。　イギリスに着いたならそこで護衛は終わりとしよう。　成功報酬1億は振り込ませてももらうよ」

その機械的な言葉に俺は違和感を覚える。
イギリスについたらだって？　それじゃ、途中で何か起こるみたいな言い方じゃないか

「おまえ・・・誰だ？　アリアのなんなんだ？」

すると、電話の向こうでは微笑する声が聞こえ

「君がアリア・遠山　キンジと共にいるなら会う機会はあるだろう。だが、一つだけ言うならば・・・」

俺は息を飲む

「君は2人のそばにいなければならない。　いずれ起こるであろう戦争のために」

「戦争？」

意味がわからず聞き返すが相手はそれに答える気はないらしかった。

「君が求める情報は与えよう。　だが、彼女と戦うためにも君はアリアといる必要がある。　緋弾を守るものとして」

「緋弾？　なんだそれは？」

「それもいずれわかるだろう。　アリアと遠山キンジと共にいればね」

「誰なんだお前は！　H家の人間なのか？」

「椎名　優希。　君達はこれから困難に立ち向かうことになると私は推理している。　そのために君は最大の力を出せるだけの努力が必要だ」

こいつ知ってるのか？
俺が本気を出せない理由を・・・

「私は確信を持って言う。　君が本気を出せないならアリアは死ぬ。君の知り合いと同じように」

「・・・」

「だから守ってほしいアリアを。　私は君達が成長することを心待ちにしているからね」

「・・・」

電話が途切れても俺は無言だった。
ただ、分かるのはアリアがイギリスに帰ってしまうことと、そこで何か起こる可能性があると言うことだ。

「・・・」

包帯が巻かれた両手を見ながら俺はいろいろと考えるが答えはでそうになかった。

第17弾　悲しみ

アリアと別れた次の日、俺は手のトレーニング禁止を言い渡されランニングだけだけしてキンジの部屋に戻ると目玉焼きをトーストに乗せてもぐもぐしているとキンジが起きてきた。

「よう、おはよう」

「おう」

キンジと俺は挨拶してからねぼけながらトーストを焼いて席に座るキンジ

「その、優はアリアと組むのか？」

一番いやな話題。
俺は首を横に振った。
たぶん・・・わからんからな

「お前はどうなんだよキンジ」

聞いた話によればキンジはアリアと怒鳴り合いになりもういいと言われてしまったらしい。
だが、キンジよ。
俺は知ってるんだぞ。　迷ってんだろ？

結局、俺とキンジはぶらぶらするかということで学園島のクリーニング店によりその帰りにアリアを見つけた。
前髪を作るアリアが美容院から出てきたとき俺は胸に痛みを覚えた。

くそ、あれは俺の責任でもあるんだよな・・・
どうするという指信号を見て俺は追跡と即断した。
キンジも異存はないらしく追撃が開始される。
アリアは私服で白地に薄いピンク柄の入ったワンピースを着たアリアは電車に乗り新宿で降りる。
ちくしょうデートか？
ん？ちくしょうって何言ってんだか
俺は別にアリアの恋人や好きな相手じゃないんだぞ？
新宿警察署？　こんなとこに・・・

「下手な　尾行しっぽがちょろちょろ見えてるわよ」

振り返らずにいきなりいってきたアリアに俺達はへへへと笑いながら

「質問せず自分で探るのが武偵だろ？」

「教えるかどうか迷ってた・・・でも、ここまできたらついてきちゃうでしょ？」

なんなんだと思いながらも俺とキンジは警察署にアリアに続いて入っていった。

留置人面会室でその人を見た瞬間俺は確信した。
ああ、この人はアリアの・・・

「まあ、アリア　その人達は彼氏さん？」

「ち、ちがうわよママ」

へー、アリアの母さんってどちらかといえばお姉さん見たいな感じだな
って間違ってますよお母さん！　なんで俺ら2人とも彼氏みたいになってるんだ？
いわゆる天然さんかな？

「じゃあ、大切なお友達かしら？　へーえ、アリアもボーイフレンドを作るお年頃になったんだ。　友達を作ることも下手だったアリアがねぇ　ふふ、うふふ・・・」

「違うのこいつは遠山　キンジ！　こっちは椎名　優希！　―そういうのじゃないわ絶対に」

くそう、そこまではっきり言う必要ないだろアリアよ
俺はアリアの母と目が合い

「…優さん、キンジさん初めまして、私アリアの母で―神崎かなえと申します。　娘がお世話になっているそうですね」

「「い、いやぁ」

同時にどもる俺とキンジ
しかし、アリアはそれを無視するそうに

「ママ、時間が3分しかないから手短に話すけどこいつら武偵殺しの3人目と4人目の被害者なのよ。　先週武偵高で自転車で爆弾を仕掛けられたの」

う、改めて聞くと間抜けな話だよな

「・・・まあ・・・」

かなえさんは表情を固くする。

「さらにもうひとつ、奴は一昨日バスジャック事件を起こしてる。奴の活動は急激に活発になってきているのよ。ってことはもうすぐ尻尾をだすはずだわ。だから、あたし狙い通りまず武偵殺しを捕まえる。奴の件だけでも無実を証明すればママの懲役１０６４年から９４２年まで減刑されるわ。他の事件も最高裁までに全部なんとかするから」

事実上の終身刑か・・・

「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウ―の連中を全員ここにぶちこんでやるわ」

「アリア気持ちは嬉しいけどイ・ウ―に挑むのはまだ早いわ―『パートナー』は見つかったの？」

「それは・・・どうしても見つからないの。誰も、あたしにはついてこれなくて・・・」

ちらりと俺とキンジを見て言うアリア

だよな

「駄目よアリア　あなたの才能は遺伝性のものでも、あなたは一族のよくない一面　―プライドが高くて子供っぽい一面も遺伝してしまっているのよ。そのままではあなたは半分も能力を発揮できないわ。あなたにはあなたを理解し。あなたと世間を繋ぐ橋渡し

ができるようなパートナーが必要なの。　適切なパートナーはあなたの能力を何倍も引き出してくれる。　曾お爺様にもお祖母さまにも優秀なパートナーがいらっしゃったでしょ？」

「…それはロンドンで耳がタコになるぐらい聞かされたわよ。　いつまでもパートナーを作れないから欠陥品とまでいわれて・・・でも・・・」

「人生はゆっくり歩みなさい。　早く走る子は転ぶものよ」

かなえさんはすいうと長い睫毛の目をゆっくりまばたかせた。

「神崎時間だ」

管理官が時間を見ながら告げる。

「ママ、待ってて！必ず公判までに犯人は全員捕まえるから」

「焦っては駄目よアリア。　あたしはあなたが心配なの1人で先走ってはいけない」

「やだ！　あたしはすぐにママを助けたいの」

「アリア私の最高裁は弁護士先生が必死に引き延ばしてくれてるわ。だからあなたは落ち着いて、まずはパートナーを見つけなさい。その額の傷はもう、あなた1人では対応しきれない危険に踏み込んでいる証拠よ」

「やだやだやだ！」

「アリア・・・」

「時間だ」

興奮するアリアをなだめようとアクリル板の向こうから身をのりだした管理官がはがいじめにする。

「やめろ！　ママに乱暴するな」

アリアは激高してアクリル板に飛びかかるがびくともしなかった。かなえさんはアリアを悲しそうな目で見ながら管理官2人に力づくで引きずられ向かいの部屋から運ばれていった。

「訴えてやる！　あんな扱いしていいわけがない。　絶対に訴えてやる」

曇り空の下で新宿駅に向かうアリアの後ろで俺達は声をかけられずにいた。

ああ、分かったよアリア。

お前が戦う理由と俺が護衛すべき敵がイ・ウ―という組織に濡れ衣をきせられた母親を助けるために・・・

「・・・」

そのアリアが突然止まる。

俺たちも止まり見るとアリアは手を握り締め肩を怒らせ顔を伏せて

いた。
その足元に水滴がぽたぽたと落ち始めている。
アリアの・・・涙だ。

「アリア・・・」

「泣いてなんかない」

怒ったようにいうアリアの肩は震えていた。
町を歩く人々は道の真ん中で立ち止まる俺たちを見てにやにやしている。
痴話げんかとでも思っているんだろ。うせろ！
俺は本気で殺気をぶつけてやると慌てて目をそらして行ってしまう。

「おい、アリア」

キンジがアリアの前に出て声をかける。
俺も行くとアリアは歯を食いしばりきつく閉じた目から涙をあふれさせ続けていた。

糸が切れたように泣き始める。子供のように・・・大きな声で

「うあああああぁあ！　ママぁー・・・ママあああぁぁぁぁぁ！」

新宿のネオンの光が道を照らしまるでアリアの涙に呼応したように通り雨が降り出す。
ただ、悲しいと言う感情だけが俺の心を支配していた。
でも、泣き続けるアリアに俺もキンジも何もしてあげることはできない・・・
できないんだ。

ただ、無言でその時間は過ぎて行く。

第１８弾　ハイジャック事件幕開け

東京が強風に見舞われた週明け、俺は部屋で包帯を外して塗り薬を塗ってから手の状態を確かめた。
まだ、無茶はできないが握力は銃を撃つ分には問題ない。
デザートイーグルとガバメントの弾を確認して予備のマガジンをカバンに放り込んでから最後にナイフを確認してワイヤーを腕につける。
防弾制服に手を通しながら部屋を出るとキンジも個室からでてくる所だった。

「よう！　俺今日サボるな」

「え？」

突拍子もないことを言った俺にキンジが首をかしげている。

「ああ、クエストか？」

「まあ、そんなとこだな」

そう、これはクエストだ。
あの電話の相手がくれたチケットを手に寮を出る。
キンジに言うか迷ったがあいつの分のチケットは貰ってない。
強引に乗ることはまあ、できるといえばできるが緊急事態でもないのだから何も起こらなければ問題になる。
アリアがイギリスに帰ることはあのかなえさんの件の後、電話で知らされた。
何者か知らんが随分、迅速な情報だ。

アリアが帰る件を言うか迷ったがキンジにはそれも黙っておいた。
羽田の第2ターミナルで手続きを終えて飛行機に乗り込む。
武偵であれば帯銃で乗ることも可能なのだ。

「おお、すげえすげえ」

通された場所はホテルみたいな部屋だった。
確か空飛ぶリゾートとかいう超豪華旅客機だ。
こんな機会じゃなきゃ一生のらないだろうな。
だが、その一生に一回かもしれない機会に用はない。
部屋を後にして機内を回る。
特に不審な点はないようだがすみずみまで調べるのも難しい。
アリアの個室をフライトアテンダントに聞いてから部屋に戻る途中
離陸準備のアナウンスが聞こえてくる。
1度戻るかと俺の個室に向かう途中

「―武偵だ！　離陸を中止しろ！」

「お、お客様失礼ですがどういう・・・」

聞き覚えがあったので行ってみるとフライトアテンダントに怒鳴り
つけてるのは・・・

「説明している暇はない！　今すぐこの飛行機を止めるんだ！」

フライトアテンダントが走っていき両膝をついたキンジに声をかける。

「ようキンジ」

「ゆ、優か！？　なんでいるんだよ！」

目を丸くして驚くキンジ

「お前こそ・・・」

機体が揺れた。
離陸準備に入ったのだ。
さっきのフライトアテンダントが膝を揺らしながら

「あ、あの・・・駄目でしたぁ。　き、規則でこのフェーズは管制官からの命令でしか止めることはできないって・・・」

「ば、馬鹿野郎！」

「おい！キンジ！　何があったんだ！　説明しろ！」

なんとなくわかるけどなアリア関連で何かが起こったのだ。

「優、アリアの部屋は分かるか？」

「ああ、説明しろよ」

歩きながら俺はキンジに簡単に説明を受けた。

武偵殺しがアリアを狙っている。
それは知ってる。
だから、俺はここに乗り込んでるんだ。

「優はなんでここにいるんだ?」

「ああそれは・・・」

まいったなどう、キンジに説明しよう。
アリア護衛の話は本人以外にも話さないように言われてるからな。

「悪いけど言えないんだ。　クエスト関連だと思ってくれたらいい」

「分かった」

時間がないらしくアリアの個室の前に来るとノックもしないでキンジはいきなり扉を開いた。

「な、何!?　キンジ!?　優まで!」

アリアは驚いたらしく紅い目をまん丸に見開いた。
そりゃ、地上にいるはずの俺達がいたら当然の反応だな。

「さすがリアル貴族様だなこれ片道２０万するんだろ?」

「断りもなく部屋に押し掛けてくるなんて失礼よ」

「いや、アリアそれ言う資格ないだろ」

と俺が言うと怒りながらもアリアは黙った。

「武偵憲章第2条　依頼人との約束は絶対に守れ」

「・・・？」

「俺はこう約束した。　アサルトに戻って1件目の事件をお前と一緒に解決してやる。　武偵殺しの1件はまだ解決してないだろ？」

「何よ！　何もできない役立たずのくせに」

がぅと！小さいライオンが吠えるようにアリアは犬歯を向く。

「帰りなさい！　あんたたちのおかげでよくわかったのあたしはやっぱり独奏曲（アリア）あたしのパートナーになれるやつなんか世界のどこにもいないんだわ！だからもう武偵殺しだろうがなんだろうがこれからずっと一人で戦うって決めたのよ」

「ならもっと早く言えばよかったろ？」

俺はそういうとソファーに腰を下ろした。
キンジもアリアの向かいの椅子に座る。

「ロンドンに着いたらすぐ帰りなさい！　エコノミーのチケットぐらいは手切れ金代わりに買ってあげるから！　あんた達はもう他人あたしに話しかけないこと」

「元から他人だろ？」

「うるさい！　しゃべるの禁止！」

飛行機は東京湾を出る。
俺はふくれっつらで窓の外を見るアリアに苦笑しながら装備を確認していた。
飛行機の中だからな。
こいつは使いたくないな。
破壊力だけなら絶大な大口径のデザートイーグルは今回は出番は少ないかもしれない。
そうなるとガバメントを始めとした・・・

「―お客様にお詫び申し上げます。　当機は台風による乱気流を迂回するため到着が３０分遅れることが予想されます」

機内放送か・・・

ガガ―ンガガガ―ン
うわ！雷か？
この機の操縦下手だな。
あるいは、運が悪いのか雷雲の近く飛んでやがる。

「怖いのか？」

俺がキンジの声に振り向くと

「こ、怖いわけない。　バッカみたい。　ていうか話しかけないで」

ガガ―ン
お、また近い

「きゃ！」

ほほう、アリアの苦手なもの発見だ。
雷が苦手なんだな。
キンジも苦笑いしてるし

「雷が苦手ならベッドにもぐって震えてろよ」

「う、うるさい」

「ちびったりしたら一大事だぞ」

「バ、ババ馬鹿！」

ガガーン

「うあ！」

アリアは飛び上がってベッドに飛びこんで布団をかぶってしまう。

「ハハハハハ！」

「ば、馬鹿優！笑ったわね！　風穴地獄に・・・」

ガガーン

「～き、キンジぃ」

ついにアリアは毛布から助けを求めるように手を伸ばしたので俺は
苦笑しながらその手を握ってやった。
アリアはそれでも怖いのかキンジの袖を掴む。
キンジが気をまぎわらすようにテレビをつけるとそこに映ったのは

有名な時代劇だった。

「この桜吹雪見覚えねえとは言わせねえぜ」

遠山の金さんだな。
なんでもキンジの先祖らしい。
この人もヒステリアモードが使えたんだからさぞ暴れたんだろうな。

「ほら、これでも見て気を紛らわせろよ」

「う、うん」

話しかけるなというアリアルールは消えたらしい。
ぶるぶる震えながらぎゅっと俺とキンジの手と袖を握る姿はかよわい女の子そのものだった。
守ってあげたい。
そう、思える。

パン　パァン

銃声！
俺は立ち上がる。

「アリア！　キンジ先に行くぞ！」

返事も待たずに廊下を飛び出すと大混乱になっていた。
無理もない。
1日に必ず聞く音として認識している俺達とは違うんだからな

銃声のした機体前方を見るとコクピットの扉があけ放たれている。
そこにいたのは・・・
さっき、キンジと話してたアテンダントか

「おいお前！何してる！」

俺は両手のガバメントを抜くとアテンダントに向けた。
なぜならその手には機長と副操縦士が引きずられていたからだ。

「―動くな！」

キンジも拳銃を向ける

「お気をつけくださいでやがります」

というと何かを投げる。
やばい！

「みんな部屋に戻ってドアしめろ！」

缶からガスが出るのを見て俺は怒鳴り雷の恐怖を押し殺してでてきたアリアをキンジと押し戻すとドアを閉めた。
ばちんと機内の照明が落ちて紅い非常灯が照らす。

「キンジ！　優大丈夫？」

大丈夫みたいだな。
手にしびれはあるがこいつは毒とは関係なさそうだ。
息もできるし意識もはっきりしてる。

「アリア、あのふざけたしゃべり方、やっぱり武偵殺しだ。　やっぱり出やがった」

「待て！　キンジもあいつがここに出てくることを知ってたのか？」

「も？　ってことは優も知ってたのか？」

「俺の場合は手助けもあったからなんだがな」

「武偵殺しはバイクジャック、カージャックで事件を初めて、さっきわかったんだがシージャックである武偵をしとめた。　そして、それはたぶん直接対決だった」

つまり、キンジの説明はアリアが電波を傍受しなかった理由は武偵殺しが直接船に乗り込んでいたということになる。
まあ、いきなりチャリジャックって小さくなってるがこれはアリアに対する宣戦布告と言うわけだ。
かなえさんに罪を着せて・・・

「・・・今お前と直接対決しようとしてる。　このハイジャックでな」

悔しそうに歯を食いしばるアリア
そこにベルト着用サインが点滅を始める。
和文モールスだなこれは
訳すと

おいでおいで　イウ―はてんごくだよ　おいでおいでわたしはいっかいのばーにいるよ

「誘ってやがる」

「みたいだな」

「上等よ風穴あけてやるわ」

アリアは眉をつりあげてガバメントを2丁スカートから取り出す。

「俺たちも一緒に行ってやるよ。　役にたつかどうかは分からないけどな」

「こなくていい！」

ガガーン

雷鳴が鳴り響く。

「く、くれば？」

不謹慎だがなんというか可愛いなお前・・・

さて、これで片だ。

武偵殺しを捕まえてな

第１９弾　アリアＶＳ武偵殺し

バーに入ると先ほどのアテンタントがカウンターに足を組んで座っていた。
ん？　武偵高の制服？　それにあのフリフリは・・・

「今回もきれいに引っかかってくれやがりましたねえ」

アテンダントはその顔にかぶせられた薄いマスクみたいなお面をべりべりとはがし始めた。

「り、理子か！」

驚いて言うと

「こんばんは」

青いカクテルをくいっと飲みぱちりとウインクしてきた。

「アタマとカラダデ戦う才能ってさけっこー遺伝するんだよね。武偵高にもお前達見たいな遺伝形の天才がけっこういる。　でも・・・お前の一族は特別だよオルメス」

オルメス？アリアが硬直したのを見るとＨの名前か？

「あんた・・・一体・・・何者？」

「理子・峰・リュパン４世―それが理子の本当の名前」

リュパン・・・あ！　あれかフランスの大怪盗の・・・

「でも家の人間はみんな理子のことを名前で呼んでくれなかった。
おっ母様がつけてくれたこの可愛い名前を、呼び方がおかしいんだよ」

「おかしい？」

アリアが聞き返す

「４世４世さぁ！　どいつもこいつも使用人どもまで・・・理子をそうよんでたんだよひどいよねぇ」

「そ、それがどうしたってのよ。　４世の何が悪いのよ？」

なぜかはっきり言ったアリアに理子は目玉をひんむいた。

「悪いに決まってんだろ！！　あたしは数字か！　あたしはただのＤＮＡかよ！　あたしは理子だ！　数字じゃない！　どいつもこいつもよ！」

この怒りは俺たちに向かってじゃない。
だが、一つだけ分かるのはこいつを野放しにしてたらだめだ。

「曾おじい様を越えなければ一生あたしじゃない！　リュパンの曾孫として扱われる」

アリアは深刻な面持ちで聞いてた。

「少しだけ・・・俺にもわかるぜ理子」

「ああ？」

理子が俺を睨みつける。

「だが、今はそんなこと話すときじゃない。武偵殺しは全部お前の仕業なのか？」

「武偵殺し？　あんなものプロローグをかねたお遊びだ。　本命はオルメス４世アリアお前だ」

その目はいつもの理子の目ではなかった。

獲物を狙う獣の目

「１００年前曾おじい様同士の対決は引き分けだった。　つまり、オルメス４世を倒せばあたしは曾おじいさまを越えたことを証明できる。　キンジ、優おまえらどちらでもいい。ちゃんと役割を果たせよ」

俺たちに向けられる理子の目

「初代オルメスには優秀なパートナーがいたんだ。　だから条件を合わせるためにお前らをつけてやったんだよ」

「迷惑な話だな」

俺は言いながら銃を理子に向ける。

こいつは演じてたんだ。　馬鹿理子をずっと・・・

俺たちに気付かれずにずっと・・・

「バスジャックもお前が？」

「くふ、キンジぃ武偵はどんな理由があっても時計を預けたりなんかしたら駄目だよ。　狂った時計見たら遅刻しちゃうぞ」

つまり、あの時から理子は細工を始めてたんだな。

「何もかもお前の計画通りかよ！」

キンジが言う

「んーそうでもないよ。　予想外のこともあったもん。　チャリジャックで出会わせてバスジャックでチームも組ませたのにどちらともくっつききらなかったのは計算外だったもの。　優はもう、あきらめてたけどキンジがお兄さんの話を出すまで動かなかったのは意外だった」

「兄さんを・・・兄さんをお前が？」

キンジの兄さん？

シージャックで死んだあの人のことか？

「くふ、ほらパートナーさんが怒ってるよ。　一緒に戦ってあげなよ。　いいこと教えてあげるあなたのお兄さんは理子の恋人なの」

「いいかげんにしろ！」

「キンジ！　理子はあたしたちを挑発してるわ！　落ち着きなさい！」

「これがおちついていられるかよ！」

「冷静になれ！　キンジ！」

駄目だこいつ完全に頭に血が上ってやがる。
キンジは反射的に銃を理子に向けたがその瞬間、飛行機が揺れた。

「うわ！」

気付いた時にはキンジのベレッタはばらばらになり地面に落ちていた。
理子の手を見るとワルサーＰ９９が握られている。
潮時だな

「アリア、キンジ下がってろ！俺がやる！」

「駄目よ優！　あんたなんかに何ができるのよ！　あいつは私をご希望よ！あんた達は隠れてなさい！」

ばんと床を蹴り2丁拳銃を構えてアリアは理子に襲いかかる。
武偵の戦いは防弾制服があるため拳銃は一撃必殺の武器にはならない打撃武器なのだ。
ワルサー1丁とガバメント2丁の装弾数は互角。

「アリア2丁拳銃が自分だけだと思ったら間違いだよ」

そういうと理子はカクテルを投げ捨てると新たなワルサーをスカートから取り出した。
だが、アリアは止まらない。

「くっこの！」

「アハハ」

2人は至近距離から互いに銃を撃ち、射撃戦を避け、かわし、相手の腕を自ら弾いて戦う。

次の瞬間、弾切れをおこしたアリアは両脇で理子の両腕を抱えた。

2人は抱き合うような姿勢になり銃声が止む。

格闘ではアリアが上か

「優！　キンジ！」

言われるまでもねえな

俺はガバメント、キンジはバタフライナイフを理子に向ける。

「終わりだな理子」

「カドラ―奇偶よねアリア、理子とアリアはいろんなとこが似てる。家系、キュートな姿、それと2つ名」

「？」

「あたしも2つ名を持ってるのよカドラの理子。　でもねアリア」

な、なんだ？あれは

「アリアのカドラは本物じゃない。　お前はまだしらないこの力の

ことを」

まるで神話のメデューサのように動いた理子の髪は背後の隠していたと思われるナイフでアリアの襲いかかる。
1撃目はなんとかよけたアリアだが反対のナイフがアリアの頭に鮮血を飛び散らせた。

「うぁ！」

反射的に後ろに下がるアリア
ちっ！

「キンジ！　アリアを連れて下がれ」

ドドン
ガバメントを2連射牽制で撃った銃弾は理子には当たらない。
キンジがアリアを抱えて出て行く時間さえ稼げればいい。

「優！」

キンジの声が聞こえてくるが俺は振り返らずに

「心配すんな」

俺は目を閉じた。
2人が出て行く気配がする。

「キャハハ、優希は逃げないの？　殺しちゃうよ」

10秒・・・11秒・・・

「なあ、理子聞きたいことがあるんだ。　教えてくれないか？」

「いいよ！　理子は今気分がいいからね。　スリーサイズでもなんでも答えてあげる」

２０秒・・・２１秒

「アリアを殺すのか？」

「もう、死んじゃったかもしれないねぇ。　心配しなくても優も後を追わせてあげる。　それともイ　ウ―に来る？　歓迎するよ」

２９秒・・・

「お断りだ４世」

俺は目を開く

「お前・・・今何て言った？」

理子の怒気が伝わってくる。

この言葉は彼女には一番言われたくない言葉だ。

だが、俺はあえて言う。

「４世って言ったんだよ。　聞きえなかったのかなぁ？」

俺は口を盛大に笑みに釣り上げると理子を見下すように言い放つ。

「殺してやる」

理子はそういうとワルサーをこちらに向けてくる。
見せてやるぜ理子。
こうなった以上。お前は終わりだ。
俺はガバメントの引き金を引いた。

第２０弾　優希ＶＳ武偵殺し

弾を補充した理子のワルサー―と撃ちあえば結果は見えてる。
理子の銃撃を銃弾撃ちつまり、ビリヤード撃ちで弾く。
ガバメントの弾数が３を切った瞬間、俺は右のガバメントを撃ちながら理子に向けてワイヤーを発射した。

「きゃはは！」

理子は笑いながらそれを軽々と避ける。
予想済みだ！
俺は左のガバメントを発射しながら左のワイヤーを発射した。

「！？」

理子の顔に驚愕の表情が浮かび上がった。
隠してきた切り札の１つ！

「なーんちゃって♪」

理子は口元を歪めながらそれをかわした。
俺がずっと隠してきた２つ目のワイヤーの攻撃をかわしたのだ。
でもなぁ違うんだよ！俺の狙いは！

理子を交差するようにワイヤーは後ろの壁に突き刺さっている。
一気に両側のワイヤーを引き戻し俺は前方に加速した。

「なっ！？」

接近戦は出来ないとたかをくくっていたのか突っ込んでくる俺に理子は目を見開いた。
だが、それは一瞬で理子は俺に向けワルサーを2連射する
甘いな理子
右の腰から再びワイヤーが飛び出し機内の壁に突き刺さり、左のワイヤーと同時に巻き戻し操作をする。
左手は壁から放して巻き戻しているので理子はその動きを見ざる得ない。
右にぐんと引っ張られた俺は機内の斜め上の空中で右越しのワイヤーを外し右のワイヤーの巻き戻しで理子に突撃する。
この間1秒もない。
理子も腰のワイヤーがあるのは予測できなかったかあるいはこんなタイミングで使われるとじゃ思っていなかったのか致命的な隙を俺は見つけた。

「俺は女だからって手加減したりなんかしねえぜぇ！」

超加速を加えた右ストレートが理子の腹にめり込んだ。

「ぐっ！」

同時に右のワイヤーを壁から回収し巻き戻す、理子は通路に沿うようにぶっ飛び地面にたたきつけられるかと思ったが爆転し、体制を立て直す。
浅かった。
理子は打撃の瞬間、衝撃を和らげるため後ろに飛んだのだ。
距離的に5～6メートルの距離
俺は追撃をかけずにこの間にガバメントの弾の補充をし、理子に向ける。

「フフフ、きゃははは」

なんだこいつ？いきなり笑いだしやがった。

「何がおかしいんだ４世ぃ？」

今の俺は徹底的に相手を罵倒し戦闘を楽しんでいる。
キンジのヒステリアモードとは少し違う。
これは暗示だ。
特定の動作と条件で俺は普段の数倍の集中力を高めることができる。
集中力だけだからキンジのように身体能力が上昇するわけじゃないがな。
だが、困ったことにこの状態、戦闘狂になっちまうんだ。

「くふふ、ひっどいなぁユーユー、うそつきだねぇ。　接近戦はＥランク並みだったんじゃないのぉ？」

「はっ！　授業が全てだとでも思ってたのか？　それにお前が言えるセリフじゃねえだろ？」

俺は笑みを浮かべて返してやる。
そう、俺は接近戦はできないと装ってきた。
Ａランクにいるのもそれが理由だ。
Ｓランク任務は銃技だけじゃ死ぬ危険があるからな。
だが、強さをセーブし、ここぞと言う時に投入する。
理子もおそらくは俺のことを調べていたはずだ。
何せ、こいつには左のワイヤーのことはすでにばれてるんだ。
入学試験の時にキンジと戦った時に使ったからな左のワイヤー。

「アハハハ！　私達も似てるねぇ！　切り札を隠し持つ状況とかさ。

それでどうするの優希？」

「アリア達の復帰を待つまでもねえよ。　ここでお前は逮捕だ！リュパン４世」

ぐっと加速のため右足に力を入れたその時、機がぐらりと揺れた。

「っ！」

体制を崩されガバメントの発射ができないため右腰のワイヤーを発射した瞬間、ワイヤーに銃撃が命中した。
やられた。
アリアにやられたワイヤー撃ちだ。
失速してワイヤーは壁に突き刺さらず床に落ちて行く。
その一瞬で、理子は滑るようにして接近してきた。
アリアと同じように銃撃戦、に持ち込まれる。
まずい！
本能がそう告げている。
こいつと長期間の接近戦は不利だ。
銃を撃ち手を弾きながら俺は理子の髪が動いているのが見えた。
ナイフが来る。
ばーいというように理子に髪のナイフが一閃、二閃する。

「くそったれが！」

ナイフを手に持つガバメントで受け止める。
理子の目が獲物を捉えた鷹の目のように細まる。
ワルサ―が俺の胸を向き・・・
その瞬間、俺は後方に飛んできた。

普通に飛んだのではない。
ワイヤーの力を借りている。
腰の後方に設置されたワイヤーに引かれ後ろに飛びつつ理子の放った弾丸をビリヤード撃ちで迎撃した。
アリア達が逃げたドアの前まで後退した俺は再び理子と対峙する。

「・・・」

「やるじゃない。　その技能ならSランクとして通用しちゃうよ優希ぃ」

「ランクには興味ねえよ。　Aランクで十分だ」

「キャハハハ！　でもね。　理子知ってるんだよ！　その両手もう、限界じゃない？」

「何のことだ？」

笑みを崩さず言うが内心ではばれたかと思う。
そう、バスジャックのあの日に受けた傷が、ぶり返してきてる。
通常ならあの、理子に叩き込んだ腹の一撃で決めるつもりだった。
理子が後ろにとんだのもあるが威力がかなり低かった。
正直、ガバメントを持つ左手はぶるぶる震えており感覚がほとんどない。
右手はまだ、あるが後1発撃てればいい方だ。
時間稼ぎはしてやったぜ。キンジ、アリア後はお前らがやれ
押しつけるようになっちまうがな。

「決着をつけようぜ4世ぃ」

「その名前で呼ぶな！　私は理子だ！」

俺は理子を睨みながら発砲。
互いの銃弾が激突したその瞬間、激しい光が当たりを包んだ。

「なっ！」

理子の声が聞こえる。
こいつは武偵弾の１種閃光弾だ。
一流の武偵しか持てず特注のため、１発１００万はするとてつもない弾丸。
俺はそれを躊躇なく使い。
理子に気付かれないため目を閉じなかった俺も視力が飛ぶ。
一時的な失明だ。
理子も一時的失明したはずだがこの腕でとどめは難しい。
背後のドアに入り閉めて歩き回り記憶した廊下を走り感覚でアリアの部屋の前まで来る。
まだ、目は何も写してはいない。
ここにアリア達がいる保証はないがキンジならここに逃げ込むだろうと言う確信があった。
俺は扉をあけると転げこむようにその中に飛び込むのだった。

第２１弾　３人で

「「優！」」

部屋に足をもつれさせるように入った俺はアリアのアニメ声とキンジの声を聞いた。

「怪我したの！　理子は？」

ああ、アリア無事だったんだな。

「怪我はしてねえよ。武偵弾の閃光で一時的に失明してる」

「武偵弾って・・・そんなものよく持ってたな優」

キンジが驚いたように言ってくる。

「あんた大丈夫なの？　理子と戦ったんでしょ？」

「倒す気だったんだが手がもう、限界だ。　キンジ、ガバメント使ってくれ」

「ああ、後は俺とアリアに任せろ」

その言葉を聞いて違和感を覚える。

ああ、なったんだなヒステリアモードに

「ヒステリアモードになったなキンジ？　何したんだよ、アリアにキスでもしたか？」

「き、キキキ・・・キンジ・・・責任・・・」

ん？アリアの反応まさか・・・

「どんな責任でも取ってあげるさ」

「おいおい、まさか本当に・・・」

「悪かったな優。　お前はゆっくりしててくれ」

「そうはいかねえよ。作戦を話せ。俺も協力してやる」

「分かった。　3人で協力して武偵殺しを逮捕しよう」

「バッドエンドのお時間ですよー。　くふふっ。　くふふふふふ」

理子はどこからか用意した鍵でアリアの部屋に入ってきた。

髪でナイフを握り、両手にワルサーを持ってベッドの隣に立つ俺を見てくる。

「よくできましたユーユー。　びっくりしちゃった。　武偵弾はさ

すがに予想できなかったよ。　でも、残念だねぇ。　あれが閃光じゃないタイプの武偵弾なら勝ったかもしれないのに」

「武偵憲章９条破ったら意味ないだろ？」

「あはっ、まだ、持ってるんだ武偵弾？」

「さあな？　俺は嘘つきだからな」

「くふっ、アリアとキー君は・・・ああ、ユーユーの部屋？　ユーユーがおとりになり、背後から強襲ってシナリオだね？　アハハ、理子にばれてる時点でバットエンドだねぇ」

「それは俺を死体にするか瀕死の俺にでも言ってくれ。　まだ、死ぬ気はないからな」

「くふ、そんな腕で言うのぉ？」

「それとも怖いのか４世？」

「・・・」

理子の目が細まった。
ワルサーの引き金に力が入った瞬間、俺はワイヤーを引き戻した。
そのワイヤーの先に巻きつけておいた酸素ボンベが勢いよく理子に飛んでいく。
撃てば爆発する。
そう思わせて、ワイーヤーで接近してけりを叩き込んで決める。
俺がワイヤーを発射しようと左腕を理子に向けた瞬間飛行機が突然大きく傾いた。

大きく体制を狂わせた俺にワルサ―が2発俺の額に向けられ発砲。
俺は右手のワイヤーの発射用の部分でそれを弾いた。
再びワイヤーを理子に向けた。
直接当たる距離だ。

「動くな！」

「アリアを撃つよ！」

俺の方が早いと判断した理子がシャワールームにワルサ―を向ける。
ガタン
天井の荷物入れに潜んでいたアリアが転げ出てきながら
ガンガン！
黒銀のガバメントで理子のワルサ―を両手から落とした。
その瞬間、キンジが理子の背後から襲いかかった。
すさまじい速度でバタフライナイフを一閃。
アリアの日本刀と同時で2人の斬撃は理子のツインテールをナイフごと切り落とした。

「うっ！」

理子は両手で切られた部分を抑え焦った声を出した。
キンジとアリアはガバメントを理子に向けて言い放つ。
「峰・理子・リュパン4世」「殺人未遂の現行犯で」「逮捕だ」

「そっかぁ、ベッドにいると思わせてシャワールームにいると見せかけてどっちも武ラフ、本当はアリアのちっこい体を活かして、キャビネットの中に隠してたのか。　すごーい、ダブルブラフってよっぽど息が合ってないとできないんだよ。　3人とも誇りに思っていいよ。　理子、ここまで追い詰められたのは初めて」

「追い詰めるも何ももう、チェックメイトよ」

「ぶわぁーか」

なんだ？　髪が動いてる？
まさかこいつ！
俺が飛びかかろうとした瞬間、飛行機がぐらりと傾いた。
俺が転び、アリアも壁にぶつかり、キンジも立っているのが精いっぱいと言ったところ、
理子はスイートルームから飛び出す。

「逃がすかよ！」

俺は出口に向かいワイヤーを発射し、巻き戻すと傾いている廊下を走る理子の姿を発見する。
ワイヤーを発射し、壁にめり込ませて巻き戻し加速。
理子が振り返る。
甘かったな理子、多少の悪地でもワイヤーを使えば動けるんだよ。
理子の口がにやりと歪んだ。

「くふっ、本当に予想外だったよユーユー。　今回は理子逃げるね。
またね」

ぱちりとウインクした瞬間、理子の背後が爆発した。
おい！まさか！
事前に準備していたのか、円にくりぬかれた穴から理子が落ちて行く。
突然の出来事に俺も機外に放り出される。
やばいやばい！

急行下で高度が下がっているとはいえ、このままでは死ぬ。
まだ、死ぬわけにはいかない。
だから

「くそったれが！」

ワイヤーを穴に向け発射、みるみる遠ざかる穴、それはわずかに届かない。

「！？」

絶望が俺を襲った瞬間、俺の体がぐんと宙に固定される。
誰かがワイヤーを掴んでくれたのか？

「間に合えぇ！」

暴風の中、ワイヤーを引き戻して機内に戻った瞬間、背後の穴は消火剤とシリコンのシートでふさがった。
ああ、死ぬかと思った。

「無事か優？」

「そうか、キンジお前に助けてもらったんだな。　ありがとう」

「立てるか？」

「ああ」

俺はキンジの手を借りて立つと窓の外を見た。
パラグライダーが見える。

理子はあれで脱出したらしいな。
って嘘だろおい！
眼下に見えたのはあれはミサイルだ。
ズドオオン
ズドオオン
2発の轟音と共に機が激しく揺れる。
窓の外を見ると内側のエンジンが2機やられていた。
持ちこたえたが急降下している。
「キンジ操縦席に行くぞ！」
俺が走り出すと同時にキンジも続く。
「今、アリアが行ってる」
「あいつ操縦できるのか？」
「分からないが優は経験あるか？」
「あるわけないだろ！　せいぜいゲームのシュミレーションぐらいだ」
俺達は言いながら操縦室に飛び込むのだった。
ああ、絶対今日は人生最悪の日だ！そうだろ神様

第２２弾　武偵は諦めるな！　決して諦めるな

機長と副操縦士は麻酔弾を撃たれたらしく昏倒していた。

「遅い！」

犬歯をむき出しにして言ったアリアは操縦席に座る。

「アリア―飛行機操縦できるのか？」

「セスナならね。　ジェット機なんて飛ばしたこともない」

アリアがぐっと操縦悍を引くと機体が水平に保たれる。
窓の外を見ると海面からそう遠くない。
あぶねえ
高度は３００というところか

キンジが無線機を探し当てて羽田に連絡を取ると管制塔から問いがあり、この機の状態をト伝えた。
俺は、その間に機長から拝借した衛星電話を操作する。こいつは、どんな速度でとんでいようが電話回線につながるすぐれものだ。
スピーカ―モードにする

「誰に連絡してるの？」

アリアの問いに向こうが答えてくれる。

「もしもし？」

「よう、武藤俺だよ優だ」

「ゆ、優！　お前ハイジャックされた飛行機にいるんじゃ！　お前とキンジの彼女が大変だぞ」

「彼女じゃねえよ。　キンジとアリアなら隣にいるぜ」

「ちょっ・・・お前ら何やってんだよ」

「か、かの・・・かの・・・」

自分が彼女扱いされてることにアリアはぼぼぼぼとまた、赤面癖を発揮した。
キンジが渡せと手を出してきたので俺が渡す。

「武藤、よくハイジャックのこと知ってたな。　報道されてるのか？」

「とっくに大ニュースだぜ。　客の誰かが機内電話で通報でもしたんだろ？　乗客名簿はすぐにコネクトが周知してな。　アリアと優の名前があったんで今、教室に集まってたところだ」

キンジはエンジン2基が破壊されたことや犯人が逃亡したことを伝える。

「安心しろ武偵遠山　その飛行機は最新技術の結晶だ。　エンジン2基でも飛べるし悪天候でもその状況は変わらない」

羽田コントロールの声にアリアはほっとした顔になる。

「それより、キンジ、破壊されたのは内側の2基っていったな。燃料計の数字を教えろ」

「数字は今５４０だ。　５３５になった」

「くそったれ！　盛大に漏れてるぞ」

「ね、燃料漏れ！　止める方法を教えなさいよ」

「方法はない。　わかりやすく言うと機体側のエンジンは燃料系の門も兼ねてるんだ。そこを破壊されるとどこを止めても露出は避けられない」

「あ、あとどれくらいもつの？」

「残量はともかく露出の速度が速い。　いいたかないが後１５分といったとこだ」

「さすがは最先端技術の結晶だな」

ぐちりたくもなるよなキンジ。
残された手はすくないか・・・

「キンジ、さっきコネクトに聞いたがその飛行機は相良湾上空をうろうろ飛んでたらしい。　今は浦賀水道上空だ。　羽田に引き返せ、距離的にはそこしかない」

「元からそのつもりよ」

アリアが武藤に返す

「操縦はどうしてる！　自動操縦は決して切らないようにしろ」

「自動操縦なんてとっくに破壊されてるわ！　今はあたしが操縦してる」

くそ、理子め！　自動操縦まで破壊することないだろ！まずいぞこの状況は

「というわけで着陸の方法を教えてもらいたいんだが・・・」

「すぐに素人ができるようなものではないのだが・・・現在近接する航空機との緊急通信を準備している。　同型機のキャリアが長い機長を探して・・・」

「時間がない近接する航空機との全ての通信を開いてほしい。　できるか？」

「い、いやそれは可能だがどうするつもりだ？」

「彼らに着陸の方法を1度に言わせるんだ。　武藤も手伝ってくれ」

「一度にってキンジ聖徳太子じゃないんだから」

「できるんだよ。　今の俺には！　いいからやってくれ」

アリアが驚きの様子でキンジを見ているのが分かる。

ああ、キンジお前はやっぱりすげえよ。

お前は武偵になるべくして生まれてきたんだからな

やめるなんていうなよ。

一気にしゃべる機長達の言葉は俺はわずかに拾っただけだがキンジは理解したらしかった。
こいつなら羽田に着陸は可能だろう。
ああ、疲れた。
俺がそう思った瞬間
「こちらは防衛省。　航空管理局だ」
な、何！防衛省だと！
「羽田空港の使用は許可しない。　空港は現在自衛隊により閉鎖中だ」
「何いってんだ！」
叫んだのは武藤だ。
「誰だ？」
「俺は武藤剛気！　武偵だ！　６００便は燃料切れを起こしてる！　飛べてあと１０分なんだよ！　ダイバードなんてどこにもねえ！　羽田しかねえんだよ」
「武偵武藤。私に行っても無駄だぞ。　これは防衛大臣の決定なのだ」
嫌な予感がして横を見ると俺は絶句した。
Ｆ１５イーグル。

F２２を除けば最強クラスの戦闘機が横を飛んでいる。

「おい、防衛省。　あんたのお友達が横を飛んでるんだが・・・」

「それは誘導機だ。　誘導に従い千葉にむかえ。　安全な着陸場所を指定する」

キンジが通信を切る。

「海に出るなアリア、あいつらは嘘をついている。海に出たら撃墜するつもりだ」

「向こうがその気ならこちらも人質を取る。アリア、地上の上を飛ぶんだ」

だが防衛省を排除しないと危険は付きまとう。

嫌だが頼るしかなさそうだな・・・

「キンジちょっと電話するぞ」

「優？」

俺は副操縦士の衛星電話を使い電話する。

コールは３

「はい、椎名でございます」

懐かしい声を聞き俺は口を開いた。

「俺だ。　椎名　優希だ」

「ぼ、ぼっちゃま！？」

電話の向こうから驚愕したような声が帰ってくる。
スピーカーモードなのでアリアとキンジもこちらの声を聞いている。

「時間がない。　かあ・・・志野さんはいるか？」

「当主様は今、部屋にいらっしゃいます。　しかし、ぼっちゃまとは・・・」

「代われ！　時間がない！　東京のハイジャックの飛行機に俺がいると伝えろ！」

「え？　は、はい！」

時間にして３０秒。
もう、２度と会いたくないと思っていた声が聞こえてくる。

「何の用です？」

「お久しぶりです。　志野さん。　時間がないので手短にいます。
羽田の自衛隊と隣接するイーグルの退去をお願いします」

アリアとキンジが目を見開くのが見えた。
電話の相手はそれほどの権力者なのか・・・

「椎名面汚しが・・・」

吐き捨てるような声が電話のむこうから響いた。

「俺が死ぬとあなたたちには不都合でしょう？　大丈夫。　東京に突っ込むなんてことにはなりませんよ」

「イーグルの退去はすぐに可能ですが自衛隊の退去は２０分ほどかかります」

その数字に俺は絶句する。
間に合わない。

「この飛行機は後、１０分しか飛べないんだ！５分でなんとしてほしい」

「不可能を可能とは言えません。　努力はしましょう」

電話が切れる。
ちくしょう。
俺は衛星電話を叩きつけて隣をみた瞬間、Ｆ１５が遠ざかっていくのが見えた。

「あんた何者なのよ？　自衛隊を下がらせるなんて・・・」

「そんなことは今はいい。　羽田は駄目だ。　キンジ何か案はあるか？　武藤、なんとか２０分以上飛ばせる方法はないのか？」

「ない、１０分しか飛べねえよ」

「武藤、滑走路にはどれくらいの距離が必要だ？」

「まあ、２４５０メートルだな」

「そこの風速は分かるか？」

「風速？　レキ学園島の風速は？」

「私の体感では南南東の風風速４１．０２」

レキいたのかよ

「じゃあ、武藤、風速４１メートルに向かい着陸すると滑走距離は何キロになる？」

「まあ、２０５０ってとこだ」

「ぎりぎりだな」

「おい、キンジまさか・・・」

「違うよ優。　浮島だ」

「できるのかキンジ？」

俺が聞くとキンジは頷いた。

「できるさ優の好きな武偵憲章の通りさ」

「へっ、武偵憲章第１０条、諦めるな！武偵は決して諦めるな！だな」

そうだ。
俺は死ぬわけにはいかない。
アリアもだ。
俺達は諦めるつもりはないんだ。

「あんたちなんかと心中なんてお断りよ」

アリアはべーっと舌をしだしてくる。

「待て、キンジ空き地島は雨でぬれてる！　２０５０じゃ着陸できねえぞ」

「そこはなんとかする」

「か、勝手にしやがれ！　しくじったら引いてやるからな」

叫ぶと武藤は切れたのか教室のみんなにわーわー叫ぶと電話を切ってしまった。

俺は死なない。だから、キンジ、アリア、お前たちに俺の未来を預けるぜ

第２３弾　風穴あけるわよ！

あと、３分
短い滑走路を着陸するためには減速しなくてはならないこともあり
６００便はいらただしいほど悠々と東京ドームを飛び越え東京駅、
銀座と渡っていく。
ここまできたら俺ができることはほとんどない。

「アリアこの機は東京タワーより高く飛んでいる。　くれぐれもぶつけないでくれよ」

「馬鹿にしないで！」

車輪を出すとアリアはキンジに操縦を明け渡した。
頼むぜ。キンジヒステリアモードのお前ならできるさ
だが、次の瞬間俺はキンジが冷や汗をかいているを見る。
ヒステリアモードだろ？
やはり、お前でも見えないか？
そう、着陸すべき場所は闇に包まれている。
浮島なんてまるで見えていないのだ。

「キンジ大丈夫あんたならできる。　できなきゃいけないのよ！
武偵をやめたいなら武偵のまま、死んだら負けよ。　あたしだって、
まだママを助けてない」

そうだな。
まだ、俺も死ねないんだキンジ

「俺もまだ、やることがある。　絶対にやると決めたことがな。
だから、俺達は死ねない」

「そうよ！　こんな所で死ぬわけがないわ」

その時、ベイブリッジの手前にある空き地島に光が見え始めた。

「キンジ見えてるか馬鹿野郎！」

「武藤！？」

「お前が死ぬとしらゆ・・・いや、泣く人がいるからよぉ！　俺ロジで一番でかいモーターボートぱくっちまったんだぞ！　アムドのマグライトも！　みんなで無許可で持ち出してきたんだ！　後で全員分の反省文をお前らで書け！」

その会話に続けて通信に次々と割り込みがあった。

「キンジ！」　「優！」　「機体が見えてるぞ！」「後少しだ！」

この声・・・どこかで・・・いや、だがありがたい。
誘導灯を作ってくれたことに感謝しながら俺は２つの武偵憲章を思い出す。

仲間を信じ仲間を助けよ

諦めるな！　武偵は最後まで諦めるな

この２つを最後まで押し通せたからできた奇跡なんだこれは
後は生き残るだけだ

６００便は強行着陸を断行した。
衝撃が機体を襲い、メガフロートを滑っていく。

「止まれ止まれ！　止まれ！」

アリアのアニメ声に合わせるように俺も心の中で止まれと連呼を続ける。
キンジの操作を受けて機体がカーブする。
そこにきて俺はようやくキンジの思惑を知った。
たく、かなわねえな。
目前に迫った風力発電の風車に機体が突っ込んだ。
ドオオン
とすさまじい衝撃に上下に俺達は揺られ俺は意識を失った。

いてて
がんがんする頭をなでながら俺は自分が狭い所にいることに気付いた。
前にいするがあるから操縦席・・・ってえええ！
なんと、俺の前にあったのはトランプ柄の・・・
っと思った瞬間、スカートにその部分は隠される。
あ、やばいでれない。
てか、今のってアリアの・・・あれだよな。

幸い気絶してるみたいだが・・・
ああ、もういいわ。　今回の護衛はこれでおしまい。
じゃあな
張りつめていたものが消え俺は再び意識を手放すのだった。

ハイジャック事件も終わった後日、全治1週間延長と救護科にどなり散らされ俺は解放された。

「あんた知ってただろ理子が武偵殺しだってこと」

「そこまで私は万能ではないよ。　全ては推理に基づき君に行動を促したに過ぎない」

俺は男子寮の屋上で例の依頼主様と電話をしていたのである。
護衛の報告を兼ねて

「武偵弾は助かったけどな。　敵うなら理子がアリアを狙う中で一番強い相手で会ってほしいけどどうなんだ?」

「世の中には君が本気で戦わないと決して勝てない相手はいるとだけいっておこうか」

「つまり、理子以上の奴がこれからアリアの前に立ちふさがるってか？」

「彼女が相手にするイ　ウ―の全貌は私も掴めてはいない。　だが、武偵殺し以上の実力者がいても不思議はない」

「まじかよ・・・」

つまり、これから俺はもっと強い相手と命がけで多々敵わないといけないわけだ。

「ありがとう。　椎名　優希、君の護衛はこれで終わりだ」

「ああ、これからも・・・って　は？　終わり？」

「アリアはイギリスに帰る。　だが、君には選択の余地がある。アリア護衛を続けたいなら・・・」

電話を切った俺は屋上から飛び降りていた。

ワイヤーを使い巻き戻しと発射を続けながらいつの間にか来ていた

携帯のメールを開いた。

『題名　ありがとう

　本当は直接あって言いたかったんだけどあんた・・・ううん、優の電話通じなかったからメールする。　あたしね・・・イギリスに帰ることにしたの。
パートナーを探しにね。　本当は優やキンジならよかったんだけど・・・優、あなたと理子の戦い見ていた乗客がいたの知ってる？　あたしを一度は倒した理子相手に互角以上の戦いをした優がいなければあたしやキンジは死んでたかもしれない。
ありがとう。
もし、パートナーになってくれる気があるなら・・・
また、会いに来て。
その時は、もう奴隷なんて呼ばない。
だから・・・』

アリア・・・アリア

「女子寮の屋上だ。　そこからアリアはイギリスに帰る」

依頼主の情報が頭に反映する。
ＵＦＯキャッチャーをむきになって遊んでいたアリア
かなえさんを助けられなくて子供のように泣いていたアリア
俺達を奴隷といいながらも楽しそうに笑っていたアリア

その少女が血だまりに倒れた光景が頭に浮かぶ

「君が本気を出せないならアリアは死ぬ」

依頼主さんよ。
分かったよ。
俺はアリアのそばにいる。
パートナーなのかチームメイトなのかはわからない。
第2グランドに着地した俺は駆けだす。
空を見上げるとヘリが着陸してくる所だった。
そして、俺の前には走る少年の姿があった。
俺はその横に並び驚いた顔をするキンジと同時に頷くと空に向かい叫んだ。

「「アリアぁあああああ！」」

変化はない。
走りながら行くなと2人で思いながら大声で叫ぶ

「アリアぁ！」

屋上に誰かが立っている。
そのツインテールの少女は俺達を見下ろしながら

「優！　キンジ！　遅い！」

あの時と同じように屋上から飛び降りた。
ワイヤーで降下してくるがその動きが寮の半分ぐらいで止まった。

「あ、あれ？」

動作不良を起こしたのかそれ以上動かない。
屋上におそらくイギリスの武偵局の人間が見える。
一瞬、やり合うかと思うが相手は部外者だ。
アリアのワイヤーに手をかけて引っ張ろうとている。

「キンジ！　アリア受け止めろ！」

「お、おい優！」

俺はアリアの上に向かいワイヤーを発射したがガガガと手に衝撃が走りワイヤーが失速しアリアの下に突き刺さってしまう。
げっ！動作不良かよ！　理子の時、無茶に使ったからなぁ。
イギリスの武偵局の人間がアリアのワイヤーを引き上げ始めた。
アリアは小太刀でワイヤーを切断しようとしているがイギリスの人間はワイヤーを巧みにゆらしてそれを妨害する。
アリアの下の壁に張り付いた俺は

「アリア！　動くな！」

ドドドン

三連射でアリアのワイヤーを切断する。

「キャッ！」

かわいらしい悲鳴をあげて落ちてくるアリア

空から女の子が落ちてくると思うか？
少なくても俺は2回経験したな。

ドンと俺の腕に落ちてきたアリア、同時に俺のワイヤーが壁から外れてしまう。
ちなみにここは3階の高さだ。
ハハハ、落ちたらやばいよな。

「優！　アリア！」

衝撃と共に下からぐえっという蛙がつぶれたような声が聞こえた瞬間俺も、腹に圧迫を感じてぐえっと言ってしまう。

「っ・・・」

「いたたた・・・」

「ば、馬鹿キンジ！　馬鹿優！」

アリアが犬歯をむき出しにして怒るが同時に俺は心の底から笑みがこみあげてきた。

「くく、フフフ、アハハハハ！」

また、救護科に怒鳴りつけられるであろう手を見ながら俺は笑った。

「な、何笑ってるのよ。馬鹿優！」

「いや、アリアお前といると飽きないな。　なってやるよ。　俺とキンジのセットでパートナー兼チームメイトだ」

「お、おい優！」

「そのつもりで来たんだろ？　今更隠すなよキンジ」

図星なのかキンジは黙ってしまう。

「キンジ、あなたには何かをスイッチにして高まるスイッチがある。それがなにかはあたしにはわからない。　あんたも制御できていない」

「・・・」

「でもね、今思いついたのなら、制御できるように調教してやればいいんじゃない。　簡単なことじゃない」

「ちょ、調教！？」

「アハハハ！　ご愁傷様だキンジ」

「あんたもよ優」

「へっ？　俺？　俺にキンジ見たいなスーパーモードなんか・・・」

「メール見たでしょ？　乗客があんたの感じがいきなり変わったって言ってるのよ」

げっ！　そこまで見てたのかよ！

あれは暗示なんだが実は極度に空間認識能力を要求される多数のワイヤー戦術は極限まで集中力が高まっていないと使いこなせない。

「つまり、２人とも常時そのスーパーモードを出せるように調教が必要なのよ」

「ちょっ！それは物理的に・・・は可能かもしれんが倫理的には無理だ！」

「俺も勘弁してくれアリア！」

「男が二言するんじゃないわよ！」

「「してねえよ！」」

「うるさいうるさーい！　あんた達をあたしのパートナーにして曾おじいさんみたいな立派な『H』になるの！　そう決めたんだから」

「だからなんなんだそのHは！」

「まだ、分かってなかったの！　ギネス級の馬鹿！馬鹿の金メダル！」

なんだよ馬鹿の金メダルって！

「もう、あんた達で決定したんだから教えてあげるわよ！　あたしの名前は―」

アリアは犬歯を向くとぐいっとない胸を張りながら

「神崎・ホームズ・アリア」

「ほ、ホームズ！」

「そう、あたしはシャーロック・ホームズ４世よ！　で、あんた達

はあたしのパートナーワトソンの位置づけに決定したの！　もう、逃がさないからね！　逃げようとしたら！」

依頼主さんよ。　この子やっぱり面白い子だよ。

「風穴あけるわよ！」

第２４弾　ヤンデレ強襲

深々とその金属は肉を貫いて彼女の意識を奪っていく。
目を見開く少年は泣き叫びながらその相手の名前を呼び続ける。
相手は口元に微笑みを作り俺の頭をなでて力なく崩れ落ちた。
そして、相手の背後には炎の中たたずむ紅の瞳を持つ銀の髪をした魔女がいた。
妖艶な笑みを浮かべながら女は笑う。

「おいしそうですわ。　でも、今は食べ頃じゃありませんの。　いつか、会いにいきますわ。優希」

ハイジャック事件から5日後、救護科にＯＫの診察を受けてから俺はクエストを受けて学園島の外、東京の街中に来ていた。
どこぞの金持ちの坊ちゃまの護衛任務だったのだが特に何かおこるわけもなく。

終わってしまった。
アリアやキンジを誘いたいところだったが募集はアサルト1名だったのでやむおえず来たのだが・・・

「さて、これからどうするかな?」

腕時計を見ると午後6時、空も暗くなりつつあるこの時間、珍しいのかどうか知らんが武偵高の制服に身を包む俺をちらちらとみてくる人を適当に無視しながら歩き出す。
晩御飯どうしようかな?
うーん、さっさと帰ってコンビニ弁当ですますか?
よし、そうしよう。
アリアもいるだろうしな。
実は、アリアはあのハイジャック事件の後、キンジの部屋に戻ってきてしまっている。
俺とキンジの切り替えモードの鍵を探るのが目的らしいが・・・
ああ、いいたくねえ
切り札は隠すからこそ意味があるんだからな。
同居は勘弁してくれと言うキンジに理子を捕まえてないから武偵殺しの件は解決してないと言われてしまいキンジはしぶしぶ納得したのだ。

「や、やめてください!」

ん?
そんな声が聞こえた俺は路地の裏の方から聞こきえた方を見る。
断片的だが男の集団と女の声が聞こえてくる。
なんだよ
一瞬、無視するという選択肢がよぎるがこういう時、俺は動かずにはいられない。

路地に入ると予想通り3人の柄の悪そうな男たちが女の子を囲んでいた。

「おい、お前らやめろよ」

「ああ？　なんだてめえは？」

鼻にピアスを開けてサングラスをつけモヒカンというあり得ない格好の男が俺に酒臭い息を吹きかけてくる。
くせえな

「その子、嫌がってんだろ？　やめてやれよ」

「ハハハ、勇敢な子でちゅね。　でも、正義の味方ごっこなんかしたら死んじゃいまちゅよ」

馬鹿にしたようにＵＳＡと帽子をつけた髭の男が俺に向かいいきなり、メリケンをつけて殴りかかってきた。
理子のナイフの一撃と比べりゃ止まって見えるな。
最低限の動きでそれをかわすと俺は男の後ろに回り込むとワイヤーで男の首を軽く絞めた。

「ひっ！」

男が小さな悲鳴を上げる。

「の、ノリちゃん！」

モヒカンの男が仲間を助けようと動こうとする。

「お前らが動くよりこいつの首を千切れ飛ばすほうが早いぜ？」

「や、やめ・・・」

ノリちゃんという男が仲間を止める。
そうそう、いい子だ。
ぎりぎりと力を強め、首を絞めながら

「なあ？　帰ってくれないか？　お前らが束になっても武偵高のアサルトの人間には勝てねえよ」

「こ、こいつ武偵か？」

今更気付いたらしくモヒカンが悲鳴を上げる。

「なあ？まだ、やるか？」

戦闘狂の笑みを浮かべる。
あの暗示はかけてないが顔だけなら演技は可能だ。
この手合いは圧倒的な戦闘力を見せつければ逃げるからな。
ぎりぎりと力を込めるとノリちゃんはこくこくと頷いてきたので解放してやる。

「げほげほ！　ちくしょう覚えてろ！」

慌てて逃げて行ってしまう3人
おお、王道なセリフだな
さてと
俺は、女の子の方を見た瞬間、その子はいきなり俺に頭を下げてきた。

「あ、ありがとうございます！助けていただいて！」

「い、いや気にするな」

どもったのはこの子めっちゃ美人なんだよ。
大きな黒い瞳に栗色の髪は肩までのツインテール。
理子やアリアと違い、子リスを想像させる容姿だった。

「じゃあな。　後は一人で帰れるだろ？」

時計を見ながら立ち去ろうとすると

「あ、あの名前！」

「ん？」

「名前を教えていただけませんか？」

名前ぐらい構わんかな？

「武偵高アサルト2年、椎名　優希だ」

それだけいうとさっさとその場を後にする。
美少女との出会いは嬉しいんだがさっさと帰らないとアリアに逃げただのと言われるからな。

繁華街の喧騒の中、栗色の髪の少女は彼の後姿を見ながら

「椎名・・・優希・・・先輩・・・た」

小さくつぶやいた。

ドオオンバリバリバリ

な、なんだ！

ようやく、学園島に戻り、ものすごい音が聞こえたのでキンジの部屋に飛び込むと俺の目の前を４５ＡＣＰ弾が通り過ぎて行った。

「うお！」

慌てて、外に飛び出すと中から

「この泥棒猫！」

「なんなんなのよ！」

と、アリアのアニメ声と・・・

「し、白雪だと！」

あのキンジ大好き好き好き好き大好き！のヤンデレさんということは・・・

キンジとアリア同居→キンジをアリアに取られた→許すまじアリア抹殺！キンちゃんだまされないで！

分かりやすい。

なんてわかりやすい構図なんだ。

というかこれを止められるキンジは・・・

ああ、防弾物置に退避しやがったな。

一瞬、依頼人との護衛の話を思い出すがまあ、こいつは別に大丈夫だろう。

「うう！　この泥棒猫！　キンちゃん様から離れろ！」

「この！風穴あけてやる！」

ホームズＶＳバーサーカー白雪ね・・・止められるわけないだろ・・・

部屋の中は戦争のような銃撃戦と暴れる音が聞こえるし

命がいくらあっても足りねえよ。

俺はため息をついて戦いが終わるまで廊下で携帯をいじる。

ま、そのうち終わるだろ

第２５弾　優希絶体絶命！対ヤンデレの危機

ん？静かになったな。
戦争映画のような音が止んだので部屋に入ると壁のいたるところに弾痕や刀傷ができている。
っておおい！俺のＰＳＰが真っ二つになってるぞ！
で、原因の２人は髪の毛はばさばさ服は乱れに乱れ汗やほこりにまみれて東西の美少女が台無しと言う格好で力尽きていた。
予想通りベランダからキンジが出てきたので

「ただいまキンジ」

「おう」

２人で挨拶してから

「はぁはぁ・・・なんて・・・しぶとい泥棒猫」

白雪は日本刀を杖のようにしてなんとか立っている。
ああ、床が刀の傷が・・・まあ、俺の部屋じゃないがな。
悲しかな。
武偵高の寮ではこんな傷珍しくない。
まあ、アサルトほどじゃないんだが・・・

「あ、あんたこそ・・・とっととくたばりなさいよ・・・はっ・・・ふうう」

アリアは尻を床につけ両手を床につけて体を支えている。
つまり、引き分けだな。

「―キンちゃん様！」

キンジがでてきたことに今気付いたらしい白雪が刀を横においてよろよろとその場に正座しなおした。

俺のことは気付いていないのか無視してるのか背を向けている。

悲しい。

両手で顔を覆いながら

「し、死んでお詫びします！　き、キンちゃん様が私を捨てるならアリアを殺して、わ、私もここで切腹してお詫びします」

いやいや、待て白雪！アリア殺すなら俺が戦わないといけないだろ！嫌だぞ俺は！ヤンデレと戦うのは！　負けたらキンジはヨットで首だけか？

「あ、あのなー捨てるとか何言ってんだ？」

そこで白雪の気持ちに気付かないお前はどうなんだ！

「だ、だってハムスターもオスとメスを同じかごに入れておくと自然に増えちゃうんだよぉ！」

「意味がわからん上に飛躍しすぎだ！」

白雪が泣き顔を上げる。

「アリアはキンちゃんのこと遊びのつもりだよ！　絶対にそうだよぉ！」

「ぐえ！ぐえぅ！首を掴むな！」

しかたねえ助け船をだしてやるか

「なあ、白雪」

「え？　優君？」

その声で初めて俺に気付いたらしい白雪が俺を見てくる。

うう、なんか悲しくなる

「アリアとキンジが同棲してるって思ってるんだろ？　大丈夫だ俺もここに住んでるがそんなことはないから！」

「本当？　優君？」

嘘だったら殺すからねという目はやめてください・・・お願いだから

「あ、ああ本当だ！　なあキンジ！」

「なんなのよあんた」

「キ、キンちゃんと恋仲になったからっていい気になるなこの毒婦！」

あああああ！アリアの馬鹿野郎！　せっかく白雪が落ち着きかけたのに逆戻りじゃねえか！

白雪はキンジを床に放り投げると袖に仕込んでいた鎖鎌をアリアに投げつけた。

おお！　俺のワイヤーに似てる隠し武器だな。

「こ、恋仲！」

アリアは漆黒のガバメントでそれを受けながら
鎖の引き合いになる。

「ば、馬鹿いうんじゃないわよ！　あ、あたしは恋愛なんかどうでもいい！」

ラブ関連が大の苦手のアリアがぶあああと顔を真っ赤にしながら

「れ、恋愛なんか・・・あ、あんなの時間の無駄！　したこともないしするつもりもない！　あ、あこがれたこともないんだから！　憧れたこともない！　憧れたりしない！」

「じゃあ、アリアはキンちゃんのなんなの！　恋人じゃないの！」

「そういう関係じゃないィ！」

声を裏返させるアリア

「キンジと優はあたしの奴隷！　奴隷にすぎないわ！」

なんで俺も含まれるんだ！
てかアリア！お前俺たちのことを奴隷なんて言わないと言っただろ！あれはどうなった！

「ドっ、ドっ、奴隷！？」

白雪はあんぐり口を開けたと思うと顔を真っ赤にする。

「そ、そんな行けないあそびまでキンちゃんにさせるなんて」

もはや俺のことは無視だな・・・泣いていい？

「な、何馬鹿なこと言ってるのよ！違うわよ！　優も何か言いなさいよ！」

俺か！

「し、しら・・・」

「違わない！　私だってその逆なら考えることあるもん！」

俺の存在無視ですか・・・

「違う違うちがーう！　キンジ！」

俺が床に突っ伏して無視しないでと泣いているとアリアはキンジを睨みつけている。

「このおかしな女がわいたのは１００％あんたの責任よ！　何とかしなさい！　そうしないと後悔させてやるんだから！」

「えーとだな・・・おい！白雪」

「はいっ！」

呼ばれた白雪はばっと鎖鎌をはずしてキンジに正座し直す

反動でアリアがひっくり返ったがまあいい

「よく聞け。アリアと俺は武偵同士一時的にパーティーを組んでいるにすぎないんだ。優も含めて3人でな」

「・・・そうなの？」

「・・・そうだぞ白雪。　お前、俺のあだ名知ってるだろ？　言ってみろ」

「・・・女嫌い」

「だろ？」

「あと、昼行灯」

「それは今、関係ない」

「は、はい」

「というわけでお前のよくわからない怒りは誤解であり無意味なんだ。　大体俺がこんな小学生みたいなチビと」「風穴」「そんな仲になったりするわけないだろ？」

ハハ、キンジアリアを無視しやがった。

「で、でもキンちゃん」

「ん？」

あれ？　白雪がキンジに口応えなんて珍しい

「なんだ？」

「それ」

白雪の手がキンジの携帯のストラップのレオポンを指してからアリアのポケットからやあと突き出しているレオポンを指さして

「ペアルックしてるぅううう！」

涙を流す白雪

ペアルック？

ああ、あれか！　カップルが同じものを持つ・・・

「ペ、ペアルックは好きな人同士ですることだもん！　私、私何度も夢見てたのにぃ！」

「待て！白雪さん！　俺もだ！ほらほら！」

慌てて誤解を解こうと俺もレオポンを見せるのだが

「だーからぁ！　あたしとキンジは1ピコグラムもそんな関係じゃないのよ！」

ええい！　アリアまでか！無視するな！俺泣くぞ！

「こら白雪！」

おお、キンジが白雪の肩を掴んだぞ。
さっさと収束させろ幸せ者！

「お前、俺のいくことが信用できないのか！」

「そ、そんなんじゃないよ！　信じてます。　信じてますっ」

ふう、ようやく終わりだな。
しかし、白雪はキンジとアリアを見回して

「じ、じゃぁ、キンちゃんとアリアはそういうことはしてないのね？」

「そ、そういうことってなんだよ？」

「き、キスとか？」

「・・・」

「・・・」

黙り込んでしまう2人

「おい！お前らまさか！」

「・・・し・・・た・・・の・・・ね？」

俺が問い詰めるより早く絶対零度を感じたので俺は後ずさった。

ふふふと虚ろな笑い声まで聞こえてくる。
駄目だ・・・勝てるわけがない。
こいつとは戦いたくない。

「そ、そういうことはしたけど」

馬鹿野郎アリア！　その言葉は炎の仲に火薬を投げ入れるみたいなもんだ！

「で、でででも大丈夫だったのよ！」

？

「昨日分かったんだけど、こ、ここ」

「子供はできてなかったからあああああ」

チーン
な、なんだ今の音？

白雪がどてっと後ろに倒れ魂が抜けてしまう

「おい、アリア！キスで子供ができるかよ！」

さすがに見かねたおれがいうと

「こ、この馬鹿キンジ！　あたしあれから人知れず結構悩んだのよ！」

「な、何に悩むんだよ」

「だ、だってキスしたら子供ができるって子供の頃、お父様が・・・」

おい！ホームズ家！ちゃんと教育ぐらいしろよ！いまどき小学生でも知ってるぞ！

「あんなことで子供ができるわけないだろ！　小学生でも知ってるぞ！　そんなこと」

「何よ何よ！　じゃあどうやったらできるか教えなさいよ！」

「教えるかこの馬鹿！」

教えられるわけないだろ！
そんなことしたか風穴じゃすまないしな

ぐぬぬとにらみ合う2人を見ながら俺が白雪を見るとその姿は煙のように消えていた。
おいおい、どうなるんだよこれ・・・
まあ、刺されて死ぬなよキンジ
俺は知らないからな！お前の護衛は請け負ってないし・・・ってアリアが狙われたら俺が白雪と戦うのか！勘弁してくれ！

第２６弾　昼食の一時

とまあ、あれから俺と白雪が激突すると言うことはなく平和な日々が過ぎていた。
朝の５時に起きて鍛錬してキンジ達と登校といういつも通りの時間を過ごしたとある日の昼休み

「椎名君、遠山君。　ここ、いいかな？」

がやがやとうるさい学食の中、俺が焼肉定食、キンジがハンバーグ定食、アリアが持ち込みのももまんを食ってたら目の覚めるようないけ面男が話しかけてきた。
優男スマイルをして椅子に座るこいつは不知火亮。
何度かパーティーを組んだことがあるがこいつはバランスがいいから結構組むのが好きだ。
アリアやキンジと組む前ならよく、クエストに誘っていたりする。
基本的にこいつすごい、いい奴なんだよ。
彼女がいないのが疑問だな。

「聞いたぜキンジ、優ちょっと事情聴取させろ」

キンジを押しのけるように入ってきたのはロジの武藤だ。
ああ、こいつには借りがあるんだよなめんどくせ

「なんだよ事情聴取って」

キンジが聞く

「キンジお前、星伽さんと喧嘩したんだって？」

ははぁん？　武藤の野郎白雪が好きだから探りを入れてやがる。
俺は笑みを浮かべながら肉を口に入れる。

「星伽さん沈んでたみたいだぞ？　どうしたんだ？」

「白雪とはどうしたも何も・・・武藤お前、白雪見かけたのか？」

「今朝、温室で花占いしてたのを不知火が見たって言うからよ」

「ポピュラーじゃないか」

不知火が言う。

「知らねえよ。　優、アリア聞いたことあるか？」

アリアが知らないと首をふりふりした。
ももまんを食ってるから静かだなアリア

「あれだろ？　花弁ちぎりながら好き嫌いって奴」

俺が不知火に言うと不知火はにこりとして

「うん、それだよ」

いまどきそれをやるか？　あの大和撫子さんは・・・

「僕にみられて気付いたのと。１時間目の予鈴がなったのとで占い自体は中断したけど。　なんか涙ぐんでるみたいだったよ？　で、なんで別れちゃったの？　もう、愛がさめちゃったとか？」

うきゅぅとアリアがももまんを詰まらせる音がした。
いちいち可愛いなお前

「あのなぁどこでどう話がこじれてそうなるんだ？　そもそも俺と白雪はそういう関係じゃない。　ただの幼馴染だ」

「幼馴染かぁ。　はぐらかし方としてはポピュラーな選択肢だね。
噂では独占欲の強い神崎さんがやきもちを焼いて星伽さんに発砲したって聞いたよ？　だから、僕の読みは神崎さんが椎名君と遠山君を独占しようとして、女子二人が決闘したってセン。　だって神崎さん遠山君と椎名君のことアサルトで楽しそうに話してるもんね」

そこで俺に振るな不知火！
俺のいないとこだろそれは！
アリアは一気にももまんをほおばると

「こ、こっ、この変態！」

「ぐっ！」

「痛て！」

キンジの顔面にパンチ、俺の膝にけりを入れてきたアリア
痛いだろうが！殴るなら不知火を殴れ！

「ハッキリいっておくけどねぇ！　あたしが白雪を追い払ったのはや、やきもちとかそういうんじゃないの！　あたしとキンジと優はパートナー！　す、好きとかそういうんじゃない！　絶対絶対そういうんじゃない！　これは本当に本心の本音よ！」

「へぇ、そうなんだ。　じゃあ、遠山君。　星伽さんと復縁の可能性もあるってこと？」

「復縁ってなんだ復縁って！　ていうか不知火さっきの話だがな。今朝の予玲の時には俺と一般校区の廊下で出くわして挨拶もせず女子トイレに逃げ込んでるんだよ！　だから何かの間違いだ。　それに仲直りしないなんて、お前の個人的意見なんて求めていないだろ！」

「そういえば、そうだったね。ごめんよ」

にこりとしつつ、アリアに遠山君機嫌悪いねとか言ってるな。

「そういえば、不知火、優」

「ん？」

俺は顔を上げる。
強引に話題変える気だなお前

「お前らアシアードはどうする？　代表とかに選ばれてるんじゃないのか？」

アシアードとはまあ、簡単に言えばインターハイみたいなもんでスナイプやアサルトのオリンピックみたいなもんだ。

「たぶん、競技にはでないよ。　補欠だからね」

「俺はガンシューティング代表補欠が回ってきたけど辞退した」

「じゃあ、イベント手伝いか？　何をするんだ？　何かやらないといけないんだろ？、手伝い」

「まだ、決めてなくてねぇどうしようか？」

「アリアはどうするんだアシアード」

「あたしは競技にはでないわよ。ガンシューティング代表に選ばれたけど辞退した。

「優の補欠はアリアのかわりなんだな」

「まあな」

キンジの問いに答えてやる。
まあ、出てもいいんだが護衛の観点から言えばアリアが辞退したなら辞退すべきだ。
練習もめんどくさいからな。
鍛錬だけでいい。

「じゃあ、お前もイベント手伝いか？何やるか決めたか？」

「あたしは閉会式のチアだけやる」

「ああ、アル＝カタか」

アル＝カタは拳銃を組み合わせてやるダンスだ。
女子はチアと呼ぶんだが・・・

「優とキンジもやりなさいよ。どうせ手伝いなんでもいいんでしょ？」

「あ、ああ」

「別にいいよ」

アリアの護衛と言うがまあ、襲撃もないだろ
別に一緒にいても問題はない。

「音楽か・・・得意でも不得意でもないしそれでいいか」

「あ、遠山君と椎名君がやるなら僕もそれにしようかな？　武藤君も一緒にやろうよ」

「バントかぁ、かっこいいかもなよしやるか！」

ノリがいいな武藤

「でも、神崎さん、椎名君、代表を辞退するなんてもったいない。ポピュラーな話だけど知ってる？　アシアードのメダルを持っていると、人生バラ色になるんだ。　武偵大も推薦で入学できて、就職にも有利。　武偵局にはキャリア入局できるし、民間の武偵企業だって一流どころの内定がよりどりみどりだって話しだよ？」

「そんな先のことはどうでもいい。　あたしは今すぐやらなきゃいけないことがある。　協議の練習なんてでている暇なんてないわ」

「俺もだ。　俺もやらなきゃいけないことがある。　練習にはでれ

ないんだよ」

あの、銀髪の魔女を捕まえる。
だから、俺は強くなる。
そして、アリアの願いであるかなえさんの無実の証明とアリアの護衛。
競技なんて出る暇はねえよ。

「アシアードなんかよりもね！」

ん？

「キンジ、優あんたちの調教が先よ」

「ち、調教！　お前ら変な遊びでもしてるんじゃないだろうな！」

「してねえよ！」

「そうだ！　白雪と似たようなことをいうな武藤！　後、アリア、人前では訓練と言ってくれ！」

「うるさい！奴隷なんだから調教！」

アリアさん！あなた奴隷とか言わないと言ってませんでしたか・・・

「ていうか調教って何するつもりなんだ具体的には」

「んー、そうね。　明日から毎日一緒に朝練しましょ」

ハハハ、キンジ顔が引きつってるぞ。

まあ、朝連は前からしてるから俺は慣れてるけどな。
俺がそこまで思った時。
いきなり、俺の視界が闇に包まれた。

「だーれだ♪」

アリアじゃねえよな？　誰だろう？

第27弾　私の○○になってください

「誰だよ」

「私です♪」

俺が振り返ると見覚えのある少女が武偵高の制服を着て笑顔で立っていた。

「あ、お前・・・」

「椎名君の彼女かな？　神崎さんがいるのに隅におけないなぁ」

おい、にこりとして言うな不知火！

「残念だけど違います！　私、先日、椎名先輩に助けてもらったんです」

「そうなのか？」

完全に話題が飛んだのでキンジが言ってくる。

いまが話題を変えるチャンスだとか思ってんだろキンジ！

「護衛のクエストの帰りにな。　あり得ないモヒカンの連中に絡まれてたから助けただけだ」

「もう！　椎名先輩かっこよかったんですよぉ！　相手の首を絞めて生きるか死ぬか選べって！」

ぶんぶんと右手を振りながら言う少女
いちいち動きがでかいなこの子

「ゆ、優お前こんな可愛い後輩と！」

「椎名先輩！　お弁当作ってきたんです！　どうぞ！」

「え？　俺、焼肉定食食い終わったばか・・・」

「どうぞ！」

ずずいと可愛いバラのマークが入った弁当箱を渡してくる。
助けてくれとアリアを見るがアリアは俺を睨んでいる。
ももまんを口にしながら・・・

「あ、ああ・・・」

退路は断たれた。
俺は弁当箱を受け取りながら

「所でお前、名前は？」

よく聞いてくれましたとばかりに栗色の右のサイドテールを揺らしながらびしと生徒手帳を見せてくる。

「1年B組　ダギュラ！　紅　真里菜です！　マリって読んでくださいね椎名先輩♪」

ダギュラっていや尋問科だ。

あの科は犯人を自白させるのにあらゆる技術を叩き込む。
俺は教師の綴梅子のことを思い出しながら

「じゃあ、マリお礼ならいらないぞ？　ああいう、クズを倒して報酬もらってたんじゃ俺の部屋弁当だらけになっちまうよ」

そういいながら弁当箱を開いた。

「う・・・」

「うわ、すごいね」

「これは・・・」

不知火とキンジが絶句している。
アリアも覗きこんでボンと顔を赤くする。

「なんだよ。俺にも見せろって・・・おお」

武藤でさえ目を丸くしているぞ。
何せ、ノリでＬＯＶＥの文字がごはんにのってやがるんだからな。
公開処刑なのか？

「ま、マリなんだこれは？」

「私の気持ちです。　あ、全部食べてくれないと嫌ですよ♪」

いやあん恥ずかしいと呟きながら両手で頬を触るマリ
その間で俺は一気に御飯をかきこんでＬＯＶＥの部分をかき消す。
普通にうまいんだがなんか悲しい・・・

「お、おいしいぞ」

なんとかそれだけ言うとマリはにこにことして不知火が開けてくれた椅子に座る。

「よかったぁ。　椎名先輩にまずいって言われたらどうしようかと思ってました」

「思い出したわ」

唐突にアリアが口を開いたので見ると最後のももまんを手にしながらアリアがマリを見る。

「ダギュラで今年、唯一の1年のSランク武偵がいるって。　名前は紅　真里菜」

「私も先輩達のこと知ってますよ。　ロジの武藤先輩にアサルトの不知火先輩。同じくアサルトの神崎先輩、そして、インケスタの遠山先輩、そして、椎名　優希先輩♪」

な、なんで俺だけフルネームなんだ?

「そのあなたがあたしの奴隷になんのようなの?」

「ど、奴隷ですか!?」

マリは俺とアリアを見て頬に両手をあてて真っ赤になる。

「椎名先輩ってそんな遊びが好きなんですか・・・でも、椎名先輩

なら」

「待て待て待て！　アリア！　後輩に変なこというな！」

「何よ！　優とキンジはあたしの奴隷よ！　どういおうが勝手じゃない」

がぅと犬歯をむき出しにしていうアリア

「し、しかも3Pですか！」

「ば、馬鹿！　キンジも黙ってないで何か言え！」

普段俺にからかわれることが多いためかキンジも何も言わずに成り行きを見守ってやがる。

武藤も不知火も見てるだけだしちくしょう。

「誤解だ！　アリアとキンジはパートナーなんだ！」

「なんだ・・・よかった」

ほっとしたようなマリ。

なんで、ほっとするんだ？

「じゃあ、椎名先輩」

真剣に俺の目を覗き込んでくる。

な、なんなんだ？

そして、この子はとんでもないことを言ってきたんだ。

「私の戦兄妹（アミカ）になってください」

第２８弾　アミカ強襲

翌朝７時、５時起きで通常の鍛錬を終えて待ち合わせの場所で寝てたら

「おい、優起きろよ」

「んあ？」

目を開けるとキンジが来ていた。

「今何時？」

ふぁとあくびする。

「７時だ。　アリアは来てないのか？」

「みたいだ・・・」

俺が言おうとした瞬間、背後から迫ったアリアがキンジの目を塞いでしまった。

「だーれだ」

キンジも振り返るが俺もびっくりした。

か、かわいい

「んもう、こんなに背後取らせるなんて甘いわね。　次は優もやるからね」

背伸びをすとんと解除して腰に手を当てたアリアはチアガールの格好をしていたのだ。
武偵高のチアガールが黒を基調とした珍しいコスチュームを着用する。
ノースリーブのトップには胸の上部に穴が開いていて穴からはアリアの真っ白な肌が覗いている。ふつうはハート形とかなんだろうが銃弾型はいかにも武偵高らしいよな。
スカートはデフォルトでガンチラ（スカート内に隠した拳銃がちら見すること（命名武藤））するほど短い。

「か、かわいい」

思わず口にだしてしまったらしい。
アリアがぼぼぼと顔を赤くしてしまう。

「きゃ、きゃ・・きゃわいい？」

なんで舌をかむんだよ。
ああ、もういいか

「かわいいよな？　キンジ」

「あ、ああ」

「か、風穴ぁ！」

「「なんでだあああああ！」」

ドドドドドン

ご丁寧に2発ずつ防弾制服に直撃した４５ＡＣＰ弾に痛みに俺達は地面をのたうちまわるのだった。

「で？なんなんだその格好は？」

ようやく落ち着きを取り戻したアリアが答える。

「見てわからないの？チアよ。　あんたそんなことも分からないの？」

「お前にだけは言われたくないぞ。　ていうか今のはなんでその格好なんだって意味だ」

「そうならそうといいなさいよこのドベ！　これはあんたたちを調教する間にあたしがチアの練習をする準備なの。　同時にやれば時間を無駄にしないですむでしょう？」

と、アリアは誰もいない周囲を見回す。

ここは、武偵高が乗る浮島の外れにある通称『看板裏』。レインボーブリッジに向けて立てかけてある巨大な看板の裏であり体育館との間に挟まれた細長い空き地だ。

転入生のくせにアリアはここを目ざとく発見し練習の場所にしようという腹らしい。

俺はあんまり使ってないけどな。

「それで何を・・・」

「椎名先ぁーーーーーい！」

するんだという言葉は乱入者により止められてしまう。

げっ！あいつは！

「おはようございまーす♪」

「紅　真里菜！」

「嫌ですよぉ先輩。　マリって言ってください私達アミカなんですから」

そうなのだ。　実はあの後、アミカなんていらない俺は、エンブレムを仕掛けようとしたのだが逃げ回る時間もめんどくさいので偶然武藤が持っていたトランプで一番上のカードを引いて俺のカードが強ければアミカは諦める。マリが強ければアミカになるという勝負をしたのである。

結果、俺は負けた。

設定では一番強いジョーカーを真里菜は引いたのである。

「な、なんでここが？」

「私、椎名先輩のことならなんでも知ってますよ」

「そ、そうなのか？」

う、その笑顔が怖い・・・

紅　真里菜この子はSランク武偵でありながらアサルトとしての技

能も欲しいらしくアミカになってくれる先輩を探してたんだそうだ。
実は、アリアも目をつけていたらしいが申し込む前にアリアのアミカが決まったため断念したらしい。
ちなみにアサルトとしてのランクでいうならはE

「だから、しっかり鍛えてくださいね♪」

だあああ抱きついてくるな！
あれ？　この匂い・・・どこかで・・・

「な、ななな何してるのよあんた！」

すさまじい殺気が俺の後ろで膨れ上がる。
見るとアリアが真っ赤になってこちらを見ている。

「先輩と後輩のスキンシップでーす♪」

「ゆ、優はあたしの奴隷よ！」

まずいと思った俺はマリを抱きかかえるとワイヤーを発射し看板の上に

「優ぅ！」

振り返ると上にガバメントを向けたアリアが見えたので俺は慌てて看板から飛び降りて逃走を図るのだった。

第２９弾　ナイフ投げ授業

待ってくださいよぉと追いかけてくるマリをワイヤーの速度で引き離して俺は教室でうつぶせになって眠っていた。
教室ががやがやうるさくなってきたので顔を上げると丁度、キンジとアリアが教室に入ってくるところだった。
アリアと俺の目が合う。
ああ、神様・・・
この後、俺が風穴地獄の刑を受けたのは言うまでもないので省略させてもらう。

さて、時刻は５時間目の少し前の休み時間、正確には移動時間なんだがアサルトの訓練場に行くためアリアと歩いている。

「いたた、まだ痛えぞ。アリア」

腹を抑えながら言うとアリアはふんと目を閉じながら

「自業自得よ。　あたしとの調教をほっぽり出して逃げた罰」

「いや、だってああしなければお前、撃ってただろ？」

まあ、結果的に後で撃たれるんならあそこで撃たれてもよかったんだろうけどな・・・

本日のアサルトの授業は対投げナイフ技だ。
簡単に言えば蘭豹が投げてくるナイフをなんとかしろというんだが・・・

「おら！椎名いくぞ！」

１０メートルぐらい離れた場所からナイフを投げてくる。
はええよ！
銃を使って弾くのは禁止。
無論避けるのも禁止だ。
どうにかできなかった奴は防弾制服にナイフの衝撃を受けることになる。
馬鹿な避け方したら死ぬけどな。
俺は右腕を横に振るとナイフをはじく。

「おし！次　神崎！」

そして、アリアはと言うと投げナイフを・・・おお！
周りからもおおという声が響く。

アリアは真剣白羽取りでナイフを受けとめたのだ。

「すごいね。　神崎さん」

ん？

よこを見ると不知火が立っていた。

「まあ、白羽取りできる奴はあんまりいないからな」

「椎名君はできないのかい？」

「俺？」

うーんと考えてみる。戦闘狂モードならできるかもしれんが通常モードじゃ失敗する方が多いと思うな・・・

「不知火はできるのか？」

「アハハ、質問を質問で返されたね。　僕はできないよ。　遠山君ならできるかもしれないけど」

「ああ・・・」

ありえるな。

ヒステリアモードならの話だが・・・

「話は変わるけど椎名君アミカ作ったんだって？」

「その話はしないでくれ不知火・・・」

ずーんと頭を抱えて俺は下を向いた。
勘弁してくれよ。
あの、マリって子が来てから生活が乱れまくりだ。
ああ、白雪に付きまとわれるキンジの気持ちが少しだけ分かったぜ。
そのマリは今は専門科目の時間なのでダギュラにいるはずだ。
なんの授業するんだろ？
拷問の練習か？

「おっし！　全員終わったな！」

声に頭を上げると蘭豹が不吉な笑みを浮かべて俺達を見まわしている。
げ！
俺は不知火の背中に隠れようとしたのだが・・・

「おら！椎名！でてこい！」

「呼んでるよ椎名君」

か、勘弁してくれよ
その後、どうなったのかと言えばナイフの間をかいくぐって蘭豹に飛びかかった瞬間、像殺しと呼ばれる巨大拳銃Ｍ５００を防弾制服に受けて気絶したのだった。

「あたた」

ひりひりする箇所をさすりながら「優！明日には死んでろよ！」という声に「うるせえ！　お前が死んでろ！」というやり取りをしながらアリアとアサルトを出る。

「ちくしょう蘭豹の野郎思いっきりやりやがって・・・」

「あんたって気絶してばかりね優」

「前の気絶したのはお前のせいだろ！　お前が風呂ですっぱだ・・・
「風穴ぁ！」うわ！」

真っ赤になったアリアのガバメントをビリヤード撃ちで弾く。
そうそう、何度も食らうか！

アリアはガルルルとライオンのように威嚇してくる。
ああ、もう

「も、ももまん買ってやるから機嫌直せよな？　キンジ迎えに行くんだろ？」

「今度変なこと言ったら風穴プレスよ！」

な、なんなんだ風穴プレスって？聞かないのがいいんだろうな・・・

そんなこんなでインケスタの建物の前でキンジを待っているとキン

ジが出てきた。

「さ、行くわよ優」

はいはいお嬢様と心の中で言いながら俺はアリアの後を追うのだった。

第３０弾　ぽこぽこするわよ

「キーンジ」

アリアがとててと夕焼けのグランドをかけてキンジに近づいていく。

「言っておくが放課後は訓練なんかしないぞ。　俺は一般科目の宿題をやるんだからな」

「まだ何も言ってないじゃない。　放課後は優を訓練するから」

「俺かよ！」

「優、朝逃げた補修よ」

「よかったな優」

「キンジてめえ！」

アリアはとててと、バス停に向けて歩いていく。
そして、振り返りひまわりみたいな笑顔を俺たちに向け

「朝練はやるからね。　優も」

俺の自由な時間よさらばだ。
俺が心の中で自由とさよならをかわしながら俺達は並んで歩く。
アリアを真ん中にして右にキンジ、左に俺と言った構図だ。
アリアは楽しそうにアサルトで習った投げナイフの話をしている。

「それで、優ったら先生にぼこぼこにされてね」
その話はしないでくれ情けないから・・・

「ねえ、キンジ、優」」

「「なんだ?」」

俺とキンジの声がはもる。

「ふふ。　なんでもなーい」

少し前に行ったアリアは道すがら振り返り俺達がいるのを確認してはランランとセーラー服をちらつかせて道に戻るアリア。
機嫌いいな。

「お前さあ。　俺たち以外のパートナーはもう探さないのか・・・？　せめてもう2、3人仲間を加えてチームを組んだほうがいいんじゃないか?」

「仲間なんかいらない。　みんなで何かやるって苦手だもん」

仲間ね・・・一瞬、レキが頭に浮かんだがSランクがアリアのチームメイトになるなら護衛も楽になるんだがな・・・

「そもそも、あたしは1人で戦えるし、あたしについてこれるパートナーがいればそれでいいの。　あんた達の調教が済めばそれで十分。　あんた達だけいればいいの」

まあ、神様とか訳のわからない力を使う連中じゃなきゃ対応は可能だがな
キンジが頭を抑える。
「頭痛がしてきた。　お前に頭をぽこぽこ殴られたせいだ」
「アスピリンでも飲めば？」
「俺は頭痛とか風には大和化薬の『特濃葛根湯』しか飲まねえんだよ」
「特濃？　なにそれ」
「生薬の成分を濃縮したって意味だ。　漢方薬がいろいろ入ってる」
「じじむさ！　じゃあ、それ飲んでおきなさい。　あしたもぽこぽこするから」
ぽこぽこって・・・
「ちょうど今切らしてるんだよな・・・あれはアメ横にしか売ってねえし結構、面倒なんだよ。　あそこに行くの上野と御徒町の中間ぐらいの薬屋でどっちの駅からも遠いし」
「キンジ、優」
いきなり立ち止まるアリア
ああ、キンジ聞いてなかったみたいだぞこの子
「これ見て！」

「なんだ？」「ん？」

キンジと俺がマスターズの掲示板を覗き込む。

『生徒呼び出し　２年Ｂ組　超能力捜査研究科　星伽　白雪』

白雪が呼び出し？　珍しいなあの子、超まじめで偏差値７５の優等生で生徒会長で園芸部部長で手芸部部長で女子バレー部部長、性格はキンジの対するあれを除けば完璧なんだが・・・はて？

「アリア、お前この前白雪に襲われたのちくったのか？」

キンジがアリアに尋ねる。
アリアは心外よというように

「あたしは貴族よ」

紅い瞳がキンジを睨みつける。

「プライベートなことを教師に告げ口するようなことは卑怯な真似はしないわ。　いくら売れた喧嘩でもね」

アリアは何か考えるようにしながら

「キンジ、優これはあの女を遠ざけるいいチャンスだわ。　この件を調査してあの女の弱みを握るわよ」

おい、アリア！貴族は卑怯な真似をしないんじゃいのか？

「弱みってなんだよ。　白雪はあれから来てないだろ？」

「来てるじゃない」

「え？」

「最近あたしが一人だとドアの前から気配がしたり物陰から見られている感じがしたり・・・電話が盗聴されてるみたいに断線したり一般校区でも渡り廊下から水をかけられたり、どこからともなく吹き屋が飛んできたり、落とし穴に落とされたり」

陰湿ってレベルじゃねえ！　まじで白雪がやったのかよそれ！

「『泥棒猫』ってかかれた手紙が送られてきたり、猫のイラストつきで」

それはかわいい

「とにかくあたしはあの女に嫌がらせを受けているのよ。　気付いていないなんてあんた達どこまで鈍感なの！　この無能！」

まあ、それぐらいなら護衛が出張る必要はない。

命こそ・・・

「それだけならまだいいわ」

ん？

「こないだなんか女子更衣室のロッカーを開けたらピアノ線が仕掛

けてあったのよ！　あたしが・・・その・・・まあ、身体的な理由によってロッカーの奥に潜り込まないと服を取れないのをわかってて・・・首の位置に仕掛けてあったんだから」

それはしゃれにならん。
下手すりゃ俺の知らない所でアリアは首をすぽっといって俺の護衛は終了という流れになっていたかもしれないんだな・・・
説得して聞いてくれるか？
うーむ、嫌だな。白雪とは戦いたくない。
実力も未知数だし・・・

「あんたたちこの白雪が呼び出されている時刻に一緒に・・・」

嫌な予感が・・・

「マスターズに潜入するわよ！」

勘弁してくれ

第３１弾　危険地帯潜入任務

東京武偵高は隅からすみまで危険な学校だが特に危険極まりない場所が３つある。
強襲科（アサルト）
地下倉庫（ジャンクション）
そして、教務課（マスターズ）だ。
え？なんで教師がいる場所が危険かって？
答えは簡単。
武偵高の教師は危険人物の宝庫なんだよ。
元特殊部隊だったり、元暗殺者やマフィアだったなんて噂がある奴もいるし・・
正直、本気で戦っても勝てないかもしれないなんて奴がいるのもこのマスターズだ。
まあ、インケスタやコネクトのような常識的な教師もいるがそれは少ないんだ。
悲しいが・・・

「キンジ届かない。　抱え上げて」

と無声音でいうアリアと俺達はその虎の穴に侵入しようとしている。

「・・・はいはい」

「おい、キンジ早くしろ。　誰かきたらまずい」

マスターズの廊下に忍び込み、天井のダクトにアリアをキンジが抱え上げる。
俺は周りの警戒役だ。

「ほーれ、たかいたかーい」

あ、馬鹿

「風穴」

ゴスとキンジの鳩尾にアリアの黒二―ソがめり込んだ。

「うおおお」

とキンジが苦痛の声をあげているとアリアは懸垂の要領で上がってしまう。

「優！」

アリアの手を借りキンジに押してもらい俺もダクトに上がった瞬間。

「おーう、遠山。　マスターズに何か用か？」

げっ！　この声、蘭豹じゃねえか！

音を立てずにダクトのふたを閉める。

下からキンジが裏切り者という目で俺を見ていたが俺はダクトの中から頑張れと親指を立てた。

「上になんかあるんか？」

「い、いえなんでもない・・・です」

悪いなキンジ生きていたらまた会おう。

後ろから遠ざかっていくキンジの声を聞きながら俺は犠牲者に黙とうするのだった。

シャカシャカシャカとまるで某虫のように匍匐前進で進んでいくアリアは短いスカートなのだが悲しかな。暗くてよく見えない。

「アリア」

「何？」

「キンジは残念だったな」

「仕方ないじゃない。　置いてこないとあたし達も見つかってたんだから」

「まあな、それはそうと匍匐前進はやいなアリア」

「得意だもの。　アサルトの女子では一番早いわ」

「なるほど胸が平らだか・・・」

ゴスっと俺の頭にアリアの蹴りが食らわせられた。

痛いよ。お！白雪発見！　どうやら呼び出しをした教師の所にいた

らしいな。
狭い通気口からアリアと俺で下の様子をうかがう。
アリアとは頭と頭をくっつけたような格好で下を見る羽目となる。
ち、近い・・・クチナシのようなにおいもするし・・・
目をアリアに向ける。
通気口から漏れる光に照らされるアリアは本当に可愛かった。
お人形さんみたいに整った顔。
人形と言えばレキを思い出すがアリアは表情が豊かなのだ。
守らないとなこの子のこと・・・
俺がそんなこと思っていた時

「星伽ぃ」

女にしては低めの声に下に目を戻すと室内では2年B組の担任ダギュラの綴先生が足を組んで座っていた。
白雪は迎えの椅子にうつむいて座っている。

「お前最近急に成績下がってるよなぁ」

室内なのに黒いコートを着て煙草を口にくわえている。
目が少しおかしいし年中ラリってる奴だからなあの先生はてか、あの煙草日本じゃ販売禁止っぽいし

「あふぁー、まあ勉強はどうでもいいんだけどさ」

煙を口から出しながら言う。
そんなこというから武偵高は馬鹿といわれるんだ！　まあ、否定はしないけどな。

「なーに・・・何？　あ、変化・・・変化は気になるんだよね」

単語を忘れたのか？
頭すかすかだと言いたいがこの先生、尋問に関して日本で5本の指に入る。
何をされるかわからんがこいつに尋問されたらそいつは綴を女王様とかあがめられるらしい。
そういや、紅　真里菜はどんな尋問するんだろうな？
まあ、今気にすることじゃないか

「ねえぇ、単刀直入に聞くけどさ。　星伽、あいつにコンタクトされた？」

「デュランダルですか？」

ピクっとアリアが眉を動かした。
確か周知メールできてたな。
確か、超能力用いる武偵『超偵』ばかり狙う誘拐魔
アリアは超偵じゃないから気にとめてなかったんだがそもそもあのデュランダルというのは存在自体デマと言われている。
失踪した武偵もこいつにやられたんじゃないかという都市伝説のような存在である。
いるのかまさか？

「それは・・・ありません。　というかデュランダルが実在していたとしても、私なんかじゃなくもっと大物の超偵を狙うでしょうし」

「星伽ぃ、もっと自分に自信を持ちなよ。　あんたは武偵高の秘蔵っ子なんだぞ？」

「そ、そんな」

「星伽ぃ、何度も言ったけどいい加減ボディーガードつけろってば。
レザドはデュランダルがあんたを狙ってる可能性が高いってレポートを出した。　ＳＳＲだって似たような予言したんだろ？」

「でもボディーガードはその・・・」

「にゃにより？」

「私は幼馴染の子の、身の回りをしたくて・・・誰かがそばにいるとその・・・」

「星伽ぃ、教務課（うちら）はあんたが心配なんだよぉ。　もうすぐアシアードだから、外部の人間もわんさか入ってくる。　その期間だけでも誰か有能な武偵をボディーガードにつけな。　これは命令だぞ！」

「で、でもデュランダルなんて存在しない犯罪者で・・・」

「これ命令だぞー。大事なことだから先生は2度いいました。　3度目は怖いぞぉ」

ふうーと煙を白雪に吹きかける綴。

「けほ、は、はい分かりました」

とうとう頷いた白雪を見ながら俺は情報を整理してみる。
なるほどね。
いるかもわからない犯罪者に狙われている白雪にマスターズが護衛をつけろと言ってるわけだ。
ＳＳＲの予言なんて俺は信じてないしレザドの情報はガセも少なく

ない。
マスターズの過保護って奴だ。
まあ、仮に狙われているんだとしてもアリアの護衛と両立なんて・・・

がしゃん

とアリアが通気口のふたをパンチでこじ開けた。

「っておおおおい！」

俺が止める間もなくアリアはすたっと2人の前に降りてしまった。
スカートがめくれ上がっていたが角度的に見えなかった。
そして、またこの子はとんでもないことを言い出すんだよな。

「―そのボディガードあたしがやるわ！」

やっぱりね

第３２弾　元気少女とお人形さん

ああ、もう駄目だ。
観念した俺は通気口から降りる。
その瞬間、綴が不審者とでも勘違いしたのか一気に距離を詰めてくる。
思わず戦闘態勢を取るが後ろに回り込んだ綴は俺とアリアの襟元を掴まれて壁際に投げ捨てられた。
な、なんて力なんだよこいつ！

「んー？　何これ？」

しゃがみこんで俺達を見てきた綴

「なんだぁ。　こないだのハイジャックの２人じゃん。　１人足りないけど」

うすら笑いを浮かべて煙草を吸うとこきこきと首を鳴らす。
ヤバい、なんというかヤバいぞこの状況。

「これは神崎・ホームズ・アリア。ガバメントの２丁拳銃に小太刀二刀流。双剣双銃（カドラ）。　欧州で活躍したＳランク武偵。　でも、書類上ではみんなロンドン武偵局が自らの業績にしちゃったみたいだね。　協調性がないせいだまぬけぇ」

綴アリアのツインテールの根元を掴んで言った。

「い、痛いわよ。　それにあたしはまぬけじゃない。　貴族は自分の手柄を自慢しない。　たとえそれを人が自分の手柄だと吹聴して

も否定しないものなの！」

「おい！　やめろよ！」

俺が飛びかかるが、がしっと頭を掴まれ万力のように握力が加えられる。

「いたたたたた！」

悲鳴をあげる俺をよそに綴は続ける。

「へぇー。　損な身分だねぇ。　あたし平民でよかったぁー。　そういえば欠点・・・そうそうあんたおよ・・・」

「わぁー！」

綴の言葉がアリアの叫びでさえぎられる。

「そそ、それは弱点じゃないわ！　うきわがあれば大丈夫だもん」

なるほど、アリア泳げないんだな。

「んで」

綴はアリアの髪から手を話すとぎりぎりと頭を掴む俺を見る。

「こっちは椎名　優希君」

「いたたたた！　いい加減に離してください！」

相手が教師なのでまともに戦うわけにもいかず俺が悲鳴をあげているとあっさりと綴は手を離した。

「性格はまぁまぁ社交的だがどこか本心を見せていない所あり」

思いだしながらいう綴、こいつ全部頭に生徒のデーター入れてやがるのか？

「どんな状況でも全力で戦ったことがなくＡランク、しかし、Ｓランクの疑いもあり。
解決事件は銀座の銀行強盗の制圧に某金持ちの護衛、ＡＮＡのハイジャック事件。あ、留年直前で強盗捕まえたんだ」

「人のプロフィール言わないでくださいよ！」

「武装（えもの）はガバメント２丁にデザートイーグール一丁に特殊仕様のワイヤーが最低３本。　しかし、その本質は・・・」

「わあああああ！」

今度は俺が悲鳴をあげる番だった。
こいつがどれだけ知ってるか知らんが切り札全部露呈しかねん。

「でぇー？　どういう意味？　ボディーガードやるってのは？」

「言った通りよ。　白雪のボディーガード２４時間体制あたしが無償で引き受けるわ」

護衛する相手が護衛のクエスト・・・最悪の事態になりそうだな。

「星伽、なんか知らないけどSランク武偵が無料で護衛してくれるらしいよ？」

「い、嫌です。　アリアがいつも一緒だなんてけがらわしい」

「大丈夫よ。　優もつけるから」

俺もかよ！

「そ、それでも嫌です！」

すまない白雪さん。　今の言葉会心の一撃ぐらいのダメージが胸を襲いました。

「じゃあ、どうしたら受けるのよ！」

「どんな条件を出してもお断りします！」

ぐぬぬとアリアと白雪がにらみ合いになり殺気が高まっていく。

か、勘弁してくれここで戦ったらマスターズの鬼どもが大挙してくるぞ。

命の危険を感じた俺はある提案をする。

「なら、キンジも白雪の護衛につけるのはどうだ？」

白雪の顔がぱっと輝く。

よし、最後の一撃だ！

「白雪の家に行くか白雪がキンジの部屋に来るかだ？　これで万事解決だろ？」

後で、キンジに怒られそうだがお前の幼馴染なんだから妥協してくれキンジ。

何より、俺の命のためにも・・・

かくして、白雪の護衛＋の二重の護衛生活の始まりなのである。

部屋を要塞にする道具を取りにいくと言って女子寮に帰ったアリアと別れた俺は携帯電話を取り出すと電話をかける。

数回の回線を得て、最後に3コールの後相手が出る。

「何か不都合が起こったのかな？　椎名　優希」

この依頼主との電話も慣れたものだ。

最近ではアリアの護衛関連ではレザドより正確なのでよく電話をかけている。

たまに繋がらないこともあるが・・・

「単刀直入に聞くんだがデュランダルは実在するのか？」

「ふむ、本当に単刀直入だね。　実在する確証はないが高い確率で実在しているといっておこう」

ん？　依頼人にしては引っかかる言い方だな。

「デュランダルの名前を聞いた時、アリアの様子が少し変わったんだ。　そいつも、かなえさんの事件の関係者か？」

「デュランダルが関わったかもしれない事件で確かに神崎　かなえは冤罪をきせられている。　アリアがデュランダルを追うのはそれが原因だろう」

なるほどね。

「で？　デュランダルってどんな装備とかわからないのか？」

理子の時は聞き忘れたが今回はちゃんと聞いておくと思ったのだ。

「私も詳しくは知らない。　だが、１つ言うならばデュランダルは超偵という話だ」

「超偵か・・・」

超偵は白雪のような超能力や異能の力を持つとされる武偵のことだ。眉つばものかと思いたいのだが今回は嫌な予感がする。

「武偵は超偵には勝てないと言われている。　お望みの装備がいるなら手配するが？」

一応、授業としての知識はある。

「じゃあ、純銀弾と・・・後はそうだな・・・」

俺はいくつかの装備を手配すると携帯をしまった。

「ちっ！　けちだな」

武偵弾を１２発ほど頼んだがそれは君の金でやることだよと断られてしまった。
金さえ渡せば作ってくれる職人とパイプがあるだけましということだろう。
普通はよほどの実力者じゃなければ武偵弾は金を積んでも手に入らない。
全部オーダーメイドだからな。

「椎名先ぱぁーい！」

げっ！
振り返ると紅　真里菜がツインテールを振りかざしながら走ってくる。
サイドテールと使い分けてるらしいな髪型
とっさに周りを見渡すとうまい具合に知り合いがいた。
そいつに走り寄る。

「れ、レキ！　頼む！　これから俺と約束があることにしてくれ！」

ロボットレキと呼ばれる少女は無言で道を歩いていたのだ。
帰る所だったらしい。

「・・・」

レキは無言。

だが、立ち止まってくれた。
そこに、マリが追いついてくる。

「捕まえました♪　さあ、椎名先輩の家に行きましょう」

「な、なんで俺の家なんだ？」

「アミカは部屋の鍵の交換から始めるんですよ！　これ私の部屋の鍵です！　いつでも来てくださいね」

「行かねえよ！　女子寮だろう！」

「・・・」

はっと、視線を感じてみるとレキが無表情に立ってこちらを見ている。
表情一つ変えていないな。

「あれ？　レキ先輩じゃないですか？どうしたんですか？」

「い、嫌、実はこれからレキと御飯食べに行く予定なんだ。　悪いな」

俺がレキが答えるより先に答えてからレキを見て頼むとまばたき信号でお願いする。
レキは何も言わない。

「そうなんですか？」

マリが聞くとレキは動かなかったがこくりとゆっくり顔を前に倒し

た。
ありがとうレキ！

「そうなんですか・・・椎名先輩やりますね。　神崎先輩だけじゃなくレキ先輩まで手を出すなんて」

「飯食いにいくだけだろ！」

「いえいえ、レキ先輩にはファンクラブがありますからね。　狙撃されないように注意してくださいね。　椎名先輩」

そんなものがあるのか・・・
俺はレキを見る。
まあ、確かに美少女なんだがとっつきにくいんだこいつは・・・ん？　そう言えば、最近レキとよく食べに行く機会が多い気がするな。

「それはそうと、私も一緒に行っていいですか御飯？」

はい？

「椎名先輩のおごりぃ、フフフ」

「・・・」

「お兄さんやりますね。　不思議系美少女の次は元気いっぱい後輩ですか」

以前、レキと来た小さな中華料理屋だ。
あの時のバイトの女の子も健在で俺達を見るとさっと水を出してきたのだ。

「こいつらはそんなんじゃない」

俺は壁に飾られた地獄ラーメン制覇という紙の下に張られたレキの写真（無論無表情）を見ながら

「チャーハン１つに酢豚と豚骨ラーメン」

「私は餃子とチャーハンお願いします！」

「はい、了解です！」

さっさと厨房にメニューを伝えに行ってしまったバイトの子を見送りながら
俺は今の状況を整理する。
俺の横にはマリ、正面にレキと言った配置だ。
レキは誘ったからおごるのは当然としてヤバいぞ・・・俺の財布がピンチだ。
毎月５０万、理子を退けたから特別報酬に１００万貰ったがほぼ、全部装備品に消えた。
武偵弾もそうだしワイヤーの整備等、金かかるんだよ今の状況は。

財布の中には３０００円しかないんだ。

「それで、椎名先輩いつ、訓練してくれるんですか？」

「今は無理だ。　護衛のクエストを受けてるからな」

「護衛ですか？　ああ、星伽先輩の護衛ですね？」

「お前、なんで知ってるんだよ！」

「偶然耳に挟んだんです。ほら、星伽先輩の担任ってダギュラの先生ですし」

なるほどな。

「デュランダル捕まえたら私に回してください。　腹から何も出ないぐらいにはかせてあげますから」

一瞬、ぞわっと黒いものがマリの後ろからでた気がしたが幻覚だ！

うん、幻覚だ間違いない。

「ま、まあその時は頼むな」

「お待たせしましたぁ！」

丁度その時、料理が運ばれてきた。

早いな！

「わー、いただきますね先輩」

「これでよかったか？」

酢豚と豚骨ラーメンをレキの前において聞くとレキはこくりと頷いた。

俺の前にはチャーハンが1つだけ貧乏はつらい・・・

こうして食事が開始されたわけだが

「具体的に護衛の期間はいつまでなんですか？」

「んー、アドシアートが終わるまでだな。　ま、何も出ないにこしたことはないが・・・」

ふと、思いついたので

「そうだ。　レキ、お前も白雪の護衛やらないか？」

だが、レキは首を横に振った。

「そうか・・・まあ、レキの場合はアドシアートの練習があるからな」

「あ！　じゃあ私！　私がやります！」

「お前は弱いだろ！　護衛なんかできるわけないだろ」

「ううう・・・残念です」

まあ、ダギュラの人間に頼むのは最後の最後だけだ。

ふと、レキが俺を見ているのに気付く。

「優さん・・・」

いきなり、しゃべりだしたのでびっくりしていると

「よくない風を感じます。　敵はゆっくりとせまっている」

また、例の風か・・・

しかし、敵ね・・・

デュランダルはいる。

そういうことを前提に動いた方がいいのかもしれんな。

ちなみに今日の残金３円である。

ああ、貧乏ってやだなぁ

第３３弾　粗大ごみは処分しないと

食事を終えた俺達は帰るというレキと別れ、キンジの部屋に行くため階段を上がっていた。
紅　真里菜も俺の横を並んでいる。
ついてくるなと言っても行くと聞かなかったのだ。

「そう言えばマリの銃はなんだ？」

「私のですか？」

マリはスカートを軽くめくり、銃を取り出した。

「Ｃｚ７５Ｂ型か、使ってる奴久しぶりにみたぜ」

こいつはキンジのベレッタ同様９ミリパラベラム弾を使用している自動式拳銃である。
チェコが開発した銃で歴史はさほど古くはないがこのタイプなら仕様に問題はない。
初期型ならＢを進める所だからこれでいい。
俺はまりに銃を返す。

「本当は先輩と同じ大型拳銃にしようとおもったんですけど反動がすごすぎて扱えませんでした」

「ガバメントか？」

「デザートイーグルです」

「いや・・・」

無理だろう。
こいつの反動は半端じゃない。
一昔前の日本人は誤解してるやつが多いが自動車のエンジンを撃ち抜けるだの女性が打てば撃てば肩が外れるなど結構誇張も多い銃だ。
実際は姿勢さえきちんとしていれば女性でもこいつは扱える。

「反動が弱いＣｚで我慢しとけよ」

「そうします」

そんな会話をしながらキンジの部屋の前に立つ、仲から人の声が聞こえるので誰かいるんだろう。
扉に手をかけ中に入った瞬間、けたたましい警報音が鳴り響いた。
な、なんだ！

「かかったわね！　デュランダル！」

廊下から飛び出してきたのはガバメントを構えたアリアだったが俺の顔を見た瞬間銃を下ろした。

「何よ。優じゃない」

「い、いいから警報を止めろ！」

「え？　聞こえないわ！」

「とーめーろお！」

俺はけたたましい音を立てる装置に向けて発砲。
デザートイーグルに貫かれてようやく警報は鳴り止んだ。

「何するのよ！」

「近所迷惑だろ！　開けるたびにこれじゃ死者でも飛び起きるぞ！」

「うるさいうるさい！　それ直しておきなさいよ！」

こ、これをか？　見るも無残に壊れた装置を見て思う。

「あらら、これはもう、治せませんよ神崎先輩」

マリがひょいと俺の横から顔を出した。

「な、なんでその子がここにいるのよ！」

「それは、私は椎名先輩のアミカですから先輩の部屋に来るのは当然です」

正確には俺の部屋じゃないんだが・・・
正式な俺の部屋は何があったのか跡形もなくけし飛んでいた。
マスターズに問い合わせたらもう、そこに住めと言われたのだ。
さらば、俺の部屋よ・・・

「ああ、そのアリア。　マリはデュランダルの尋問を任せてほしいそうなんだが・・・」

「それは最後の段階でしょ？　今はダギュラの生徒に用はないわ。
それとも護衛のスキルでもあるの？」

「私、戦闘は全く駄目なんです。　ちょっとお邪魔したら帰ります
から駄目ですか？」

そう言われればアリアも反対する理由も特にないらしい。
しぶしぶと言った感じだが

「じゃあ、トラップ仕掛けるの手伝いなさい。　優もよ」

「了解」

これ以上、アリアに逆らうと風穴なので大人しく部屋の中に入ると
キンジと白雪がいた。

「あ、優君お邪魔してます」

「遅かったな優。　何してたんだ？」

「あ、椎名先輩は私とレキ先輩で御飯食べてたんです」

再び俺の後ろから現れたマリが説明する。

「こんばんは！　星伽先輩！　遠山先輩！」

「ああ、優のアミカの・・・」

認めたくないがもう、認めるしかないんだろうな・・・

「星伽先輩は初めましてですね。　ダギュラの1年紅　真里菜です。
椎名千先輩のアミカでやってます！」

「こら！腕に抱きつくな！」

ぶんぶんと右を振るがマリは手を離さない。
う、胸が当たってるぞ！

「星伽　白雪です。　よろしくね紅さん」

「あ！　マリでいいですよ！　私名前の方が好きなんです」

「な、ななにしてるのよ優！」

げっ！
振り返ると顔を真っ赤にしたアリアがガバメントを向けるところだった。
は、離れろマリ！

「れ、冷静になれアリア！違うんだ！　これは違う！」

焦って後ろに後ずさり何かを踏んだ瞬間、頭に激しい衝撃を受けて俺の意識は暗転した。
か、かなだらい！？一体いつの時代のトラップ・・・なん・・・
こうして、めでたく3度目の気絶を俺は体験するのだった。

サイド　紅　真里菜

「椎名　先ぱーい？」

ペチペチとマリは優額を叩くが完全に伸びているようだ。

「自業自得よ！」

アリアはそう言いながらガバメントをしまい自分の作業に戻る。

「あらら、どうしましょう先輩方、椎名先輩」

「まあ、放っておけば目も覚ますだろ」

以外にひどいんですね。　遠山先輩

「マリ！　ちょっと手伝って！」

天窓に手が届かないらしいアリアが声をかけてくる。

「はい！」

アリアの踏み台になりトラップの設置を手伝いつつ遠山先輩と星伽先輩の言葉に耳を傾ける。

「フフフ、粗大ごみも処分しなくっちゃね」

そんな声が聞こえてきた。

思ったより混沌としてますねこの部屋の人間関係。

でも、星伽先輩私は応援しませんからね。

だって、遠山先輩には神崎先輩と付き合ってもらわないと椎名先輩が開かないじゃないですか。
私は気付いているんですよ。
椎名先輩がアリア先輩を見る目が他の女の子と少し違うことに・・・
でも、椎名先輩、レキ先輩には結構自然に話してたな・・・
うーん、ライバルは多いってことですね。
でも、最後に・・・を手に入れるは私なんですから・・・フフ

第３４弾　宣告される未来

いいにおいがしたのでがんがんする頭をさすりながら上半身を起こす。
いたた、こぶできてるじゃねえか

「起きたか優？」

リビングの椅子の上から振り返ってキンジが言った。

「ああ、いてて」

手を頭にやりながらリビングの椅子に座る。
キンジの前には中華料理のフルコースが並んでいた。
まあ、俺は食ってきたからないのは当然なんだが・・・

「で？　なんであたしの席には食器がないのかしら？」

なぜか、腕組みしてこめかみをひくひくしているアリア

「アリアはこれ」

絶対零度の声でアリアの前にどんぶりを置く。
丼には大盛りの白米に割り箸が突き刺さっている。
しかも、割ってない。

「ひでえ！」

「なんでよ！」

俺とアリアの声が重なった。

「文句があるならボディーガードは解約します」

つーんとそっぽを向く白雪にアリアはひりぎりと犬歯を食いしばってからがしゅがしゅと御飯をかきこむのだった。

動物奇想天外2時間スペシャルと日曜動画劇場を見たいというアリアとキンジがチャンネル争いをしているのを見ながらデザートイーグルを解体して整備していると白雪がリビングにカードゲームみたいなものを持ってきた。

「キンちゃんこれ、巫女占札っていうんだけど・・・」

「巫女占い？占いか？」

「うん、キンちゃんのこと占ってあげるよ。　将来のこと気にしてたみたいだから」

「ふーん、じゃあやってもらおうか」

「あ、面白そうだな。　白雪俺もいい？」

占いなんか所詮、判断基準の一つにすぎないがよく、キンジが白雪の占いは当たると言っているので興味がある。
チャリジャックで女難というのも当たってたみたいだし
アリアも興味があるらしくなにそれと録画をセットしてからこちらに来る。

「キンちゃんは何がいい？　金運とか恋占いとか恋愛運みるとか健康運占うとか恋愛占いがあるけど」

白雪2回恋愛っていったな・・・

「じゃあ、数年後の将来、俺の進路がろうなるか占ってくれ」

「チッ」

ん？　幻聴かな？今、白雪が舌打ちしたような・・・
天使のような笑顔でカードを星型に並べて伏せて並べ何枚かを表に返しが始めた。

「どうなのよ？」

アリアが尋ねると白雪は少し険しい顔をしていた。

「どうした？」

「え、あ、ううん。　総運、幸運です。　よかったねキンちゃん」

「おい、それだけかよ？何か具体的なこととか分からないのか？」

「えっと黒髪の子と結婚します。　なんちゃって」

それって白雪のことか？
でも、なんだろう？
白雪何か隠してるな。
あ！　まさか、アリアと結婚とかそんな結果が出たんじゃないだろうな？

「はい！　じゃあ、次はあたしの番！」

うずうずしていたらしいアリアが机に乗り出して急かす。

「アリアは最後」

絶対零度の声をアリアに向けて今度は俺に白雪は向き直った。

「優君は何を占いたいの？」

横で、アリアがなんでよと！抗議をしているが俺は苦笑しながら

「じゃあ、俺も将来かな？　武偵として成功してるか占ってくれよ」

「分かった」

先ほどと同じようにカードを並べて占いを始める白雪
うーん、俺の将来か・・・
たぶん、アリアの護衛も終わっていて銀色の魔女を捕まえてできたら可愛い女の子が彼女とか結婚とかしてるといいな。

「っ！」

最後の札をめくった白雪の顔が再びこわばった。
え？　なんなんだ？

「どうしたのよ？」

再びアリアが白雪に聞く。
俺もなんか怖くなってきたので

「ど、どうなんだ？」

「え？　うん武偵として成功するよ」

「ハッキリしないな。　まあ、成功するならいいか」

「じゃあ、今度こそあたしよ！」

白雪は白けた顔で並べた札をめくり

「総運、ろくでもないの一言に尽きます」

適当すぎる！　白雪、アリアの態度ひどすぎるぞ

「ちょっと！　ちゃんと占いなさいよ！　あんた巫女でしょ！」

「私の占いに文句いうなんて・・・許さないよそういうの」

「―闘ろうっての？」

ばちばちと火花が散り始めたので

「おい！　たかが占いごときで・・・」

「「たかが占い？」」

アリアと白雪の声が重なり火花が出る視線が俺に向けられる。

こ、こえええええ

だが、敵は俺ではないと2人は考えたのか再び火花を散らし合いながら

「アリアが戦いたいんだったら、私は受けて立つよ。　星伽に禁じられてたから使わなかったけど、この間はまだ、切り札を隠し持ってたし」

し、白雪も切り札もちか・・・

やはり、戦いたくないな

「あたしだって切り札・・・えっと2枚隠し持ってたもんね」

「あたしは3枚隠してました」

「じゃあ4枚！」

「5枚！」

「いっぱい」

「あー！もう静かにしろ！　お前らなんで占い一つ平和にできないんだよ！　優」

俺はアリアを後ろから脇を抱えて押さえつけ、キンジも白雪を抑え

つける。

「ふーんだ」

アリアはするりと俺の腕から抜けると俺の耳を掴む。

「いたたたた！　何するんだアリア！」

「うるさいうるさい！　来なさい優！」

俺はアリアが占有している個室に引きずりこまれドアを閉める。
中にはコネクトから借り手きた通信機器が置いてあった。
ようは手伝えと言うことだろう。
ああ、これどう使うんだっけ？

そして、その日の深夜。
全員寝静まり、トイレに行ってふらふらとリビングを横切ろうとした時

「優君」

「白雪？」

闇で姿は見えないが声が聞こえてくる。

「どうしたんだ？　こんな夜中に？」

「うん、占いの結果を知らせようと思って・・・」

「武偵として成功するんだろ？」

「あれは嘘なの」

「嘘？」

「優君・・・今、私の護衛のほかにクエスト受けてるよね？」

「受けてるよ」

アリアの護衛ということは伏せて言うと白雪は深刻そうな声で

「そのクエストはすぐに放棄した方がいいよ。　占いの未来はそのクエストをたどった先にあったから」

「引っかかる言い方だな？　クエストを受けてたらどうなるんだ？」

「何年後かは分からない。　１年先かあるいは明日かもしれない未来に優君は剣で貫かれる」

「・・・」

それが、俺の最期なのか？

「それは、俺が死ぬ瞬間ってことか？」

「それ上の未来は見えなかった。　おそらくはそういうことだと思う・・・優君が死んだらキンちゃんも悲しむと思うからクエストを・・・」

「ありがとうな白雪」

俺はそういうとベッドに足を向ける。

「クエストを放棄するんだね？」

俺は闇の中で足を止めて

「しない。　この、依頼は完遂する。　元々、占いなんて判断基準の一つしかないんだし。　誰が相手だろうと俺は死ぬ気はないからな。　この件はキンジ達には内緒な」

「そう・・・」

悲しそうな声が布団に入る俺の耳に届くのだった。

第３５弾　黒衣の襲撃者

アドシアートの準備委員会に行くと言う白雪の護衛をキンジに任せて俺は校内の１室でノートパソコンを開いて情報を収集していた。
理子がいなくなったので少し、時間がかかるがこの前はそもそも信頼していた相手が敵だったわけだからな。

「ふぅ・・・」

ノートパソコンを閉じて誰もいない教室を見渡してから携帯電話を取り出す。

「ん？」

見ると着信アリとなっていたが非通知の相手だった。
依頼主かと考えるが用があるならまた、かかってくるだろう。

「そろそろ帰るかな」

パソコンをかばんにしまってから教室を出た瞬間見覚えのある後ろ姿を見つける。

「あれ？　白雪？」

俺が声をかけるより早くその影は廊下の向こうに消えてしまった。
追うかどうか迷うがどうせ、近くにキンジもいるはずだから気にかけないでおく。

「椎名先輩はっけーん！」

その時、どーんと後ろに衝撃があり誰かが背中に抱きついてきた。

「うお！　マリか！」

勢いに一瞬前に足を踏み出すが彼女は悪びれた様子もなく。

「昨日は椎名先輩伸びてましたから挨拶できませんでしたが今日も、お供しますね」

「いや、白雪の護衛はお前じゃ無理だろ！」

「でもほら、最後の尋問は私がやりますから関係者ですよ私は。もう、マスターズに単位の申請もしてますし」

「いつの間に・・・」

なし崩し的にマリも白雪の護衛パーティーに加わってしまったようだ。

「レキ先輩もパートタイムですけど参加してますし神崎先輩の許可ももらいました」

「レキも？」

昨日は断ったレキの顔を思い出しながら言うとマリは、はいと頷いた。

「神崎先輩が雇ったみたいですよ？　アドシアートの練習の合間しか参加しないそうですけど」

アリア・・・情報は共有しようぜ・・・俺、知らなかったぞそれ

「じゃあ、そろそろ星伽先輩迎えに行って帰りますか先輩？」

「そうだな・・・いや、その前にちょっと出かけるか」

「どこにですか？」

「ちょっと約束があるんだよ」

「私も行きます！」

「駄目だ！　ついてくるな！」

俺はそう言って窓から飛び降りるとワイヤーを使って一気にマリを引き離す。

後ろから椎名先輩ひどいという声が聞こえてくるが知ったことじゃない。

１人でこいと言われてるからな。

その約束とは武偵弾の職人からの引き取りである。

依頼主が紹介してきた奴は変わった奴で直接取引しかしないのである。

１００万円を渡して武偵弾１発を受け取って学園島に戻ってきた時

にはすっかり遅くなってしまっていた。
時刻は9時半を回っている。
やばいな、アリアに何言われるかわからんぞ。
大急ぎでキンジの寮に向かう途中
生温かい風が髪をゆらした。
それに気づけたのは幸運としか言いようがない。

「何！？」

満月の光から影ができて視界が少し暗くなった瞬間、俺は右に飛んでいた。

ガアアアン

とアスファルトが粉砕される。

「ちっ！」

飛びながらガバメントを引き抜くと襲撃者に向ける。
奇妙な襲撃者だった。
顔や髪をすっぽり覆う仮面、体を隠すような黒いマント、そして、
それとは対照的に
襲撃者の背丈はあろうかと言う巨大な西洋式の剣が手に握られている。
デュランダルという言葉が脳裏に浮かぶ。
情報収集の段階でデュランダルは剣の使い手という情報を見たのだ。
何が起こってるかよくわからんが、なら丁度いいじゃねえかここで
逮捕すりゃ白雪の護衛は終了だ。

「デュランダルかお前！」

確認のために行ってからガバメントを3点バーストで放つ。
だが、襲撃者は大剣を盾のように構えて銃弾を弾く。
同時に、地面をけりすさまじい速度で接近してきた。
はええ！
横殴りの一撃を街灯に巻きつけたワイヤーを引き戻してかろうじてかわす。
強い！
本気で戦わないと殺される。
襲撃者は武偵憲章など関係ないのか殺す気の一撃を繰り返している。
だが、戦闘狂モードの発動はこの状況では難しい。
発動条件の１つは３０秒の黙とうが必須だ。
後の方法はこの状況では使えない。
そう、強者相手に３０秒は致命的な隙になる。
都合よく援軍がくるという展開は期待せずアスファルトの上に着地する。
相手は接近戦一筋なのか再び接近してくる。

ドドドン

４５ＡＣＰ弾をものともせず接近してくる相手
銃弾を切る銃弾切りまで使いものともせず迫ってくる。
ならば
俺はデザートイーグルを抜くと相手に向ける。
それでも、敵の接近は止まらない。
こうなれば、アル＝カタで至近距離からこいつをぶち込んでやる。

「デュランダルは超偵という話だ」

脳裏に浮かんだ依頼主の言葉が浮かんだのは間一髪

横殴りの一撃を下にもぐりかわした俺がデザートイーグルを叩き込むより早く敵は左手に小太刀を持ちふるったのだ。
かわせない！
デザートイーグルで受け止めるか迷ったが右手の防弾制服でその一撃を受ける。

「ぐっ！」

バッドで殴られたような衝撃を受けながら俺は交代する。
見ると受けた部分が少し焦げている。
炎を使う超偵か・・・
小太刀から青白い炎が纏われており、その炎は大剣に映りゆらゆらと陽炎を起こす。
襲撃者が小太刀をしまい人差し指をくいくいと自分の方にまげてさあ、こいよというように挑発してくる。
馬鹿にしてやがるなこいつ・・・
それにな・・・

「てめえ馬鹿にしてのか？　公開させてやるぜ?デュランダルさんよ！」

戦闘狂モードの発動。
２つ目のキーは怒り。
特に俺は炎と戦場が重なればこのモードになれる。

極限の集中と戦闘狂モード
体に仕掛けてあるワイヤーと拳銃で無数のパターンを作り出す。
デザートイーグルとガバメントを手に持ちじゃりとアスファルトの地面を横に少し移動する。
相手は、これを待っていたのか両手で剣を握り直すと下段に剣を構

え直す。
互いの距離は１０メートル。
動いた瞬間、勝負は決まる。
そんな、状況。

「答えろよ。　てめえ何者だ？　デュランダルなのか？」

「・・・」

相手は何も答えない。
その時だった。

ドドドン

突然の銃撃に襲撃者が後ろに飛ぶ。

「優！」

「アリアか！」

アリアが路地裏から飛び出してきてガバメントを連射しながら俺に走り寄ってくる。

「大丈夫なの！　銃声が聞こえたから来たんだけどなんで優が襲われてるのよ」

「知らねえよ！　デュランダルに聞け」

「あいつがデュランダル？」

交代してこちらをうかがうように動かない敵をアリアは見る。

「気をつけろアリア。　あいつは、炎を使うぞ」

「優、援護しなさい。　アル＝カタで行くわ」

「はっ！　悪いなアリア。　逆だ。　俺が前衛に立つ。　あいつを沈める手札はもう、俺の頭の中にあるからな」

アリアがはっとして

「それが、優の覚醒モードなのね？　いいわ。　やってみなさい」

「ああ」

そういうと俺は地面をける。
後ろからアリアがガバメントで牽制しながら敵が動く。
あのマント防弾製らしく貫通には至らないようだ。
大剣を小枝のように扱う相手を沈める方法はある。
それに、剣の相手は昔、実家でさんざん叩き込まれているからな。
右手のみで大剣をマントの敵が振り下した瞬間

ガアアンン

金属と金属が激突する音と共にマントの敵の剣が浮かび上がった。
続けてマントの男が数回、衝撃を受けるようなしぐさを向ける。
こいつは、狙撃・・・まさか、レキか！
最大のチャンス
相手の懐に潜り込もうとした瞬間、男がマントから何かを放り出す。

「しまっ！」

目を閉じようとした瞬間、閃光手投弾が炸裂した。
後ろに交代しながら一時的に失明している状態で全神経を集中させる。
今、襲われたらと恐怖が襲うが相手の襲撃はなかった。

「優！」

後ろからアリアが駆け寄ってきたのが気配で分かる。

「アリア！　敵は！」

「逃げたわ。　レキ、犯人まだ、追えてる？」

携帯電話の相手はレキのようだ。

「目標を見失いました。　追撃は不可能です」

「ありがとうレキ助かったわ」

そういうと、アリアは携帯の電源を切った。

「優！　キンジの部屋に戻るわよ！　あいつ白雪の所に行ったかもしれない！」

そう言って、アリアは路地においてあったらしいカバンとももまんが大量に入った紙袋を持って走り出した。

「お、おい！　待てよアリア！」

ああ、なんでこうなるんだか・・・
護衛してるつもりが自分が襲われるなんて情けないよな本当に・・・

第３６弾　風穴タイム

「・・・やめて！　離して！」

「おとなしくしろ！」

そんな会話聞こえてきたので

くそ！　遅かったか！

「キンジ！　白雪！」

ドアを蹴飛ばすようにアリアと飛び込んだが・・・

俺とアリアが見たのは白雪の巫女装束をまるで脱がすかのように掴む上半身裸のキンジと巫女装束の白雪だった。

アリアの持っていた松本屋のももまんが１個転げ落ちて白雪の足に当たる。

「お前ら何やってんだ？」

「こ・・・こんのぉおおお・・・」

がる・・・がるるるとライオンのようなアリアのうなり声

「この馬鹿キンジぃいい！」

俺が止めるより早くアリアがガバメントをキンジに向け発射する。

「うお！」

慌ててキンジがかわす

「お、おい！やめろってアリア！　キンジ上半身裸なんだぞ！　死ぬって！」

後ろからはがいじめにしてアリアを止めるがアリアは収まらない。

「―ちょっ、ちょっと任せたらこれ？　この　強猥魔！　死ね！」

「ぐあ！」

アリアの右足が俺の股間に直撃し俺は激痛に後ろに倒れる。

お、男の急所だそこは・・・

俺が倒れたため、アリアはガバメントを連射しキンジを後退させていく。

そして、ついにキンジをベランダまで追い詰めてしまった。

ちなみにベランダの下はきたない東京湾だ。

「あ、あああたしに強猥したあげく今度は白雪！？　こ、このど変態！」

「ち、違うのアリア！　もう、負け惜しみはやめて！」

白雪に妙なことを言われアリアが振り返る。

「な、なんであたしが負け惜しみなのよ！」

「あれはキンちゃんが無理やりしたんじゃないの！　合意の上だったんだよ！」

そうなのか！

「ご、合意！？」

「そ、そうなのあれは私が自分で脱ごうとしてたの！だから、キンちゃんは悪くない！」

「ぬ、脱ぐってあんた達なにしようとしてたのよ！」

その隙を見て、白雪がアリアから拳銃を奪おうとするがアリアに投げ飛ばされてきゃんと悲鳴を上げる。

「って、いうか―た、たたたた例え合意の上であったとしてもォーっ！　キンジ！　そ、そそれはボディーガードのタブーよ！」

白雪の上を乗り越えてアリアがキンジに迫っていく。

キンジが助けてくれと俺に目を向けてくるが俺は別にキリスト教徒じゃないが十字に切った。

「な、仲良しぐらいならまだ大めに見るけど！く、クライアントとそ、そういう関係になるなんて武偵失格！　失格大失格ぅ！」

バリバリバリと銃弾の嵐がキンジを襲いキンジはベランダから腰のワイヤーで宙づりになった。

「アタマ冷やしてきなさい！　浮き輪はあげない！」

非常なアリアの銃弾はキンジのワイヤーに命中し、キンジがまるでゴミのように落下防止用のフェンスに当たりバウンドしてバシャアアンと海に落ちてしまった。

「アリア・・・かわいそうだからこれぐらいで・・・」

「強猥魔をかばうなら風穴」

「なんでもないです・・・」

バシャバシャと下から聞こえてくるがすまないキンジ・・・死ぬなよ。

そして、次の日、見事に風邪をひいてしまったキンジを置いて3人で学校へ

白雪が最後まで残ると聞かなかったがキンジを休ませてあげてくれ白雪さん・・・

なんとか学校について1時間目が終わった休み時間、俺は屋上にいた。

「昨日は大丈夫だったか？　一時的に失明しただろ？」

「片方の目は閉じていました。　それに失明は一時的なものでもう回復しています」

無表情にドラグノフ背撃銃を肩にかけ風に髪を揺らしながらまっすぐとフェンスの向こうを見るレキを見ながらコンビニで買ったアイスティーを飲みつつ周知メールで黒衣の襲撃者のことを見ながら

「たく、デュランダルの野郎護衛の排除に目的を変えたのか？」

あいつがデュランダルと言う確証は全くない。
だが、一つ言えるのはあいつは強い。
全て手を明かしたわけではないがレキが狙撃で援護していなければ勝てていたかと言えば絶対勝てたとは言い切れないのだ。
それに・・・
炎・・・
嫌な光景だ。
椎名の家を追い出されるきっかけになり俺が武偵になることを決意させたあの事件でも炎が周りを包んでいた。
あの時の記憶はほとんどない。
ただ炎に揺れる銀の髪の魔女。
今、思えばあいつも超偵だったのかもしれない。
いや、
武偵でないなら魔女と言う方が正しいかもしれない。

「・・・優さん」

レキの声にハッとして顔を上げるとレキが下に向け指を指していた。

「どうしたレキ？」

「アリアさんです」

「アリア？」

フェンスから下を見ると長いツインテール揺らしながらをアリアが校庭を横切り、門に向かっている。

もうすぐ、２時間目だぞ？

さぼるのか？

あ、まさかかなえさんの面会か？

「レキ俺、２時間目サボる。　白雪の護衛俺らがいない間、頼むな」

「・・・」

こくりとレキは首を前に倒したのでまた、飯おごるよと言ってからワイヤーで校庭に降りるともう見えなくなったアリアを追うため門から外に飛び出すのだった。

第37弾　最強の戦闘狂

俺が前にアリアに見つかったのは戦闘狂モードじゃなかったからだ。
あっさりとアリアを見つけた俺は電車を乗り継いでとある駅に降りる。
ここは・・・
上野駅だ。
アリアは武偵高の制服のまま携帯電話を見ながら歩いていく。
GPS機能を使ってるみたいだな。
ああ、ここは・・・
予想通りアリアはとある薬局に入っていった。
にやにやしながらアリアが出てくるのを待ち

「よう、アリア」

「ピッ！　ゆ、優！　なんでここにいるのよ！」

アリアはびくりとして飛びあがって言う。

「クエストの帰りだ」

無論、嘘だがアリアには余裕がないらしい。

「そ、そうなの」

「ああ。それキンジのだろ？」

アリアは慌てて紙袋を後ろに隠す。

「ち、違うわよ！　これは別に・・・」

ばればれだってアリア

「キンジを東京湾に叩き落としたの後悔してるんだろ？　早く持って言ってやろうぜ」

「う・・・ううう」

アリアは顔を真っ赤にしながら何かを言いたそうにしているが結局、認めるしかないのかついてくる。

なんだかんだ言ってもこの子は優しいんだ。

付き合いは短いがそれは俺にも分かる。

まあ、日常の風穴を無くしてくれればいいんだが・・・

駅に向かいながら

「ゆ、優、黒衣の犯人のことだけど・・・」

ああ、あれか

「何か分かったのか？」

「分からないの。　レザドも何も掴めてないみたい。　あれがデュランダルだとしたら納得できない点もあるけど・・・」

確かに今に至るまで確信的な情報を掴ませなかったデュランダルが情報を掴ませるのは妙な話だ。

となるとあれは・・・

「あれ？　そこにいるのは椎名君かな？」

声に振り返るとそこにはスーツ姿のイケ面の男が立っていた。
ネクタイをつけずに胸元を開けているいわゆるホステスのような優男

「げっ！」

本心からそういうと優男は

「御挨拶だね椎名君。　その子は彼女かい？」

「か、かの・・・」

アリアがぼぼぼと赤く赤面してしまうのを片目に

「違う！久しぶりだな　沖田　刹那」

沖田はアハハと笑いながら

「確かに久しぶりだね。　模擬戦で叩き潰した以来かな？」

「今やれば俺が勝つ」

「へぇ」

沖田の目が細まる。

「ゆ、優この人は？」

アリアが訪ねてくるのでしかたなく

「沖田　刹那巡査部長。　公安０課の糞野郎さ」

「アハハ、椎名君。　あまり調子に乗ってると殺すよ？」

それは冗談ではない。
公安０課は殺しのライセンスを与えられた集団だ。
キンジの父もそこに所属していたらしいがこの集団は戦闘のプロだ。
この沖田に俺は数年前半殺しに会っているのだ。

「今やろうか？」

本気で言うと沖田は笑いながら

「君を半殺しにするのもいいけど僕はこの後デートなんだ。　そのつもりはないよ」

「またかよ・・・何人目だ？」

「ハハハ」

沖田は笑って答えない。
こいつは、付き合っている女の数は計り知れない。
美形というのあるがこいつは一言で言うなら危ない感じを纏っているのである。
危険な香りがする男に引かれる女性は少なくないということ
公務員だから給料も安定してるし。

「ここで、会ったのも縁だね。　コーヒーぐらいならおごってあげるよ」

「いらねえよ！」

本気でおれは言う。
正直言えばこいつは嫌いだ。
1度半殺しにされた過去もあるが性格が嫌いなのだ。

「そう言わないでおごられなよ。　それに神崎　かなえの娘とも話してみたいしね」

「っ！」

アリアの目が見開かれる。

「ママのこと知ってるの？」

沖田は微笑みながら

「冤罪をかぶせられてる　人なら知ってるよ」

「・・・」

公安0課は公務員であり警察官である。　それが冤罪と言うのは問題がある。
だが、沖田はそれを問題とは捉えていないようだった。

「上から圧力がかかってるから冤罪きせられてるけど無罪でしょあの人？」

「・・・」

アリアは何も言わない。

「まあ、僕ら公安には関係ない話だけどね。　後ろにいる組織が相手なら僕が皆殺しにしてあげるけど」

「後ろの組織だと？」

「あれ？　知らないの？」

アリアがぐっと唇をかむのが見えた。

あれか・・・イ・ウ―・・・存在を知るだけで消される可能性がある組織。

俺が戦うべき組織だ。

「まあ、それはおいとこうか。　僕、現金がないんだちょっと銀行についてきてよ」

どうするとアリアに視線を向けるがアリアは情報がもっと欲しいらしい。行くわよと指で俺に知らせる。

こいつとはあまりかかわりたくないんだが・・・

こうして、俺達は沖田と銀行に入ったのだが・・・

「てめえら動くな！」

なんでこんなことに・・・

沖田が受付に呼ばれて進んだ瞬間銀行強盗が押し寄せたのだ。

覆面をかぶった5人組の男が拳銃を構えて金を出せと受けつけに言っている。

（アリア）

俺はまばたき信号でアリアにどうするか聞くがアリアは現状維持を俺に通達してくる。

人質がいる以上妥当な判断だ。

だが、次の瞬間、俺は目を見開く。

「お姉さん。　２０万おろしたんだどいけるかな？」

まるで強盗なんていないように沖田は受付に肩肘をついて笑顔で話しをしている。

「え、あの・・・」

受付のお姉さんが困ったような顔を浮かべた瞬間

「てめえ！　なめてんのか！」

安全装置すらついていない悪質な銃、黒星を沖田に向けるリーダー

らしい覆面の男

「うるさいね君」

ドオオン

次の瞬間、リーダーの男が悲鳴を上げた。

「ぎ、ぐわあああ！」

見ると男の人差し指が吹き飛んでおり黒星が血痕とともに床に落ちている。

「て、てめえ！」

仲間の強盗が銃を撃とうとした瞬間、沖田が動いた。

ドドドド

４発の銃声

男たちが悲鳴を上げて倒れる。

殺してこそいないがあれはもう戦闘不能だ。

「邪魔しないでもらいたいなぁ」

沖田はデザートイーグル２丁をしまいながらリーダーの男の肩を踏む

「ぎ、ぎああ！」

血がにじむ場所をぐりぐりと踏みながらデザートイーグルを男の額に向ける。
沖田は口元を歪め悲鳴を楽しむようにぐっぐっと力をこめる

「君みたいなクズは死んでもいいよね？」

「え？　あ・・・助け・・・」

涙を流しながら強盗が言う。
圧倒的な戦闘力。
大型自動拳銃デザートイーグルを2丁同時に使いこなしているこいつは悔しいが強い。
沖田は笑いながら

「駄目だよ」

引き金に力が籠った瞬間

「やりすぎよ！」

アニメ声と共に沖田が後退する。

「公務執行妨害だよアリアちゃん」

沖田は笑いながらデザートイーグル2丁をアリアに向ける。
対するアリアはガバメント2丁を向けながら

「あいつらは戦意を失ってるわ！　これ以上は必要ない！」

「ふーん」

沖田はアリアに銃をむけるが

「やめろよてめえ」

おれが立ちふさがると沖田はふっと笑みを浮かべて銃をしまう。

「犯罪者をかばうのは罪だけど。まあ、いいよ」

その瞬間、警官が飛び込んできた。
沖田は警察手帳を見せながら人の波に消えていった。

「優・・・あたしあいつ嫌い」

「ああ、俺もだよ」

キンジの父が所属していたと言う公安０課。　殺しのライセンスを持つ集団・・・
全てが沖田のような正確ではないのは分かっているがなんともやりきれない気分だった。

第37弾　最強の戦闘狂（後書き）

沖田　刹那（おきたせつな）

年齢　２３歳

所属　警視庁公安０課

容姿　茶髪で一見すれば危ない男

武装　デザートイーグル２丁　日本刀（通常は持ち歩いてはいない）

ランク　S

補足　新撰組１番隊隊長沖田の子孫で４世である。
強者揃いの公安でも最強クラスの戦闘力を持つ。
しかし、性格に難があり捕縛よりも殲滅戦以外では投入しにくい存在である。
しかし、殺しにかんしては沖田と対峙した相手はほぼ確実に殺害されている。
大型拳銃のデザートイーグルを２丁と日本刀を武器に戦う。
優希も中学時代沖田と戦う機会があったのだが手も足も出ずに半殺しにされている。
女性関係にだらしなく頻繁に違う女性とデートしている姿をよく見かけられる。
優の言葉を借りるなら「絶対に敵に回したくない相手」

紅　真里菜（くれないまりな）

所属　武偵高１年　尋問科（だぎゅら）

容姿　栗色のサイド―テール及びツインテール（気分によりかわる）

武装ＣＺＢ７５

ランク　Ｓ

補足

　優のアミカで助けてもらったことから彼に一目ぼれし事あるごとに優に付きまとう。

いわゆる元気系後輩の美少女だが一部ではヤンデレではないかという疑いもある。

尋問に関してはトップクラスの実力でダギュラでは１年で唯一のＳランクである。

しかし、戦闘はダメらしく優に訓練を依頼している。

彼女いわく戦闘もできるようになりたいらしい。

本作の準レギュラーキャラと言える存在

黒衣の敵

年齢　？

所属　？

武装　西洋式の大剣　小太刀　蒼い炎

容姿　防弾製のマントに顔の見えない仮面（笑顔の塗装がされている）

補足

　現時点では全てが謎の存在。
デュランダルという疑いもあるが真意は不明。
炎を使った所から超偵と同等の存在であると予想できる。
Sランク3人から逃げ切った所から相当の実力者であることは疑いない。

第３８弾　その名はももまんフルスペシャル

キンジの部屋に戻った時はすでに昼になっておりアリアが荒い息を吐いて眠っているキンジの横にそっと　特濃葛根湯を置いて、そっとキンジの額に小さい手を置いている。

「・・・」

俺はその光景を静かに見守るのだった。

よく晴れたその日、俺は学校の屋上でぽかぽかと日差しを浴びながら携帯をいじっていた。
体育館の方からはアドシアートの練習の音が聞こえてくるが俺はサボりだ。
キーボードを割り振られているが練習はちゃんとしてるから問題はない。
それより・・・

「・・・で黒衣の襲撃者がきたんだが」

俺はアリアの護衛の依頼主と話をしていたのである。
昨日のことをありのままを伝える。

「炎を使う相手か・・・」

依頼主は何か考えるような時間をとって

「それはデュランダルではないよ」

「分かるのか？」

「私が集めた情報によればデュランダルは実在する。　そして、能力は炎ではない」

「というと別の力か？」

「そうだ。　だが、君にこれ以上教えることはできない」

「え？　なんでだよ。　知ってるなら教えてくれよ」

「私は君のサポートは約束したが排除は君の仕事だよ。　相手が使う力を見定めて戦うのもいい経験になる」

意地悪だな今日の依頼主は・・・

「じゃあ、それはもういいけど黒衣の奴のことなんだがあんた知ってるだろう？」

「残念だが分からない。　しかし、しばらく襲撃はないだろう」

「まさか、あれがあんたなんて言わないよな？」

「フッ、　もしそうならどうするのかな？」

「どうもしないさ。　ただ、あいつが現れたら今度は捕まえてやる」

どの道暴行罪の現行犯で逮捕する権利はある。

だが、実質Ｓランク３人を相手に立ちまわった奴だから警戒は必要だが・・・

「少なくても君がデュランダルと対峙するまでは、黒衣の相手は動かない。　そう私の推理は結論している」

「推理ね・・・」

そこまで言った時

「だーれだ」

俺の目が真っ暗に染まる。

「・・・」

無言で携帯の電源を切ってから

「マリだろ？」

「正解で―す♪　サボりですね椎名先輩」

にこにこしながらすとんと俺の横に女の子座りをしたマリは俺の方を見てくる。

「なんだよ？」

「なんでもありません。　ただ、先輩の隣にいるのが嬉しいだけです」

よくわからんのだが・・・

「マリはアドシアートの手伝いはしないのか？」

「1年ですからね。　雑用はありますけどクエストを受けてる私はあまりやることがないんです」

「ふーん」

ああ、白雪の護衛ね・・・

とはいえ、マリが戦うような状況はまずないと思いたいけどな。

「ところで椎名先輩さっきの電話なんですが・・・」

♪♪♪

「ん？」

携帯の着信メロディーが鳴ったので画面を見るとアリアだった。

「もしもし？　アリアどうし・・・」

「優！　今どこにいるのよ！」

おいおい、声からして怒ってるぞアリア

「な、何かあったのか？　今屋上だが・・・」

「すぐに校門まで来なさい！」

「待てって何が・・・」

「風穴！」

「分かった」

ぷつんと電源が切れたので俺は呆れながら携帯をしまう

「悪いなマリ、というわけだ。　俺帰るな」

「いえいえ、先輩私も行きますよ。　デュランダル関連でしたら大変ですからね」

なのが大変なのか分からんがまあ、アリアも一人でこいとか言ってなかったしいいかな・・・

そして、３０分後

「バカキンジ！　バカキンジ！　バカキンジィ！」

ばくばくとももまんを平らげていくアリアを前に俺達はなんといっていいのか沈黙していた。

ちなみにアリア、俺、マリ、レキと言った配置だ。

場所はレキとよく来る中華料理店である。

「お兄さんやりますね。　今度はロリですか？」

ぐっと親指を立てるのやめろ！

「同級生だ！ロリっていうな！」

「いえいえ、さすがに3股となるとナイスボートに・・・」

「なんだよそれ！　ていうかここにいる2人は友達！　後は後輩だから！」

最近、1人でもよく来るからこの店員とも知り合いになっていたがどうやらこいつ武偵高の生徒らしい。
学科はアンビュラスというから驚きだ。
まあ、1年らしいマリとは知り合いではないらしいが・・・
名前は天童　アリス
外国人とのハーフらしく髪は黒く蒼い目をした女の子だ。
日本のアニメが大好きでよくそのネタを振られるが俺は分からん。
そして、俺のことを一貫してお兄さんと呼び楽しんでいる。
マリと言い後輩はどうなってるんだ武偵高・・・

「で？　何があったんだアリア？」

アリスに注文してから俺が聞くとアリアが顔を真っ赤にして怒りをぶちまける
要約するとキンジと喧嘩したらしい。

「あれ？　神崎先輩黒衣の襲撃者のこと遠山先輩に説明しなかったんですか？　そこを強調して説明したら遠山先輩も納得したかもしれないのに・・・」

「あれはデュランダルじゃないわ」

「根拠はなんなんですか？」

「勘よ」

ま、アリアにはシャーロックホームズ1世の推理力が遺伝しなかったらしいからな。
うまく説明できないんだろ

「まあ、俺も独自の情報であれがデュランダルでないと考えてるけどな」

難しい顔をしていたアリアの顔がぱっと輝く

「信じてくれるの優？」

「ん？」

どうやらキンジの時は勘と言っても全く相手にされなかったらしい

「信じるよ」

ここで余計な補足入らないだろうと考えて言うとアリアはそっかぁと嬉しそうにしながらバカキンジも信じたらとか呟いている。
そんな時

「お待たせしましたぁ！」

「おう、きたってえええええええええ！」

俺は仰天したアリスが持ってきたのは山のように積み重なったももまんだった
４０個はあるぞ！

「な、なんなんだアリスこれは？」

「はい？　お姉さんが注文したものですけど？　ももまんフルスペシャルです」

「ふ、フルスペシャルだと！」

「ちなみに地獄ラーメンに代わる新メニューです」

「！？」

ばっとメニューを見るももまんスペシャル・・・あ！あった

「い、１万だと！」

「はい！　１人で食べきらなかったら払ってもらいますよ」

「レキ様！」

俺は救世主であるレキに頼もうと見るが

「これは誰にも上げないわよ。　あたしのものなんだから」

「はい、開始です」

「ま、待て！」

「あーん」

幸せそうにももまんをほおばるアリア
やばいぞ・・・

「レキ！　いくら持ってる！」

ちゅるちゅると醤油ラーメンを食べ始めたレキに聞く

「カードしかありません」

だあああ！駄目だ！

「マリは！」

「私今月ピンチなんですよね。　先輩のおごりですから来ましたけど３００円しかないです」

なんてこった！

「アリア！　金持ってるか？」

「カードと１０００円しか持ってないわ」

俺の財布は・・・３０００円・・・駄目だ全く足りねえ！
何の因果かここに大人数で来るたびにひどい目に会ってる気がする。
レキは食えたがアリアは食えるのか？

「お兄さん大丈夫ですよ」

にこにことアリスが俺を見ている。

「ん？」

「お兄さんは常連ですからつけでいいですよ」

「え！？　まじ！」

「はい、利子は十　四で」

「高けぇよ！　サラ金でもそこまで高くねえぞ！」

まずいぞ本当にまずい
そう思ったのだが・・・

「あれ？」

見るとももまんは半分以上減っていた。

「ば、馬鹿な・・・」

アリスが引いている
そりゃそうだろ。
アリアの小さな体のどこにあの量が・・・

「あむ、ん・・・幸せぇ」

笑顔で頬に右手をあてるアリア
かわいい！っていうか行けるのか！

そして、5分後店の店長が床に両手をあてていた

「くっ・・・地獄ラーメンに続いてももまんスペシャルまで・・・兄さんあんたの連れは化け物か？」

は、ハハハ

苦笑いしながら満面の笑みでももまんスペシャル制覇という写真をアリアが取られお兄さん！また来てくださいねというアリスの声を聞きながら店を俺達は出るのだった。

女の子の胃ってブラックホールなのかな？

第３９弾　ロボット少女のお部屋

「優どこ行くのよ？」

「え？」

中華料理店を出て俺が帰ろうとするとアリアが声をかけてくる。

「どこってキンジの部屋と言うかもう俺の部屋でもあるが」

「帰ったら風穴」

「なんでだよ！」

そこで、俺はアリアがまばたき信号をしているのに気付いた。
それを読み取るとデュランダルが盗聴してる可能性がある。
そのため、キンジとは喧嘩したふりをして護衛をキンジ一人に任せるだ。
ふりって・・・本気で喧嘩したくせに・・・

「で、でもそうなると俺はどこに行けばいいんだ？　不知火の家か武藤のとこか？」

「レキの部屋よ」

「まずいだろ！　女子寮だぞ！　っていうかレキはいいのか！」

話はついているらしいこくりとレキが頷く

「駄目です！　椎名先輩は私の部屋に来てください！」
焦ったようにいいだしたのはマリだ。
ええい！お前も女子寮だろうが！
「それじゃ意味ないのよ！」
「意味ってなんですか！　椎名先輩私の部屋に来てください！　精一杯おもてなししますから」
「こ、こら腕を掴むな！」
「こいつはあたしの奴隷よ！　優！　どちらに行くか選びなさい」
1　アリアに従いレキの部屋に行く
2　マリの部屋に行く
目の前に選択肢があるみたいな状況じゃねえか！
しかし、アリアにも考えがあるみたいだしここは1だな
「悪いがアリアの提案に乗る」
「そんなぁ・・・」
がくりとマリは肩を落としアリアは当然よと言うようにない胸を張る。
かくして、俺の女子寮ライフが始まるのだった。

女の子の部屋ってぬいぐみとか一杯とかイメージがあるが現実はそうじゃないんだな・・・
レキの部屋に足を踏み入れた俺がいだいた感想はまず、それだった。
一言で言えば何もない。
武器を整備する道具は揃っているがカーペットもカレンダーすらかかっていない部屋だった。
アリアが先に持ちこんだらしい寝袋などはあるがレキの私物がほとんどない。
レキの部屋なのにだ・・・

「お前はこんな部屋で生活してるのか？」

「・・・」

無言でコクリと頷くレキ

「ふーん」

窓から外を見ると丁度キンジの部屋が見える位置にこの部屋は会った。
なるほどなアリアはここからキンジ達を護衛するつもりらしい。
レキならこの程度の距離、問題なくサポートできるしな
そして、この晩寝袋って寝にくいんだなと俺は実感することになるが困ったのは隣で眠るアリアのクチナシの匂いのせいでどうしても

寝れなかったんだ。
クレイモア地雷を仕掛けられなかったのは多少は信用してくれたのかな？
拷問だちくしょう！
隣の部屋ではレキが寝ているはずだがさすがにドアを開くのはまずいからな
リビングの端で俺は目を閉じるのだった。

それから数日後、レキがキンジに呼び出されたと言う情報を聞いた俺はレキと一緒に学園島唯一のファミレスに来ていた。

「武藤か不知火の所にいると思ったんだがまさか、レキのところとはな・・・」

呆れたようにいうキンジ

「まあ、いいじゃねえか。　仮住まいだよ。　アリアと仲直しろよキンジ」

「あれはあいつが悪い・・・いもしない犯人に振り回されて・・・」

困ったもんだ。
アリアには黒衣の襲撃者の情報はキンジには与えないように言われているしキンジはそこまで警戒してないようだ。
まあ、デュランダルじゃないと言われてるから俺以外がそこまで、

警戒する必要はないのかもしれんが・・・

「キンジ、多少は警戒しとけよ」

「優までそんなこというのか？」

少し怒ったような声で言うキンジ

アリアとの喧嘩が尾を引いてる結果か・・・

ヒステリアモードにならないと本当に駄目だな。

「悪い忘れてくれ。　そんなに怒るなよ」

「いや、俺も悪かった。　それで・・・」

キンジから白雪の近況を聞きながら俺達は雑談をかわす。

レキは終始無言。

何度か会話を振ったがこくりと頷いたりふるふると首を横に振るだけだった。

そして。アリアの話になり

「白雪とは大違いだ。　特濃湯根湯も買ってきてくれたしな」

「はっ？　おい、それって・・・」

「あ、もうこんな時間か。　悪い優、レキ今日は用事があるんだ」

「用事？」

「ああ」

「用事とは外出ですか？」

いきなりレキが口を開いたのでびっくりして俺がレキを見ると

「だったらなんだ？」

「気を付けてください。　ここ数日は風に邪なものが混ざっている」

「うちの高校そのものがよこしまだろ」

といって行ってしまうキンジ

あれ！　キンジ会計払ってくれたのかラッキー

そして、同時に俺は思い出す。

「あ！　そういや今日は・・・」

俺は横にいるレキを見て少し考える。

「なあレキ！」

「・・・」

無言

「今日これから花火大会があるんだよ。　一緒に行かねえか？」

「・・・」

無言の無言

言ってから俺はとんでもないことを言ったんじゃないかと思い返す。

女の子と出かけるのってデートじゃないのか？
いやいや、違う！　レキは友達だ。
ってあれ？　レキと俺っていつ友達になったんだ？
去年はクエストでしか接点がなかったのに・・・
ぐるぐるといろいろ考えていたが

「はい」

レキの声が聞こえる。

「はい？」

バカみたいな声を出す俺

「花火大会に私も行きます。　優さんと」

おいおい・・・どうなるんだよこれ・・

第４０弾　レキデート　前編

「なんで今日なんですか！　なんで！」

電話の向こうから聞こえてくるマリの声

「ああ、だから誘ったんだが・・・」

「今すぐ行きます！　超ダッシュで・・・」

「あ～、何言ってんの？」

「きゃっ！　離してください綴先生！　乙女の危機なんです！」

どうやら横にダギュラの綴いるらしかった。

ということは学校にいるのかマリは

「駄目駄目。　これから・・・えっと・・・そう、犯人の尋問だよ。紅の担当は１２人いるんだからさっさと行くよ」

「嫌です！　１２人も尋問してたらお祭り終わって椎名先輩がぁ！」

「はいはい」

ズドン

という音が向こうから聞こえマリの声が止まった。

「ま、マリ？」

俺が電話越しに言うと

「ああ、椎名ぁ？　紅は無理だからあきらめな」

ぷつんと電話が切れる。
よくわからんがマリは駄目ということだな・・・
アリアには電話したんだがつながらなかった。
となると武藤や不知火当たりだが野郎を誘ってもなぁ・・・
まあ、たまにはいいかな

「じゃあ行くかレキ」

祭りだから浴衣を来ているとかそういうこともなくいつもの防弾制服にドラグノフを肩にかけているレキはこくりと頷いた。
ま、レキに限って俺に気があるとかそういうのじゃないのはわかってるさ。　白雪達も行くみたいだから護衛が同じ会場にいる方が安心だからな。
武偵憲章第５条　行動に疾くあれ。　武偵は先手必勝を旨とすべしだ。

モノレールや電車を乗り継いで目的地の葛西臨海公園についたときには花火は始まっていた。
レキは無表情に空を見上げている。
うーむ、ここに来るまで会話がほとんどなかったんだよな・・・
ロボットレキは伊達じゃないってか？

「おっ！　屋台があるぞ！　行こうぜレキ！」

こくりと頷いてくれたが１歩を踏み出さない。
後から後から人が来てはぐれてしまいそうだ。

よし、俺はレキの右手を掴んだ。
小さくてひんやりとしている。

「？」

レキが不思議そうにこちらを見てきた。

「はぐれるといけないからな。　よし！　行くぞ！」

状況が分かっているのかいないのかレキは何も言ってこない。
どーんと花火が会場を照らす中、レキの手を引いて屋台を回りまくる。
5分程したときには俺の手には食べ物がこんもりと乗っていた。

「おじさん！　フランクフルト2つ！」

「あいよ！　兄ちゃんデートかい？　サービスしてやるよ幸せ者め」

「違うって！」

そんな何度目かもわからない会話をしながらレキの手にフランクフルト渡す。
食べながらだと手をつなげないのではぐれないように注意しながら歩く。
レキは小さな口でぱくぱくとフランクフルトを平らげていく。
この子はこんな状況じゃないとカロリーメイトしか食べない。
戦闘食としては優秀なんだが味気ないからなあれ・・・
しかし、レキ・・・お前本当に表情1つ変えないんだな・・・
笑えばかわいいだろうという確信はあるのだがそれを実行する手がまるでない。

「そういえば、もう終わりなんだな・・・」

花火はまだ、上がっているが人が減り始めている。

キンジは間に合ったのかな？

「・・・」

ぱくりとフランクフルトを平らげたレキは

「・・・優さん」

「ん？」

俺がレキが見ている方を見ると１件の屋台があった。

「ああ、射的か？　よしやるか」

レキの返事も待たずに屋台の前まで来て俺は絶句した。

「やあ兄ちゃん。　俺の超豪華射的やってってくれよ」

「すげえ商品だな・・・」

ＰＳ３やＰＳＰといった最新機種のゲーム機やＩＰＯＤやテレビまであるぞ。　でもあんなものコルク銃じゃ落とせないって」

周りにはカスのような商品が置いてあるだけだ。

ひどいのはオヤジのプロマイドとかまである。

誰がほしがるんだ？

「やめといたほうがいいよ学生さん」

「え？」

俺が振り返ると少し気が弱そうな男性が小声で

「その屋台ぼったくりなんだ。　絶対に落とせないよな重いものばかりおいて参加者を釣って荒稼ぎしてるんだよ」

見ると浴衣の女の子があれとってと彼氏に行っているが商品にはあたっても棚から落ちない。
まあ、ＰＳ３だから結構重い。

「どうなんだい？　兄さんやるのかい？」

「レキ、ここはやめて・・・」

「やります」

「え？」

スナイパーとしてのプライドか何かが火を付けたのかコルク銃を手に取る。

「ほらよ。　こいつで落とせたら商品はやるよ。　姉ちゃんかわいいから弾いた玉があたった商品もやるぜ？」

それってあんたのブロマイドもだろ！いらないし

「っておい！」

なんとレキはドラグノフを肩から下ろして構えようとしたのだ。

「ドラグノフを使うな！　これでやるんだ！」

俺がコルク銃を渡すとレキはじーとコルク銃を見ていたがやがて、構え直した。

ふー、そりゃドラグノフならＰＳ３だろうと問答無用で取れるだろうさ。

破壊されるけどな。

レキがコルク銃を構える。

まるでスナイパーのよう・・・いや、本物のスナイパーのレキの周りの空気が変わる。

冷たい空気が背を撫でた気がする。

ほ、本気だレキのやつ

ギャラリーも狙撃銃をもった女の子が射的をすると知ってか増えている。

ごくりと誰かが息を飲んだ。

「私は１発の銃弾」

レキのいつものセリフが会場に響く。

「銃弾は人の心をもたない。　故に何も考えない。　ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

その瞬間強い風がレキの後ろから吹いた。

パン

軽い音と共にコルクが発射される。
それは、ＰＳＰの箱に命中。
ぐらりと箱が揺れ落下を始める。

「馬鹿な！」

オヤジが悲鳴を上げる。
だが悲劇はそれで収まらなかった。
比較的上の方に配置されていたＰＳＰが落ちた先にはなぜかバケツが置かれていた。
それが風の影響とＰＳＰの激突でぐらりと揺れる。
勢い良くそれがＰＳ３の箱にぶち当たり一番下の棚のＰＳ３が落下する。

「ひいいい！」

オヤジの顔が青ざめていく。
まあ、当然といえば当然なんだが・・・

「私は１発の銃弾」

続けてレキは２発目を放った。
正確無比に箱の端に当ててコルク銃でも落とせるように商品をたたき落としていく。
３発４発、命中精度は百発百中だ。
ひでえ・・・自業自得とはいえ高額商品ばかりレキはたたき落としていく。
１０万超えるって

「や、やめてくれ！じょうちゃんあんたは化け物か！」

「私は1発の銃弾」

そんなオヤジの声を無視してレキは非情に言い放つ。
そして、とうとうブロマイドを除いて最後に残ったのは巨大な液晶テレビだ。
あれは無理だろ

パン

最後の銃弾をレキが放つ
それは、屋台の上部に命中する。

「？」

「は、ハハハ、これはさすがに無理だったようだな？３０万のテレ・・・」

オヤジが行った瞬間ばちんという音と共に鉄骨がテレビの箱に命中し、下段においてあったテレビに命中するとその存在を床に沈めた。

「あ・・・ああ」

この世の終わりみたいな顔でオヤジが膝をついた。
ああ、屋台を組み立てる時の鉄骨狙ったんだな。
いい加減に作ったんだろうなこのオヤジ・・・
わああと歓声があがる。
どうやら、誰も高額商品を取れなかったらしいがこの荷物どうする

んだ？
もって帰れないぞ

「オヤジさん郵送とかできる？」

びくりとオヤジが肩を震わせる。
そりゃそうだろわずか１０００円程度の銃弾で１００万近い損害なんだからな
しかも、渡す気がなかった商品ばかり・・・

「か、勘弁してくれ！　金は返す！　これを渡したら俺は破産だ！」

「いや、あんたも商売人なら覚悟を・・・」

「わかりました」

「きめ・・・え？」

レキの声に振り向く

「ほ、本当か！」

オヤジが顔を輝かせる。
きめえ

レキはこくりと頷くと歩きだしてしまう。

「あ、おい！　レキ！　おやじ金返せ」

「は、はい！」

「もうこんな馬鹿なことするなよ」

「はい！

俺はレキの射的の金をもらうとレキを追った。

どうでもいいんだが最後に残ってたオヤジのブロマイドが親指立てて笑顔だったのが何かわわえるよな

第41弾　レキデート　後編

「レキ！」

すたすたと歩くレキにようやく追いつくと俺はレキの手をとった。
レキが振り向く

「どこ行くんだよ」

「キンジさんです」

「キンジ？」
振り返ったレキが指さした方を見ると、浴衣姿の白雪とキンジが歩いているのが見えた。
レキは護衛の観点から2人に接近したのだろう。
でもなぁ・・・
俺はレキの手を引っ張る。

「？」

レキが首をかしげる。

「お邪魔は野暮だろ？　祭りも終盤なんだからデュランダルの襲撃もないだろうしな？」

周りの情報に敏感なやつだ。
こんな人ごみのなかでは襲ってはこまい。

「それではそうするのですか？」

レキが聞いてくる。

「決まってるだろ？」

「？」

「最後まで祭りを楽しむのさ！」

レキの手を引いて祭りの人ごみの中に飛び込み屋台を回る。
レキは抵抗せずに付いてきてくれた。
そうして、時はすぎ
祭りの最後の花火が上がったとき俺たちは帰るために公園をでる道を急ぐ。
すっかり遅くなっちまった。
射的のオヤジが泣いて神様とレキを拝むのでふりほどくのにデザートイーグルまで使う羽目になった。
キンジたちも帰っただろうな・・・

暗い公園を歩きながら俺は無言で歩くレキを見る。
表情は無表情。
結局、俺はレキを笑顔にすることは叶わなかった。
だが、一つ聞いて見たいことがある。

「レキ」

「はい？」

「俺と遊んで楽しかったか？」

「・・・」

無表情・・・だが、レキはこくりと前に首を倒してくれたんだ。
それだけで報われる気がする。

「そっか」

その言葉だけで来たかいがあるよレキ

学園島に戻り部屋に先にもどるというレキと別れコンビニで雑誌を読んでから
外に出る。
さて、女子寮に帰るかと道を歩いていた時

「椎名ぁ！」

「あ？」

突然の夜の闇の中の怒鳴り声に振り向くと数人の人影があった。

「誰だよお前ら」

1歩メガネをかけた男が進み出る。

「我々はレキ様ファンクラブＲＲＲだ！」

「・・・」

空いた口が塞がらないんだが・・・

「れ、レキ様ファンクラブ？」

「そう！　レキ様のためのレキ様だけのレキレキファンクラブだ！
貴様椎名　優希！　レキ様と同棲するだけでは飽きたらず祭りで、
で、デートだと！許すまじ！」

ああ、そういえば学校にはレキを神様と崇める熱狂的なファンクラブがあったな・・・
こいつらがそうなのか？

「で？　そのレキ様ファンクラブがなんのようだ？」

「決まっている！」

メガネの男の後ろからデブの男が進み出る。

「すぐにレキ様から手を引け！　このハーレム野郎！　貴様はロリと後輩で満足しておけ！」

「はっ？　デートだとか後輩とかロリとか意味わかんねよ。　俺とレキは友達だ。　手を引くとかはねえよ」

「そうか・・・なら、貴様は抹殺するとまではいかなくても半殺しにあってもらおう」

まあ、殺したら武偵3倍の刑で最悪死刑だからな・・・

「てか、お前思い出したぞ！　アサルトの村上だろう！」

「そのとおり！　レキ様ファンクラブ会長村上　正だ！」

確か、アサルトでは中くらいの位置にいる奴だったなランクは確かCだった気がする。

「椎名　優希貴様の力は知っている！　だがAランクといえこの人数に勝てるかな？」

ぞろぞろと路地裏から武偵高の生徒が出てくる。

まじか！　レキ様ファンクラブって何人いるんだよ！」

「フフフ、我ら行動派以外もファンクラブがあるぞ」

ざっと数えて２０人か

戦闘狂モードでやるか？

さすがに、２０人、ランクを識別できない状態で戦うのはきつい。

だが、３０秒目をつむらないと・・・

「ものどもかかれぇ！」

しかし、そんな時間が与えてもらえなかった。

２０人が臨戦態勢に入る。

その瞬間、数人の銃や剣が弾き飛ばされた。

「なっ！これは狙撃！」

「レキか！」

「ば、馬鹿な！　レキ様はここまでこの変態を・・・」

おい！変態ってなんだよ！

「かくなる上は傷ぐらいは！」

構えたのはドイツのＭＰ５　短機関銃２丁だ。

ガアアン

しかし、それも狙撃によりはじかれる。

「くそ！　撤収だ！」

村上達が逃げていく。

なんだったんだ？

その後、レキの部屋に戻ってレキにお礼を言ったのだがレキはこくりとなずいただけだった。

うーん、アリアといるのも面白いけど結構この子といるのも面白いかもな

第４２弾　ケースＤ７発生

連休が終わりアドシアートが始まった。
女子寮ライフもなんとか慣れてきて寝不足も解消してきている。
俺たちのアルカタは閉会式なのでやることと言えば白雪の護衛関連なのだが白雪の姿を俺は見失っていた。
理由は簡単報道の控え室に続く控え室のシフトなのだ。
具体的にいえば１２~１４時の２時間。

「暇だな・・・」

「アハハ、まあそういわないでがんばろうよ椎名君」

俺とこのゲートの担当なのは先に来ていた不知火だ。
１３時までのシフトである。
時折、通るカメラマン等の報道を横目に

「ところで椎名君は誰が本命なんだい？」

「はい？」

横を見ると不知火が微笑を浮かべながら

「最近椎名君、レキさんとも仲がいいよね。　もう１人後輩に手を出したハーレム野郎って村上君が言ってたよ」

あ、あのやろおおおお！
今度会ったら血祭りにあげてやる！
そんな会話をしながら不知火の時間が終わり武藤が交代にやってき

た。
それじゃあねと笑顔で去っていった不知火を見て
今度は武藤と雑談を始める。

「なあ、優」

「ん？」

俺はペットボトルのジュースを飲みながら

「恋ってなんだと思う？」

「ごほ・・・こ、恋？　ああ、白雪か？」

「ち、違うよばかやろう」

「隠すな隠すな」

にやりと笑って言ってやる。

「優だって女の子とっかえひっかえしてるじゃないか！　だから、経験豊富な優にアドバスを・・・」

「って待てぃ！　誰がとっかえひっかえだ！　俺は武偵高に来てから1度も恋はしてねえ！」

「ってことは昔は付き合っていた子とかいたんだな？　俺はそれすら居ないんだ・・・教えてくれよ」

「あ・・・」

そう、昔、好きな人は確かにいた。
まあ、今にして思えば叶うはずもない恋ともいえないものだったんだろうがな・・・
その人は俺のあこがれで目標だった。
でも・・・
あいつが・・・
あの魔女が全てを・・・

「・・・う・・・優！」

はっとすると武藤がこちらを見ていた。

「どうかしたのか？」

「い、いやなんでもねえよ。　この話は終わりだ終わり」

「まじかよ！」

強制的に話を打ち切って俺たちはバイクの免許の話やヘリの免許をとったんだと自慢する武藤の話を聞いて

「優、交代だ」

キンジがやってくる時間になった。

「白雪は？」

「今日はまだあってない」

「そうか」

それだけ言うと俺は外に出ていく。
まず、白雪に電話をかけたがつながらない。
続けてアリアにもかけるが同じく通じなかった。
おいおい、何かやばいことになってなけりゃいいが・・・
白雪を探し回りそろそろ、1時間と少しが経過する時ピピピと携帯にメールが届いた。

「周知メールか・・・っておい！」

その内容はケースD7発生。星伽　白雪が失踪した。
D7とは事件かもしれないがわからないので連絡は一部のものに行く。　保護対象者のためむやみに騒いではならない。　武偵高もアドシアートを予定通り遂行する。極秘裏に事件を解決せよだ。

「くそ！」

キンジに電話をかけるがつながらない。

「何やってんだバカやろう！」

電源を切ってアリアにかける。

「優、白雪が消えたわ」

「ああ、メールは読んだ。　どうする？」

「アドシアートの期間中に人の目をごまかして外に連れ出すのは困難よ。　学園島のどこかに白雪はいる」

「捜査範囲が広すぎる！」

「わかってるわよ！　だから可能性が高い場所から潰していく。優はジャンクションに向かって」

「よりによってあそこかよ・・・」

ジャンクションは簡単にいえば武器庫なんだがその場所には凄まじい量の火薬が満載されている。
1歩間違えば学園島が大爆発する大惨事になりかねない。

「ああ、もう！」

また、貧乏クジ引かされた気分だ。
デュランダルがいるなら怒りをぶつけてやるからな。
俺はケータイの電源を切ってからジャンクションに急ぐ。
武偵高の地下は船の多層構造のようになっており地下2階より下は水面下になっている。
そこまで降りてエレベーターを動かそうと試みるが沈黙して動かない。

「ちっ」

近くのマンホールをあけワイヤーを固定してたんたんと降りていく。
このマンホールは浸水時の防水の役割を兼ねてるからあけるのに時間がいる。
地下4階　5階と降りてきてマンホールに向かおうとしたとき、俺はワイヤーを後ろに放った。

「・・・」

ヒュンと風を切る音がしワイヤーが剣に絡まった。
後ろに後退しながら

「後ろから不意打ちとは卑怯なマネするな。　やっぱり、てめえがデュランダルか？」

「・・・」

黒衣の襲撃者は何も答えない。
ただ、ぶんと剣を振るとワイヤーが外れる。
前と剣が違うな・・・
黒衣の襲撃者が持つ剣は以前の大剣ではなく日本刀だった。
あのデザインどこかで・・・
黒衣の襲撃者が動く。
ちっ、やるしかねえか

第４３弾　優希ＶＳデュランダル

黒衣の襲撃者が何かを投げる。
的外れだ！
足元に突き刺さるそれはヤタガンと呼ばれるフランスの銃剣だ。
猛烈に嫌な予感がし後ろに飛ぼうとした瞬間、左足がぐんとすいつけられるように動かなかった。
何かの薬品か？
敵が接近してくる。
俺は即座に左の靴を脱ぎ捨てると右にデザートイーグル、左にガバメントを構える。
両者とも３点バーストで６連射する。

「無駄だ」

初めて聞いた黒衣の襲撃者の声は女性のもの。
ぶんとマントを振ると防弾マントに吸い込まれた銃弾はカチンカチンと音を立てて床に落ちる。

「どうした椎名？　リュパンに聞いたお前はもっと強いはずだぞ？」

「お前、理子の知り合いか？」

チャンスだ。
薄暗い闇のなかで黙祷を開始する。

「お前のことはリュパンに聞いている。　ゆえに・・・」

地を蹴る音とともに俺はワイヤーで上部に飛び上がった。
一瞬、遅れて剣が俺がいた空間を薙ぎ払う。

「戦闘狂モードにはさせん」

黒衣の女は振りかぶるようにヤタガンを投げつけてくる。
左のワイヤーで機動を変えて床に着地し走りながらガバメントを構えた瞬間、右腕に激痛が走った。

「っ・・・」

見ると右手の一部が避けており血が溢れている。
ピアノ線か・・・

「気を付けたほうがいいぞ椎名うかつに逃げ回ればピアノ線で死ぬかもしれんな」

なるほど・・・事前準備をしていたのか・・・

「お前は特に危険だとリュパンに念を押されたのでな。　ここで死んでもらおう。　だが、もう一つイ　ウーにくるという選択肢も存在する」

「ふん、それは犯罪者になれってことだろ？　お断りだ」

「ワイヤーは封じた。　接近戦ならばこちらに部がある」

アルカタか・・・だが、脳が警告を発している。
あいつと接近戦をやるのは危険だと。
だがやるしかないよな・・・

口元に笑を作り地を蹴る。

もとより、接近戦を望んでいたのだろう。
黒衣の女も滑るように接近してくる。
右に振りかぶった剣をしゃがんで交わすと右のデザートイーグルを撃とうとした瞬間、マントの中からヤタガンが振りかぶられデザートイーグルと激突する。
ぎりぎり押し合いながら左のガバメントを構えた瞬間右手がひんやりとしたかと思うとぱきぱきと氷始めた。
慌ててデザートイーグルを離そうとするが離れない。

「捕まえたぞ」

女の声が響く。
くそ！

ガバメントを撃とうとしたが引き戻された日本刀と激突し手から吹っ飛ぶ。

「しまっ」

離れようにも氷が右手を固定してしまっている。
右のホルスターからもう1丁のガバメントを取り出そうとするが

「遅い！」

同じように左手が黒衣の女に掴まれてしまう。
パキパキと音を立てて氷が右手と左手を被っていく。
まずい！洒落にならんぞこの状況は

「このまま心臓まで凍らせてやろう」

「お、お断りだクソやろう！」

右足を相手に叩き込む。
敵が愚かなと言うような感じがしたがブーツは氷に侵食されることなく黒衣の女の腹にめり込んだ。

「ぐふ・・・」

ヤタガンを離したのを見て後ろに跳躍して距離をとる。
腕を振りかぶって氷を地面に叩きつけた。
がしゃああんと言う音を立てて氷が砕けちる。
手の感覚が全くない。
凍傷にでもかかった感じだ。

「ぐっ・・・椎名そのブーツは・・・」

「気づいたか？　こいつの内面は銀製だ。　対ステルス用のな」

なるべく余裕を持つように俺は言う。
馬鹿高いので手までは用意できなかったが切り札でなんとか皮一枚つないだ。
だが、このままでは勝てない。
手が使えず銃ももう、使えない。
そんな状況で頼りになるのは１つ。
手が動かなくても腕は動く。
なら、選択肢は１つしかない。
戦闘狂モードでなくてもあの切り札は使えるはずだ。
そのためには

「見せてやるぜデュランダルさんよ」

「！？」

デュランダルが警戒したように後ずさる。
戦闘狂モードになれば戦闘力が上昇する。
別の知らない方法でなったと思ったのだろう。
そう、これは演技。
一代の芝居だ。

「おら！　いくぜ！」

再び接近戦を挑む。

「愚かだな椎名！　いかに戦闘狂とはいえもう、手は使えんだろう？」

足技を警戒しているのか下に意識を集中させているらしいデュランダルは突きを放ってきた。
剣の戦いは慣れている。
それを交わし懐にもぐりこむとヤタガンがマントの中から振るわれる。
ガアアアンと右手のワイヤーの筒と激突する。
パキパキと氷を作りながら

「ふ、フフフ、先ほどと同じじゃないか？」

「いーやー？違うなデュランダル」

不敵に笑った俺を見て何かあると感じたのだろう。
だが、もう遅い

至近距離から右腕、左腕　右腰　左腰　右足　左足同時にワイヤーがと飛び出しデュランダルに激突した。
補足しておくとこのワイヤーは鉄ぐらいなら軽くめり込むぐらいの威力を持つ。
今回、右手以外の先端に付けてきたのは銀の玉だ。

「フルバースト」

デュランダルがぶっ飛ばされ壁に叩きつけられた。
そのまま、ずるずると崩れ落ちて動かなくなる。
それを見て俺は息を吐きながら勝利宣言をする。

「切り札2つめ。　俺を甘く見すぎだろデュランダル」

やれやれ、これで事件解決だ。
白雪を見つけてな

第４４弾　銀の魔女

白雪を見つける前にこいつを縛っておくかと腰のベルトに固定されたワイヤーを手に警戒しながらデュランダルに近づいていく。
ぴくりとも動かない相手は完全に伸びているのだと信じたいところだ。
薄暗い闇の中俺の歩く音だけが響く。
コツコツコツ
カツン

「！？」

俺の足音に混じった異音に気づいたときには既に敵は剣を振りかぶっていた。
西洋式の大剣を振りかぶった黒衣の襲撃者が横殴りに振るわれる。
その襲撃者の剣の刃ではない幅広い部分でまともに俺は体に受ける。

「ぐ・・・」

激痛と共に俺は吹き飛ばされ数メートル以上先の壁に叩きつけられる。

「がっ・・・」

気が遠くなる。
意識が遠のきかけ視界がぐらぐらと揺れている。
だ、だめだ・・・
デュランダルとの戦闘のダメージに加えてこの一撃
左ひざががくりと床におち俺は右手でなんとか床を支えて倒れまい

とする。

「あらあら、優希ならこの程度軽く交わすと思いましたのに」

仮面の下から聞こえてくるのは先程の声とは別の女性の声だった。

「だ、誰だ・・・てめえ・・・」

床に沈んでいるデュランダルと思われる奴とは違う。

誰だこいつは・・・

「わかりませんの？」

ゴゥと青い炎が剣から沸き上がる。

そして、仮面とマントを外した相手を見て俺は驚愕する。

「ごきげんようですわ。　優希」

理子がよくつけているリボンをふんだんに使った黒いゴシックロリータ風のドレス

ツインテールの銀の髪、赤い瞳。

「お、お前・・・」

見間違うはずがない。

あいつは・・・俺の

「あの時は名乗れなかったので自己紹介にきましたわ」

にこりと聖女のように微笑む少女は炎を背景にして美しかった。

剣を床に刺しドレスの端と端を持ち左足を1歩下げる。

「ローズマリーと申しますの。ローズとお呼びくださいな」

「・・・ローズマリー」

「はい。　なんですの優希？」

戦闘狂モード

激痛に耐えながらも俺は立ち上がる。

「俺は・・・お前を逮捕するために生きてきたんだ・・・お前が・・・俺達の人生をめちゃくちゃにしたから・・・」

「美味しそうですわ。　でも、今はまだ、食べごろじゃありませんの」

右の人差し指を唇に当てて、記憶のなかにある言葉と同じセリフを言うとローズマリーはこつこつと背を向けて歩きだした。

「待て！　待てよ！」

1歩踏み出すがそれが限界だった。

がくりと足から力が抜け地面に倒れる。

脳震盪状態になってるのか・・・

その間にもこつこつと音は遠ざかっていく。

「ちくしょう・・・仇が目の前にいるのに・・・」

意識が遠のいていく。

ちくしょう・・・
そして、意識は闇に包まれる。

「・・・う・・・優！」

仇を・・・

「優！　しっかりしろ！　おい！」

「椎名先輩！」

「う・・・」

がんがんする頭を振りながら目を開ける。

「優！」「椎名先輩！」

キンジとマリだった。
マリは泣きそうな顔で胸に飛び込んでくる。

「よかったぁ先輩が無事で」

「いたたた！　離れろマリ怪我してんだぞ！」

「あ！　すみません。　うれしくてつい・・・」

「ったく・・・キンジ状況を教えてくれ」

「状況も何も、白雪が失踪したからレキにここを調べるように言われて降りてきたんだ。
地上でマリと会ってついてくると聞かなくて優が倒れてるのを見つけて声をかけたところだ」

「デュランダルとローズマリーはどうした！」

「ローズマリー？」

初めて聞く名前にキンジが首をかしげる。
デュランダルが倒れていた空間を見ると何もなくなっていた。
ローズマリーも消えている。

「私たちが降りてきた時には誰とも会いませんでしたけど・・・」

逃げたか・・・
いや、ここにはまだ、下がある。

「白雪が心配だ。　先を急ごうキンジ」

「待てよ優。　何があったんだ？」

「ああ・・・」

歩きながら要所要所を説明していく。
ローズマリーと俺の因縁は省いてデュランダルとの激突と気絶させたことも話す。

「マリは地上に戻れ」

「で、でも先輩の話だとローズマリーって敵がまだ、残ってるかも・・・」

それを指摘されて舌打ちする。
確かにばらばらに行動するのはリスクがでかすぎる。
援軍を呼ぼうにも局内基地局が破壊されたのか携帯は圏外になっている。

「いいか？　俺たちはお前を守る余裕がなくなるかもしれない。その時は戦おうなんて思うな。逃げろ」

「で、でも・・・」

「レキか誰かを呼んできてくれ。　それだけでも助かるからな」

「は、はい」

よし、後は、右手の感覚が徐々にではあるが戻りかけている。
だが、武器はワイヤーとガバメント1丁、左手は使えない。
戦力は普段の半分もなく援軍もない。
頼れるのはヒステリアモードではないキンジのみ。
だが、無理やりヒステリアにするわけにもいかないので現状の戦力でやるしかない。

デュランダルは多少ダメージを負っているはずだから後は、迅速に沈めること。
だが、もうフルバーストは使えないだろう。
あれは、1度見られたら警戒されるからな。
まさに、一撃必中の技だ。
防弾制服でなく、ワイヤーの先がナイフなら確実に殺害できる技でもある。
もっとも9条があるから俺が殺害目的で使うことはないだろうが・・・
・
開け放たれたマンホールをおりついに地下7階についた。
さて、救出作戦スタートだな

第４５弾　大ピンチ

人の気配がする。
誰かの話し声も聞こえてくるのを見ると当たりらしい
キンジとマリが銃に手を伸ばしたのを見て俺は無言でちょいちょいと上を指した。
見ると
『ＫＥＥＰ　ＯＵＴ』や『ＤＡＮＧＥＲ』などの警告があちこちに書かれている。
そう、ここは火薬庫。
誘爆なんてものおこしたら俺たちは１００％死ぬし武偵高が吹き飛ぶ。
ばらばらになった高校生の肉片が飛び散るなんて光景想像しただけでもぞっとした。
キンジがバタフライナイフを音がしないように慎重に取り出す。
ものの影に隠れてキンジのバタフライナイフを鏡のように突き出して先を見ると
白雪がいた。
まりが口を開きかけたので慌てて口を抑える。
それで分かったのだがマリは震えていた。
無理もない。
ダギュラでは命懸けの実戦なんて皆無だっただろう。
ぽんと頭を叩いてから大丈夫だと瞬き信号を送るとこくりとマリは頷いた。

「どうして、私をほしがるのデュランダル。　大した能力もない私を」

怯えきった白雪の声
やはりあいつか
その声は俺が戦ったあの女のものだ。

「裏をかこうとするものがいる。　表が裏の裏であることを知らずにな。　和議を結として偽り陰でそなえるものがいる。　だが、闘争ではさらにその裏をかくものが勝る。　我が偉大なる始祖は陰の裏―すなわち光を纏い。　陰を謀ったものだ」

「何の話？」

「敵は影でステルスを練磨し始めた。　我々はその裏でより強力なステルスを磨く。　その大粒の原石―それも欠陥品の武偵にしか守られていない原石に手が伸びるのは自然なことよ。不思議がることではないのだ白雪」

「欠陥品の武偵？　なんのこと？」

白雪の声に怒りが含まれる。
大して相手の声は嘲るように

「ホームズは少々手こずりそうで椎名は予想外の力で向かってきたが撃退してやった」

「まさか・・・殺したの優君を？」

「さてな？　ここに私がいるということがその証拠だろう？　そして、遠山　キンジはお前たちをばらばらにすることに一役買ってくれた」

「キンちゃんは・・・キンちゃんは欠陥品なんかじゃない！」

「だが現にこうしてお前を守れなかったではないか」

「それは・・・それは違う！　キンちゃんはあなたなんかに負けない！迷惑を掛けたくなかったから私が呼ばなかっただけ」

フンとデュランダルが言った。

「迷惑をかけたくないか？　だがな白雪、お前も私の策に一役買ったのだぞ？」

「私が・・・？」

「電話を覚えているだろう？」

思わずキンジの方を俺は見てしまった。
それほど奴の声まねは似ていたんだ。
キンジの声にな。

「すぐ来てくれ白雪！　バスルームにいる」

「―っ！」

白雪が息を飲む

「ホームズは無数の監視カメラを仕掛けていたがお前たちの部屋を監視していたのは私の方だ。　お前はリビングの窓際にいて遠山の入っていたバスルームの灯が消え・・・そこに丁度椎名　優希と神崎　アリアが帰ってきた。私はそう言う好機を見逃さない性でな」

なるほどな・・・すでにあのときから監視されてたのか・・・
レキの言うこともあながち間違いじゃないみたいだな

「キンちゃんのふりして私を動かして私たちを仲間割れさせたの？」

「後は転がる石のようにだ。　数日とかからず神崎アリアはお前たちの下から離れた。椎名　優希も同時に離れるのは嬉しい誤算と思っていたが・・・どうやらわざとだったようだな椎名　優希」

最後の声はこちらをむいている。
黙祷から目を開ける。
戦闘狂モード
キンジとアイコンタクトで物陰から飛び出す。

「白雪逃げろ！」

キンジの声と共に俺は銀玉を仕込んだワイヤーを発射した。
しかし、それはデュランダルに当たるより早く何かにぶち当たって床に落ちる。

「！？」

「そうくると思っていたよ」

デュランダルが何かを投げる。
まずい！

「キンジよけろ！凍らされるぞ！」

俺は右のワイヤーを天井に打ち込み空に逃げる

「え！？」

しかし、対応しきれなかったらしいキンジは床に縫いつけられてしまう。

「キンジ！」

「次はお前だ」

デュランダルが仮面越しに俺を見上げてくる。

「遠山先輩！」

助けようとでも思ったのだろう。
マリが物陰から飛び出してきた。

「馬鹿！　出てくるな！」

「で、でも・・・」

「まだいたのか？」

再びヤタガンをマリに向かい投げる。
俺はワイヤーを操りターザンのようにマリに近づくとマリを蹴飛ばした。

「あう」

マリはザザザと地面を滑る。
同時にヤタガンが地面に突き刺さりその一帯が氷の床になる。

「!?」

違和感を感じて上を見ると氷がワイヤーを覆っていっている。
見ると短刀がワイヤーに絡まっていた。
ぴきぴきとワイヤーは氷手に迫る。

「くそ!」

俺は右のワイヤーを切断して切り離すとバランスを崩して氷の地面に叩きつけられた。
背中から落ちたので床に縫いつけられる。

「しまっ・・・」

「椎名先輩!」

「逃げろ!　マリ!　早く!」

「嫌です!　先輩を置いて逃げられません」

「この馬鹿!」

その瞬間、室内の非常灯が消えた。

「い、嫌!　何するの!―う」

ちゃりちゃりと白雪のいる方から聞こえてくる。

「―白雪！」

キンジが叫ぶ。
やばいぞこれは、さっきの比じゃない。
殺されるぞ。

「くそったれが・・・」

渾身の力を込めて脱出にかかる。

「まずはお前だ椎名。　死ね」

びゅっと刃が降り下ろされるのが分かった。
だけど、恐怖はない。
だってな・・・
そうだろアリア？

ぶん―もう一つ刃が飛ぶ音が後ろから上がり―ギン！
空中に一瞬、火花が散った。

「じゃあバトンタッチね」

「ああ、タッチだな」

そのアニメ声に俺は返答した。

ちかっと部屋の片隅の天井であかりが灯る。
その体育館が明かりを一周するように付いていく。

「そこにいるわねデュランダル！　未成年略取未遂の容疑で逮捕するわ」

ぎゅむぎゅむと俺を踏みつけてついでにキンジの頭を踏みつけて現れたのはアリアだった。

「ったく遅いだろアリア」

「優があまりにも遅すぎたからこっちが当たりみたいね」

「ホームズか？」

見るとデュランダルの姿は消えている。
白雪も火薬庫の影に引きずり込まれたらしい。
そのとき、銃剣が2本アリアに向けて投げつけられてきた。
アリアは小太刀でそれを弾く

「何本でも投げてくれれば？　こんなのバッティングセンターみたいなものだわ」

アリアがバッドのように小太刀を構えると同時にどこかの扉が締まる音がした。

「逃げたわね」

アリアは俺たちの近くに刺さっていた銃剣を引き抜いてぽいっと捨てる。

「まぁ、少しは役にたったわね。バカキンジも」

「な、なんだよそれ？」

「勇を使え蛮を使え。　賢を使え愚を使えっていうでしょ？　バカキンジモードのバカキンジにもそれなりに使い道はあるのよ」

「ま、キンジはデュランダルを動かすのに役立ったってわけだ」

俺はばりばりと氷を引きはがしながら立ち上がる。
アリアは刀を宙に動かすと何かを切った。

「何かあるんですか？」

マリが聞くと

「ピアノ線よ。　あたしの首の高さにあった。　こっちはキンジと優のぶんね」

ぷつんぷつんと刀でそれを切るアリア。
デュランダルめ・・・用心深いやつだな・・・上の階にもピアノ線張り巡らせてたし。

「でも無駄無駄。　あたしの目はごまかせないわ」

「アリア、デュランダルには強烈な1？を与えておいた。　追撃をかけるなら早いほうがいい」

「その言い方からすると1度戦って逃がしたのね？」

「あ、ああ・・・気絶までさせたんだが乱入者がいてな」

「それっデュランダル以外にも敵がいるってこと？」

「いや、もう逃げたみたいだが前に戦った黒衣のおと・・・いや、ローズマリーっていうステルスだ」

ぎりっと歯をくいしばる。

「分かったわ。　でも、１番は白雪よ」

アリアは刀を拾うと白雪の方まで行くとすぐに持ってきた。

「どうなんだ？」

俺が聞くと

「怪我はしてなかった。　でも、縛られてる。　助けるのあんたたちも手伝いなさい」

氷をはがし終わったキンジが立ち上がる。

「アサルトの屋上で喧嘩したのは作戦だったのか？」

「武偵憲章第２条。依頼人との契約は絶対に守れ。　あたしは１度受けたクエストは絶対に投げ出さない。　屋上で寝てたあんたにはマジギレだったけどね。　デュランダルは敵が複数いる場合はまず、距離を置いて、遠くからうまく敵の戦力を分断し、１人ずつ１対１で片付けようとする。　これが戦術パターンよ」

なるほどね。　俺が１対１で激突したのも計算のうちか

「ただ、ああいう策士は計画に歪みが生じると全てを無にしようとする傾向があるわ。　だとしたら改めて戻ってきて白雪を殺そうとする可能性もある。　まずは、白雪を開放するわよ」

「「いだだだだだ」」

と、アリアは俺たちの耳をつかんで歩いていくのだった。

「尻にしかれてますね先輩方・・・」

ふぅとため息をついてマリもその後に続くのだった。

第４６弾　信じてるぜ

倉庫の壁際にいた白雪は立ったまま壁際に縛られていた。
口を布で縛られうーうーと唸っている。
布をキンジが外すと

「キンちゃん大丈夫!?　ケガとかしなかった?」

やれやれ、いきなりキンジの心配かよ。　デュランダルの話し方なら俺殺されたことになってたんだがな・・・

「俺は大丈夫だ。　お前こそ・・・」

白雪の胸の下には鎖が巻かれていた3箇所ロックされている。
分厚さから考えてデザートイーグルでも破壊は難しい。
最も、ここでデザートイーグルを使おうものなら大爆発を覚悟しなければならないが・・・
俺とアリアとキンジは武偵手帳から解除キーを取り出して解除にかかるが複雑にできているのかあかない。
こういった細かいことは苦手なんだよ俺は

「キンちゃんごめんなさい・・・私ここに・・・この服で誰にも内緒でこないと学園島を爆破してキンちゃんを殺すって・・・」

「いつからいわれてたんだ?」

「昨日キンちゃんが線香花火を買いに行ってくれている間に脅迫メールが来て・・・私キンちゃんが傷つけられるのが怖くて・・・従うしかなくて・・・ふぇ・・・ぇ」

なんてこった。
レキと遊んでたときにそんなことになってたなんて・・・
レキは護衛を気にしてたからそうするべきだった・・・
でも、白雪の言葉を聞く限りあの場で白雪に付いていても結果は変わらなかっただろう。

「アリアもごめんね・・・私アリアにあんなひどいことばかりしてたのに・・・助けに来てくれたんだね」

白雪に言われたアリアは「えっ」と少し赤くなる

「あ、あたしは依頼を受けたからあんたを守ってただけ。　あたしの目的はデュランダルを捕まえることなの。　だから感謝なんてしなくていい」

ハハハ、顔が赤いぞアリア

「優君もごめんね・・・私のせいでその怪我・・・」

「ああ、まあ気にしなくていいよ。　右手はなんとか動くし左手も治療さえすれば治るしな」

包帯を巻いてある右手はピアノ線で切った部分だ。
まあ、時間があれば治るだろうし深刻なほど切ったわけではない。

「椎名先輩。　先輩のデザートイーグルなら・・・」

「いや、駄目だ。　誘爆して大爆発を起こす危険がある」

マリの言葉を即座に否定して考える。
くそ、どうすりゃいいんだ。
アリアが白雪に聞く
「デュランダルの姿は見た？」
「ううん。　仮面とマントを付けてからそこの扉から逃げたときも仮面とマントは外さなかった」
「しかたないわ。　デュランダルは決して素顔をさらさない」
どうやら、アリアは俺が集めた情報よりもかなりの知識を持っているようだった。
「アリア、さっきの水」
「私より直接戦った優の方が詳しでしょ」
「ああ、あれは超能力だな。　しんじたくねえが・・・」
「国際的にいえばクラス？のステルス。　たぶん魔女だと思う」
「ありえねえ・・・」
アリアの補足にキンジが頭を抱える。
「ありえなくないの最近じゃもう、一流の武偵は驚かないものよ。うちだってＳＳＲがあるでしょ？」

「ああ・・・」

「恐ることはないわキンジ。　能力者は経験上大道芸人や手品師みたいなものだったわ。　鉛玉の敵じゃない」

「いや、アリア俺もデュランダル以外の超偵の戦いの経験があるが油断できない化け物もいる」

「？　どういうこと優？」

アリアの言葉を遮るように

ズズンとくぐもった音が地下倉庫に響きわたった。
俺たちが周囲を見渡すと
床にあった排水溝から水があふれ出てきている。

「海水だわ」

「どこかの排水系を壊しやがったか・・・」

補足しておけばここは地下7階、地下2階からは水面下なのだから周りは海だ。

「キンジ、先に行っておくがアリアは泳げないんだ」

「！？」

キンジが目を見開く

「アリアは上に上げる。　キンジお前が決めろ。　俺はどうすれば

いい？　ここに残り解除の手伝いをするかアリアとデュランダルをぶちのめすか？」

「アリアと行ってくれ」

キンジは即答した。

「ＯＫリーダー」

「ちょっ、優！」

「先輩！」

俺はアリアとマリを抱えると走りアリアを押し出すように上へと上がった。

いや、上がる前に

「キンジ！　絶対に白雪を助けて上がってこい！　デュランダルは俺とアリアがぶちのめす」

「ああ」

キンジの声を聞くと俺は上のはしごを登るのだった。

「優！　キンジ達を見捨てる気！」

顔を真っ赤にしたアリアが上に登ると待っていた。

「武偵憲章第１０条」

「！？」

「諦めるな武偵は決して諦めるな。　大丈夫だよキンジは信じろよ」

そう、あいつはヒステリアモードになれば、頼れる存在だ。
俺やアリアが背をあずけても全く心配しないレベルのな。

「わ、分かったわ。　１秒でも早くデュランダルを沈めてもどるわよ優」

「１度は沈めた相手だ。　やるさ」

さあ、第３ラウンドだ。次は沈めるぞデュランダル。

第４７弾　狩の時間ですの

敵は不利な状況では戦わないのだろう。
大型のコンピュターが並び迷路のようになっているこの階では交戦する意思が見受けられなかった。
敵をおびき出すため別れて行動しているが俺の後ろにはマリがいる。

「し、椎名先輩・・・」

怯えながら声を出すマリ

「先に上に戻してやりたいんだが・・・」

上への道は全て塞がれていた。
デュランダルを撃破しない限り上へと上がるのは難しいだろう。
先を慎重に進みながらガバメントを右に構える。
デザートイーグルは氷ずけにされつかうのは怖いしガバメントの１丁は寒冷地使用ではない。
使える銃は１つだけガバメントだけだ。

マガジンは後３個、武偵弾もあるがこの状況では使いたくない。
慎重に、トラップが仕掛けていないかを確認しながら神経をすり減らしていく。
どれほど、そうしていただろう・・・
やはり、デュランダルは戦うつもりがないようだった。

「・・・だ」

「ん？」

「どうかしたんですか先輩？」

「人の声だ。　キンジたちかもしれない。　1度もどるぞ」

「は、はい」

そして、コンピューターの影に人影を感じガバメントを構える。
3丁の銃が同時に標的を向き合った。

「「キンジ」」

俺とアリアが同時にその人物を見て呼ぶ。

「よかった。無事だったのね」

「まあ、俺はお前が死ぬとは思ってなかったがな」

「なんで逃げなかったの？　あんたは戦わないくていいのに」

「可愛いアリアを見捨てて逃げられるほど俺は理性的じゃないんでね」

「な、なによそれ」

がう犬歯を向くアリア。
そのやりとりで俺は直感する。

「なったなキンジ？」

それに対しキンジは頷く

「ああ、優、デュランダルは？」

「俺らと戦う気はないようだな。　特に俺は1度沈めたからか警戒されてるみたいだ」

「そうか」

「この部屋にいることは確かよ。　上に続く階段やエレベーターは内側から塞がれてた」

「敵はこの階で決着を付ける気らしいな」

「ねえ、さっき声が聞こえたけど白雪は救出できたのよね？　ケガとかしなかったのね？」

いがみあってても白雪のこと心配なんだなアリア・・・責任感あるいい子だな・・・

「ああ、だがここで見失ってしまったんだ。　戦力を分散したまま各個撃破されてしまったら敵の策どおりになる。　まずは、白雪と合流・・・」

けほけほ

戦闘狂モード、ヒステリアモード、動物並みの鋭敏な聴覚
マリ以外の俺たちは同時に振り向いた。

「白雪だわ。　あっちにいる」

「行こう。　だがデュランダルがどこから襲ってくるかわからない。
アリア盾にならせてくれ」

「ならキンジ。　FWは俺とお前でアリアは後ろのフォーメーションでいいな？」

「ああ、それで行こう」

白雪はすぐ見つかった。
エレベーターホールで人魚姫のようにぺたんと座り込んでいたのだ。

「けほ・・・けほ、敵は？」

「姿は見えないわ。　白雪あたしたちから離れないで」

その背中をさすってあげながらアリアはかがむ

「よかった」

マリが安心したように言うが俺は何か直感が危険と告げていた。
なんだ？何がある？

「キンちゃん」

白雪は弱々しく半べそをかきつつキンジを見ている。
濡れた巫女装束はぺっとりと体に張り付き高校生らしからぬボディーを露にしている。
何かしたに鎧のようなものを装備してるのか？

「唇大丈夫かさっきの？」

周りを警戒しつつキンジの言葉に耳を傾ける。

「うん、大丈夫」

白雪がこくりとうなずく

「血が出てただろう見せてみろ」

「ううん。　大したことなかったよ口の中を切っただけ」

「アリア逃げろ！」

キンジのその言葉だけで俺は瞬時に、判断する。
キンジの攻撃に合わせガバメントを発砲した。

白雪？　もそれは予想済みだったらしく振袖で俺たちの弾丸をそらした。

「キンジ！」

驚くアリアの側面に白雪が驚く速度で回り込む。
くそ！間に合わねえ！
フルオートで放ったガバメントとベレッタをいなして白雪はアリアの体を盾に取る。
アリアは本能的に危険を察してガバメントを白雪に向けようとしたが白雪は日本刀をアリアの頸動脈に当てる。
人体の急所。
少し切れば数分もかからず失血死する。

「しら・・・ゆき・・・なによどうしたの？」

喚くアリアの拳銃をもったままの右拳にふっと息を吹きかける。

「うあ！」

アリアは焼きごてでもあてられたように覗ける
落ちたガバメントが氷に染まる。

「くそ！　アリアそいつはデュランダルだ！」

さらに、白雪がアリアの左手に息を吹きかけた。

「きゃあ！」

ついに漆黒のガバメントも離してしまうアリア

「只の人間如きが」

こいつ・・・あの時の・・・

「ステルスに逆らうとは愚かしいものよ」

そうか、キンジはかまをかけたんだ。

白雪とキンジしか知らない何かを言ってデュランダルの嘘を見抜いた。

戦闘狂モードでも気づかなった・・・

完璧な変装だ。

「デュランダル・・・」

アリアは手の痛みに耐えながら言う。

「私をその名で呼ぶな。　人に付けられた名前は好きではない」

「あんた、あたしの名前に覚えがあるでしょう！　あたしは神崎・ホームズ・アリア！　ママにきせた冤罪１０７年分はあんたの罪よ！　あんたが償うのよ」

「この状況でいうことか？」

ふんとデュランダルが嘲るように笑う。

「それにお前の名前。　たかが１５０年ほどで歴史で名前を誇るのは無様だぞ？　私の名前はお前よりはるかに長い６００年にわたる光の歴史をたどるのだしな」

「笑わせるなデュランダル？」

「何？」

デュランダルが俺を睨みつけてくる。

「祖先なんて関係ねえよ。　大切なのは目の前にいる奴がどれほど実力があるかだろ？」

「そうかもしれん。　だが、私はジャンヌダルク３０代としてお前らを倒す」

「嘘よ！　ジャンヌダルクは１０代で死んだ！　子孫なんていないわ」

「あれは影武者だ。お前が言った通り我が祖先は火刑になるところだったのでなその後代々この力を研究してきたのだ」

ジャンヌの手がアリアの太ももにのびるとアリアが激痛に体をねじった。

「きゃう！」

見るとアリアの膝小僧に氷が張り付いている

「てめえ！」

激怒の感情が打開策を探る。

何かないのか・・・何か・・・

「ふん、椎名、ホームズがそんなに大事か？　お前に借りがあるが今は動くな」

くそ、ワイヤーもガバメントも使えねえ・・・

「遠山、椎名、そこの女も動くな。　アリアも動かした場所を凍らせる」

「キンジ・・・優撃ちなさい」

無理だアリア・・・俺たちはお前ごと撃つ選択肢はできないんだ。

「しゃべったな。　アリア、悪い口はいらないな」

アリアの唇に寄せていく。
あの氷のアリアの口に流し込むつもりか！
くそ！　なら特攻で・・・

「やめろ！」

キンジの声が響く
俺が床をけろうとした瞬間

「アリア！」

室内に響いたその声は勇敢で心強い。
鎖がデュランダルの剣に絡みつく。
アリアの首から剣が離れた。
その隙を見逃さず俺がガバメントのフルオートで放つ。

「キンちゃん！　アリアを助けて！」

本物の白雪が鎖を引き剣を手に取る。
白雪はデュランダルに切りかかるがそれを振袖で受けようとしたデュランダルをアリアが足で妨害する。
ジャンヌがバランスを崩す。
アリアは転がりながら俺たちの前まで来て片膝だちになる。
アリアを守るように白雪が立つ。
よし、これで戦力は怪我人もいるが４対１だ。　勝てる。

「白雪・・・貴様が命を捨ててまでアリアを守るとはな」

デュランダルが何かをほおると煙が出始めた。
発煙筒か

スプリンクラーが水を巻き始める。

「ごめんねキンちゃんやっつけられるかと思ったけど逃がしちゃったよ」

「上出来だよさすがしらゆきだ。　アリア、だいじょうぶか？」

「や、やられたわまさか白雪が２人いるなんてね」

ぐーぱーで手を確かめるアリアだが握力がまるでない。
俺の左手と同じ状況だ。
くそ、なんか室内が冷えてきやがった。

「白雪一つ答えてくれないか？」

「はい」

「アリアのロッカーにピアノ線を仕掛けたか？」

「ロッカー？　そんなこと誓ってしてないよ」

「あともうひとつ、白雪は花占いしてるところを不知火に見られたか？」

「え、あ、うん」

少し恥ずかしそうに白雪は答える。

「俺は同じ時刻に白雪とすれ違っている。　あの女はずっと白雪に化けて武偵高に潜り込んでいたんだ。だから、俺たちを細かく監視し分断できた。　アリア、お前のロッカーにピアノ線を仕掛けたのもジャンヌだ。　さっき、下の階に仕掛けられていたピアノ線を覚えているだろう？　木を隠すなら森、白雪のアリアへの嫌がらせの中に殺人トラップを仕掛けたんだ」

「キンジあんたまたなったのね」

アリアが目を見開いて言った。

「デュランダル！　あんたがジャンヌダルクですって？　卑怯者！　どこまで似合わないご先祖様ね」

挑発されたアリアの言葉に煙の向こうだいぶ遠くから

「お前もだろうホームズ４世」

エレベーターホールか・・・
その時、俺たちは気づいた。
スプリンクラーから巻かれた水が凍りつき雪のように降っている。
ダイヤモンドダストという現象だ。

「キンちゃん、アリアと優君達を守ってあげて２人はまだ、戦えない」

「・・・」

否定はできない。
確かに右手は銃が撃てる握力はあるが完全じゃない。

「魔女の氷は毒のようなもの。　それをきれいにできるのはシスターか巫女だけ。でも、この氷がグレード６か８ぐらいの強い氷、私の力で治癒しても元にもどるまで５分はかかると思う。　だから、その間キンちゃんが守ってあげて、敵は私が倒すよ」

「何を言うんだ白雪。　お前を１人で戦わせることなんてできない」

「キンちゃん。　そういってくれるのは嬉しいよ。でも、今は超偵の私に任せて。　アリア、優君これすごくしみると思う。　でもそれで良くなるからがまんして」

言うと白雪は呪文のような言葉をつぶやいた。

「あ・・・んく・・・」

アリアが覗ける。
俺も手に激痛を感じながら唇を噛んでその痛みを押し殺す。

「んく・・・」

制服の袖をつかみ除けったアリアの前髪がはねる。
その額には×字の傷。
そう、俺とキンジが作った原因の傷・・・
ごめんな・・・アリア
この償いはするから・・・

俺たちの治療を終えた白雪は袖からロウ紙のようなものを取り出すと壁のようなコンピューターに貼り付けると暖かくなってきた。
すげえ。これが超能力ってやつか

「白雪・・・」

キンジは決めたらしい。
ここは白雪に任せると

「ジャンヌ・・・」

白雪は俺たちがアリアを守るように下がったのを見て

「もう、やめよう。　私は誰も傷つけたくないの。　それがあなたであっても」

それに対しフンという笑い声が聞こえてくる。

「笑わせるな。　原石でしかないお前にイ・ウーで研磨された私を

傷つけることなどできん」

「私はグレード17のステルスなんだよ」

笑い声が返ってこない。

なるほど、白雪の言葉はそれほど凄まじいものなのか・・・

「ブラフだG17などこの世に数人しかいない」

「あなたも感じてるはずだよ。　星伽には禁じられてるけどこの禁布を解いた時に」

「仮に真実であったとしてだ」

ジャンヌの言葉には緊張が混ざっている。

「お前は星伽を裏切れない。　それがどういうことを意味するかわかってるからな」

「ジャンヌ。　策師策に溺れたね」

白雪の声が強まる。

「それは今までの私。　でも、今の私は星伽のどんな掟だって破らせる。　たったひとつの存在のそばにいる。　その気持ちの強さまではあなたは見抜けなかった」

ジャンヌの言葉が止まっている。

予想外の展開に策を展開するモノは弱い。

おそらくこれは想定外に近い状態だ。

室温はすでに常温、スプリンクラーも止まっていく

「やってみろ。　直接対決の可能性も想定済だ。　グレードの高い超偵はそのぶん精神力を早く失う。　持ちこたえれば私の勝ちだ」

覚悟を決めたのだろう。
煙の向こうから姿が現れていく。
やはり、西洋式の甲冑

「リュパン4世による動きにくい服装も終わりだ」

べりべりと薄いマスクをはいだ。
目はサファイアの色。
2本のつむじの辺を沿った髪は氷のような銀色
ジャンヌダルクは見た目は美しい白人だった。

「キンちゃん。　ここからは私を見ないで」

白雪は震える声で言った。

「・・・白雪？」

「これから私は星伽に禁じられている技を使う。　でも、それを見たらきっとキンちゃん私のこと怖くなる。　きっとありえないっておもう。　嫌いに・・・なっちゃう」

言いながら白雪は頭にいつも付けている白いリボンを手にかける。
くだらないよな・・・キンジ・・・
俺は言う。

「なあ、キンジ。俺たちと白雪はどんなことをしても友達だよな」

「ああ」

キンジが頷く。

「どんな、化け物のような力があっても俺達は怖がったりしねえよ。武偵憲章仲間信じ仲間を助けよだ。　信じてるぜ白雪」

「白雪、安心しろ。　俺がお前を嫌いになることはありえない」

補足するようなキンジの言葉に白雪は無理に微笑んだ顔を向けながらリボンを振りほどいた。

「すぐ戻ってくるからね」

剣を学んだオレだからわかる。

白雪が今構えている構えは一切の流派に存在しない構えだ。

「ジャンヌ、あなたをもう逃すことはできなくなった」

「？」

「星伽の巫女がその身に秘める。禁制鬼道を見るからだよ。私たちもあなたたちと同じようにしその力と名前をずっと継いできた。アリアは１５０年。　あなたは６００年。　そして、私たちは２００年ものの永い時を・・・

くっと白雪がその手に力を込めた

刀の先端に緋色の炎が灯る。

それが刀全体に広がった。
炎の剣だ。

「白雪という名前は真の名前を隠す付せの名。　私の諱、本当の名前は緋巫女」

いい終わると同時に白雪が地を蹴る。
ジャンヌは低くかがむと後ろに隠していた洋剣でそれを受け止める。
ぶつかり合うのは火花ではなくダイヤモンドダスト
いなされた白雪の刀がコンピューターをまっぷたつにした。
ざっと、ジャンヌは後退する。

「炎・・・」

その顔には明らかに恐怖と怯えが混ざっている。
ジャンヌダルクは火刑により命を落としかけた。
その恐怖と戦いながら代々研究をしてきたのが氷の能力。

「今のは星伽候天流の初弾、火焔毘、次は緋火虞槌―その剣を切ります」

白雪は炎の剣を頭上に掲げる。

「それでおしまい。　このイロカネアヤメに切れないものはないもの」

「それはこちらのセリフだ！　聖剣デュランダルに切れないモノはない」

ジャンヌは勇気を振り絞るように剣を構える。
その剣はクレイモア
ギンギギンと激しい激突を繰り返しながらクレイモアと日本刀は切り結ぶ。
互いが切れるものはないと言った名剣同士の戦い。
互いの剣は傷一つ付いていない。

「これが超偵の戦いなのね」

アリアが言った。

「アリア」

俺たちはかがんで小声で話を始める。

「動けそうか？」

「でも、銃が床に張り付いているしはがしても使えない。　あたしの銃は寒冷地仕様じゃないの。　完全分解して整備しないと多分生き返らないわ」

「俺も同様だな。　ガバメント1丁は使えるがデザートイーグルと、1丁のガバメントは正直使いたくない」

「作戦を立てよう」

キンジの言葉にアリアが頷いた。
そういえば、マリがいないな・・・隠れてろという支持を守ってるらしいな。
そういえばマリのCZ78をアリアに貸せば・・・

ギギギン

「くっ！」

明らかに白雪が苦悶の声を上げる。
俺達がそちらを見ると

「苦戦してますのね。　ジャンヌ」

最悪だ。
にこりと、大剣を構えるローズマリーが白雪に対峙するように立っていたのだ。
赤い瞳を俺に向けてにこりと微笑む。

「狩の時間ですの優希」

第４８弾　封じられた切り札

最悪だ。
青い炎を纏う大剣を持つローズマリーに白雪は冷や汗を書いている。

「形勢逆転だな星伽」

ジャンヌが面白そうに言った。

「くっ・・・」

白雪は剣を構えるが先に踏み出せない。
１対２では片方を相手にした瞬間、背中から切れられる。

「キンジ、アリア・・・」

俺たちも援護しようと言おうとした時だった。
ローズマリーが俺たちを・・・いや、俺はを見る。

「優希、あなたに一騎討ちを申込みますの。　受けていただけるのでしたらあなた以外には私は手出ししないことをお約束しますわ」

「何？」

一騎打ちだと？　それは望むところだ。
お前は俺が絶対に逮捕する。

「いいぜ。　ローズマリー！　キンジ、アリア！　白雪！　こいつに手を出すな！　こいつは俺が倒す！」

1歩前に出る。
ローズマリーはにこりと微笑むと

「ジャンヌ、そちらの戦いには干渉いたしませんわ。　どうぞ続けてくださいまし」

「ふん、そうさせてもらおう」

白雪とジャンヌが再び切り結ぶ。
記憶が・・・正しいのならこいつは・・・ローズマリーは真正の化け物だ。

「アリア」

「え？」

いきなり呼ばれたので目を俺に向けてくるアリア
こいつには新たな切り札がいる。

「小太刀を貸してくれ」

アリアのカメリアの目が大きく見開かれる。

「優、あんた、剣士なの？」

「ま。実家が実家だからな。　銃と同時に使えるんだよ」

使えるよな俺・・・
あれから何年も立ってるんだ。

使ってみせろ。

「つくづく、底がしれないわねあんたは」

「悪い」

アリアから1本小太刀を受け取る。
鞘をつかんでも違和感はない。
いけるな。

「それでよろしいんですの？」

ローズマリーが聞いてくる。

「ああ、お前と戦えると思うと嬉しいぜ」

「私もですの。　では、食べ頃か見極めさせてもらいますわ」

ローズマリーが大剣を構える。
俺は小太刀を俺は鞘に収めると右腰に添えると腰を低く構える。

「・・・」

「・・・」

一瞬の沈黙。
それが終わった瞬間、ローズマリーが地を蹴る。
一瞬、遅れて俺が手に力を込める。

「飛龍1式！　風凪！」

その速度は神速。
高速の居合。
鞘から抜き放たれた小太刀は音速に迫る。

「ふふ」

それをローズマリーは微笑みながら大剣で受け止める。
炎は使わない。
俺は剣を引き戻すと再び剣を鞘に収める。

「風凪・・・椎名の剣術ですのね。　小太刀では本来の力を発揮できませんの」

「みたいだな・・・」

正直小太刀で戦うのは初めてだ。
威力が従来の力ではない。
なら、別の選択肢も存在する。
一撃で沈める。
剣を構え殺気をこくしていく。こいつは、なるべくやりたくないんだが……
だが、こいつはそれを使わないと勝てない。

右手に力を込める。
その時だった。
俺の脳裏にあの時の光景が蘇る。
赤い・・・赤い・・・赤い・・・ただ、赤いだけのその色の中、血に染まった剣を手に笑う子供の・・・

「う・・・」

剣を落とし俺は口を抑えて嘔吐する。
敵の眼前にもかかわらず。

「げほ・・・おえ・・・」

それをローズマリーはつまらなさそうに見ている。

「まだ、克服出来ていませんの優希？　食べごろじゃありませんのね」

ローズマリーはそう言うと背を向ける。

「ま、待て！」
嘔吐した口を拭いながら呼び止めるがローズマリーは止まらない。
こつこつと歩きながら

「優希、次は克服してくださいまし。　できなければあなたは大切なものを失いますの」

影がローズマリーを侵食していく。
逃がすか・・・逃がすかよ
ガバメントを構えるとフルオートを射撃。
中身は全て銀弾だ。
全てが命中したかに思えたが
ローズマリーはくすくすと笑うだけだ。

「さようなら優希、私の騎士様」

闇がローズマリーを包みその姿を完全にかき消した。

「くそ！」

俺はそれを見て床に拳を打ち付けることしかできなかったんだ。

第４９弾　デュランダル事件護衛完了

俺がローズマリーと戦っていた時、キンジ達はデュランダルに目標を絞っていたらしい。
俺が見たときは、もう終の時だった。
ジャンヌの首筋にベレッタを突きつけるキンジの姿。

「だが、私は武偵ではないぞ？」

そう、ジャンヌが言った。
終わりだよジャンヌなぜなら・・・

「キンちゃんに手をだすなぁ！」

白雪が飛び込む。

「緋緋星伽神！」

その炎の一撃はデュランダルを通過し、大爆発を起こすような音とともに凍りついた天井をガラスのようにくだいてしまう。
がらがらと降ってくるガレキの下でジャンヌは断ち切れたデュランダルを見て呆然としている。

「デュランダル！」

そんなジャンヌの右手にアリアが手錠をかける。
ステルス用の銀の手錠だ。

「うっ・・・」

「逮捕よ！」

アリアは肉食獣のように飛びかかると左手首にも手錠を付けてしまう。

やれやれ・・・今回もしんどい戦いだった・・・

泣きじゃくりながらキンジに泣きつく白雪を見ながら俺は破壊されたエレベーターホールを見る。

ローズマリーは逃げたようだな・・・

隠れていたらしいマリが出てくるのを横目に俺はため息を履いた。

「もう、勝手に俺の前から居なくなるんじゃないぞ白雪」

そんなことを言うキンジの言葉を聴きながら俺は傷口が開いたらしい右手を見ながら

ああ、あと任したキンジ、アリア・・・俺寝るな。

意識を手放すのだった。

「いやぁ、お兄さん。　今回も大活躍ですねぇ」

「うるさい・・・」

前にいるアリスに手当を受けながら俺はため息を付く。

ここは武偵病院。
アンビュラスの生徒のアリスに手当をしてもらいつつアドシアートの閉会式のアルカタは手の具合から参加禁止と言い渡されてしまった。
まあ、この手でキーボードは触れないよな。
すまんみんな・・・

治療が終わった俺は打ち上げをするというアリアの言葉に従い、学園島唯一のファミレスロキシーに集まっていた。
デュランダルを捕まえたのでかなえさんの刑期が短縮になったアリアは今日は私のおごりよと言ってくれたのでステーキセットとハンバーグセットを頼む。
キンジも一番高いステーキセット食ってるしな。

「ありがとうございます。　神崎先輩！」

マリはチョコパフェとシーザーサラダである。
小食だなと言ったらデリカシーがないです先輩と言われてしまった。
なんでだろう？

料理を待っていると白雪とアリアが何かそわそわしている。
お互いに何かを言おうとしてやめているのだ。

「「あ、あの」ね」

白雪とアリアの声がハモる。

「あ、アリアが先でいいよ」

「あ、あんたが先に言いなさいよ」

「外すか？」

キンジがしらゆきに言うと白雪は首を横に降る。

「キンちゃん達にも聞いておいて欲しいの・・・私、アリアにどうしても言っておかないといけないことがあるから」

ん？なんだろう？

「あの、この間キンちゃんが風邪を引いていたとき私嘘ついていました」

「ウソ？」

「うん、あの時キンちゃんが飲んだ薬私じゃないの。　あれは、アリアが買ってきたものなんでしょ？」

「アリアだったのか・・・」

キンジが目を丸くしていう。

「キンジが風邪ひいた日に行ってきたんだよ」

俺が細くするとアリアは白雪とキンジをちらちらみながら

「な、なーんだ。　そんなこと？」

両手を頭に載せて後ろに体重をかける。

「話があるって言うからもっと大変な話だと思って損したわ」

「いやな女だよね私。　でも、嫌な女でいたくなかったから・・・ごめんなさい」

頭を下げた白雪の顎をアリアは持つと姿勢を元に戻させた。

「別に気にしてないからいいわよ。　はい、この話は終了。　今度はあたしの番ね」

「う、うん」

どうやらこの2人前もって話があるって前置きしてたみたいだな

「ぉほん」

アリアは咳払いすると姿勢をただし

「白雪、あんたもあたしの奴隷になりなさい」

白雪、俺達ボックス席の男子数人が固まる。

こっみんな！

ってあいつ村上！

おのれしいなああとか言ってやがる。

「ありがとうアリア」

おい！　その流れでありがとうはおかしくないか白雪さん！

「デュランダルを逮捕出来たのは3割はあんたのおかげよ。4割はあたし。　2割はレキで0．5はマリ」

俺たちは0．25ですか・・・

「私分かったのあの、ジャンヌやローズマリー、私たちが1人1人ならきっと負けてた4人がかりでやっと勝てた。　それは認めるわ」

あの、アリアさん・・・その4人にキンジと俺は入ってますよね？

「あたしたちの勝因は力を合わせたことよ。　今までの敵はあたしは自分と自分の力を引き出すチームがいればいいと思ってた。　でも3人じゃどうしようもない相手もいるわ。　つまり、私のパーティーに特技をもった仲間が増えるのはいいことなの。　特に白雪みたいにあたしにない力を持ってる仲間はね」

雨降って地固まるってやつだな。
あれほどいがみ合ってたアリアと白雪がねぇ・・・
奴隷って・・・でもきんちゃんの奴隷ならとかぶつぶついっている白雪を見る限り前途多難だがなキンジ

「というわけで契約は満了したけどあんたもこれからはキンジと一緒に行動すること！　朝から晩までチームで行動してチームワークを作るのよ。　はい、これキンジの部屋の鍵。
今後自由に入ってよし」

「おおおおい！」

キンジが悲鳴をあげてボックス席から転げ落ちる。
白雪は偽造カードキーを光速で胸のポケットにいれてしまった。

「だめだだめだだめだ！　そもそもあそこはだんしりょ・・・」

「奴隷１号！　文句あんの！」

「神崎先輩！　私も奴隷になります！　鍵ください！」

「おいこら！」

バンとテーブルを叩いて俺も立ち上がる。

「はい」

絶対用意してたんだろう。
偽造カードキーをアリアがマリにも渡す。
フフフ、椎名先輩の部屋にいつでも入れますとニコニコしているまり

「奴隷２号も何か言うの？」

「「俺たちの話も検討してくれ！」」

アリアがガバメントを抜く。
ちょうど、そこにウェイトレスさんが料理を運んできた。

ステーキセットやミネラルウォーター等、そしてももまん丼
一体なんだそのメニューは

「はい、奴隷３号４号の誕生にかんぱあああい！」

「かんぱい！　嬉しい！　嬉しいよ！　合鍵、愛の証だよ」

「これから毎日行きますね椎名先輩！」

女3人でかんぱいするのを見て俺とキンジはやけくそ気味にかんぱいに付き合うのだった。

第５０弾　恐ろしやヤンデレ

「以上が今回の報告な」

男子寮の屋上で少し前まで暮らしていたレキの部屋を見ながら俺は依頼主に電話をしていた。

「ご苦労だった。　報酬は振り込んでおいたので使ってくれ」

電話の向こうから聞こえてくる男の声を聴きながら俺は紙を見ている。

「ああ、あんたの依頼のおかげで今回は収穫があったよ」

「それは良かった」

ローズマリーの手掛かりはこれまでほとんどなかった。
だが、今回奴が現れたこと逮捕の一口がつかめると思ったのだが実際は、ローズマリーは学園島からすでに姿を消したらしい。
日本にいるのかも怪しいものだ。

「私の騎士様・・・」

「ん？」

つぶやくように俺が行ったのを依頼主は拾ったのだろう。

「ローズマリーが言い残した言葉だよ」

「君の話を聞く限り、ローズマリーは必ず君の前に現れるだろう。
おそらく、アリアも狙われるはずだ」

「だろうな・・・」

あいつは、記憶通りなら目的のためには周りの被害を気にしない奴だ。
俺がアリアのそばに入れば・・・

「なあ、俺はアリアの傍にいていいのかな？」

湧き上がった疑問を依頼主にぶつけてみる。

「前に言った通りだ。　椎名　優希。　君がアリアを護衛しないならアリアや君の知る人間が君の知らない場所で死ぬ。　それを看過したくないならアリアの護衛は続けるべきだ」

「なあ、あんた本当にアリアのなんなんだよ？　そこまでして、アリアを守ろうとする理由は・・・」

「武偵であるなら推理してみることだ」

その言葉を最後にツーツーと電話が切れる。

ま、やれるだけはやるさ。
俺も友達が死ぬところなんて見たくないからな・・・
そのためには・・・
克服するんだ。
あのトラウマを・・・
次の切り札を開放するために・・・

その日の晩、動物奇想天外の2時間スペシャルを録画で見ているアリアを横目にテーブル6つのワイヤーを分解して整備していると

「かぁーわいー！　ほら、優！　キンジ見てみて！　ラッコの大群！」

こらポンポン跳ねるな！　ホコリが飛ぶ！

なんで、いちいち仕草がかわいいんだお前は。

それにしても、この部屋、女子と男子の比率がついに並んでしまった。

いや、マリをいれたら男2で女3で逆転だ。

男子寮だろここ？

白雪はファミレスの帰りに風呂敷包みを手に来ているし靴は玄関にぶちまけ状態で黒ニーソは床に脱ぎ散らかされている。

「てかアリア、さっきのファミレスでの計算だが・・・」

CMを飛ばしにかかったアリアの横にキンジは座り俺とアリアを挟み込むような構図になる。

「なによ」

「デュランダル事件の貢献度の割合だ。　お前が4割、白雪が3割、レキが2割、マリが0．5ってことは俺たちは0．25かよ」

「あんたは最後にちょっと動いただけじゃない」

いや、アリアさん・・・いくら見てなかったからって1度は俺デュランダル沈めたんですよ。

逃げられたから貢献度には入らなかったらしいが・・・

ちなみにマリの尋問だがあのジャンヌがやめてくれと言うまで情報を引き出したらしい。

恐ろしいな・・・

「お前とのパートナー本気で解消したくなってきたぜ」

「ま、そういうなよキンジ、こんなこと言ってもアリアはお前のこと認めてんだぜ？」

「あの時のあんた達ちょっとかっこよかったけど」

上機嫌のアリアは俺たちにウインクしてきた。

ぐわ、何か今胸に刺さったような感触が・・・

こいつのたまにする可愛い動作殺人的にかわいいから困りものだ。

「チームメイトさん。　テレビを1度止めてあげるからちゃんと聞きなさいね。　あんたたちも白雪と同じで調子に波はあるしいつまでも底を見てたりしないけどあんたたちはあたし、ホームズ家に必要な力をちゃんと持っている。　今回の戦いでそれを再認識した。

だから、あんたたちもあたしの穴を埋める」

んしょアリアは立ち上がり腕を後ろで組んでにこりと微笑むと俺たちと目線を合せ

「―大切な人よ」

たく・・・この子は時折、どきっとすること言ってくれるよな。
そして、すごく嬉しいことを言ってくれる。
もっと強くなって必ず護衛の任務をかんす・・・

「「い・ま・な・ん・て・い・っ・た・の（ま・し・た）」」

「「！？」」

俺とキンジが慌てて振り向くとバーサーカーとかした白雪が立っておりなぜか、マリも銃をもって立っていた。

「「『大切な人』って何！　（ですか！）」」

一体どういうことだ！　どす黒いオーラーを放ち、瞳孔が開いた目はこおおと言う音でも聞こえてきそうだ。
白雪はわかるがなぜマリまで！

「～言っておきますけどねアリア」

「な、なによ」

白雪の剣幕に押されてアリアが少し後退してテーブルに足を当ててむきゅと倒れる。
トランプ柄のあれが見えたので慌てて目をそらす。

「勝ったとは思わないこと！　私だってキンちゃんとキスしたんだからぁ！」

「椎名先輩は渡しません！」

「うお！」

びゅおんとどこからか、取り出した日本刀が俺の首のあった空間を薙ぎ払う。

アリアが後退したのでその位置に来たんだろうが反応が遅れてたら死んでたぞ間違いなく。

さらに、白雪がアリアめがけてと言っても俺の真後ろにいるので振り下ろしてきた日本刀

「ぎゃあああ死ぬ！」

パアアアン

刀を挟み込むようにぎりぎりと・・・

し、真剣白羽どり！　すげえ！　まぐれとはいえできるもんなんだなと、自分を褒めてると

「邪魔するの優君？」

いや、正当防衛だから！　その瞳孔が開ききったヤンデレ目で見るのやめてください白雪様！

そして、左手で刀押すのやめて！まじで！

行動がどうやら、アリアの味方と白雪のヤンデレレーダーに引っかかってしまったらしい。

もう、だめだおしまいだ！

って、キンジぃ！おま！

さっさと防弾物置に逃げ込んでしまったキンジを見ながら俺は後ずさる。

「浮気ものは死んでください！」

パンパンとCZ78Bから銃弾が発射される。
銃弾はテレビに命中しコアラの大群が写っていた映像がブラックアウトする。
アリアが目を見開いた。

「あ！」

テレビどころじゃないだろ！

「や、やめろマリ！れれ、冷静になれ！」

ていうかお前、素人射撃はやめろ！　危ないって

「こ、こら奴隷3号、４号！奴隷の分際で主人に何するのよ！　静まれぇ！」

アリアがガバメントを威嚇に天井に放つが白雪はまったくひるまない。

「そ、そっちこそ妾の分際で盗人たけだけしい！」

「恋する乙女を甘く見ないでください！」

「き、キンジ！クライアントにキスってなによ！　あんたそんなことまでしたの！　このハレンチ武偵！　どうにかしないよこれ！」

防弾物置に向かいアリアが叫ぶが当人は出てこない。
まあ、そうだろうな・・・
いや、一言

「後片付けはお前たちがするんだぞ」

逃げやがった！

「こ、こうなったらやるぞアリア！」

ええいもうやけだ！

俺はデザートイーグルとガバメントを構える。

アリアもやるしかないと思ったのかガバメントを構える。

「キンジも加勢しなさい！　しないと風穴あけるわよ！」

ちなみにその後、戦闘狂モードではない俺は白雪に窓からたたき落とされワイヤーが整備中だった俺は東京湾にゴミのように落ちたとさ。

ヤンデレ怖いよ。

第５１弾　ツンデレ強襲！？

戦場のような１日が終わり、朝の５時俺は朝特有の気持ちいい空気を吸いながら看板裏の前に来ていた。
手にもっているのは木の箱である。
木箱を開けると中にあったのは日本刀。
それなりの業物であるがこれまで使用することは皆無だった。
先日のローズマリーの戦いで剣術の解放の必要性を認識させられた。
だが、こいつは単に隠していた切り札ではない。
ドクンドクンと心臓が高鳴る。
右手をそっと柄に近づけて・・・

「だーれだ」

いや、お前の声は特徴的すぎるからな

「アリアだろ」

視界を手で塞がれている状態から開放されると予想通りアリアが防弾制服を着て立っていた。

「自主的に朝練なんて感心感心」

アリアは嬉しそうに言うと木箱に目を向ける。

「それ小太刀じゃないわね」

「ああ、大刀だよ。　お前も見ただろ？　俺はこいつを使えないんだ」

技1発分は持ったがあの光景を思い出してしまえば吐き気が体を襲う。

「1度聞いてみたいと思ってたのよ」

「なんだよ？　切り札なら明かす気はないからな」

「違うわ。　ローズマリーの時にあんた言ってたわよね。　飛流、そんな流派日本には存在しない」

「・・・」

続けてアリアが調べたのか言う。

「あたし考えたの。　優のその剣術は代々受け継がれてきた剣術なんじゃないかって・・・つまり、あんたは誰かを先祖に持つ？？世なんじゃない？」

するどいな・・・

「でも、おかしいのよね。　椎名なんて剣豪は過去をさかのぼっても存在しない。　本当になにものなの優は？」

「さあな？　宮本武蔵とか佐々木小次郎とかじゃねえの？先祖」

「ないわね。　あの2人の流派は全く違うわ。　それに、子孫もいるわ」

いるのかよ。

まあ、それはそれとして

「いずれにせよ。　今は語る気はないんだよ」

調べられたくない。
俺が椎名の家を話せばあのことをアリアに知られてしまう。
いやなんだ・・・あれを・・・あのことをこの子に知られてしまうのは・・・
関係が壊れてしまうかもしれない・・・
だから・・・

「話は終わりだ。　俺は訓練して帰るから帰れよ」

アリアはまだ、不満そうにしていたが
いいこと思いついたというように

「その剣を握って使えるようにするんでしょ？　なら、相手も必要よね」

そう言いながら小太刀を抜く。

「行くわよ！」

「ちょっ！」

弾丸のように突進してきたアリアの小太刀を日本刀で受ける。
アリアは左の小太刀を俺の脇腹に向かい振るうが鞘を抜いてそれを受ける。
ぎりぎりと力比べをしながら俺は押し返した。
パワーは俺が上だ。
たんたんと軽いステップで後退したアリアに追撃をかけるべく地面

をけろうとした瞬間、視界がブラックアウト、いや、赤い・・・赤い・・・あの・・・

「う・・・」

「優！」

がしゃんと剣と鞘を取り落とす。
手を地面につけ俺は再び嘔吐する。

「げほ・・うえ」

「優！　大丈夫なの！　優！」

アリアは慌てて走りよってくると俺の背をさすってくれた。

「震えてるの？」

「い、いやなんでもねえよ」

無理やり立ち上がると日本刀を見る。
ダメなんだ・・・今は・・・

その後、アリアと３０分ほど訓練を続けたがついに俺が、日本刀を持ち続けることは叶わなかった。

「金がない・・・」

その日、俺は比較的暇な時間帯に中華料理屋『炎』に来ていた。
がらがらの店内で俺はテーブルに通帳を広げ唸っていた。

「うちの店でバイトでもしますかお兄さん？」

目の前に座っているアリスが通帳を勝手に見ながら言ってくる。

「いや、バイトでどうにかなる金額じゃねえんだよ・・・支払い今月までだからな」

「ほほぅ、つまりお兄さんはついに臓器を売ってしまうわけですね」

「まじでそうなりかねん・・・」

「おお、冗談でいったんですがそれは深刻ですねぇ」

アリスが少し引き気味にノートパソコンを開く。
おい、お前仕事中だろ！　いいのかよ！
店の店主を見るが何も言わない。
大丈夫かこの店？
まあ、忙しい時はアリスはよく働いているのは知ってるが・・・

「アリスは金に困ってないのか？」

「ん～、私ですかぁ？」
アリスが顔を上げて、にやぁと口元を緩める。

「貯金が５０００万ほどならありますよぉ」

「貸してください！」

恥も外聞もなく俺は頭を下げていた。
アリスは悪魔のようににこりと微笑み

「じゃあ、利子は十　九で」

「ありえねえよ！　ヤクザに金借りたほうがましだろその利子！」

「では、１０　１０で」

「増えてるじゃねえか！　しかも、返済倍かよ！」

「しょうがないですねぇ・・・お金を貸すのはいいんですがこのクエストやったらどうですかお兄さん？」

アリスがノートパソコンを逆転させるとそこにはマスターズが掲示するクエストの依頼がは乗っていた。

「なになに？」

内容　３～７日護衛

クエストランク　Ａ

募集　アサルト、インケスタ、レザド、スナイプ、レピア等最低５名最大７名

単位　０．５単位
報酬　各１００万
こいつだ！
「さっそく人集めだな！　サンキューアリス！」
がたんと立ち上がろうとした俺の防弾制服の上着をアリスがつかんでくる。
「なんだよアリス？」
「いえいえ、まさかお兄さん水だけで出て行く気ですか？　ここは、お持ち帰りでこのチャーハンをお買い上げください」
「！！！！！！！！！！！！！！！！！！！！」
こうして、俺の財布から３８０円が去っていったのだった。
アリス商売根性たくましいぜ。
医者の卵のくせに
次の日、アリアたちに話す前に情報を整理してから俺は学校にいた。
マスターズに連絡する前にまず、人を集めねば・・・
うーむ・・・

そうだ！
屋上に走る。
鋼鉄のドアを開くとそこにいたのは・・・

「レキ！」

最近、よくここにいることの多いスナイプのロボットレキことレキ、
苗字は本人も知らないらしい。
レキはその、無表情な顔を俺に向けてくる。
ドラグノフ狙撃銃を肩にかけ、オレンジ色のヘッドホンを付けるいつもの姿で

「今、大丈夫か？」

「・・・」

レキはこくりと頷いた。
俺はさっそく、護衛の件を持ちかけてみる。
レキとは白雪の護衛を担当したばかりで少しだけ一緒に暮らしたから慣れもある。

「・・・」

レキは空を見上げ何かを考えているように見えたが

「わかりました」

とだけ簡潔に答えた。
よし！

「じゃあ、後で連絡する！　俺は人数集めしてるからまた後でな！」

「・・・」

こくりとレキが頷くのを見てから俺はその日いろいろなところを駆け巡る。
教室でアリアとキンジを見つけると早速、持ちかけてみる。

「護衛？」

眠そうに座っているアリアを中央に俺たちは話をしている。
ちなみに席はアリアを挟んで黒板側から見て右に俺、左にキンジだ。
今は来てないがキンジの後ろは武藤の席だ。

「ああ、高額で単位も０．５でるぞ」

「そんなにでるのか？」

よしよし、キンジが食いついてきたぞ。
お前、単位不足だからな。

「ああ、アリアもやろうぜ？　俺たちチームだろ？」

「あたしは別に構わないけど・・・」

よし、承諾はとった！

「じゃあ、キンジ、アリア！　決定な！」

これで４人だ。

後、最低1人・・・
マリが思い浮かんだが却下だ。
今回はダギュラ向きじゃない。
武藤か不知火辺をさそうか・・・
その放課後、2人に聞いてみたところ、不知火は別のクエストが入っており武藤は妹と用事があるとのことで断られてしまった。
放課後に結構、聞いて回ったんだがみんな駄目の1店張りでもう、諦めるべきか・・・と思っていた。
一応、マスターズには今日の0時までに申請すればOKと言われていたがダメかもしれん。
ちなみに白雪はSSRの合宿で居ないから最初から選択肢にない。
一瞬、アリスが浮かんだがあいつはアンビュラスだし、あの場でうけると言わなかった以上受ける気はないだろう。
護衛には向かないが医者が入れば助かるんだがな・・・

「ああ、理子でもいてくれたら誘うんだけどな・・・」

乗りのいい理子なら案外OKと言ってくれるかも知れんがその理子はハイジャック事件から身をくらませている。
ま、もう敵としてしか会うことはないだろう。
半分、諦めながらキンジの寮に戻りドアを開けるが中に人の気配はなかった。
誰も帰ってないのか？
よし、なら1番風呂と洒落込むか。
お湯を張ってから衣類を手に個室を出ようとして日本刀に手をつけようとしてやめる。
怖い・・・
そういう感情が正しいんだろ・・・

「情けねえな・・・」

本当に情けねえよ・・・

風呂は天国とはよく言ったもんだ。

「ああーー」

オヤジのような声を上げながら湯船につかる。
ちなみに４５度だ。
男は暑い風呂に限る。
アリアはこの温度だと激怒するけどな。
周りを見るとアリアのものと思われるシャンプーやリンスが置いてある。
よく知らんが外国の超有名な高級メーカーだった気がする。
俺やキンジが使ったら風穴開けられる。
俺たちが使うのは５００円ぐらいまでだな

「アリアか・・・」

あの子とあってからまだ、そんなに日にちはたっていないが理子、ジャンヌ、ローズマリー、敵はどんどん強くなってきている。
守れるのだろうか・・・アリアを・・・
そう考えれば考えるほど俺は過去を思い出してしまう。
嫌な・・・あの、赤い過去を・・・

「ただいま」

ん？　アリアが帰ってきたらしいな。　あのアニメ声は間違いない。

ガチャリ

へっ？

今、浴室に続くドアが空いたような・・・

「優？　キンジ？　お風呂入ってるの？」

ドアの向こうにぼんやりと浮かんだシルエットは間違いなくアリアだ。

ツインテールが影になって扉に写っている。

「悪い。　先に入ってる。　もうちょういでるから・・・」

「じゃ、あたしも入っちゃお」

「ああ、ってなにいいいいいいい！」

ドアの向こうのアリアの影がいきなり服を脱ぎ出す動作を始める。

「ま、待て！　アリア！　俺が入ってるんだぞ！」

「知ってるわ。　だから一緒に入るのよ」

何が知ってるだ！一体どういうことだ！　誰か説明してくれ！

だが、説明してくれる人など居るはずがない。

そうこうしているうちにアリアがついに下着のあれを抜いだような

動作を影で見せてきた。
風呂場に脱出口は1つだけ、アリアがいる脱衣所だけだ。
つまり、逃げられない。
まずいぞ！　史上最悪の大ピンチだ！　ジャンヌや理子との戦いなんて比にならん！

「入るわよ優」

恥ずかしそうな声でドアに手をかけるアリア
ど、どうなるんだよこれ！

第５２弾　小悪魔理子りん

逃げる場所はないのか！　逃げる場所は！
そうだ！

「ゆーう」

バシャアアン
息を大きく吸って湯船に潜る。
目を思いっきりつぶりこれは夢だ！夢なんだといいきかせる。
だが、そんなこと出来る訳がない。
１分後限界が来た

「ぶは！」

湯船から顔を飛び出し息を整え目の前にいたのは・・・
バスタオル姿１枚のアリア。
だが・・・
意に介さない黙祷で俺は戦闘狂モードになっていた。
それが発見してしまう。
アリアの胸はもっと小さい
少なくてもあんな巨乳ではない！

「誰だお前！」

風呂場に置いてあったデザートイーグルをアリアの姿をした誰かに向ける。

「あたしはアリアよ？」

「アリアはそんなに胸大きくないんだよ！　そして、そんな行動とったら絶対顔が赤くなる！」

本人に聞かれたら殺されるようなことを言いながら
引き金に力をいれた瞬間、アリアの姿をした誰かは妖艶に笑を作った。
人差し指を唇に当てると

「くふ、やっぱりばれちゃった」

ばりばりと薄いマスクのようなものをはがし、ツインテールを外すとそこにいたのは

「やはり、お前か理子！」

「りっこりっこりーんでーす！　くふふ、ただいまぁ！」

きらきらと星でもまたたいていそうなふたえの目をを嬉しそうに細めた理子はウィッグで巧みに隠していた長い蜂蜜色のロングヘアーをばさりと下ろしてくる。

「ユーユー理子を助けて」

や、やめろ！　しゃがみこんで言ってくるな！　そ、その胸が強調される。
ってん？　助けてだと？

「ていうかそもそもね。　せっかく理子がダブルスクールしてたのにユーユー達のせいでイ　ウー退学になっちゃったんだよ？　ぷん

ぷんガオー！」

イ　ウーに退学なんてあるのかよ！

「理子ユーユーにもお願いがあるの。　だから、お母様が教えてくれた男の子のことを言うことをきかせる方法を初めて使っちゃう。
　くふ、ここから先は理子ルートのパッチをお買い上げくださったお客様専用の甘い甘ぁーいイベントシーンなのでぇーす」

そんなもの買ってねえ！
興奮した獣のように熱い域を吐きながら顔を近づけてくる。
だ、駄目だ！まずい！　このままでは・・・

「ユーユ、えっちいことしよ？」

バスタオルに手をかける理子
ど、どうすりゃいいんだ・・・

だが、その心配はとりあえず杞憂で終わった。

「くふ、残念でしたぁ」

理子が着ていたバスタオルの下はスクール水着だった。
しかも旧型で、胸には理子と書かれている。

「お、おまなんてかっこしてる！服を着ろ！」

その道の人間には凄まじい破壊力を誇る格好。
それが、旧スクール水着である。

「ユーユ興奮してる？　くふ、理子はしてるよ？」

そう言いながら湯船に入ってくる理子
丁度俺の背中に入り込むよう入ってくる。
俺は抵抗したが混乱もありするりとはいられてしまう。
理子は俺の体を抱きしめると

「理子ね。　この間戦った時からユーユーのこと忘れられなくなっちゃんたんだぁ、初めて、本当の恋ってものしてみたい。　ユーユ大好き　好き、好き」

や、やめろ！胸が背中に！
だ、誰か助けてくれ！

「や、やめろ理子！」

実質、俺は誘惑と激闘していた。
人間の３大欲求のひとつと・・・

「だーめでぇす。　ここからは理子ルートなの。　くふ」

そういいながら理子は背中から俺の下腹部に右手をすすすとよせ・・・
ああ、もういいかも・・・

ドゴオオオオン
といきなり、浴室の扉が吹き飛んだ。
そこにいたのは・・・

「理子ぉ！　あんた奴隷2号にも手を出す気！」

阿修羅と化したアリアだった。
顔は怒りで真っ赤でガバメントを手にがるると唸っている。
俺たちの状況を見て

「優ぅ！　あんた何してるのよ！」

「ち、違うんだ！　これは！理子が！」

手をアリアに向けて弁明するが
お前の格好で理子が乱入しようとしたなんて口が裂けてもいえん・・・

「ユーユーだってその気だったんだよ。　理子がここの位置にいるのが証拠。　これからイベントシーンなのに理子3Pは嫌いなんだよね。　それにユーユーだって理子に溺れる3秒前だったんだから」

「お、おぼ・・・」

色恋沙汰が苦手なアリアは拳銃を落としそうなほど動揺している。

「か、風穴あけてやる！　あけてやるから」

ガンガンガン
ぎゃあああ！やめろ！俺裸なんだぞ！

４５ＡＣＰ弾を湯船に潜り交わしながら俺は悲鳴を上げる。

「くふ？」

理子は懐中時計を投げるとそれが炸裂する。
武偵弾のフラッシュと同じ効果をもつ閃光手榴弾。
理子と戦ったときに使ったが今度は俺たちの番だった。
視力が吹っ飛ぶ。

「きゃっ！」

アリアがかがみ込む。
そして、湯船から理子が出ていく気配がして
閃光が収まり視力が回復してくるとアリアが鬼の形相で俺を見る。

「理子はどこよ！」

バタンとドアが閉じる音が聞こえてくる。
外だ！
俺とアリアは飛び出し・・・いや、俺は服を来てから理子の追撃へと向かうのだった。

第５３弾　りっこりこにしてやんよ

屋上に逃げた理子を追う途中、キンジとばったりとあった。
どうやら、アリアと戻ってきていたらしい。
いや、正確に言うなら理子はまず、キンジにアタックをかけ、アリアの乱入でその場は逃走し、俺のいる場所を強襲してきたらしい。
やっぱり、本気じゃなかったんだな・・・
密かに背中に残る柔らかい感触を思い出し・・・い、いや思い出すな！
今は理子だ！
１度は勝ったとはいえ、油断大敵だ。

「―理子！」

屋上のドアを蹴飛ばしてあけたアリア
そこで理子は屋上のフェンスに腰掛けて子供のようにぷらぷらさせていた。
夜空に輝く満月が理子の笑を妖艶に見せている。

「ああ、今夜はいい夜。　オトコもいて硝煙の臭いもする。　理子どっちも大好き」

理子の目がすっと細まった。
ハイジャックで俺たちと戦った時と同じ眼だ。

「峰・理子・リュパン４世。　今度こそ逮捕よ！　ママの冤罪償わせてやる」

アリアはガバメントを理子に向ける。

そう、グリップにかかれているアリアの母、神崎　かなえさんは冤罪を着せられて刑務所にいる。
イ　ウーという集団がそれをしているのだ。
そして、理子はその一員。

「待てよアリア。　こいつは俺の獲物だ」

戦闘狂のモードが理子との再戦を望んでいる。
ワイヤー、ガバメント、デザートイーグル。
右手も全快している。
引き分けでなく今度こそ勝利してやる。

「ダメよ優！　こいつだけは譲らないわ！　あんたは見てなさい！」

「なら、どっちが沈めるか勝負するか？　キンジもどうだ？」

「優、女の子の戦いに男が出るのは野暮だ」

「あ？」

あ、そうかヒステリアモードか・・・
確かにアリアが戦いたいと言っているのにねじ曲げるのはモードが許さないだんだろう。

「ちっ、譲ってやるよ」

俺が一歩下がった瞬間、アリアが動いた。

「やれるもんならやってみなライミー」

にやぁと白い歯を見せてフェンスから飛び降りた理子が言った。

「言ったわねフロッギー！」

2人はイギリス人とフランス人の蔑称を口にする。
まあ、アメリカ人が日本人をジャップといったり、日本人が中国人をチャンコロや支那、朝鮮をチョンと言うのと同じ意味だ。
つまり、悪口。

アリアが2丁拳銃を発射しながら突っ込んでいく。
ああは言ったが、アリアが不利になったりしたら乱入させてもらうからな。

「くふっ」

初弾を側転でかわした理子は屋上の中央でアリアと交差した。
たん！
その場でムーンサルトを切り、アリアの頭上を飛び越える。
がちゃりと理子の背負うランドセルが開いた。
その中から2丁のワルサーＰ９９が出てきて理子の小ぶりの手に握られる。
バ！
バ！

理子とアリアの銃弾が互いに交差する。
防弾制服を前提としたアル＝カタ戦。
銃が一撃必殺にならない以上、これは打撃戦と言っていい。

「くふふっ、鬼さんこちら」

再びムーンサルトを決める。
理子
振り向きざまにアリアがガバメントを撃つ。
だが、同時にアリアのガバメントがスライドをオープンさせてしまう。
ガバメントはパワーは勝るが装弾数がワルサーに劣るのだ。
アリアは新体操の選手のようにとびのきざまにガバメントの弾倉に再装填する。

「かわいい！戦うアリアってかわいいい！　アリアかわいいよアリア」

早口言葉でまくしたてる理子
どうでもいいんだがその言葉変態みたいだぞ・・・
理子は笑いながら戦っている。
戦闘狂だなあいつも・・・
アドレナリンによったような表情・・・俺も、戦ってるとき似たような表情してるからなぁ・・・

「遊ぼ遊ぼおちびちゃん！　もっと遊ぼ！　くふふふ」

「こ、このぉ・・・」

互いを射線に収めようとせめぎ合う。
めちゃくちゃ、高度なアルカタ戦だ。
俺のようにワイヤーもないから純粋な銃対銃の戦い。
動物番組見てぽんぽんはねていたアリア、教科書にギャルゲーの同人誌を重ねて読んでいた理子と同一人物とは思わんよな普通・・・

「互角だな。　どっちが勝つと思うキンジ？」

アル＝カタ戦を見ながらキンジに尋ねる。

ヒステリアモードのキンジは目をすっと細めると

「そろそろだな」

発泡音がやんだ。

互いに弾を切らした2人は距離を取ると小太刀とナイフを抜く。

「あんたブサイクだから今気づいたんだけど」

アリアはちょっと背をそらし無理やり理子を見下すように言う。

「髪型元に戻したのね」

さっきのおちびちゃんと言われた仕返しだろう。

皮肉で返すことにしたようだ。

アリアがハイジャックで切断した理子のツーサイドアップのことを持ち出して・・・

今の理子は改めて髪を結、元に戻している。

「よく見ろオルメス！　テールが少し短くなった！　おまえに切られたせいだ」

男しゃべりで言った理子にアリアはほほほとわざとらしく笑った。

「あら、ごめんあそばせ」

「言ってろちび！」

「なによブス！」

「チビチビ」

「ブスブスブス」

お前ら小学生か！

と突っ込みたくなるほどの喧嘩だなこりゃ・・・

「チビチビチビチビ」

「ブスブスブスブスブうっぷえ！」

ハハハ！アリア舌かみやがった。

「優」

キンジが俺を見てくる。

一瞬で、理解した俺たちは風のように2人の間に割り込んだ。

キンジのバタフライナイフがアリアの小太刀を受け止め。俺は右のワイヤー発射機構でナイフを受け止めるとデザートイーグルを理子の胸に向けた。

アリアは犬歯をむいて目を見開き、理子は俺と戦闘狂同士の目を合わせながらふんと鼻を一つ鳴らす。

「悲しいよ」

低く憂いを帯びた声を後ろに聞きながら説得はこいつに任せるかと俺は考える。
だって、女の子の扱いはヒステリアの時のキンジの方が俺より上だからな。

「き、キンジあんたまた・・・？」

「今はこらえてくれアリア。　それに愛らしい子猫同士の喧嘩を鑑賞するのは俺の趣味じゃない」

俺は理子とにらみ合いながら、状況的に振り返れんがアリアは真っ赤になってんだろうなたぶん・・・

「・・・こ、こね、こね、ね・・・」

ほらな

「―理子」

次にキンジは理子の説得を始めるが理子は答えない。

「本気じゃない恋も、本気じゃない戦いも味気ないものだとは思わないかい？」

まあ、確かに理子はハイジャックで使った髪を使ったカドラを使わなかった。
あれを使えばアリアを圧倒することも出来たはずだ。
理子は少し寂しそうな目をするととんと後ろの1歩下がるとぽんぽんとナイフを頭上に投げる。
戦意が消えたな。

俺はデザートイーグルを下げる。

「半分ハズレ、理子キー君とユーユーには本気なんだもん」

理子は背中のランドセルを振ってカバーを開け落ちてきたナイフを身もせずにカバンに入れてカバーを閉じた。
ゆるい天然パーマの髪が揺れる。

「でも、半分あたり、今の理子は万全じゃない。　だから、今のアリアとは決着を付ける時じゃないんだよ」

「そうかい」

キンジはそう言うとバタフライナイフを腰に収めた。
俺もデザートイーグルをホスルターに戻した。
ああ、なんとなく分かった。
理子は・・・

「アリア理子とはもう戦えねえよ」

「ゆ、優！　あんた理子に何されたのよ！

俺が寝返ったって思ってるのか？
それは、たぶん・・・絶対にないよ

「アリアを犯罪者にしたくないからさ」

キンジが補足を入れてくれる。

「さすがキーくん、ユーユー分かってくれちゃった？」

理子は手をぽんぽんと叩きながら1回転した。

「理子とキー君とユーユー体だけじゃなくて心も相性ぴったりだね」

アリアは俺たちの間に流れる妙な空気に焦りを覚えたようで

「犯罪者ってなによ？」

ぎろりとカメリアの目を向けてくる。

「司法取引だろ理子？」

「あったりー！　そうでぇーす！　理子4月の事件についてはとっくに司法取引済ませてるんですよきゃは」

司法取引っていうのは犯罪者が共犯者の情報を渡したり、事件を解決する情報を渡すことで成立する制度だ。

まあ、犯罪者を法の外に出すようなこの制度は近年の日本で導入されている。

「つまり理子を逮捕したら不当逮捕になっちゃうのでーす」

ちっちっちっちと人差し指を左右に振る理子

アリアはそれをぎりぎりと歯を噛みながら小太刀を怒りに震わせる。

「嘘よ。　そんな手にあたしが引っかかるとでも？」

「嘘かもしれないが本当かもしれない。　俺たちはここでそれを確かめられない」

アリア、ここはキンジの言うとおりだ。
理子を捕まえればお前は不当逮捕などの罪で捕まりかねない。
ただでさえ、日本の上層部はおかしなことが多いんだ。
かなえさんの濡れ衣だがあれは正規の捜査だけでなったものではないだろう。
それに、公安0課の沖田ははっきりと免罪と言い切った。
これは、上に何かがあると見ていい。
アリアがつかまれば冤罪をかぶせられかねない。
冤罪を証明するため間違っても公安の連中とはやり合いたくないからな。
ぐぬぬとアリアは歯ぎしりするがなんとか飛びかかることは避けてくれた。
だが、アリアは小太刀を理子に向ける。

「でも、ママの武偵殺しの冤罪をきせたのは別件よ！　理子！その罪は最高裁で証言しなさい！」「いーよ」「嫌というなら力づくでも・・・え？」

「証言してあげる」

「ほ、ほんと？」

疑いの目を向けながらもアリアは嬉しさを隠していない。
基本的にアリアは人のことを疑わないんだよな・・・
悪い男につかまれば落ちるとこまで落ちるだろうな・・・
そこを含めて守らないとな依頼の間ぐらいは・・・

「ママ、アリアもママが好きなんだもんね。　理子はお母様が大好きだからだからわかるよ。　アリアごめんね。　理子は・・・理子

は・・・」

そこまでいうと理子は顔を伏せ

「お母様・・・ふぇ・・・う・・・」

涙を流し始め

「ふぇえええええ」

理子が泣き出した。

「えっ？　え？　えええ！」

そんな理子にアリアはあたしがなかしたのという感じでオロオロしている。

「ちょ、ちょっと何泣いてるのよ！　ほら、ちゃんと話しなさい」

小太刀をしまいながらアリアは理子をなだめにかかる。

おいおい、アリアお前本当に騙されやすいな・・・

理子の口みたらにやりとしてるのわかるぞ・・・

にしても、なんで理子はここに戻ってたんだ？

理子は泣きながら語りだした。

「理子・・・理子、アリアとユーユー達のせいでイ　ウー退学になっちゃったの。　しかも、負けたからって、ブラドに理子の宝物取られちゃったんだよぉ」

周囲の空気が張り詰める。

見るとアリアが殺気を目に宿らせていた。

「ブラド？無限罪のブラド？　イ　ウーのナンバー2じゃない」

「そーだよ。　理子、ブラドから宝物取り戻したいの。　だから、アリア、キー君、、ユーユー、理子を助けて」

「助けろってなにすりゃいいんだ？」

俺が聞くと理子はわざとらしく

「泣いちゃダメ、理子は本当は強い子、いつでも明るい子、さあ、明るくなろう」

などといい満月を背に

「キー君、ユーユー、アリア、一緒に・・・」

にやりと笑顔になり

「ドロボーやろうよ」

と、とんでもないことを言ったんだ。

第５４弾　大人気理子ちゃん

武偵少年法により犯罪を起こした武偵の情報の公開は禁止されている。
その情報のやりとりは武偵同士でも禁止されており、知れるのは１部の司法機関や公安０課といった特別な部門のみ。
これは、明らかな悪法なんだが改善されることはないだろう。
道徳的な問題とか言うんだがよくわからん・・・
まあ、だからこそ理子がハイジャックの犯人だとは俺たちは誰にも言ってないんだ。

「たっだいまぁっ！」

いきなり、ひらひらの改造制服で２－Ａに現れた理子に教室はわーっ！　と盛り上がった。
どうやら、理子は極秘調査でアメリカに行っていたということになっているらしい・・・
手回しいいよな・・・
俺には無理だ。

「みんな久しぶり！　りこりんが帰ってきたよ！」

教壇にあがってくるくる回った理子の周りにクラスメイトたちが集まっていく。
どうでもいいが、後でキンジに聞いたところ、理子に駆け寄った順がクラスのアホランキング上位と言うわけだ。
りこりん！りこりん！と腕を振り回している奴らもいる。
ハハハ、まあ理子はかわいいから気持ちはわからなくはないんだがな・・・

「理子ちゃんおかえり！　あ、これなに？」

「えへへ、シーズン感とりいれてみました」

理子は赤ランドセルの側面にてるてるぼうずを吊り下げている。
女子にはかわいいとおおうけだ。
理子は人気ものだからな・・・
俺も社交性はキンジよりはいいと思うが理子にはかなわん・・・
戦闘狂モードでも絶対に理子には勝てないなあのおばかきゃらには・・・
最近俺はハーレム野郎とか言われてるらしいがなんでだろう？
俺、恋人いないんですけど・・・

「くふっ、キー君もユーユーもおいでよ」

理子が手招きしてきたので俺はふんと目を背けてやった。
キンジも同様だ。
ばきっと音がしたので隣を見るとアリアが机に突っ伏して鉛筆をへし折っていた。
気持ちはわかるが落ち着くんだアリア！
約束もあるんだからな・・・

で、放課後帰宅した俺たちは・・・

「あー腹たつ、あむ」

「まったくだ」

「理子にはいずれおしおきが必要ねはむ」

「おう、やれやっちまえ」

「そして、はむ、はむぅ、風穴地獄にはむ」

「なんかすごそうな地獄だがそのへんにしておけアリア。　腹壊すぞ」

「うるふぁい」

ばくばくとももまんを食べていくアリアにキンジが注意するが無駄だ。
アリアが空になった紙袋を後ろに捨ててしまう。
ゴミ箱横にあるだろ・・・

「でも、理子先輩人気ありますよね」

ぎろりとアリアに睨まれたマリが1歩引く

「理子先輩？　峰先輩じゃなくてか？」

俺が聞くとマリははいとうなずきながら

「理子先輩がそう呼んでくれって言ってましたよ。　りこりん先輩でもいいって行ってましたけど・・・それはそうとそろそろ椎名先輩も優先輩と・・・」

「で、いいのかお前は？　理子は俺たちに盗みの片棒を担がせる気だぞ」

マリを遮るように俺が言う。

ま、ことの経緯はこうなるんだが

「ドロボーしようよ」

理子の言葉にアリアとキンジが何も言わないので俺は面白そうに

「いいぜ」

「優！」

なに考えてるのよとアリアに睨まれるが俺は続ける。

「その代わり条件がある」

「うん、いいよ。　なんでも言ってユーユー」

「1つは俺はあるクエスト受けようとしてるんだ。　お前も参加しろ」

理子は一瞬考えてから

「期間はどれくらい？」

「最高１週間の護衛任務だ。　アリアとキンジ、レキと俺は参加確定済みだ」

理子は小悪魔めいた笑を浮かべて

「くふ、なら丁度いいかも」

ちょうどいい？　何がだ？

「いいよ。　次の条件は？」

「ローズマリーだ」

言葉に怒りを込めて俺は言った。

「ローズマリーの情報を全てよこせ。　あいつはジャンヌの知り合いだった。　イ　ウーにいるんだろ？」

「いいよぉ。　理子が宝物取り戻したら全部話して上げる」

「先には話してくれないのか？」

「理子はユーユーのクエストを受けるよ。　全部ユーユーが先手は卑怯じゃないかな？」

むぅ、そう言われると確かにそうだ・・・

アリアの護衛の観点から言ってもブラドとはいずれぶつかる相手・・・か

「OKだ。　理子、その条件でいこう」

もちろん、その後アリアはわめいたが理子がかなえさんの裁判で証言すると確約してくれたのでしぶしぶだが納得してくれた。

で、今に至るんだが・・・

「良くないに決まってるでしょ。　リュパン家の人間と組むなんてホームズ家始まって以来の不祥事よ。　けど、今は状況が状況よ」

「それは結構だけどな。　前科一犯がつくんだぞ？　まぁ武偵なんてそのへんがきれいな奴なんて少数派だけどな・・・それも覚悟の上か？」

俺は・・・今更だけどな・・・

俺は・・・過去に大罪を犯している・・・

椎名の力で闇にほおむられたがあれは・・・

「ああ・・・そこは心配しなくていいのよ。　これは犯罪にはなりえないわ」

「・・・なんでだよ？」

「理子の言ってたブラドって奴はイ　ウーのナンバー2―相手がイウーなら法律の外。　仮に窃盗罪で起訴されても逮捕されないわ」

「アリア・・・」

俺はアリアの言葉を遮るように口を出す。

「俺はローズマリーを追っている。　あいつはイ　ウーにいる。
それはこの間のジャンヌとの戦いで確信したんだ」

アリアはわずかに目を開いてから

「優、教えてもらえないの？　ローズマリーのこと？」

アリアの言葉に俺は憎悪の感情を増幅させる。
手にもっていたガラスのコップを握力で握りつぶした。

「アリア達には関係ない」

「あるわ」

「何？」

「ローズマリーもあたしのママに数百年の免罪をきせている。　だから、無関係じゃないわ」

なんてこった。
ローズマリーもかなえさんの・・・
だがそれでも・・・

「かなえさんの無罪は・・・少なくてもローズマリーの分は俺が責任を持つ。　だけどな・・・
あいつのことは言えないんだ」

言える訳がない。
言いたくないんだ。

第５５弾　護衛の始まり

「・・・」

「・・・」

アリアと俺が沈黙してしまったのでキンジが口を開く。

「それはそうと、アリア、いい加減にイ　ウーとやらのこと教えてくれ。　お前、俺はイ　ウーのこと聞くとはぐらかすのはなんでだ？　チームを組んでるんだから俺だけのけものはないだろ？」

いや、キンジ俺もイ　ウーの全貌は掴んじゃいない。
知ってることはわずかだ。

「チームだから教えられないわ」

「なんだよそれ？」

「聞いたらあんた消されるわよ」

「殺されるって意味か？」

「それですまない。　戸籍、住民登録、レンタルショップの会員登録までありとあらゆるあんたの痕跡が消える。　この国に存在しなかったことになる」

「なんだって！」

「イ　ウーの情報はイギリスでは王国Ａ機密、日本でも特Ｉ級国家機密だわ。下手に知って公安０課や武装検事に追われたくないでしょ？」

公安０課と武装検事ねぇ・・・

あの沖田が所属する殺しをしても罪に問われない最強の戦闘集団

その最強の名は伊達ではない。

俺は公安０の沖田に過去半殺しにされているし、正直な所、本気で戦っても未だに沖田に勝てる気がしない。

公安０の人間には何人かあったが奴らは真正の化け物集団だ。

「そんなことよりもね優」

ん？

「あんたどういうつもりよ。　理子をクエストに誘うなんて」

ああ、まあホームズ家とリュパン家は対立してきたらな怪盗と探偵としてな・・・

「別にいいだろ？　一緒に行動すれば監視にもなるし、理子の能力や戦闘能力はお前もよく知ってるだろ？」

「それは・・・」

その点は認めているのかアリアが言い返さない。

よしと思った週瞬間、アリアが犬歯を向く

「リュパン家は代々世界からよりすぐった少数精鋭のパーティーを組むわ！　あんたたちもあたしから取り上げてパーティーにいれよ

う言って気にちがいなんだから！　そんなの絶対に許さないんだから！」

泥棒パーティーか・・・
それはそれで楽しそうな人生だが・・・

「あんた達はあたしだけの奴隷なの！　だから、ほかの人に仕えちゃダメなんだからね！　そこんとこちゃんとわきまえときなさいよ！いい！」

「大体キンジといい優といい。　理子に騙されるのはあれ1回きりにしときなさいよ！　裏切ったら人間レンコンにしてやるからね！」

こ、怖そうだな

「大体あんたたちは結構たらしなんだから優はレキとデートしたり、キンジは白雪といちゃいちゃと・・・」

ん？　レキとデートなんてしてないぞ？　遊びにはいったが・・・

「そうですよ。　椎名先輩いって結構もてますよね」

もてる？　何ってんだ？

「し、白雪にキスして・・・あ、あたしにもしたくせに・・・」

がるるとライオンの威嚇のようになってきたのでしょんべんと席を立つキンジを見て俺はコンビニでジュース買ってくるとその場を離脱するのだった。
だって、あのままじゃ風穴だろ・・・

コンビニで雑誌を読みながら俺はひとつの雑誌を手にとった。
旅行の雑誌だ。
場所は神戸。
そう、今回依頼の主がいる場所だ。
兵庫武偵高に依頼がいかないとなるとワケありだろうな・・・
今晩にも荷造りだな・・・
雑誌を閉じながら俺は思うのだった。

神戸市謀区某所

「お姉ちゃん。　東京の武偵高の護衛の人たち明日くるんだって。
さっき連絡あったよ」

暗い部屋の中で少女はぎゅっとくまのぬいぐるみを抱きながら

「そう・・・」

「迎えに行ってみる？　神戸空港にくるみたいだから・・・」

「千夏・・・私たちは狙われるのよ。護衛の人に迷惑はかけられないわ」

「うん・・・」

そういうと妹は部屋に入り少女のベッドの中に入る。

「千夏？」

「お姉ちゃん・・・今日は一緒に寝ていい？」

闇の中で少女は笑を作りながら

「うん、一緒にねよう」

「うん？」

2人の姉妹は互いを離すまいとパジャマを握り締めながら闇の恐怖に上がらっていく。

「お姉ちゃん・・・」

「ん？」

「前の生活に戻りたいよ・・・こんな怖い生活はもうやだ・・・」

涙を流す妹の頭を撫でながら少女は微笑んだ。

「大丈夫よ。　千夏、私があなたを守るから・・・」

第５６弾　神戸へ！

その日、俺は全力疾走していた。
なぜなら、離陸の時間は９時で今は８時４５分

「キンジとアリアのバカやろう！　なんでおこしてくれねえんだ！」

９時に成田を離陸する飛行機に乗るために俺は成田空港のターミナルを突っ走る。

「止まりなさい！」

警備の人間は前をふさいでくるがしかねえ！

「武偵だ！」

と、武偵手帳を見せながら突っ走る。
見るとフライトアテンダントがドアをめようとしているところだった。
すでに、人間の脚力では飛び越せないほど距離が空いている。

「待ってください！」

そういうと俺はワイヤーを発射した。
ドカアアンとドアの隙間に挟まったワイヤーにびっくりしたのかフライトアテンダントが硬直した姿が見えた。
一気にワイヤーを巻き戻して機内に着地する。

「よし！　完璧！」

フライトアテンダントの人が硬直しているので訳を説明してから俺は部屋に向かう。
成田から大阪まで大して時間は掛からないがこの、依頼主相当の金持ちらしく、６００便のような豪華な飛行機のチケットを用意してきたのだ。
いやぁ、危なかった、
これに、間に合わなかったら新快速乗り継いで神戸になんてなりかねんからな・・・
それだけはごめんだ・・・

「おい！　お前ら！」

「あ！　ユーユーだ！　くふ、間に合ったんだ」

部屋の中央でトランプをしている理子が小悪魔めいた笑を浮かべて言った。
なんと、豪華なことか部屋の中央には座席が並んでおり、理子、アリア、キンジ、レキ、マリが・・・っておい！

「なんで、マリがいるんだ！」

「もちろん、申請したからです。　理子先輩に頼めば1発ＯＫですよ」

くふっと笑う理子を見て俺はやられたと思った。
ダギュラは尋問しか今は役に立たないがまあ、この場合仕方ないのか・・・

「よく間に合ったな優」

「うるさいぞ裏切り者！　起こしてくれよ！」

「あんたソファーでゆっくり寝てて後で起きるから先に行っててくれってメモ書いてたじゃない」

アリアがむすっとして言う。
そんなメモあったっけ？
理子ががくふっと笑う。
お、お前か！

「理子ぉ！」

別に倒す気がないが叫ぶと理子は手招きしながら

「ユーユーもおいでよ。　ババ抜きしよ」

そして、６人でババ抜きが始まるがレキ・・・お前の表情はよめん・・・
最後の2枚なんだが

「・・・」

レキはまったくのポーカーフェイス。　眉一つ動かさない。
駄目だこれは・・・

「さっさとしなさいよ」

アリアの言葉を背景にやけくそ気味に1枚を引く。
結果はババだった。

「ユーユー10連敗！」

なんてこったい・・・理子の言葉を聞きながら俺は床に突っ伏した。

「レキ・・・お前、プロにでもなったほうがいいんじゃないか」

「・・・お断りします」

そうか・・・
即答されてしまったがその直後機内アナウンスが入る。

「当機はまもなく、神戸空港へ着陸いたします。　乗客のみなさまはシートベルトを付けてお待ちください」

俺は理子と目があったので

今度はハイジャックするなよとまばたき信号で送ってやると

くふ、やってもいいけど今回は大丈夫だよとウインクを返してきやがった。
まあ、信じるぜ

神戸空港と兵庫県の大都市、三宮は無人航行システムを搭載したモノレール。
ポートライナーで繋がれている。
依頼主がいる場所まではポートライナーで三宮まで出て、ＪＲで向かう必要がある。
三ノ宮についたのは午前１１時。依頼主との接触は午後６時だから数時間遊ぶ余裕があるのだ。
実の所、この遊ぶ部分は今回結構、重要らしい・・・
１２時前に理子が見つけ置いた三宮の海側にあるパン食べ放題のスパゲティー屋から出るとそのあとはしばらく自由行動だ。
人ごみにまみれて４人を巻いた俺はごみごみとした三宮の街で息をすった。

「ああ、東京ほどじゃねえがあいからずゴミゴミしてやがるなこの街は！　適当に店でだらだらするか・・・」

「くふっ？」

笑顔のまま、俺は固まる。
嫌な予感がして振り返ると

「どっか行くのユーユー？」

理子が立っていやがった。
赤いランドセルを身に付けているひらひらのロリータ服を来ている理子。
道行く人が美少女の理子を見て顔を赤くしている男とかが見える。

「どこに行きたい？」

理子を巻くのは無理だ・・・それこそ、直接攻撃を選択肢に入れない限りはな・・・
覚悟を決めて言うと理子が指を指す。

「理子、あそこ行きたいなユーユー」

そこはセンタープラザ、アニメイトやゲーマーズやとらのあな等、アニメ好きにはたまらない聖地らしい・・・
秋葉でいいんじゃないかと疑問が残るが俺達はそこに付き合うのだった。
理子は次々とゲーム等を買いあさり、１５才以上、の商品は俺を遠慮なく使いやがった。
一応、学生証は持ってるけどな・・・

「ユーユー！　今度理子あそこ行きたいな♪」

こ、こら右腕に胸を押し付けるな！
アリアと同じ小柄なのに理子のその・・・胸はでかい。
白雪には及ばないが・・・

「優！　こっちに飛べ！」

おきなり男しゃべりになった理子の言葉を聞いた瞬間俺は理子に引かれて移動した。
直後、猛スピードで車が通過していった。
キキキとその車、現在では大衆車となったトヨタのプリウスが道路で反転して
再び突っ込んでくる。

「理子！」

この手口に覚えがあった俺が理子に避難の声を送ると理子は焦ったように

「これは私じゃない！」

といいながらランドセルからワルサーを取り出す。

俺もデザートイーグルを抜くとタイヤに向けて発泡した。

ドオオン

迫撃砲のような轟音に道行く人々が悲鳴を上げるが直後、タイヤに命中した弾がはじかれる。

「！？」

「防弾タイヤだ優！」

理子がエンジンを狙いワルサーを3点バーストで6発打ち込むが同様だ。

あの車無人の上、プリウスに似てるが防弾装備されてやがる！

デザートイーグルで破壊できないなら手持ちの武器で破壊できるのは武偵弾しかない。

それを使わず、こいつを破壊するならアンチマテリアルライフルが欲しいとこだがそんなものここにはない。

くそ、とりあえず、理子を抱えてワイヤーで・・・

「わあああああん」

「！？」

振り向くと逃げ遅れたのか子供が泣いている。
ば、馬鹿やろう！逃げろ！

子供に駆け寄ろうとした直後、プリウスがこちらめがけて速度を挙げた。
まずい・・・
武偵弾！
マガジンを取り出そうとするが間に合わん。

その直後、プリウスが大爆発を起こした。紅蓮ぼ炎と破片が周囲に飛び散る

「熱ぃ！　理子！　武偵弾使ったのか？」

「私じゃない！」

じゃあ、誰だ？

「相変わらず、戦闘狂モードにならへんと弱いな優」

この声・・・
俺たちが声のした方を見るとマグナムリサーチ社の拳銃マイクロ・イーグルを右手に持った俺たちと同年齢の奴が立っていた。
面白そうににやにやしながら俺を見ているこいつは・・・

「プリンか！」

「プリンいうなや！　月島　虎児や！」

ちなみにプリンはこいつのあだ名だ。
理由は茶髪の髪で先端だけ金髪に染めている特徴的な髪からこのあだ名がついた。
本人は虎の色を真似てると言っているがプリンだってその髪

「ハハハ、悪い悪い。　で、虎児？　何やってんだこんなとこで？」

「それはこっちのセリフや。　クエストで三宮張ってたらお前がおるんやからな。　しかも、えらいべっぴんな子つれてな。　大丈夫やったか？」

「理子は怪我してないよ」

裏理子から表に戻り明るくいう理子。

「ねえねえ、ユーユーこの人誰？　ユーユーの友達？」

こら！腕にしがみつくな！
ん？なんだ虎児の奴、ショック受けた顔しやがって

「な、なあ優その子もしかして、お前の彼女か？」

なっ！

「そうでぇーす！　ユーユーと理子は熱い恋愛の最中なんだよ」

「ま、待てちが・・・」

ありえへんと虎児は地面に手を付けてしまった。
背中に背負った日本刀が露になる。

「こんな天然に彼女なんかありえへん！　しかも、こんな美少女となんて神が許しても俺は許さへん！」

「違うって！お前は誤解・・・」

「ねえ、ユーユー今日の晩ご飯終わったらユーユーの部屋行っていい？　また、優しくしてね」

ウインクするな！　てかお前焦っている俺見て、絶対に楽しんでるだろう。
そもそも今夜から護衛だろうが！

「兵庫武偵高付属の時もそうやったけどなんでお前ばっかり美少女集まるねん・・・理不尽やろ」

は？　何の話だ？

「ユーユー、中学時代は兵庫にいたんだよね」

わざとらしく聞いてくる理子だが、それくらいとっくに調べてるだろ？
そう、俺は中学時代はこの兵庫県の武偵高付属の中学に通ってたんだよ。
虎児とはその時、よく組んでた相棒だ。

「東京に行ったかと思えば彼女持ちで凱旋か？　ほんまにありえへん・・・しかも、こんばフランス人形みたいな美少女と・・・く、くそう」

再び虎児は固まってしまった。
こいつ、彼女いない歴年齢とかぶるからな・・・いや、俺もだけど・・・

「おい、理子もう、これぐらいで・・・」

「くふっ」

明らかに面白そうに理子が笑った。
こ、この小悪魔め・・・

「と、虎児。　お前、クエストでここに来たって言ってたよな？この件関係あるのか？」

「ん？　ああ、それやけどな・・・」

涙目で立ち上がった虎児は真剣な顔になり

「ちょっとな、今、兵庫武偵高は厄介な事件抱えてるんや」

「厄介な事件？」

「ああ、あんまり大きい声で言える話やないんやけど・・・」

「優、パトカーがくるぞ。　捕まるといろいろ時間を取られる」

遠くからサイレンの音が聞こえてきたので裏理子の言葉に従いその場を４人で離れる。
大騒ぎになっているがまあ、大丈夫だろう。

場所を駅から少し離れたマクドに変えてざわざわと少し騒がしい場所で俺たちはハンバーガーを頼んでから席に付く。

「で？　虎児？　厄介なことってなんだ？」

「まあ、インフォルマもまだ、完全に調査を終えたんやないんやけどな中国人の犯罪組織が兵庫県内に潜伏してるってたれこみがあったんや」

「中国人？」

理子が一瞬、顔をひきつらせたのを俺は見逃さなかった。

「何か心当たりでもあるのか理子？」

「え？なんのこと？　理子わかんない」

お馬鹿キャラでごまかそうとした時点で何か知ってるな・・・

となると、イ　ウー関連に中国人がいるかもしれないということ・・・

ま、わかるのはそれぐらいだな

「で？　お前らは神戸に何しにきたんや？　まさか、彼女と観光旅行なんて言ったらしばき倒したるからな」

「ちげえよ！　クエストだ。　護衛のな」

「護衛？」

虎児は怪訝そうな顔をする。

「なんで、俺らじゃなくて東京武偵校に依頼がいってるんや？」

「さあな、お前らが無能じゃないのか？」

「言うてくれるな優」

俺がにやりとして言ってやると虎児はむっとした顔になった。

「久しぶりに勝負するか優？　お前のワイヤーはもう、俺には通用せえへんで」

「馬鹿か？　こんな街中でやりあうわけないだろ？」

「兵庫武偵高でやればええやろ？」

兵庫武偵高か・・・もしかしたら、進学してたかもしれない武偵高だができれば行きたくない・・・中学時代の連中には嫌な思い出がある奴もいるからな

「クエストがあるからパスだ。　またの機会だな」

「ふん、逃げおったな」

何とでもいえ、戦闘狂モードなら買った喧嘩だろうが通常モードじゃ買わん。

「こら！　プーリン！　ユーユー喧嘩はめっ！　だぞ」

理子が俺の頭を軽くぽかと叩いてから言ってくる。

「ぷ、プーリンってなんや？」

唖然として虎児が聞いてくる。

「ん？　プリンみたいな頭だからプーリンだよ」

「ぎゃはははは！　プーリンプーリン！　ハハハハハ！」

「笑うな優！　理子さん！　プーリンはやめてーな！」

無駄だ虎児、理子は１度つけたあだ名は取り消さん。

「くふっ、ダーメ」

「うおおお！　そんなかわいいあだ名いらへん！　俺は虎のように荒ぶる名前がいいんや！」

なんかかわいそうになってきたな・・・

「おい、理子それぐらいで・・・」

「いたいた！　優！理子！　あんたたち勝手にいなくなるんじゃないわよ！」

そのアニメ声に振り向くとアリアを先頭にキンジ、マリ、レキの４人が店内に入ってくるところだった。

「し、椎名先輩！　理子先輩とデートですか！デートなんですか！」

だからマリ！　なんで瞳孔が開くような恐ろしい目になるんだ！
キンジ！　お前もフォローしろよ！
レキは相変わらず無表情だし・・・
ん？　虎児がなんか静かなんだが・・・
詰めなさいよとアリアに言われて奥に移動しながら虎児はアリアを見てぼーっとしている。
レキがすとんと空いている虎児の横に座るが気づいていないのか・・・
・

「それで、優達は何してたの？　本当にデートなんていったら・・・」

ガバメントに手が行くアリア。
や、やめろ！

「アリア、注文をとってくる。　何がいい？」

キンジがフォローを入れてくる。
助かるぜ

「桃まんバーガー」

あるのか！　あるのかよ！

「分かった。　レキとマリは何がいい？」

「お任せします」

「・・・」

こくりとレキは頷くだけ

キンジが言ってしまうとアリアが前に座る見知らぬ男を見る。

まあ、虎児な。

カメリアの目と黒い瞳が合う。

「あ、アリアさん！」

さん？

「え？　な、何？」

どうしたんだ虎児の奴、いきなり立ち上がりやがって

「お、俺！　月島　虎児って言います！　一目惚れしました！　つきあってください！」

「ふえ！？」

突然の告白にアリアがぼんと顔を赤くする。

理子がおおというように面白そうに見ていたんだが・・・

ドゴオとすさまじい音がし、虎児が吹っ飛んでいた。

あ、あれ？　俺がやったのか？

ぼーとしていたからか虎児は冗談のように吹き飛んで床をざざざと滑りながら沈黙した。

客が呆然とした顔になったので俺は慌てて

「あ、すみません。　こいつ精神異常者なんです。　ちょっと眠ってもらっただけで心配ありません」

と、武偵手帳を見せながら言うと客はなんだそうかといい食事に戻る。
都会だからこんなことなれっこなんだろ。
赤面してぼぼぼと火でもでそうなぐらいなアリアを見ながらマリが何やらつぶやいている。
嫉妬ですね・・・嫉妬なんですね・・・フフフ・・・
い、意味わからんが何か怖い・・・
キンジが戻ってきたので

「キンジ！　みんなもう出よう！」

マックの店員さんが白い目で見てくるのでここはもうだめだろう。
キンジが持ってきたハンバーガー類を袋に入れてもらって俺は虎児を背負うと全員と店外に出るのだった。
まあ、俺がやったんだから責任があるからな。
その後、冷静になった。アリアは風穴開けてやると虎児を探したが俺が警察保護してもらった後だから虎児に風穴があくことはなかったんだが・・・
ちなみに三ノ宮を離れて電車の中で来た虎児からのメールを書くと

件名　死ねや優！

本文　何、警察に引き渡してくれてんねん！　頭下げなあかんかったろうが！
それは、そうとあの子！　あの子や！　アリアちゃん！　俺まじで一目惚れしてもうた！
メアドと電話番号知っとるんやろ！　教えてくれへん！　後、どんなせいか・・・」

メールを削除しますか？　はいっと

「どうかしたのか優？」

隣で窓の外を見ていたキンジが聞いてくるが俺は携帯を閉じながら言ってやった

「虎の恋いは実らないもんさ」

「はっ？」

怪訝そうな顔をするキンジを横目に俺は携帯をポケットにいれた。

「次は・・・次は・・・」

「次の駅ね」

アリアが言った。

そう、次の駅で依頼主がいる街に到着する。

いよいよ、護衛のスタートだな。

でも、三宮のこととといい今回もしんどいことなりそうと思うのは俺だけか？

「優」

ん？

正面のアリアがにこりと微笑んだ。

え？　何？

「さっきの理子とのデートの話、後でゆっくりと聞かせてもらうわ」

「覚悟してくださいね」

マリが付け足す。

ああ・・・もう、東京に帰りたい・・・・

第57弾　奴隷は正座してなさい！

ピンポーン

どこにでもありそうな住宅街の1角にその家はあった。
2階建ての1軒屋である。

「あれ？おっかしいな？　留守かな？」

理子が首をかしげながらピンポーンとインターホンを押した。
だが、沈黙した状態で返事はない。

「ここであってるのか？」

キンジが携帯のＧＰＳで確認しながら言った。

「どうなのよ優？」

アリアが聞いてくる。
今回の依頼を受けたてまえリーダーは俺だからな

「間違いないはずなんだが・・・すみませーん！　藤宮さーん！」

「・・・」

レキがドラグノフを担いだまま雨戸のしまった家を見上げている。
返事はない。

「約束の時間は18時だよな？　一応、5分前だから18時まで待

つか？」

「中に誰かいます」

「何？」

レキの言葉に俺は窓を見上げる。
すると、さっとストレンドグラスの小窓から人影が下がるのが見えた。

「対象は拳銃を所持しています。　狙撃しますか？」

おいおい、まさか・・・
護衛する前に襲撃者に制圧されたんじゃないだろうな？
出てこない理由もそれで、納得がいく。

「理子！　鍵頼む！」

「ＯＫ！　ユーユー」

ガバメントを抜きながら理子がピッキングを開始する。
さすが、泥棒一族、１秒も掛からずピッキングを解除してドアを開けるが中から内鍵がかかっているらしい。
がちゃんと行く手を阻まれる。
この！

デザートイーグルを取り出すとその部分に発砲。
ドオオンと凄まじい轟音が住宅街に響きわたった。

「アリア！　キンジ！　お前らは１階頼む！　理子！　レキは周囲

の警戒してくれ！マリは理子についてろ」

目を開けると戦闘狂モードで突入する。
階段を駆け上がり先程の小窓があった部屋の前まで来ると中から人の気配がする。
2人以上はいるな・・・

「ふっ！」

ドアを蹴破ると中に転がり込んだ瞬間パンと銃声がする。

「いて！」

それを防弾制服の防御力で無理やり突破して、相手の銃を蹴りばす。

「きゃっ！」

相手が悲鳴を上げる。
ずいぶん、可愛らしい悲鳴だな。

「終わりだ！」

左手で相手の首を掴むと床に叩きつけてガバメントを額に押し当てる。
え？あれ？
今、分かったんだが押し倒したのは女の子だった。
中学生ぐらいの髪の長い女の子。銃を突きつけられてるのに気丈に俺をにらみ返してきている。

「こ、殺しなさいよ。　どうせ、私の命を狙いに来た殺し屋でしょ

？」

え？　あの、なんなんだ？　銃撃ったのこの子だよな？

「ひとつ聞きたいんだが・・・いいか？」

「・・・」

無言で睨んでくる女の子。

「えっと、間違ってたらすまん・・・藤宮　奏か？」

「そうだったらなによこの人殺し！」

なんてことだ！

俺は慌てて銃を離すとその場に土下座した。

「ごめんなさい！」

当然、戦闘狂モードなんてとっくに消えてたさ。

なんたって、この子は護衛の対象　藤宮　奏さんなんだからな・・・

数十分後、一同、一階にあるリビングで顔合わせをしていた。

アリア、キンジ、理子、レキ、マリ、そして、奏と隠れていた妹の千夏ちゃん。

みんなソファーに座っているが俺だけ地面に正座だ。
理子がくふふと笑っていやがる。
く、くそう自業自得だとはいえ悔しい・・・

「本当に信じられません！」

1人用のソファーで腕を組んで激怒しているのは俺に押し倒された奏ちゃんだ。
中学2年生らしい。

「いきなり、鍵を壊して突入してくるなんて本当に武偵なんですか？」

「理子達はちゃんと時間通りに来たよ。　でも、出てこなかったのにも原因があるんじゃないかな？」

理子が俺をちらりと見て援護してくれる。

「っ、そ、それは・・・本物かどうかわからなかったから・・・」

「それなら、せめてインターホンにでるぐらいはしてくれてもいいと思いますけど？」

マリも援護に加わってくれる。

「まあ、いきなり飛び込んだ優も優だが・・・」

キンジ・・・お前は敵なのか？

「わ、悪かったわよ！　私も悪かったからもう、この話は終わり！」

強引に奏が話を打ち切った。
じゃあ、そろそろ・・・

「あんたはそのままよ」

アリアが俺に下した正座命令を解いてはくれなかった。
クライアントを押し倒したと聞いたアリアは奴隷はそこで正座してなさいと命令してきたのである。

「・・・」

レキは無言で何も言わない。
助けてくれよレキ・・・

「まーまー、アリア、ユーユーだって反省してるんだからさ。　理子に免じてもどしてあげなよ」

「奴隷はそこにいなさい！」

奴隷と聞いて奏が俺をゴミを見るような目で見てくる。
最悪だ・・・徹底的にクライアントに嫌われたぞこれは・・・

「ち、違うんだ奏さん！　これは！」

「その変にしておかないと護衛の人かわいそうだよお姉ちゃん」

声のした方を見るとさくらんぼの髪飾りでツインテールにしている奏の妹、千夏ちゃんだった。
お盆に人数分の紅茶をのせて足元がオボついていない。

「危ない！」

俺がさっおぼんを手に取ると千夏ちゃんはありがとうございますお兄さんと言ってきた。

なんか、アリスを思い出すなこの子・・・

その頃、中華料理屋『炎』

「ふぇくしゅん！」

「どしたいアリス？　風邪か！」

「いえいえ、どうも私のここと噂している人がいるみたいです店長。おおかたお兄さん当たりでしょう」

「すみまーせん！　注文いいですか？」

「あ、はいはーい！」

いつも通りの炎だった。

その夜。2階の2部屋女性陣で使用し、下の階の客間を俺とキンジが使うことになった。

しかし、本日より護衛いう立場である
最近では一緒に寝ていることが多いという2人の部屋のなかにはレキがつくことになった。
もう1人は外の警戒だ。
言うまでもないが男性陣は絶対に外。
中に入ったら射殺してくださいと奏は特に俺を見てレキに言っていたんだがレキはこくりと頷いていた。
れ、レキさん・・・本当に撃たないでね・・・
レキは噂通り体育座りで眠り常に敵の襲撃にそなえているという噂は本当だったらしい。
キンジもびっくりしていたが俺も驚いた。
あんなかっこで俺は眠れんよ。

「おやすみなさいみなさん」

「おやすみ」

奏と千夏が眠ってしまうとドラグノフを抱えたまま部屋の中について行ったレキ以外の面子はリビングで打ち合わせだ。

「ああ・・・もう、クライアントに俺完全に嫌われちまった・・・」

「くふふ、ユーユーどんまいだよ」

「自業自得じゃない優のあれは・・・」

ううう・・・確かに・・・初対面の女の子に暴力振るったんだから嫌われて当然だ・・・

「まあ、私は新しい女の人ができないのはいいですけどね」

マリがなにやら言っている。
なんのことなんだ?

「そんなことより、明日からの行動の説明をするね」

と、説明を始めたのは理子だ。
今回は理子はどうしてもやりたいとうから護衛をプランを任せたんだが・・・

「まず、護衛組と調査組に分かれるんだよ。　かなでんとちーは学校に行くからかなでんはユーユーとキー君とマリリンでちーはアリアが護衛担当だよ」

なんなんだ?　かなでんとちーってあの2人のあだ名か・・・クライアントにまで付けてるなんて・・・
というのも理子はお得意のお馬鹿キャラであっという間に2人と親交を深めてしまっている。
こいつにはこのスキルでは絶対に勝てんな。

「それはいいんだが、あの2人学校に行くのか?」

ろくに口も聞いてくれなかったので理子から補足もかねて聞いておくか・・・

「うん、転校生として学校に潜入。　キー君やユーユーはやったことあるでしょ?」

「ああ、前にやったな・・・」

「俺もやったっけな・・・」

中学時代だがキンジはお金持ちの学校、俺は一般校に潜入調査をした経験がある。

「あたしはどうするのよ？　千夏の護衛は転向するわけにはいかないじゃない」

アリアの意見は最もだ。

千夏は小学４年生だ。アリアは高２・・・ってあれ？　理子まさか・・・

俺がまさかという目を理子に送ると理子はおもしろそうに笑うと

「そうでーす！　アリアには小学４年生としてちーのクラスに転校してもらいまーす！」

「え？」

はじめは理解できなかったらしいアリアは俺たちと自分の体を見下ろしてから顔を真っ赤にして激怒した。

「あたしは高２だ！　理子！　何考えてるのよ！」

「えー、アリアなら小学４年生でも十分通じるよ。　小さいし」

「あんたも小さいでしょ！　あんたもやりなさいよ！」

「えーでも理子はこの胸が邪魔して小学生には見えないかなぁ」

大きな胸を理子は触りながらおもしろそうに言っている。

キンジはヒステリアモードを避けるためか顔をそらした。
アリアはぐぐぐと悔しそうにはぎしりしながらがるるとライオンのような唸り声をあげだした。
おいおい、理子よ。　アリアの怒りのはけ口を俺たちに向けるなよ。
いや、俺に
「ちなみに衣装は用意してまーす！」
どこからか取り出した理子の手には小学生の制服らしい服に名札。
ご丁寧にアリアちゃんとまで書いてある。
「「「「プっ」」」」
アリアを除く全員が吹き出した。
想像したらあまりにハマりすぎて困る。
「く、あんたたちみんな風穴あけてやる・・・あけてやるんだから・・・」
がるるがどがるるるとランクアップしそうだったので理子が話題を変えてくる。
「で、こっちがキー君達の制服ね」
ばさりと出された男子中学生の制服と女子制服2着？
「おい、理子間違ってるぞ男子制服が1着たりんし女性制服が1着多い」
「くふっ、間違ってないよ。　女子制服の1着はユーユーのだもん」

「・・・」

唖然としてから

「冗談だよな？」

「メイクは理子に任せろがおー！　男子でもメロメロになるようにしてやるぞぉ」

「椎名先輩の女装・・・」

マリが何か考えるようにしていいと言っている。

「待て待て待て！　俺も男子の制服でいいだろ！」

「駄目でーす！　マリリンじゃ、女子しか入れない場所で襲われたらまずいからユーユーが適任なんだよ。　綺麗な顔してるんだから大丈夫大丈夫」

こ、この顔はコンプレックスなんだ！　怒るぞ理子！

「お前が護衛したらいいだろ理子！　い、いやレキでもいい！」

この際逃げられるならなんでもいい。

「理子とレキュはやることがあるんだよ。　サポートはするからがんばるんだぞ」

まじか・・・神は俺は見放したのか・・・

アリアは優が女装と訝しげな顔をしているが理子は自信満々に

「明日の朝は早いよユーユー！　りこりんにお任せ！」

と、ぱちりとウインクまでしてきやがった・・・

かわいいんだが・・・誰か助けてくれ・・・

このクエストを受けたことを俺は心底後悔するのだった。

第５８弾　あなたの評価は変態です

私は・・・ただ、今の生活を守りたかった。
お母さんは小さい頃亡くなったけどお父さんと千夏と私の３人で変わらない日常を送りたかった。
でも、一ヶ月前のあの日に私の日常は崩れた。
それは、本当に唐突だった。家に、名前の知らない兵庫武偵局の人が来て

「君たちのお父さんは職務中に犯人と交戦し殉職された」

訳が分からなかった。
３日ほど留守にすると出ていった父が帰ってくるはずのその日に、そんなことを言われても納得なんか出来るはずがない。
武偵局の人は違反なんだけどねと言いながらも父が使っていた拳銃を渡してくれた。
名前なんか知らない・・・黒くてとても重い銃だった。
父の遺体は上がらなかったらしい。
密入国しようとしていた中国人グループとの戦闘で撃たれ海に父は落ちたという。
私は訳が分からなくて・・・武偵局の人に狂ったように罵声を浴びせ続けたがごめんねと武偵局の人は言うだけだった。
遺体のない父の葬儀やお墓まで全て武偵局が面倒を見てくれた。
１週間も掛からない手際の良さだった。
父の残した生命保険は莫大とはいかなくても２人が大学を卒業するまでなら十分な金額が残されていた。
武偵は殉職する可能性が決して低くない。
父はそれを見越して多額の生命保険を自分にかけていたのだろう・・・

千夏はただ、泣いて私は姉として武偵局の人に罵声を浴びせたとき以外は人前では泣かなかった。
泣くのはお風呂の中だけ・・・それも湯船に顔をつけて涙が枯れるまで泣き続けた。
涙も枯れたその頃、ようやく落ち着きを取り戻してきたとき、再び日常は壊れた。

「君のお母さんはとある財閥の娘なんだ」

初老の男が訪ねてきてそういった時は本当に驚いた。
父と母は駆け落ち同然に一緒になったという。
とある日本でも有数の財閥の私の祖父に当たる人も父と同時期に亡くなったらしくその遺言が娘の孫にすべての財産を譲るというものだった。
知りもしない人からいきなり、そんなことを言われても困る。
私は初老の男に財産相続を拒否すると言うと初老の男はなんども私を説得してきたが私の決意は硬かった。

「では、１０日後にある弁護士立会いの場で遺産相続破棄を宣言してもらいたい」

お安い御用だ。
そんなことで日常が守れるなら・・・千夏とお父さんたちと暮らしたこの家で暮らせるなら・・・

「だが、君と妹はその時まで命を狙われることになる」

「え？」

「今から3日後に親戚に仮発表という形で君たちが相続することを

通達される。　当然、快く思わない親戚の誰かが君たちを殺そうとするかもしれない」

「ま、待ってください！　私、遺産相続を破棄するんですよ！　なのになんで！」

金持ちの事情というやつだろう。
継ぐ可能性があるなら潰す。
まして、相手が小娘なら尚更というわけだ・・・

「護衛は私が手配しよう。　腕利きが多いという東京武偵校に依頼してみよう」

関西県の武偵校にクエストを出さなかったのは親戚の手が伸びている可能性があるからだということだ。
武偵局も危険だ。
警察は狙われているかもでは動いてくれない。
なら、学生であり、関東の武偵高に頼むのが一番いい方法なんだそうだ。
資金も初老の男が出してくれるという。
どんな人が来るんだろう・・・
父と同じ武偵を目指す高校生達
命を狙われるということは迷ったが千夏にも打ち明けた。
この１週間生き残って見せよう。
絶対に日常にもどるんだ。
そう、思って仮発表がある６時間前の１８時、ピンポーンとインターホンがなった。
出ようと思ったが
まず、どんな人が来たのか見てみよう。
万が一に備えて千夏をクローゼットに隠し、父の形見の銃を手に小

窓から様子を伺う。
暗くてよく見えない。

「すみませーん！　藤宮さーん！」

男の声が聞こえてくる。
大きな銃を肩に持っている女の人がこちらを見上げてきたので反射的に引っ込んでしまった。
そろそろでないとダメかな・・・

ドオオン

「え？」

そんな時、下から轟音が響きわたった。
そして、どたどたと言う音。
ああ、なんてことだろう。
彼らは護衛の人間ではなく襲撃者だったんだ。
扉を銃で破壊して入ってくるなんてそうに決まっている。

「千夏！　絶対に出てこないで！」

震えてるで銃を扉に向ける。
安全装置を解除してから・・・

「ふっ！」

掛け声のような声と共に扉が蹴破られた。
千夏は私が守る！

パンと予想外の反動にびっくりしながらも再び引き金を引こうとする。

「いて！」

命中したんだろうか？　襲撃者は苦痛の声をあげたが撃退は出来ていない。
影は一気に迫ると父の形見の銃を蹴り飛ばし私の手から無くしてしまう。

「きゃっ！」

悲鳴を上げながら銃を探す。　お父さんの銃が！

「終わりだ！」

影は私の首を掴むと床に押し倒して大きな銃を私の頭に突きつけた。
私は屈しない。
怯えた顔なんて見せるものか

「こ、殺しなさいよ。　どうせ、私の命を狙いに来た殺し屋でしょ？」

「ひとつ聞きたいんだが・・・いいか？」

戸惑うようにいう襲撃者
私はそれを無言でにらみ返す。

「えっと、間違ってたらすまん・・・藤宮　奏か？」

「そうだったらなによこの人殺し！」

「ごめんなさい！」

そういうと襲撃者・・・いや、椎名　優希は土下座した。
これが、出会いだった。

朝、7時になりピピピとなる目覚ましを止める。

「う・・・」

妹はまだ寝ているようだ。
起き上がると一瞬、ぎょっとした。
壁のすみで大きな銃を肩にかけて体育座りをしている少女と目があう。

「・・・」

無表情だが吸い込まれそうなその瞳、お人形のような印象を受ける
その少女はレキと言うらしい

「お、おはようございます。　レキさん」

「・・・おはようございます」

最低限の挨拶をレキさんは返してきた。
それ以上無駄なことは言わない。
昨日ちょっとだけ、話したが自分からは余計な会話は一切ふらないのだレキさんは
そして、あの格好で眠るのだから信じられない。

「あのできれば着替えたいので出ていってもらえないでしょうか？」

「それはできません」

レキさんが返してくる。
まあ、護衛中なんだし、同性だからいいかと私は考えるのだった。

着替えてからドアの外に出て1階に降りる。
洗面所で顔を洗ってからリビングに行くといい匂いがしたので台所に行くと金髪の少女が鼻歌を歌いながら何やらケチャップを付けていた。

「おはようございます。　峰さん」

「おっはよー！　かなでん！　もうすぐご飯できるよ」

護衛の間、ごはんは毒等を考慮して護衛のメンバーがつくることになっていた。
普段は私が作るのだから楽ではあるが・・・

「何作ってるんですか？　峰さん？」

「もう、かったいぞぉー！　りっこりんでいいってば」

「り、理子さん」

「りっこりん」

「理子さん」

「りっこりん」

「り、りこりん」

「そうそう、くフフフ」

なんというか嫌な人ではないのだがりこさ・・・りこりんはパワルフすぎて困りものだ。

「手伝いましょうか？」

「今日の担当は理子だからかなでんはゆっくりしてて♪」

「はい」

台所を後にしてリビングに戻る。

庭に人影が見えたので見てみると縁側に座っているのは護衛の男の2人のうちの1人遠山　キンジさんだ。

窓を開けると遠山さんが振り返ってくる。

「あ、おはよう」

「おはようございます。　何してるんですか？」

「ん？　２人お訓練を見てたんだよ」

「訓練ですか？」

遠山さんが指を指した方を見ると少し広めの庭では護衛メンバーの１人、紅　真理奈さんと・・・

誰だろうあれ？

昨日のメンバーに明らかにいなかった女性がいる。

黒のジャージを着込んでいるが日本人形のような黒い長髪にほんのりと化粧をかけているのか美しい女性だった。

「ほら！　早く撃ち込んで来い！」

乱暴な言葉遣いだがその声は女性の声そのものだった。

「はい！」

マリは拳銃を持ったまましゃがみこむと足払いをかける。

「遅い！」

女性はそれを跳躍して交わすと拳銃を抜いてマリの肩に押し付けた。

「あう・・・」

マリが降参ですというように動きを止める。

「よし、これぐらいにしとくか」

「はい！　ありがとうございました」

私はそれを見ながら遠山さんに訪ねてみる。

「あ、あの人新しい護衛の方ですか？　昨日はいませんでしたよね」

すると、遠山さんは困ったような顔になって

「あ、あいつ・・・いや、あの子は・・・」

「キンジ！　次はおまえ・・・」

女性の笑顔が固まった。

「あ、はじめまして！　藤宮　奏です。　新しい護衛の方ですか？」

「い、いやお・・・私は・・・その・・・」

冷や汗を書いているが私にはん？と首をかしげるしかできない。

何を戸惑っているのだろう？

そんな時、後ろからアニメ声が聞こえてくる。

「優！　キンジ！　マリ！　ご飯で来たって理子が・・・」

ピシと今、何かが砕けたような音がした。

空気が固まる。

マリがあちゃーと言う顔をしキンジがあさっての方向を見る。

まさか・・・

「椎名さんなんですか？」

「は、はい」

絶世の美女・・・いや、変態女装男椎名　優希は諦めたように言った。

「へ、変態！」

私の椎名　優希に対する評価が暴力男＋変態に変わった瞬間だった。

第５９弾　潜入護衛

うおおお！　なんでこんなことになったんだ・・・
あの後、食事をとる時も理子が運転する車でこの学校にくるときも奏ちゃんは俺と目を合わせず位置も一番遠い場所に取り続けている。
理子が女装の説明はしてくれたが印象は最悪を通り越してマイナスになったようだった。
その奏ちゃんは今も俺を軽蔑しきった目で見ている。
とはいうのも・・・

「せ、千堂　キンジだ。　両親の都合で引っ越してきた」

千堂と名前を変えてクラスの前で自己紹介をしているキンジ。
大丈夫か？３才も年下の連中だがミスるなよ。
よし、次は俺だな

「せ、千堂　優です。　これからクラスメイトとしてよろしくお願いします」

と、理子に教えられた満面の笑顔をクラスに振りまく。
おいこらそこの男子！　顔を赤くするな！殺すぞ

「し、質問いいですか？」

顔を赤くした男子生徒が手を上げる。

「はい、川上君」

ショートカットの先生が生徒を指さす。

「ゆ、せ、千堂さんはどこから来たんですか？」

「東京です」

めんどいから簡単に答えておこう。

「じゃ、じゃあ趣味とかは・・・」

「おいおい川上！　転校生を質問攻めにするなよ」

「うるせえ！」

ぎゃははとうるさくなりかけた教室を先生が教科書を丸くしてぱんぱんと手で叩く。

「はいはい、騒がない！　名前からわかるように千堂　キンジ君が兄で優さんが妹だからね。　２人の席は・・・」

「はい！はい！　ここあいてます！」

川上が手を上げるがお前の席は奏ちゃんから遠すぎる。

「先生、私たちあそこがいいです」

前にアリアがしたみたいに指したのは奏ちゃんの後ろと左横だ。

奏ちゃんが心底嫌そうな顔をした。

そんな顔するなよ・・・俺だってこんな格好やだよ。

次の時間の休み時間、転校生の宿命というべき質問攻めに合う。
俺は男子に、キンジは女子にたまらないので逃げたくなりお昼休みは奏ちゃんの手を引いて屋上に逃げ出した。
鍵がかかっていたがそこは武偵、ピッキングで開けてから鍵をしめる。
ここなら誰もこないだろう。

「ああ！　もう！　うぜえええええ」

大声で叫んでから屋上に寝っ転がる。

「大丈夫か優？」

キンジが少し面白そうに言うので俺はキンジをにらみつつ

「大丈夫じゃねえよ。　女装して潜入なんて俺の人生で初めてだ！」

虎児とかいなくてよかったぜ本当に・・・

「変態」

ぼそりと、奏ちゃんが理子作の弁当を広げながら言うので俺の精神は大打撃を受ける。
いっそ、殺してください・・・
泣きなら理子の弁当を開く。
ご飯にＬＯＶＥの文字が書かれていたが即効でかき消して口にいれ

る。
うん、美味しいな。
定時連絡の時間になったので俺が理子に電話を入れる。
しばらくしてから
「あなたのりこりーんでーす。　くふっ、ユーユー理子のこと忘れられなくて電話しちゃった？」
「してねえよ！　定時連絡だろうが！」
いつものお馬鹿キャラで言ってくる理子の言葉を聞きながら
「で？　アリアの方はどうなんだよ？」
「問題ありません」
5人同時通話でレキの声がした。
「アリアさんは周りに対して関係は良好ではありませんが護衛に問題はありません」
そりゃ、小学校に潜入してるんだもんな・・・それに違和感がないというのはある意味すごい・・・
ぶつんと言う音がして
「り、理子おおお！　あんた帰ったら風穴あけてやるんだから！」
アリアのアニメ声だな

「くふ、アリア小学生姿似合うよ。　むしろ、高校生なんて嘘なんじゃない？」

電話の向こうからがるるると言う声が聞こえてくる。
ま、まずいこのままでは俺が風穴だ。

「れ、レキと理子はどこにいるんだ？」

話題を変えるようにキンジが言うと

「キンジさんから右に見えるビルの屋上です」

あ、あれか。
小学校と中学校がどちらも狙える位置にあり狙撃にはむいている場所だ。
だが、２キロぐらいは離れている。

「本当に狙撃できるの？」

と奏ちゃんが聞いてきたので俺は無言でボールペンを取り出すと

「レキ、これ狙撃してくれ」

と上へポーンとなげる。
奏ちゃんが上を見た瞬間、ヒュンと風邪を切る音と共にボールペンがばらばらに砕け散った。
奏ちゃんが目を丸くする。
まあ、レキならこれぐらいはできるよな。

「とまあ、変わったことはこっちもない。　引き続き護衛を継続だ

な。　じゃあな」

俺とキンジが電話を切ると今度は、マリから電話だ。

「もしもし」

「椎名先輩ですか？」

「ああ」

「家の方は問題ありません」

そう、マリはアリアに言われてキンジの部屋の時のように藤宮家の要塞化を図っているのだ。

デュランダル事件のように襲撃してくるかどうかもわからない相手だがアリアの部屋の要塞化がデュランダルを躊躇させたのは紛れもない事実だ。

まあ、俺的には襲撃してきた奴をぼこぼこにして黒幕を吐かせて逮捕が一番手っ取り早いんだが・・・

「じゃあ、引き続き頼む」

「はい！　椎名先輩が寝ている部屋の監視カメ・・・いえ、間違いました監視カメラもっと付けときますね」

大丈夫なのか？

少し不安になるが

「じゃあよろしく頼む」

電話を切る。
と、奏ちゃんが俺を見ていた。

「ん？　どうした？」

「今の子、アミカなんでしょ？」

誰からから聞いたのだろう。

「よくアミカのことを知ってるな」

キンジが目を丸くしていった。
確かにアミカなんて制度があるのは武偵だけだ。

「お父さんが武偵だったからアミカの話は聞いてるの」

と、少し寂しそうに奏ちゃんは言った。
が、すぐに俺を見て

「変態のアミカなんてあの子かわいそうね」

「ハハハ・・・」

苦笑いをしながら俺は思う。
東京に帰りてえ・・・

第６０弾　風穴！皆殺しだ！

ああ、天国ってこんなに近かったんだな・・・
俺は嵐にような銃弾の中そう思った。
俺がなぜこんなことを思っているのかと言えば数時間前に遡る。
１日目の護衛が終わり、奏ちゃんの家に帰ってきて女装を脱ぎ捨てしばらくしてからのこと
アリア達がマリが仕掛けた要塞化の様子を見ているとき俺は暇なので縁側に座って日本刀を取り出していた。
無論、触るのではなく目の前に置いているだけだが・・・

「・・・」

こいつが使えればずいぶん楽なんだがな・・・
そう思いながら日本刀を見つめていると

「それ本物？」

振り返ると奏ちゃんだった。
少し前かがみになりながら刀を見ている。

「ああ、それなりの業物だよ」

「武偵って銃を基本に扱うのよね？　刀なんて役に立つの？」

「ああ・・・」

俺は銃以外の武器も持つ連中を頭に浮かべた。
沖田、白雪、ジャンヌ、アリア、実家の連中・・・

どれもこれもまともじゃない力を持っている。
銃弾切りできるキンジもこの中に入るのかもしれんが・・・

「ランクが上なら使い道はあるんだよ」

「変態のランクは？」

おま・・・変態はやめてくれよ

「Aランクだ。　ちなみにキンジはS、理子はA、レキはS、マリはS、アリアもSだ。　まあ、学科は異なるけどな」

あえて、キンジはSにしておく。
俺の評価ではキンジはSランクだからな
奏ちゃんの目が丸くなる。

「そんなに高位なんだ変態って」

「変態はやめてくれ・・・」

しくしくと目に涙を浮かべながら俺は言う。

「・・・かんがえとく」

ランクを聞いて見直してくれたのだろうか？奏ちゃんがそう言ってくれる。
よし、関係改善の第一歩だ。

「そろそろご飯よ。　へん・・・椎名さん」

「あ、ああ」

立ち上がった奏ちゃんに続いて俺もリビングに向かうのだった。
それから、5分後、俺は絶句していた。

「な、なんだこれは・・・」

「晩ご飯ですが？」

と、レキが言う。

「ば、晩ご飯ってこれがですか？」

マリが冷汗をかきながら言った。
なんと、テーブルにあるのはカロリーメイトの箱が人数分置かれている。

「いや、だからってこれはないだろ！　レキ！」

俺が言うとレキは何が悪いのかわからないのか首をかしげている。
なんてことだ・・・
レキに晩ご飯担当は無謀だったのか・・・
見ると理子とアリアとキンジが姿を消している。
ご飯の調達に行ったらしい。

「悪いな奏ちゃん。　千夏ちゃん。　飯は今から・・・」

「これでいいです」

「うん、1度食べたかったし」

奏ちゃんと千夏ちゃんはカロリーメイトの袋を破くともぐもぐと食べ始める。

味気ないが不味くはないんだよな。

「俺たちも食べるか」

「うう、カロリーメイトだけなんてあんまりです」

俺とマリはもくもくとカロリーメイトをほおばるのだった。

そして、時は過ぎ、ももまん弁当や焼肉弁当、ハンバーグ弁当等を食べたキンジ達に文句を言いつつ。

俺はソファーで目をつぶり、気づいたら部屋は真っ暗だった。

「やべ・・・寝ちまったか・・・」

周りを見るがもう、誰もいない。

「起こしてくれよ。　みんな・・・」

俺って人望ないよねと思いながら風呂に向かう。
湯船が残ってくれるといいんだが・・・
今日、風呂入ってないからな・・・
そして、風呂の扉を開けた俺は・・・

「あ・・・」

アリアと奏ちゃんと目があう。
風呂から出たばかりらしくアリアはトランプ柄のパンツを手に、奏ちゃんは薄い緑のブラを・・・

「ゆ、優・・・あんたって奴はこんなところまで来て・・・」

がるるるとライオンの唸り声に続き奏ちゃんが再び

「変態・・・人間のクズですね」

胸を隠しながら言われ

「へへへ」

とりあえず、昔見た某格闘漫画の主人公みたいに右手を頭の後ろに置いて笑を浮かべた

「風穴ギムゼルオール！」

「まっ！」

荒れ狂う４５ＡＣＰ弾。　嵐のようなそれを防弾私服に受けながら

俺は思った。
ああ、天国ってあるんだな・・・
そんな護衛1日目の終了だった。

第６１弾　闇の中の声

神戸　某所

「では、藤宮の小娘どもには学生の護衛がついたのだな？」

広いがカーテンにより薄暗い下手の中で車椅子の老人が言った。

「ええ、東京武偵高の学生です。　予想が外れましたね」

面白そうに闇の中から声が聞こえる。

「関西ではなく関東の武偵を雇うとはな・・・護衛のメンバーのランクはどうなのだ？」

「Ｓランクが４人、Ａランクが２人ですね。　うち、戦闘限定においてはＳが３人、Ａが２人」

老人がうなるような声を上げる。

Ｓランクは１人で特殊部隊一個中隊と同等の戦力を意味する。

そんな化け物が２人も付いているとなるとうかつには手が出せない。

「それと、もう一つ」

影が言う。

「Ａランク評価だが椎名　優希は日本でいう超人ランクで５０位以内に入っています。　油断はできないですよ」

「すると、Sランククラスが3人か・・・依頼を果たせない場合は報酬はないぞ?」

「分かってますよ。　ただし、ランパンと交わした約束を破らないでいただきたい」

「わ、分かっている」

老人が焦ったように言った。

「それでどうするのだ?　藤宮の2人の殺害を出来る自信があるのか?」

「それは問題ありません」

「頼むぞ。　公安0が私を狙っているという噂もある。　くれぐれもミスはするなよ?」

「それはあなた次第ですよ」

影はそういうと姿を消した。

「ふん、チャンコロの劣等民族が・・・」

姿を消した空間を見つつ老人が悪態をつくのだった。

護衛2日目、学校についた俺たちに訪れた最大の危機は体育の授業だった。

「あれ？　椎名さん気分悪いの？」

更衣室のベンチに座りながら俺は

「うん、ごめんね・・・」

女装のまま、返事を返す。
なんて、拷問だ・・・周りは着替えをする女だらけ。　きぶんがわるいといって目をつぶっているがキンジならヒスルな・・・
でも、俺は男の子、目を少し開けた瞬間目を、チョキで潰された。

（ぐあああああ）

マリがやったらしいぞ
失明したらどうするんだ！

「じゃあ、椎名さん。　ゆっくりしててね」

「あ、はい」

最後の女子が出ていったのを確認してから俺はさっと服を着替える。
ジャージを着てから体育館へ。
見ると男子はバスケ、女子はバレーだった。
奏ちゃんが俺を変態という目で見てくる。
チーム訳の結果、俺は奏ちゃんとマリと敵チームだった。

そして、俺のサーブなんだが・・・

「・・・」

変態という目で見てくる奏ちゃんにおとこのプライドを見せてやりたいという俺の闘士がそうしたんだろう。

「はあああ！」

どごおおおと体育館の床にバレーボールをめり込ませる。
わああと歓声があがるがそれで終わる訳がない。
次々とサーブで決めていく俺。
フフフ、風凪容量で完全試合をきめてやるぜ
大人げないことだが俺一人で試合は進攻していく。
アリア達がいない以上、勝ち目などないのだ。
そして、予想通り試合が終わると圧勝。
マリや奏ちゃんはぜぇぜぇ言いながら悔しがっていたが知ったことではない。
勝利こそ正義だ。

そして、昼休み、再び屋上に集まった俺は・・・

「最低です！」

「最悪・・・」

マリと奏ちゃんに集中砲火を浴びていた。
なぜなんだ・・・

「普通、女の子相手なら少しは手加減するのに全力で叩き潰すなん

て最低です！

「やはり、変態は性格も悪いんですね・・・」

うおお、最悪だ！

理子のＬＯＶＥのりを消しながら俺は頭をがっくりと下げる。

「すまない・・・」

「大変だな優・・・」

同情してくれるのはお前だけだキンジ・・・やっぱり友達は違うぜ

「それでも、女の子相手なら手加減するんのが普通です」

「そうよ。　変態はそのへんわかってない」

ダメだ。　泣きたいよ・・・

そんなこんなで学校の護衛が終わり理子の防弾車に乗り、藤宮家に戻ってきたんだが

俺への奏ちゃんの評価は最悪の最悪・・・

近寄らないようにしているらしく姿すら見えない。

しくしく泣きながら縁側で日本刀を持つ訓練を始める。

トラウマこそ、あるが徐々にこいつを持てる時間は増えている。

時間さえあればきっと、こいつを使えるようになる、

そう、思いながら剣を握る。

思い出すのは赤い・・・ただ、赤い光景

「やめて！　死にたくない！」

記憶の中にあるのはその言葉

「・・・フフ」

無慈悲に降り下ろされるその剣を見て俺は・・・

「泣いてるの変態？」

奏ちゃんだった。
俺は目の涙を拭う。

「どうしたんだ奏ちゃん？」

笑を浮かべて言うと少し奏ちゃんは顔を赤くしながら

「別に、変態がなんか元気なかったから・・・」

なんていうかこの子も結構優しい子だよな・・・・

「大丈夫さ。　気にすることはねえよ」

そういいながら刀を仕舞いながら言う。

「ねえ・・・」

しならくは無言だったが唐突に奏ちゃんが声をかけてくる。

「・・・」

俺は無言で刀をしまっていく。

「なんで私の護衛を引き受けたの？」

それは返事に困るぞ・・・

まさか、金がないから受けたなんて言えない感じだ。

少し間上げてから

「俺には・・・守らないといけない人がいるんだ」

昔は、依頼されたから・・・

でも、今は俺の意思で最悪、かなえさんの免罪までは付き合いたいと思うカメリアの瞳の少女。

「今いる、人の中にその人はいるの？」

奏ちゃんが聞いてくる。

アリアを思い浮かべ俺は頷いた。

「ああ、いるよ」

「そっか・・・」

奏ちゃんは夜空を見上げながら

「少し見直したかな変態」

「変態はやめてくれよ・・・」

「いやよ」

奏ちゃんはべっと舌を出して言った。
俺はため息を付きながら

「まあ、もういいけど。　奏ちゃん達本当に狙われてるのかね？
護衛終了日まで何も起こらなかったりしてな」

それはそれでいい。
何もせず報酬が入るんだからな・・・

「うん、だといいね・・・」

奏ちゃんの言葉を聞きながら俺は後日、その考えが甘かったことを
思い知るのだった。

第６２弾　襲撃

護衛も４日目になってくると暇に感じてくる。

潜入の時はなるべくめだたないほうがいいからな

アリアの方も同様らしく、今では近寄ってくる人も限られてるそうだ。

ていうかあの、性格で小学生の友だちが出来るのかね・・・

そうして、今日の学校生活も何一つ起こることなく終を告げる。

だが、今日の護衛任務はこれだけに終わらない。

「え？　寄りたいところがある？」

防弾車の中でのことである。

情報収集のため理子やレキ、アリアがいないため、俺、キンジ、マリ、千夏ちゃん、奏ちゃんというメンツで俺が運転する状態で奏ちゃんが話しかけてきたのである。

「ダメかな？」

「どうしても、今日じゃないといけないんですか？」

マリが後部座席から聞いてくる。

「はい・・・」

どうすると？　キンジが俺に視線を向けてくるので

「その用事ってのはなんなんだ?」

「今日はお父さんの誕生日なの・・・だから・・・お墓参りしたいなって・・・」

両親か・・・

俺はいい思いがないんだがアリアの母親のかなえさんを思い出す。

あの人は、免罪だ。

それは間違いない。

イ・ウーが免罪を着せているのならそれを潰す。

「いいじゃないですか。　行きましょうよ椎名先輩、遠山先輩」

援護するようにマリが言った。

「椎名先輩も遠山先輩もSランクですし、少しぐらいなら大丈夫ですよ」

「おい、マリ俺はEランク武偵だぞ?」

キンジが言う。

「いや、お前はSだよ。　心配しなくても俺がいるじゃねえか」

正直な話、周囲警戒には視力6．0のレキが居てくれればいいんだがそう甘くはない。

「どうなっても知らないぞ・・・」

キンジが諦めたように言った。

「ありがとう」

奏ちゃんと千夏ちゃんは笑顔で言うのだった。
うん、女の子は笑うとかわいいよな。
レキにも見習わせたいところだ。

そして、やってきたのは集団墓地だ。
お墓が並ぶその光景は一言いうなら不気味とも言えるが藤宮家のお墓は霊園の奥にあった。
線香をあげながら手を合わせている千夏ちゃん達を見る。
かわいそうに思う。
中学生と小学生で両親を亡くし、今命を狙われる立場にあるのだ。
過酷な運命とも言える。

「？」

奏ちゃんが俺を不思議そうに見てくる。
ああ、命を狙われてるのかなんて変わらねえよ。
でも、護衛の期間ぐらいは守ってあげるからな・・・
そう、思った時だった。
周囲から殺気を感じる。

目をつぶり、キンジに小声で話しかける。

「キンジ、敵だ。　複数に囲まれてる」

「何？」

キンジはそれに初めて気づいたように警戒感を強める。
ヒステリアモードじゃないとだめだな・・・だが、ここにはアリアも理子もいない。
ヒステリアモードにする条件が整わない。
マリや奏ちゃん達を条件にできるかといえば難しいだろう。
年下はキンジには射程外なのだ。

「マリ、キンジ2人を守れ。　あいつらは俺が仕留める」

返事を待たずに戦闘狂モードになった俺は地をかける。
木の影に隠れていたクロボシを持つ2人を発見する。
2人は俺に銃を撃とうと慌てている。

「遅え！」

右手と左腰から飛び出したワイヤーが男2人の眉間に直撃する。
悲鳴を上げるまもなく倒れる2人。
直後、背後に感じた殺気にガバメント2丁を抜くと発砲、悲鳴をあげて5人の襲撃者が肩を抑えてのたうち回る。
よし、この程度なら1人でも・・・

「きゃあああ！」

「何？」

見ると千夏ちゃんが不良っぽい男に首を腕に抱えられて悲鳴を上げている。

「千夏！」

奏ちゃんが悲鳴をあげているがキンジとマリに抑えられる。

「やめろ、行っちゃ駄目だ」

「でも、千夏が！」

「ちっ！」

舌打ちしながら地をけろうとした瞬間

「おっと動くなよ」

「う・・・」

止まらざる得ない。

男が千夏ちゃんの首にナイフを突きつけたからだ。

「ひっ」

泣きそうな顔で千夏ちゃんが凍りつく。

「ハハハ、いい顔で怯えるねえ。　俺はそんな顔大好きだよ」

鼻にピアスをつけた不良が千夏ちゃんの頬を舌で舐める。

「てめえ！」

怒りが感情を支配するが動けない。

「きたねえ言葉遣いの女だなまずはてめえだな」

背後に不良の仲間が立つ。

「つっ・・・」

「お前ら、そいつを痛めつけろ」

千夏ちゃんを抑えている男が言った瞬間、俺の頬に衝撃が走る。

「ぐっ・・・」

頬を抑えた瞬間、男が蹴りを放つ。

おせえよ！

「よけるなよ？」

後ろから聞こえた声に俺の動きが止まる。

腹にもろに不良の蹴りが決まる。

「ごほ・・・」

劇痛に腹を抑えながら膝を地面に付ける。

ちくしょう・・・

「さっきまでの勢いはどうしたんだ？」

モヒカンの男が蹴り始めたのを始め周囲から殴打の嵐が俺に吹き荒れる。

俺にできるのは痛みに耐えることだけだ。

「ハハハ、どうしたんだ？　Ａランク武偵ってのはその程度なのかよ？」

こ、こいつら・・・知ってやがる俺達が護衛についてることを・・・打開策をさぐるがちょっと、力を込めるだけで殺せる位置にいる男を無力化させることなどそれこそ紫電の雷神とか言われるぐらいの技量がなければ不可能だ。

キンジもまた、機会を伺っているようだが、俺が気絶したら今度はキンジ、そして、マリだろう。

「おら！」

「ぐっ！」

胸に蹴りを受けて俺は顔をしかめる。

「も、もうやめて！」

千夏ちゃんが泣きそうな声で言う。

「ああん？」

「ね、狙いは。　わ、私達じゃないの？　し、椎名さんたちは・・・」

震える千夏ちゃんに男は興奮するのかにやにやしながらその光景を楽しんでいる。

「おい、お前らもういい。　殺せ」

殴打の嵐が止まるが俺の目に飛び込んできたのはくろぼしを俺の頭に向ける男。
終わるのか・・・
こんなクズのような奴らに殺されて・・・
俺はまだ、仇を討ててないのに・・・
ちくしょう・・・
男の引き金に力がこもる。

「優先輩！」

「変態！」

マリと奏ちゃんの悲鳴をあげた瞬間

ガアアン

クロボシが男の手から吹っ飛ぶ。
狙撃？
レキなのか？
断続的に銃撃が続き、俺の周りの男たちが悲鳴をあげて倒れていく。

「ぎゃあああああ！」

声のした方を見ると千夏ちゃんを抑えていた男の両腕から金属の刃

が突き出ていた。
男の両手が千夏ちゃんから離れる。
素早くキンジがそれを保護した瞬間、串刺しにされた男は後ろに倒れる。
あれは痛いぞ。
両腕を串刺しにされてるんだから痛みで傷口を抑えることすらできないんだからな。

「串刺しのその格好犯罪者にはお似合いですよ」

そう言いながら奴は姿を表した。
兵庫武偵高校の制服に身を包み、糸のような細めを男に向けると剣を腕から引き抜いた。

「ぎっ！」

劇痛に男が悲鳴を上げるが兵庫武偵高の男はゴミを見るような目で血を払ってから腕の中に剣を戻した。
折りたたみ式の刀身を腕の中でワイヤーと直結させてやがる。

「春蘭？　ミンそっちはどうです？」

インカム越しに誰かと話しているようだった。

「問題ないシン。　もう、近くまで来ている」

「周りの連中はのうたうち回ってるわキャハ」

すっと、墓の影からポニーテールの小柄と髪を赤く染めた少女が現れる。

ポニーテールが肩に背負っているのは狙撃銃だな。Ｍ７００か・・・
赤い髪のミンは大きな槍を持っている。
相変わらずだなこいつら
シンと呼ばれた俺と同年齢ぐらいのやつが俺と視線を合わせる。
糸目だが、その目からは軽蔑が見て取れた。

「護衛対象をこんな襲撃しやすそうな場所にまで連れてきた挙句、人質を取られ、各個撃破されてしまう状況。　東京の武偵というのは素人集団の集まりみたいですね」

「ぐっ・・・」

言い返す言葉がない。
シンが言うことは正しい。
これは、俺なら大丈夫という過信から来た明らかな失敗だ。
どうしても、くるのならアリアたちと合流してからにするべきだった。

「あ、あの・・・」

奏ちゃんが泣きついている千夏ちゃんを撫でながらシンを見る。
シンは口元に笑を浮かべ

「ご心配には及びません藤宮さん。　今から僕らがあなたの護衛に付きますから」

「・・・」

春蘭と呼ばれたポニーテールの少女が頭を軽く下げる。

「え？」

「無能な東京武偵じゃなくあたしらがあんた達の護衛してあげるって言ってんの」

髪の赤いミンが言う。

戸惑ったように奏ちゃんが俺を見てくる。

「久しぶりだなシン、ミン、春蘭」

「？」

春蘭が軽く首をかしげる。

「どこかでお会いしましたかね？」

シンも聞いてくる。

ああ、あまり言いたくはないがお前らが俺の前に出てくるなら話は別だ。

「このままじゃわからねえか？」

俺はかつらを右手で掴むと一気に外す。

「！？」

3人の目が大きく見開かれた。

「優希君ですか？」

「ああ、卒業式以来だなシン」

シンの言葉に俺は怒りを込めて返答してやった。

第６３弾　暴かれし過去の一部

「椎名？　椎名　優希？　キャハハ、なにその格好？」

赤毛のミンがバカにしたように俺を見て言った。

「優希君。　お久しぶりです。　元気そうでなによりですよ」

「よく言うなシン、俺が兵庫にいられなくしたのはお前らだろ？」

「なんのことです？」

ふん、とぼけるか？

「優？　こいつらは？」

キンジがベレッタをしまいまがら聞いてくる。

ちっ、こいつらの説明なんてしたくないんだが・・・

「僕たちは兵庫武偵校のものです。　クエストを受けて藤宮の方々を護衛しにきました」

先にシンが口を開いてきた。

「僕はシンといいます。　兵庫武偵校ではアサルト２年、ランクはＳです」

「あたしは、ミン。　兵庫武偵校アサルト２年、ランクはＡよ。よろしくね」

赤毛のミンが好戦的な瞳を向けていう。

「春蘭です・・・兵庫武偵校スナイプ2年、ランクはAです」

アサルトのランクSは特殊部隊1個中隊と同程度の戦力とされているつまり、戦力はそれ以上

「俺は遠山　キンジ。　東京武偵校所属、インケスタ2年。　ランクはEだ」

名乗られたら名乗り返すと思ったのだろうキンジが名乗り返す。

「私は紅　真理奈です。　東京武偵校所属、ダギュラ1年。　ランクはSです」

「俺は名乗らなくてもいいよな？」

俺が言うとシンが頷いた。

「もちろんです。　友達の情報は分かっていますから」

「友達なんていうんじゃねえ」

怒気を込めて俺は3人を睨む。

「ゆ、優先輩？」

マリが聞いてくるが俺はそれを無視する。

「友達だと？　本気で言ってるなら今、解消しろ。　俺はお前らがしたことを忘れたわけじゃねえぞ」

すでに、怒りで戦闘狂モードが発動している。
それほどまでに、この3人がおれは好きではない。

「何か誤解があるようですね。　わかりました。　ですが、護衛はさせていただきますよ。クエストは受けているのですから」

「誰が護衛を依頼したんだ？」

俺が聞くとシンはにこりとして

「クライアントの情報は明かせませんが兵庫武偵校の許可はありますよ。　確認していただいて結構です」

こいつがそういうんだ・・・兵庫武偵校に連絡しても正式な命令があるだけだろう。

「必要ねえよ」

「ご理解いただいて幸いです」

シンが言った。
舌打ちして奏ちゃんの手をつかむ

「え？　いた、ちょっと変態・・・」

「キンジ、マリ千夏ちゃんを連れてきてくれ。　家に帰る」

そう言った俺達の前に2人が立ちふさがる

「どけよシン」

「いえ、どけません。　2人の護衛は僕らに任せていただきます」

「ああ？　これは俺たちが先に受けたクエストだ。　後から割り込んでくるんじゃねえよ」

「僕らは正式にクエスト受けました。　邪魔をするのであれば実力で排除します」

「おもしれえな・・・」

言ってから俺は気づいた。
春蘭のライフルが俺にむいている。
シンとミンも戦闘体制だ。
Sランク1人、Aランク2対Sランク1人、E2人。　スナイパーがいる時点で勝ち目はない
せめて、キンジがヒステリアモードなら・・・

「ちょっと！　待ってください！　なんで護衛同士が争うんですか！」

一瞬即発の空気の中に入ってきたのは奏ちゃんだ。
真っ向から、シンの目を睨みつける。

「それは、優希君が護衛にふさわしくないからです」

「だから、なんでそんなことを・・・」

「簡単です。　犯罪者に護衛なんて務まらない」

言いやがったか・・・

「え？」

信じられないというように奏ちゃんが俺を見る。

マリや、キンジ達も同様だ。

「・・・」

言えることなどない。

「椎名　優希、裁かれるべき重犯罪者ですよ彼は」

一つ・・・幸運なことがある・・・アリアがいなくてよかったな・・・

それだけが救いだった。

第６４弾　風は言っています

「一体どういうことなのよこれは！」

怒りで顔を真っ赤にしているアリアを筆頭に理子、キンジ、マリに囲まれ俺は壁に背を付けて座っていた。
藤宮家のリビングにはレキ、ミン、シン、春蘭が付いている。
戦力としては過剰すぎるほどの戦力だが俺は問い詰められていた。
当然のことながらいきなり、護衛に割り込んできた３人ことだ。

「あいつらは・・・中学時代の知り合いだ」

友達ではないというように知り合いだと強調しておく。

「あいつらはみんな中国からの留学生だ。　常に３人で行動してるが戦闘能力は高い。特にあのシンには俺でも正直勝てるかわからん。
ミンはアリアやキンジとほぼ同等の実力者だ。　春蘭もＡランクを名乗っているがレキと撃ちあえるかもしれん」

「優、あいつらが言ってたあんたが犯罪者ってこと話しなさい」

まっすぐに俺の目を見てアリアは言ってきた。

「おい、アリア」

キンジが静止しようとするが

「いや、いいよキンジ。　少しだけ話してやるよ」

諦めたように俺は話し始める。

「俺の家はアリアやキンジみたいに歴史の表に出てくる家系じゃないんだ。　いわば、裏の家系だな。　もう、１０年近く前になるのかな・・・そこで、俺は犯罪を犯した。　まだ、武偵じゃなかったが武偵法に照らし合わせると死刑になるような犯罪だ」

「・・・」

アリアたちは黙ってそれを聞いてくれている。

「理由はあった。　でも、それを俺は正当化する気はない。　裁かれるべき犯罪者の俺は実家の・・・椎名の家の力で何もなかったことにされたんだ」

「司法取引したの？」

アリアの問いに俺は首を横に降る。

「違う。　何かは今は言えないけどな。　ただ、ローズマリーはこの件に関わっている。　あいつだけは俺がこ・・・逮捕する」

「それで、あのシンって奴はなんでそれを知ってるの？」

これまでの会話からシンが俺の過去を知り、その情報を元に俺を追い出したと推測したのだろう。

「わからん・・・情報は秘匿されてたはずだが物事に完璧はないからな」

「そう・・・」

アリアはカメリアの目を1度とじると

「理子、キンジ、マリ、レキには後で話すけどこの件はこれ以上探るは禁止よ。　探ったら風穴」

「・・・アリア」

ばれるかと思った。
兵庫武偵高の生徒を調べれば俺の噂にたどり着く可能性が高い。
俺の罪の内容に・・・
でも、この子は人の本当に嫌がることはしないんだ。
ありがとう・・・アリア

なんでこんなことになったんだろう・・・
私はリビングに流れる重い空気を感じながら思った。

「？　どうかしましたか奏さん」

にこりと微笑みながら糸目の青年、シンさんが千夏が入れてくれた紅茶を左手に掲げる。

「なんでもありません」

テレビはバラエティー番組をやっていたが全然耳に入らない。
千夏は私の肩に寄りかかり寝息を立てているが部屋に戻る前に変態たちにあって置きたかった。
ちらりと、横を見ればレキさんがドラグノフ狙撃銃を持ってソファーに座っている。
その先には銃剣が付けられている。
聞けば、レキさんが接近戦をすると気に使用するという。

「てかさあ、あんたレキっていったっけ？　何、殺気出しながらうちらみてるわけ？」

くるくると名前は知らないが軍用ナイフを回しているミンさん。
槍は組立式らしくリビングの壁に立てかけられている。

「風が言っています。　あなたたちを警戒しろと」

「風ですか？」

シンが困ったように首をかしげる。

「スナイプとしての隠語か何かですか春蘭」

「ううん、知らない」

こちらもＭ９００狙撃銃をレキ同様肩にかけているポニーテールの少女、レキさんとほぼ、同じくらいの背丈のこの子の名前は春蘭という。

「そうですか」

それ以上、深く聞かずシンが言うがミンは好戦的にレキを睨みつける。

「うちらと殺りあうなら相手になるよ」

ミンが槍を手にした瞬間、レキが動いた。
瞬間、何が起こったかわからなかった。
風が吹くその一瞬で2人の武器はその顔の直前で止まっていた。
レキさんの銃剣、ミンさんの槍。
神速とはこういうことを言うんだろう。

「へー、やるじゃない狙撃手」

「・・・」

レキは何も言わない。
だが、動けない。
このまま、動けばよくて相打ち、悪ければ死だ。
それに接近戦ならレキは部が悪い。
彼女は狙撃手であり、接近戦は本来、専門外なのである。

「ミンやめなさい」

シンの声が静かに部屋に響きわたる。

「ふん」

ミンはしらけたように槍を下げた。
同時にレキもドラグノフを下ろした。

「信用してくれとは言えません。　優希君以外の東京武偵高の護衛の方々は僕は信頼してますよ」

まただと私は思った。
この人の言う変態の過去・・・
犯罪
それも、死刑になるほどの重犯罪をあの変態は起こしたという。
殺人かもしれない。
父が死んだのも犯罪者のせいだ・・・
中国の犯罪者がお父さんを・・・
あの変態はその同類なのかもしれない・・・
お父さんを・・・

「・・・私は優さんを信用しています」

はっとしてレキさんを見ると顔は無表情なのだがどこか、怒気を含んでいるような気がするその言葉はまっすぐな言葉だった。

「・・・ほう」

シンが面白そうにレキさんを見た。

「彼の過去を知らずに死刑になるような犯罪を犯したと聞いてもあなたは優希君を信用すると」

「・・・はい、風は言っている。　信用できないのはあなた達だと」

シンの目が一瞬、開いた。
背筋が凍りついたようにひんやりとした。
それはレキに向けられたものだろうか？

だが、それは一瞬だった。

「やめましょう。　護衛同士がいがみ合っていても仕方ない。　僕らが怪しい動きを見せたらそのドラグノフで僕らを撃ち抜けばいい」

「・・・」

レキは何も言わない。

「できるならねぇ」

ミンはアドレナリンに酔ったような表情でレキに言う。
戦闘狂という言葉が頭に思いつく。
怖いと私は思った。
千夏をぎゅっと抱きしめる。
隣にはレキさんがいる。
でも、３人が敵なら私は一瞬で殺されるだろう。
怖い・・・

「悪い遅くなったなレキ」

そんな時、声が聞こえた。

「・・・大丈夫です」

レキさんが言った先にいたのは変態だった。
続いて、アリアさん、キンジさんと東京武偵高のメンバーが入ってくる。

変態とシンの目がぶつかり合う。

「まだ、いたのかシン？　さっさと帰れよ」

「それはできませんよ優希君。　僕らはクエストを受けてきたんですから」

ちっ・・・

「ふーん」

舌打ちしながら俺は別室で調べた情報を思い出す。

「ああ、確かに護衛のクエストはでとるな。　でも、すぐにシン達が受け取る。　めっちゃ高額なクエストやしアリアさんとかぶるんやったら俺が受けたかったわ！」

「それで、虎児？　少し調べてもらいたいというかお前経由で頼み事がある」

電話の相手は虎児だ。

「なんや？　俺もメンバーに加われって言うんやったらくわ・・・」

「千鶴に兵庫県で起きてる事件と中国人の後ろにいる連中の調査を依頼したい」

「千鶴か・・・直接頼めばええやん？」

「いや、千鶴俺の携帯着信拒否にしてるんだよ・・・」

「ああ・・・千鶴お前が東京行くって決まってからめちゃくちゃ怒っとったからなぁ・・・」

「学校の関係者には言うなよ？　あくまで、お前と千鶴だけでこの件を処理して欲しい。報酬は出すよ」

「それは賛成やな。　この事件兵庫武偵高の内部に敵がおる可能性もあるからな・・・信頼してくれて嬉しいで優」

ま、兵庫武偵高で俺が心から信頼できるのは虎児と千鶴ぐらいなものだからな・・・

「ま、友達だしな」

中学時代のことを思い出しながら俺は微笑んだ。
あいつらは、孤立する俺と最後まで友達でいてくれたんだ。
千鶴は怒らせちまったけどな・・・

「ところで優！」

「ん？」

「ちょ、ちょっとでええからアリアさんとでんわか・・・」

ぶつん

電源をおして携帯をポケットにしまう。

「ゆーう」

ん？

アニメ声に振り返るとなぜか、ご立腹のアリアさんがいた。

え？　何？

「今の電話女の子でしょ？」

「え！　違う違う！　プリンだよ！　お前も三宮であっただろ？」

「嘘！　千鶴って聞こえたわよ！　護衛の最中にか、彼女に電話なんていい身分ね」

どんな地獄耳だよお前は！

つうか断片的に間違ってるし

「ちょっと、兵庫武偵高の昔の知り合いに調査を依頼しただけだ！　やましいことは何もない！」

「じゃあ、携帯貸しなさいよ」

「あ、ああ」

俺がアリアに携帯を渡すと少し操作してからどこかに電話をかける。

「もしもし？」

「あ、アリアさん！」

げっ！　電話の向こうから聞こえんのは虎児だ！　発信履歴の１番上にあったのに電話したみたいだぞ！

そんなに奴隷がほかの女の子と話すのが嫌か！

アリアは１言２言話してから納得したように頷いて

「そう、ありがとうねプリン」

「え？　いややなぁアリアさん俺の名前はつき・・・」

ぷつん電話が切れた。

ひでえ・・・

そういや、俺虎児のことプリンで登録してたな・・・

「優」

「はい！」

カメリア色の目が俺を見てくるので背筋をぴんとして言うと

「疑いは晴れたわ。　風穴デストロイは勘弁してあげるから」

風穴デストロイってなんですか？

そんな疑問が浮かんだがろくなことにならないのでスルーしておく。

「そろそろ、理子達に声をかけてリビングに戻りましょ。　３人をレキだけに任せるのは危険だわ」

そう言って歩き出すアリア
いつもと変わらないアリアの態度に俺は・・・安堵感を覚えるよ。
アリア

第６５弾　遊園地に行こう

護衛５日目の朝、不機嫌目にリビングでシンたちを含めた全員で朝食をとっているところだった。
今日の料理担当は俺なので無難にトーストを焼いてトーストの上に目玉焼きを載せてある。
シン達の分は作りたくなかったがな・・・

「え？　でかけたい？」

コーヒーを飲みながら眠気を消す努力をしていると奏ちゃんがいきなり口を開いたのだ。
今日は土曜日、学校は休みの日だ。
護衛の観点で言うなら要塞化しているこの家で過ごすのが１番安全なのだが・・・

「うん、動物園に・・・ダメかな？」

おそるおそる言う奏ちゃん。

「護衛の観点からいえば賛成できませんね」

「・・・」

おずおずといった感じだが、俺たちの方を見てくる奏ちゃん
賛成に回ってほしいんだな

「無茶苦茶なことを言ってるのはわかってるの。　でも、今日は前

からお父さんと行く約束してた日だから千夏のためにも言ってあげたいなって・・・」

「ちーも無理してるからね」

理子がまだ、寝ている千夏ちゃんがいる2階を見上げる。
護衛にはレキが付いているはずだ。

「学校ではどうなんだアリア？」

キンジが食パンを手に取りながら言う。

「孤立してる」

アリアが口を開より先に言ったのはポニーテールの狙撃手春蘭だ。
3人の中で主に千夏ちゃんの護衛を担当している。
とはいえ、千夏ちゃんの小学校を狙い打つのに最適な場所で監視ているだけだが・・・
まあ、春蘭の腕は確かだ。絶対半径（キリングレンジ）は非公開だが２０００以上確実である。
つまり、レキと同等の実力者ということになる。
レキが狙撃戦で負けるところは想像できんがレキ以上の狙撃手がいることに不思議はない。
世界には化け物のような連中なんざ、ざらにいるからな

「正確には、千夏のお父様が亡くなってからね。　家では明るくしてるけど学校では半分いじめられてるみたい」

アリアが補足を入れる。

聞くにそのいじめをアリアが撃退しているためにアリアもまた、孤立しているんだそうだ。
そりゃ辛いだろうな・・・家族を失ったんだから・・・

「だから、気分転換も兼ねて連れて行ってあげたいの。　お願いします」

頭をさげる奏ちゃん。

「いいわ」

「本当ですか！」

アリアの言葉に奏ちゃんがぱっと顔を輝かせる。

「待ってください」

そこに口を挟んできたのはシンだ。

「失礼ですが先日の優希君達の失態をお忘れですか？　彼女たちは狙われている。　幸い我々には要塞かしたこの家がある。　防御に徹するのが得策でしょう」

「それは・・・」

正論にキンジが唸る。

「大丈夫よ。　優だけじゃなくてあたし達も行くんだから」

まあ、入れたくないが俺たちを倒そうとするならシン達を入れれば

選りすぐりの精鋭を何個中隊も投入しなければならない。
そんな、大戦力を動物園で投入することは難しいだろう。

「仕方ありませんね」

シンは諦めたように言った。

「かっわいいい！　ほら！　優、キンジ！千夏！見てみて！うさぎうさぎよ！」

「おい、アリア！　あんまりうさぎを抱きしめるな潰れるだろ」

「もふもふです」

千夏ちゃんも嬉しそうだ。
すっかり体験コーナーでうさぎにでれでれのアリアを見ながら俺は柵の中で苦笑していた。

「よし、俺も」

手を伸ばすが黒のうさぎは逃げていってしまった。
なぜなんだ・・・

「ほらレキ！　お前もだっこしろよ」

こんな場所に来てまでもドラグノフを背負っているレキは首を少し下げてうさぎの大群を見ていたが興味は薄いらしく再び視線を虚空に戻してしまう。

「ん？」

見ると理子がそーとアリアの後ろに歩み寄ったかと思うと耳に・・・
うさぎ耳をつけた。
しかし、うさぎに夢中のアリアは気づかないらしく耳をぴこぴこ揺らしながらうさぎをもふっている。
だ、駄目だ。
なんていうか可愛すぎるだろその格好。
猫耳が強力なアイテムだと理子に前に力説されたがうさぎ耳でもそれは同じらしい。
加えてアリアは小柄で可愛いので余計に破壊力を増加させるのだろう。

「いけないうさぎちゃんだ」

横を見るとキンジがヒスっていた。
おいキンジヒスするなこんな時に・・・
まあ、止めるのが俺の役目だろ？
と、キンジに声をかけようとした時だった。

「ありがとう」

横を見ると奏ちゃんだった。
清楚なワンピースに白いポシェット
何か香水でも付けているのか獣臭いこの場所でほんのりいい香りがした。

「何がありがとうなんだ？」

「反対しなかったじゃない。　東京武偵高の人達。　あなたがリーダーだからあなたにお礼を言おうと思って・・・」

ああ、そのことか・・・
俺は柵に背をあずけながら
「なんていうかさ・・・千夏ちゃんも心配だったけど。　奏ちゃんも無理してただろ？」

「私も？」

「肉親を失って悲しくない奴なんていないからな・・・」

「変態に家族はいるの？」

「ま、俺の家族はいろいろと複雑だし俺は嫌われてるからな」

嫌われて当然んことをしたんだ俺は・・・
恨まれてない訳がない。

「変態？」

はっとすると奏ちゃんが心配そうに俺の顔をのぞき込んでいた。

いけないいけない。

「ど、どうしたんだよ奏ちゃん」

「なんか変態元気がないから私悪いこと言ったのかなって・・・」

「違う違う。　そんなことより、うさぎだ！　よし！　こいこいうさぎ！」

奏ちゃんは何か考えるように俺を見ていたが

「行こ変態」

突然俺の右手を掴むと歩きだした。

「へ？」

「千夏はアリアさん達に任せてちょっと私の気分転換に付き合ってよ」

え？え？どういうことなの？

レキと目があったがその表情は無表情。

どういうことなのレキさん教えてください！

心の中で悲鳴をあげるがレキはただ、静かに俺たちを見送るのだった。

そう、これって奏ちゃんとデートなの？

第６６弾　追跡者

この王子動物園は動物園の他に隣接している遊園地がある。
つまり、チケットはいるが動物園と遊園地両方が遊べる子供にとっては最高の場所なのだ。

「見てみて変態！　私あれ乗りたい！」

どうでもいいが変態はやめてくれ！　大声で言われると警備員さんがこっち見てくるから！

奏ちゃんが指してきたのは空中をくるくる回る椅子だ。
前にテレビで韓国の遊園地であれの天井が潰れるの見たことあるから怖いんだが・・・

「い、いや俺は・・・」

ワイヤーで飛び回っていてなんだがああいう固定されるもんは嫌いだ。
いざというとき何もできなくなるからな。

「なによ変態って高所恐怖症なの？　いいからいこうよ」

な、なんて強引なんだ。
無理やり乗せられ奏ちゃんはきゃーきゃー言っていたが俺は椅子を固定している鎖がちぎれるんじゃないかと気が気でなかったぞ。
降りてから携帯を開くとアリアからメールが来ていた。
内容は死んでも奏は守りなさいと理不尽なものだった。
まあ、守るけどな。

周囲の警戒はしていたが敵が出てくる気配はない。
まあ、人でもあるから襲いかかるのは難しいんだろ。

「ねえ変態次あれ乗ろ」

「はいよ」

あ、なんか懐かしいなこの感覚。

「兄様！」

「兄さん！」

二人の妹と弟の記憶
あの事件前はこんな感じで遊んでたっけな・・・

「よし！　遊ぶか！」

ああ、分かった奏ちゃんは妹に少し似てるんだ。

「な、なによ。　急に素直ね変態」

「変態じゃねえ椎名　優希だ！」

回り出したコーヒーカップを中央の皿をつかんで思いっきり回す

「うりゃあああ！」

「きゃあああ！」

悲鳴をあげつつも笑っている奏ちゃん。
ここにきたのは千夏ちゃんのためだがあちらは恋のマスターヒステリアモードのキンジがいるから大丈夫だろう。
レキや理子もマリもいるからまあ、大丈夫だろう。
全員がキンジにメロメロになっていたらと思うと面白くないんだが・・・
ま、時間制限もあるしな
マリは考えなくてもなんとなくだがキンジにはなびかない気がする。

５つほどのアトラクションを周り時刻は１４時を指していた。

「ああ、楽しかった。　ねえ変態そろそろご飯食べない？」

「そうだな・・・」

遊園地のジュースとかご飯ってなんでこんなに高いんだよ。　理不尽だろ
売店で売っていたサンドイッチセットとジュースを片手にテーブルに戻る途中、俺は顔を曇らせた。

「やあ、優希君」

シンが俺を糸目の笑顔で見て嫌がった。
奏ちゃんの横に座っている。

「あ・・・」

奏ちゃんは困ったように俺を見ているぞ。
まあ、同じ施設内だ。
バレてもしょうがいないんだが・・・

「よく見つけられたなシン。　千夏ちゃんはいいのかよ？」

「問題ありませんよ優希君。　彼女には春蘭とミンが付いています」

ばちばちと火花が散るような感覚。
俺はシンが大嫌いだ。
公安０の沖田とは違う嫌悪する嫌いだ。

「これから、僕もこちらの護衛に付きます。　問題ありませんよね」

にこりと護衛の役目を追っているシンは微笑むのだった」

第６７弾　奏の迷い

それからのデート?は　散々たるものだったよ。
何せ、ことあるごとにシンは俺に突っかかってくる。
中学時代はことあるごとにこいつらとは対立していたがこいつは周りと同調するのが凄まじくうまい。
理子とは別の意味で周囲の心を惹きつけるのだ。
その結果、俺は本当に信頼してくれる友以外は友人を失った。
まあ、中学時代は俺の態度にも多少問題があったんだが・・・

「どうかしましたか優希君?」

観覧車を待ちながらシンが聞いてくる。
時刻は午後４時４０分。
アリア達とは合流は５時と約束しているのでこれが実質最後の乗り物になる。

「なんでもねえよ」

多少なりとも憎悪を向けながらも俺は奏ちゃんににやりと笑い

「じゃあ、最後の乗り物だな」

男２人、女一人で乗る観覧車って結構、厳しいものがある。
信用してくれたのかどうだか奏ちゃんは俺の隣の座り、シンが俺の正面という構図で観覧車は回っていく。

時間にして１５分ぐらいか・・・

「こうしてみる景色もいいものですね」
観覧車から見える光景を見ながらシンは言った。

「ええ・・・」

奏ちゃんが言った。
夕日と光景というのは結構マッチするものだからな・

「・・・」

俺は無言で外の光景を見ていた。
人ごみの中にはアリア達もいるのかもしれんがここからじゃわからんな
俺がそんなことを思っていたとき

「所で、奏さん」

「え？」

「藤宮の財産ですが本当にあなたは受け取る気はないんですか？
受け取れば莫大な資産を得てこの後の人生を苦労せず済みますよ」

「・・・」

2日後の迫った財産相続の期日。
奏ちゃんは迷っているようだった。
妹に苦労させないかもしれない財産の相続。
依頼を受けた頃はうけないと言っていたが千夏ちゃんのいじめの現状から見て心象が変化しているのかもしれない。

「・・・」

奏ちゃんが俺を見てくる。
人生は自分で決めるもんだぜ
無言で俺は伝える。
俺が武偵を目指すのは自分で決めたからだ。

「私は・・・」

戸惑いつつも奏ちゃんは言う。

「正直迷っています。　千夏の幸せのためにはお金がいるかもしれないから・・・」

本当に迷っているような言葉。
シンは一瞬、細目を動かしたが俺はそれに大した意味を見いだせなかった。
ただ、一言

「そうですか・・・」

その言葉の意味に気づけなかった俺は後日、後悔することになるがそれをこの時点で気づくことはできなかったんだ・・・

余談だがキンジ達の方は春蘭やミンといった面々もいたせいかキンジも思うように成果を挙げられなかったそうだ・・・
まあ、よかったと言えばよかったのだが・・・
そして、合流した時のアリアの言葉は

「勝手に別れたりして風穴ぉ！」

「ぎゃあああああ！」

とまあ、いつものやりとりだったが奏ちゃん達が笑いながら見ていたのはまあ、よかったのかな・・・
痛いけど

第６８弾　ももまん戦争

さて、日にちは変わって日曜だ。
明日には遺産相続の会議があるからそれに向けての準備に追われている。
襲撃があるとすれば今日か明日だが・・・
あの墓場での襲撃以来襲撃らしい襲撃はない。
リビングに置いてある監視カメラの映像を見ながらももまんを食べながら動物奇想天外の再放送を見ているアリア。
同じくテレビを見ているマリ。
ちくちくと何やら服を編んでいる理子。
ソファーでドラグノフを肩にかけながらぼーとしているレキ。
なんとなく、アリアと一緒に動物奇想天外を見ているキンジ。
シンはコーヒーを片手にスマートフォンをいじってるな。
春蘭はＰＳＰをしてるしミンはつまらさそうに動物奇想天外を見ている。
まあ、こいつはダイハードとか爆発したりする派手な奴の方が好きなんだよな。
血が降り注げばもっといいらしいが・・・

千夏ちゃんは宿題をしてるし、奏ちゃんは・・・

「ねえ、変態銃の撃ち方教えてくれない？」

となぜか、俺の銃の講座を聞いている。
奏ちゃんのお父さんが使っていた銃はグロッグ１８だ。
見た目は悪くなるが最大装填３３発という結構えげつない銃でもある。
おい、マリヤンデレ目はやめろ！俺が何をした。

「その銃でしたら優希君より、僕の方が詳しいですよ」
と言ってシンが出してきた銃は同じグロッグ１８
「あ、本当ですね」
「よければ、コツとかお教えしますよ。　優希君の銃は大口径ですから同じ銃の僕の方が効率がいいでしょう」
ちっなんだよ。　シンのやつ俺の役目取りやがって・・・
「あ、でも・・・」
困ったように奏ちゃんが俺を見てくる。
「別にいいじゃねえか。　シンは銃の腕だけは悪くないからな」
「褒めていただいて恐縮ですよ優希君。　では簡単なところから行ってみましょうか」
「・・・よろしくお願いします」
「ん？」
腕を引っ張られるような感触を感じて振り向くと理子がちっちっちと右手の人差し指を振りながら
「わかってないなぁユーユー。　かなでんはユーユーに教えて貰いたかったんだよ」

「へ？　なんで？」

小声で理子が言うので俺も小声で返す。

「くふっ、キー君といい乙女心に鈍感だなユーユーは」

「？？」

わからん理子は何が言いたいんだ？

「あああああ！」

そんな時、リビングにアリアの悲鳴が響きわたる。

な、なんだ？

「あんたそれあたしの！」

「１つぐらいいいじゃん」

ももまんを口にいれながらミンがバカにしたように言った。

げっ！ミンのやつなんて事するんだ！

「そ、そのももまんは大きかったから最後までとっておいたのに！」

じたばたとじたんだと踏むアリア。

ぺろりと指についたあんを舐めるとミンは好戦的に

「１度言おうと思ってたんだけどさあ。　あんた、高２ぃ？　胸もぺたんこだし背も小さいし、小学生なんじゃないのぉきゃはははは

！」

「こ、この・・・風穴あけてやる！」

禁句を言われたアリアがガバメントを抜くと同時にミンも足に固定していた連結槍を一瞬で組み立てるとアリアと対峙する。

ドドド

ガバメントが3点バーストで発射される。
止める間もなかった。

「ふん」

ミンは槍をぶんと振り回すと銃弾がはじき返される。
壁と天井に穴が空いた。

「きゃあああ！」

千夏ちゃんが悲鳴をあげてアリアがはっとして動きを止めた瞬間、ミンが目を大きく見開いてにたあと口元を歪めた。
ぶんと横を見たアリアの首めがけてミンの連結槍が降り下ろされる。

「ちっ！」

なりふり構わず俺はアリアの前に飛び出すと両手をクロスさせて槍を受け止めた
ガアアアン
鉄と鉄が激突する音。
ワイヤーの発射機構に命中した槍がはじかれる。

アリアがハッとした瞬間、ミンは両手から右手に槍を持ち帰ると再び槍を横殴りに振るう。
狙いはアリアだ。
俺は足でヤリの中間部分を蹴り上げると槍の機動をそらした。
さらに、ミンは攻撃を仕掛けようとしたが

「ミン」

その場が凍りつくような声にミンの手が止まる。
シンが細い目をわずかに開けてミンを睨んでいる。

「やめなさい」

ミンは一瞬、アリアを睨んでから舌打ちして槍を収めた。
レキ、理子も武器を手にして立ち上がりかけていたがそれをやめる。
今、ミンはアリアを殺すつもりだったのは間違いない。
変わってねえなこいつら・・・
表向きはともかくこいつらは9条　武偵は決して人を殺害してはならないという分を破っているという噂がある。
あくまで、噂だが今の行動を見ていれば・・・
中国では殺害がありなのかもしれんが日本では違うんだぞ。

「すみません。　アリアさん。　ミンには後でよく言って聞かせますので。　ももまんを弁償しますよ」

「わ、分かってくれればいいのよ」

怒るタイミングを逃してしまったのかアリアもそれ以上ミンに攻撃をかけようとはしなかった。
ただ、目が合うとアリアとミンは威圧し合うのでこの2人は後2日、

近づけないようにしないとな。

その日の夜。
夜空を見上げながら俺は藤宮の家を出て近くの公園に来ていた。
この時間になると誰もいないないな。
携帯電話を取り出すと1つの番号にかける。

3コール

「もしもし・・・」

どこかうっとおしそうな声が聞こえてくる。

「千鶴か?」

「そうよ」

「久しぶりって1年ぶりか?」

「無駄話する気はない。　虎児から依頼と聞いたから拒否を解除しただけだから」

「まだ、怒ってるのかよ。　勝手に東京に進路決めたこと」

「・・・」

くそぅ、本当に余計なことはしゃべらないつもりらしいぞ。
千鶴は俺の兵庫時代の友達だ。
親友と思ってたんだが現在はほぼ、断絶状態。
ランクSのインフォルマの学生だ。
法外な料金をふっかけるがやろうとも思えば軍関連の機密にまで侵入できるらしい。
本人曰く割合わないからやる気はないそうだが・・・

「それで依頼の件なんだが・・・」

「まず、はじめの事件は2か月前から始まる。　盗難車を改造した無人の車が姫路駅前で発砲。　幸い死者はでなかったけど重傷者1名、継承40名の大事から始まった」

確か、新聞で読んだな・・・
使われたのは全てゴム弾で殺害目的ではないと・・・
重傷者もただ、転んで地面に頭打ちつけたということらしいし・・・

「2つめの事件はその2日後、尼崎にある兵庫県警の警察学校に3台の盗難車が侵入し、グランドを訓練中だった学生に無差別発砲。
　でも、これも同じくゴム弾で、居合わせた警察官が制圧しているけど犯人の手掛かりはなし」

「それから1週間に2回、3回と続いている。丹波　龍野　西脇　福知山、場所も高速道路、山中、海岸と共通点がない」

そう、最初の頃はマスコミも報道していたんだがゴム弾で死者もですとなってくると兵庫県警の無能。　兵庫武偵高、兵庫武偵局の無能と叩きまくるという無能ぶりを晒している。

おそらく、警察も武偵もやっきになって犯人を探しているのだろうがてかがりはないらしい」

「他に情報はあるか？」

「関連はわからないけど第1の事件が起こる2日前に武偵局が不法入国しようとした中国人達と小競り合いが起こっている。　その際、武偵が1人殉職している。　名前は　藤宮　誠二」

「！？」

奏ちゃんたちの父さんじゃないか・・・
その頃から、すでに無関係じゃないんだな・・・

「大きく動き出したのは三宮、ばらまかれはしなかったけどあの車には実弾が装備されていた」

三宮と言えば俺たちが倒したあのプリウスか！

「それ以降は、今のところ出現していない。　何かを待っているのかもしれないか打ち止めかは調査中だけど」

なるほどね。

「サンキュー千鶴。　できたら後、3日ぐらいは着信拒否にしないで欲しいな」

「分かった」

ツーツーと接続が切れた音。

千鶴さん
あんた怒りすぎだよ。
にしても、無人車による無差別攻撃ね・・・
武偵殺し、つまり理子も同じような技術を使っていたがこれは理子じゃない。
陽動か・・・となると・・・
俺はもう一つの電話をかけるため携帯をいじる。
切り札を用意しておくか・・・
保険はかけとくべきだからな

第６９弾　向けられる牙

そして、護衛最終日がやってきた。
月曜のため、奏ちゃん達は学校にいったのである。
２３時５９分までに指定された会議の場所まで行き、遺産相続の意思を確認する。
学校が終わってから行けば間に合うだろう。

「えー、短い間でしたけどこのクラスで楽しかったです」

俺とキンジの自己紹介が終わる。
そう、名目上今日で再び転校することになっていたのだ。
なるべく、人を避けていたため、残念だとか元気でねとか形式的な言葉をかけてくるクラスメイトと話しながら５時間目後の休み時間が始まる。

「これで、終わりか。　どうだよキンジ？　普通の学校ってやつは？」

「アサルトの連中がいないだけで静かでいいな」

「ふーん」

この先どうするかはわからないがキンジは一般校に転校を望んでいる。
いわば、これは予行演習みたいなもんだな。
個人的にはずっと武偵高でチーム組んで欲しいだけどな・・・

ガタ

「ん？」

横を見ると奏ちゃんが携帯を手に立ち上がっていた。

「どうしたんだ？」

「あ、変態・・・」

一瞬、目が合うが奏ちゃんはにこりと笑い

「ちょっとお手洗いにいってくるね」

「あ、じゃあ私が一緒に・・・」

教室に来ていたマリが言った。

「う、うんお願い・・・」

「俺も行こうか？」

「デリカシーないですね優先輩」

別にいいだろとは言わない。

いくら女装でも俺は男だしな。

２人が出ていったのでなんとなく携帯を開く。

「そういえば、優？」

「んん？」

「マリに優先輩いって呼ばれてるけどいつ許可したんだ？」

ぴたりと携帯の操作を止め・・・
そういえばいつ、変わったんだ？
まあ、いいか
深く考えずに携帯に目を戻す

着信　理子

「え？　理子？」

通話ボタンを押すと理子の男言葉が飛び出した。

「優！　キンジ！　千夏の小学校で爆発があった！　そっちも、奏を・・・」

「キンジ！」

立ち上がると走り出す。場所は女子トイレだ。
ドアを蹴破るようにしてあけるとそこにマリが倒れていた。

「マリ！　おい！」

ぱんぱんと頬を叩くが気絶しているようだった。

「優！」

キンジが走り込んでくる。

窓の枠に手をかけ外を見るが何もない。

「くそ！」

やられた。
敵はマリを気絶させ奏ちゃんを拉致したのだ。

「奏！」

念のため叫ぶが返事はない。
そういえば、シン達の姿がない。
電話をかける。

「レキ！　そこからシン達の姿は見えるか？」

「春蘭さんのいた、場所には誰もいません。　優さんの学校から黒い車が出ます」

ドン

電話の向こうからドラグノフの狙撃音が聞こえてくる。
やったのか？

「どうなったレキ！」

電話に向けて怒鳴る。

「妨害されました。　春蘭です。　車内に奏さんとシン達の姿も見えます」

アホか俺は！
壁を殴りながら自分のうかつさに怒りを覚える。
シンは信用ならないやつだと分かっていた。
だが、拉致など武偵法にてらしあわせれば死刑に近い罪になる。
そんなリスクを払ってまでこんなことするわけないと心の中で思っていたのかもしれない。
俺の責任だ。

「レキ！　シンの車の番号わかるか？」

「ね　３１―〇〇です」

よし、さすがＳランク
レキの電話を切ってもう一人にかける。

「はい？」

「千鶴！　今から言う番号の車の追ってくれ。　大至急だ！」

「分かった」

緊急ということを理解してくれたのか千鶴は追跡に入ってくれたようだった。

「おい、優。　俺たちも追わないと」

キンジの頭に浮かんでいるのは護衛に使っていた防弾車だろう。
だが、それじゃおそらく追いつけない。

「マリを頼むキンジ！」

マリをあずけて後ろからキンジの声を聞きながら学校を飛び出す。
そして、空き地の草むらからそれを取り出した。
スズキ・ＧＳＸ１３００Ｒハヤブサ。
ノーマル改造で３３３キロ出る米国のＹ２Ｋに抜かれるまでは世界最速のバイクと言われ今なおその圧倒的な性能からアルティメットスポーツと言われる化け物オートバイ。

「久しぶりだな・・・相棒」

インカムで携帯を操作できるようにしてからヘルメットをかぶりオートバイにまたがる。
アリアや理子達は千夏ちゃんの護衛で動けない。
となると、動けるのは俺だけか・・・
追いついても3対1・・・きついな。
でも、やるしかないよな。
ドン
ん？
後ろに感触があったので振り返る。

「レキ」

なんとレキがハヤブサの後ろのシートに座っていた。

「あなたでは春蘭に勝てない」

「助かるぜレキ」

狙撃対拳銃に持ち込まれれば勝ち目は薄いからな。

「アリア、理子みんな聞こえてるな？」

「優？　あんたどこにいるのよ」

「アリアか？　俺とレキは情報が入り次第奏を追う。　お前たちは千夏ちゃんを頼む」

「レキュもそこにいるの？」

「はい」

リコの言葉にレキが言う。

「優、聞きなさい。　あたしたちも千夏の安全を確保したらすぐに援軍に行くから回線は開いと来なさい」

「了解、っと」

「優希聞こえる？」

「千鶴か！」

「該当の番号の車の所在がわかった。　そこから高速に入って時速１３０キロで大阪方面に向かってる」

１３０キロか、なら追いつけるな。

「行くぞ、レキしっかりつかまってろ」

「はい」

腕が俺の腰に回されぴったりと付いてしまう。
お、おおなんか柔らかいものが背中に・・・ってそれどこじゃないよな。
爆音を響かせハヤブサが住宅街を走る。
待ってろよ奏ちゃんすぐに追いついて助けてやるからな。
高速道路の入口が見えてくる。
あ、やば金教室に忘れてきた・・・
みるみる入口が迫ってくる。ごめんなさい
俺はＥＴＣのバーを激突して破壊すると一気に加速した。
免停じゃすまないだろうな・・・これ

第７０弾　助けて

ずきずきする頭を押えながら目を開けるとそこは車の中だった。

「う・・・」

「ここは・・・」

「目が覚めましたか？」

シンさん？

助手席からこちらを振り返っているのは私の護衛を担当していたシンさんだ。

「シンさんここは・・・」

「申し訳ありませんがあなたには中国にきてもらいますよ」

「え？」

あまりに唐突すぎるシンの言うことが理解できなかった。

一体何を・・・

「まだ、わかんないのあんた？」

運転しながらミンはにたりと笑う。

「あんたはこれから中国に拉致されてランパンで奴隷になるか北朝

鮮あたりに売られるかもねぇ。　キャハハ、ご愁傷さま」

現実味のない言葉だが私はぞっとした。
北朝鮮、中国・・・どちらの国も私から見たらろくな印象がない。

「そんな、嫌です！　家に返して！」

「遺産相続の意思がないなら放置の予定だったんですけどね」

糸目で微笑みながらシンが振り返る。

「奏さんは遺産相続を迷っているといいましたよね。　あれが拉致の決定打です」

「そんな、あれは・・・」

「僕たちのクライアントはあなたが邪魔なんです。　殺されないだけありがたく思ってくださいね」

「嫌！」

逃げようとするが手錠で固定されている。
逃げられない。

「ああ、逃げようとしないでくださいね。　逃げるなら殺していいと依頼主には言われてますから」

ずっとする言葉。
シンは本気だ。
ああ、なんで変態と一緒にトイレにいかなかったんだ・・・

護衛期間中くらいはそれぐらい許容すべきだった。

「言っておきますが救援は期待しないほうがいい。　イ・ウーの事件では警察はうかつに手を出せませんからね」

「？」

その組織名らしい言葉の意味はわからない。

だけど、私が期待したいのは・・・

「ああ、優希君達の助けを求めるのは無駄ですよ。　あの防弾車は１２０キロしか出ない。　僕らの車は１３０キロ今、出しています。　つまり・・・」

変態たちは追いつけない。

「最も、どのルートを通っているかなどの割り出しには数時間かかるはずです。　大人しくしてるなら諸葛に口添えをしてあげてもいいですよ」

次々絶望的なことを言い。

希望を奪っていく。

私はもう、妹に二度と会えずに異国の地で死んでいくのか・・・

ぽろぽと大粒の涙が溢れてくる。

「・・・て・・・い」

「ん？」

「助けて・・・優・・・」

「・・・」

「どうかしましたか春蘭」

シンの言葉を無視して春蘭はＭ７００狙撃銃を手に車の天窓を開ける。

「追っ手がきた」

「公安０が動くのは早すぎますね」

「違う。椎名優希とウルスの姫」

シンの目が見開かれる。

「オートバイ、ハヤブサ。　改造なしで３３３キロでる化け物・・・追いつけれるこのままでは」

ライフルを構えながら春蘭が言う。

「ミン、最高速度をお願いします。　日本の警察は気にしないでいいですよ」

「了解！　カーレースって久しぶりだわ」

日本の大衆車のプリウスに偽装してあるがこの車は５００キロまで出せる。

そして、春蘭はそれを維持できる実力者だった。

「春蘭、万が一の時は頼みますよ」

「ん」

まだ、互いのキリングレンジに入っていない目標を見ながら春蘭が言葉を返す。

変態が来てくれた・・・

「希望を持つのは早いですよ。　奏さん」

「え？」

「合流地点まで付ければ僕らの勝ちです。　それに、対峙するようなことがあっても優希君は僕より弱い。　つまり、殺してしまえばいいだけですよ」

「ウルスの姫は私が仕留める。　諸葛も喜んで報酬も出るかな？」

「油断はしないように」

「キャハハ、私の相手がいないじゃん。　ねえ、椎名の後継の殺害私に譲りなさいよ」

「できませんよ」

ゾクリとするような殺気を放ちながらシンは目を開け、戦闘狂のような笑を浮かべて言った。

「優希を殺すのは僕ですから・・・」

第７１弾　追撃戦

気を抜けばぶっ飛びそうなほどの爆風を感じながら俺の駆るハヤブサは３００キロの速度で高速道路を疾走する。
もちろん、速度違反なのは疑いようがない。
捕まれば後ろのレキ共々交通刑務所かな・・・

「優、対象は速度をあげた。　１５０・・・１６０・・・プリウスの限界を超えてるから多分改造車」

耳のインカムから兵庫武偵高のインフォルマＳランク武偵の千鶴が的確に支持してくれる。

「了解」

前方を走る車をよけながら高速道路を走る。
聞けば千鶴は存在さえしないはずのスパイ衛星を乗っ取ってシンたちの車を追っている。
後は各所の警察の情報等をハッキングしている。
違法と言えば違法なのだがバレなきゃ罪にならないらしく千鶴はバレたことは１度もない。
何度かあいつの部屋に入ったことあるがマジでキーを叩く手が見えないから驚きだ。
直線距離にして５キロ先ハヤブサなら追いつける。

「・・・」

俺はぎょっとしたさ
レキがいきなり後ろで立ち上がるとドラグノフを俺の肩に乗せるよ

うに構えたのだ。

「危なねえレキ！　座れ！」

立っているだけで恐ろしいバランス感覚だ。
ゴーグルに頭を覆うだけのヘルメットを付けたレキは髪をばたばたと揺らしながら
インカム越しに

「敵は狙撃銃でこちらを狙っています。　キリングレンジに入り次第攻撃を仕掛けてくるつもりです」

「何？」

「その子のいうことは本当よ優。　衛星からでも天窓から身を乗り出してる人影が確認できた」

なぜか、不機嫌な声で千鶴が言ってくる。
春蘭か・・・
前を見るが俺には見えない。
レキや春蘭には5キロ先の互いの敵が見えているというのか・・・

「レキ、せめてワイヤーだけでも巻いとけ。　落ちたら死ぬぞ」

「はい」

レキは言うとおりに俺の背中のワイヤーで自分の体を巻いた。

「奏ちゃんは見えるか？」

「後部座席中央にいます。　拘束されているようです」

絶対に許さねえ。　拉致なんてきたねえことしやがって
はやぶさをさらに加速させる。

「優、シンの車の速度が３４０キロに達した」

それはつまり、ハヤブサの最高速度を超えたことを意味する。

「了解だ！」

俺はハンドルの横についている青いボタンを押した。
ドンと一瞬、衝撃が走りスピードメーターが振り切れる。

「・・・」

何したのと聞いて欲しかったがレキは無言でスコープを見ているので
説明すると今のはリミッター解除だ。
燃費は悪くなるが限界速度を超えられる。
昔、ロジの生徒に金を積んで改造してもらったんだが今になって役
に立つとな・・・

「優さん」

そんな時、レキが声をかけてくる。

「どうしたレキ？」

「今から私は敵と撃ち合います。　私のいう方向に回避行動をお願
いできますか？」

「別にいいがそれだど狙いにくいんじゃないのか？」

「車を避ける以外はまっすぐに走ってください。　私の銃弾は確実に相手の動きを射抜く」

言うまでもないか・・・

狙撃に関してはこの子に俺は絶大な信頼を置いている。

レキがそういうならそうするのがベスト

第１の関門は狙撃手だしな。

「分かった」

まもなく、速度は４００キロを超えようとしている。

一歩制御を間違えば俺もレキも地面に叩きつけられて死ぬだろう。

「振り切れませんか・・・」

「うん、あのハヤブサ改造車」

春蘭の言葉にシンはにこりと微笑んだ。

「キリングレンジに入り次第殺りなさい春蘭」

「了解。　シン」

「や、やめ」

春蘭の下半身に体当たり仕様としたが頬に強い衝撃を感じて私は吹き飛んだ。

「あ・・・」

「大人しくしてなさい劣等民族の日本人」

舌に鉄の味がしたので舐めてみると血の味がした。
シンは私をゴミを見るような目で睨んでから糸目に戻ると座席に座る。

「ああ、こわいこわい」

運転しながらミンが言う。

「シンの日本鬼子嫌いは変わらずね」

「馬鹿な民族ですよ日本民族というのは自分たちを侮蔑する日本鬼子という言葉すらくだらだないイラストにして喜んでいるんですからね」

「シン、キリングレンジに入る」

春蘭の言葉にはっとした瞬間、ドンと発砲音が聞こえてくる。

狙いは変態達だ。

「死なないで・・・お願い・・・・」

願わずにはいられなかった

第７２弾　レキＶＳ春蘭

「右です」

レキの言うとおり右にハンドルを切る。
ヒュンと風を切る音がしたのでおそらく、春蘭の狙撃銃だ。
発砲から着弾まで２秒半の間にレキは回避行動を支持したのだ
だが、それは２キロ距離が離れているからで近づけば回避指示は間
に合わない。
かといって春蘭、相手に突っ込むのは危険すぎた。

「どうするんだレキ！　距離を詰めるか？」

言いたくないがリミッター解除した状態だと燃費が凄まじく悪くな
る。
先に燃料が尽きるのはこちらだろう。
ハヤブサが動かなくなればもはや、打つ手はない。

「まっすぐに進んでください」

「それでいいんだな？」

「はい」

このやりとりは信頼関係がないと成り立たない。
敵の銃弾は自分がなんとかするとレキは言っているのだ。

「私は一発の銃弾・・・銃弾は人の心をもたないただ、目的に向かっ
て飛ぶだけ」

いつもの暗示のようなレキの言葉

ドン

ドラグフの狙撃音。
同時に速度を俺は上げた。
敵からの銃撃はない・・・

「すごい・・・」

「どうかしましたか春蘭？」

シンの言葉の春蘭が答える。

「ウルスの姫、狙撃の弾をビリヤード撃ちで落とした」

「ほう」

シンもまた、驚いているようだった。
狙撃の銃弾を狙撃銃で叩き落とす、あるいはそらすなんて芸当はランパンでもそうはいないだろう。

ドンドン

続けて春蘭が銃撃を開始する。

閃光と同時にレキは敵の狙撃銃の弾を狙撃で叩きおとしているようだった。
神業とかいうレベルじゃねえぞ。
距離は徐々につまりつつある。
それと同時に周りの車の姿もほとんどなかった。
平日の夕方としては異例の時代だが理由もあった。
自衛隊が道路の封鎖を行なっているのである。
それも、神戸から大阪以後に至るまで広範囲に至ってだ。
ハイジャックの時に続いて、また、実家の力を借りてしまった。
本当に俺は人に頼ってばかりだな。
イ・ウーが関わる事件のため、警察や自衛隊で直接シンたちを抑えることはできないが間接的になら支援してもらえる。

ドン

再びレキの銃弾が春蘭の銃弾をたたき落とす。
すでに、戦場は神戸の中央部に入り、左に鏡のようなビル、クリスタルビルが見えてくる。
燃料を見ると後１０分しか走れない。

「レキ！」

そろそろ決めないまずいぞという意味で言うとレキは

「優さん、周辺の避難は終わっていますか？」

「あ、ああ自衛隊がやってくれてるとは思うが・・・」

「では武偵弾を使います」

「え？」

止めるまもなくレキは

「私は一発の銃弾」

ドン

武偵弾を放った。

「っ！」

前方で起こった爆発に春蘭は慌てて急ブレーキを踏んだ。

同時に前方で爆発が立て続けに起こる。

「きゃああ！」

私は悲鳴を上げながらシートベルトが体に食い込むのを感じながら目をぎゅっと閉じた。
一瞬、気絶してたのかもしれない。
目を開けると

「やってくれますね。　ウルスの姫」

顔を上げると道路はなくなっていた。いや、正確には２０メートルほど道路に間が出来ている。
破壊された後と共に

「どうすんのよシン」

「こうなっては仕方ありませんね。　迎えが来るまでここで優希とウルスの姫を殺害します」

「キャハ、ウルスの姫は私に譲りなさいよ。　あの女むかついてるのよ私」

「いいでしょう」

春蘭は爆風と急ブレーキの影響で気絶しているようだった。
実質２対２だが春蘭とレキでは接近戦の優越は明らかだ。
それに、シン自身、優希に負けるつもりなどない。
今度こそ殺してやる椎名　優希
お前が守ろうとしたこの女の前で絶望を見せながら首をはねて見せしめにしてやる。

バイクが止まる音と共にシンは奏の髪を掴んで車から引き出した。

「痛！」

悲鳴をあげる劣等民族を見ながらシンは外に出る。

激怒の表情を浮かべる少年を目にシンはにこりと微笑んだ。

「やあ、優希君」

強くあれただしその前に正しくあれ

はやぶさを降りて俺がはじめに見たのは奏ちゃんの髪をつかんで薄く笑っているシンの姿だった。

「変態・・・」

泣きそうな顔でこちらを見ている少女の右頬は赤くなっていた。
くそったれが！

「その手を放せ！　クズ野郎！」

激怒の感情は戦闘狂モードを引き起こす。
ガバメントをシンに向ける。
奏ちゃんと目が合う。
怯えているその目に必ず助けるとアイコンタクトを送った。

「構いませんよ。　この状況で離しても結果は変わりませんから」

「レキ！　奏ちゃんを頼む！」

シンの手が奏ちゃんの髪から離れた瞬間、俺はフルオートで2丁拳銃でガバメントを発砲する。
シンはグロッグを抜くと同じくフルオート射撃で応戦する。
空中で火花が散り、４５ＡＣＰ弾が全てたたき落とされる。
ビリヤード撃ちだ。
パワーはこちらが勝るが装弾数ではデザートイーグルを入れてもシンの方が上だ。
ガバメントが弾切れになると同時に防音用の壁に左腰のワイヤーを

打ち込むと空中に飛びあがる。
シンがグロッグを向けてくる。
デザートイーグルで迎撃しつつ、右と左のワイヤーを発射した。
右は短刀、左も短刀だ。
今日ノワイヤーはステルス戦を想定していない装備である。

「ワイヤー使いは君だけじゃありませんよ」

そう言うとシンもまた、手を振りかぶると先に折りたたみ式の剣がついたワイヤーを発射した。
空中で激突する４本ワイヤー群。
右足のワイヤーを地面に発射し巻き戻して地面に着地し、残りのデザートイーグルの残弾をシンに叩き込むがそれもシンは予想していたらしくビリヤード撃ちで迎撃する。
これで、残弾０
シンの残弾はまだ、１０発以上ある。
再び防音用の壁にワイヤーを叩きこんで、空中に退避しつつ、シンの弾丸を交わしながらマガジンを入れ替える。
左のガバメントを３点バーストで放ちつつ、右手のワイヤーをハヤブサの方に向けて放つ。

「気でも違いましたか？」

シンもマガジンを入れ替えながら言った。

「はっ！」

ワイヤーははやぶさにくくられていた木筒に突き刺さると巻戻り、木筒が俺の手の中に来る。
素早く、木筒から日本刀を取り出す。

防弾壁を両足で蹴ると一気にシンとの距離を詰める。
狙うは居合、左腰に鞘をあてて柄を右手でつかむ。

「飛龍１式、風凪」

一気に抜き放つ、ガアアンと金属音が響き、シンの折りたたみ式の剣と日本刀が激突する。
シンの口元が笑む。
どうだか受け止めてやったぞと
だが、残念
「ぐっ！」

防弾制服の肩にあったであろう衝撃にシンは１歩引くと後ろに交代する。

「今のは？」

剣は確実に受けたはず、理解できないだろう。
音速の斬撃、これが生み出す衝撃破は１？に続けて２の攻撃につなげることができる。
我ながら人間技ではないと思うが椎名の家では筋肉がこれに適するとように徹底的に
鍛えられる。
１０年近く剣から離れていたが体は覚えている。
風を薙ぎ払う剣、風凪。
居合の境地だ。

「もう一回いくぜ」

剣を鞘にしまうと低く構える。

剣を抜き放つ

「なるほど、ソニックブームですか」

「!?」

剣は止められない。

シンは突っ込んでくると両手の剣で日本刀と激突した。

こ、こいつ

「それなら、音速に至るまでに剣を止めてしまえばいい。　それだけです」

さすがSランク武偵、一撃で技の特性を読みやがった。

まだ、あの赤い光景は見えない。

鞘に収めてベルトに鞘を付けて柄をしまいガバメントを抜く。

「椎名の後継、知っていましたよ。あなたが剣を使うことは」

「それは今はいい。　なんで、奏ちゃんをさらった？　武偵法は知ってるだろ？」

「フっ、あんな劣等民族が決めたものなど僕らランパンには関係ありません」

ランパン・・・中国の組織だが、多くが謎に包まれてる組織だ。

「いつからだ？　いつから、犯罪組織に手を貸してやがった？」

「最初からですよ。　優希、僕ら3人は日本に潜入し、機会を待っ

ていたんですよ」

「機会だと？」

「そう、知っていますか？藤宮の財閥は日本のありとあらゆる事業に関わっているんです。　その、財閥を中国の企業が全て裏から接収する。　どうなるかわかりますよね？」

そうなれば、日本の企業は中国の好きなように裏から操られることになるだろう。

実質、日本の企業が死ぬようなもの。

無論、全企業を買収する訳ではないが・・・

だが、そんなことは関係ない。

「んなことはどうでもいい。　なんで奏ちゃん達を狙う！」

ふぅとシンは軽く息を吐いた。

「相変わらず君は馬鹿ですね。　優希、財閥の関係者はほぼ、ランパンが抑えていましたがそこに、２人の隠された後継者がいるなんてことになると困るんですよ。　心配することはありませんよ。彼女は中国か北朝鮮で可愛がってもらえるでしょう。　将軍様のお膝下なんてどうです？」

わかりやすい挑発だというのはわかる。

だが、怒らずにはいられねえ・・・

「ああ、そうそう」

レキに保護されている奏ちゃんを見るとシンは楽しそうに

「君の父親を殺したのは僕ですよ。　心臓を一つき、あっけないものです」

奏ちゃんの目が見開かれる。

「お・・・とうさん・・・を？」

シンは小馬鹿にしたように両手を左右に広げ

「所詮、劣等民族の武偵、僕の敵じゃありません。　ああ、弱い相手でした。　クズな相手ですね」

「っ！」

奏ちゃんが拳を握り締めてシンに走り出す。

シンが口元をにやりと歪める。

「奏さん」

レキがそれを止めようとするが突如、レキは銃剣を付けたドラグノフを横に振るった。

ガキイイン

と槍と激突し、レキが後退する。

「あんたの相手はわ・た・し」

ひゅんひゅんと槍をぶんまわしながらミンは言う。

あ、あの槍は・・・

槍の刃先は青龍刀のような形をし、青龍が彫られている。

青龍偃月刀、確か、三国時代最強クラスの武人関羽が使っていた槍と同じ種類のものだ。

「きゃは、連結槍よりやっぱりこれよね」

くそ、レキは動けない。

「やめろ奏ちゃん！」

「うあああああ！」

怒りで我を忘れているのだろう。
折りたたみ式の剣を構えるシン

「シン！」

ガバメントを向けようとして射線に奏ちゃんが入っていることに気づく。
横に飛びながら射線から離そうとするがまにわん！

シンが剣を奏ちゃんに振り下ろした瞬間、シンの剣ががんと弾かれた。
レキか！

ドラフノフのシンの剣を弾き飛ばしたらしい。
その隙にワイヤーを投げて奏ちゃんに巻きつけて引きながら左手のワイヤーで崩落した２０メートルの穴を飛び越え、崩れたガレキの影に奏ちゃんを隠す。

「離して変態！　あいつは！　お父さんの！　お父さんを殺した！」

怒りで言葉が少しおかしくなってるな。
無理ないか。

「いいから落ち着け！　シンはお前が勝てる相手じゃねえ！」

「わかってるそんなこと！」

ぼろぼろと涙を流しながら奏ちゃんは泣き崩れた。

「じゃあ、どうしたらいいの！　仇を前にして何もするなっていうの！　ねえ優希！」

「奏ちゃん・・・」

「私たちの生活をめちゃくちゃにしたあいつが許せない！　お父さんを奪ったあいつが許せない！　殺したい！　あいつは許せない！」

「分かった」

「え？」

俺は立ち上がるとマガジンを全部入れ替えた。

「俺がかわりにシンをぶん殴る。　逮捕して罪を償わせるさ」

「殺してよあんな最低な奴！」

「武偵憲章第３条」

「え？」

「強くあれ、ただしその前に正しくあれ。　武偵は人を殺害しちゃいけない。殺人は犯罪だ。　それは相手が犯罪者でもな。　シンを殺して正しくない道へ行く道もある。　でも、俺は君に人を殺してほしくない。　あれは、耐え難い罪だから・・・」

「優希・・・」

奏ちゃんは黙って聞いてくれている。

「でも、それでもシンを殺したいというなら今度は俺は君を逮捕しないといけなくなる。　でも、俺はそんなことしたくない。　だから、あいつを許せとはいわない。　俺がぶん殴ってやる。　それじゃダメか？」

「・・・ずるい・・・そんな言い方されたら私あいつ殺せないじゃない・・・」

「・・・」

「優希、あいつを倒して！　私のかわりに！　お父さんの無念・・・私たちの無念を晴らして！」

俺はにっと笑うと

「了解！　分かってくれてありがとうな」

ぽんと奏ちゃんの頭を撫でて言った。

「・・・」

その顔が少し、赤みを帯びていたのに俺は気づくことはなかった。

さて、レキ1人じゃ危うい。

倒すぜシン、ミン。

てめえらは、俺達が処刑台に送ってやるぜ・

第７４弾　優希ＶＳシン　レキＶＳ春蘭

物陰から２０メートルの隙間を飛んだ時見た、光景は明らかにレキが劣勢に立たされていた。
レキは手首、首筋といった急所を攻撃しているがミンは巨大な青龍偃月刀を振り回し防御姿勢をとっている。
その顔には焦りはかけらもない。
レキも焦りのようなものは見えないが彼女は下から無表情だ。
その表情から焦りがあるのかを見いだせることはできない。
崩せるものなら崩してみろとレキの銃剣の攻撃をあざ笑うかのようにいなしている。
レキが弱いんじゃない。
狙撃ならレキの圧勝だろうが槍戦ではレキが勝てる見込みは少ないだろう。
アリアたちに連絡を取ろうとしたが妨害されているらしくつながらない。
なら、ミンが遊んでいるうちに2人を沈めればいいだけの話。

「シン！」

2人の戦いには目もくれず俺が着地するのをシンは見てくる。

「お別れはすみましたか？」

それを俺は戦闘狂の笑で返す。

「誰の別れだよ？　てめえこそ処刑台に送られる覚悟は出来たのかよチャンコロ」

「日本鬼子が・・・」

互いに侮蔑の言葉をはき合いながら地を蹴る。
シンの剣付きの右のワイヤーを交わしながら体を右にひねり日本刀を横殴りに切りつける。
シンはそれを左のワイヤーつきの剣で受け止めるとグロッグで俺に向けて3点バーストで発砲する。
俺はガバメントで同じく3点バーストビリヤード撃ちで迎撃し、空中に火花が散る。
銃技はほぼ五角。
剣、日本刀、銃の3つの組み合わせに加え格闘能力もこの戦いには重要だ。

「驚きましたよ優希。　剣を開放した君はランパンの1流の連中とでもやり会えるでしょうね」

「そりゃどうも！」

右足で回し蹴りを放った瞬間、足からワイヤーを発射するがシンはそれを読んでいたようで交わす。

「無傷で勝つのは難しそうだ」

その瞬間、シンは特攻をかけてきた。
防御を捨てた捨て身の刺突。
迷いはない。
俺は刀を左に一瞬で持ち帰るとそのがら空きの脇腹に渾身の一撃を叩き込んだ。

「ぐっ・・・」

「くっ・・」

互いの1歩2歩引きながら打撃された場所を抑える。
見ると少し右肩が出血している。
防刃制服の突き抜けやがったか・・・
だが、針で刺されたような血の後だ。
戦闘にはなんの問題もない。
それより、シンの方が重症だろう。
あばら、数本折ってやった手応えがあった。
防刃制服の上でも打撃は有効な攻撃になる。
右手で脇腹を抑えているシンだったがその細目を少し開けて微笑んだ。
なんだ?

「君の負けだ優希」

「何?　っ・・・」

ぐらりと、視界が揺らぐような感覚。
しまった毒か・・・

「てめ・・・」

立ってられない訳ではない。　だが、呼吸が荒くなってきている

「その毒は後から効いてくるものです」

シンは剣をぺろりと舐めながら微笑んでいる。
長期戦はまずいか

なら、一気に決めてやる。
マガジンを切り替えてからガバメントを3点バーストでシンに放つ。
シンはそれを再び、ビリヤード撃ちで迎撃したがその瞬間、俺とシンの間で大爆発が起きた。
武偵弾炸裂弾。
同時に俺は防音壁に向かいワイヤーを発射し空を飛ぶ。
狙いは空へ、爆発を盲ましにし爆風でさらに舞い上がる。
日本刀を両手に持ち替え、圧倒的な重力を得る。

「くっ・・・」

シンは一瞬だが、俺を見失い。気づいたときには全てが遅かった。

「飛龍1式！　雷落とし！」

雷が落ちたようなその重加速を得た剣は避けようとしたシンの右手に叩き込まれた。

「ぐあ！」

悲鳴をあげてのぞけるシン。
地面に着地してありえない方向に曲がっている右手を抑えているシン。
脇腹ががら空きだぜ。
止めをさそうとしたその時だった。
ドクン
心臓が高鳴り手が震え出す。
このタイミングで・・・
目の前に現れるのは赤いあの光景。
駄目だ、ここで決めなければ

降り抜け！

「うおおおお！」

居合の速度で振るうそれはまさに必殺の一撃。
シンの脇腹にそれが突き刺さる直前
ギイインと甲高い音がしたかと思うと剣が割り込んだ槍に阻まれる。

「何！」

それは、青龍偃月刀。
槍の底に付けられているらしいワイヤーでそれを手元に引き戻したミンは
にいいと笑うとごおおと爆風をおこしながら横殴りに切りつけてきた。
それを日本刀で受け止めるがたまらずにぶっ飛ばされる。
毒のせいで受身もとれずに背中を強打し高速道路を滑る。
くそ・・・
首を持ち上げてミンがさっきまでいた場所を見るとレキが倒れされていた。
ここからじゃ死んでるのかもわからない・・・
くそ、レキ・・・
シンの劣勢を見たからかどうかは知らないがまずいぞ。
体はまだ、動く。

「はぁ・・・はぁ・・・」

息を吐きながら日本刀を杖にようにして立つとがしゃんと肩に青龍偃月刀を置いたミンが歩いてくる。

「キャハ、シン油断しちゃった？　したわよねぇ。　情けない有様よね」

「黙れミン・・・僕はまだまけてない。　殺すぞ」

敬語で話すことも忘れているのか細目を開き激怒の表情を浮かべながらシンは右手を押えながらミンの横に立つ。

「椎名の後継は譲ってもらうわよ」

「ウルスの姫は殺したのか？」

「殺せたけどころしてないわぁ、せっかくだからランパンに連れていったら喜ばれるわよねぇキャハハ」

よかったレキはまだ、生きてるな。
体は毒が回りつつあり、状況は2対1。
1人は重傷だが、敵はほぼ無傷のSランク。
レキを助けて奏ちゃんを助けて俺も生き残る。
そんな都合がいい方法は援軍以外は1つだけ。
やるしかないのか・・・
ここで、殺され、レキ達を連れ去れれるぐらいなら・・・
ミンが青龍偃月刀を構える。

「はーい、終了の時刻よー椎名の後継きゃはははは！」

左手を前に出して日本刀を持つ手を右肩の上まで持っていく。
まだ、諦めねえ
武偵は諦めるな決して諦めるな！

「その構え・・・」

シンが口を出してくる。
覚えがあるらしいな・・・
でもまあ、取り越し苦労だったか・・・

ドルンと甲高いエンジン音

「!?」

シンとミンがその場を飛び去った時、４５ＡＣＰ弾が地面に穴を開ける。

「遅いぜ。　キンジ、アリア」

「悪い遅くなった」

「ここからはあたしたちに任せて寝てなさい優」

オートバイから降りた2人は言うのだった。

第75弾　アリア・優希VS春蘭・シン　決着

キンジとアリアが来てくれた。
これで、形勢は3対2だ。
だが・・・
キンジお前、ヒステリアモードじゃねえな・・・
だが、シンさえ抑えればアリアはミンに集中できる。
キンジは後方援護を担当すれば戦える。

「アリア、キンジ千夏ちゃんは？」

「理子とマリが見てるわ」

よし、後は・・・

「キンジ、レキを頼む。　死んではいないと思うが・・・」

「分かった」

俺の言葉にキンジがベレッタを手にレキの方に走っていく。

「はぁ・・・はぁ・・・くっ」

「優？どうしたのよ！　汗びっしょりじゃない」

俺の異常に気づいたのかアリアが駆け寄ってくる。

「大丈夫だアリア。　ちょっと疲れただけだ」

「嘘よ。　毒にやられたわね優！　動いたら毒の周りが早くなるわよ」

「なら、１０分以内に決めて病院行くかな」

日本刀を右手にアリアの横に立つ。

「分かったわ。　無理なようなら下がりなさい。　あたしとキンジであの２人は逮捕する」

ガバメント２丁をを取り出しながらミンをアリアは猫のように威嚇しながら睨みつける。

「あの女は風穴開けてやりたいと思ってたしね」

「アリア、気をつけろよ。　ミンの接近戦は間違いなく一流クラスだ。　接近戦は可能ならするな」

「お話はおわりましたか？」

糸目のまま、シンが微笑みながら聞いてくる。

時間が経てば経つほど、自分たちに有利だとシンは思っているのだろう。

現にその状況だ。

時間が経てば毒は回るし、敵の援軍の可能性あってある。

シンの言葉に耳を貸さずに俺とアリアは右と左にかけた。

それぞれ、１丁づつシンとミンに同時に４５ＡＣＰ弾を叩き込む。

別方向からの同時射撃。

ビリヤード撃ちでシンは迎撃しようとしたが何発かもらう。

ミンは青龍偃月刀を回転させ銃弾を全てたたき落とした。
うちあわせた訳ではない。
だが、アリアとはここしばらくチームを組んでいるのだ。
動きはわかる。

互いに疾風のように疾走するとクロスするようにして互いの正面の敵を入れ替える。
シンはアリア、ミンは俺

「アハ」

ミンは嬉しそうに青龍偃月刀を横殴りに振るった。
俺はそれを右手のワイヤー、腰のワイヤーを青龍偃月刀にぶち当てた。
同時に日本刀に激突するが威力は減退している。
ピシ

「!?」

嫌な音がし、日本刀にヒビが入る
威力はジャンヌ時に確認済みだ！　半分持って行け！

左手のデザートイーグル、左手のワイヤー、左腰のワイヤー、左足のワイヤー、右足のワイヤーが一気に飛び出してミンに迫る。
ジャンヌ戦の時に使ったフルバーストの本数少なめ版だ。

「がっ！」

ミンが悲鳴をあげて後退する。

「止めだ！」

さらに追撃をかけようとした瞬間、ミンがにたりと笑った。

「なんてね！」

ミンは青龍偃月刀で猛烈な突きを放ってきた。
1発2発・・・すさまじい刺突
リーチは日本刀よりもはるかに長い。
それを紙一重で避ける。

「っ！」

さすがSランク武偵、接近戦には自身があったが想像以上の実力者だ。
ステルスを除けばミンに勝てる奴はそうはいないだろう。
いや、ステルスでも勝てるかはわからない。
だが、俺には守るものがある！
負けられねえんだよ！

「優！」

アリアのアニメ声が響く。　同時に、俺たちは標的を入れ替えた。
アリアがミン、俺がシンだ。

「はっ！　小学生！　殺したげるわ」

「うるさい！　馬頭！」

それぞれが罵倒を浴びせながら切り結ぶ。

「優希ぃ！」

アリアにおられたのか右手の剣だけになったシンが俺に切り込んでくる。
ひびの入った日本刀でそれを受けながら戦闘狂の笑で返す。

「はっ！　どうしたシン！　動きが鈍いな！」

互いに満身創痍と言っていい状況だ。
シンは余裕を失いつつあり俺も余裕はもはやない。
アリアもまた、決着をつけられずにいるらしく互いに後退して相手を睨みつける。
くそ・・・左目がぼやけてきやがった・・・
次の一撃で全てが決まるという確信がある。
アリアの方はともかく、俺とシンは次で決まる。

「優希・・・お前にだけは負けるわけにはいかない・・・僕の顔に泥を塗ったお前には・・・」

鬼神のような表情を浮かべるシン。
泥か・・・
おそらくは、兵庫武偵中でのことを言ってるんだろう・・・
当時の俺は・・・自信にまみれたシンを完膚なきまでに叩き潰している。
シンの油断もあったがあの時の俺は絶対に負けたくないと思いがあったからな・・・
だからこそ、シンは恨んでいるんだろう。
それ以後は無敗で通してきた自分の戦績に泥を塗った男として俺を・

・・
浮かべるは1つの型、左手を前に、剣を持つ手を後ろに上段に構える。
これは公安0の沖田が得意とする型だ。
昔、公安0の人間に教えてもらったただひとつの必殺の剣
今、なら活用できるな。

「過去の因縁とかめんどくせえよ。　お前がランパンだろうがイ・ウーだろうが関係ねえ。　ここでお前は　負けて処刑台にいくんだ」

「ふん」

交差は一瞬、金属がぶつかり合う音と共に俺とシンの場所は入れ替わっていた。
俺の肩から血が溢れ出す。
シンはにやりと笑い地面に崩れ落ちた。

「シン！」

アリアと切り結んでいたミンが驚いたように言った。
アリアが小太刀で切り結ぶ。

「なめるな！　小学生！」

小太刀を迎撃しようとしたミンの青龍偃月刀が持ち上がる。
ギンと金属が激突する音、見ると意識を取り戻したらしいレキがキンジに支えられてミンの青龍偃月刀を撃ったらしい。
最高だレキ

「終わりよ！」

「っ！」

驚愕の表情を浮かべてミンは防御しようとしたがアリアの小太刀がミンの脇腹にめり込んだ。
ボキボキと骨が折れる音

「がっ！あああああ！」

悲鳴をあげてミンは崩れ落ちた。
よし！　一瞬だが油断した。
気づいた時にはシンが前に居なかった。

「っ！」

気づいたときには奏ちゃんのいる２０メートル先の道路にシンは着地した瞬間だった。
追おうとするが俺が向こうの道路に着地してホルスターのガバメントをつかむのとシンがグロッグ１８を奏ちゃんの頭に押し当てるのはほぼ同時だった。

「動くな優希　他の奴らもです」

泣きそうな顔で俺を見てくる奏ちゃん。
最後の１発、右のホルスターのガバメントを右手でつかみながらもホルスターから抜けないそんな格好。

「今回は僕らの負けです。　優希。ですが、この劣等民族は中国に連れていきます。　奴隷として一生を送るのでしょうねフフフ」

「シン！」

激怒が感情を支配するが何もできない。

「アハハハ、　悔しいですか優希君。　せいぜい後悔してくださいね」

ヘリの音が近づいていくる。

おそらくシン達の迎えだ・・・どうする・・・どうすればいい・・・

その状況で俺はキンジから聞いた1つの技を思い至る。

おうおい、できるのかこれ？

いや、できるよな・・・

ヘリが防音壁の向こうから現れた、シンが意識をこちらから離した一瞬、俺は居合の要領でガバメントを抜き、銃弾を放った。

振り抜く一撃でシンのグロッグが吹き飛ぶ。

驚愕に目を開く、シンに肉薄し、手をふりかぶる。

「シン！」

「！？」

俺はシンの顎に渾身の拳を叩き込んだ。

悲鳴をあげずにシンは宙をまい、地面に叩きつけられた。

「奏ちゃん！」

俺は奏ちゃんを抱きかかえた瞬間

「キヒ」

そんな声が聞こえたかと思うとヘリから狙撃銃を構える小柄な敵が見える。
ワイヤーで距離を取りながら岩陰に隠れる。
レキも銃弾を使い果たしたようで反撃はない。
ヘリから、ワイヤーのようなものを出してシン、ミン、春蘭を回収していく。

「ま、待て！」

攻撃しようとしたが狙撃銃がこちらをむいた瞬間慌てて、岩陰に戻る。
どのみち銃弾はもうない。

「シン、ミン、春蘭撤収ネ、三十六計逃げるが勝ち」

ドン
と発砲音が聞こえた瞬間、夕闇の阪神高速道路に莫大な光が生まれた。
閃光弾か！

「きゃっ！」

俺の腕の中で奏ちゃんが悲鳴をあげる。
襲撃に備えながら日本刀を手に備えていると

ドン
ギイイン
２つの音が聞こえてきた。

「あいやや！　しとめそこなったね」

狙撃手の声。
光の中

「優希はやらせませんの」

ローズマリーの声が聞こえた気がした。
ヘリの音が遠ざかっていく。
視力が戻り辺を見回すが敵の姿はない。
音のした方を見るがもはや、追いつけまい。

「あ、優」

奏ちゃんが心配そうに見上げてくる。
俺はぽんと頭を撫でながら左目を閉じた。

「ごめんな。　怖い目にあわせて。　敵もうってやれなかった」

俺と目があった奏ちゃんはぼんとアリアと同じように顔を赤くしてうつむいてしまった。
ハハハ、こんな反応の子多いな流行ってんのか・・・な

「!?　優!」

がくりと地面に崩れ落ちた俺を奏ちゃんが支える。
ああ、まずい・・・毒が・・・回ってきやがった。
地面に崩れ落ちる。
アリア達が声を上げながら駆け寄ってくるのがぼんやりした意識の中で分かった。
今回の気絶は起きれんのかな・・・まあ、無事を祈ろう俺のな

「優！　死なないで！　優！」

泣きながら奏ちゃんが俺を見てくる。

あれ？　泣いてんのか？

泣かないでくれよ・・・あの日の・・・泣いてた妹のこと思い出すんだよな・・・

そこで、俺の意識は完全にブラックアウトするのだった。

第７６弾　報い（前書き）

原作の１０巻参りました……まさか、ワイヤーが出てくるなんて……しかも、レキの新装備凶悪すぎます。
ヤンデレにヤンデレとか悪夢以外なにものでもないですよ。
１０巻を読んだらあのシーンをあなたは思い浮かべるでしょう。
かーなーしみの～

第７６弾　報い

「失敗しただと？」

その初老の男は呆然とした声で言った。
その場にいた十数人の男女も狼狽の声を上げる。

「どういうことだ。　藤宮の小娘が生きていれば我々の分の遺産はなくなるんだぞ！」

「聞いてないわよこんなこと！」

電話に出ていた男、藤宮　香西は悲鳴をあげるように電話に絡みつく。

「どうしてくれるんだ！　こんなこと警察にばれたら我々は・・・」

「そうですね。　さっさと国外逃亡をおすすめします。　何かの縁です。　中国の土地を用意しましょう」

静かな男の声が電話の向こうから聞こえてくる。

「ふざけるなミスターＣ！　お前が協力してくれるというからこの暗殺計画に加担したんだ！　それがなんだ！　藤宮の小娘の妹の方は爆死させることに失敗。　せめて、姉の法だけでもなんとかしていれば・・・」

「予想外の戦力がいたのですよ。　私は椎名の後継とウルスの姫、そして、その仲間達を過小評価しすぎていたようです。　こちらの

戦力も過大評価してしまいましたがね」

「くそ！　お前らは疫病神だ！　何がビジネスだ！　この劣等民族が！」

「物事には引き際が大事です。　あなたがたのビジネスはここで破綻といたしましょう。日本を手に入れられなくて残念です。　それでご武運を」

「まっ！」

電話が切れる。

「くそ！」

香西は携帯を床に叩きつけた。

「すぐに逃げましょう。　外国に知り合いがいるの」

でっぷりと太ったドレスの女が立ち上がった。

遺産にたかるハイエナどもめ・・・

それに呼応して次々とその場にいた人間が立ち上がっていく。

みんな、ミスターCに巨額を払うかわりに遺産相続の分配を確約された物たちだ。

とにかく、ここは逃げるんだ。

兵庫県で多発していた事件の資金援助をしていたなんてバレれば・・・

その瞬間、神戸市街から離れた場所にある屋敷は闇に包まれた。

「て、停電か！」

分かりきったことをそこにいた男が言う。

「ぎゃあああああ！」

「！？」

突然の悲鳴のその場にいた全員が扉を向く。
ボディーガードの男が銃を抜いて扉に向けて香西の前に立つ。

「な、何が・・・」

男の言葉に答えるようにぎいいいと木の扉が開いていく。
雲に隠れていた月明かりが部屋全体を照らす。
男が一人立っていた。
男は日本刀を手にバカにしたように微笑みながら

「君たちかな？　中国の連中に資金援助して日本を売り渡そうとしていたのは？」

「香西様下がって！」

ドンとボディガードが銃を撃った。
ギン
それを男は右手を一閃しただけで払った。
ボディガードは目を丸くしてさらに撃とうとするがそれは叶わなかった。
男が左手に持った大型拳銃がボディガードの肩、足、を撃ち抜いたからだ。

「ぎ！　ぐあ！」

悲鳴をあげて地面に倒れる。

「まったく、土方さんの命令だから来たけど雑魚しかいないんじゃ殺しがいもないよね」

「な、何ものだ！　警察か！」

にっと男は戦闘狂の笑を浮かべながら手帳を取り出して見せた。

「公安０課　沖田　刹那」

「こ、公安０！」

悲鳴をあげながらその場の人間は後ずさる。

当然だろう。

公安０は殺しを容認された戦闘集団。

国内最強と言われている化け物集団だ。

この男がここにいるだけでもすでに実力は明白だ。

この屋敷には１００人以上の警備員がいた。

それをこの男は無効かしてきたのだ。

「た、助けて・・・」

悲鳴をあげるようにデブの女性が沖田にすがった。

沖田はにこりとして

「ダメだよ。　君たちはやりすぎた」

ひゅんと風を切る音と共にデブの女性の首が舞った。

血が噴水のように床を濡らす。

「ひっ！」

その場にいた人々は逃げようとするが唯一の出口は沖田がふさいでいる。

「た、助けて！　なんでもする！　金ならいくらでも払う！　だから・・・」

ドオン

デザートイーグルが命乞いをした男の頭を貫いた。

みんなしりもちを付いている。

「ち、中国の情報はどうだ！　私は相手の電話番号を知ってるぞ！　私は役に立つ！」

メガネをかけた中年の男が言った。

沖田は日本刀を自分の肩に置きながら

「情報収集はもう、すんでるんだよ。　相手はランパン、諸葛静幻、イ・ウーも多少絡んでるけど今回はランパンが僕らに売った喧嘩だよ」

「ランパン？　イ・ウー？」

訳の分からないというように中年の男が首をかしげる。

ドオン

男が崩れ落ちる。

「こ、こんなことが許されるはずがない！　弁護士を呼べ！　私を誰だと思ってるんだ！」

「裁判にかかっても金の力でなんとかする気だよね？　政治家の祖父を持つ君ならなおさらだ」

「そ、そうだ私の祖父を誰だと思っているんだ！　みんし・・・」

「だからこその公安０なんだよ」

一閃。　誰かの名前を語ろうとした男の顔はまっぷたつに切り裂かれた。
その後、次々、命乞いをする男女を沖田は殺していく。
そして、血の海の中、香西は最後の一人となった。

「君で最後だね」

日本刀を額に突きつけられ香西は失禁した。

「た、助け・・・」

「駄目だよ」

香西の首が宙を飛んだ。
香西が見たのは血を剣を振るうことで払う美男子の姿であった。

ぱしゃりと、血の海を歩きながら沖田は携帯電話を取り出した。

「ああ、土方さん。　終わりましたよ？」

「そうか、ご苦労だった。　東京に戻ってくれ」

電話の向こうから男の声が聞こえてくる。

「藤宮の2人の娘は殺さなくていいんですか？　なんなら僕が殺してきますよ」

「疑いはあったがあの2人は完全に白だ。　余計なことすんじゃねえ」

「はいはい、じゃあもどりますよひじか・・・」

ぴりりりりり

「ん？」

沖田が見ると血の海の中でなる携帯電話があった。
位置的に香西のものだろう。

着信はミスターC

「もしもし」

「今回はおめでとうございますと言っておきますよ公安０」

諸葛静幻、おそらくは奴だ。

「相変わらず、臆病だね君。　僕ら公安０とやりあうのが怖いのかな？」

「挑発は無駄ですよ。　沖田さん。　私は臆病でしてねあなたがたと戦う気はないんです」

「刹那代われ」

「はいはい」

沖田は土方の携帯とつながっている自分の携帯を香西の携帯に押し当てる。

「お前らが何を企もうとしったことじゃねえ。　だが、これ以上日本で好き勝手するんなら容赦しねえぞ」

「では、中国まで我々を狩りくればいいではないですか。　元新撰組副長、土方歳三４世」

「ちっ」

それが出来ていればとっくにやっている。

いくら、公安０が最強の戦闘集団とはいえ、外国でドンパチするのはやはり、まずいのだ。

「今回は椎名の家のものに邪魔されましたが次はうまくいきたいも

のです。　ああ、ご心配なく公安0と本気でやりあう気は私にはありません。　イ・ウーの存在もありますしね」

電話が切れる。

「土方さん。　僕を中国に送り込んでもいいですよ？　皆殺しにしてきてあげますから」

「馬鹿いってんじゃねえ。　イ・ウーの存在がある以上、国内以外では俺たちは動けねえんだよ」

「つまらないなぁ……あなたはいつもそうやって僕を抑える」

「そうでもしなきゃ刹那。お前はRランクの連中にも喧嘩を売るだろうが」

RランクはSランクを更に超えた存在でその戦闘力は小国の軍隊を壊滅させる力を持っている真正の化物なのだ。

「どうです土方さん？アメリカが躍起になって説得を試みてるRランク僕が殺してきましょうか？」

「馬鹿いってんじゃねえよ。アメリカが躍起になって暗殺しようとしてことごとく失敗してる相手だぞ？」

沖田はすっと目を細めた。

「だからこそ楽しいんじゃないですか。戦う機会があったら戦わせてくださいね土方さん」

「その話は帰ってからだ。お前に用事を頼みたい」

「なんです？」

それを聞いてから沖田は携帯を切った。
ぱしゃりぱしゃりと血の海を歩きながら沖田は思った。
殺したりないと

「俺は！　俺は！てめえなんかに負けねえ！」

ふと、昔半殺しにした少年の姿が思い起こされる。

「あれぐらい歯向かってくれたら面白いよね」
ごろりと転がる首を蹴飛ばしてから沖田は部屋を後にした。
この事件が表に出ることはない。
公安０がすべての情報を消去し、無かったことになるからだ。
だが、この事件の唯一の生き残り、香西のボディガードは語る。
公安０の沖田は鬼神であると・・・
そして、この男も表の世界から姿を消すことになる。

第７６弾　報い（後書き）

作者の草薙です。
この度ブログを開設しましたので暇な人はのぞいてくれるとうれしいです。
主にアニメのことや執筆状況を書くだらだらしたブログになると思いますが……作品の要望とかあれば検討しますので書きこんでくれるとうれしいです。

ｈｔｔｐ：／／ｂｌｏｇｓ．ｍｏｂｉｌｅ．ｙａｈｏｏ．ｃｏ．ｊｐ／ｐ／ｂｌｏｇ／ｍｙｂｌｏｇ／ｍｙｔｏｐ?ｂｉｄ＝ｓｕｔｏｒａｉｋｕｂａｒｕｋｉｒｉ

第７７弾　司法取引

「やだよめんどくさいしさ」

大きな岩に座り空を見上げながらその少女は言った。
それでも、少年は少女にたのみこむ。
すると、少女は面白そうに笑い。

「じゃあさ・・・」

「起きなよ」

「なっ！　うわあああああ！」

がしゃあああああん
目が覚めた時目の前にあったのは壁だった。
顔に直に激突して顔を押えながら俺は立ち上がった。

「あたた・・・」

反射的に腰に手を当てるがそこには何もない。

「起きたね。優希君」

「沖田　刹那・・・なんでお前が・・・ここはどこなんだ？」

見渡すとそこは白い壁と小さな窓。　病院か・・・

「まったく、土方さんも人使い荒いなぁ」

そういう沖田は手に持っていた紙の束を床に投げ捨てる。

「これは？」

「司法取引の書類だよ。　書いたら郵送して返さないといけないよ。
仲間の分もあるから渡しとかないとだめだよ」

司法取引と聞いて、１枚紙を取り出してみた。
請求書と書かれた紙、
ちょっと上に上げてみると

阪神高速道路修繕費と書かれた欄があったのでそっと元に戻した。
あれ、やったのレキだからね！　俺じゃないよ！
まあ、武偵弾使ったから皆無というわけじゃないんだが・・・

「それじゃあ、僕は東京に帰るよ。　君に時間取られるのやだし」

「あ、待てよ！」

呼び止めると沖田はめんどくさそうに振り返った。

「何？くだらない用だったら殺すよ？」

「公安０のお前がここにいるってことは兵庫の事件絡みだろ！　シン達とも無関係じゃないんだろ？」

「ランパンの連中は取り逃がしたけど、兵庫の事件を裏で資金援助していた連中なら僕が皆殺しにしてあげたよ？　裁判になっても金で保釈されたり逃げられる連中がほとんどだったからね。　ちょうど、君達が遺産相続の会議といっていた場所でのできごとだから君の護衛対象の２人の親族ってことになるのかな？」

自業自得か・・・腐った金の亡者を一掃してくれた公安には感謝しなくてはならないのかもしれない
そういえば、奏ちゃん達は・・・

「じゃあね」

「まっ！」

沖田が出ていってしまったので部屋には誰もいなくなる。
開け放たれた窓から心地よい風が肌をなでる。
ベッドを元に戻してから眠気が襲ってきたので静かに目を閉じた。

武装検事の名乗る人に事情聴取を千夏やアリアさん達と受けてから私は変態が・・・ううん、優が入院している病院に１番乗りした。
病院の入口で日本刀を腰に指した人とすれ違いぎょっとしたがその

人は微笑して去っていった。
看護師に優が眠っている病室を聞いて中に入る。
眠っているらしく静かに寝息を立てている優がいた。
私は椅子に座る優の寝顔を見つめた。
シンは俺が必ずぶん殴ると言う言葉をこの人は守ってくれた。
私を守ってくれた・・・
ううん・・・
なんか、顔を見てると顔が熱くなってくる・・・
どうしたんだろ私？

「ううん」

「ひゃっ！」

優が寝返りを売ったので私はびくりと肩を震わせた。

「ううん・・・アリア・・・風穴だけはやめて・・・白雪さん・・・
剣を押し込まないで・・・」

よくわからないが優は悪夢を見ているようだ。
アリアの言葉が出てきたとき、なぜか、心が傷んだ。

「ねえ、優・・・」

私はそっと優の右手を布団の中で掴んだ。
優も悪夢を見ているからか握り返してくる。

「私感謝してるんだよ？　きっと、優が居なければ私たち死んでいた・・・」

武装検事から全て聞いた。
親族は全ての遺産相続を遺言で残された私たちを暗殺しようとしていたことを・・・
中国の組織と組んでいたことも・・・
これは、だから本心から言うね

「ありがとう優・・・私たちを守ってくれて・・・」

ぎゅっと握った手が握りかえてしてきた気がした。

「私ね。　武偵になる。　お父さんみたいな立派なね。　遺産は千夏に譲るつもり、だから・・・いつか優のチームメイトになれたらいいななんて・・・」

聞こえてないことをいいことに私は願望を口にする。

「あの・・・それでもし、できたら・・・いつかつ・・・」

「あああああああああああああああああああ！」

その時、病室に悲鳴が響きわたる。

「ま、マリさん！」

優のアミカのマリだった。
ふふふと、マリは肩を震わせながらＣＺ７８を取り出した。
丁度、そこへ

「優！　起きてるの！？」

アリアが現れ

「ユーユー！　お見舞いにきたよぉ！　っておお！」

理子

「・・・」

手に包帯を巻いているレキ

「優・・・」

哀れむようなキンジ

「お兄さん・・・」

千夏ちゃん

「ふえ？」

目を覚ました俺は寝ぼけながらみんなを見て

「よう、みんな・・・あの、なんでマリはヤンデレ目でアリアは怒りモード？」

「浮気ものは死んでください！」「風穴デストロイ！」

「ぎゃあああああああああああああああああ！」

ドンドン　パンパン

兵庫武偵高付属病院に響きわたる銃声と悲鳴。
ある意味、事件が終了を告げた瞬間でもあった。

第７８弾　別れ

実の所、神戸の最終日は市内で遊んでいうこうと言う案もあったのだが、武装検事の事情聴取や俺の入院でそれは叶わなかった。
なので、朝１番の飛行機に乗るために俺たちは神戸空港に来ていた。
搭乗開始まであと３０分か・・・
お土産を見に行くというキンジとアリアとマリに続いてマリも行ってしまった。
レキはいつの間にか消えているし、俺は椅子に座ってぼんやりと天井を見つめていた。

「武偵になるんだってな？」

「え？」

天井を見ながら俺は隣に座る奏ちゃんに話しかけた。

「武偵なんていい仕事じゃねえぞ？　財閥で過ごす方が幸せなんじゃないか？」

ぼろぼろになるし一歩間違うと死ぬしな。
今回だって最悪、俺は殺され、レキや奏ちゃんは中国へ、千夏ちゃんは爆死してい他最悪の未来だってありえない話じゃない。
武偵に限った話じゃないがそんな世界と隣あわせなんよなこの世界は・・・

「優がいるから・・・」

「え？」

よく聞こえなかったんだが・・・

「だから・・・！」

顔を真っ赤にして奏ちゃんが何かを言おうとした時

「おーう！　優間に合ったな」

「・・・久しぶり優」

プリン頭の虎児とメガネを掛け、ポニーテールに結っている少女がロビーから人並み和変えて歩いてくる。

「虎児！　千鶴！　見送りに来てくれたのか？」

「俺はそうなんやけどな・・・」

冷や汗をかきながら虎児が横を見る。

「ん」

千鶴が紙を俺に突きつけてくる。
なんだろう？
受け取って見ると凍りついた。

請求書　４００万

「待てなんだこれは！」

「私への依頼料」

「法外だ！」

４００万てなんだそれ！

「今回は自衛隊のやばい衛星も使った。結構苦労した部分になったからその金額。びた一文巻けるつもりはない」

まずいぞ、今回は依頼でかかった金は

日本刀破損１００万→すでに調達のために支払い済

武偵弾　１００万

千鶴依頼料　４００万

高速修繕費　司法取引で０ただし、単位剥奪報酬なし

報酬０

結果、マイナス６００万

借金だ！　増えてるじゃねえか！

「ぶ、分割で・・・」

俺がたのみこむように言うと千鶴はこくりと頷いた。

「利子は４割。　期限は今年中に」

無理です！　破産するから！　あんたは悪魔ですか！
そういえば、アリアを守ると言う点では依頼主から報酬も出るはずだ。

「ちょ、ちょっと待ってろ！」

俺は3人から離れると電話をかける。
3コールののち・・・でねえ・・・
もうだめだおしまいだ
とぼとぼと戻ると千鶴が領収書を突き出してくる。
うう・・・
泣きながら受け取ろうとすると奏ちゃんが領収書を受け取った。

「私が払います」

千鶴の目が見開かれる。

「４００万よ？　払えるの？」

眼鏡の奥の目が少し攻めるように細まる

「少し利子がついても構いません。　私が払います」

毅然たる態度で彼女は言った。

「い、いやあの・・・」

それは嬉しいんだがあまりに申し訳ない

「心配しないで優」

奏ちゃんはにこりと微笑んだ。

「あなたは私たちの命を救ってくれた。　これぐらいさせて」

お言葉に甘えるしかないか・・・

最悪実家に金借りるなんてことになったら最悪だしな。

あいつにばれたらぼっちゃまは金使いが荒すぎますと薙刀を持って追い回されかねん

「ごめん・・・いつか返すよ」

「期待しないで待ってる」

からかうように奏ちゃんは言う。

「じゃあ！」

千鶴はなぜか、不機嫌にそう言ってきびすを返した。

おい！待てって！

「千鶴！」

千鶴は振り返らない。

なので、その背に

「ありがとうな！　それとごめん！　東京に行って！　できればまだ、友達でいてほしいんだ千鶴！」

千鶴は一瞬、振り返ってから人ごみの中に消えていった。
ダメか・・・
あいつとは友達でいたかったんだが・・・

「優・・・」

ぽんと虎児に肩を叩かれたので

「あ？」

「浮気はあかんでハーレム優。　理子さんって彼女おるやから女の子にフラグたてたらあかん？」

だれがハーレムだ！　付き合ってる奴なんていねえよ

「え？　理子さんと優って付き合ってるの？」

奏ちゃんがショックを受けたように目を開く。
え？何この反応

「せや、理子さんと優はらぶら・・・」

「てめえは寝てろ！」

怒りまかせに虎児の頭を殴ると虎児は白目をむいて気絶してしまった。

「理子と付き合ってねえよ。　誤解だ奏ちゃん」

「よかった」

ほっと胸をなでおろした仕草をとる奏ちゃん
なんなんだろう？

「わ、私お手洗い行ってくる！」

顔を真っ赤にしながら人ごみの中に消えていく奏ちゃん。
入れ替わりに、千夏ちゃんがレキとやってきた。
レキ、千夏ちゃんについてたのか

「どうかしたんですかお兄さん？　お姉ちゃん真っ赤でしたけど？」

小悪魔っぽく口元を緩めながら千夏ちゃんが聞いてくる。
むぅ・・・将来、理子みたいな性格になるんじゃないかこの子・・・

「さあ？　トイレ行くらしいけど顔が赤いってことは熱かな？」

「・・・」

レキに聞いてみたがレキは無言で何も言わない。
わからないということか・・・
話題を変えよう。

「傷は大丈夫なのかレキ？」

俺はレキの体のあちこちに見えている包帯を見ながら言った。

「動けない傷ではありません」

「そりゃよかった」

短い会話が終わってしまう。
今度は千夏ちゃんにふろう。

「短い間間だったけどお世話になったな」

「いえいえ、お兄さんならいつでも大歓迎ですよ？　神戸にきたらぜひ寄っていってくださいね。　おねえちゃんも喜びますから」

片目をウインクして彼女は言った。

「了解、また寄らせてもらうよ」

「ところでお兄さんこれいります？」

「ん？」

千夏ちゃんが何かを取り出したので受け取ってみる。

「ぶっ！」

思わず吹いちまった。
だって、小学生に混じり、廊下を歩いているアリアの・・・

「ゆーう・・・それは何かしらぁ？」

ひっ！
その場に張り詰めた空気に俺は凍りついた。
殺される・・・
ぎぎぎとロボットのように後ろを見るとアリア様が・・・

空港だからかガバメントは抜かずに飛びかかってくるところだった。

「風穴ぁ！」

「ぎゃあああああああああああ！」

床に叩きつけられ俺は絶叫を上げるのだった。

余談だが目覚めた虎児がアリアに詰め寄ろうとしたので再び沈黙させたのは本当に余段である。

「痛い・・・」

打ち付けた顔をさすりながら来た時と同じＶＩＰの部屋で空の旅をする俺達だがメンバーの大半は眠っていた。

昨日からの激戦もあるがみんな疲れがたまってるんだろう。
俺も寝るか・・・

「ユーユー」

眼を閉じた瞬間、声をかけられたので目をあけると理子が俺の膝に手をおいてしゃがみこんでいた。

「り、理子なんだよ！」

理子はくふふと笑いながら

「理子依頼手伝ったよ。　忘れてないよねご褒美」

ご、ごごごご褒美！？　あ、ああ泥棒ね・・・

「紛らわしい言い方すんなよ。　心配しなくても忘れてねえよ」

「ユーユーって頼りになるなぁ。　かなでんとチーを狙ってた連中を撃退は大手柄だよ」

「単位と報酬は剥奪だけどな・・・」

涙目になりつつも収穫はあったと思う。
あまり、利益等でいいたくないが財閥のお嬢様が知り合いになったんだから役に立つこともくるかもしれない。

「かなでんは最初は、ユーユーを毛嫌いしてたのに最後は一番ユーユーを信頼してた。　これってすごいことだと理子思うんだ」

「信頼ねぇ・・・まあ、それは嬉しいけどな」

「だからね・・・て」

小さく理子は何かを言った。
底抜けに明るい彼女の顔に一瞬指した闇

「理子・・・」

俺が何か言おうとした瞬間、

「さってと！　理子も寝よっと！」

そういいながらふりふりのアイマスクを取り出し耳栓で耳を塞いでしまう。
そして、くーくーとかわいらしい寝息を立て始めた。
な、なんて寝つきの速さなんだ。
椅子に座り直しつつ俺はため息をついた。
最後の理子の言葉・・・
あれは確かにこう言った。

助けてと・・・

うーむ、理子の泥棒作戦無傷でおえたいもんだが・・・無理な気がするな・・・
もう、切り札解放はしたくないぜ・・・
ま、俺に出来る範囲でなら助けるよ友達だしな理子・・・
眠気が襲ってきたので俺は目を閉じた。

そして、舞台は東京に戻る。

神戸でのクエストが終了し、新たなる日々の始まりだった。

オリジナル神戸編　完

第79弾　ヤンデレ強襲再び

東京に戻った翌日、一応、レキもそれとなく泥棒作戦に誘ってみたが療養ののために断られてしまった。
なので理子やマリと別れ、アリア、俺、キンジで部屋に戻ってきた。

「それはあたしのよ」

「これはおれのだ」

「なぜなんだ・・・」

再び、アリアももまん、キンジハンバーグ弁当、俺きのこご飯という構図・・・
きのこ嫌いなのに・・・
ってまたかよ！

「キンジ！　交換しろよ！」

いつかと同じようにキンジに詰め寄る。

「早い者がちだからな」

「お前が買ってきたんだろ！」

そうこういううちにキンジは食べ始め、アリアももまんを食べ始める。
く、くそお・・・

やけくそぎみに弁当を口入れる。
うえぇまずい。
まさしく、そのタイミング

「キンちゃん！　帰ってるのキンちゃん」

ばんばんと扉が叩かれる音
げっまさか！
冷や汗をかきながらキンジを見る。
見るとキンジの手が止まっている。

「白雪？」

アリアは立ち上がろうとしたとき扉が轟音をたてて切り裂かれた。
や、ヤンデレ白雪・・・別名黒雪・・・
こおおとヤンデレ目の白雪はひたりと１歩部屋に踏み入れる。
気のせいか周囲の闇が濃くなり髪がざわざわ動いているような・・・
こ、こえええぇ

「キンちゃん」

「ど、どうかしたのか白雪？」

キンジが言う。

「アリアと旅行したって本当？」

「そ、その・・・」

なぜか詰まったキンジがアリアを見る。

「クエストで神戸に行ってきたんだよ。　それだけだ」

「本当？　優君？」

ひいいい！　殺気をこっちに向けるな！
ヤンデレとだけは戦いたくない！
それは、この先アリアを狙う相手に現れても絶対に戦わんぞ！

「ほ、本当だ！」

「・・・」

こおおおというヤンデレ目をやめてホッとした様子の白雪は両手をあわせてにこりと微笑んだ。

「じゃあ今回もキンちゃんとアリアには何もなかったんだね」

「というと？」

俺が聞き返す。

「抱きついたりとか・・・そういったこと」

赤くなって言った時、アリアがぼんと赤くなった。
あ、ああ・・・あったよね・・・・バイクとかバイクとか・・・
正確にはキンジの背中にアリアが捕まっていたというのが正しいんだが・・・

「そ、そういうことはしたけど・・・」

「ばっ！」

慌てて中間に割り込もうとするが既に手遅れだった。
がしゃん
鉄の鎖についていたモーニングスターのような武器が床に落ちる。
もうだめだ！　おしまいだ！

「フフ、フフフフ」

「き。キンジなんとかしろ！」

恐ろしい笑を浮かべる白雪に恐怖した
俺は慌ててキンジの背中に隠れた。
こ、こえええ！　シンやミンとの戦いなんて比較にならん！
別に俺が狙われてるんじゃないのは分かっているのだがそうせずに居られない。

「ま、待て白雪！」

キンジが慌てて白雪を遅止めようとしたたが

「泥棒猫は死んで！」

と、白雪が跳躍するのとアリアが

「こ、こらやめなさい！奴隷3号！」

と交戦を始めた瞬間、俺たちは全速力で逃げた。

とりあえず、キンジの背中を踏んで窓から飛び出した瞬間
戦場のような轟音が背後から聞こえ、キンジが海に落ちていくところだった。
ワイヤーで屋上に逃げるとばりばりと聞こえてくる音を聞きながら
電話をかける。

3コール後

「やあ、久しぶりだね椎名　優希」

アリア護衛の依頼主様だ。

「今回の敵もハードだったよ」

「シンやミン達だね。　彼らもイ・ウーに所属していることは私もつかんでいる」

「やっぱりそっち絡みか・・・」

沖田が動いていた時点で、分かっていたことだ。
イ・ウーは法律では裁けない。
だからこそ、公安0が動いたのだろう。
だが、今回シン達とは決着を付けることができなかった。
奴らが所属するランパン・・・ああ、やばい・・・実家にばれたらいろいろ言われそうだな・・・
もう、バレてると思うけど・・・
なんかアリアと友達になってから敵がどんどん増えているのは気のせいか？

「ローズマリーも神戸にいたそうだね」

「ああ、どういうつもりかは知らんが今回はあいつに助けられちまった」

「感謝していると？」

「冗談やめてくれよ。　俺はあいつを絶対に許さない」

怒気を込めて言うと依頼主はふむと頷くような気配を見せ

「では、次は君が依頼を果たす番だね」

知ってるのか理子が依頼してきたことを・・・

「参考までに聞きたい。　ブラドは俺より強いか？」

それは戦ってみればわかるよと言う言葉が帰ってくる気がしたが

「力量が上でも勝つ方法は必ずある。　椎名　優希君には仲間もいる。武偵憲章仲間を信じ仲間を助けよだ。　いいかい？　今回はこの言葉を忘れてはいけない」

「どういう・・・」

ツーツー

電話が断線した音

むぅ依頼主め・・・相変わらず訳の分からないコトばかりいいやがって・・・

今回の相手もしんどそうだな・・・

助けて・・・
あの言葉が聞き違いじゃないなら・・・
切り札のもう一つ解禁する必要があるかもな・・・

第８０弾　小悪魔りこりん再び

翌日の中間試験、てまじか！全然勉強してないぞ！
壊滅的な試験を受けたあと昼休みを挟みスポーツテストを受けている。
テスト8種目を終わらせた俺はキンジと第2グランドのすみで腰を下ろす。
そうしながら教師陣を見る。
普通じゃねえメンツだ。
まず、香港のマフィアのボスの愛娘蘭豹とかマリの所属するダギュラの綴、背後にたっただけで手刀で気絶させた南郷、レザドのチャン・ウーは声は聞こえるが姿が見えない。
さすがというべきなのか？
おお、インターンの3年なんか理子に似ているふりふりだな。
麒麟と書かれているんだが・・・
あっ、確か去年の理子のアミカか・・・
まあ、それはそれで・・・
ツインテールを解いたアリアが５０メートルを走っている。
そういえば、アリアの護衛・・・かなえさんの免罪が証明されたら終わるんだよな・・・

「・・・」

そりゃ、無罪が証明されるのはいい。
でも、そうなればアリアはイギリスに戻るかもしれない・・・
せっかく出来た友達なんだ・・・それは残念に思う・・・
そんなことを考えていると片手にスポーツドリンクを持ったアリアが俺たちの真ん中に座る。

「うわなにそれ！　バカキンジモードのあんたって体力までバカになるのね。　優もさんざんじゃな」

くそ・・・毒のせいで本調子じゃないんだよ。
シンの毒はアンビュラスによればほぼ感知らしいがどうもな・・・

「うっせえな現文とか古文じゃうとうとしてるくせに体育だけ元気になりやがって」

「よっと・・・」

アリアはくちなしのにおいを出しながら俺たちの間に座り込んできた。
どきっとするがこの子は結構むとんちゃくなのだ。

「随分張り切って走ってたな」

「確かに」

俺とキンジが言う。

「そう見えた？」

「誰かにいいところ見せて認めて貰いたかったのか？」

「なにそれ？」

アリアが首をかしげている。
確かになんだそれキンジ？
アリアは膝小僧を抱えちょっと考えながら

「ま、私の能力はチームメイトが認めてくれればそれでいいわ」

といった。

ううん、前のアリアなら別に誰にも認めてもらえなくていと言うだろうな・・・

変わってきたんだな・・・

アリアも・・・

体力試験の後、１時間はアサルトで汗を流した後、６時間目は生物の小テストを受けることになっていた。

前回のクエストは単位剥奪されたからな。

この試験をクリアしたら０．１単位もらえる。

ようは貴重である。

なるほど遺伝学のＤＶＤを流すからレポートだな。

いけるぜこれ！

「ほらみなさん着席して、ＴＰＯをわきまえて」

女子に黄色い悲鳴を浴びながら入ってきた小夜鳴

女子からは王子なんていらわれるがなんか気に入らねえ・・・

「ほらほら君たちこれじゃＤＶＤ再生できませんよ。　席に戻らない子は単位あげませんよ」

女子たちが引いたのでようやくかと思った矢先

「ダーリン！」

うお！　バニラみたいなにおいの理子が抱きついてきやがった。

「おい理子今はアサルトの・・・」

「しってるよ。　きちゃった」

その瞬間、部屋が暗くなる。
どうやらＤＶＤが始まったらしい。
集中集中と
じーとＤＶＤを見ながらレポートの中身を考えていると

「ねえユーユー」

「話しかけんな今、テスト中だぞ」

ぼそぼそと小声で返すと理子は俺の右腕に胸を押し付けてきた。

！！！！

焦ったように回りを俺は見回した。

「聞いてくれなきゃ大声あげちゃうぞ」

なにい！それはまずい

「わ、分かった聞いてやるから離れろ」

キンジ見たいな性的興奮で別に何の変化があるわけじゃないんだが
……

「くふ、やっぱりキー君とユーユーは似てるよ。同じような反応してる」

お前、キンジにも同じことやったのか……そういや、インケスタも補修あったな……

「ねえ、ユーユー」

理子は頭を俺の膝に乗せるようにしなだれかかってきた。

「ユーユーもなでなでして」

やらなかったら大声あげるきだな……

諦めて理子の頭を撫でる。

「あん、ユーユー激しい。もっと優しくしてくれないと理子壊れちゃう」

神様……もう帰らせてください。

ハイジャック戦では圧倒した相手に今や俺は圧倒されていた。

俺は優しくするイメージで……そうだ妹の頭を撫でるイメージで……

「気持いい。もっとぉ」

訂正だ妹はこんなこと言わん……

だが、理子お前美少女なんだから困るよ……アリアもなんだが仕草がいちいちかわいい……

人気があるのは納得だな。

ってやばい！遺伝の話なのに早く書かないとあれ？

シャーペンが……

「ユーユーのシャーペンもかくれんぼしてるよ」

「なっ」

見るとシャーペンは理子の胸の谷間に収まっていた。

な、なんて幸せなシャーペ……いや

「か、返せ」

「あん」

うお！　やばい、なんか柔らかい物をつかんじまった。

こ、ここか？

「ゆ、ユーユー乱暴、本当に理子壊れちゃうよ」

く、くそこうなりゃやけだ！

「もう容赦しねえぜ」

「あん、ユ、ユーユー」

戦闘狂モードになると理子の胸に右手を突っ込んだ瞬間、パッと電気がついた。

はっとして顔をあげると小夜鳴先生が立っていた。

「し、椎名君もですか？」

「先生、理子教室間違っちゃいました」
逃げやがった！
と、とりあえずここは……
「へへへへ」
と笑っておいた。
追試を食らったのはいうまでもない
最悪だ……

第８１弾　優希の位置づけ

ザアアと降ってきた雨を強行突破しようと試みるがやはり、無謀だったか・・・
びしょびしょになりながらシャッターの閉じた店の軒下に避難する。
うえぇ・・・ついてねえ・・・
雨は理子のせいじゃないがなんとなく、あいつのせいにしたくなる・・・
携帯電話を開いてから誰かに傘を頼もうか考える。
なんだかマリなら持ってきてくれそうな気がしたが選択肢からなんとなく外す。
そうなると・・・
そんなことを思っていると着信があった。

実家

「・・・」

ディスプレイに表示された文字を見ながら
無言で通話ボタンを押し込んで耳に当てる。

「・・・」

相手も無言

「・・・」

「・・・」

２０秒ぐらい沈黙が続いたあと

「優兄？」

なんだお前かよ

「悪い悪い。　お前か咲夜久しぶりだな」

「う、うん。　どうしても優兄に電話したくて月詠に頼んで電話した」

「ってことは月詠もそこに？」

「う、うん。　近衛の人達を警戒してから優兄によろしくって」

「たくあいつは・・・」

椎名の家の人間にはとことん甘いんだから・・・

咲夜は俺の妹だ。

義理とかじゃねえぞ正真正銘の妹だ。

「それで、何か用か？」

「よ、用はないんだけど・・・優兄こっちに戻ってくる予定あるの？」

「いや、ないけどなんで？」

「月詠に聞いたの。　優兄剣を使えるようになったって」

「ああ・・・」

俺が椎名の家を追い出されたのはあのトラウマのせいで剣が握れなくなったのが原因の1つだからな・・・
単純に咲夜はそれが取り除かれれば戻れると思っているのかもしれない。
実際はそれだけじゃながな・・・

「予定は今のところ無いな」

「そう・・・なの?」

しゅんとした様子が向こうから伝わってくる。
うーん、1回ぐらい実家に戻ったほうがいいかな?
どうせ、自衛隊を乱用したことについても呼び出し受ける可能性もあるし・・・
ま、約束はできんから話題を返る。

「鏡夜は元気か?」

「鏡兄は元気すぎるぐらい元気。 今日も近衛の人たちを相手に引けをとっていなかった」

「へー、月詠は倒せたのか?」

「ん? 月詠には勝ててない」

だろうな・・・
月詠は椎名の持つ戦力『近衛』総隊長である。
いわば椎名の血を継いでいないという条件での椎名の最強の戦力で

ある。
俺が家を出たのはずいぶん前だが、あいつには最後までかつことができなかった。
それは鍛錬を続けているはずの弟も同じようだった。
うん、今やっても負けるかもな俺。

「志野さん元気か？」

「お母さん？　今日も部屋で1日中仕事してたみたい。　体は最近、よくないみたいだけど・・・」

「そう・・・か」

志野さん、俺の母親を母と呼ぶことはできない。
椎名の家からは勘当と同じ扱いになってるからな・・・

「ねえ、優兄、帰ってこないの？　こないなら東京行っていい？」

「馬鹿言うなよ。　志野さんが許すはずないだろ？」

「ううん、つまらない・・・」

電話の無効でぷくうと頬を膨らませる妹の姿を思い浮かべながら俺は笑った。

「ハハハ、心配するなってそのうちまた、帰るからさ」

「いつ？」

うーむ、具体的に言うのは難しいんだが・・・とりあえず

「今、事件を抱えててな。　それが終わらないと帰れないんだ」
時期を曖昧にしておく。
「仕事？武偵の仕事なの？」
「あ、ああ」
まさか、泥棒するんだと言えない。
理子め、妹に嘘つかせやがって。
おしりぺんぺんしてやるぞ。
雨が振る空を見上げながら俺はいろいろなことを妹としゃべった。
東京での暮らしや出会い。
「じゃあ、そのアリアさんって優兄の恋人なの？」
ま、まてなんでそうなるんだ？
「はぁ？　そんな分けないだろ」
「じゃあ、レキさん？」
なんで、レキが出てくるんだ？
「違う！」
「理子さんなの？」
「いや、だから女の子＝恋人はないだろ」

「で、でも同じ屋根の下で結婚前の男女が寝泊まりするなんて・・・その・・・」

ああ・・・咲夜は純粋培養だからな・・・よくいえば純粋。悪くいえば鈍感なのだ。

「違うって。　みんな友達だ！　恋人なんていねえよ！」

「そ、そうなの？　よかった」

何がいいんだよ・・・

「優兄さんに恋人ができたらますます、帰ってきてくれないかなって・・・」

そうか・・・寂しいのか？咲夜・・恨んでないのか？　俺を・・・なあ・・・咲夜・・・

その言葉は怖くて口にすることができなかった。

「咲夜・・・」

「ん？」

「お前は・・・」

「咲夜誰と話している？」

そんな時、電話の向こうで男の声が聞こえてくる。

「あ、鏡兄・・・」

「鏡夜兄様だ。　ん？　その電話番号・・・貸せ！」

「嫌！」

電話の向こうで咲夜が抵抗するような音が聞こえた。

「おい！　鏡夜！　昨夜に乱暴するな！」

「やはりお前か人殺し」

突き刺さるようなその声に普段の俺なら
黙るが今回は妹のこともある。

「それとこれとは関係ないだろう。　咲夜に乱暴するな」

「妹をどうしようと俺の勝手だ。　家から追い出された犯罪者は黙っていろ！」

「く・・・」

「大体、家を出たかと思えば武偵なんかになって剣を捨ててクズな人生を歩むお前が一体なんだ？　この前から椎名の家の力を乱用しやがって。　恥を知れクズ」

「・・・志野さんの許可はもらってる・・・そうやすやすと乱用したりなんてしてねえよ・・・」

「なら、2度と椎名の家に関わるな。　お前のような犯罪者が兄だったと思うと嗚咽が走る」

あいかわらずきついな・・・弟にこんなこと言われるの・・・

「鏡夜」

「なんだクズ？」

「紫電は扱えるようになったか？」

一瞬、鏡夜が息を飲んだのが分かった。

そうか・・・まだ・・・

「余計なお世話だクズ。　もう、2度とかけてくるな」

ぶつりと電話が切れる。

「はぁ・・・」

携帯を閉じてからそっと、軒下を離れる。

雨に打たれて帰りたい気分だった。

第８２弾　驚愕の泥棒計画

翌朝、なんだか疲れた様子のキンジやアリアと共に理子の呼び出しを受けて俺たちは秋葉原にいた。
ちらっと見えたんだが、そのメール件数白雪だな・・・
ご愁傷さま

「何泣きそうな顔をしてるのよ突入するわよ」

ちらりと窓の外を見るがこの街は武偵にはいい場所じゃないんだよな・・・
人は多いし道は入り組んで居て銃が使いにくい。
別名武偵封じの街だ。

理子は泥棒大作戦をこの街でやろうと提案してきたのである。
アリアも始め、初めて来た秋葉原に目を丸くして歩いていてさらに自分を見ていた人がツインテールだ。　アホ毛だ。　ミク・・・と囁くから??と首を傾げていたが・・・
安心しろアリア。　俺もアリスに熱弁されるまでは知らなかったから。
アンビュラスの後輩の顔を思い浮かべながら

「行くぞ」

犯罪組織のアジトに突入する体制、キンジが取っ手を握り、俺とアリアは２丁拳銃で突入し攻撃を仕掛ける。
このチームならそれがベストだ。
戦闘狂モードになるか迷ったが結論は必要なし。
なんか理子のことだしこれは・・・

がちゃり
扉が開く

「「「ご主人様、お嬢様おかえりなさいませ！」」」

そう、ここはメイドカフェ、こんなものが当たり前にあるのがこの街の恐ろしいところだ。
理子はここを待ち合わせ場所に指定してきたのだ。
ううん、相変わらず入りにくい・・・
興味本位で昔、虎児と神戸で入ったことあるんだがあの時はそそくさと退散したからな

「・・・じ、実家とおなじ挨拶だわ。　まさか、日本で聞くことになるとは思わなかった」

と、隣のアリアも引いている。
キンジも帰らせてくださいと言う顔だ。
神戸では個室なんてなかったので勝手がわからないのでメイドさんに連れられるままに部屋に入り、胸の空いたデザインのメイド服をみた瞬間、俺とキンジはアリアに耳をつかまれ着席させられる。
いたた離せアリア！

メイドさんが出ていくとアリアは腕組みをし

「な、なによあの胸！　じゃなくて衣装！　いくら給料が良くてもあれはないわ。イギリスならともかく日本で着るなんて場違い。恥っずかしい！　なんて店なの！　あたしだったら着ない。　絶対絶対着ない！」

悪口を俺たちにぶちまける。
まあ、落ち着かないのはわかるが落ち着けよ・・・

「理子様おかえりなさいませ！」「きゃー！　お久しぶり」「理子さまがデザインされた制服お客様に大好評なんですよ！」

まがもたないので各々、時間つぶしをしていた俺たちの耳に声が聞こえてきた。
理子がきたか・・・
ここの常連らしいなあいつ
んん・・・しかし、改めて見るとメイド喫茶というのも・・・

「ごめっぇーん！遅刻しちゃったぁ！　急ぐぞブゥーン」

ゴスロリ制服にしましまタイツ、首には鈴を増設した理子が走ってやってくる。
飛行機のように広げた両腕にはフィギアやらゲームの紙袋が・・・
それで遅刻したのかお前・・・

「んと、理子はいつものパフェとイチゴオレダーリン達にはマリアージ・フレールの春摘ダージリン。　そこのピンクいのにはももまんでも投げつけといて！」

水を得た魚のごとく注文をする理子。
ま、俺だけだからなこの街に出入りするの・・・
いや、誤解するなよ？　1年の時、理子のゲーム買に来だけだからな・・・
考えてみれば俺その頃からこいつに振り回されてるのか・・・

「まさか、リュパン家の人間と同じテーブルにつくことになるとは

ね・・・偉大なるシャーロック・ホームズ卿も天国で嘆かれてるわ」

いいながらアリアはももまんをもふもふと食べている。
理子はといえば、タワーのようなパフェを半分くらい平らげている。
女の子の胃ってブラックホールだよな甘いもの限定でレキは例外として。
鼻にクリームついてるぞ理子

「理子、俺たちは茶を飲みにきたんじゃない。俺たちにした約束はちゃんと守れるんだろうな？」

キンジが念をおしている約束は3つ。

かなえさんの裁判で理子が証言する。
キンジの兄さんの情報
俺にはローズマリーの情報だ
なんだかんだで俺たちには利得があるのだ。

「もちろんだよダーリン」

「誰がダーリンだ！」

「ぷは、キー君とユーユーに決まってるじゃん。理子たち恋人どうしじゃーん」

それはおかしいぞ理子日本は一夫多妻制じゃねえ！
と内心突っ込みながら黙っておく

「コンマ1秒たりともお前とそんな関係であったことはねえ！」

「ひどいよユーユー、キー君、理子にあんなことまでしておいてヤリ逃げだ」

「なんにもやってねえだろそもそも！」

と、キンジはいうが・・・

ああ・・・

理子のその・・・背中にかんじたあの感触を思い出して・・・

ぶんぶんと首を降って煩悩を払う。だんだんと裁判長みたいに机を叩くアリア

拳銃で

「そこまで！　風穴開けられたくなければいい加減にミッションを説明しなさい！」

「お前が命令するんじゃねえよオルメス」

いきなり乱暴な男言葉になり三白眼の目でアリアを射殺すような目で見たので俺も少し引いた。

理子は紙袋から取り出したノートパソコンを広げて起動させつつテーブルに放り投げる。

「横浜郊外にある『紅鳴館』―ただの洋館に見えてこれが鉄壁の要塞なんだよぉ」

表理子に戻ったのを見ながら画面を見ると地下1階、地上3階の見取り図が詳細に記されている。

少し、いじれば、逃走ルート等まできちんと書かれてある。

それも、想定されるケースなどいくつも書かれている。

これは・・・すごい・・・タイプは異なるがこれと同等のことが出

来る奴は兵庫武偵中には少なくても知り合いにはいなかった。

「これあんたが作ったの？」

「うん」

「いつから？」

「んと先週」

奏ちゃん達の護衛の時か・・・
そういや、影でパソコンいじってたな
アリアも目を丸くしてるぞ。
まあ、俺もそうだが、作戦よりも圧倒的な戦力で強襲してねじ伏せる戦略でいくことが多いからな
作戦を立てるとしても現場でだ。

「どこで作戦立案術を学んだの？」

「イ・ウーでジャンヌに習った」

ああ、ジャンヌね・・・
できれば2度と戦いたくないあいつを思い出しながら

「キー君、アリア、ユーユー。　理子のお宝はここの地下金庫にあるはずなの。　でもここじゃ理子1人じゃ破れない。　鉄壁の金庫なんだよ。　もう、まじでマゾゲーでも息のあったチームと、1人の外部連絡員がいればなんとかなりそうなの」

「それであたしたちをセットで使いたいってわけね」

と、アリアはツインテールを揺らして椅子にもたれかかる。

「・・・で、理子、ブラドはここに住んでるの？　見つけたら逮捕しても構わないわよね？
知ってると思うけどブラドはあんたたちと一緒にママに冤罪を着せた敵の1人でもあるんだからね・・・」

やっぱりかよ

「あー、無理ブラドはここ何十年もこの屋敷に帰ってきてなくて管理人とハウスキーパーしかいないの。　管理人もほとんど不在で招待をつかめていないんだけどねぇ」

アリアはそれならそうと教えときなさいよと口をへの字に曲げる。
やばい、八つ当たりしそうだ。
わ、話題を変えよう

「それで俺たちは何を盗むんだ？」

「理子のお母様がくれた十字架」

「あんたってどういう神経してるの！」

アリアは犬歯を剥き出しにし眉をつりあげ立ち上がった。
沸点がはやいってアリア

「あたしのママに冤罪を着せといて自分のママからのプレゼントを取り戻せですって？　あたしがどんな気持ちか考えてみなさいよ」

「おい、アリア落ち着け！　理子の言うことでいちいち腹を立ててたらきりがないぞ」

キンジガフォローするがアリアは収まらない

「頭にもくるわよ。　理子はママに会いたければいつでも会える。電話すればすぐに話せる！　でも、あたしとママはアクリル越しに少ししか・・・」

「うらやましいよアリア」

「あたしの何が羨ましいのよ！」

アリアは等々ガバメントを振り上げるが理子は銃を抜かない。かわりに寂しそうにぷらぷらと足を揺らす。

「アリアのママは生きてるから・・・」

「・・・っ！」

アリアが目を見開く

理子にはお父様もお母様ももういない。　理子はお二人がお歳をめされてからやっとできた子なの。　お二人とも、理子が８つの時になくなってる。

「・・・」

「十字架は理子が５才の頃お母様からもらったものなの・・・」

アリアのガバメントが下がっていく。
そして、着席した。

「あれは理子にとって大切なものなの。　命の次ぐらいに大切なもの。　でも・・・」

理子は顔を伏せたと思うと

「ブラドの奴、あいつそれをわかってて、あれを理子からとりあげたんだ。　それをこんな警戒厳重な場所に隠しやがってちくしょう・・・」

憎悪に満ちた声でぼそぼそつぶやいている。
悔し涙まで浮かべて・・・
理子・・・お前はそんなに憎むやついがいるんだな・・・
気持ちはわかる。

「ほ、ほらそんなに泣くんじゃないの。　化粧がくずれてブスがもっとブスになるわよ」

そんな理子の前にアリアはトランプ柄のハンカチを投げる。
さっきの母親罵倒のお詫びかな？

「ま、まあそれはともかくその十字架を取り戻せばいいんだな？」

キンジの言葉に理子はアリアのハンカチで少し目を抑え、涙をすいこませながら頷いた。

「泣いちゃダメ、理子はいつでも明るい子。　だから、さあ。　笑顔になろ」

暗示のような独り言を理子が行ったとき、メイドさんが入ってきてお冷をついでまわってくれた。
場が少し和む。
理子もいたずらっぽい笑に戻り

「・・・とはいえこのマップね」

ばしっと理子はパソコンを閉じながら

「ふつーに侵入する手も考えたんだけど。　それだと失敗しそうなんだよね。　奥深くのデーターもないし。　お宝の場所も大体しかわからないの。　トラップもしょっちゅう変えてるみたいだからしばらく潜入して内側を探る必要があるんだよ」

「せ、潜入？」

俺たちが尋ねると理子はばんざーいと言うように宣言した。

「アリアたちには紅鳴館のメイドと執事になってもらいまーす。あ、ユーユーはメイドね」

へ？まさか・・・
また、女装するのか？

丁度いいかもと言っていた理子の言葉を思い出す。
そんな・・また・・・女装？

「いやだあああああああああああ！」

秋葉原のメイド喫茶に俺の絶叫が響きわたるのだった。

第８３弾　レキ「のぞき現行犯で逮捕します」

まあ、潜入捜査ってのは長らく日本では違法だったんだが凶悪犯罪が増えている現状ではなりふり構ってられなかったんだな・・・
今では定着した捜査法だ。
奏ちゃん達の学校には潜入したが今回は少し違う
泥棒大作戦では俺たちはブラドの屋敷にハウスキーパーとして雇われる。
というのも、ブラドの屋敷のハウスキーパー2名が休暇をとるらしく。管理人も帰ってくるらしいで、雑用2名を募集していたんだが理子は派遣会社を装い2名では不安のため、3名の募集を提案したんだそうだ。
相手の返答はOKということ。
まあ、慣れたハウスキーパーじゃないんだから1人ぐらい補助は必要だろうということ。
ううう・・・しかし、やろうとしてること泥棒なんだよな・・・
月詠とか鏡夜にばれたら殺されかねんぞ。

それでだ・・・

「だよねー」「ですよねー」「あれはくさいよね」「しらないーいめんどいよね」

と、薄い鉄の扉の向こうから聞こえてくる女子の声。
ここはアンビュラス等1階、第7保健室
キンジや俺たちに専用のメニューを作ったという理子のメールでここにきたんだがキンジと誰もいねえなと途方にくれていたんだが外から女子の声が聞こえてなんかまずいぞということで俺たちはそれぞれ隠れたんだが・・・

それぞれ対面に存在するロッカーに俺達は隠れた。
キンジが入った方には武藤がいたがあいつ・・・
俺はというと1人でもうひとつのロッカーには……

「なんでてめえがいるんだ村上！」

「そういうな椎名、今日は騒ぐ訳にはいかないから命は預けるが共にレキ様の体を拝もうではないか」

そう、レキ様ファンクラブＲＲＲ会長、村上が潜んでいたのだ。

「てめえと一緒にすんな！」

「まあまあ、お！始まるぞハーレム野郎」

「誰がハーレ……」

村上の横の隙間から外を見てみる。

ぶっ！
心の中で悲鳴をあげる。
なんと、女子たちが服を脱ぎはじめたのだ。
殺される・・・ここにいたら確実に殺される。
逃げたいがここはロッカーの中、思わず、武偵弾閃光弾を握りしめるが駄目だ・・・
レキがいる・・・
あいつは風はいっています優さんがいますとなんて言われれば・・・
おしまいだ・・・
正面にあるロッカーを見ながらとりあえず様子をみるか・・・

目をつぶろうとするが俺も男の子、なんとなく外を見てしまう。平賀文、理子、キンジのアミカの風魔、マリ、アリス、レキにアリアか・・・
理子がなんだか携帯でキンジ達のいる方を見ながら何か操作している。
何やってるんだ？

「さーて、アリア、先生が来る前にスリーサイズはかっちゃお」

「そ、それぐらい自分でできるわよ！」

「理子がはかりたいんでーす」

わたわたと真っ赤になりながらアリアのスリーサイズを図る理子
なんとなくなんだがキンジヒステリアスモードになっていそうだな・・・
にしても・・・ここにいる連中、みんな高ランクの連中だな・・・
偶然か？

がらっと音がして教師の小夜鳴が入ってきた。
女子達が黄色い声を上げる。

「ぬ、脱がなくてもいいんですよ。メールでも書いたじゃないですか採血だけですから。　はい、服を着る」

丸イスに座りながら苦笑いし、何かをつぶやいた。

「フィーブッコロス？　ん？　日本語じゃねえな・・・なんだ？」

って？　レキ？

「おお！我が神！」
無声音で村上が歓喜の声を上げる。
無地の下着、どちらも白で両方で９８０円ぐらいで売ってそうな白い下着をしたレキが俺達のロッカーの前に・・・
げっ！

ごっとレキは一気に距離を詰める。
や、やばい！
村上もやばいと思ったのか抑える。
とっての部分に指でつかんで渾身の力でつかむが駄目だ・・・
扉が開放される。
バンという音と共に・・・

「ほぁ！」

村上が悲鳴を上げる俺はレキと目が合って固まる。
も、もうだめだ・・・

「へへへ」

と笑いながら逃げようとするがレキに胸ぐらをつかまれて前に引き出される。
きゃあああと女子たちが悲鳴を上げる。
「「ゆ、優！」」

「優先輩！」
アリアとマリの声が聞こえるがそれどころじゃねえ。

「ま、待ってくれレキ、これには事情があるんだ！　話せばわかる

！交渉を！」

無表情なんだがかえってそれがレキが怒ってるんじゃないかと思わせる。

フフフ、椎名レキ様に殺害されるがいいハーレムめ

後ろで村上が何かいっている。

いや、俺が血祭りになってもお前も血祭りだと思うが……

まずい、明日俺はドラグノフで貫かれて死ぬのか・・・

そう思った時だった。

がしゃあああんと窓ガラスが破れると同時に何かの影が俺が入っていたロッカーをぶっ飛ばした。

「うわあああああレキ様ぁ！」

レキにより引き出されてなかった村上の入ったロッカーは空中に飛び、バンと村上を中に閉じ込めると入口が床に向いてゴミのようにバウンドして壁に叩きつけられた。

村上の声が途絶える。

げっ！レキもしかして、これ知ってて助けてくれたのか？

ロッカーにいたら大怪我だったかもしれん・・・

てかレキさん！村上なんで助けなかったの？まさか、本当に怒って俺だけ引き出したのかな？

まあ、とりあえず置いといて警戒だ

何せ、俺の前には絶滅危惧種であるコーカサス白銀狼がいたんだからな・・・・

第８４弾　追撃戦２

「「優！」」

事態を重く見たらしいキンジ達がロッカーから飛び出してくる。

「お前ら早く逃げろ！」

武藤が天井に威嚇射撃を１発放つ。
轟音が室内に響くがこの狼全くひるんでいない。
そして、柔肌を晒している女子に向かい跳躍する。

「武藤！　銃を使うな！女子が防弾制服を来ていない！」

キンジの言葉を聞きながら狼の前に向かい俺は２発ワイヤーを発射した。
丁度くもの糸のように狼の前に展開されたワイヤーに狼は激突して跳ね返る。
峰打ちで意識を飛ばす
俺は左腰の日本刀を抜くと上段から狼にたたき落とす。

「ぐるおん！」

狼は鳴き声をあげるとそれを交わす。
ちっ！
さらに追撃をかけようとするが室内では銃同様剣も使いにくいし攻撃方法も限られてしまうのだ。
殺すことを選択肢にいれるならやりようがあるが・・・
再び狼が跳躍する。

ロッカーが冗談のように吹き飛ぶ

「うわあああ！」

武藤がその吹っ飛んだロッカーの下敷きになる。

「武藤！」

俺が言った瞬間、今度は狼は小夜鳴先生に襲いかかった。

「あ！」

小夜鳴先生は吹っ飛ばされ床に叩きつけられる。
同時に、狼は窓ガラスを破りながら逃走を図った。

「この！」

逃がすかと窓から飛び出そうとしたところ

「優！　使え！　そこの向こうの茂みにバイクがある」

それを受取りながら

「キンジ！　こっちの方頼むぞ！」

「ああ！」

返答を待って、バイクを見つける。
武藤・・・改造隼を所持する俺が言うことじゃないがどこまで逃げる気だったんだ？

ＢＭＷ―１２００Ｒ、世界最強のエンジンを搭載するネイキッド・バイクだ。
かいぞうされてるらしいエンジンをかける。
やっぱり、バイクはいいよな。
虎児に預けてる隼返してもらおうかな
そう思っていた時、俺の肩に誰かが手を置いた。
降り返るとドラグノフ狙撃銃を肩につけて下着姿のレキが・・・

「ちょっ！　レキ、お前何やってんだよ！服着ろよ！」

「優さんではあの狼を探せない」

いや、まあたしかにそうなんだが・・・
このスタンス、神戸での追撃戦の時と同じだな。

「じゃあ、今回も頼むぜレキ！」

「はい」

レキの返答を待ってからバイクを発進させる。
相棒の隼ほどではないがこのバイクもなかなか使い勝手がいいな。

「なあ、レキ・・・」

「はい？」

とりあえず言っておこう。

「わざとじゃないからな」

「？」

レキが首をかしげる気配

「その・・・別に覗きとかしてたんじゃなくてだな・・・怒らないでくれよ」

「何を怒るのですか？」

本当にわからないというような返答だな・・・

「いやいい・・・」

だって、下手に言ってレキが怒るようなことしたくないしな・・・

というか・・・

こ、困るよこの状況・・・

神戸の時と違い、さらに、薄い下着姿でレキは俺の背中につかまってるんだ・・・

その・・・やはり、女の子の体って柔らかいんだな・・・

「人工島の南端工事現場です」

はっとしてレキの言葉に俺は頷いた。

「さすが視力いいなレキ！」

ごまかすようにおれはいうのだった。

第85弾　覗きはもうやらねえ！

オートバイを狩り、無人の工事現場に突入する。
なるほど、土嚢が破られた形跡がある。
レキが背中から、胸の前にドラグノフを持ち直す。

「レキ、麻酔弾持ってるのか？」

「いいえ」

「・・・」

となると、射殺することになるか・・・
俺も麻酔弾をもってないしな・・・
猛獣駆除は武偵の仕事の中で俺は嫌いな部類に入る。

「通常弾で仕留めます。　追ってください」

神戸でもその戦闘力は見せつけられたがレキは任務を眉一つ動かさず着実にこなす。
ミンとの戦いにこそ敗れたが春蘭との狙撃戦では圧勝した。
レキがいなければ奏ちゃんを助けることはできなかったし、俺も死んでいただろう。
オートバイをローにしてそろりと、足跡を追跡していく。
殺気！
はっとして、ミラーを見ると狼が迫ってきている。
後ろには無防備のレキが・・・

とっさに、バイクを飛び降り、狼と相対する。
日本刀を逆に持つと薙ぎ払う。
狼の前足と日本刀が激突し、狼は奇襲で勝てないなら撤退するように訓練されているらしい、後退し、１０メートルはある学園島の工事の亀裂を飛んでいた。

「へっ、なめるなよ」

オートバイに飛び乗ると加速、クレバスにそのまま突入する。
当然、そのままでは超えられない。

「レキ！　つかまれ！」

工事のクレーンに向けてワイヤーを発射した俺はレキと共に空に舞い上がる。
オートバイがクレパスに落ちていったがすまん武藤・・・
落下しながらガバメントを抜くが駄目だ・・・すでに、射程外だ。
そんな時、少女の声が俺の耳に届いた。

「私は１発の銃弾」

ドラグノフの先端には建設中の新棟がある。
その工事用の階段を狼はたんたんとジャンプしながら駆け上がっていく。
レキの射程内だ。
この距離なら確実にレキなら殺る。

「銃弾は心をもたない。故に何も考えない。　ただ、目的に向かって飛ぶだけ」

あばよ狼

ダン

空中からの射撃で薬莢が宙をまい、銃弾は狼に命中せず、その背中をかすめただけだった。
外したのか？レキが？いや、そりゃ、人間なんだからミスぐらいするだろうが春蘭とうちあったあのレキがミスるとは・・・

「レキが外すなんて珍しいな。　狼だから躊躇したのか？」

狼がさらに一飛びして屋上に逃げてしまう。
あの先は海だから追い詰めたな。
レキは無表情のまま、ドラグノフを肩にかけなおした。
そして、抑揚のない声で歩きながら言った。

「外していませんよ」

レキと共に屋上に向かい、そっと扉の影から屋上の様子を伺う。
まず、飛び込んできたのはフェンスのない屋上、そして、あの銀狼が悠然と立ってこちらを睨んでいる。
止めをさそうと、ガバメントを持って近づこうとした瞬間、俺の防弾制服をレキが掴んだ。

「レキ？」

見るとレキはふるふると首を横に振り、狼の方を指さした。

「？」

見ると、狼がぷるぷると足を振りわせたかと思うとどぅと地面に崩れ落ちた。
見ればその背、首の付け根あたりに小さな傷がある。

「脊椎と胸椎の中間、その上部を銃弾でかすめて瞬間的に圧迫しました」

レキはそっと、狼に語りながら近づいていく。

「今、あなたは脊髄神経が麻痺し、首からしたが動かない。　ですが、5分もすればまた、元のように動けるようになるでしょう」

外したなんてとんでもない・・・
なんていう射撃だよ・・・
俺のウィークポイントである遠距離ができる子。
狙撃の距離でレキを敵に回せば絶対に勝つことはできないな・・・
ある意味、俺にとってはアリア以上に戦いたくない相手だ。

「逃げたければ、逃げなさい。　ただし、今度は2キロ四方、どこに逃げても私の矢があなたを射抜く」

噛んで含めるように、しかし、無表情でレキは言う。
狼は言葉を分かっているかのようにレキを見ている。
1分・・・2分・・・時は過ぎていく。

「主を変えなさい。　今から、私に」

その言葉に答えるように狼はよろよろち立ち上がるとレキのふくらはぎにすりすりと頬ずりを始めた。

全くこの子は・・・本当に凄い奴だよ

ガバメントを仕舞いながら

「で？　どうすんだレキそいつ」

「手当します。　怪我してますから」

「で？」

「飼います」

「えええええ！」

「そのつもりで追いましたから」

そ、そうだったのか

「だが、女子寮はペット禁止だぞ！　いくらなんでもそいつを隠して買うのは無理だろう」

「では、武偵犬ということにします」

武偵犬とは警察犬などの武偵版なんだが、普通はレピアやインケスタが飼うことが多い。

少なくてもスナイプ飼ってる奴なんて俺は見たことも聞いたこともない。

「狼だろ！　武偵狼だ！」

「似たようなものです」

ま、まあ似てるのか？

「お手」

といわれると狼は早くも手をレキの手に乗せた。

変り身はええ！

「まあ、そいつはレキに任せるんだが・・・」

「？」

「そろそろ服を着ようぜレキ」

そういいながら俺はそっと上着をレキに差し出した。

あのあと、レキと別れてから学校にもどるのもなんなので寮に直接帰ったんだが・・・

「ただい・・・ま？」

がちゃりと扉を開けた先には、窓を前に俺を背中にしたアリアさんの後ろ姿だった。
ま、まずい。
本能的に感じた恐怖に逃げようとしたが

「ゆーう。　次はあんたの番よ」

え？どういう意味？

「キンジは東京湾で泳いでるわ。　説明してもらおうかしら？　なんであんなところにいたの？」

「ま、待てアリア！誤解だ！　誤解なんだ！　あれは村上のせいで！」

「村上？　ああ、あの眼鏡の生徒ね。　女子全員で風穴地獄に送ったわ」

死んだな村上・・・いい奴ではなかったがまあ、自業自得だな。

「それとのぞきに何の関係があるのかしらゆーう」

逃げるんだ！
俺は全速力で部屋を飛び出そうとした。
だが。扉の前に立ちふさがるものがあった。

「ま、マリ！」

「どうしてですか？」

マリはツインテールの前髪で目が見えない。

「と、というと？」

「どうして、優先輩は私だけじゃなくて他の女の人に浮気するんですか！　覗きなんかしなくてもいつでも見せてあげます。　矯正が必要なんですねフフフ」

そういいながら、ＣＺ７８を取り出すと

「浮気ものは死んでください」

パンパンパン

「ぎゃあああ！」

「風穴ぁ！」

ドドドド

部屋に飛び込みながら左手でマリの銃弾をビリヤード撃ち、アリアのガバメントを銃弾切りで交わしながら死にものぐるいで窓に飛び乗る。

前は海だ。

２人は銃を俺に向ける。

合計３丁の銃が・・・

「ま、待てアリア、マリ！話せばわかる！　話せば！」

「問答・・・」

「無用です！」

ドドドドドドドドド

パンパンパンパンパンパン

「わあああああ！」

ベランダから俺は悲鳴をあげて落下した。
ワイヤーを発射したがアリアがワイヤーに銃弾を打ち込み軌道を強引に変える。

「！？」

落下防止用のネットでトランポリンのように跳ねると俺は暗い東京湾に落ちていった。

「ぶは！」

海面に出るとキンジがいたので

「なあキンジ・・・覗きはダメだよな」

「ああ・・・」

そういいながら俺たちは力尽きたように海に沈んでいった。

第　８６弾　ジャンヌ再び

アリアとマリに海にたたき落とされて生死の境目をさ迷った次の日、俺は執事とメイドの特訓をするというアリアとキンジと別れ、とある建物に来ていた。
女装で・・・
鏡を見てみると黒い背まであるロングの黒髪、武偵高の女子の制服・・・
理子が調達したものなんだが・・・
ほんのり化粧したのは理子である。
我ながらこうしてみるとちょっと背の高い女の子にしか見えないのが泣けてくる・・・
コンプレックスなのになこの顔・・・
ため息を付きながら校舎のドアを開けるとまず、飛び込んできたのは香水の臭いだ。
うお、なんて臭いだ。
ここは特殊操作研究課、通称Ｃ研ハニートラップの技術を磨く学科で絶世の美女しか入科できない。
そんな校舎になんでいるのかといえば・・・

「ユーユーはＣ研で女装のスキル磨いてきて」

と、理子の命令。
奏ちゃんの中学では相手が中学生だからなんとかなったが今回は大人が相手になる可能性もある。
そこで、この学科なんだが・・・

２０１号室と書かれたドアの前にくる
確か、理子に指定されたのはここか・・・

覚悟を決めてノックする。

「はーい、空いてるわよぉ」

「失礼します」

といって中に入ると俺は絶句した。
絶世の美女といえばそうなのだろう。
長い黒髪に目の下に泣きぼくろ、和服を着た女性がいたからだ。

「あ、あの古賀先輩ですか？」

絶世の美女は微笑むと

「ええ、3年C研古賀　美雪よ。峰からあんたを女性のしぐさを叩き込むように言われているからびしばし行くわよ」

帰らせてください・・・
本心からそう思いながら

「よろしくお願いします古賀先輩・・・」

と、諦めるように俺は言うのだった。

「むぅ・・・」

古賀先輩の講習を受けたあと、メイドとしての心得の本を読みながら俺は帰宅の道を歩く。
すごい先輩だった。
仕草から男を落とす、そのテクニックまで全て短時間で俺に叩き込んできた。
最後はその・・・男が喜ぶあれすら教えそうになってきたので慌てて退散してきた。
冗談じゃないそんな教授はいらねえよ。
本気で月詠や鏡夜、そして、咲夜にばれないようにしないとと思っていたとき
音楽室の中からピアノの音が聞こえてきた。
この曲なんだっけ・・・確か

「火刑台上のジャンヌ・ダルク・・・」

まさかな・・・
音楽室を見上げた瞬間、そいつと目があったので
俺は走り出した。
音楽室のドアをあけると

「ジャンヌ！」

そう、そこには白雪の誘拐の時、俺たちが戦ったあのジャンヌダルクがいたのだ。

彼女はびっくりした顔で俺を見ていた。

「久しぶりだなジャンヌ。　なんのつもりだ？　素顔を晒しているなんてよ」

ガバメントを抜きながら言う。

「誰だお前は？」

怪訝そうにジャンヌが言った。

「忘れたか？　てめえを1度戦闘不能に追い込んでやった椎名　優希だ」

ジャンヌの目がますます、見開かれた。

「答えろ！　てめえなんでここにいる！」

東京武偵高制服を着るジャンヌに言う。

「司法取引だ。　この学校に通うことが司法取引の条件にあったからな」

「同じ歳だったのか？　似合わねえ制服だな」

「お前に言われたくないぞ椎名」

「ああ？」

ジャンヌの前だと戦闘狂の口調が出てしまうな・・・

「その・・・似合ってはいるが私とお前は同じ格好だ」

「!?」

そ、そうだ・・・俺の今の格好は武偵高の女子せ・・・

「それで男のお前がなんでそんな格好をしているんだ椎名?」

「・・・はは・・・は」

ジャンヌの問いに俺はしばらく答えることができそうになかった。

第87弾　蘇る記憶

「なるほどな……」

ジャンヌは俺から一部の情報を伏せて話したのを聞いて納得したように言った。

「それで女装か？似合ってるぞ椎名」

ローズピンクの口が馬鹿にしたように笑みを作る。

「お前もな」

皮肉まじりに言ってやる。

「遠山にも言われたが私とて恥ずかしいんだぞ？」

「なら、互いに突っ込むのやめようぜ」

「そうだな」

互いの利害が一致したので制服のことは突っ込まない。

じゃあ次の質問だな

「ローズマリーのことを教えろ」

ストレートに聞くとジャンヌは少し目を開いてから

「豪快に聞くものだな。遠山でさえ遠回しにイ・ウーのことは探っていたぞ」

どうやら俺が来る前にキンジがいたらしいな……

だが、今は関係ない。

「教えろ。教えないなら力ずくでも答えてもらうぞ」

ざわりと体内で戦闘狂モードになりそうになる。

「ほう、いつぞやの決着ここでつけるのも悪くはない……がやめておこう。話してやってもいい」

その言葉でなりかけてた戦闘狂モードが収束する。

「だが、私と戦っていたら最悪、捕まるぞ椎名。司法取引をした相手を襲うのはただの暴行だ」

「ローズマリーの情報が手に入るなら安いもんだ」

ジャンヌは俺を探るように見てから

「椎名、お前のことは調べさせてもらった。なぜ、ローズマリーを追うのかもその情報を見れば分かる。だが、復讐は身を滅ぼすぞ？」

「そうかもな……」

ジャンヌはため息をついてから

「とはいえ私もローズマリーのことは詳しくは知らんのだ。彼女はイ・ウーに所属こそしていたがほとんど、世界中を飛び回って姿を

見せることがほとんどなかったからな」

「なんだよそれ。結局、何も知らないってことか？」

「いや、彼女はおそらく人間ではない」

「どういうことだ？」

「おそらくと言っただろう。私も全部知ってる訳ではない」

化物か……

「で？次の情報は？」

「それだけだ」

「は？」

「それだけだと言っている。実力は定かではないが私より強いのは確実だ」

「待てよ。アドシアートの時、おまえら共闘してたんじゃないのか？」

「いや、ローズマリーは縛られるのが嫌いらしくてな。気のむくままに事件を引っ掻き回しただけだ」

「それでよく俺達から逃げられたな」

「結果的にお前達は黒衣を着たローズマリーに疑いを向けざる得なくなり私への警戒心が分散された。自由とはいえ損はなかったさ」

ますます、わからねえ……ジャンヌの話を聞いていくらか分かったパズルのピースがある。

「おいしそうですわ。でも今は食べ頃じゃありませんの」

あのセリフの意味はやはりわからないな……

「ローズマリーの話はこれぐらいだ。ブラドについてならもう少し情報を与えてやれるぞ？」

「頼む」

とりあえずローズマリーの情報はこれだけということは次は激突する可能性が高いブラドが問題だ。

音楽室を使いたいという合唱部が来たので俺たちは場所を中華料理屋炎に移した。

もちろん、俺は着替えて着ているぞ。

「おお！お兄さん、今度はクール系銀髪美少女ですか！さすがに５

股は私も引きますよぉ」

「5股？」

ジャンヌが珍しそうに店内を見回しながら怪訝そうに聞いてくる。

「いつもいつも誤解招くようなことというなアリス！さっさと注文したもん持ってこいよ！」

「フフフぅ、了解です！」

くるくる回りながらアリスは行ってしまった。

大丈夫なのかこの店……

「で、聞きたいんだが理子のことだ。ブラドと理子過去に何があった？」

「理子は少女の頃監禁されて育ったのだ」

どこかジャンヌは哀れむように言った。

監禁……まじか？

「理子が未だに小柄なのはその頃、ろくなものを食べさせてもらえなかったからで……衣服に対して強いこだわりがあるのはボロ布しか纏うものがなかったからだ」

「なんで理子は監禁されたんだ？リュパン家といやアリアの祖先のホームズとやりあえるほどの名家だろ？」

「リュパン家は没落したのだ。使用人は散りじりになり、財宝は盗

まれた。最近、母親の形見の銃は理子は取り返したようだがな」

「……」

その後はなんとなく想像がつくな……理子はブラドに……

「お前の考えてるとおりだ椎名。まだ、幼かった理子は親戚を名乗るものに養子として引き取られルーマニアに渡った。そこで捕らわれ監禁されたのだ」

あの馬鹿理子にそんな過去が……

つらいなんてもんじゃない……変えたい過去を持つ俺でさえ味方はいたんだ……虎児や千鶴、月詠、咲夜、あの人もいた。

俺が笑っていた時も……理子は……

「……て」

「う……」

その時、脳裏に何かが浮かんだ。

何だこの違和感は……

「……も……けて師匠！」

ザザザとまるで砂嵐のような画面に浮かぶ記憶がフラッシュバックする。

こいつは……そして、その場面だけは妙に繊細に蘇る。

「あなた……だれ？」

死んだ魚のように絶望に染まったその瞳。
対面の鉄格子の中にいたボロ布を纏う少女

「僕？椎名優希。君は？」

「……子……」

かすれるように少女は力なく言った。

「峰・理子・リュパン４世」

そうだ……俺は過去に理子に会ってる。
世界中を師匠と回ってるときルーマニアの城で……

第８８弾　決意

俺は過去に理子に会っているという言葉にジャンヌが目を見開く。

「何？」

「フランスで俺は拉致されたことがあるんだ。多分、その時に俺は理子に会ってる」

「拉致だと？ブラドにか？」

「多分な……８歳から１０歳まで俺は世界中を師匠と巡ってたんだ」

「だが、椎名。理子を見た時、なぜ思い出さなかった？」

「記憶がな……あの２年間の記憶がほとんどないんだ俺には」

思い出せたのも理子が関わる前後だけだ。
その後も、それ以前も記憶にもやがかかっている。
日本に帰ってしばらくしてローズマリーの件が起こったのは覚えてはいるんだがな。

「そして、俺は多分、ブラドと戦ってる」

「８～１０歳の子供がか？無謀だ」

ジャンヌが驚いたように言う。
記憶の中の俺は黒い圧倒的な存在に剣で戦ったが負けた。

勝てるわけのない戦いだったんだろう。
だが、ブラドに突きつけた条件だけは覚えている。
僕が勝ったら理子ちゃんと僕を解放しろだ……
だけど……
駄目だまだ、この記憶にももやがかかってるどうやって助かった……

「なら、話は早い。遠山にも教えたが椎名にも教えておこうあいつは危険すぎるからな」

まあ、記憶の中で俺はブラドに手も足もでなかったからな……今の半分も力がないガキだったから……

「ここらの話は非常時のみアリアと共有しろ。いいな?まず先日ここに現れたというコーサカス白銀オオカミのことだ。あの狼はインフォルマで調査中だが私の見立てではブラドのしもべとしてまず間違いない」

「こっちの動きがばれてるのか?」

「そこまでは私も確証がない。狼はスナイプの少女に奪われて帰れなかったし。奴の僕は世界各地にいてそれぞれかなり直感便りに行動するみたいだからな」

「詳しいなジャンヌ」

「我が一族とブラドは仇敵なのだ3代前の双子のジャンヌダルクが初代リュパンと組んで引き分けている」

「ブラド本人ってことか?吸血鬼なら」

「そうだ奴は人間ではないからな」

俺はコップの水を飲みながら続きを促す

「それで？」

「うむ、ブラドは理子を拘束することに異常に執着していてな檻から自力で逃亡した理子を追ってイ・ウーに現れたのだ。理子はブラドと決闘したが敗北した。ブラドは理子を檻に戻すつもりだったんだが成長著しかった理子にとある約束をした。それは、理子が初代リュパンを超える存在にまで成長し、その成長を証明できればもう手出ししないと」

そうか……理子があれほどアリアに執着した理由、チームを組ませて戦った理由もようやく分かった。

理子……お前は俺が城を逃げても、忘れてしまっても自由になりたくて戦ってたんだな……

なら、俺がやるべきことは決まった。

「椎名、ブラドの姿は覚えてるか？」

「いや、なんか大きい相手としか……」

「なら、私が絵に書いてやろう」

そういいながら眼鏡をかけたので

「目が悪いのか？」

「ほんの少し乱視なだけだ普段は眼鏡はかけない」

ノートとサインペンを使い何か書いていく

「いいか？ブラドが留守にしてる屋敷に潜入するのはいいが、もし万が一ブラドが帰ってきたなら即刻作戦を中断して逃げろ。絶対に勝てない」

理子から潜入は聞いたのか……でもジャンヌ俺は決めたんだ

「それはできないジャンヌ」

「何？」

「ブラドが現れたなら逮捕する」

「聞いていなかったか椎名？絶対に勝てない。もし戦いになっても逃げるための戦いをしろ。双子のジャンヌダルク達は銀の弾丸でブラドを撃ちデュランダルで貫いても死ななかったとある。奴は死なないのだ」

「不死身ってわけか……だがイ・ウーのリーダーはブラドを倒したんだろ？ブラドがリーダーになってないならな」

「私も直接見たわけではないがブラドが敗れたのは理子との決闘のあとにイ・ウーのリーダーと戦った時だけだ。ブラドを倒すには全身にある４箇所の弱点を同時に破壊しなくてはならないらしい」

そういいながらサインペンを動かすジャンヌ。
な、なんだそれ……

「弱点のうち、3箇所は判明してる。ここととここととここだ……奴は昔バチカンから送り込まれたパラディンに秘術をかけられて一生消えない目の文様をつけられてしまったのだ。よし、たいぶかけたぞ」

「ら、落書きか？」

「ら、落書きだと椎名、遠山と同様に失礼だぞ！」

だってな……

「ブラドはこういうやつなんだ。お前は私を疑うのか？」

「いやまあ……」

なんとなくはわかるけど……記憶にあるブラドってこんなお化けみたいなやつだっけ？

「これはちゃんと似ている椎名もとっておけ」

まあ、もらっとくか……相手は絶対に倒せないやつじゃない。ならやり方だってあるはずだ。
今回はアリアの護衛だけじゃねえ。

ブラド、お前が俺の前に出てくるなら倒す。
理子を救うためにな……

「ああ、それとなジャンヌ」

「ん？」

「俺が昔、理子に会った話は誰にもしないでくれ」

「なぜだ？」

「理子も多分、覚えてないんだろうからな……余計なことは知られたくないからな」

過去の記憶にはもやがかかってるが俺は逃げて、理子は城に残された……要は、俺は理子を見捨てたんだ。
だから、こそ今回は理子を見捨てない。
「分かった」

ジャンヌが言った時

「おまたせしましたぁ」

アリスが料理を運んできた。
俺はチャーハンに餃子。ジャンヌは……
な、なにぃ！

「ももまんフルスペシャルです」

と、ジャンヌの前に置かれた化物
ジャンヌも絶句してる。
ば、馬鹿な

「じ、ジャンヌお前……」

「い、いや写真で神崎が制覇したというのが見えたのでな……まさかこんな……」

そう、この店には地獄ラーメン制覇とももまんフルスペシャルを制覇したレキとアリアの写真が飾られている。

それを見て頼んだのか……

ああ……神様

その後、食べきれる訳もないももまんフルスペシャルをジャンヌは必死に食べたが力尽きて凍らせてお持ち帰りしましたとさ。

第89弾　美人2人

6月6日、いよいよ潜入開始の日が来た。
これから俺、アリア、キンジは2週間横浜の紅鳴館に潜入する。
学校には理子に言われた通り、民間の委託業務を通じたチームワーク訓練と書類をマスターズに通したらあっさりと通ってしまった。
この泥棒大作戦は理子が外部からサポートする役目である。

どんよりとした気分で待ち合わせ場所のモノレール駅に俺は向かった。
前日まで古賀先輩に女らしさを悲鳴をあげるまで叩き込まれていたのだ。
男を喜ばす技術とやらは断固拒否したが……
お、アリア達だ。

「おはようございます。アリア、キンジさん」

「「!?」」

何やら言い争っていたアリアとキンジは振り替えるとびっくりしたように俺を見ると

「ゆ、優よね。あんた？」

確かるようにアリアが言う。

「ええ、アリア。私は今回は月島　優と名乗りますから間違えないでくださいねアリア。キンジさん」

「き、キンジさん？」

キンジが引いてるよ……

そう、俺は武偵高の女子制服に黒髪ロングのかつらに青いリボンで少しだけ後ろをまとめてる。

古賀先輩にも言われたがプロでも一目見ただけでは男だと見破れないんだそうだ。

この先の人生で潜入捜査に使えるかもしれんがこれは……

「キー君、ユーユー、アリア、ちょりーっす！」

理子の声に振り向く。

おお、えらいかわいい子に化けてきたな理子

「おお！おお！ユーユー似合うよぉ。」

「ええ……ありが……ってやってられるか！」

とうとう我慢の限界に来た俺は本心のままにぶちまける。

「あ、やっぱり優ね」

アリアが言う。

小型のボイスレコンジャーのせいで声は女声だが気にせずに

「ああ、ユーユー駄目だよ。今日からしばらくメイドさんなんだから女の子らしくしないと。しないとぷんぷんガオーだぞ」

と指を頭に二本立てて理子が言う。

「屋敷についたらでいいだろ！」

「仕方ないなぁユーユーは」

変装した理子を見ながら思う。

やはり、今までの言動からして理子も覚えてないらしいな……

無理もないかもしれんが……

「り、理子……なんで、その顔なんだよ」

ん？

「キンジ、知り合いの顔なのか？」

「あ、ああ」

俺の問いにキンジはあいまいに答える。

「くふっ。理子ブラドに顔割れちゃってるからさぁ。防犯カメラに映って、ブラドが帰ってきちゃったらやばいでしょ？だから変装し

たの」

そうなら願ったり叶ったりなんだがな……俺はブラドを逮捕する。
アリアのため、理子を助けるために……
今回、ブラドが出てこないなら別の機会に逮捕する。

「だったら他の顔になれ！なんでよりによってカナなんだ」
キンジの動揺ぶり見るに相当な人物らしいな……ま、まさか元恋人とかか？

「カナちゃんが理子の知ってる世界一の美人だから。それにカナちゃんはキー君の大切な人だめんね。　理子、キー君の好きな人の顔で応援しようと思ったの。怒った？」

「いちいちガキの悪戯に腹を立てるほどガキじゃない。行くぞ」

「心の奥では喜んでるくせにぃ」

黙ってキンジが改札に歩いていく

「な、何。急にどうしたのよキンジ、理子誰なのよそれ！」

「まあまあ、アリア。キンジも男なんだから過去に恋人ぐらいいてもおかしくないだろ」

「こ、恋！」

アリアがぼんと赤くなったのを笑いながら

「ま、冗談は置いといて友達だろ多分」

俺も女の子の知り合いはいるからな。

手に持った旅行用のカバンを見る。

ヴィトンのそれは古賀先輩に言われ買ったものだがこの中には今回の準備の道具がたくさん入っている。

無論、切札も用意してきたさ。

キンジと友達の会話をしながらトンガリコーンを食べる理子を見て顔をあげるとタクシーの窓から今回のクエストの場所、紅鳴館が見えてくる。

不気味だな……本当に化物でも出てきそうだ……

まあ、今回は最悪、化物退治になるからな……

さて、どうなることやら……

理子がインターホンを押すのを見ながら俺は思うのだった。

第９０弾　泥棒大作戦スタート！

「初めまして、正午から面会の予定をいただいているものです。本日よりこちらで家事の手伝いをさせていただくハウスキーパー３名を連れてきました」

おいおい、理子顔ひきってるぞ……というかいきなり失敗じゃないのかこれ……なにせ、この屋敷の管理人……

「い、いやぁ。意外なことになりましたねぇー……あはは……」

そう、彼は武偵高の非常勤講師の小夜鳴先生だったのだ。
館のホールに入ると、狼と槍……いや、串？　の紋章の旗が壁に貼られてある。
おいおい、アリア大丈夫か？びびりすがだろ……

「いやぁ、武偵高の生徒さんがバイトですかぁ。まぁ、正直な話難しい仕事でもないので誰でもいいと言えばいいんですがあはは、ちょっと気恥ずかしいですね」

前に、銀狼にやられた腕にギプスをつけている小夜鳴先生。
理子とアリアがソファーに座るとにこにこしながら俺に

「さあ、あなたもどうぞ」

ああ、そうかレディーファーストか……この様子じゃ俺の正体もばれてないな。

「ありがとうございます」

とぼろを出さないようにアリアの横に座る。
どかりとではなくゆっくりと
小夜鳴とキンジが座る。

「小夜鳴先生、こんな大きな屋敷に住んでるんですね。びっくりしました」

「いやぁ、私の家じゃないんですけどね。私はここの研究施設を借りることが時々、ありましていつのまにか管理人のような立場になってしまっていたんです。ただ、私は研究に没頭してしまう癖がありますからね。その間に不審者に入られたりしたら、後でトラブルになっちゃいますから……むしろ、ハウスキーパーさんが武偵なのは良いことかもしれませんね」

「私も驚いております。まさか偶然、学校の先生と生徒だったなんて」

さすがの理子も想定外か……

「ご主人様がお戻りになられたら、ちょっとした話の種になりますね。まあ、この2人の契約期間中にお戻りになられればの……話ですが」

理子がブラドが帰ってくるか確認してるな。
さて……

「いや、彼は今とても遠くにおりまして。しばらく、帰ってこないみたいなんです」

そうか……帰ってこないのか……
安心したようなキンジを横目に俺は逆に残念に思う。
ここで逮捕すりゃ手間も省けるんだがな。
ジャンヌに脅されてもまだ、俺は戦う気だからな。

「ご主人は……お忙しい方なのですか？」

カナの顔で理子が訊ねる。

「それが実は、お恥ずかしながら詳しくは知らないんです。私と彼はとても親密なのですが直接話したことが無いものでして」

親密なのに話したことがない？
それは親密と言えるのか？

「ところで月島さんでしたか？」

「はい」

小夜鳴にいきなり声をかけられても慌てずに穏やかな笑みを浮かべて言った。
古賀先輩いわく、大和撫子が大人の男性　の心をくすぶるらしい。
もちろん、個人差はあるが……

「あなたも武偵高の生徒さんですか？私の授業では見た記憶がないんですが……」

「実家の都合で人材派遣会社で働かせて頂いています。私は武偵じゃありませんので警備ではお役にたてませんが家事では精一杯奉公させて頂きたいと思っています」

「今は絶滅した大和撫子のような方ですね月島さん。こちらもよろしくお願いしますよ」

と好印象なんだが……はやく、終われこの生活と心の中で俺は思うのだった。

第９１弾　闇の中の目線

別動隊の理子がさり、俺達は2階に自分達を部屋をあてがわれた。

「すみませんねぇ。この館の伝統といいますかルールで、ハウスキーパーさんは男女共に制服を着ることになってるんです。むかし、仕立てられた制服がそれぞれの部屋にあってサイズもいろいろありますから、選んで着てくださいね。仕事については前のハウスキーパーさんたちが簡単な資料を台所に置いておきましたから……それを読んで適当にやっちゃってください」

あは、と好感度の高い笑顔で小鳴が言った。

「で、申し訳ないのですが私は研究で多忙でして……地下の研究室にこもり気味の生活をしてるんです。ですから、みなさんと遊んだりする時間はあまり取れないんです。ほんと、すみませんねぇ」

別にそこまで謝らなくてもな……自分の家なんだから

「ヒマな時はそうですねぇー……あ、そこの遊戯室にビリヤード台があるんですよ。それで遊んでていいですよ。誰も使ってないからラシャもほとんど新品なんです。それじゃあ早速ですが、失礼します。夕食の時間になったら教えてくださいね」

そう言いながら彼は地下の研究室にとじ込もってしまった。

「そんじゃま、働くか」

「そ、そうね」

「はい、行きましょう」

念のため女の言葉月島優になりきって俺たちはそれぞれの自室に入る。

クローゼットを開くと執事服とメイド服が並んでる。

とりあえず、いっぱいある中から古めかしいデザインの露出が少ないメイド服を取り出す。

胸が強調されたの着たらばれるからな。

胸はCカップだがこいつは、C研の秘密兵器、シリコンで出来た胸だ。

さわり心地も本物に似てるらしいが試す気にはならんな。

素早く着替えて外に出るがキンジもアリアもまだか……

「アリア、着替えましたか？」

コンコンとノックしてからドアを開いた瞬間、くるくる回っていたアリアと目が合う。

赤面モードを発動させて

「か、かわいいな」

女性モードがとけて俺は言う。

いや、アリアお前、それは反則的だろう……

まず、レースとフリルを重ねたカチューシャは、手前がフリルで奥がレース。二段構造になった豪華なもの。

黒いワンピースの胸元は俺のと違いざっくり開かれており、そこには何段重ねにもなった純白のフリルが露出している。あれはブラウスの代わりにフリルだけでできたチューブトップを着ているんだろ

うな。
さらに、エプロン。アリアの細い腰からミニスカートの前面上部までは白いカクテルエプロンで短く覆われている。対照的にバックの帯は長く、オシリの上で大きく蝶々結びされている。いいコントラストだ。
短いスカートをもって中からふわっと広げる4段、いや5段階層の白いペチコート。幾重にも重なった布のひだひだをカーネーションのヨウニ咲かせている。
ストレートでありながらおぼろげに女の子っぽい曲線を感じさせるアリアの脚の付け根を演出するのは、ドロワーズ先のペチコートとの合わせ技により、スカート内の布量は完全にメーターを振り切り爆発寸前だ。
素材は質の高いベルベット、シルク、そして明らかに職人作りの精緻なレース布で作られていた。
長らく語ったがアリアの容姿と合わせて殺人的にかわいいのだ。
だが、その顔は真っ赤でずんずんと怒りの表情で向かってくる。

「ま、待ってアリア。これは素直に……あぅ」「あ、いや、呼んでも反応が無かったかおうっ」

いつの間にか来ていたキンジと俺を飛び蹴りで沈める。
床に倒れた俺たちはをアリアは手を腰に当てて

「で?ご用件は何ですかご主人さま?」

な、なんで怒るんだ?かわいいって言っただけなのに……なぜだ……
怒りが頂点に達したのか震える声は冷静だ。

「お、おちついてアリア!話し合いましょう」

「そ、そうだアリア！優の言う通りだ！」

俺とキンジは必死に命乞いをするがアリアはにこりと微笑んで

「次、のぞいたら―脳天風穴地獄！」

ダンとアリアは飛び上がるとひじを俺とキンジの腹に叩き落とした。

ぐふ……また……気絶かよ……

意識を失い３０分後に思ったのは迂闊に女の子にかわいいというのはまずいのかもしれないという教訓だった。

さて、時刻は夜２２時だ。

散々な１日だったが仕事は大体覚えた。

というか３人も実際はいらないのでいろいろと地下室以外を見回らせてもらった。

俺の得意技は戦闘狂モードの空間認識能力。

昔、師匠にも言われたがこいつだけは一流の上をいく才能が俺にはあるんだそうだ。

まあ、それは置いといて、バラの垣の庭を歩きながら屋敷を見回す。

本当に化物でも出てきそうだな……

遠くから犬の遠吠えが聞こえてきた。

そろそろ戻るか……

屋敷に足を向けたその時

「……」

俺は振り返った。
何か得体の知れない視線を感じた気がしたのだ。
スカートの中のガバメントに意識を向けながら視線を感じた方を見る。

「誰かいるんですか？」
返事はない。
気のせいか？
警戒しつつも屋敷の自分の部屋に向かう。
部屋が見えた時、丁度アリアの部屋が開いた。

「あ、優でかけてたの？」

もうすぐ寝るためかメイド服を脱ぎ、ネグリジェ姿のアリアだった。

「ええ、探検してたの」

にこりと女性スマイルを浮かべる。
アリアはため息をつきながら

「本当にあんたそうしてると女の子にしか見えないわね」

「アリア」

俺はにこりと微笑む
「な、何よ」

俺の発する怒気にアリアは引く

「私、顔のこと言われるの嫌いなの。二度と言わないでね」

「わ、わかったわよ。そ、それよりそのむ、む……胸なんだけどどうなってるの？」

「これ？」

なんかたまらなくなってきたので

「アリア、部屋に入りましょう」

中で説明しよう男言葉に戻してな

「し、深夜の部屋におと……あ、あんたを入れられるわけないでしょ！」

なぜか顔を赤くしたアリアが言う。

「じゃあ、私の部屋にくる？」

「お、同じことよ！、あたしはもう寝るわ」

そういいながらアリアは自室に戻ってしまう。

なんなんだ？

まあ、もう精神的に限界だ。

部屋に戻った俺はベッドに横になると目を閉じるのだった。

ああ、眠い

第９２弾　クッキー爆砕

それから数日、以外に執事の才能があったらしいキンジやアリア達と小鳴先生に新聞を届けたり、電話番したり門番したりしながら屋敷のことを調べていった。
どちらかと言えばインケスタやレザドの得意分野なんだろうがキンジがインケスタで助かったな。

そうして、７日目の２１時３０分
コンコンというノックの音に、俺はベッドから体を起こしてから

「はい？アリア、キンジ？」

「……」

しかし、部屋の外の気配は返事をしない。
机の上においてあるデザートイーグルを掴むとドアに慎重に近づくと一気にドアを開け放った。

「？」

誰もいない。

廊下を見渡すが誰も……いや……

「まさかな……」

一瞬、見えた銀髪が廊下を曲がるのを捉えていた俺はそちらに向かい走り出した。
あいつがこんなとこにいるわけがねぇ
そう思いながら走るが銀髪の人物はおちょくるように俺が直線で目視できる場所にくるたびに廊下の角を曲がる。
なびかせる銀髪だけを残して……
ローズマリーか？
確証はある。
廊下に漂うこの匂いはローズマリーという花から作られていた特殊な香水だ。

そういや、マリも最近通販で買って使ってるんですよとか言ってたな。
確か、ローズマリーの花は愛を象徴するとか言ってた気がする。

「！？」

はっとして、足を止める。
目の前でぱたんと閉じた木の扉。
逃げ込んだならここしかない。
この通路の扉はあそこだけだからな。

アリア達を呼ぶか一瞬迷うが、悠長に待つことが俺にはできなかった。
ジャンヌの進言に従いデザートイーグルに銀弾を込めてからドアをゆっくり開き中の様子を伺う。

ローズマリーは……いた。
いつもの黒いゴシックロリータの黒いドレスを着て窓ガラスに頭ををつけて座っている。
見た目だけならお人形を思わせるその容姿はアリアやレキ、理子といったいわゆる美人とはまた、違う美しさを兼ねていた。

「動くなローズマリー！」

デザートイーグルを向けながら俺は言った。
ローズマリーは憂鬱そうな顔を窓から離して俺を見るとにこりと微笑む

「こんばんわですの優希」

「ふん、のこのこ出てきやがって。そういや、お前、イ・ウーの関係者だったな。ブラドならいないぜ」

「彼に用はありませんの優希」

「何？」

「クッキーを作ってきましたの優希食べて下さるかしら？」

そういうとローズマリーはバスケットを取り出し床に置いた。

ドオオオン

運がいいのか悪いのか雷が鳴ると同時にバスケットがデザートイーグルの弾丸で貫かれた。
中にあったクッキーが飛び散る。

「ひどいですわ優希」

ローズマリー人差し指を唇に当てる。
たったそれだけなのに妖艶な姿に見える。
だが、俺の心は痛まない。

「ふざけるなよお前、毎回毎回」

まるでもてあそぶように現れるローズマリー。
あるときは助け、ある時は敵になる。
今回だってどちらか分からない。

「頭に両手を乗せてうつ伏せになれ！」

「優希はそんな体制が好みですの？」

にこりとローズマリーは微笑む。
すでに、俺の体は汗びっしょりだった。
底知れない化物。
それがこの女だ。
準備は万端ではない。
やり合って勝てるのか？

そう考えていた時、ローズマリーの姿が消えていた。
陽炎のように部屋が揺れている。
しまったこいつは炎か幻覚

「優希」

「うっ！」

優しい聖母のような声は後ろから

ふわりと俺の背中からローズマリーは両腕を首に巻き付けてきた。
締め付けるのではなく優しく母が子供を抱きしめるように
部屋にある鏡越しに俺たちは目が合う。

赤い瞳のローズマリーはクスクス笑いながら

「捕まえましたわ」
なんて失態だ。
ローズマリー相手にろくに準備もせずアリア達に援軍要請しなかった俺の致命的なミス。
殺される。
この女がその気になれば俺を焼死させるなど赤子の手を捻るより容易いだろう。

「……」

打開策を探る中でローズマリーは微笑みながら

「優希ブラドと戦うんですの？」

ここは会話で時間を稼ぐしか……

「だったらなんだ？」

「そうですの？では、言いこと教えてあげますの」

「くっ！」

ぞくりと背筋が凍るような感触。
ローズマリーが俺の首筋をなめたのだ。
ドオオオオン

再び雷がなった瞬間俺は渾身の力でローズマリーを背負い投げる。
だが、ローズマリーはふわりと地面に着地するとまるで俺の首の味を楽しむように人差し指で自分の舌を舐めてから。

「優希、死なないでくださいましね。私の騎士様」

窓が開け放たれて雨が振り込んでくる。

「ま、待ちやがれ！」

雷と同時にデザートイーグルをフルオートで撃つがローズマリーは蒼い炎に包まれながら窓から落ちていった。
窓に駆け寄って辺りを見るがローズマリーの姿はなかった。
逃げたか……
多分、追っても無駄なので窓を閉めて廊下に出た時、着信があった。

「ん？アリアか？」
ディスプレイに表情されたアリアの文字を見ながら通話ボタンを押す

「はい」

なるべく平静を装って俺は電話に出た。
「ゆ、優あんたもきなさい！アプリで遊ぶわよ！遊戯室であたしもキンジも待ってるわ」

アプリで遊ぶは以前に決めた暗号で理子との連絡を意味する。
だがあれ深夜2時からだぞ

「まだ、早いだろ」
シャワー浴びたいしな
ドオオオオン

再び雷が落ちた音。
近いな

「ひゃああ！」

ああ、そういや……アリア

「い、いいからすぐ来ること！あたしが来いといったらすぐ来るっ！こなきゃ風穴」

「了解。今から行くよ」

苦笑しながら切れた電話を見ながらローズマリーに舐められた首筋を撫でるとネトリと粘膜が感じられた。

いいこと教えてあげますの。
これだけでは分からない。
あいつは何が言いたかったんだ？
アリアの電話で気持は晴れたがその疑問だけは考えなければならないだろうな……
そんなことを考えながら俺は遊戯室を目指すのだった。

第９３弾　レオポン姉弟現れる

「何……してんだ？」

遊戯室に入るなり俺は言った。

なぜなら、アリアとキンジが抱き合うように倒れていたからだ。

「こ、こここれはちが……ちがうんだか……」

ガガアアアン

うお、雷近いな。

「くぅ～」

小動物のように震えながらキンジに抱きつくアリアを見て納得した。

ああ、アリア雷怖いもんな。

スカートの裾をぎゅぅーと掴んで恐怖に震えるアリアは、それでも貴族のプライドは捨てていない。

頼ってるんじゃないって感じに涙目を下向きに逸らしているのだ。

キンジがごまかすように横を向いた。

ああ、確かに今のアリアはやばいよな……ぶるぶる震える小動物のようなアリアは殺人的にが虐殺的なぐらいかわいいのだ。

「ほ、ほら、怖くないって。大丈夫だ。俺が、この部屋にいてやるから」

キンジが言いながらアリアを離すがアリアは相変わらず怯えきった

ままでびくびくしてる。
仕方ねえ助け船を出すか

「キンジ、こ……っと」

不味い不味いローズマリーのせいで女性モードが切れていたな。
よし、集中してと

「キンジさん。これを」

言いながら携帯のレオポンをキンジに見せる。
キンジは納得したらしく

「アリア、雷なんか怖くない取って置きの助っ人を呼ぶわ」
柔らかに微笑んでアリアを安心させるように言う。

「す、助っ人？」

「そうだ。いまこの館にいる」

「こ、ここにはあたし達しかいないじゃないっ。先生は地下室に籠ってるし」

まあ、ローズマリーもいたんだがこの際あいつは無視しよう。
俺たちははビリヤード台を挟んで反対側に回ると屈んで台に身を隠すと俺たちはは携帯のレオポンをビリヤード台伸ばして上に押し出す

「おっすアリア奥入瀬レオポン君」

「私はレオポンちゃん」

互いにレオポンの前足を挨拶するように掲げて見せる。

「地上最強の猛獣だぞ。おぉーアリア、お前、何か、怯えた顔してんなぁ」

「どうかしたのアリアちゃん？」

俺のレオポンは女性みたいに心配そうに前足をを合わせて見せる。

こっそりアリアを見るとアリアはレオポン達にこくこくと頷いていた。

「何か怖いのか話そうアリアちゃん。私達姉弟が話を聞くわ」

言ってみてから姉弟なの！と自分で突っ込む。

「……か、カミナリ」

アリアよ……やっていてなんだがいいのか……

「はっ、心配すんな！そんなモン、おいら達レオポンスキル双頭の吠え声術で追っ払ってやるぜうおー！」

「がおー！レオポンちゃんだぁ！」

俺たちは前足を持ち上げ熊が威嚇する時と同じようなポーズをとらせる。

「お、追い払ってくれてるの？」

「ああ、おいら達の吠え声は邪悪なカミナリ雲を遠ざけるんだ！うぉー」

「ガオーアリアちゃんから離れろカミナリ雲ぉ！」

やばい、やってて少しだけ恥ずかしくなってきた……

まあ、これはでたらめでもない。

いや、レオポンにそんな力はないが雷は近づいたら必ず遠ざかっていくのだ。

現に再び雷が鳴るが距離はかなり遠い

「……た、確かに遠ざかってるわ！すごい！」

アリアはレオポン姉弟の力を信じたらしくビリヤード台を回ってきた。

俺とキンジもレオポンを走るように動かしてアリアを迎え、レオポンはアリアにむしりとられ、ぎゅうううう。

「ありがとう！ありがとうレオポン姉弟」

つり気味の目を細めて思いっきりレオポン君を両手で抱いて頬擦りした。

ついでに俺たちをふんわりスカートのオシリで押し退けて、レオポン3人の世界に没収する。

ま、雷が怖いのをレオポンに依存して恐怖をまぎらわそうとしてんだな。

隣でキンジが不満そうにしてるのでフフフと笑いながら

「キンジさん。私たちはレオポン姉弟以下の存在なのね」

「そうだな……」

ま、かわいいアリアが見れたからいいとしときますか……

さてと、次は理子との定時連絡だがまだ、時間あるな。

そう思いながら窓の外を見る。

当然、ローズマリーの姿はなく闇が世界を覆っている。

「……」

嫌な夜だなと俺は思いながら窓から離れた。

第９４弾　ヒーロー

時刻は深夜２時。理子との定時連絡の時間がきた。
まあ、使う通信機器は携帯である。
今回はドロボーが任務なのでコネクトの支援は無理だからな。
複数の人数が話せるサービスを利用して通話を開始する。

「みんな聞こえるか？」

「聞こえてる」

と、キンジ

「聞こえてるわ。理子、あたしの声はどう？」

「うっうー！トリプルおっけー！それじゃアリアから中間報告ヨロ！」

テンション高いな理子……夜型なんだな。

「理子。あんたの十字架はやはり地下の金庫にあるみたいよ。一度、小夜鳴先生が金庫に出入りするのを見たけど……青くてピアスみたいに小さな十字架よね？棚の上にあったわ」

「そう、それだよアリア」

「だが、地下にはいつも小夜鳴がいるから侵入しにくいぞ。どうする」

「だからこそのチームなんだよ、アリアとキーくんは。超・古典的な方法だけど「誘きだし」を使おう。先生と仲良くなれた二人が先生を地下から連れ出して、その隙に一人が十字架をゲットするの。具体的なステップは……」

と理子の説明が終わる。

「分かったユーユー？」

なぜ、俺が名指しされるかわからんが……

「ああ」

毛布を頭に被り小声で返す。

「あ、アリアそれと後一つ確認なんだけどね」

「何よ？」

少しだけ理子の言葉が沈む

「十字架と一瞬に何か横に置かれてなかった？」

「何かって……銃弾が一発ケースに入れられて置かれてたわ」

「口径は分かる？」

「４５ＡＣＰ弾よ。あたしも使ってるから多分、間違いないわ」

「おい、何の話してるんだ？」

キンジが会話に割り込む

「その銃弾に何かあるのか？それも理子のなのか？」

だとしたらおかしな話だ。

理子のワルサーと違うそな銃弾。

武偵弾か何かか？

「理子の宝物だよ。でも、十字架を優先して回収して」

会話が終わり電話を俺は切るときれたばかりの携帯を見ながら思った。

その銃弾何かあるな……

取り戻す必要があるな……

そのためにはこの泥棒作戦をなんとしても成功させないとな……

そう思いながら俺は目を閉じた。

夢を見た。

あのルーマニアの城の夢だ。

牢獄の鉄格子越しに少年は少女に話しかけてブラドを倒すと少年は宣言した。

少女は虚ろな目で少年を見て無理だよと言った。

「無理じゃない！僕は椎名の天才なんだ！理子ちゃんは必ず僕が助ける！師匠と合流できたらどんな相手にだって勝てるよ！」

ああ、これは俺の記憶だ……どうしようもないぐらい世間知らずのガキだった俺の……正義の味方は絶対に負けないと信じていたあの頃の……

「本当？」

少女……幼いぼろ布を纏う理子が言った。

「本当に助けてくれるの？私この城から逃げられるのブラドから解放してくれるの」

「うん、だって僕はヒーローだから！」

「ヒーロー？」

理子が何を言ってるか分からないというように首をかしげる。

「ヒーロー知らない？ヒーローはね。女の子を決して見捨てないんだ。だから、僕は世界一のヒーローになるんだ」

「じゃあ……は……の……ね」

理子が何かを言った。

瞬間、俺は目が覚めた。
体を起こして辺りを見回す。

「最低だな……俺……」

あの夢は記憶だ。
だが、今まで忘れていた記憶……
あんなことを言って俺は理子を見捨てたのか……
もし、今回ブラドを逮捕できなくてもいずれ、必ず逮捕してやる。
ローズマリー共々な。
決心を固めると俺は洗面所に向かった。

潜入１０日目の夜、窓から雲間に満月が見えてる。
広い食堂で俺達は小夜鳴に夕食を出していた。
潜入捜査ってのは怪しまれないようにするのが基本だからな。

「山形牛の炭火串焼き、今日は柚子胡椒添えです

俺が作った料理をキンジが出している。最初はアリアに任せようとしたんだがアリアは理子との特訓でオムライスだけは作れるようになったが別のメニューはキッチンで爆発が起こったりとんでもない味のメニューが出たりと命が危ないので俺が担当することにしたの

だ。
ちなみに、料理は古賀先輩に叩き込まれたのもあるが元々、ある程度は作れるので腕前はアリア以上ではあるのだ。ま、とはいえ古賀先輩に叩き込まれた料理もあまり意味を為さなかった。
なぜなら、小夜鳴は簡単な料理しか注文してこなかったのだ。
串焼き肉。
毎晩それでニンニクを使うなとか注意はあったが実に簡単な料理なのだ。
栄養は片寄るがまあ、正直この先生のことだしどうでもいいな。
料理を出したら食堂の片隅で立って指示を出すだけだ。
楽なバイトだな。
小夜鳴が選んでいた古い洋レコードが夜想曲を奏でている。

「フィーブッコロス」

ん？
月光に照らされ出された庭のバラ垣を見て気分良さそうに呟いた小夜鳴にアリアが何か外国語で話しかける。

「驚きましたね。語学が得意なんですか神崎さんは」
「昔、ヨーロッパで武偵をやってましたから必要だったんです。先生こそどうして……ルーマニアをご存知なんですか？」

「この館の主人が、ルーマニアのご出身なんですよ。私たちは、ルーマニア語でやりとりするんです」

といった小夜鳴は初めてアリアに興味を持ったように

「神崎さんは何ヵ国語できるんですか？」

「えっと。17か国語喋れます」

「フィーブッコロス！素晴らしい。もしかして、月島さんも数ヵ国語がしゃべれたりしますか？」

どうやら、女装してる俺は知的に見えるらしく小夜鳴が聞いてくる。

「私はアリアと違って頭が悪いので7ヶ国語しか喋れません。ルーマニア語も……申し訳ありません」

「いやいや、謝らないでください！　最近の女性は優秀な方が多い。遠山君はどうですか？」

「日本語だけです……」

劣等感を感じたのかキンジが小さく言った。

ま、アリアはともかく俺は我流で覚えたからな。

というか覚えないと死にかねない状況もあったから……

感謝はしてるけどな。

「しかし、神崎さんはぴったりですね」

「？」

「あの庭のバラは私が品種改良したもので17種類のバラの長所を集めた優良種なんです。まだ、名前だけが無かったんですがアリアにしましょう」

深紅のバラにいきなり自分の名前を命名されたアリア目を丸くした。

「フィーブッコロス。アリア。いい名前です。神崎さんのおかけで、しっくり来る名前をつけられた。フィー・フエリチート―アリア」

ワインで酔ったのか小夜鳴はご満悦だった。

面白くない……アリアを口説いてるわけではないんだがあの空気はなんとなく腹が立つな……

そういえば、小夜鳴は武偵高の女子生徒に手を出すとか噂があったな……

うぉーんと森から野犬か何かの遠吠えを聞きながら俺は小夜鳴の食事が終わるのを待つのだった。

第９５弾　優希ｖｓブラド―炎のガバメント

その日の夜も電話会議を行なった。
作戦結構は４日後、ここで働く最終日だ。

「理子、優、キンジマズいわ。掃除の時調べたんだけど……地下金庫のセキュリティが事前調査の時より強化されてるの、気持ち悪いぐらいに厳重。物理的な鍵に加えて、磁気カードキー、指紋キー、声紋キー、網膜キー。室内も事前調査では赤外線だけってことになってたけど、今は減圧床まであるのよ」

「な、なんだそりゃ」

キンジが言うのも無理はない。
こんな馬鹿みたいな警戒、米軍だってやらないぞ。
もう、俺だけなら手も足もでない。
小夜鳴をぶっとばして強奪するぐらいしか思い付かん。
もう、ブラド探してぶっ飛ばして返してもらうのがいいんじゃないか？

「よし、そんじゃプランＣ２１で行くかぁ。キーくん、ユーユー、アリア何にも心配いらないよ。どんな厳重に隠そうと理子のものは理子のもの！絶対お持ち帰り！はう～！」

ま、俺一人には無理でも理子のサポートがあればいけるかな……
にしても夜中にハイテンションだな学生なのに

「んで、いま小夜鳴先生と仲良しランキング上位は誰かな？かなかな？」

「俺とアリアだな。」

「確かに、新種のバラにアリアとか命名されて喜んでたもんな」

とげのある言い方だなキンジ

「よ、喜んでないわよ！何言ってんの馬鹿なの？」

「おいアリア、気をつけろよ？小夜鳴には、女関係で悪いウワサがある」

「やめてくれキンジ！女装してんだから俺も気をつけねえと駄目じゃねえか」

まあ、万が一そんなことになったらボコボコにするけどな

「別に……悪い人には見えないけど」

意地を張ってるのかアリアが言う。

「いや。俺には怪しく見えるぞ。少なくても、あまり好きじゃない」

「だな、俺も気に入らない」

「おお？おおおー？痴話ゲンカってやつですか？」

嬉しそうに理子が割り込んできたので違うと三人の声がはもる。

「じゃあ、とりあえず先生を地下金庫から遠ざける役目はアリアと

ユーユーに決まりね！どう？できそう？」

「彼は研究熱心だわ。誘き出しても、すぐ研究室のある地下には戻りたがると思う」

「そこは俺もサポートする。古賀先輩にいろいろ教えてもらったからなんとかなるだろ」

「キーくん、ユーユー、アリアじゃあ時間でいえば何分くらい先生を地下から遠ざけられそう？」

「１０～１５分だな」

「うーん」

理子は少し考え込んでいるようだった。

さすがに厳しいか？

「なんとか１５分頑張れないかな？例えばアリアが」

「たとえばあたしが？」

「ムネ……はないからオシリ触らせたりして。くふっ」

「ば、ばか！風穴！あんたじゃないんだから」

やれやれだな

「じゃあユーユーが熱烈に迫って……」

「断る！」

冗談じゃないぞ

「くふっ、まぁその辺は理子が方法考えとくよ！じゃ、また明日の夜中2時にね！りこりん、おちまーす」

ぷつんと理子との電話が切れてしまう。

「俺も落ちる。おやすみ」

まだ、回線が繋がってるはずのキンジとアリアの回線を切ってから携帯を枕元に投げて横になる。

さて、いよいよ大詰めだなこの作戦も……ブラドは帰ってくる気配を見せていない。

やはり、今回で理子を助けるのは無理か……この作戦が終わったら千鶴や実家に協力してもらってブラドを探してみるかな……

公安0も居場所ぐらいは掴んでるかもしれないし……

土方さんあたりに今度、ダメ元で聞いてみるかな……

そんなことを考えながら目を閉じていると眠気が襲ってくる。

ああ、寝るか……

「ゲゥゥウアババババハハハハハハハ。どうした椎名の天才とやらの力はそんなもんか？少しは期待した俺が馬鹿だったかぁ？」

「がっ……くそ……」

この記憶……

相手は闇がかかったような巨大な化物。

その正面には日本刀を地面に指してなんとかたっている。

少年の姿があった。

思い出した……これは……

「撒き餌は大人しく檻に戻れ。それとも４世と交配させるか？ゲゥゥウアババババハハハハハハハ！」

「お、お前は悪だ……僕は理子ちゃんを助けるんだ！ヒーローは絶対に負けない！」

「ゲゥゥウアババババハハハハハハハ！ヒーローだぁ？おい、餓鬼、笑わせてくれるよなぁ。そのヒーローさんはどうやってメス犬を助けるんだぁ？」

「くっ……」

ぽたぽたと落ちる血痕。

今、少年のもつ全ての剣を叩き込んでもブラドは倒せない。

だが、それでも少年は荒く息をはきながらも目を細めて構えを取る。

「まだ、やんのか？いい加減あきてきたな」

「うわあああ！」

その突進は少年の持つ最大の速度だった。
ブラドが右腕を震う。
刹那の瞬間、交わすと少年は一瞬、しゃがみこむと加速する。

「飛龍一式断風！」

「おっ！？」

ブラドの右腕が落ちる。
背後に回ってきた少年は追撃を緩めない。
石を蹴ると空に舞い上がる。
殺すつもりでやると少年は思った。
それぐらいやらなければ勝ち目はない。

「飛龍一式！雷落とし！」

「ぐぎゃあああああ」

ズンと手応えがありブラドが悲鳴をあげ、頭からまたまで真っ二つに切り裂かれる。
同時に、少年の剣が限界を迎えて折れる。
やったと少年は思った。
だが、それは絶望だった。

「やるじゃねえか」

「!?」

驚愕に目を見開いた少年の頭を闇からぬっと現れた手が掴む。

「ぐっ、なんで!」

「ゲゥゥウアバババハハハハハハハ!やったかと思ったか椎名?」

ぎりぎりと万力のようにブラドの手が握力を強める。

「ぎ、あああああああ!」

激痛に悲鳴をあげるとブラドは喜ぶように笑いながら

「どうしたヒーロー。もう終わりか?」

ぎりぎりと力が込められる。

何もできない自分が悔しい。

激痛と悲しみに少年は泣いた。

やがて、少年の手はだらりと下を向き持っていた折れた剣が地面に落ちた。

「ゲゥゥウアバババハハハハハハハ!悪にまけたヒーローか?こんなことするなんてお仕置きが必要だなぁ4世」

ブラドが言った時

シャン

「ああん?」

鈴の音だ。

ドドドドドド

６発の銃声が轟き、ブラドは握力を失ったことに気付いた。

少年が地面に落ちる。

「あ……」

目をあけ、闇から現れた人を見て少年は言った。

「師匠……」

シャンと髪につけた鈴の髪飾りをつけたその少女は炎の装飾が施されたガバメントを手に微笑んだ。

「随分、ぼろぼろだね優希」

目を開けると外は明るかった。

そうか……また、思い出した……

ブラドと戦った時、やっぱり師匠が助けてくれたんだ……

枕元においてある炎の装飾が施されたガバメントを手に取る。

「師匠……」

第９６弾　女装の真髄

そして、ついに紅鳴館で働く、最終日がきた。
作戦決行は俺たちが館を去る１時間前―午後、５時。
アリアと相談した結果、最終日だから、庭で改良種のバラアリアの話を聞きたいという理由で小夜鳴をおびきだすこととなった。
その間にキンジは理子の宝物を取り戻す。
俺はキンジに頼んで余裕があればケースに入ってるという４５ＡＣＰ弾も回収してくれるように頼んだ。
そうなると陽動は重要だ。
俺は古賀先輩に頼んで花の知識等を電話で教えてもらい挑む。

「お待たせしました神崎さん月島さん」

研究室から出てきた小夜鳴。
さて、ラストミッションだ。

「いいえ、お忙しいところを無理にすみません」

アリアが言うがぼろがでないのを祈るだけだな

「構いませんよ。あまり、時間はとれませんがそれでよろしければ」

「フフフ、今日を私楽しみにしてました小夜鳴さん

あえて、先生とは言わずさんで呼ぶ。
古賀先輩いわく仲良くなるステップだ。先生→さん

「ハハハ、じゃあ行きましょうか神崎さん、月島さん」

スルーされたか……あるいは鈍感なのか……
とりあえず作戦開始だな。

「ユーユー、アリアキーくんが動いた」

理子の声が小型のイヤホンから聞こえてくる。
キンジは地上階から金庫の天井までもぐらのように穴を伝って到達し……そしてその天井から、コウモリのように逆さ吊りになったキンジがお宝を頂戴するのだ。
今、キンジは理子の支持を受けて作業を開始してるのだろう。

「……のように私は改良を施したのがこのバラ、アリアなんです」

「素晴らしいです。こんなに美しいバラを作ってしまわれるなんて小夜鳴さんはすごい方なんですね」

とにかく、誉められれば気分は悪くならない。
小夜鳴が調子に乗れば話を長引かせることも不可能ではないだろう。
後3分……余裕で引き延ばせる。

と思った時
嘘だろおい
雨粒が頬に当たる。

「おや？雨のようですね」

小夜鳴が空を見上げながら言った。
ま、まずいぞ。

「雨も降ってきましたしそろそろ戻りましょうか？楽しかったですよ神崎さん、月島さん」

屋敷に戻り始める小夜鳴先生を見て俺達は焦った。
小声でメイド服に仕込んだマイクで理子に状況を伝えてからアリアが瞬き信号でなんとかしなさいよ言ってくる。

「アリア。ユーユー、まだ、キーくんは時間がかかる。なんとか会話ひっぱって。もたせて」

理子の指示を受けてからアリアが焦ったのか

「さ、小夜鳴先生」

「なんです？」

「あ、いえ、なんでめないんですけど。えっと」

「……はい？」

「いい天気ですね」

「えっ……？雨、降ってきてますけど……」

「え？あっ。えーっと、あ、雨好きなんですあたし！あははは」

駄目だ。

アリアには任せられんか……てんぱりすぎだ。

ハニートラップは嫌ならと古賀先輩に教えられた手段を使うしかないか……

俺はポケットから素早くカプセルを飲み込む。

その瞬間、理子との回線が切れた音がしたが……気にはしない。

全神経を使ってなりきるのだ。

「あっ……」

小夜鳴に聞こえるように言ってから額を押さえて庭に座り込む。

「月島さん？どうかしたんですか？」

よし、小夜鳴が戻ってきたぞ

「はぁ……はぁ……すみません……小夜鳴さん……アリア……私、黙ってたんですが病気なんです……今朝、飲まないといけない薬を飲み忘れて……」

「どうして黙ってたんですか？」

顔は真っ青になっているだろう。

実際、こいつは貧血を誘発する薬だからな。

「じ、小夜鳴先生に働けないと迷惑かくたくなくて……すみません……」

「辛いんでしょう？なんとか館まで戻れませんか？」

「はぁ……はぁ、あ、アリア」

「え？　な、何？」

突然、名指しされたのでアリアが聞き返してくる

「く、薬を取ってきてください……私の部屋の机の中に……」

「わ、分かった。戻るまで頑張りなさい」

アリアまで本気にしたのか！急ぐなアリア！ゆっくりしろ！

「で、では私は傘を……」

「ま、待ってください！」

ここで戻られたらアウトだ

必死に小夜鳴の服を掴む

「つ、月島さん」

「て、手を握っていてください……この病気は精神的なものでもあるんです」

「わ、分かりました」

そっと、小夜鳴が俺の右手を握ってくる。

今、の奴には病弱な少女にしか見えていまい。

古賀先輩いわく、病弱な美少女は男心をくすぐるらしい

「ああ……最後まで迷惑かけてすみません小夜鳴さん」

「とんでもありません。すぐに、救急車を……」

携帯を取り出そうとした小夜鳴の手を俺はそっと上から押さえ、上目遣いに見上げる。

「救急車は嫌いなんです……薬があれば楽になりますから……」

「し、しかし……分かりました」

ザアアと雨が降るなか時間は稼いだぞ。

案の定、アリアが高速で戻ってきて薬を差し出してきたので水がないと飲めませんとアリアを走ら、更に時間を稼ぎ薬を飲み終わると小夜鳴に肩を借りて、ソファーまで行き。

結果的に一時間以上という時間を俺は稼ぐことに成功したのだ。

もう、今後一切！二度と！絶対にやらないぞ！女装なんかな！

こうして、キンジと合流し、小夜鳴は何度かすみませんと謝りながら研究室に戻ってしまった。

やれやれと、私服に着替えキンジに肩を借りながら紅鳴館を後にした。

ちなみに、キンジとアリアは武偵高の制服だが俺は外で着替えた。

防弾私服でGパンとジャケットとシャツだな。

かつらだけはある理由からつけているから半女装状態ではあるが男ものの服を着る女性もいないわけではないので問題はないのだ。

「で？キンジ手に入ったか？」

タクシーを待ちながら俺が言う。

「ああ、優が言ってた分も手に入った。理子も嬉しそうにしてたな」

そういいながらキンジはポケットからケースに入った弾丸を俺に見せてくる。

「ちょっといいか？」

「ああ、優が持ってろよ」

俺はキンジからケースを受け取りまじまじと弾丸を見てみる。

なんのへんてつもない。

ただの４５ＡＣＰ弾だ。

だが、その瞬間頭痛がした。

「……っ！」

思い出した……こいつは……

横浜ランドマークタワーのエレベーターで上昇しながら俺は弾丸をポケットにしまった。

第97弾　裏切り

ランドマークタワーの屋上にいるということを理子に聞いて外に出ると湿った海風が強く吹いていた。
うわ、空の雲、雷雲じゃないよな……
周りフェンスないから落ちたら死ぬなー

「キーくぅーん！ユーユー！」

蜂蜜色の髪を風になびかせながら例の改造制服を着た理子が駆け寄ってくる。
そして、キンジに抱きついた。

「やっぱりキーくん達チームは最高だよ！理子にできないことを平然ととやってのける！そこにしびれるあこがれるぅ！」

理子は大きなふたえの目をキラキラさせて胸元からこっちを見上げてくる。
頭にでかい赤りぼんを増設してるな。

「キンジ、優。さっさと二つともあげちゃて。なんかソイツが上機嫌だとムカつくわ」

「おーおーアリアンや。チームメイトとられてジュラシーですね？わかります」

ハハハ、アリアんって
理子はアリアを横目で見ながらキンジの胸に頬擦りしている。
ちがうわよぎぃー！とアリアが怒鳴るのを見て俺はケースに入った

弾丸を渡す。
「ほら」
「あ……」
短く理子は言ってケースを一瞬見てから何かを決意するように目を閉じて開いた。
「それ捨てといてユーユー」
え?
目を丸くして
「捨てる?大切なものなんだろる?大切なものなんだろ?」
「うん……大切な宝物だよ……でも、理子のヒーローは理子を助けてくれなかったからもういらないんだ」
それってまさか……
「さ、さ!キー君出して出して!」
俺が何かを言う前に理子はキンジにおねだりを始めてしまったので弾丸はポケットに入れておいた。
「やるから離れろ」
十字架を見た理子は弾丸とは対照的に声にならない喜びの声をあげたかと思うと首につけていた細いチェーンに、手品のような素早さで繋いでしまう。

「乙！乙！らん・らん・る―！」

理子は跳び跳ねたり両手をしゃかしゃかふりまわすわ最高のハイテンションぶりだ。

おい、理子スカートの中見えるぞ……キンジ目をそらしてるし……にしても……

弾丸の入ったケースをギュッと握ると俺はため息をついた。

「理子。喜ぶのはそのくらいにして、約束はちゃんと守るのよ」

怒りモードのアリアさんが腕組みしてこめかみをぴくぴくさせながら釘を刺す。

「アリアはほんっと、理子のこと分かってなぁーい。ねえ、キーくぅーん」

理子がキンジを手招きする。

キンジが近づくと理子は蜂蜜色の髪を留めている大きな赤りぼんを向けている。

「お礼はちゃんとあげちゃう。はい、プレゼントのリボンをほどいてください」

ん？なんだろう？

キンジが理子のリボンをといた瞬間、理子はキンジにそっとキスをした。

おいおい……

一瞬、意味がわからなかったがキンジの感覚が変わったのを見て納得した。

ヒステリアモードに

「ぷはぁ」

唇を離した理子がぺろっとおまけにキンジの鼻をなめる。

「り……りりりり理子おッ！？な、なな、ななな何やってんのよいきなり」

「ごめんねぇーキーくぅーん、ユーユー。理子、悪い子なのぉ。この十字架さえもどってくれれば理子的にはもう欲しいカードは揃っちゃったんだぁ」

にい、とあのハイジャックの時俺と戦った時の目で笑った。

「もう一度言おう悪い子だ、理子約束は全部ウソだった、って事だね。だけど……俺は理子を許すよ女性のウソは罪にならないものだからね」

相変わらずお前、ヒステリアモードの時は背筋かかゆくなるセリフを平然と言うよな……

まあ、それはそれとして

「ローズマリーの情報も嘘……か。ま、別にいいけどな」

理子が知ってる範囲の情報はジャンヌに貰ったからな

「とはいえ俺のご主人様は理子を許してくれないんじゃないのかな？」

怒りモードのアリアさんはキスのショックで固まってる。

「アリア」

キンジがパチンと指をならすとアリアははっとして犬歯をむいた。

「ま、まあ……こうなるかもって、ちょっとそんなカンはしてたけどね！念のため防弾制服を着ておいて正解だったわ。キンジ、優、闘るわよ。合わせなさい」

はいよ

日本刀に手を伸ばしながら俺は思う。

だが、戦闘狂の暗示はまだ、かけない。

「くふふっ。そう。それでいいんだよアリア。理子のシナリオにムダはないの。アリア達を使って十字架を取り戻して3人を倒す。キーくんも頑張ってね？せっかく理子が、初めてのキスを使ってまでお膳立てしてあげたんだから」

「先に抜いてあげる、オルメスここはシマの外、その方がやりやすいでしょ？」

理子はスカートからワルサーをＰ９９を2丁取り出した。

「へえ、気が利くじゃない。これで正当防衛になるわ」

アリアもガバメント2丁を抜く

「なあ、理子」

その間に割り込むように俺は立った。

「何？ユーユー？最後だから聞いてあげるよ」

もし、この事実を知っていたなら俺はハイジャックの時、理子と戦えなかった。
忘れていたからこそ戦えたのだ。

「ジャンヌから聞いたんだお前がアリアを狙うのはブラドに成長を証明させるためだろ？」

「ジャンヌから聞いたんだ？それで？」

「なら、一つ提案がある」

俺はにやりと笑いアリアとキンジ、理子を見回しながら

「みんなでブラドを逮捕しようぜ」

理子が目を見開いた。
だが、すぐに目を落とすと

「無理だよユーユー……ブラドには勝てない……」

「やってみなくちゃわからないだろ？」

子供の頃より俺は強くなった。
一人で無理でもみんなで力を合わせれば……

「なあ、理子、アリア達と戦わなくてもいいだろ？二人が嫌がっても俺がブラドを……」

「……ざけ……な」

「え？」

理子はかっと悪魔のような表情で俺を睨み付ける。

「ふざけるな優希！お前のその言葉を８歳の時、聞いた！でもお前は戻ってこなかった！ブラドから逃げ出してイ・ウーから武偵高に来たときお前を見てまさかと思った！だけど神戸で確信したよ！上辺だけ助けて、奥までは助けない！お前は最低な男だ！」

「理子！」

「私を助ける？はっ、笑わせる！お前は今、銃を私に向けてるじゃないか！」

これは理子の悲しみ……裏切られた俺への失望……

そうか……理子ごめんな……

「なら」

俺はすっと理子に背を向ける。

「ゆ、優あんた！」

アリアが戸惑った声で俺を見る。

「悪いなアリア、キンジ、今回だけ俺、理子のヒーローになるから」

「ど、どういうつもりだ優希！」

理子が戸惑った声で俺に言ってくる。

「言ったろ？」

俺は静かに思い出した言葉を紡ぐ

「必ず……いつかブラドに勝てるだけの力をつけて帰ってくるから！絶対に理子ちゃん助けられるヒーローになって絶対に帰ってくるだから待ってて」

我ながら子供の頃とはいえ陳腐なセリフだな。

「でも、これが終わったらブラド倒すぞ理子。キンジ、アリア気絶したら負けな」

ルールを作ってキンジと対峙する。

そういや、キンジと戦うのはじめてだな。

依頼主さんよ……ま、気絶させるくらいなら契約違反じゃないよな？

「2対2だな」

キンジがベレッタを抜いたので俺もガバメントを抜きながら

「そうだな。キンジ、悪いけど俺の勝ちだ」

「どうかな？」

「ふざけるな！」

振り返らず俺はその言葉を背中に受ける。

そして、静かに振り替えると
理子の左右のツーテールが大振りのナイフを抜いていた。

「優希！お前は私の敵だ！お母様がくれたこの十字架は理子に力をくれる！」

「なら、後ろから撃てよ。抵抗しない」

そういって俺は再びアリア達と対峙する。

「優希！オルメス！遠山キンジ！お前達はあたしの踏み台になれ！」

駄目か……まあ、罪を受ける時が来たってことか……
背中に攻撃を覚悟した瞬間

バチッッッッ！！

小さな雷鳴のような音が上がった。
音に俺が振り替える。
その愛らしい顔をいきなりこわばらせた理子は半分だけど、振り返った。

「……なん……で、お前が……」

と呟きその場に膝をついた。

「理子！」

理子が倒れてその理子を倒した相手が見えてくる。
な、なんでお前が！

「小夜鳴！」

そう立っていたのは大型の猛獣用のスタンガンを持つ紅鳴館の管理人だった。

第９７弾　裏切り（後書き）

ローズマリー

身長　１５４センチ

髪色　銀髪

外見年齢１６歳

基本服装黒系ゴシックロリータ

瞳の色　赤

武器　大剣

能力　炎

補足

　たびたび、優希達の前に現れる謎の少女。
ですのと独特のしゃべり方をするがしゃべり方は趣味であるらしい。
優希に執着しており、私の騎士様と憎しみというよりは愛情に近い、あるいは愛情の感情を優希に向けているが現時点では理由は謎である。
基本、子供っぽい性格であるため善悪の判断もあまりついていないらしく。
逆らうなら殺害することもいとわない。
武偵ランクで言うならＲに相当するとされている。

その判断基準として、過去に紫電の雷神と呼ばれるRランクと引き分けているという噂がある。

第９８弾　ドラキュラ

訳が分からない。
いや、最初から小夜鳴は敵だったと考えるべきだろう。
何せ、ブラドと知り合いなのだから。
じゃりと、足を動かした瞬間

「おっと3人とも動かないでくださいね」

「う……」

足を止めざる得ない。
小夜鳴は倒れた理子の後頭部をなんのためらいもなく狙う。
奏ちゃんの時と状況は似ているが銃に手がついていない今はあの時より状況は悪い。
だが、あの小夜鳴の銃……
クジール・モデル７４。
社会主義時代のルーマニアで生産されていたオートマチック拳銃……ん？
小夜鳴の後ろから二匹の銀狼が現れる。レキが従えたやつと同種か……

「前には出ない方がいいですよ。今より少しでも私に近づくと襲うように仕込んでありますんで」

「はっ、そんなもんで脅しになると思ってんのか？」

すでに怒りは沸点を越えて戦闘狂モードになっている。
だが、距離がありすぎて一手が打てない。

「月島さん。あなたは、そこのお二人の学芸会よりは演技はうまかったようですね。それがあなたの本性ですか？」

ん？

違和感を感じる。

どうやら小夜鳴は俺を椎名優希と認識さていないらしい。

好都合だなら、脅しをかけてやるか……

「よろしければ所属を言いましょうか？」

女性モードの時のように俺は微笑んだ。

「ええ、是非」

「公安０、月島優」

「公安０？ほう、本当なら彼らが何故、二人に協力してるのかは知りませんがこれは少し厄介ですね。ま、嘘でしょうが」

ばれたかまあ、かもしれないのレベルでも牽制にはなる。

日本国内で公安０と戦いたいと願う馬鹿はそういないはずだ。

そうこうしているうちに、銀狼が理子の拳銃やナイフをテキパキとビルの縁まで運んでは眼下に捨ててしまった。

「動かないで下さいね。この銃は３０年前に造られた粗悪品でしてトリガーが甘いんです。つい、リュパン４世を射殺さてしまったら勿体ないですからねぇ」

ブラドから聞いたのか……リュパン４世と本名を知る人間は少ない。

なるほどな……潜入の前にばれてたのか……どうりで警備が厳重だったわけだ。

「どういうこと？なんでんたが、リュパンの名前を知ってるのよ！まさか……まさか、あんたがブラドだったの？」

「違うアリア！そいつはブラドじゃねえ！」

小夜鳴＝ブラドという説を俺は否定する。

「彼は間もなくここに来ます。狼たちもそれを感じて昂ってますよ」

「それにしても、そのブラドから理子のことも聞いて、銃も狼も借りて、そのくせ会ったことがないだなんて半月前はよくも騙してくれたわね」

「騙したワケではないんです。私とブラドは会えない運命にあるんですよ」

「あの時あんた、ブラドはとても遠くにいるなんて言ってたけど……あのあと、コッソリ呼んで立ってわけね。あたしたちを泳がしてたのは一人じゃ勝てないからブラドの帰還を待ってたんでしょ？」

なんとか……理子さえ助けたら……

小夜鳴の戦闘力はたいしたことはない。

人質さえいなければ銀狼がいても勝てる。

だが、ブラドがくれば人質と合わせてキンジ達がいても不利だ。

特攻をかける手もあるが……

俺は銃を頭につきつけらる倒れた理子を見て歯をくいしばる。

必ず……助ける！

「遠山くん。ここで君に一つ補講をしましょう」

？

「補講？」

「君がこのリュパン４世と不純な遊びに耽っていて追試になったテストの補講ですよ」

やはり、気づいてないか……俺の名前を出さないということは……アリアがキンジを睨み付ける。

にしてもあの補講がなんだ？

「遺伝子とは気まぐれなものです。父と母、それぞれの長所が遺伝すれば有能な子、それぞれの短所が遺伝すれば無能な子になります。そして……このリュパン４世は、その遺伝の失敗ケースのサンプルと言えます」

そこまで言うと、小夜鳴は倒れたままの理子の頭を蹴った。

まるで、ゴミ袋を蹴るような無慈悲さで。

「やめろ貴様！」

ぐっと足に力をいれかけるが動けない。

俺が動くより確実にトリガーを引く動作が早いからだ。

動けないことを知ってか小夜鳴が続ける。

「１０前、私はブラドに依頼されてリュパン４世のＤＮＡを調べた事があります」

「お、お前だったのか……ブラドに下らないことを……ふ、吹き込んだのは……」

足元で理子がもがきながら男喋りでうめく

「リュパン家の血を引きながらこの子には」

「い……言、う、な……！お、オルメスたちには……関係……な、い……！」

「優秀な能力が、全く遺伝していなかったのです。遺伝学的にこの子は無能な存在だったんですよ。極めて希なことですが、そういうケースもあり得るのも遺伝です」

言われてた理子は俺達から顔を背けるように地面に額を押し付けた。

本当に聞かれたくない相手にそのことを聞かれた絶望的な表情

「いいかげんにしろ……貴様……」

怒りで声が震える。

沸き上がるのは殺戮衝動。

目の前の男を殺したいという純粋な破壊衝動。

二度と使わないと決めたあの状態に俺は近づいている。

「自分の無能さは自分が一番よく知ってるでしょう、４世さん？私はそれを科学的に証明したに過ぎません。あなたには初代リュパンのように一人で何かを盗むことができない。先代のように精鋭を率いたつもりでも……ほら、この通りです。無能とは悲しいですね。

ねえ４世さん」

無能、４世という言葉を繰り返す小夜鳴の足元で理子は涙を溢していた。

喉の奥から絞り出すように泣いている。

小夜鳴は手元からキンジがすり替えたニセモノの十字架を取り出した。

「教育してあげましょう４世さん。人間は遺伝子で決まる。優秀な遺伝子を持たない人間はいくら努力を積んでもすぐ限界を迎えるのです。今のあなたのようにね」

小夜鳴はその場に屈み、身動きが取れない理子の胸元から引きちぎるように青い十字架を奪いとった。

そして、ニセモノの十字架を痺れのせいで何の抵抗もできずにいる理子の口に押し込む。

「う！　んん！」

理子が悲鳴をあげてのぞけるが小夜鳴は楽しそうに笑いながら

「あなたにはそのガラクタがお似合いでしょう。あなた自身がガラクタなんですからね。ほら。しっかり口に含んでおきなさい。昔、そうしていたんでしょう？」

背を伸ばした小夜鳴が、がすッと理子の頭を踏みつける。

「うう！」

理子の悲鳴

怒り、激怒。
自身でもわかる。
俺が小夜鳴に向けているのは殺気だ。

「い、いい加減にしなさいよ！理子をいじめて何の意味があるの！」

耐えかねたアリアが叫ぶ。
俺と同じく怒っているのだ。

「絶望が必要なんです。彼を呼ぶにはね。彼は絶望の詩を聴いてやってくる。この十字架も、わざわざ本物を盗ませたのはこうやってこの小娘を一度喜ばせてから、より深い絶望にたたき落とすためでしてね。おかげで……いいカンジになりましたよ。遠山くん。よく見ておいてくださいよ？私は人に見られている方が掛かりがいいものでしてね」

なんだ？何か小夜鳴の感じが変わっていく。

「ウソ……だろ……？」

キンジが絶句している。
まさか……

「そうです、遠山くん。これはヒステリア・サヴァン・シンドローム」

やはりか……
キンジ以外の家系にも持ってるやつがいたとはな

「ヒステリア……サヴァン？」

アリアが眉を寄せているがキンジも俺も何も言わない。

「遠山くん。月島さん。神崎さん。しばし、お別れの時間です。これで彼を呼べる。ですがその前にイ・ウーについて講義してあげましょう。この４世かジャンヌに聞いているでしょう。イ・ウーは能力を教え合う場所だと。しかしながらそれは彼女たちのように低い階梯の者達による、おままごとです。現代のイ・ウーにはブラドと私が革命を起こしたこのヒステリア・サヴァン・シンドロームのように能力を写す業をもたらしたのです」

「聞いたことがあるわ。イ・ウーのやつらは何か新しい方法で人の能力をコピーしてる」

アリアの指摘に小夜鳴は首を小さく振る

「方法自体は新しいものではありません。ブラドは６００年も前から交配ではない方法で他者の遺伝子を写し取って進化させてきたのです……つまり、吸血で。その能力を人工化し、誰からも写し取れるようにしたのが私です。君たち高校生には難しいかもしれないので省略しますが優れた遺伝子を集めることも私の仕事になりました。先日も武偵高で遺伝子を集める予定でしたが遠山くんたちが除いていたおかけで失敗してしまいました。狼に不審な監視者がいれば襲うように教えたのがあだになりました。特にレキさんの遺伝子は惜しかった」

なるほどな……あれにはそんな理由が……

アリアがぎりと歯ぎしりした

「ブラド。ルーマニア。吸血……そう、そういうことだったのね。

どうして気づかなかったのかしら。キンジ。優。ナンバー2の正体読めたわドラキュラ伯爵よ」

まじか……勘弁してくれよ

「ドラキュラ？それは架空のモンスターの名前じゃなかったのか？」

キンジが言う

「違うわドラキュラ・ブラドは、ワラキア今で言うルーマニアに実在した人物の名前よ。ブカレスト武偵高で聞いたことあるの。今も生きてる、って怪談話つきでね」

「正解です。よくご存じでしたね。三人ともまもなくそのブラド公に拝謁できるんですよ。楽しみでしょう？」

「でたらめだ！そもそも兄さんの力をコピーしたのならどうして理子を苦しめられる」

ヒステリアモードは女性を守るものだ確かにおかしい

「いい質問ですね。講師は生徒の質問に答えるのが仕事です。順を追って説明しましょう……むかーしむかし……」

どこまでもふざけやがって……

「この世には吸血で自分の遺伝子を上書きして進化する生物吸血鬼がいましあ。無計画だったらほとんどの吸血鬼は滅びましたが、人間の血を偏食していた一体ブラドは人間の知性を得て、計画的に多

様な生物の吸血を行い強固な個体となって存在しました。しかし、ブラドは知性を保つために人間の吸血を継続する必要学生ありました。結果、ブラドには人間の遺伝子が上書きしてされ続けブラドはとうとう私と言う人間の殻に隠されることになりました」

ま、まさか……

「隠されたブラドは私が激しく興奮したとき、つまり私の脳に神経伝達物質が大量分泌された時に出現するようになっていきました。しかし永い時が流れるうち私はあらゆる刺激になれ激しくは興奮できなくなってしまったのです」

「なるほどな。それでキンジの兄さんのヒステリアか？」

にい、と笑った小夜鳴は踏みつけていた理子の頭をもうひとけりした。

「……」

理子の口からニセモノの十字架が地面に落ちる。

「さあ　かれ　が　きたぞ」

圧倒的な存在感がその場に現れようとしている。
この感覚は覚えがある。
公安０の沖田、ローズマリー……
化物が殺意を持って現れる前兆
だが、関係ない。
必ず勝つ……それだけだ。

第９９弾　約束の弾丸

「へ……変、身……！？」

アリアが絶句した声をあげる。
今や小夜鳴は俺たちの前で洒落たスーツが紙みたいに破けその下から出てきた肌は赤褐色に変色し熊のように筋肉が盛り上がっていく。
文字通り変身だ。
だが、今しねえ！
呆然とするアリアとキンジを後ろに俺は地面を蹴った。
奴の銃が変身のために理子からそれた。
「ぐるおん！」

俺が動いたため狼達が動き出す。
走りながら右のワイヤーを発射するとポールに食い込ませ、宙を飛ぶ。
いかに、獣の足でも飛べない場所まできて、壁に足をつけてから弾丸のように理子と変身中のブラドに迫る。
狼が後ろから追ってくる気配がするがベレッタの発砲音とともに狼はきゃんと泣いて動かなくなる。
キンジが援護してくれたらしい。
みるみるブラドが迫る。
こいつは、化物だ。
そう言い聞かせて日本刀で右腕をぶったきる。

「飛龍一式！風切！」

居合いのモーションから膨れ上がった筋肉をまっぷたつに切り裂く。
理子をお姫様だっこし背中のワイヤーを巻き戻すと貯水タンクが置

かれている高台に着地し、ブラドをにらむ。

「悪い助けるのが遅れた」

「……」

理子は複雑そうな顔で俺を見ていたが何も言わないし抵抗もしない。
ただ、目線をブラドに向ける。

「痛いじゃねえか女。変身中に攻撃はタブーじゃねえのかぁ？」

理子が萎縮したのが分かった。
久しぶりに聞くなこの声

「初めましてだな」

すでに声帯までの変わっている。

「おれたちゃ、頭ん中でやり取りするんでよ……話は小夜鳴から聞いてる。分かるか？ブラドだよ、今の俺は」

こちらを名乗る凶暴そうな目は黄金の輝きを放っている。

「久しぶりだなブラド」

理子をお姫様だっこしたまま戦闘狂の目で上から見下すようにブラドをにらむ。

「あん？だれだてめえ？いや、さっきの攻撃……飛龍……ゲゥゥウアババババババ！そうか女、お前は椎名の直系だな？数年前に

捕まえた犬に椎名の人間がいやがったな。逃がしちまたがな」

「その逃げたのが俺だブラド」

ばさばさと風を長いかつらに受けながら俺は言う。

「椎名優希だ」

「ほう」

ブラドは目を少し細める。

「あの時の撒き餌が何しにきたんだ？」

「てめえを逮捕しにきたんだよくそやろう」

「ど、どういうこと優。あんた、あいつと知り合いなの？」

アリア眼下にわけが分からないと言う風に言ってくる。

「黙ってて悪かったなアリア。俺は数年前にブラドと戦って負けたことがある」

正確には忘れてたんだがな……

「その話は後で聞くとして今は、あいつよどういうことなの優？」

ブラドの変身か……

「たぶん……」

俺が戦った時はブラドは最初からあの姿だった。
小夜鳴がまだ、刺激に慣れきってない時なんだろう「擬態、みたいなもんだったんだろ？」

キンジが説明をいれてくる。
俺に話させるとヒステリアモードの話になるかもしれないからな。

「ぎたい？」

「アリアの好きな動物番組でもたまに出てくるだろう。例えばトラカミキリはハチを装って自然界で有利に生きようとするが、その際は単に姿を真似るだけじゃなく動作までハチそっくりにせわしなく動く

「う、うん。それは見たことある」

「ブラド・小夜鳴の変身はそれの吸血鬼・人間バージョンなんだ。あいつは元々、あの姿をした生き物だったんだよ。それが進化の家庭で人間に擬態して生きるようになった。その擬態は高度で、姿だけじゃなく……小夜鳴という人格まで作り出した。厳密には違うようだが二重人格みたいな状態で吸血鬼の姿と人格を内側に隠してたんだ」

ヒステリアモードになってるとアリアは気づいたらしくちょっと慌てたようにブラドを見て

「人間という役になりきってたのね。まるで人間社会への潜入捜査だわ」

「まあ、そんなとこだ」

詳しく説明する気はないらしい。
ブラドはその目を俺たち……正確には俺の腕にいる理子を見る。
「おぅ４世久しぶりだな。イ・ウー以来か？」
理子はぎゅっと俺の服を掴んでくる。
震えている。
「４世そういえば、お前は知らなかったんだよな俺が人間の姿になれることを」
「ようはてめえ、最初から理子を騙してたんだな？アリアを倒したら理子を解放するって約束を」
「お前は犬とした約束を守るのか？ゲゥゥウアババババババハハハ！」
理子が悔し涙を流す。
理子……
「檻に戻れ繁殖用牝犬。少しは放し飼いにしてみるのも面白ぇかと思ったんだがな。結局お前は自分の無能を証明しただけだった。ホームズには負ける。盗みの手際も悪い。弱ぇ上で馬鹿で救いようがねぇ。パリで闘ったアルセーヌの曾孫とは思えねえほどだ。だが、お前が優良種であることは違いはない。交配しだいでは品種改良されたいい５世が作れてそいうからいい血がとれるだろうよ。椎名。お前の遺伝子でも掛け合わせてみるかぁ？」

このクズ野郎が……
こいつは今まで会ってきた奴でも最悪にむなくそが悪い。
シンがかわいく見えるほどにゲス野郎だ。

「いいか４世お前は一生俺から逃れられねぇんだ。イ・ウーだろうがどこだろうと関係ねぇ。世界のどこに逃げても、お前の居場所は檻の中だけなんだよ。椎名達を殺したらルーマニアに帰ろうぜ４世ぇゲハッ、ゲバババババッ！」

「り、理子」

「理子」

「理子……」

俺たちの声に理子は目を閉じてぼろぼろと泣いていた。

「あ……アリア……キンジ……優希……」

そして、理子は……

「……た、す、け、て……」

「「言うのが遅い！」」

アリア達がブラドに向かう。

ああ

俺は心の中で頷くと理子をブラドから見えない位置にそっと寝かした。

「優……今すぐアリア達を退かせてブラドは強い。強すぎるんだよ！あたしはイ・ウーで決闘したけど手も足もでなかった。あいつは初代リュパンですら勝てなかった。何をやってもかなわない……過去それは証明されてることなんだよ」

「大丈夫だ理子。俺は負けない。昔とは違う」

「ムリ！ムリなんだよ！絶対にムリなんだよ！今すぐここから脱出するしか、生き延びる道は無い！」

「勝てない相手じゃない。それに俺はあいつを倒せる連中と知り合いだ。連中はここにはいないが倒せる奴がいるならそれは無敵じゃない」

「誰が倒せるって……」

「公安０の沖田、実家の薙刀娘、それと師匠……」

思い出すように俺は言った。

理子は合ってないが確かに師匠はブラドを圧倒した。

「理子」

俺は彼女の右手にそって握らせた。

「これ……」

「覚えてるか？城を逃げる前に俺が私した約束の弾丸だ」

「うん……覚えてるよ……毎日これを見て……理子をヒーローが助けてくれるのを待ってた……」

その言葉に胸を痛めつつ俺は頷いた。

約束の言葉を俺はあの時の気持ちで言う

「いつか助けにくるから……その弾丸は僕の宝物なんだ……預かってて……」

師匠に初めてもらった銃弾なんだがあの時はそれしか持ってなかったんだ……
子供ながら思い出になるようなもん渡せなかったのかね俺は……

「だから、今俺は約束する。その弾丸を俺たちが勝つまで持ってろ。ブラドから解放してやる」

ちゃりと理子の十字架を渡す。
ブラドからすっといたんだ。

「今の俺は理子を助けるヒーローだからな。任せとけよ」

そういうと理子は顔を赤らめた、
演技じゃない女の子らしい……
ハハ、新鮮だな

刀を鞘から抜いて理子に背を向ける。

「ゆ、優……」

「ん？」

「ブラドの４つめの弱点……は……胸の中央にあるの」

最期の弱点か……よし、それが分かればブラドを沈めることができる。

ブラドが視界に入る前に俺は思いだしたように止まり

「なあ、理子」

「？」

「これが終わったらまた、あのメイドカフェ行こうな」

返事を待たずに俺は飛び降りた。

「キンジ、アリア！」

ブラドと交戦中だった二人に合流する。

「優、理子は？」

「大丈夫だ。それよりブラドは？」

「銃弾が効かない。あの目玉模様を狙ってみたがジャンヌの言う通り４つめ目を見つけないと……」

キンジの言葉に俺は頷く。

「それは理子から聞いた。キンジ、アリア少し、俺に任せてくれ。ブラドを沈める方法がある」

「一対一でやるのね？あの化物と」

「ああ、一度負けた相手だからな。リベンジもしたい」

「いいわ。やりなさい優」

「サンキュー」

「ゲゥゥウアバババババハハ話はすんだか？」

ブラドが現れる。

「糞吸血鬼！お前と俺の一騎討ちだ」

「ゲゥゥウアバババババハハ。下らないジョークだな劣等種」

「ハっ」

戦闘狂の笑みで地面を蹴る。

行くぞブラド！

第９９弾　約束の弾丸（後書き）

すみません！ストック切れと忙しさのため日曜の更新ができないかもしれません……すみません！次回は火曜０時に更新になります

第１００弾　理子のヒーロー

まずは牽制だな
右手のワイヤーを壁に食い込ませると飛翔。
ブラドが見上げてくる
空中を飛びながらガバメント2丁を三点バーストで放つ。
目玉模様3つに直撃するがわずかな時間を得て弾が弾き出される。

「無駄だ椎名」

ああ、そうだな。
ブラドの嘲笑に同意しながら再び三点バーストでガバメントを放つ
再び、目玉模様に命中する。

「ほぅ、法化銀弾か？ガキが大層なもん持ってやがるな。だが、俺は銀も克服済みだ！」

ちっ！
再び、出てきた高価なホーリーを見ながら俺は左手のワイヤーをポールに巻き付け、ターザンのように屋上に降りて走る。
ブラドの後方だ。
こいつを沈める方法は一つジャンヌの時に使った。
フルバーストでの四点同時破壊しかない。
昔、選択肢になかった方法だ。
さっさときめさせてもらうぜ、吸血鬼
牽制に、ガバメントをフルオートで撃ちながらブラドに走りながら刀を抜く。
だが、ブラドは牽制にひるまず、５メートルはあろうかという携帯基地局アンテナを屋上からむしりとったところだった。

馬鹿力だな。

「人間を串刺しにするのは久しぶりだな椎名ぁ」

ごっと、横殴りに振るわれたヤリを飛んで交わす。
さらに、接近する。
片手のガバメントをしまいながら完全に油断しているブラドの懐に潜り込む。

「飛龍一式！風切り！」

居合いのモーションから振り抜いたそれはブラドの両手を切り落とす。

「おっ？」

ブラドが声を上げる。
数トンはあるかというヤリが地面に落ちていく前に俺は戦闘狂の笑みで

「あばよ吸血鬼」

両肩にガバメント、右脇腹に左腰のワイヤー、そして、胸の中央に右腰のワイヤーをそれぞれ照準する。

この距離もらった！
一気にワイヤーと銃弾を発射する。
先端がナイフになっているワイヤーがブラドの目玉模様に突き刺さり、ガバメントの銃弾が両肩に食い込む

「ぐ、ぎゃあああああ！」

断末魔の咆哮をあげてブラドが地面に仰向けに倒れる。

「優！」

アリア達の声が聞こえるがなんだ？あっけなさ過ぎないか？記憶のブラドがこんなに簡単に倒せるものか？

嫌な予感がして、後方に飛ぼうとすると突き刺さったワイヤーが抜けない。

「おしかったなぁ椎名ぁ」

こ、こいつ……

筋肉を膨張させてワイヤーを抜けなくしてやがる。

ワイヤーを切り離すより一瞬早く、ブラドがワイヤー郡を掴むと一気に引き寄せる。

馬鹿力にあがらえず前に引き寄せられ

「捕まえたぜ椎名」

「くっ……」

巨大な手に捕縛されてしまった。

「優！キンジ！」

俺が捕まったのでアリアが助けようとしたのだろう。

だが、無用だ。

「来るなアリア、キンジ！」

「いいのか椎名ぁ？」

「ぐっ……」

ブラドが握力を少しずつ強めてくるな、なんて力だ。

「ほらどうした？握りつぶすぜ？俺を倒すんじゃないのかぁ？」

ドン

右手のガバメントから一発だが、検討違いの方角だ。

「ゲルバババハハハとこ撃って……」

ブラドが言った瞬間、ブラドの背中に紅蓮の炎と爆発が起こった。

「おお！」

ふわりとブラドが浮いた瞬間、握力が弱まった。

背中のワイヤーでブラドが距離をとるとキンジ達の場所まで戻る。

「優！」

アリアが駆け寄ってくる。

ひりひりする両手ををさすりながら

「駄目だアリア、４つ目が見つからない」

「そ、それよりあんた今、何したの？」

ん？

「跳弾と武偵弾だな？」

「さすがだな。キンジ。っても……」

起き上がるブラドを見ながら舌打ちする。

背中に武偵弾受けて無傷かよ……

化物だな……

とはいえ……

大半のワイヤーはブラドに引きちぎられてしまった。

もう、フルバーストは使えないか……

俺の手で決めたかったが仕方ない。

「アリア、キンジ力を貸してくれ。４つめを見つけて四点同時攻撃で決める」

「分かったわ。でもあたし、実はもうたまが二発しかないの。たがら、同時攻撃の時は撃てって言って。それまで弾切れしたふりをする」

貸してやりたいが俺のガバメントも弾切れだ。

大量にマガジンは持ってきたが銀狼に理子の武器もろともカバンは捨てられたからな。

「ホームズ４世。おめぇもリュパン４世と同じようなホームズ家の欠陥品みてえだな。うさぎみたいにすばしっこい射撃の腕はともかく初代ホームズの推理力がまるっきり遺伝してないと聞いたぞ」

「それが何?遺伝、遺伝って粘着質ね。たまにいるのよ。そういう家系マニア。あのねぇ。あんたは遺伝子の書き換えと才能だけで強くなったみたいだけど人間は遺伝子だけじゃきまらないのよ。先天的な遺伝は確かに人間の能力をある程度決めてしまうわ。でも人間はそれ以上に努力や鍛練で自分後天的に高める事ができるのよ!理子に何も遺伝してないって言うんなら、あの子はその生きた証拠だわ」

理子……聞いてるみたいだな

「現にブラド!今、てめえが相手にしてる俺は数年前より遥かに強いだろ?」

「雑魚が群れをなして強気か椎名?だが、ホームズ家の人間が欠陥を補うパートナーがいるときは気を付けろときいたんでな。一人減らすか」

ぎろりとブラドがキンジを見る。

「ワラキアの魔笛に酔え」

ビャアアアアアアヴァイイイイイイイイイイイイ!

その咆哮ランドマークタワーを震度させるほどの大音量だ。

街にも聞こえたはずだ

ぐらぐらしながらなんとか息を整える。

「ど、ドラキュラが吠えるなんて聞いてないわよ」

尻餅をついてたアリアが震える膝で起き上がってきた時な、何?戦闘狂モードの暗示が解けた?
見ると、キンジのヒステリアモードもとけているようだ。
ヒステリアモード破り……暗示破りかよ……厄介だな。
ブラドが金棒を担いだまま近づいてくる。
「キンジ逃げろ!」

俺もがくりと膝が落ちる。
くっ、今の咆哮で……
横殴りにブラドが鉄棒を振るう。
日本刀を盾にぶっとばされるがキンジはアリアがかばったらしい。
よし、ワイヤーで……っ!
俺の視界にキンジが見える。
俺のようなワイヤーがないキンジは落ちるぞ

「キンジ!」

携帯用のワイヤーを投げてキンジに巻き付けると引き寄せ渾身の力で蹴飛ばす。
屋上に落ちたキンジにほっとしながら右足と左足のワイヤーで戻ろうとしたが作動さない。
ちょ……おい、嘘だろ?
ランドマークタワーの虚空に投げ出される。
言うまでもなく地上に叩きつけられたら即死だ。
ち、チクショウ……こんなとこで俺は死ぬのか?
みるみる遠ざかる空を見上げると屋上から飛び降りる影があった。
あれは理子……?

理子が必死に手を伸ばしてくる。

俺も必死に手を伸ばす。
数度触れ合い空中で手を繋ぐと理子は改造制服をひっぱるとそれはいつかみたパラグライダーに変わる。
空中を滑空しながら

「助かった理子。にしてもどうするかなぁ？」

理子に髪で体を支えてもらったので空中で腕を組んで俺は言う。

「このまま、逃げよう優！ブラドにはやっぱり勝てない！」

「逃げないよ俺は」

「で、でもブラドには……」

「ここで逃げたらもう、俺は自分が許せなくなる。理子はいいのか？」

「え？」

「いつか俺はいったな。４世４世さんって……」

ぎゅっと理子が唇を噛む

「今、謝らせてくれ。お前は４世じゃかい。峰　理子だ。ごめんな理子……」

「優……」

「倒すんだ奴を。倒さない限り俺も理子も前に進めない。あいつを倒して自由になろうぜ理子」

「やっぱり、優は理子のヒーローだね……優……私の名前を呼んで」

「理子」

「呼んで！」

ああ、何度でも呼んでやるさ。

「理子ぉぉ！」

理子の目が戦闘狂の目になる。

俺も目を開けると戦闘狂モードを覚醒させる。

「そうよ……私は理子！峰理子よ！」

パラグライダーが上昇していく。

「どうするのユーユー？ブラドの四つ目の弱点は……」

「それについてはローズマリーが教えてきた」

そう、戦闘中可能性を考えて狙ってみたんだ。

「いいこと教えてあげますの」

首をなめたのはおまけだがローズマリーは初め、舌を指で指した。

そして、ブラドは口を庇う動きを一瞬だがした。

理子に聞いた場所をはじめは狙ったがフルバーストが使えるなら次は舌を狙うつもりだった。
つまりあいつはブラドの弱点を知ってたんだ。

「理子銃はあるか？」

これは過去を断ち切る戦いだ。理子にもブラドと戦わせたい。

「うん、あるよお母様と同じとこに隠してる」

「よし、まずはキンジとアリアを回収して説明して攻撃に入ろう」

「うん！」

キンジをかばいながら戦うアリアが見えてきた。
さあ、ブラド次で決めるぞ！

第１０１弾　絶望の時間

「理子！説明任せたぞ！」

「うん！」

パラグライダーから俺は飛び降り、理子がキンジとアリアを抱えて空へ飛び立つのを横目に俺はデザートイーグルを取り出すとブラドが現れるのを一瞬、待つ。

「ああん？椎名死んでなかったのか？」

現れたブラドは鉄棒をとんとんと手で叩きながら言った。

「生憎だなブラド。俺があの程度で死ぬと思ったか？」

「ほぅ」

ブラドは黄金の目を少し細めると空中にいる理子達に目を向ける。

「何か作戦を立てたようだが無駄だ無駄だ。まあ、万が一もある椎名は殺しておくか」

ぶんとブラドが鉄棒を振りかぶった瞬間、俺はにやりとしてデザートイーグルをブラドに向けて一発放つ。

「どこ撃って……うお！」

再び、ブラドの後方で爆発が怒る。

跳弾射撃

「おらどうした吸血鬼！」

走りながら再び一発撃つと今度はブラドの頭に跳弾は命中した。
紅蓮の炎の中から上半身がぶっ飛んだブラドが見えたがすぐに再生される。
武偵は決して人を殺してはならない。
そんな決まりがなけりゃ、武偵弾で決められるんだがな……
「雑種が……ぐっ」
再びブラドの下半身が消し飛ぶ。
容量が大きいためか多少の再生時間は必要なようで時間稼ぎにはなる。
最期にフルオートでブラドに弾丸を叩き込むがこれは武偵弾でなく通常弾だ。
武偵弾は弾切れ……ハハ、５００万ぐらいこの戦闘で使ったな。ブラドがにやりとして鉄棒を拾う。

「小僧。武偵弾は弾切れかぁ？処刑の時間だ」

再びブラドが息を吸い込む。
ワラキアの咆哮で戦闘狂モードを解除する気か。
ならここが勝負どころだ！

疾風のようにブラドに走り、切り札を組み上げる。

じゃきじゃきとミンの連結槍のように組み上げたそれは黒い日本刀
さらに、腰から日本刀を抜き取る。
二刀流

「蒼龍！」

跳躍し二刀を上に振り上げる。

「流星！」

ズンと体重と技をこめた二刀がブラドの両手を切り落とす。地面に着地すると回転しながら両刀でブラドの足を切り飛ばす。

再生する暇は与えねえ！

椎名の二刀は速度と手数。

ぐちゃっとブラドの頭に刀を差し込むと戦闘狂の笑みで真っ二つに切り裂く。

手足を切断すればブラドは攻撃できない。

このまま、押してやる！

「なめるなガキが！」

一瞬、再生が早かった右手でブラドが鉄棒を振るってくる。

しゃがんでかわした俺はバックにとんとんと後退しながら建物の影に隠れる。

準備は整ったな。「優あんた！」

あきれたようにアリアが俺を見て言ってくる。

「今度は二刀流？あんたって……今度は三刀流にでもなるの？」

隠されたことが気に入らないのかアリアは怒りぎみだ。

「仕方ないだろ？これが俺の基本的な戦闘スタイルだからな」

「優、次の模擬戦は本気で戦いなさいよ。手を抜いたら許さないんだから！」

ああ、初めて戦った時のこと言ってるのな……

それはそうと

「みんな、理子から作戦は聞いたな？」

「ああ、だが優、ブラドは俺たちがどこに、弱点があるか気づいていることに気がついてるかもしれない。チャンスは一度しかないぞ」

キンジの言う通り、弾数から四点同時攻撃は一回のみ

「任せとけよ。そこは俺がなんとかするよ」

「ガキども！作戦会議はすんだか？」

背後からブラドが現れる。

二刀を構えて俺は振り返った。

「行くぞみんな！」

「オッケー」

理子は胸の谷間から小型の銃デリンジャーを取り出す

「いいわ」

「ああ」

アリアとキンジもスタンバイ完了だ。
俺が走り出す。
ブラドが鉄棒を振りかぶるが一気に加速し、両手ををクロスさせ十字を切るようにブラドの手を切り飛ばした。
だが、これでは、すぐに再生されてしまう。
再生する場所、関節部分に刀を置くと再生に刀が巻き込まれる。
異物が入ったことにより、ブラドの手がだらりと下がる。
さらに、鉄棒を踏んで俺はブラドの顎を蹴飛ばした。

「ぐお！」

ブラドが悲鳴をあげた瞬間だった。
雷鳴が夜空に轟いた瞬間、四発の銃声が響く。
地面に落ちながら見たのはブラドの舌に描かれた目玉模様に理子の銃弾が命中し、肩にアリアの一発、脇腹にキンジの一発が命中した。
だが……嘘だろ……

雷で照準がずれたのだろうか……アリアの一発が最期の目玉模様から外れた。

ブラドの目が歓喜にうち震えた目で呆然とする俺に向か再生された右手を張り手のように振るった。
完全に油断した俺だが、なんとか刀で防御態勢は作るがバンと冗談のような張り手で吹き飛ばされコンクリートの壁に背中から叩きつけれた。

「が……は」

肺から息がもれ、受け身もとれずに地面に落ちる。

視界が……赤く染まってる……
立たないと……
だが、体に力が……

「優！」

理子が駆け寄ってくる。
ば、馬鹿……逃げろ……この攻撃に失敗したら銃弾を失った俺達に勝目は……

「どうだぁ？４世？お仲間と共闘しても所詮、勝目なんかないんだ」

「ぶ、ブラド……」

震える手で理子は俺の刀を掴んだ。

ズンズンとブラドが歩いてくる。
目が笑っている。

「私は！理子だ！４世じゃない！」

ハイジャックの時に見せたような素早い斬撃だったがブラドは切られた部分を再生させ、理子を掴み上げてしまう。

「う……」

ブラドは顔に理子を近づけると嬉しそうに

「よかったな４世最後に解放されるかもしれない夢を見られてよ」

「理子！」

アリアが小太刀を抜いてブラドに突撃をかける。
キンジもアリアの小太刀を片方借りて、ブラドに攻撃をしかけようとしている。

「そういや、お前も優秀な遺伝子の持ち主だよなぁホームズ」

ザクリとブラドの右手に小太刀を突き刺し、理子を解放させようとアリアは試みるが再び、雷鳴が空を鳴らした瞬間、アリアの動きが鈍った。

「ほーら、捕まえたぜホームズ」

まるで、疾風のようにブラドの空いた手が伸びアリアを捕まえてしまう。

「アリア！理子！」

キンジが切りかかるより早く、ブラドが吠えた。

ビャアアアアアヴァイイイイイイ！

衝撃波でキンジが吹き飛ばされ、地面に転がる。
気絶したのか……

「は、離しなさいよ！」

アリアがブラドの手の中で暴れるがびくともしない。
理子も同様だった。

アリア、理子……キンジ……体が動かねえ……
まるで、精神と体が分離してしまったようだ。
ブラドが背中から羽のようなもの……いや、コウモリのような羽を出した。

「さあ、ホームズ、４世、ルーマニアに招待するぜ」

「お、お断りよ！」

アリアが拒絶するが逃げることができない。
まずいぞ……あれで飛んでいかれたら……

「っとその前に」

ブラドは倒れて動かない俺の方にゆっくり歩いてくる。

「ほっときゃ死ぬだろうが椎名、お前、はふざけたことをし過ぎたからな。殺しとくぜ」

アリアと理子を掴んだまま、ブラドが足を上げた。
俺の頭を踏み潰す気か

「ゆ、優！起きて！はやく！」

焦ったようにアリアが言うが体が……

「い、いや優希！優！」

理子の声も聞こえる……ああ、結局俺は君を……

ズンとブラドの足は地面に振り落ろされた。

「「優！」」

二人の少女の悲鳴が夜空にこだまする。そして……

「優希はやらせません」

ごっと、風を切り現れたローズマリーはブラドの足の裏に剣を叩きつけた。

ブラドが後退していくのを見ながらローズマリーは俺に向かいにこりと微笑むと

「助けにきましたの」

と、とんでもないことをいい放った。

第１０２弾　私は理子だ！

じゃりとコンクリートを削りながら身長を越え大剣を右手にゴシックロリータのドレスを風になびかせるローズマリー。
彼女は俺とブラドの間に立っている。

「どういう気だぁ？ローズマリー？」

ブラドはアリアと理子を離さないまま、言った。

「どうもこうもありませんの」

ローズマリーはにこりと微笑みながら

「優希は私の騎士様。殺すならお父様でも容赦しませんの」

その場で意識がある俺達は同時に驚愕する。
ローズマリーがブラドの娘だと？

「くっ」

なんとか体を起こし、壁にもたれ掛かれながら立ち上がる。

「優希寝てなくていいんですの？」

可愛らしく首をかしげながらローズマリーは言った。

「お前なんかに……心配される覚えはねえよ」

「そうですの？」

ローズマリーはそういうと再びブラドを見る。

「てめえ、ローズマリー俺と殺る気か？」

ブラドが言うのを聞きながらローズマリーの力は確かに強い。
ブラドを倒すなら間接的にでも力を利用するのがベスト。
ローズマリーがブラドを殺しても武偵憲章には引っ掛からない。
だが、その考えは甘かった。

「私、優希以外には興味ありませんの。優希に手を出さないなら邪魔はしませんわ」

な、何？

「ほぅ、つまりそこの小僧を見逃せばホームズと４世を連れていくのを見逃すってんだな？」

「ぶっちゃけちゃえばそうですの」

笑顔で言うローズマリー。

「いいだろう。椎名は見逃してやるよ」

ブラドが背中を向ける。
ま、まずい。
ローズマリーが現れる前と状況が変わってない。
震える手で武偵手帳からラッツォを取り出す。
そして、注射器を胸に突き刺すとびくんと体が痙攣する。

ラッツオは復活薬だ。
こんなぼろぼろの状況で使うのは初めてだが、よし、動ける。
ぽたぽたとしたたり落ちる血を見ながら日本刀を手に取る。

「待てよブラド」

ブラドは振り返る。

「ゆ、優！もういいわ！寝てなさい！」

「優……」

アリアと理子がブラドの手ににぎられながら言ってくる。
はっ、寝てろだあ？
ここで見逃してアリア達を連れ去られてしまうくらいなら死んだ方がましだ。
万が一を考えて携帯で土方さんと実家にはメールを出した。
俺が死んでも公安０と椎名の家がアリア達を救出してくれるはずだ。

「優希？まだ、やるんですの？」

「当たり前だ」

「そうですの」

ローズマリーはそういうとばさりと羽を広げると屋上の鉄塔の上に立つ。
見学するということか……

「おい、ローズマリー！この場合はどうなるんだぁ？」

ブラドは俺の殺害をローズマリーに確認しているのだろう

「殺さなければ私は何もしませんわ」

「つまり、腕一本もぎ取るぐらいは許されるって訳だゲルバババハハハ！」

ズンズンと地鳴りをあげながらブラドは歩いてくる。
なめられたもんだな……足だけで倒す気かよ。
だが、無限の回復力がある以上……

「……」

一本剣をしまい、黒い日本刀で右手を上段、左手を剣の刃に持ってくる。
刺突の四連撃。
沖田ははこれを0．1秒で繰り出せるが俺は最速で0．5秒かかる。
怪我で更に速度は落ちるだろう。
これまでのブラドとの戦闘で魔臓の再生は0．3秒と目星は付けた。
怪我の状態からもうとっくに限界は越えている。
大技は後、一回が限度だ。
だが、やるしかねえよな……武偵はあきらめるな！決して諦めるな！

「悔しいか4世？」
ブラドが理子を盾のように構える。

「う……」

締め付けられて苦しいのか理子は苦悶の声を上げる。

「理子！」

魔臓の上に理子を持ってくる。
盾にする気か……
これじゃ……

「お前のヒーローさんが再び、沈む絶望を見せてやるゲルババババハハハ！」

理子は泣きながら俺を見る。

「優……助けて……」

理子の涙が地面に落ちていく。
それと、同時にかしゃんと音を立てて、あの弾丸が落ちる。
一発のみの弾丸では状況は変わらない。
その時、ごっと風が吹いた。

（優希、それをブラドに撃ち込め）

え？
とっさに振り返るがローズマリー以外、誰もいない。
そして、あの声は……もう、この世にいない……

「どうした椎名！こっちから行くぜ！」

ブラドが右足を振りかぶり、熊をも一撃で粉砕できそうな蹴りを放ってきた。

「っ！」

携帯用のワイヤーを投げると巻き戻して、壁を蹴る。
ブラドの足元を抜けて、弾丸を回収する。
ガバメントを抜いて、マガジンに弾丸を詰める。

「ブラドぉ！」

「また、無駄弾か？こりねえな」

ドン

私は一発の銃弾。
なぜか、レキのセリフが頭に過った
ギン　ギンとアリアや理子を盾にされないように跳弾射撃の弾丸は
ブラドの魔臓の1つに命中する。

「無駄だ椎名。傷なんぞ……ん？」

ブラドが怪訝そうな声を上げる。
傷が塞がっていない。

「椎名、何しやがっ……うお！」

「お姫様は返してもらうぞ」

と、ヒステリアモードのキンジが小太刀でブラドの手を切りつけ、
二人を脇に抱えると俺の方に走ってくる。

「キンジ！」

「キー君」

アリアと理子が驚いてキンジを見ている。
やれやれ、気絶したふりかよキンジ……ヒステリアモード破りを防ぐ方法何か見つけたのかな

「どういうことだ？傷が塞がらねえ！」

ブラドが困惑した声をあげている。
これは……

「ゆ、優ブラドはどうしたの？」

「あの弾丸は何？」

アリアと理子がきいてくる。
だが、チャンスは今しかねえよな

「分からんが、恐らく、魔臓の動きを破壊するか一時的に停止させる作用があったみたいだな。差し詰め、ヴァンパイアジャマー」

たく、師匠……あんたまさか、昔にこの状況、予測してたのかよ……

「ヴァンパイアジャマー？」

アリアが聞いてくるが作用がいつ、切れるか分からない。
今なら、同時破壊でなくてもブラドを倒せる。

「みんな、俺は舌の魔臓を破壊する。後は任せる。決めるぞ理子！」

「うん！」

理子にバタフライナイフを渡し、キンジに日本刀一本をかすと俺達はブラドに駆けた。

「く、来るな！」

魔臓という圧倒的なアドバンテージを失ったブラドが怯えた声を上げる。

初めてだろうな魔臓が止まった状態で戦うなんてよ。

「終りだブラド！飛龍一式！風切り！」

口を閉じたブラドに風切りをお見舞いする。

歯ごと舌の魔臓を切り飛ばす。

「ぐあ！」

「キンジ！」

「ああ、行っておいでアリア！」

ブラドを牽制していたキンジの手に足を乗せて高く舞い上がったアリアがブラドの肩刺し貫く

これで初期の弾丸で破壊されてない魔臓は後、１つ。

「「「行け（きなさい）！理子！」」」

「よ、４世！」

ブラドが右手を振るう。
理子は戦闘狂の笑みで髪をブラドに巻き付けるとくるりと腕を支点にブラドの懐に入りこんだ。

「よ、４世ぇ！」

「私は！理子だ！」

理子は渾身力でブラドの最後の魔臓にバタフライナイフをねじ込んだ。

「ぎゃあああ！」

絶叫をあげて、ブラドは魔臓から血を吹き出し、その巨大な体を地面に沈めた。
ピクピクと痙攣している。
やったの……か？
ブラドは起き上がらない。
つまり……

「勝った？」

ローズマリーの方を見上げてみるがすでに奴はいなかった。
ということは……

「勝ったの？」

アリアも俺を見ていってくる。

「ああ、俺達の勝ちだ」

「しゃあああ！勝ったぞ理子！ブラドを倒したんだ！」

「あ……本当に？」

理子が呆然とて言う。
あの絶望的な状況から一変した勝利。
まさに、奇跡の勝利と言ってもいいだろう。

「約束守ったぞ理子」

おれはにっと笑い。
理子は感動を飲みこむようにしながら一瞬、目を潤めて、次にかあああと赤くなった。

「か、勘違いするなゆ……」

あれ？景色がぐらりと揺れる。
あ、やべ今回は流石にやりすぎたか……

「ゆ、優！」

理子の腕の中に落ちながら俺の名前を呼ぶ少女の声を聞きながら思った。
諦めなくてよかった……
理子……これでお前は自由だな……おめでとうそこまで思ってから俺の意識は途切れるのだった。
はい、今回の護衛……おしまい

第１０３弾　バニラ色のキス

サイド　理子

私は倒れた優希の傷の手当てをして膝枕で寝かせて彼の寝顔を見つめていた。
ありがとう……優
、アリア……キンジ
「神崎・ホームズ・アリア。遠山キンジ」

キンジが出口を塞ぐようにたっている。優をそっと地面に寝かせる。

「あたしはもう、お前たちを下に見ない。騙したり利用したりする敵じゃなくて対等なライバルとみなす。だから下に約束は守る」

空に滞空させてたパラグライダーをリールで巻き戻す。

「Ａｕ　ｒｅｖｏｉｒ　Ｍｅｓ　ｒｉｖａｕｘ。あたし以外の外の人間に殺られたら許さないよ」

「理子！」

背後にアリアの声を聞きながら私はパラグライダーで空を飛んだ。
気分がいい。
まだ、あいつの問題はあるけど優達に頼るかはまた、考えよう。
助けてと言えば優は助けてくれる……
だって彼は理子のヒーローなんだから……

サイド　アリア

「やられたな。これで二度目だよ」

キンジの言葉を聞いてあたしは目をぱちくりした。

そうね。

理子の一番の得意技は逃げ足なのよ。

「ったく派手にやりやがる」

突然の声にあたしとキンジは振り替えると黒い髪にスーツ、右の腰に日本刀を付けた男が歩いてくる。

「だ、誰？」

まさか、ブラドの知り合いなんて線もありうる話だが男は左目をとじながらめんどくさそうに

「よせ、神崎、遠山。俺は公安０を率いてる土方　歳三だ。そこに寝てる椎名　優希の知り合いでもあるけどな」

「公安０だって！」

キンジが目を丸くした。
あたしも驚いた。
以前に、公安０の沖田と会ったが今度は公安０を率いているという人まで出てきた。
こいつの人脈はどうなってるのだろう……

「そんなに驚くんじゃねえ。別にとって食おうってわけじゃねえんだ。ブラドを引き取りにきたんだよ」

「今更、後から出てきてか？」

キンジが言う。
無理もない。
言い方からして公安０はあたしたちの戦いを見てたんだ。

「そんなに怖い顔すんじゃねえよ。俺達にもいろいろある」
後ろから警察がわらわらと倒れたブラドに群がっていく。
どうやら、逮捕はしてくれるようだ。

「あ、でもブラドはあたしのママの裁判の証言を……」

そうだ。
これをしないと戦った意味が薄れてしまう。
しかし、土方さんはふっと微笑むと

「裁判には出るように計らってやるよ。迷惑かけちまったからな。神崎、明日の朝時間とれるか？」
「え？う、は、はい」

「短くてすまねえが１時間だけ神崎かなえとの面会を取り付けてお

いた。アクリルバンなしの面会だ。野暮な監視はなしだ。ただ、神崎かなえを脱走させようとしたりなんかするなよ？やれば俺達が責任を持ってお前を殺さねえといけなくなるからな」

え？　ママに？

1時間も……アクリル版なしで？

今までは面会時間はわずか数分、しかもアクリル版越しだった。常識では考えられない。

「一体どういうルートを使ったんです？」

キンジがあたしの考えを読んで言う。

「大したことじゃねえよ。仕事柄、上には顔が聞くんだよ。それに、今回の面会は優希の希望だからな」

「優の？」

あたしは驚いて優を見る。

「ああ、ブラドを倒して逮捕させてやるからアリアとかなえさんを面会できるようにセッティングを頼まれてな。いくらか、こいつには仮もあるから頼まれたんだがな。それに、個人的にも不当逮捕の人間に会えないのはおかしいと俺は考えてる」

まただ……沖田といい公安0の人間はママが無罪だと確信しているようだ。

「ま、神崎かなえの無罪を知ってるんなら！」

なぜ、助けてくれないのと言おうとしたが土方は首を横にふる。

「証拠が揃っちまって裁判で有罪が確定してんだ。俺達公安０に出来るのは証拠を捏造した。犯人を殺すことだけだ。だから、神崎、神崎かなえの無罪を証明したいなら犯人を捕まえ続けろ。俺も可能な範囲で協力してやるよ」

ぐっと唇をかんでそれ以上の追求はやめる。
ママと直接面会できる。
今はそれでいい
気絶している。
優を見てなぜか顔が暑くなった。
ど、奴隷のくせに本当によくわからないやつね……
理子を助けて、あたしを気づかって公安０に働きかけてくれていた。
ありがとう優……

「いやぁ、お兄さん相変わらず不死身ですねぇ。化物と戦って打撲や擦り傷、軽い輸血や点滴だけで2日入院だけですむなんて」

「余計なお世話だアリス！てかなんでお前が武偵病院にいるんだよ！」

頭に包帯を巻いて全身、擦り傷だらけの俺が言う

「私、お兄さんの担当ですからぁ」

「最悪だ……」

いつも中華料理屋炎でバイトをしているアリスはアンビュラスのSランク武偵でもあるのだ。

「今日は安静にしといてくださいよお兄さん？明日には退院できますからねぇ」

出ていってしまったアリスの方を見ながら俺はため息をついて書類を取り出した。

司法取引の書類だ。

また、書くのかよ……

まあ、ランドマークタワーの屋上で炸裂弾使ったりしたから仕方ねえか……

でも、夜でいいや。

ぱさりと書類の束の作成を諦め、布団を被るといい眠気が襲ってきた。

かちゃりと音がする。
浅い眠りと半覚醒状態の俺はバニラの香りから理子だと推測する。
だが、眠いから体を動かしたくないから寝たふりするか

「寝てるのか？優？」

男しゃべりで理子が言ってくる。
裏理子だな。

「……」

しばらく沈黙が続く、うう……理子俺の寝顔見てるのか？

「ありがとう……優助けてくれて……」

バニラ香りが濃くなり、唇に何かが……
！？
慌てて目だけ開けると目を閉じた理子がどあっぷで……さらに、理子がゆっくり目を開けた。

「……」

「……」

キスしたまま、一瞬、固まる。

「！！！」

理子が慌てて離れる。

「り、理子？」

「か、勘違いするな！こ、これはお礼だ！」

「いや、お礼って」

ぼんとアリアみたいに赤くなった理子は目をそらしたが
小悪魔の笑みに戻る。

「ん？くふ、ユーユかっこよかったよ。理子の二番あげちゃった」

「はい？」

俺が言った瞬間、ばさりと何かが落ちる音。
床を転がるのはも、ももまん？
まさか！

「ゆ、優……」

「優先輩……」

「……」

げっ！

うつむいてるアリアにマリ、レキは無表情に花を持っている。

レキが二人の前に出ると

「優さん。お見舞いです」

「あ、ああ」

とレキが病室を出ていく。

それだけ！レキさん！助けてください！

「り、理子二番って何？」

アリアが理子に聞く。

「くふ、二番は二番だよ」

そういって理子は俺にパチリとウインクして病室の窓からワイヤーで降りていった。

に、逃げやがった。

「優先輩……今度は理子先輩ですか……私が目を離した隙に……」

「せっかく、ママに会えたから気分よく来たのに調教が必要ね優」

ゆらりと二人が拳銃を取り出した。

ハハハ……土方さん約束守ってくれたんだな……

にしても理子のキスは相変わらずのアリア達をからかうためだった

訳ね……
二人の銃が俺に向くのがゆっくり見えてくる。
防弾布団を蹴飛ばしながら
「助けてくれぇ！」
と窓に走るのと
「風穴ぁ！」
「浮気者は死んでもください」
と、ふたりの銃が火を吹いたのはほぼ同時だった。
ああ、日常だなぁ……

ブラド編完

第１０３弾　バニラ色のキス（後書き）

ブラド編はここでおしまいになります。
次回は数話、日常を挟んだ後、再びオリジナル編に入ります。
レキもパーティーに入りますのでハイマキファンの方はお楽しみに。
白雪は……ごめんなさい。
次のオリジナル編は多少、長くなるか神戸編に匹敵すると思います。
ローズマリーも出てきますし、優の過去も一部が暴かれます。

第１０４弾　椎名優希の１日

アリア達に病院の窓から叩き落とされた次の日、退院した俺は装備科。
つまり、アムドを訪れていた。
ひらがあやと書かれた部屋をノックする。
「はーい！開いてるのだぁ」
ドアを開けると、平賀さんは何かの作業をしていた。
実質、Ｓランクであるのだが法外な金を吹っ掛けたり少しだけいい加減な仕事をする彼女だが唯一この学校で信用してる点がある。
「おお、椎名君なのだ！今日はどうしたのだ？」
「急で悪いんだがこいつのオーバーホールを頼みたいんだ」
子供っぽい平賀さんの声を聞きながら外して置いた、ワイヤーの装置郡を机の上に置く。
「まいどありーなのだ！値段は同じで引き落としでよかったのだ？」
「ああ、それと、新しい日本刀ないかな？」
前の奴は、ブラドのせいでぼろぼろになってしまったからな。
「それなら丁度いい業物があるのだ」

そう言って平賀さんは木筒を取り出してくる。
箱を開けると俺はほぅと唸った。
見事な業物であることが分かる。

「名付け名は『蒼神』、『機神』。どちらも同じ人が打った一刀限りの名刀なのだ。名前もしびれるかっこいい名前なのだ」

こ、こいつは欲しい……実家にあるあれらには及ばないものの、銀のコーティングまでされていて、対ステルスには非常に有効な武器だ。
切れ味も一目見ただけでも疑いようがないぐらい鋭いだろうな。
試し切りしたいとうずうずするが……

「ちなみに、いくらだ？」

「椎名君はお得意さまだし、負けにまけてセットで８００万でどうなのだ？もってけドロボーなのだ」

それくらいするよな……先日まで使ってた日本刀が１００万くらいなのを考えると破格だ。
１０００万以上を提示されても可笑しくない刀なのだ。

「分割２４回払いでいける平賀さん？」

「オッケーなのだ」

そういうと平賀さんは筒を俺に渡してきた。

「い、いや今、持ち合わせが……」

「月末までに用意してくれれば問題ないのだ。お金に関しては椎名君は信用してるから裏切ったらひどいのだ」

クエストやらないとダメだなこれ……

日本刀の一本『蒼神』を手にとり、鞘から抜く。

「おお！かっこいいのだ！」

パチンと鞘に戻してから

「それで、ワイヤーの整備はいつ終わる？」

「明後日までには終わらしとくのだ」

「じゃあ頼む」

了解なのだという声を後ろに聞きながら俺はアムド棟を後にした。

「おっ」

外に出ると見知った顔を見つけたので

「レキ！」

黙ってこちらを見てきたレキに走りよる。

「昨日はお見舞いありがとな。そいつはあの銀狼だろ？」

こくりとレキは頷くと、付き従うように歩いていた銀狼の頭を撫でながら

「ハイマキと名付けました」

「ハイマキ？そうか、よろしくな」

俺も頭を撫でようとしたんだが……

ガブリ

「いたたた！」

手を噛みやがったこいつ！

「ハイマキ、やめなさい」

レキの声に口を引っ込めるハイマキ。

こいつ、俺に敵意持ってやがる。

なんでだ？

まあ、いいか

「レキ、飯食ったか？お見舞いのお礼におごるぞ。ハイマキにも肉を出してもらうからさ」

お見舞いにお礼ってへんな感じだけどな。

だが、レキは首を横に振る。

「そうか……無理には言わないけどな。じゃあ、またな」

「はい」

レキはそう言うと歩き出してしまった。

ハイマキが振り返ってまるでざまあみろと言われてる気がした。

なんかむかつくぞ

ん？

振り替えると影がさっと建物に引っ込む。

まあ、いいけどな……

さて、どっかで飯食ってぶらぶらするか

今日は休日なのでアムドに顔を出したら学校にはもう用がない。

都心部に繰り出そうかな……

そんな時、携帯の着信音。

ん？誰だ？

理子

件名　助けて

え？

慌てて、内容を確認すると秋葉原の前に理子と待ち合わせした店の住所と写真が添付されていた。

そこには理子が縛られ、猿轡をされている写真
そして、誰にも言わずにこいとかかれている
理子！まさか、ブラドの仲間か？
くそ！
舌打ちしながら
走り出す。
携帯用のワイヤーを駆使しながら寮まで戻ると、虎児から返してもらった隼に飛び乗るとエンジンをかける。
爆音と共に発進する。
理子……
ただ、彼女のことを考えながら……

２０分後

「で？なんだこれ理子……」

「やだなぁユーユー約束したじゃん！また、このお店こようって」

「いや、したけどさ」

回りはメイドさんばかりだ。
胸元を強調してるメイド服を着ている理子と俺はプライベートルー

ムでなぜか話をしていた。
というのも刀を手に飛び込んだらここに案内されて今に至る。

「紛らわしいメール送るなよ……本気にしただろうが」

「くふっ、ユーユー理子のこと心配だったんだ？」

小悪魔みたいな笑みを浮かべる理子

「ま、友達だからな心配ぐらいするさ。それにな……」

ありふれたことかもしれないがこの手に届く相手だけでも守りたいと俺は思ってるから……
あの赤い光景の中で憎悪に満ちたあいつの目が忘れられない。
あの罪を償うために俺は……

「ユーユー？」

理子がきょとんとして見てきたので首を横に振る。

「いや、なんでもない」

「そうなの？嘘ついてるならプンプンガオーだぞ？」

それから2時間ぐらいメイドさん達を交えて王様ゲームで理子とポッキー遊びしたりといろいろあったがめんどくさいので割愛する。
ともかく俺達は店を出て

「で？どうする理子？学園島に帰るなら送ってくぞ？」

隼を指しながら言うと理子はちょっとだけ迷ってから

「うーん、理子もう少し、秋葉原にようがあるんだ」

「そうなのか？付き合おうか？」

「わあ、本当？じゃあ、ユーユーの新しい女装のコスチュームを……」

「帰るよ」

「あ、ユーユー」

理子が腕に絡み付いてくる。

あ、おい胸を腕におしつけるな！

「はーなーせ！」

「やーだ」

なんかデブの男がリア充爆発しろとつぶやきながら歩いて言ったぞ。

ともかくも、女装させようとする理子から逃れて学園島に戻ってきた。

どうしようかな……ゲーセンでも行くか

隼でゲーセンに行くと以外な人物と出会った。

「ジャンヌじゃないか」

「椎名か？」

振り返ったジャンヌのそばにいくと

「なんだよ。お前も来るんだなゲーセン」

「いや、少し、興味本意で入っただけだ。だが……」

ジャンヌの視線の先にあるのは聖剣デュランダルと書かれた剣を持つ獅子のぬいぐるみだ。
一昔前に流行ったゲームのヒロインが気に入っていたデザインが商品化されたらしい。

「ほしいのか？」

「な、何を言う椎名！私が興味があるのはデュランダルの名前であってだなぬいぐるみに興味など……」

ああ、つまり欲しいんだなジャンヌ……初めは本当にデュランダルに引かれたのかもしれんが
言い訳を続けるジャンヌの横でお金を入れてチャレンジしてみる。

「む？」

ジャンヌもその光景をじっと見つめる。
いけるか？
下降のボタンを押し込むとクレーンが下がり、人形にひっかかる。
丁度、体と剣の間に入った。
よし、いける！
レオポンの時とは違い、一回でとれたな。

「ほら」

人形を差し出すとジャンヌは戸惑ったように

「お前にもらう理由がい」

「ブラドの情報くれただろ？安いお礼だがほしいんだろ？」

「べ、別に私はそんな可愛いものに興味など……」

かわいいって言っちまったな。

恥ずかしそうにするジャンヌも違う一面を見てるようで新鮮だな

「じゃあ、捨てといてくれよ」

「な、何？こ、こら椎名」

ジャンヌにポンと人形を投げ渡すと俺はさっとゲーセンを後にする。

「す、捨てろと言うなら捨てておいてやる」

と、後ろから聞こえてきたので苦笑しながら隼を発進させた。

一旦、部屋に戻ってみたが部屋には誰もいなかった。
時計を見ると午後5時を回ったところだった。
軽く汗を流すかな?
ピーンポーン
ん?このつつしみやかなチャイム音は?
「あ、優君こんばんは。キンちゃんいるかな?」
巫女服姿の白雪だった。
手には重箱らしき包みを持っている。
「いや、キンジもアリアもいないんだ」
「アリアもいないの?」
まさか、デートと呟き出したのでこいつはやばいと冷や汗が出る。
「キンジは武藤か不知火と遊ぶって聞いたけどな。アリアは多分、公安0に行ってると思う」
半分嘘で半分は真実だ。
キンジがどこにいったかは知らんがアリアは昨日、かなえさんと会った後、土方さんにかなえさんの事件の資料を閲覧させてもらえることになったらしく公安0に行っているのだ。
「公安0……」
白雪はちょっと、考えるようにしていたがデートでないとわかるとヤンデレオーラを発するのをやめてくれた。
ふう……

「あの、これよかったらキンちゃんに渡してくれかいかな？優君もよかったらどうぞ？」

「ありがとう白雪」

受け取ってから食べるのはキンジとだなと思った。
だって、俺一人で食ったのばれたらなんか怖いし

「じゃあ、私掃除してから帰るね」

「いつも悪いな」

「ううん、キンちゃんのためだから」

確かにそうなんだがキンジと同じスペースで生活してるので必然的に白雪が掃除してくれたら部屋はピカピカになって過ごしやすいのだ。
なのでお礼を言うのは間違いではないのである。

「じゃあ、俺はでかけるよ」

「いってらっしゃい優君」

白雪の声を背に俺は出掛けるのだった。

軽く走り込んでから筋トレして、素振り等を行う。
トラウマがほとんど消えたので素振りもメニューに加えたんだがやはり、多少の鈍りはあったらしく、軽い筋肉痛になったりもしていたが最近ではそれもなくなった。
蒼神と機神を抜くと夕闇が近い空に掲げてみる。
いいな、この刀気に入った。
なんか試し切りするものないかなと思ったが人工物ばかりでそれはお預けだった。

「そらそろ、飯にするか」

食べにいくので汗を吹いて看板裏を後にしようとした時、電話がなった。

「ん？」

見ると藤宮　奏と書かれている。
おお、久しぶりだな
相手がテレビ電話希望なのでボタンを押すとぱっと相手が映る。

「お久しぶりですお兄さん」

「あれ？千夏ちゃん？」

相手は奏ちゃんの妹の千夏ちゃんだ。

「はい、その節はありがとうございました」

「気にすんなって。助けたいから助けたんだから」

あの神戸の事件でランパンが完全に敵になってしまったりしたがいい、出会いもあった。

それが、今では日本でトップクラスのお嬢様となったこの二人、性格には千夏ちゃんだ。

「本当ならもっとお礼したいんですけど1億くらい」

「ええ！」

「嘘でーす」

直後に言われたのでなんかがっかりだよ千夏ちゃん……

千夏ちゃんはクスクス笑いながら

「でも本当にお金に困ったら頼って下さいね。お兄さんなら無利子で貸しますから」

貸すの！まあ、魅力的だけどな……

「ところで奏ちゃんは？それ奏ちゃんの携帯だろ？」

「あれぇ？お兄さんお姉ちゃんが気になるんですか？私と話ながら」

なんだそのチシャ猫見たいな笑い方は

「ま、あの後どうなったか聞いてないしな」

ブラドとの一見でいろいろ忙しかったからな。

「お姉ちゃんは兵庫武偵高付属に転校していろいろと勉強してますよ」

「へー、学科は？」

「まだ、仮決めなんですがアサルトです。ちなみにランクはEですね」

なんで、またアサルトなんだ？

まあ、仮決めだからいろいろとまだ、考えてるんだろうな

「で？その本人はどこに？」

「お姉ちゃんですかくふふっ」

千夏ちゃんがチシャ猫の笑みをした瞬間

「千夏？誰と話してるの？それ私の携帯……」

「はい、お姉ちゃん」

「え？」

画面がくるくる回る。

投げられた携帯が奏ちゃんの手に入ったようだ。

「よう……ひ……さ……しぶ……り？」

「え？優？え、えっえ？なんで？」

俺は全身に汗を書いていた。

トレーニングじゃなくて冷や汗な……

「どうですかお兄さん？お姉ちゃんのサービスショットは？」

こ、この小悪魔め

「や、やだ！きゃあああああ！」

風呂上がりらしかった奏ちゃんはバスタオル一枚だった。

くるくると携帯が回り、地面に落下したようだ。

「ち、千夏ぅ！」

怒ったような声が携帯から聞こえてくる。

「お姉ちゃん何度もお兄さんの携帯にかけようとしたのにそのたびにやめるから後押しだよ」

「だからって風呂上がりにやることないでしょ！」

「フフフ、ごゆっくりぃ」

「ち、千夏ぅ！」

パタンとドアが閉まる音。

どうやら千夏ちゃんは部屋を出ていったらしい。

「おーい、奏ちゃん！」

「こ、この変態！少し待ちなさいよ！」

奏ちゃんはぱたぱたと何かをしていたようだが１０分も待たされた時、画面がようやく動いた。

「お待たせ」

なぜか、奏ちゃんは髪を整え、兵庫武偵中の制服を着ていた。
なかなか、似合ってるな。

「遅いだろ！なんで１０分もかかるんだよ！」

「し、仕方ないじゃない！バスタオルのまま話せって言うの！相変わらずの変態！」

「テレビ電話切ればいいだろうが！」

「そ、それだと…ゆ…かおが……ない」

ん？なんだ？後半が聞こえにくかったぞ？

「なんだって？」

「ああ！もういいの！優は何してたの？」

「俺？新しい刀を手に入れたからトレーニングしおわって帰るとこ

だ」

「ふ、ふーん。また、女の子と一緒じゃないの？」

「女の子？」

「れ、レキさんとか……マリさんや、りこりんさんとか……あ、アリアさんとか」

「いやいや、俺年がら年中女の子といるわけじゃないぞ？」

「じゃあ一人？」

「ああ」

「そうなんだ」

なをか奏ちゃんの機嫌が治ってきたな。

「兵庫武偵中のアサルトだって？」

「千夏から聞いた？うん、全然私駄目で……」

それから一時間以上話してから携帯の電源がやばくなってきたので

「そろそろ電池がやばいから切るな。頑張れよ奏ちゃん」

「あ、優！」

「ん？」

「また、神戸にくることあったらとま……」

ピーと携帯が切れた。

ああ、電池切れか……

帰ってメールだなと思いながらその場を後にする。

時刻は午後7時、飯食わないとな

一度戻って隼で行くかな

中華料理屋炎は夕食時であり、武偵高の生徒で混雑していた。

「いらっしゃいませ！あ、お兄さんじゃないですかぁ」

アリスが動き回りながら言ってくる。

流石に、止まる余裕はないらしい。

「すみません！チャーハン追加で！」

「はいはい、店長！チャーハン1追加です！」

「おう！」

厨房から野太い声が返ってくる。

さて、座る席あるかな……

「優せんぱーい！」
「ん？マリか？」
見知った顔の後輩を見つけたのでテーブルに向かう。
「一緒に食べましょうよ！偶然先輩に会えるなんてもう、運命ですね！」
「そこまで大げさな……」
ん？マリの前に座っていた二人が軽く頭を下げた。
「あ、優先輩紹介しますね。私の友達の火野ライカと後輩の島麒麟です」
「ども」
「初めましてですの」
それぞれ、まったく特徴が違う二人だな。
一人は見覚えがある。
アサルトで男女と後輩に言われてるのを聞いたやつだな。
ちらっと見たが、筋はいいやつだな。
もうもう一人は……
ああ、確か、去年の理子のアミカだ。
フリフリの制服は理子が指示したんだろうな。
「ネギラーメンとチャーハンと餃子！」

「はいはーい！」

アリスに注文してからマリの横に座る。
そこしか空いてなかったんだ。

「優先輩はどうしたんですか？」

「今日は一人だったからな。いろいろと遊んでたんだ」

「ちっ……」

は？舌打ちが聞こえたぞ？
気のせいかデートチャンスがとか聞こえたし……

「あなたが椎名様なんですの？マリ様のアミカの」

島麒麟だ。

「まあな、お前は去年の理子アミカだろ？何回か見かけたからな」

「理子様の知り合いですの？」

「ああ、友達だ」

「……」

無言でマリが俺をにらんでくる。
なんなんだ？

「アタシも一度話してみたいと思ってたんすよ」

「ああ、アサルトで何回か見たな」

「アリア先輩との模擬戦も見てたんすけでやっぱ、アリア先輩には敵ませんか？」

「ん？」

「いえ、椎名先輩ってアサルトでは伝説的な先輩じゃないすか？入学試験で遠山先輩と教官を叩き潰してSランクに選ばれた……それに、最近では先輩が本気で戦ってないって周りでは言われてますし」

チラリと横に置いた刀を見てライカは言ってるようだな。

ま、切り札は隠すから切り札なんだが使ったらもう、ばれてると思った方がいい

「で？本当のとこはどうなんすか？」

「本当だよ」

「かっこいいんだよ優先輩！中国のSランクの犯罪者相手にしてもまったく引かなかったし」

マリの敬語じゃないのを聞くのは初めてだな。

「へー、今度戦闘訓練お願いしたいんすけど駄目ですか？」

「お前は確か、アサルトライフルだろ？構わないけど……」

「よっしゃ」

「麒麟は不服ですの」

「私も……不服です……」

ゴゴゴと二人に睨まれて俺達は引いた。

「な、なんだよ」

「お姉さまは麒麟のアミカですの！お姉さま麒麟のですの！」

「優先輩は私のです！」

いや、それぞれに言われてもな……

「お待たせしましたぁ」

そんな時、アリスが料理を持ってきた。

「両手に花とはこのことですねぇお兄さん。今度は後輩ですか？たらしですねぇ」

「はい？」

「たらし？」

くるくる回りながらアリスは言いたいこと言って言ってしまう。

うお！３人の目が痛い！

「断じて違うぞ！」

「優先輩って意外に持てるんですよね」

「へー、詳しく聞かせてくれよマリ」

ライカが興味を持ったらしく聞いてくる。

「まず、私が知ってるだけでアリア先輩、レキ先輩、理子先輩、私、アリス、神戸では千鶴先輩、藤宮姉妹……後は……ローズマリー？知ってるだけで9人いますね」

「最低ですの……」

「流石に引くぜ」

「おいこら！お前ら！みんな友達とか後輩だ！マリ！変な誤解を招くこと言うな」

「気づかずは本人のみなんですね」

「大変だなマリ」

「たらしがアミカなんて同情しますの」

なぜなんだ……後輩にはたらしと認識されちまったらしい……く、くそお！

誤解だと言いながら飯を食ったが解けるかは怪しいとこだな……はあ……

食事が終わり、三人と別れた後、バス停でアリアを見かけたので隼を押しながら声をかける

「優？今帰りなの？」

俺に気付いたアリアが言ってくる。
私用なのでワンピース姿のアリアだ。

「お前も帰りかアリア？」

「ママの裁判の件で公安０の土方さんに会ってきたのよ。いい人ね土方さん」

「ま、あの人は俺も尊敬してるからな」

「へー、優も尊敬してる人いるんだ」

「まあな……」

師匠もその一人だった……土方さんは師匠の知り合いでその縁で知り合いになった。

「乗ってくか？」

もうひとつ、以前にレキが被っていたヘルメットをアリアに投げる。

「気が利くじゃない優」

アリアはそういうとヘルメットを被ると隼にまたがると背中に手を回してくる。

くちなしの臭いが花をくすぐりドキッとした。

「ファミリーマートに寄ってももまん勝って帰るわよ？優？」

「あ、ああ」

そういや、隼に女の子乗せるの二人目だな。

一人目はレキだが戦闘が絡まないで乗せるのはアリアが初めてだ。

「んじゃ帰るか」

「うん」

隼を発進させる。

にしても今日は疲れたな……

にしても……

今日一日中誰かに見られてたが誰だったんだ？

バレバレで稚拙な尾行だったから放っておいたんだが……

ま、いいか

第１０４弾　椎名優希の１日（後書き）

土方　歳三

年齢　３５歳（外見年齢２６歳）

容姿　黒髪、黒目の美男子

所属公安０課

武器　日本刀　？？

補足

新撰組副長土方歳三の子孫。

判断能力に優れており、個人の戦闘能力も高いが先祖の土方歳三がそうであったように人を束ねる才能が高い。

同じく公安０に所属している沖田に手を焼いている。

基本的に自分に厳しく他人にも厳しいが　優希やその周りには気を使っているようでたびたび、優希達をフォローしている。

優希に頼まれ、神崎かなえの裁判に関しても調べているうちに本人は無罪だと確信するに至るがすでに証拠も揃い、裁判も進んでる以上次の裁判で無罪を勝ち取るしかなくアリア達に犯人を捕まえ続けろと助言し、自身は仕事の傍ら公安０の調査で裁判でかなえを有罪にしたてあげた連中を追っている。

基本的にはいい人で公安０の中でもかなりの良識人である。

第１０５弾　日常→非日常

サイド？？

やっぱり噂は本当だったんだ。
あたしは今日、１日ある噂について調べていた。

「本当に優先輩はたらしだから困るの……レキ先輩や理子先輩、神崎先輩まで……」

噂は友達のマリからだった。
椎名優希、最近アリア先輩のチームメイトになりアリア先輩に付きまとう悪い虫。
アミカのマリに聞くとかなりのたらしと言う情報でレキ先輩の家に上がり込んで一緒に暮らすわ峰先輩にメイド服着せてはあはあしてるわわ、神戸ではお金持ちのお嬢様二人を虜にして金を貢がせているらしい。
女性関係はいい加減すぎる男だ。
まさしく、女の敵だ。
それだけならまだ、いいがあの男ついにはアリア先輩にまでその魔の手を伸ばしてきたのだ。
聞けば嫌がるアリア先輩にメイド服を着せて萌えていたらしい。
しかし、アミカのマリはその男がかっこいいと言う。
なんでなんだろう？
噂は真実なのかあたし、間宮あかりは椎名優希を尾行した。
そして、得られた結果はこうだ。

1、レキ先輩をデートに誘うも犬に噛まれて断念

2、峰先輩やメイド達と王様ゲームをした後、秋葉原をくっついて歩く

3、白雪先輩を部屋にはあげる

4、テレビ電話で中学生姉妹の裸を楽しむ5

5、あたしの後輩や友達をナンパしようとして失敗

6、さ、最後はアリア先輩とバイクでデート

「ゆ、許せない」

ハンカチを噛んで怒りの炎をたぎらせながらアリア先輩が帰ってきたら椎名優希のことを聞いてみた。

「え？優のこと？」

あたしはアリア先輩のアミカで一緒の部屋で寝泊まりすることが多いからこういう機会に恵まれるのだ。

「一言で言うなら馬鹿ね」

「ば、馬鹿ですか？」

「うん、あいつは馬鹿よ。自分が死にそうな状態でも護衛対象を守るために命懸けで戦ったり、敵うかもわからないような化物と互角にやりあったりね……」

アリア先輩の椎名　優希に対する評価は低いのかな？

なら、心配は……

「でも……」

とアリア先輩は付け足す

「あいつはまだ、底が知れないけどいい奴で、悪人じゃない。それだけは分かるわ」

な、なんかアリア先輩が嬉しそう……

やっぱり椎名優希はたらしなんだ。

「で、でも女性関係にはだらしないって聞きますけど？」

「そこは、否定しないわ」

しないんですかアリア先輩！じゃあ、やっぱりあの男は……

「さっきも言ったけどねあかり」

アリア先輩は優しく微笑みながら

「あいつはいい奴よ。よく分からないけど何か誤解してるわねあんた」

「ご、誤解なんてしてません！」

「そうだわ」

アリア先輩は携帯を取り出すとどこかにかける

「あ、優？明日、あたしのアミカをクエストに連れていきなさい。え？何でですって？奴隷はご主人様の言うことを聞く！」

ええええと電話の向こうから椎名優希の声が聞こえたがアリア先輩は電話を切ってしまった。

「というわけであかり、明日の放課後は優についてクエストを受けてきなさい」

「え、えええ！あたしが椎名優希……先輩とクエストですか！」

相手はたらしの椎名だ。
ホテルに連れ込まれてしまうかもしれない。

「大丈夫よ。優についてれば安全よ」

乙女の貞操がピンチですアリア先輩

「あ、あのアリア先輩は？」

「あたしは、明日の放課後も公安０に顔を出すから無理よ。」

「そ、そんなぁ……」

こうして、あたしと椎名優希のクエストは決まってしまったのだった。

さて、月曜の放課後だ。
教室で武藤とたべっているとと

「椎名君。お客さんだよ」

「ん？」

不知火の声を聞いて振り替えると栗色の頭に白いリボンで短いツインテールにした後輩が立っていた。

「椎名君また、新しい女の子かい？やるね」

「くそう！なんで優ばかりもてるんだ！」

「馬鹿か！アリアに頼まれて後輩の面倒を見るだけだ」

教室をキョロキョロしている後輩の前に立つ

「悪いな来てもらって」

「あ、あのアリア先輩は？」
不安そうにその後輩、間宮あかりは言った。
「神崎さんなら先に帰ったよ？何か、用事があるみたいだったけど」
にこりと人当たりのいい笑顔で不知火が言う。
ちなみにキンジも先に帰っている。
さらに、理子は秋葉原に再び行くと言って授業が終わると飛び出している。
「そ、そうですか……」
がっかりとした後輩に首をかしげながら
「んじゃ行くか。不知火、武藤また、明日な」
「おう」
「またね椎名君」
二人と別れて間宮あかりと歩き出す
な、なんか敵意を向けられてる気がするな……
「クエストっても気楽な奴だ。そんなに気構えなくていいぞ」
「どんなクエストなんですか？」
「簡単に言えば見回りだな。俺達みたいな例外を除いて未成年者の

飲酒やタバコをやめさせたり、かつあげや暴行を阻止するクエストだ」

ちなみにこのクエストはほぼ、毎日提示されている。
人出不足の警察が武偵に金を出して治安維持向上を図る。
まあ、最悪揉め事に巻き込まれるし単位はわずかに０．０５で報酬は５０００円と安いから受けたがる奴は少ない。
俺はちょっとでも金をいれようと受けたに過ぎない。
受けとかないと飯にも困りそうだしな。

「アサルトでアリアのアミカだろ？アリアに実力を見せるチャンスじゃないか」
あかりはむっとしたように

「アリア先輩のこと呼び捨てなんですね」

「ん？最初は神崎だったけどいつの間にかな」

そういいながら駐車場に止めてある隼の前に来るとヘルメットをあかりに渡す。うん、仕事絡みだから三人目の女の子だ。

「クエストは東京の中心だからな。乗れよ」

「え？バイクって……背中に抱きつかないといけないんじゃ……」

確かにそうだな。

「じゃなきゃ落ちるぞ？出すことはないがこいつは５００キロ出るんだからな」

「ご……あ、あのか電車じゃ駄目ですか？」

「時間がないから却下だ。どうする？乗らないなら俺一人で行くぞ。おま……間宮はおまけだからな」

「行きます……」

ここで逃げたら駄目だと思ったのかあかりはヘルメットを被り、俺の背に抱きついてくる。

「よし」

隼のエンジンを蹴って始動させる。

「あ、あかりちゃん！これはどういうこと？」

なんだ？

俺が振り替えると白雪のような長い黒髪を二つの髪飾りで纏めている美少女だ。

「し、しのちゃん」

あかりが言う。

「き、今日は私とエステーラ限定のシュガーリーフパイを食べにいく約束をクエストが出来たから仕方なく断念しましたのに男とデートなんて……」

な、なんかすごい誤解されてねえか？

「ち、違うの志乃ちゃん！これは！」

あかりが慌てて隼から降りて、弁明するがやばいなあんまり時間はとれねえ
強引だが仕方ねえか目をつぶる

「悪いけど行かせてくれないか？えっと志乃ちゃん？」

「佐々木です。名前で呼ばないでください！」

「ああ、悪いな」

３０秒

「けどお前に関わってる時間ないから行かせてもらうぜ？間宮、早く乗れよ」

「え？」

急に感じが変わったので戸惑ったようにあかりが言う。

「行かせません！あかりちゃんは私が守ります！」

志乃が手に持った武器は物干し竿と言われる長剣だ。

「へえ」

剣相手なら銃は野暮だな。
そう考えて蒼神を抜く。
二刀はいらん。

「あまり舐めない方がいいですよ先輩」

そういうと志乃は居合いの構えを取る。鞘に納めないのか？
へえ
刀を両手に持ち、防御の構えを取った瞬間、志乃が動いた
居合いの神速
ガアアンと刃が激突する音がする。

「そ、そんな……」

驚愕の声を出したのは志乃だった。
未完成とはいえ必殺の燕返しが……

「へぇ、風凪と似てるな」

ぎりぎりと蒼神の先で物干し竿の刃を止める。

「風凪？」

志乃が冷や汗をかきながら聞いてくる。

「完成してたら一矢は報いただろうがそれ、未完成だろ？」

「っ！」

志乃が後退し、再び燕返しの構えを取る。

「遅いぞ！」

志乃が刀を振るうより先に

「飛龍一式風凪！」燕返しの完成形を放った。

「きゃあああ！」

一撃目は刀で防いだ志乃だが、燕返し、正確には風凪は音速を超える一撃でカマイタチを巻き起こす二番目の攻撃がある。

シンのような連中には一撃で正体で見破られるが後輩相手なら一撃だ。

2撃目を浴びて、志乃はぶっ飛んだ。

「志乃ちゃん！」

あかりが駆け寄る。

「防刃制服の上だから軽い打撃ですんだろ？」

志乃は上半身を起こすとあかりに抱きつき

「うわあああん！あかりちゃんをとられちゃったぁ！」

えええ！泣くの！

周りに他の生徒達がなんだなんだと集まってくる。

「見ろ椎名が女の子泣かせてるぜ」

「後輩だろ？何かの修羅場か？」

ま、まずいここにいたらなんか不味いぞ。

「ま、間宮！いくぞわ！」

「え、きゃ！」

強引にあかりを隼に乗せると有無を言わさずに発進させる。

「あ、あかりちゃあああん」

「志乃ちゃあああん！」

二人の声を聞きながらなんか俺人さらいみたいだと泣きながら都心部に向かうのだった。

志乃ちゃんは携帯でアリスに手当を頼んだから大丈夫だろうよ。

「やっぱり椎名先輩は最低です」

「返す言葉がないな……」

俺は著しく、俺に対する評価を下げたであろう後輩を見ながらため息を着いた。

仕方ないんだよ……クエスト開始は午後6時からで、最寄りの交番で始めることを申告しないといけないからな……

依頼人との契約は絶対に守れ。武偵憲章にもあるだろ？

「椎名先輩は乱暴です！アリア先輩は先輩のことを馬鹿と言ってましたけど本当に馬鹿です！」

ごめんなさい……俺のライフはもう0です。

しくしく内心泣きながら猛烈に批判をぶつけてくる後輩とビルが並ぶ、町を歩く。

腰に刀でを下げてるのが珍しいのか道行く人の目が少し気にかかるがまあ、学園島の外では慣れたもんだ。

「？……馬鹿って言われて反論しないんですね」

「ま、俺が悪いのは事実だからな」

ふーんと言う感じであかりが見上げてくる。

そんな時に今夜の一つ目の事件が起こった。

「ひったくりよ！誰か捕まえて！」

「ひったくり！」

あかりが動く前に俺は人混みをぬって走る黒い帽子の男を見つけた。

うーん、武器は使えないなここじゃ……

あかりが手に短機関銃のウージーを出してきたので手で止めると携帯用のワイヤーを電柱に巻き付けて巻き戻すと戦闘狂モードで電柱の上から二本目のワイヤーを男に投げると足に絡み付いて男が転んだ。

「ぐえ！」

つぶれたカエル見たいな声を上げた男に向かいワイヤーを伝って、男の頭にガバメントを押しつける。

「武偵だ。ひったくりの現行犯で逮捕する」

「くそ……」

ひったくりは悪態をついたが、逃げられはしないのだ。

サイドあかり

15分後、交番にひったくりを引き渡して再び、見回りに戻る。
そこでアタシの椎名優希に対する評価は少し変わっていた。
さっきは、志乃ちゃんが倒されたから深く考えなかったがこの先輩はすごい。
複雑なワイヤーをまるで手足のように扱い、剣の腕も立つ。
志乃ちゃんとはアタシも一度戦ったからわかる。
先輩というのもあるがやはり、実力的にはアリア先輩と並ぶ力は持っているようだ。
悔しいと思った。
いつか、アリア先輩とチームを組みたいと思っているアタシにとっては残酷すぎるぐらいの実力差だ。

「ん？どうかしたか間宮？」

「え？さっきは何もできなかったなって……」

「気にすんなよ。１年なんだから焦ることないない。そういや、間宮のランクは？」

う、聞かれたくない話題だ……

「い、Ｅランクです……」

「ああ……」

なんと言っていいか迷っている顔だ……

「俺のアミカなんだけど」

「あ、はいマリですね」

「あいつも俺が戦闘訓練してるんだ。よかったら訓練に来るか？」

「遠慮します。アタシのアミカはアリア先輩ですから」

「そうか？」

というのもアミカ制度は先輩が後輩の面倒を一対一で見る制度であってアタシは椎名先輩のアミカじゃないのだ。

でも、この先輩なりの優しさなんだと言うのはわかるな……

「ありがとうございます椎名せ……」

いいかけて椎名先輩が横にいないのに気付いた。
あ、あれ？
回りを見ますと路地裏に入り込んだ先輩は数人と何やら話をしている。
あたしは慌てて、路地裏に入った。

「つまり、兄ちゃんはこういいたいわけだ？ワシの一張羅をアイスクリームで汚したその二人を見逃せってんだな」

「ひいい」

見るとカップルらしい二人が８人ほどの屈強な男に囲まれていたのだ。
どうやら、ぶつかって男の服をよごしてしまったらしい

「だから、クリニーング代払うってんだろ？」

「ああん？ガキ、いきなり出てきて、何抜かしてんだこら！精神的損失はクリーニング代だけじゃすませられねえんだよ」

「だったら、法廷にでも持ち込めよ。ここで話すことじゃないだろ」

弱味につけこんで難癖つける最低な連中のようだった。

「せ、先輩」

アタシが声をかけるとチンピラ達がこちらを見てくる。

「女連れで見回りてか武偵ってのは気楽な仕事だな、おい」

「こいつも武偵だ。そんなんじゃねえよ」

めんどくさそうに先輩は言っている。

この手の輩は暴力で沈めるか、逮捕するか説得するしかないが説得は難しそうだった。

「たく……」

腰に手を回して、椎名先輩が刀に手をつけた瞬間だった。

「とーりゃんせ～とーりよんせ、かーごの中のとーりーはぁ」

「な、なんだてめえ！」

それは唐突に路地裏の闇から現れた。

全身を覆う黒いローブを身につけた小柄な何か。

とーりゃんせを歌いながらしだいにこちらに近づいてくる。

ぞくりと悪寒が走る。

あれは危険だ。

「なめとんのかわれ！」

チンピラがローブの何かにつかみかかると顔のローブが外れる。

「え、あれ？」

後ろを向いて歩いてきてたのかその顔は　後ろの頭。

「うしろの少年だーあーれ」

ギギギギギ

「う、うわあああああ！」

突如人間ではらあり得ない首を１８０度回した何かは丸い赤い目と赤い口をにいいと歪めた瞬間、男の頭から何かが突き出た。
ぽたぽたと赤い何かが……
頭から出てるのは……刃？

「うわあああああ！」

その場にいたチンピラたちが腰を抜かした。
殺人事件だ……
Ｅランクのアタシにとってはあまりの非現実に体が動かない。

「間宮！こいつら連れて逃げろ！」

疾風のように椎名先輩が動いた。

ギギギギギギギギギ
木と木が擦れるような音を立てて、赤い目が男を投げ捨て、すさまじい回転で腰を抜かしたチンピラに切りかかった。

「ちっ」

椎名先輩はガバメントを抜くと三点バーストで何かの刃を弾く。

ギギギギギ

それはぶっ飛んだ刃を見るように顔を動かしたが次の瞬間、手を身近にいた男に叩きつけた。

「げっ……」

脳を潰されたチンピラが断末魔の声を上げた。

「あ、ああ……」

アタシは怖くて動けなかった。
ライカと銃を撃ったり、志乃ちゃんと戦闘訓練をしたりアリア先輩と模擬戦をしたりした。
銃を持つ犯罪者と戦ったこともある。
だけどあれは……人間じゃない怪物……

「ちっ！」

椎名先輩が舌打ちして刀を抜いて、相手の右腕を切り飛ばした。
鮮血が走るかと思うが何もでない。

「なんだこいつ！」

椎名先輩が困惑した声を上げる。

ギギギギギ

異質の何かは左手を振りかぶり、椎名先輩に叩きつけた。

「くっ！」

刀でそれを受け止めたがザザザと後ろに滑る。

すさまじいパワーを相手は持っているらしい。

ギギギギギ

「に、逃げて！」

ウージーをアタシは肩を狙い発射したがそれは全て、頭に命中し、
肝を冷やした。
こ、殺しちゃたの？
ギギギギギ

「うわあああ」

チンピラ達とカップルが悲鳴を上げて逃げていく。
逃げなくちゃと思っても体が動かない。
ギギギギギ

異質の何かがアタシに向かい走り出した。

「こ、こないで！」

ヒュンと異質の何かにワイヤーが巻き付いた。
更に、飛んできた刀が異質の何かの左足を貫通し地面に縫い付ける。

「てめえ、人の後輩に手だしてんじゃねえぞ」

助かったと思った瞬間

バキン

異質の何かがワイヤーの巻き付いた首と左足を切り離してザザザとまるで走るゾンビのように私に迫り、バンと左手だけで地面を叩くと跳躍してアタシの頭に振りかぶる。

（あ、アリア先輩！）

死を覚悟した時、

「飛龍一式！雷落とし！」

ズンと異質の何かがローブごと真っ二つになった。
椎名先輩はアタシの前に立ち、数歩後退して刀を真っ二つになった何かに向ける。
1分後動かないのを確認し椎名先輩は相手から目を話さずに……

「大丈夫か間宮？」

「は、はい。でも……」

人が二人殺された……明らかに人間じゃない何かに……
パキと椎名先輩が何かを踏んだ。

「これは木か？とりあえず、ここを出るぞ間宮」

そ、そんな……

「おい！っ！」

先輩も振り替える。

ギギギギギ
ギギギギギ
ギギギギギ
ギギギギギ

破壊した異質の何かじゃない。
新たな異質の何かが四対闇から再び現れた。
一対でも相当な戦闘力
を持つ化物

「ちっ」

椎名先輩は舌打ちしてアタシの手を引いて路地裏から出ようとする

ギギギギギ
ギギギギギ
ギギギギギ

「おいおい、まじかよ」

半笑いで椎名先輩が言う
逆方向からも四対
ポタポタと血をしたたらせてることから逃げた人は殺されたのだろう。

「たく、予備ワイヤーしかないときにこれはな……」

椎名先輩はデザートイーグルを取り出しながらアタシを守るようにたつ

「し、椎名先輩……」

大嫌いな先輩。

だが、頼れるのは今はこの人だけだ。

「間宮、一点突破で抜けるぞ！こけるなよ」

ギギギギギ

私の返事を待たずに8対はアタシ達に襲いかかってきた。

アリア先輩……

第１０６弾　魔女連隊

やばいぞこれは……
敵が動き出す直前に考えた俺は状況を分析する。
刀をなんとか振り回せる路地裏で二対八、しかも一人はＥランクの後輩だ。
間宮には悪いがＥランクは素人に毛が生えたレベルだ。
背中を預けるのはきつい。
これが、アリアやレキ達だったら背中を合わせて互いに迎撃できるのに……
それに、いつも使うワイヤーが整備中が痛い。
いつものワイヤーなら二人まとめて、屋上まで飛ぶ力があるが携帯用のワイヤーはどうしても人を引っ張る力が弱く、二人まとめては引き上げられないのだ。
援軍を呼ぼうにも周知メールを出す余裕はない。
運がよければ警官が気づくもしれないがあの異質の何か……あえて木偶人形と呼ぼうか……
に、対抗はできないだろう。
ここまで、考えた時木偶人形が動いた。

二対が左右両方から並んで突っ込んでくる。
一気に両方は相手できないな。
一人ならともかく、今は二人だ。

「く……」

ばっとデザートイーグルをフルオートで内つくす。
バキバキと言う音を立ててスナックなっちゃんと書かれた巨大な看板が木偶人形の群れに落ちて、轟音を立てる。

後ろに、集中しようとしたら木偶人形一対看板の隙間から飛び出してくる。
反対側の木偶人形もあと少しでキリングレンジに入る。

「間宮！少しでいい！弾幕をはれ！」

携帯用のワイヤーを投げて、先についたナイフが壁に突き刺さると、張り巡らされたワイヤーに木偶人形が突っ込んでバネのように弾かれる。
間宮が、ウージーで弾幕射撃を開始する。
が、もう構う余裕がない。
もう、片方のサイドの木偶人形は目と鼻の先に迫っていたからだ。
技のモーションをとる暇はなかった。

ギイイイイン
裏路地に鉄と鉄が激突し、火花が散りつばぜり合いになる。
だが、あと一体が並んで俺に剣を振りかぶった。

「くっ！」

左手でガバメントを抜いて三点バーストで刃を吹っ飛ばすがチンピラにしたときのように俺を潰そうと手を振りかぶる。
食らうとやばい！
先端に鉄を仕込んである靴でつばぜり合いをしてる木偶人形の腹を渾身の力で蹴飛ばして後退すると木偶人形の手が俺がいた空間をなぎはらった。

ドオオオオン

冗談のような爆砕音と共に、コンクリートの壁にひび入れる木偶人形

なんつうパワーだよ！
間宮の横まで後退する。
「椎名先輩！」
「弾幕切らすな！」
怒鳴りながら構えは刺突
半分かけだが多分、間違いないはずだ。
殴りかかってきた木偶人形の胸に、渾身の突きを放った。
バキバキと木が割れる音と共に、何かを破壊した感触があった。
木偶人形がだらりと動かなくなる。
そうか、なんらかのこいつらを動かしてる動力は胸にある！
「間宮！木偶人形の胸を狙え！」
「は、はい！」
短機関銃なだけあって木偶人形も攻めあぐねてるようだった。
だが、弱点が分かれば簡単に勝てる相手だ。
デザートイーグルのマガジンを入れ換えると、突っ込んでくる残り三体の胸に、デザートイーグルの弾丸を叩きこんだ。
ガシャンガシャンとおもちゃのように崩れ落ちる木偶人形。
さすが、デザートイーグル。
破壊力は抜群だな。
「きゃあああ！」

はっとして振り替えると間宮が刃を失った木偶人形に倒される瞬間だった。

「間宮！」

デザートイーグルを向けるが駄目だ。
この位置では核を破壊するには跳弾しかないがそれだと敵が間宮の頭を潰す方が早い。

ギギギギギ

きしむような音を立てて、木偶人形が手を振りかぶる。

「い、いや！アリア先輩！」

間宮が悲鳴を上げる。

「間宮！」

地を蹴って蒼神を振りかぶるが間に合わない！
木偶人形が手を降り下ろす直前

「あらあら、何か大変ですねぼっちゃま」

この声……まさか

ふわりと着地したその女性はしかし、鋭く、手に持つ獲物で木偶人形を突いてぶっ飛ばした。

再びふわりと飛び上がるとギギギギギと起き上がろうと上半身を起こした木偶人形を頭から真っ二つに切断した。

がしゃんと力を失い倒れる。

木偶人形

その女性はにこりと微笑むと長刀を右手に頭を下げた

「お久しぶりですぼっちゃま」

「つ、月詠！？」

白雪や佐々木とはまた、違う大人の雰囲気を持った和服の女性微笑みながら答えた。

「はい、月詠です」

あれから、２時間後、気絶した間宮の手当をするため、学園島に戻った俺達は部屋に戻り、本来アリアが寝ているベッドに手当を施したあかりを寝かせた後、リビングのソファーで俺達は話をしていた。

「現場はよかったのか月詠？あのままにしてて？」

「はい、公安０の関係者があの場所は封鎖してるはずですから」

「公安０が？ってことは……」

「あれは優様が戦ったランパンとはまた、違う組織、恐らく魔女連隊のもの仕業かと」

「魔女連隊？」

声の方を見ると、正座し、スパッツの上にミニスカートを履き、Ｔシャツを着た少女がいた。
特徴的なのはウェーブのかかった長い髪だろう。

傍らには槍が置かれている。

「はい、ドイツの魔女です。北朝鮮やイランなどのテロ国家で暗躍する連中です」

「なんでその魔女連隊が日本で一般人を襲うんだ？」

「それについては調査中です優様」

「ふーん、で？なんて、椎名の近衛筆頭とその弟子が東京にきてんだ秋葉？」

目の前にいる月詠に言う。

説明がいるな。

和服で長刀を持ったさっき俺達を助けてくれたのは月詠。

名字は俺も知らない。

で、正座して目をつぶってるこいつは、山洞（さんどう）　秋葉（あきは）

月詠は詳しくは知らんが秋葉は弟の鏡夜と同い年だ。

「それは……」

秋葉が何かを言おうとした時、

「邪魔するぜ」

すっと部屋に入ってきたのは

「土方さん」

公安０の土方さんだった。

「ご無沙汰しています土方様」

月詠が頭を下げ、秋葉も遅れて頭を下げる。

「おう」

土方さんはソファーに座ると俺を見てきた。

「ます、先に言っておく。今回の件は誰にも言うな」

「え？なんで？」

「んなに目くじら立てなくても巻き込んじまった以上説明してやるよ。今回、お前が戦った木偶人形な。今月だけでお前が戦った８体以外に２０体以上が都内で事件を起こしてる」

「で、でもそんな事件ニュースでは……」

「情報統制してるからな」

土方さんはタバコを取り出したが

「ここは学生寮です土方様」

秋葉が目をつぶったままで言ったのでタバコをしまう。

「ともかくだ。殺人人形が都内で殺人を繰り返してるなんて知れたらパニックになるからな。一度ジャーナリストが嗅ぎ付けたが消えてもらった」

「殺したんですか？」

「いや、今ごろは離島で農作業でもしてるだろうな」

まあ、仕方ないな……

「犯人の組織が分かって俺達も動いちゃいるが殺人人形の出現パターンが複雑でな。後手に回らざるえない状況だ。いろいろ警備の手配はしてるが人手不足が現状だ。殺人人形と戦えるだけの実力者も少ない訳じゃねえがな」

「じゃあ、俺も警備に……」

手伝いを申し出るが土方さんは首を横に降る。

「ありがてえ提案だが、これは公安０に売られた喧嘩だ。外国の勢力がいつまでも東京で好き勝手させやしないさ。今、公安０の戦力を東京に呼び戻してる。刹那が戻ってきてから殺人人形の駆逐は本格的に始める」

「それに、ぼっちゃまは……」

「月詠……ぼっちゃまはもうやめてくれ……」

「はい、では優希様は実家に戻ってもらいたいんです」

「げっ！なんで！」

そこまで言うと土方さんが立ち上がった。

「身内の話を聞く気はねえよ。それと悪いが間宮あかりの今日の記憶は消させてもらった。代わりの記憶は埋めといたがな」

はっとして寝室を見ると黒いスーツの女性が頭を軽く下げた。

記憶操作ができるステルスか……

その方がいいだろうな……あんなことEランクには早すぎる

「わかりました」

「今は学園島は俺達は警備してねえ。学園島に殺人人形が現れたらすぐに連絡してくれ」

そう言って土方さんは帰っていった。

さてと……

「で？なんで俺が実家に帰らないと行けないんだよ？」

「後継者選びの会議が数日後に控えてます」

「俺はもう、継承権はないはずだが？」

「いえ、優希様もリストに入っています。というのも優希様を強く押す、分家もいますので無視はできません」

「もう、鏡夜でいいだろ？俺も実家を継ぐ気はないからな」

継げといわれても俺は断る。

そう、あの日から決めてるんだ。

「ですが……」

秋葉が口を開く

「優様は鏡夜様より実力は上です」

「買い被りすぎだ秋葉」

「ですが……」

「秋葉！」

俺が睨むと秋葉は黙った。

「っと悪い怒鳴る気はなかった」

「いえ……出すぎたことをいいました」

「ああ……悪い……ま、まあとにかく断るからな帰れ月詠、秋葉」

「あらあらうふふ……駄目ですよ優希様。帰らないなら力ずくで連れ帰るように命令されてます」

げ！

「それで、お前らが派遣されてきたのかよ！」

「はい」

秋葉が槍を手に、月詠が長刀を手に取る。
ま、まずいこいつら本気だ。
俺が帰らないと言えば力ずくで連れ帰る気だ。
たが、帰りたくねえ！
蒼神に手をかけてソファーから後退して対峙する。

「無駄な抵抗はやめてください優様」

すうと音もなく展開する秋葉

「うるさいぞ秋葉！お前一人なら余裕で勝てるんだからな！」

そう、神経を集中しないといけないのは月詠だ。

「最後に聞きます。帰る気はないんですね？」

「ない！」

ごっと殺気の風が月詠から発せられた。
浴びるものが素人なら失禁してしまうほどの……
く、くそ！よりによってワイヤーがオーバーホール中にこれかよ！
一瞬即発のその時、月詠はにこりとして壁に長刀を置き、秋葉も正座する。
え？と思った時

「ただいまぁ」

このアニメ声……まさか……

「優帰ってるの？今日のクエストの件なんだけど……」

とリビングに入ってきた私服のアリア。
や、やば女連れ込んでるなんて知られたら……
慌てて月詠達を見るがあ、あれ？

「どうかしたの優？」

「い、いや……」

窓を見ると開け放たれている。
退散したらしいな……
よかった……
これで、あきらめたとは思えんが今日はなんとか……

「あかりはどうしたの？どこで別れたの？」

し、しまったあああああ！
今、寝室で間宮が寝てるよおい！

「疲れたわ。優コーヒー入れなさい」

「あ、ああ」

とりあえずインスタントコーヒーを入れに台所に向かう。

「な、なあアリア。今日は自分の寮に帰らないのか？」

できればその間に間宮を……

「今日？今日は帰らないわよ？あかりがどうだったか聞きたいしね」

望みは絶たれたか……い、いやかくなる上は……

「あ、アリア実はなマリが相談があるそうなんだ」

「マリが？何かしら？」

「そ、それで内密な話らしくてアリアの部屋の前で待ってるらしいんだ」

「ここに来たらいいじゃない」

それじゃあ駄目なんだぁ……

「な、なあ頼むよ。なんか大切な話らしくてな。アミカの俺からも頼む」

アリアは何か考えていたが

「優、何か隠してない？」

「隠してないです！」

なんで敬語になるんだ！やべえ

「……」

アリアは俺を疑いの眼差しで見たが

「チームメイトに嘘つくなら風穴あけるわよ」

といいつつ部屋に一度戻ってくれるようだ。

よし、その間に裏工作すれば完璧だ。

「じゃあ、ちょっと行ってくるわ」

「おう、ゆっくりな」

「？　うん」

パタンとドアがしまり足音が遠ざかる。今しかない！

俺は寝室に飛び込むとよく眠っている間宮あかりをお姫様だっこして夜の闇に紛れて家に送ろうとした。

住所は武偵手帳見たらわかるからな。

とにかく必死だったんだ俺は……

ドアに手をかけたところで

「優、そこでマリにあった……んだ……けど……」

「優せんぱ……」

ドアの外にはアリアさんとマリが……

固まる３人

「ど、どどど……」

やがて、アリアが震えだした。
怒りでね。

「ま、待てアリア！これは違うんだ！違う！」

「どうして、あかりをお姫様だっこしてるのか説明しなさい」

「それは……」

他言無用という土方さんの言葉がよぎる。
恨むぞ土方さん！

「じ、実はな！間宮が滑って転んでだから手当を……」

「ふーん、じゃあなんであかりの胸元が乱れてるんですか？」

え？
マリの指摘で今、気づいたが寝かせるときに治療するためか楽にするためか防刃ネクタイを外したらしい。
見ようによっては何かしたあとに見えそうだ

「ゆ、ゆうう！あんた、そんなことだけはしない奴だと思ってのに……あたしのアミカを！」

「フフフ……なんであかりなんですか……同じ1年なのに」

い、いかん！これはまずい！
2丁の銃が現れる。

もぎ取るようにアリアが間宮を抱き寄せると

「さようなら先輩」

「ヘル風穴！」

「ぎゃあああああ！」

こうして、二日目の風穴祭を浴びた俺。

誤解が溶けるのは深夜までかかり、帰ってきたキンジが寝ても誤解を解く作業は続いたのだった。

トホホだな……

「あらあら、楽しそう」

優希の断末魔の悲鳴を聞きながら月詠はクスクスと女子寮の屋上で笑った。

「いいんですか？月詠様？優様を連れて行かなくても」

背後で優の悲鳴を聞きながら秋葉は言った。

「うふふ、強引に連れていくより自分から来てくれる方がいいでしょ」

「しかし、今東京は危険です。公安０と魔女連隊の抗争の場では……」

「そうね。魔女連隊の目的は分からないけど公安０に喧嘩を売ったことは公開することになるでしょうね」

公安０の戦力は国内最強の戦闘集団。
なるほど、東京という対魔に優れた場所での戦闘は魔女連隊には都合が悪いだろう。
勝算ありと見てはきていない？

「もしや、これは……」

「だとしても」

秋葉がいいかけて口を開く。

ギギギギギギギギギギギギギギ

「私達は成すべきことをしましょう」

長刀をトンとコンクリートに起きながらバラバラになった木偶人形２０体の雨を背後に月詠は微笑んだ。

第１０６弾　魔女連隊（後書き）

今回は早めに投入します。
従って次回は木曜までの期間更新がないかもしれません。
早く、投入したのは魔女連隊が関わってることを早く知って欲しかったのが一因です。
ちなみに、今回はカツェ・グラッセが所属している魔女連隊が関わってますがカツェが関わってるかはご想像にお任せします。
念のため言っておくとこの話を書いてる時点の原作ではカツェ・グラッセの魔女連隊とバスカービルは戦ってませんので想像も含めて書いています。
なので原作が完結したあとに読んだ人や、原作で魔女連隊と戦った後に読んだ人は違和感があるかもしれませんがご了承ください

第１０７弾　秋葉

「いててアリアとマリの野郎本気で撃ちやがって……」

なんとか誤解は説けたが（最終的に土方さんに嘘の説明をさするはめになった）まだ、怒りが収まらないらしいアリアは寮に戻っちまった。

「大変だな優」

「うるさいぞキンジ……最近、俺の方がアリアに撃たれること多くないか？」

「いいことじゃないか」

キンジと歩きながらんなことあるかと隼の前まで来て、キンジにヘルメットを渡す。

アリアは今日は女子寮から来るのでなら、乗せて行ってくれとキンジに頼まれたのだ。

断る理由はないからな。

行くか……

エンジンを始動させて男子寮を飛び出して学校に入り、アリアに睨まれ、理子のお馬鹿トークに付き合う、そして、ホームルームに……

ここまでは普通の日常だったんだ。

「山洞　秋葉です。よろしくお願いします」

なんでだよ！
アリアの時のキンジのように俺は頭を変えた。
なんであいつが武偵高の制服を来てるんだ！
昨日と同じなのはスパッツぐらい。

「うおおお！」

うるさいぞ男子！秋葉は確かに美少女だが、あいつの性格と付き合うの大変なだぞ

「じゃあ、山洞さんの席は……」

「先生、わたしはあそこがいいです」

「あら？椎名君の後ろの席？」

うわあああ！

「はい、優さ……」

だんと俺は飛び上がると一瞬で秋葉の背後に回り込んで口を封じ手抱き抱えると廊下に飛び出してた。

「おーお！ユーユーが女の子さらっちゃったぞ！」

理子の声と男子の怒号が聞こえるが気にしてられるか！

屋上に出ると秋葉を立たせてから

「あ、秋葉お前、いきなり教室で優様って言おうとしただろう！」

秋葉は首を傾げて

「何か問題が？」

お前はレキか！いや、この際どうでもいい。

「どうせ、月詠辺りの差し金だろう！だから、深くは聞かんが教室では椎名君と呼べ！」

「ですが先程私は優様の後ろを指示しました。親密な仲だと思われてるかと……さらに、ゆうさ、まで言ったので椎名君では違和感を感じます」

なんてこったい！

「う……じゃあ、せめて優希君か優君にしろ……」

「はい、わかりました」

「で？俺を連れ戻しに来たお前がなんでここに？」

「優さ……優君の護衛です」

な、なんかこいつに優君と言われると違和感が……

「護衛？いらねえよそんなもん」

「いえ、私は椎名の近衛です。帰っていただけるまでどこまでも護衛します。永久までも」

それってつまり、家に帰らないならずっと俺に付きまとうってことか！

「いいから帰れ！」

「嫌です」

「帰れ！」

「嫌です」

強情な奴だ……

昔から、融通がきかんやつだとは思ってたが更に、拍車がかかってやがる……

「……」

絶対に引きませんという目でこちらを見ている秋葉に俺は諦めた。

「分かったよ。帰らねえけど近くにいていい」

あきらめたよ申し出るが……

そう思い俺は歩き出すと

「優君」

振り替えると秋葉がお辞儀していた。

「ありがとうございます」

まあ、こいつがいたら助かるといえば助かるんだけどな。

前言撤回だ……こいつは疫病神だ……

教室に入った俺達に待ってたのは質問攻めだった。

「ねえ、変なことされなかった？」

「たらしの優希に連れてかれてみんな心配してたんだよ」
「おい、優！あの子とはどんな関係だ！白状しやがれ」
ぐえ！首を絞めるな武藤
「椎名君はハーレムでも作るのかい？」
「みたいだぞ」
こら、不知火！キンジ！何言ってんだ
秋葉も女子に囲まれて質問攻めだし……
「ねっね！アッキーはユーユーとどんな関係なね？Sまでした仲？」
こら、理子！何聞いてんだ！Sってなんだよ！
アリアもなんか聞き耳立ててるし
「私はと優君ね関係ですか？主従関係です」
こ、こら秋葉！
「主従関係！？おお！おおぉ！ユーユーが攻めでアッキーが受けな訳ですな。ご主人様お慈悲をみたいなかな？」
鼻を膨らませて興奮するな理子！
「よくわかりませんが主は優君で私は下僕です」

爆弾発言に周囲がざわめく

「まじかよ！椎名どれだけ女の子に縁があるんだよ」

「不潔だわ！」

「リア充爆発しろ！」

「で？本当のとこはどうなんだい椎名？」

「もう嫌だぁ！」

教室を飛び出して言った俺の背後から様々な声が聞こえてきたが無視だ！

平賀さんからワイヤーを受け取ってからいつもの屋上に向かう。

秋葉の奴……あいつが来たせいでめちゃめちゃだ……

東京都内は木偶人形、内は秋葉かよ……ああ、どうしたらいいんだと頭を抱えた時、

キイイイイイイと鉄の扉が開く音

「レキか……」

ドラグノフ狙撃銃を肩にかけてレキだった。

ハイマキは……いないみたいだな……

「……」

レキは無言で俺の横に来ると外を見ながら体育座りを……

慌てて、一歩下がる。

武偵高のスカートは短いんだよ！一瞬見えちまったじゃえか！その

……しろの……

「その、レキもう少し座り方に気を付けろよ？」

「？」

レキが無表情にこちらを見て首をかしげる。

まあ、いいか……

ごろりと寝転がり、空を見上げながら目を閉じる。

ああ、この沈黙がいいなぁ……騒がしい教室とは大違いだ。

レキがいるがレキは騒いだりしないからな

「優さん……」

「ん？」

「よくない風を感じます。気をつけてください」

もしかして、レキは知ってるのか？木偶人形が都内で殺人を犯してる状況を……

だが、そうと決めつけるのは早すぎる。立ち上がりながら

「レキ、都内でクエストを受けたときに万が一変なものに襲われたら胸を撃てば止まる」

「……」

レキが無言で見上げてくる。

やっぱり知ってるか判断つきかねるな……

公安０が動いてるとはいえ、知り合いが木偶人形に殺されるなんて事態は避けたいからな……

「分かったかレキ？」

「はい……」

「優！」

授業が終わると休み時間だけ逃げて秋葉や他の連中の追求を避けながらなんとか授業をこなしてから専門分野の時間、アサルトの授業になった。

「山洞秋葉です」

なんで……アサルトなんだぁ……
槍を手に、現れた秋葉に俺は頭を抱えた。

「転校生が美少女で知り合いって割りとポピュラーなことだよね椎名君」

「そんなポピュラーはいらねえ……」

教室で囲まれてように秋葉を囲むアサルトの連中、秋葉が使う槍が珍しいんだろう。
槍使いはアサルトではほとんどいないからな。

「何、デレデレしてんのよ優」

「デレデレなんてしてない！」

後ろから聞こえたアニメ声に振り返るとアリアだった。
となりには……

「き、昨日はありがとうございました椎名先輩」

間宮　あかりか……
土方さんに聞いた話では暴漢に教われて、俺が片付けたがあかりは一発殴られて気絶したという記憶を埋め込んだらしい。
殺人人形の件は完全に忘れてるようだな。

「いや、後輩を守りきれなくて悪かったな間宮」

「いえ」

昨日までは敵対心丸出しだったが仮の記憶でいい先輩ぐらいにはなったらしい……よかったよかった

「それで優？あの子本当は誰なの？仲いいみたいだけど……」

「ああ……まあ、秋葉は……」

なんとでも言えるんだがなんか罪悪感がある……まあ、アリアだしいいか……

「秋葉は俺の実家がの戦闘集団『近衛』の一人だ。小さい頃から一緒にいるがまあ、幼なじみだな」

言ってないこともあるがこれは事実だ。

「近衛？」

あかりが首を傾げる。

まあ、馴染みがない言葉だよな

「ま、うちの警備や護衛の専門部隊と思っていいさ」

「で？なんでその子がいきなり転校してくるの？」

それは話せば長くなるが……

「私は優君を守りに来ました」

うわ！びっくりした！いきなり現れるなよ

「守る？」

「はい、優君は私達にとって大切な人です。優君を守るためなら私は全てを差し出して構いません」

こ、こら秋葉！言い方がまずいだろ！

補足するなら代々、山洞家は椎名の近衛として支えてる一族だ。

今の言い方も様なら違和感ないが君だと違和感ありすぎる……

「す、全てを差し出すって……」

何を想像したのかアリアが真っ赤になってるぞ。

「はい、この体全ては椎名のために」

その顔を見て、俺はため息をついた。

忠誠心は立派だが昔以上に頑固になった秋葉はなんか見ていて悲しくなる……

「それって山洞さんと椎名君は深い仲ってこと？」

し、不知火このタイミングでそれは……

秋葉は誇らしげに

「はい」

「優！風穴ぁ！」

「や、やめろ！」

俺は逃げようとしたが俺とアリアの間に秋葉が立つ。

「優君に手を出さないで下さい」

さすがにいきなり発砲はまずいと思ったのかアリアが躊躇している。

助かるか？

「なんや、お前ら喧嘩か？」

げ！蘭豹！こいつがくるとろくなことにならんぞ。

「転校生の実力もみたいしなぁ……神崎、山洞お前ら模擬戦やれ」

「ちょ！蘭豹……先生！」

何考えてやがるこいつ！

「いいわ」

「はい、わかりました」

アリアも秋葉もおい！

二人ともきめてしまえば強情だ……

もう、止められないんだうなぁ……

はあ……

こうして、アリアｖｓ秋葉の模擬戦が決まってしまった。

どうなってもしらんぞ

第１０７弾　秋葉（後書き）

山洞　秋葉

身長　１５７センチ

体重　４１キロ

年齢??

武器　槍　??

容姿　ウェーブがかかった長髪の黒

瞳の色　銀

補足

　椎名の戦力、近衛の一人。
師匠である月詠には叶わないがＳランクの実力を持っており、優の小さな頃からの知り合いでもある。
性格は強情で一度きめたら余程のことがないと覆さない。
教育により、椎名の家のために命を投げうる覚悟があるが優に対しては複雑な思いがある。

第１０８弾　一撃必槍

「あたしをなめてるの！」

防弾ガラスに守られた闘技場にアリアのアニメ声が響き渡る。
名目上は体育館なんだが……

「いいえ。舐めてませんよ」

秋葉は目を閉じたまま言った。
訓練用に義務ずけられているＣ装備を秋葉は断り防弾制服のまま、闘技場にたっている。
これにはプライドの高いアリアも対等な条件でやりたいと蘭豹に焚き付けたんだが蘭豹の奴あっさりと

「おーおー、やれやれ」

ときやがった。

「いくらなんでも目をつぶったままじゃ神崎には勝てないんじゃないかな山洞さん」

防弾ガラスの向こうを見ながら不知火が言う。

「いーや、アリアに勝目は薄いぞ不知火。あいつは予備知識なしに初戦を戦うとえげつないやつだからな」

「アリア先輩は負けません！」

横に並んで、アリアのアミカのあかりが言うがまぁ……

「見てろよ間宮」

蘭豹の銃が轟音を鳴らした瞬間戦いは開始された。
秋葉は身長ほどある細長い槍を下に向けたまま、目を閉じて動かない。
アリアが先に動いた。
ガバメントを抜いて三点バーストで六発
当然、全てを防弾制服に絞ったんだろうが秋葉はすっと動くと銃弾をぎりぎりの所でかわした。
おおとアサルトの連中が驚愕の声を上げる。

「山洞さん目を閉じてかわしたよね遠山君？」

「ああ」

キンジと不知火がびっくりしている。
まあ、あいつには銃弾はきかないんだ。
狙撃手が風を読むように秋葉も風を読む。狙撃手は遠距離だが秋葉は近距離でそれをやるのだ。
アリアの銃を振り上げる空気を割く瞬間、ガバメントから銃弾が空気を震わす瞬間を秋葉は読んでいるのだ。

「くっ、この！」

ガバメントが弾切れになるとアリアは小太刀を抜いてアル・カタを仕掛けるべく突撃する。

「……」

秋葉は動かない。

上段からの二等をやはり最低限の動きで交わす。

右を振り抜いたアリアは回転しながら鋭い回し蹴りを放つが秋葉はそれすら、交わす。

アリアが動く直前にもう、回避の手順を終えているのだ。

アリアはアル・カタで秋葉に猛攻を加えるが秋葉には当たらない。

うわ、秋葉の奴、腕あげたな……

昨日は余裕で勝てるとか言ったが俺でも当てられなくなってるかもしれんな……

まあ、秋葉を沈める手順はあるがワイヤーあってこそだからな。

「あれは、ただ、回避してるだけじゃないね椎名君。もしかして、山洞さんは予知能力とか持ってる超偵かい？」

「当たらずも遠からずだな不知火」

説明してやる気はないが秋葉は武偵で言うならば超偵だ。

だが、能力は予知能力ではないけどな。

「あんた超偵？」

目を閉じたままでいる秋葉にアリアが少し息を乱しながら言った。

「はい、私は風を操ります。あなたの行動は全て、風が応えてくれます」

レキ見たいに聞こえるなそういうと……

「風？わかったわ。あんたのその目を開けない理由は神経を極限まで研ぎ澄ましてるから」

「正解です」

秋葉は槍を持ち上げながら

「ですが、それが分かったからと私に勝てるとは限りません。どんな強力な攻撃も当たらなければ意味がありません」

「……っ」

ある意味では秋葉はアリアにとって最悪の相手だろう。
いや、ここにいるアサルトの人間でも秋葉に勝てる奴はそうはいまい。

「敗けを認めますか？」

「っ、まだあたしは傷1つつけられてない！」

「そうですか」

刹那に秋葉が動いた。
下段の槍をいきなり上に振り上げたのだ。
金属音がし、アリアの小太刀の片方がはねあがる。

「っ！」

秋葉はさらに、右側の後ろに槍を引くと猛然と突きを放つ。

「う……」

アリアはなんとか交わしたが、秋葉の槍は少し戻りアリアに突きの猛攻を加え出した。

「っ！あ」

耐えてるアリアも流石だな……あの槍は能力も使ってるからな……普通に使うよりも早さが段違いだ。
秋葉は空気抵抗を減らすため長刀ではなく槍を使ってるからな。

「おい、まさか終わっちまうのか神崎の無敗記録」

アサルトの生徒の言葉を聞きながら
俺は思う。
武偵は諦めるな決して諦めるな。
アリアは猛攻にさらされながらも辛うじて、小太刀で受け流している。
一歩間違えば防刃制服に直撃して骨折しかねない。

「……」

ビュンと再び、槍がアリアを掠めたしゅんかん、アリアは右の小太刀を離すと槍を掴んだ。

「う……」

既に引き戻す動作をしていた秋葉の懐にアリアが接近して、小太刀を奮った。
うまいな

「……」

秋葉はあっさりと槍を手放すと後ろに跳んだ。
更に、着地してアサルトの誰かのだろう剣を手に取るが槍を失った以上、秋葉の戦闘力はかなり落ちる。
アリアはガバメントのマガジンを入れ換えると再びフルオート射撃を開始する。
今度は走りながら角度を作る。
たが、秋葉には当たらない。
やはり、最小限の動きでかわしきるのだ。

「すごい……」

Sランクの戦いにあかりが呟く。
時計を見ると授業終了まで三分引き分けかな……

「お、おい優」

「あ？」

キンジの声に秋葉に目を向ける。
秋葉のウェーブのかかった髪が揺れている。
スゥと秋葉はアリアの弾丸をかわしながら剣を右後ろに……
あ、あいつ！馬鹿か！
扉を破って闘技場に飛び込む。
後ろで蘭豹が叫んだが無視だ！
回りを確認してからワイヤーで加速する。

「アリア！伏せろぉ！」

「え?ゆ、きゃあ!」

アリアを押したおした瞬間

「一撃必槍……」

秋葉の声が聞こえ光が図上を通過した。
ドオオオンと爆砕音が闘技場を揺らし、慌てて、秋葉の投げて剣の方を見ると
剣が通過した防弾ガラスの場所が溶けて巨大な穴を作っていた。
さらに、その先には融解したらしい赤い鉄が飛び散っていた。
馬鹿かあいつは……殺人技を使いやがって

「おい!秋葉!」

むにゅ
ん?なんか、柔らかい……げっ!
見ると俺はアリアを押し倒した形になっており多分、ブラジャーごと胸をわしづかみにしていた。
わなわなと顔を真っ赤にするアリア

「ゆ、ゆゆゆ、優こんなところで!」

「い、いや俺はアリアを助けようとだな」

「風穴ぁ!」

「ぎゃあああああ!」

授業終了のチャイムの中、体育館に結局、俺の悲鳴は響き渡るのだった。
ちなみに、秋葉はその様子を見ながら槍を手に戻しながら見ているだけだった。
ちなみにこの後、俺と秋葉は蘭豹に呼び出され、防弾ガラスの修理費を支払わされたのだった。
経費で落とすと秋葉が払ってくれたがお前が原因だからな！
こうして、強制終了という形で模擬戦は終わりを告げたのだった

第１０８弾　一撃必槍（後書き）

追記

山洞　秋葉

能力　風

技

一撃必槍〇〇（現段階では不明）

凝縮した風を投擲の瞬間に爆発的に解放する秋葉の必殺技。
並の金属ではあまりの高速の投擲に耐えられず融解してしまう。
今回の話では剣でやったため威力はかなり落ちていた

第１０９弾　内なる怒り

アリアと秋葉が戦ったその日、寮に戻ってシャワーを浴びてからにソファーに倒れ込むように転がる。
つかれた……今日はいつも以上に疲れたぞ……
秋葉が転校してきてようやく落ち着けたぞやれやれ……

「あむ、ん……優君も食べますか？」

そう、目の前にチョコレートケーキを食べてる秋葉がいるわけないんだ……って！

「あ、秋葉！」

「はむ？」

もぐもぐと口を動かしながら秋葉が首を傾げる。

「なんで秋葉がここにいるんだ！」

ていうかどこから入ってきたんだ？
秋葉は俺が聞きたいことを理解したのか窓を指差す。
風の能力で飛んできたのか……
理子の過去を思い出した副産物でステルスのことも大部思い出したが秋葉の風は応用が聞く……いいなぁ……

「すみません。能力を使用した後はこれを食べないといけませんので」

秋葉の前に並べられたチョコレートの山。
そう、グレードが高いステルスは能力を使うと何かでエネルギーを補いといけないらしい。
個人によってちがうが酒であったり食事であったりとするようで秋葉の場合は甘いものがその対象だ。

「まあ、ゆっくり食べたらいいが食べたら寮に戻れよ」

「寮ですか？」

「ああ、女子寮だ」

「今日から私はここに住みます」

「ああ、ここに……ってなに！」

「私は椎名の近衛です。主の傍から離れず守らないといけません」

いやいや！お前、アリアと戦ったし、なんか誤解されてるからやめてくれ！

「き、キンジの許可とらないと駄目だ！」

「必要ありません。」

駄目だ……こいつどうにかしないと……

「椎名の家に帰るなら私はここには住みません優様」

「だから……嫌なんだ」

「なぜですか？」

「……」

帰れば否応なしに過去に触れることになる。
それに……咲夜と鏡夜を初めとして、実家の連中には味方がいないような気がするんだ。
もちろん、実際は違う。
咲夜は帰ってきてほしいと本当に思っているだろうしな……だが、秋葉……お前は……

「お前は俺に帰ってきてほしいのか？」

「はい、椎名の家の意思は……」

「違う。山洞秋葉としての意見だ」

秋葉はチョコレートを机に置いてから俺を真っ直ぐに見ると確かな怒りを俺に向けた。

「……」

だが、結局何も言わずに立ち上がる
その背中を見ながら幼い秋葉が泣いているあの光景が

「……」

炎の中、彼女は……

「……」

そうだな……逃げ回ってても償いにはならないんだよな……

「分かったよ秋葉」

「？」

「家に帰る」

すこしは、過去に向き合わないといけないらしい……

でも、できたら帰りたくないな……

「……」

秋葉は黙って、玄関の方を見た。

長い蜂蜜色の髪が一瞬だけ見えたが気にもとめなかった。

第１１０弾帰還へ

家に帰るという俺の意思に秋葉の行動は素早かった。
１時間後には次の日の夕方６時に寮の前に車を回しますと言って姿を消してしまったのだ。
マスターズに休む理由をいわないといけないという理由を秋葉に言わなければすぐにでも車を回してきかねない素早さだった。
ま、明日は金曜だから月曜と火曜ぐらい休むことをいえば大丈夫だろう。
キンジに月曜火曜まで寮にいないとことを告げる。
アリアには話したんだが、

「ふーん」

と言われただけで特に何も言われなかった。
なんか不気味だなと思っていたんだがなぜかは１８字時になって初めて分かった。

「おい・・・」

寮の前に止められた馬鹿みたいに大きなリムジン
その後部座席には、アリア、キンジ、レキ、理子、マリが座っていたのだ。

「準備終わりましたか優君」

と、運転席から顔を出したのは秋葉だ。

「いったいどういうことなんだよみんな！」

「くふ」

俺の問いに小悪魔のような笑を浮かべて答えたのは理子だ。

「甘いなユーユー」

何がだよ！

「こんなお誘い受けて断らない手はないんだよ」

「せっかく、誘って貰ったんだから断るのは貴族としてどうかと思ったのよ」

え？アリアさんなんのこと？

「・・・」

レキはこくりと頷いただけ
お前何が言いたいんだよ！

「まあ、俺は巻き込まれただけだ」

と、キンジ
なるほどな・・・なんとなく分かった。

「秋葉、ちょっとこい」

「？」

秋葉は運転席から出ると俺の方にやってくる。
小声で
「お前、あれはどういうことだ？」
こいつが誘ったとしか思えん
「いけませんでしたか？」
「当たり前だろ！」
実家にみんなが来るなんて想像しただけでも気が重くなるぞ
「ですが、東京は今、危険です。　優君の仲間を避難の意味を込めて、招待するのはいけないことでしょうか？」
「・・・」
そう言われると正当性があるように思えるな・・・
東京は今、木偶人形が暴れているし、学園島にも1度とはいえ現れたらしい・・・
手の届かない場所で友達が死ぬなんて絶対に嫌だ・・・
そう考えるならむしろお膳立てしてくれた秋葉には感謝するべきなのだろうな。
白雪は恐山に合宿中だから、問題はない。
「分かったよ」
諦めて車に乗り込む。

「旅行楽しみだねユーユー！」

理子が隣に座り込んでくる。
甘いバニラのような香りにドキッとする。
ブラド戦で理子を救ってからこいつは、少し俺から離れてたんだがこういうところは相変わらずだな。

「俺の実家なんて行っても面白くないぞ？」

「だから行くのよ」

俺の正面に座ったアリアが備えられた冷蔵庫からジンジャエールを取り出すと口に運ぶ。

「あんたは、いろいろ、謎が多い。　調査は武偵の基本よ？」

「はぁ・・・お前ら・・・行っても気分のいいもんじゃねえぞ俺の実家は」

「どういうこと？」

アリアが聞いてくる。

「行けばわかるよ」

窓の外を見ながら俺は目を閉じる。

「優！　説明しなさい！」

アリアのアニメ声を聞きながら、秋葉の出発しますという声を聞き

ながら俺は意識を手放した。
実家に帰る前に体力温存しとかないとな・・・
少しだけ、目を開くと俺の横にいるレキは何も言わずに窓から見える夜空を見上げていた。
こういう時は、レキだと助かるよな
そういえば、レキはなんでついてきたんだろうな？
他の連中は面白そうだとか理由はわかるんだがこいつはわからん・・・
・
ちなみにハイマキは助手席できちんとオスワリしている。
シートベルトまでしてやがる・・・
まあ、いずれにせよ目的地まで約８時間ぐらいか・・・
到着は真夜中になるだろう。
鏡夜とかみんな寝ていてくれると嬉しいんだがな・・・

「なあ、アリア」

「何？　優？」

この子には言っとかないとな

「もし、実家で俺に失望するようなことがあればチームメイト解消でいいからな」

あのことを知られたくない・・・
知れば、アリアは俺から離れるだろう。
いや、レキも理子もキンジもマリも知れば・・・

「何言ってるよの優？」

アリア？

「武偵憲章にもあるでしょ？　仲間を信じ仲間を助けよ。　あたしはあんたを信じてる。
理子を助けたときもそうだし、神戸で藤宮の2人を助けたあんたは悪人じゃない。　違うの？」

「さあな」

自分が悪人じゃないなんて俺は言えない・・・
少なくても秋葉の前では言えないんだ・・・
俺の犯した罪は未来永劫消えない。
だが、それでも・・・
周りを見渡しながら俺は思う。
みんなは、あのことを知っても俺を仲間だと思ってくれるだろうか・・・
突き刺さるような視線を浴びたあの日々・・・

椎名に名前に泥を塗った男　生きてる価値すらない

我ながらよくグレなかったもんだな・・・

「俺はお前を尊敬していた・・・」

あいつの言葉も重い・・・

くそ、家のことを思い出すとどうしても嫌なことしか思い浮かばない・・・

でも、恨もうとは思わない。

俺が恨むとすれば1人だけだ・・・

ローズマリー・・・あいつこそ俺の人生をめちゃくちゃにした張本人なんだから・・・

高速道路に入るリムジン

やはり、帰りたくないな・・・

レキの膝枕！？

旅行ということで理子はいろいろと遊ぶものを持ってきてはいたが騒いでいたのは最初の1時間だけ、みんな、眠気が勝ったらしく気づいたら眠っていた。
俺もみんなが寝息をたててるのを聞きながら携帯をいじっているとこてんと理子が俺の肩に頭をのせてきた。

「こら理子！　寄りかかってくるな！」

「んん・・・やーだ」

起きてるのか？
そう思った寝息が聞こえてくるので本当に寝ているようだ。
守れてよかった・・・
ブラドに勝つことができて・・・
自然と笑が溢れてきて携帯を閉じて窓の外を見ようと右を向く。

「・・・」

レキも目を閉じている。
いつもの格好ではなく、少し首を前に倒した眠り方だ。

「寝てるのかレキ？」

「いいえ」

レキが目を開いた。
高速道路の橙色の光の照らされながら見るレキはなんというか神秘

的に見えるな。

「お前はなんで来たんだ？　いや、誤解するなよ？　嫌いだとかそういう理由じゃないからな」

「風に命じられました。　優さんとともに行けと」

また風か・・・

「風ねえ・・・」

秋葉は黙って運転している。
風と言えば秋葉なんだが、レキの言う風はどうも、ステルスとは違うらしい・・・

「っ・・・」

頭に殴られたような頭痛がした。
これは・・・また、過去の記憶か？
どこまでも、広がるその大地の先にその少女はいる。
風に髪をなびかせ・・・

「優さん？」

はっとして我に帰るとレキが無表情にこちらを見ていた。
同時に見えていた光景が霧散する。
ま、まさかな・・・理子に続いてレキとまで、俺、過去に会ってないよな？
そんなわけないと思いながら首を横に振る。

「なんでもねえよレキ。　そういって、俺は目を閉じた」

あれ・・・そういえば、レキって俺と初めてあった時から優さんだったよう・・・な

だが、その疑問をレキにぶつける前に俺に意識は闇に包まれた。

ん・・・寝ちまったか・・・

目を開けると奇妙な光景だった。

世界が横になってるぞ・・・

寝ぼけながら目をこする。

なんか、この枕あったかいな・・・

って！

慌てて、起き上がると理子が寄りかかっていたらしく理子はそのまま、窓に頭をゴンとぶつけたがそれどころじゃねえ！

どうやら、俺はレキの膝枕で寝ていたらしい。

レキを見るがレキは寝ているらしい

よ、よかった・・・

一番騒ぎそうなアリアはキンジの肩に頭をのせて寝てやがる。

今はいいなとか言わんぞキンジ・・・

時計を見るとすでに６時間経過していた。

ずっと、レキの膝枕で寝ていたのか俺は・・・

「起きましたか優君？」

「ぐるおん」

秋葉とハイマキが前から言ってくる。

ハイマキは多分、やっと起きたかまぬけといっているように聞こえるぞ

「あ、ああ・・・なあ、秋葉俺・・・」

「優君がレキさんの膝で寝ていた時間は５時間５８分です」

ほとんど！最初からじゃねえか

「ちなみに、レキさんはさっきまで起きていました」

ぎゃあああああ！やべえ！後で、なんてレキにいえばいいんだ！

「お、起こせよ秋葉！」

「私は運転中です。　１度ハイマキさんが優君に飛びかかろうとしましたがレキさんに止められました」

「ぐるおおん」

運のいいやつ目かな？

ま、まあ不幸中の幸いはアリア達が寝ていたことか・・・

「今どこなんだ秋葉？」

「滋賀県です。　ごへいもち食べて行きますか？」
秋葉は滋賀県のサービスエリアーで売られている名物を言う。
「いや、遅くなってもしょうがねえからな・・・このまま行こう」
「はい」

それ以後、会話がなくなってしまう。
寝てしまうのは簡単だったがこいつとはもう少しだけ話しておこうかと考えてやめた。
後にして思えば・・・ここで、話しておればと悔やむ時間だったんだろうな・・・
何も生み出さないただの、惰眠のために俺は目を閉じた。
そして、俺たちはついに踏み入れる。
京都に入り、高速を降りる。
そう、俺の実家は京都にあるのだ。
ああ、ついに戻ってきちまったんだな・・・
京都の街を外れて向かう先にため息を付きながら俺は周りを見渡した。
みんな寝てるが俺の大切な仲間たち・・・出来たら、一緒に友だちとして卒業したいな・・・
そんな願いを思いながらため息を付くのだった。

第１１２弾　弟登場！

「つきましたよ」

「「「「「……」」」」」

おい、みんな無言になるなよ……
まあ、仕方ないか？
俺も見るのは久しぶりだからな。

「じ、実家と同じくらい大きいわ」

これに匹敵する屋敷って……
アリアはやっぱり貴族なんだな。

「まさか、これほど大きいとは想像してなかった。優お前金持ちだったんだな」

「俺の金じゃないけどな」

キンジに言ってからレキを見たが相変わらずレキはドラグノフ狙撃銃を背負い、無言で屋敷を見上げている。

「ユーユー嘘つきだぁ！」

「何がだよ！」

屋敷に入りながらホールのようなとこに出ながら理子に言う。

「いつも貧乏みたいなこといってたのにユーユーお金持ちぃ！」

「いや、だからな！高校からは一円も俺は援助しともらってねえぞ！実家からは」

まあ、実は金額無制限のクレジットカードがあるんだがあれは中学の学費意外には使ってない。
高校からは全部、クエストで稼いで学費も納めてるからな。もう、このカードは使わないと決めている。
まあ、自衛隊とか実家の力を借りたのは事実なんだけどな

「くふふ、ユーユーと結婚したら逆玉だぁ」

聞いてねえな馬鹿理子……

「失礼します。お荷物を……」

すうと寄ってきたのは数人の仲居だ。
屋敷はメイドと決まりものだがこの家は少し変なとこがあるからな……

「ああ、わる……」

ボストンバックを渡そうとして４０代くらいの仲居の手に触れた瞬間、その仲居は

「ひい！」

悲鳴をあげて後退り、俺のボストンバックが床に落ちる。

「だ……」

「も、申し訳ありません！」

その仲居は悲鳴をあげて土下座してきた。

大丈夫かと言うつもりだった俺はため息をついてボストンバックを肩に担いだ。

「いや、いいから顔をあげろよ」

だが、仲居はぶるぶる震えながら申し訳ありません申し訳ありませんと繰り返しながら頭を上げない。

他の仲居に荷物を渡していたアリア達もびっくりした顔でこちらを見てる。

他の連中もそうだな……仲居達は我関せずを貫き、俺と視線が会わないようにしている。

「もう行っていいですよ」

秋葉だった。

ぽんと仲居の背中を叩くと仲居は弾かれたように立ち上がり失礼しますと走り去ってしまった。

「優君の荷物は私が持ちます」

「いや、いいよ。部屋に案内してくれないか？」

「はい」

「ち、ちょっと待ちなさいよ優！なんなのよこのメイド達の態度！」

怒りで顔を真っ赤にしたアリアだった。
ハハ……タコみたいだな

「いいんだよ」

「よくない！あんた、実家ってことは主の子息でしょ！メイドは主の関係者には敬意を払うのが普通よ！」

まあ、蔑ろにしちゃダメなのはなんとなくわかるけどな

「だから、いいんだアリア。俺を避ける理由はわかるからな」

「何よ理由って！説明しなさい優！」

戸惑ったように仲居達がアリアを見ている。
理子は成り行きを見守るためか静観してるな……
さて、どうごまかすか……

「そのクズが犯罪者だからだ」

唐突に頭上から響き渡った声に顔をあげると、ホールの正面の階段の上に少年が立っていた。
右手には刀、トレーニングをしていたのかタンクトップにジャージという姿
一言で言えば日本男子という言葉がふさわしいそいつは……

「久しぶりだな鏡夜。直接会うのは家を出て以来か？」

「黙れクズ、お前と話す気はない」

ぎろりと怒気、殺気をぶつけながら鏡夜は言った。
直接、会っても態度変えないか……

「だ、誰よあんた！」

アリアが口を挟んでくる。
鏡夜は殺気を止めるとアリアを見て

「俺は椎名鏡夜、そこのクズの弟だ。お前も名乗れ。礼儀を知らないのか？クズの仲間は」

「く……クズって……あんた優の弟なんでしょ？なんで、そんなに優にかみつくのよ」

鏡夜は不愉快な顔をしながら

「黙れ、他人が俺をクズの弟と呼ぶな！それより名前も名乗れないのか？」

「あたしは貴族よ！神崎・Ｈ・アリア！」

「H?なるほどな」

ふんと馬鹿にしたように俺を見下す鏡夜

「クズが必死になって免罪を証明するために動き回ってるホームズ家の女はお前か」

調べたのかお前……

「女女って！あたしはアリアって名前があるのよ！」

ガバメントに手を持っていこうとするアリアの手を慌てて止める。

「ゆ、優放しなさいよ！あいつ貴族を侮辱したわ！」

「いきなり、ぶっぱなすな！一応実家なんだ！」

近衛の連中がアリアを抹殺対象にしたら大変なことになる。

「ふん、お前らは名乗らないのか？」

鏡夜はキンジ達の方を見て言う。

「遠山キンジだ。あいにく、アリアみたいに貴族じゃないがな」

「峰・理子だ」

理子怒ってるのか？男しゃべりに戻ってるぞ

「レキです」
最後に名乗ったレキを鏡夜は見てから
「なるほどな。クズの仲間というから見に来たが弱いものは群れるとはよくいう」
顔を真っ赤にしてアリアが口をパクパクしている。
怒りで声もでないらしいな。
「おい……お前、あんまりあたしの友達を侮辱するな」
げ！理子のやつ！
「あ、秋葉！」
「はい、理子さん。落ち着いて下さい」
「くふ、理子悪い子なんだぁ」
ざわざわと髪が動き出したぞ。
ま、まずいぞ！
思わずレキの方を見たが幸いレキは微動だにしていなかった。
助かったと思った瞬間、レキがドラグノフを肩から外して……
ちょ！レキ！お前、妙な風の指令でも受けたのかよ！
「レキ！やめろ！」
「ふん、面白い」

鏡夜も刀に手を付けて構える。
あ、あれは風凪の構えか！

「みんなやめろ！」

もうだめだと俺が思ったその時だった。救いの天使は現れた。

「優兄！」

ホールに響き渡る声、二階から和服を来て、右目に眼帯をつけ小柄でおかっぱ頭の少女が満面の笑みで階段を降りてくる。
そして、アリアを抑える俺に向かい飛び込んできた。
当然、アリアの胸に飛び込む形になるから……

「きゃあああ！」

「うわ！」

アリアと俺の悲鳴が重なり俺達三人は押し倒されるのだった。

第１１２弾　弟登場！（後書き）

椎名　鏡夜

身長１７４センチ

武器　日本刀（紅蓮）

容姿　きついつり目

　　一言でいうなら将来頑固親父になりそうな感じ

補足

　優の弟で１歳年下である。

過去の出来事から優に対しては一貫して、クズと呼び、嫌悪している。

次期椎名の当主はほぼ確実とされているが自惚れず日々精進し、実力は年上の近衛達を凌駕する実力を持つが月詠には勝てた試しがない。

優とは事件以来一度も手合わせしてないが当時の彼は一度も優に勝つことができずそれが、今の彼のプライドを傷つけている。

基本的に家を出ないため世間知らず。

自分に厳しく他人に厳しくを基本としているが多少、妹の咲夜には実はほんの少しだけだが甘い。

第１１３弾　妹登場！

いて！

油断していたこともあり、床に尻餅ついた俺の体にアリアが悲鳴をあげながら倒れ込んでくる。
アリアの前には小柄な少女。
びたーんと漫画みたいな音がしその場が沈黙に包まれる。

「あれ？　優兄じゃ……」

「ど、どきなさいよ！」

「す、すみません！」

アリアから飛び退いた眼帯の少女はペコリと頭を下げる。
アリアも立ち上がり、俺を睨もうとした、瞬間少女と俺の目が会った。

「よう咲夜ひさ……」

「優兄！」

猪突猛進という言葉がある。
まさに、言葉通り俺の妹、咲夜が胸に弾丸のように満面の笑みを浮かべながら飛び込んできた。

「ぐえ！」

つぶれたひきがえるのような声を出しながら俺は倒れた。

「なっ……」

アリアが絶句しているな。

「あたた、いきなり飛び込んでくるなよ咲夜」

そういいながら俺はぽんと妹の頭に手を置いた。

「でも、久しぶりでうれしくて」

リスのようなつぶらな瞳を向けてくる咲夜。

ハハ、変わってないなお前は

「ただいま咲夜」

「はい、お帰りなさい！優兄」

少しだけ戻ってきてよかったなと思った時

「咲夜！そのクズから離れろ」

鏡夜が怒りのこもった声で言ってくる。

「クズなんかじゃありません！優兄です！鏡兄」

「咲夜！」

「鏡夜……兄様」

ぎゅっと俺の服を掴みながら咲夜は言いなおした。

「おい！鏡夜あんまり、妹をいじめるな」

「黙れクズ、椎名の家を追い出された人間なぞもう、兄弟でもなんでもない！」

この野郎……いい加減しろよ……

戦うべきかと思ったその時

「おや？これはなんの騒ぎですか？こんな夜中に？」

鏡夜の横の通路から仲居さん二人を連れた白髪まじりの脂ぎった男が歩いてきた。

「新吾叔父さん……」

鏡夜が言った。

「ふむ」

口ひげをたくわえた新吾はホールを見回すと

「おお！優希君じゃないか！久しぶりだね」

「お久しぶりです……」

内心で笑いながら俺は言った。

「ね、ユーユー！誰誰？」

理子が多分、咲夜のことも含めて聞いてくる。

「ああ……」

俺が言おうとすると

「これはこれは可愛らしいお嬢さん達だ。優希君の恋人かな？」

ハハハと人なつっこい笑顔で新吾が言う

「こ、こい……」

アリアがぼんと赤くなったが理子は調子にのったのか

「はいおじ様！ユーユーは私の恋人でーす」

「違うだろ理子！」

即座に否定すると理子はぷーと頬を膨らませ

「ええ、キスまでした仲じゃん理子達」

「い、いやあれは……」

言ってから後悔する今の発言はしたことを完全に認める言葉だ。

「優兄……」

咲夜が泣きそうな目でこちらを見上げてくる。

ど、どうしたらいいんだ……

「……」

ぐあ！レキさん！無表情なその視線が痛い！

「ゆ、優！あ、あんたやっぱり理子と！」

ぎゃあああああ！やめろ！

アリアがガバメントを抜こうとした瞬間

「ハハハハハハ、実に楽しい仲間ですな優希君」

新吾おじさんが太った体を揺らしながら言った。

「自己紹介が遅れましたお嬢さん方と優希君のお友達。私は葉山新吾、椎名の家の代表代理をさせて頂いています」

「椎名の家の？そもそも、優の実家は何をしてるところなんですか？」

疑問に思ったことをキンジが聞いている。

まあ、気になるのはわかるが……

「ハハハハハハ、それについてはまた、明日以降にしましょう。君達、お客様を部屋にご案内しなさい」

すっと後ろの仲居が動き出す

「志野さんはもう寝たのか？」

できれば挨拶をしておきたいんだが……

「お母様は今は寝てると思う……最近、体調が優れないから……」

悲しそうに咲夜が言う。

「そうか……」

アリアが何か言いたそうにこちらを見ているが階段を降りてきた仲居の一人が俺の前にやってきた。

「お荷物お持ちしますよ！優希ぼっちゃま」

「いや、いいよ……」

どうせ怖がるんだろうと思い、断ると

「駄目ですよ！荷物運びは仲居の仕事なんです！」

強引に荷物を奪われてしまう。

以外に思ってその子を見るとかなり、若かった。

というか小さい。

中学生か下手したら小学校だぞ……

そばかすがついた田舎娘といった感じの少女はうんしょっと荷物を担ぎ上げる。

「こら、睦月！優希様に失礼でしょう」

「ええ、だって中々、荷物渡してくれないもん」

「優希様すみません、この子まだ、見習いなもので」

仲居かと思えばこのポニーテールの子は近衛だな……

椎名の近衛は私服の着用が許可されている。

仲居は一貫して着物だ。

にしても驚いたな……俺にこんなに普通に接してくれる連中がまだ、実家にいたのか……

「いや、いいよ。とりあえずみんなまた、明日だ。ゆっくり休んでくれ」

何か言いたそうな面々を見ながら俺達はそれぞれの部屋に通される。

無駄に広い屋敷だな……中身の構造調べないと戦闘になったときは不利になる。

実家で戦闘なんか考えたくもないが新吾叔父さんが現れた時、ふんと言って姿を消した鏡夜の態度を見る限り一戦交えるぐらいはしてきそうだからな……

名残惜しそうにしながらも眠そうな咲夜をまた、明日、会えるからと部屋に帰らせて小学校見たいなメイドと秋葉に見送られ部屋に入ったんだが……

右にシャワーを浴びる部屋があるがもう、今日は寝るか……

念のためにデザートイーグルを枕の下に隠して蒼神を布団の中に納めてから横になると目を閉じた。

ああ、明日からのこと考えると気が重い……

滞在は予定では火曜までだが、戻ってきたならやりたいことも多かった。

この椎名の家じゃない旧本家……秋葉の話なら当時のまま、放置されてるらしい。

「行くんですか？あそこに？」

秋葉の言葉が重いな……結局、行くとは秋葉には言わなかった。
あそこは誰が決めた訳ではないが椎名の家には禁忌的な場所になってるらしい。
だろうな……わかる……おれは……
そこまで考えて眠気が俺を包む。
ただ、最後の片隅の意識、誰かが部屋に入ってくる気配を感じた。
敵意はまったく感じられない。
だ……れだ？
そして、俺の意識は闇に包まれた。

第１１３弾　妹登場！（後書き）

椎名　咲夜

身長　１３５センチ

年齢　１１歳

容姿　おかっぱ頭に右目に白い眼帯

補足

　優の実の妹で椎名の家の次女
過去の事件に関わる一人でありながら優を兄としたう実家では数少ない理解者。
戦闘力は皆無であり、鏡夜同様に世間知らずな一面もあるが実は近衛などに外の雑誌や知識を与えられており外に関する憧れは人一倍強い。
だが、同時に眼帯の件もあり、自分の容姿から外に出る怯えも存在する。
右目は失明しており、眼帯をつけているのはそのため、失明した理由は省略
椎名の家では男の方が女より偉いという風習が残っており、戦闘の実力がない限り疎まれる存在でもあるが近衛や仲居達からは容姿のかわいらしや優しい性格のたまものので慕われている。
そして、なんだかんだで兄二人にも嫌われてはいない存在

第１１４弾　若奥様騒動

「え？　師匠でかけるんですか？」

木の玄関に腰を下ろし、ブーツの紐を縛る師匠を見ながら少年は言う。

「うん、今日は、ちょっと用事があるんだ。なんだい優希？私がいないと寂しいのかい？」

かっと顔を赤くした少年……優希は顔を真っ赤にしながら

「うるさい馬鹿師匠！さっさと、出掛けろよ！」

「はいはい」

女性だというのに黒のコートを手に取ると女性は出ていった。

「帰りは夜になると思うけど今日は最低限の鍛錬したら遊んでていいからね」

「え！本当！」

少年がぱっと顔を輝かせる。

「うん、ただ家の本宅からはでちゃ行けないよ？」

「なんでだよ？」

女性はふっと笑いながら

「君はよく迷うからね。フランスしかり、中国しかり、ルーマニア、ロシアしかりね」

「ルーマニア……」

少年の顔が曇る。

思い出すのはあの金髪の少女……

「優希」

それを察したのか女性は優しく

「あの時は仕方なかったんだ。でも、彼女はもう、ルーマニアのブラドの元を逃れてるはずさ」

「本当？」

「ああ」

疑う余地はなかった。

この人のいうことに間違いなんてあるわけがないのだ。

「あの子に会えないかな？」

自分で助けられなかったことは不本意だが逃げられたならあってみたかった。

「そのうちね」

そういいながら師匠は出ていってしまった。

「よし、じゃあやるか」

今日もあそこに行こう。

きっと……

「……」

ちゅんちゅんと雀の声を聞きながら重たい目蓋をうっすらと開く。

無駄に広い天井を見ながらため息をついた。

今の夢はあの日の朝か……

どうも最近、忘れてることが夢に出てくることが多い気がするな……

同時に悲しくなってきた……

師匠……

そこで、俺は何気なく横を見たんだが……

「……」

「え？……」

「おはようございます優さん」

ええええ！なんでレキが俺の部屋の壁で寝てたんだ！
なんと、体育座りでドラグノフを肩に置いたレキがいていたのだ。

「ち、ちょっと待て！レキ」お前いつからそこに……」

「深夜からです」

無表情に無感情の抑揚のない声でレキは言う。
部屋に入ってきたのお前か！

「不法侵入だ！まあ、レキならいいか……」

本心から言う。
キンジ以外だと大変なことになりそうだからだ。
理子は布団に潜り込んで来かねないし、アリアは俺を踏みつけるだろうからな

「で？なんで俺の部屋にいたんだよ一晩中」

俺だからいいけど好意もない男の部屋に夜中にくるなよレキ……相手が悪かったら襲われるぞ

「風に命じられました。優さんの傍であなたを護衛しろと」

ハハハ、この子も結構、ずれてるよな……
すっとレキが立ち上がり俺の前までやってくる。

「着替えるから出てくれよレキ」

「はい」

流石に、女の子の前で着替えるわけにはいかないからな
レキが外に歩き出そうとした瞬間

「優兄！起きてる？」

コンコンと控えめなノック……
ま、まずい

「や、やばいどうしよう」

「？」

レキがお構いなしに部屋の出口に向かったので慌てて手を掴んで引っ張る。
うわ、軽いなお前とか言ってる場合じゃねえ！

「寝てるのかな？フフフ、起こしちゃお」

や、やばい入ってくる！
朝に女の子と二人きり、夜中に見つかるよりはいいがどう考えても死亡フラグばっきばっきにたってるよ！

「こ、こいレキ！」

焦った俺はレキをベッドに押し倒して動くなと懇願してから俺もベッドに飛び込んだ瞬間、ドアが開いた。

「あれ？優兄起きてるの？」

「あ、ああおはよう咲夜」

「うん」

ありえんだろこれは！
布団が分厚いのとレキが小柄だからばれてないが俺の布団の中にはレキとドラグノフ……
なんて、カオスなんだ！
と、とにかく咲夜を

「さ、咲夜なんだ？」

「うん、ご飯食べに行こう優兄」

「わ、分かった！い、今俺、今、下、トランクス一丁だから着替えたいから出ていってくれないか？」

「え？」

咲夜がじーと布団を見てくる。
ま、まずいてか、今気づいたが俺の足にレキの体のどこかが接触してるよ！

「さ、咲夜？」

「あ、ごめん優兄直ぐにでるよ」

ぱたぱたと和服を揺らしながら外で待ってるねと出口に向かう。

た、助かったぞ。
だが、運は味方しなかった。

「おはようございます！咲夜様、優希様」

「おはようございます」

げ！昨日の小学生仲居と近衛じゃねえか！

「おはよう睦月、日向」

咲夜は当然知ってるらしい。
小学生仲居が睦月でポニーテールの近衛が日向か……
ってそんなこと考えてる場合じゃねえ！

「き、着替えるから出ていけ3人とも！」

「お着替え手伝います優希様」

ニコニコしながら睦月が部屋に入ってくる。

「く、来るな！」

「？　優希様何を焦ってるんですか？」

日向が首を傾げながら俺を見てくる。

「あ、あの優兄の布団の下は……」

咲夜が何か言おうとしたが睦月の方が早かった。

「シーツかえますからどいてください」

「や、やめろ！」

俺はレキが潜んでいる布団を必死に押さえつけようとしたが睦月が下から布団を上にまくりあげたために下半身だけが持ち上がり

「はやく起きて……え？足が二つ？」

も、もうだめだ

「申し訳ありません優希様……」

ひゅんと風の音がし日向が一瞬で俺に肉薄すると布団を掴むと一気に引っ張った。

慌てて、力を込めようとしたが後の祭り。

布団の下からレキが現れる。

もちろん、彼女は無表情で上半身を起こした。

「……」

ぜ、全員が沈黙してるぞ！

「い、いやこれは……」

「わーあ！次期椎名の奥様候補ですね優希様」

「違う！」

全力で否定するが突き刺さるような視線にはっとすると咲夜がアリア見たいに顔を赤くしながら

「ご、ごめんなさーい！」

と走り去ってしまった。

あああああ！やばい！

「それで優希様のどこが気に入ったんですか若奥様」

「？」

きょとんとしているレキとなんだかいらん誤解と原因を作った睦月とりあえず頭に拳骨を叩き込んでおいた。

はあ……また、家での立場が悪くなるよ……

第１１５弾　優希調査記録その１―秋葉編

なんとかみんなの誤解を説いたのもつかの間、案内されたのは大人数が食事するための広間だ。
すでに、案内されていたらしいアリア達

「あ、ユーユーおっはよーん」

理子が朝からハイテンションに手を降ってくる。
少しは自重しろ！

「おはようございます優君」

ペコリと頭を下げてきたのは秋葉だった。

「おはようみんな」

「ふん」

不愉快な声が聞こえたので見ると鏡夜だ。
その横には咲夜が座っている。
上座を見るが空席だ。
まだ、着てないみたいだな

「やあ、おはよう優希君」

と、でっぷりとした腹を揺らしながら朝からのワインを手にしている葉山の叔父さんだ。
和食には合わないだろうにワイン……

「さあさあ、ここに座りなさい。と、横を指してきたが」

「すみません叔父さん。俺は友達と食べます」

「そうかい？」

それ以上しつこくは葉山は誘わなかったので空いていたアリアの隣に座る。

続いて当然のようにレキが俺の横に座る。

ちなみに、アリアの対面には理子、理子の隣にはキンジが座っている。

席は下座に近いがまあ、いいさ……

部屋に入ってきた時の周りの空気は冷たかった。

やはり、好意的に俺を受け止めてくれるのは少数らしい。

「優、今日はどうする予定なの？」

並べられていく和食を見ながらアリアが聞いてくる。

「そうだな。俺達はこの辺のことを知らないんだ」

「ああ、悪いみんな……今日は昼からちょっと用事があるんだ」

「用事ってなになに？」

理子が聞いてくる。

「ああ……」

少しだけあの人の顔を思い出すと

「お墓参りだよ……」

結局、上座の主である志野は現れなかった。

納豆に悲鳴をあげるアリア達を見つつ、食事を終えるとついてきた秋葉に

「志野さんとの面会はできないのか？」

「１０００に部屋にとのことです。お昼はお弁当を作ります」

「お前が作るのか？」

「私の手作りをご希望ですか優君」

「ああ……いや」

女の子に失礼かもしれんがなんか秋葉って料理失敗しそうなんだよな……アリアも壊滅的だし……多分、レキも駄目だろうな……あいつはカロリーメイトばかり食ってるからな……

理子やキンジは知らんがなんかあいつらはできる気がするぞ。

ハハハ、今度聞いてみるかな？

「優君？」

「え？あ……」

はっとして秋葉を見る。

「変わりましたね……今の生活は楽しいですか？」

「……」

答えられない……この子の前で幸せだなんて絶対に言えないんだ……

「ごめんな……秋葉」

「何を謝るんですか？」

無表情だがその目は俺の目を真っ直ぐに見てくる。

「いや……」

ため息をついてから足を速めた。

ちょっと準備してから志野さん……いや、母さんの部屋にいかないとな……

サイドキンジ

「怪しい」

「怪しいねぇ」

「……」

な、なんだみんな優の奴が出ていった途端、話始めたぞ。

レキは相変わらず無言だが視線だけアリア達に向けている。

「決めたわ」

と、アリアが立ち上がった。

「キンジ、理子、レキ。あいつの過去を調べるわよ」

「うーん、理子的にはあまりやりたくないんだけどユーユー、自分から話してくれなさそうだしねぇ」

「武偵憲章第5条行動に疾くあれ先手必勝を旨とすべしよ」

いや、アリアよあれは、過去を暴くための口実じゃないんだぞ

「そうと決まったら役割を分担するわよ。理子は過去にこの辺りで起こった事件を洗って」

「ほーい」

「あたしは屋敷の人間に聞き込みをするわ。望みは薄いでしょうけど……」

確かに……優の実家に来てから、あの鏡夜とかいう弟をはじめとしてなんか優を避けてるというか怯えられてる気がする……

「レキは優の監視ね」

「はい」

レキが素直に頷いたな。

「俺はどうするんだアリア？」

「キンジ？うーん、あんたが決めなさい。誰に同行するかは任せるわ」

「おお、キー君分岐ルートだ。くふふ、誰ルートを選ぶのかな？」

にやにやしながら言うな理子。
それに冗談じゃない。
ただでさえ、女といるのは嫌なのにルート選択とやらなんかしてたまるか

「俺は一人で調査するよ。お前らもあんまり無茶すんな」

つまんなーいという理子にでこぴんしてから俺達調査に乗り出した。
とはいえ、みんなバラバラになっての調査だからな。
何をしたらいいんだ？
インケスタでやるようなことを馬鹿正直にやる必要はないだろう。

理子の方がインケスタの能力は上だからな。
ホルスターのベレッタも見るがこいつも今回は出番はなしだな。
優の家はなんだか強者揃いが揃ってるみたいだからな。

「ん？」

廊下を歩いてると知った顔が一人で歩いてくる。

「山洞」

山洞秋葉が足を止めて俺を見てくる。
無表情だがなんか、レキに似てるぞこいつ

「遠山君？どうかしましたか？迷ったんなら……」

「いや、迷ってない。それより今、暇か？」

「暇ではありませんが2時間は自由な時間があります。それと、私のことは秋葉で結構です。山洞の名前はこの家ではあまり呼ばれたくありませんから……」

「どういうことだ？」

「答えたくありません」

聞いても無駄そうだ。

「分かった。秋葉、じゃあ俺もキンジでいい」

「では、キンジ君で」

「それでいい」

女の子と話すのは苦手だがなんの情報も得ずに戻ればアリアに風穴開けられるからな。少しは、頑張らないと

「立ち話も何ですし、部屋で話しましょう。お茶も出します」

「分かった」

どうやら、客間か何かに案内してくれるらしい。仲居さんもついてるからヒステリアモードの心配も気を付けていれば大丈夫だろう。幸い、秋葉はアリアよりはあるが子供体系だからな。

だが、俺は甘かった。

「ここです」

「う……」

部屋に踏み込んで俺は躊躇した。

それなりに広い部屋だが、明らかに生活の跡がある部屋だ。

「そこのソファーに座ってください。今、お茶かコーヒーを」

「あ、秋葉」

「なんですかキンジ君？」

「なんですかじゃない！ここお前の部屋か？」

「そうですが？」

そうですがじゃないだろ！

「何か問題があるんですか？客間も考えましたが優君の知り合いですから信頼の証として部屋に呼んだんですが……」

そういわれると反抗しずらいな……

「何か期待してるなら無駄ですよ。私に手を出したら空の彼方まで旅に出てもらうことになります」

「そ、そんな期待はしてない」

「では」

秋葉が行ってしまったので仕方なしにソファーに座り、回りを見渡してみる。

ううん……女の子の部屋なんて落ち着かないな……

気晴らしに部屋の中をチェックする。

青いソファーに正面には巨大な液晶テレビ、ＤＶＤプレーヤーもき

ちんと揃ってるし……
回りを見渡すと壁のすみにはベッドがあり、その横にはタンスに大きな本棚が並んでるぞ。
漫画やＤＶＤばかりだな……
もしかして、理子みたいな趣味があるのかこの子
机の上にはノートパソコンもある。
ここまでならちょっとへんな普通の女の子だが異質なのは部屋の逆側の端にはトレーニング用の機材が置かれているな。
壁には立派な槍が３つ並んでいる。
近衛といったか……やはり、戦う女の子なんだなこの子も……
普通じゃない……

「お待たせしました」

特に注文もなかったので玉露のお茶を出されつつ正面に座る秋葉に話しかける。

「アニメや漫画好きなのか？」

「嫌いではありません」

ということは好きなんだろうな

「そんなことを聞きに部屋に？」

「い、いや、違う」

まずいな、ストレートに聞いても多分、答えてくれないぞ……
こういったことはダギュラの分野だが、あいにく、優のアミカのマリは今回は留守番だ。

「こ、この家にはいつから住んでるんだ？」

とりあえず話を繋げないと追い出されるぞ。

「生まれた時からです。私は椎名の近衛の家系ですから」

「その近衛ってのは何をするんだ？」

「一番、分かりやすいのは護衛です。椎名の家の人間は役割上、戦闘に巻き込まれる可能性が高いので」

「戦闘？何と戦うんだ？」

「椎名とかの家に弓を引くもの全てです」

「かの家？」

「恐らく、日本人なら誰でも知っている家系ですが口に出すことはできません」

さっぱりわからん。

日本人なら誰でも知ってる家なんて腐るほどあるぞ。

例えば織田信長の家系なんて誰でも知ってるし、今なら、首相だって日本人なら誰でも知っている。

まあ、答えてはくれないなら省くか

「それで、優はその椎名の家の跡取りってことか？」

有名な家なのは分かる。

何せ、ランパンの連中は優を椎名の後継と呼んでいた。
何年も優は外国を飛び回ってたらしいから外国にも知り合いは多いらしいし

「いえ、優君は恐らく後継者にはなれません。後は鏡夜様が継ぐことになるかと」
「ん？でも今回の帰宅は後継者を決めるためのものなんだろ？優は長男なんだからな。それともその鏡夜は優より強いのか？」

「優君は最近まで、剣を持てなかったと聞いています。椎名は剣の家系です。剣を持てないなら椎名にいる価値なしと後継者から外されていました。ですが、最近、剣を持てるようになり、後継者としての資格はわずかながらあります。本気で戦えば私は優君の方が鏡夜様より強いと考えています」

「じゃあ、なんで優は後継者になれる可能性が低いんだ？才能もあるし剣も持てるなら……」

「それは……」

秋葉は少し躊躇しながら

「あの人が罪を犯したからです」

「その罪ってなんだ？」

「……」

秋葉は答えてはくれなさそうだ……

「お邪魔したな。そろそろ帰るよ」

俺が立ち上がり出口に向かう途中

「キンジ君」

「ん？」

「昼に優君はある場所に行きます。送りますのでついてきてくれますか？仲間のみなさんも一緒に」

そこで何かわかるかもしれなさそうだな

「分かった。ありがとう」

戦果は十分だろう

そう思いながら俺は部屋を後にした。

サイド　秋葉

キンジ君が出ていき、部屋に取り残された私は机まで歩くと写真たてを手に取ります。

危ないところでした……もし、キンジ君にこれを指摘されたら私は何を言ったか分からない……

そっと家族が並んだ写真を私は机の引き出しに入れて閉じた。

第１１６弾　椎名優希調査記録―咲夜編

サイド　椎名　咲夜

「ちょっと話していい？」

「は、はい」

食事が終わり、部屋に戻る途中に声をかけてきたのは優兄の連れの女の子神崎・ホームズ・アリアさんだった。
私と同じくらい小さな女の子だな……

「よろしければ部屋を用意します咲夜様」

「あ、うん、睦月いいよ。私の部屋で話すから。護衛もいらないから部屋の外で待っててね」

「はい、では散歩は後ほど」

「散歩？」

アリアさんが聞いてくる。

「食後の散歩です。そうだ、アリアさんも散歩しながら話をしませんか？」

「いいわ」

こうして、始まった。

散歩、私の散歩コースは敷地内にあるガーデニングが施された庭だ。
昔の家は日本式だったが迎撃の観点から西洋式に変えられている。
これは好きではあるが和服とはミスマッチしてると思う。
睦月が見えるか見えないかの位置についてるのを見ながら生け垣で
できた迷路にアリアさんと入る。

「それで聞きたいことってなんなんですかアリアさん」

迷路を見ていたアリアさんは

「優のことよ。あいつのことを教えてほしいの」

「優兄の？」

「過去にあいつに何があったの？あの、弟だって優に対する態度が
兄弟じゃなくまるで、仇のように感じられたわ」

「……鏡兄は……許せないんだと思います……」

「許せない？」

言っていいのかどうか迷うけど私は優兄が連れてきた友達になるべ
く真実を伝えたい。
隠して、こじれて一人になっていく兄の背中はもう見たくなかった。

「アリアさん」

私はほぼ、同じ視線でアリアさんのカメリアの瞳を除く

「すべては話せませんがこれから言うことを聞いても……優兄が過去を話しても友達でいてあげてください」

「あいつはど……チームメイトよ。私たち武偵は仲間を信じるわ。特に優には私は命を助けられてる。大丈夫よ」

ほっとした。

目の前の女性は小さいが信頼に値する人だと私は確信したのだ。

「わかりました。アリアさんを信じます。まず、優兄が昔、師匠と世界中を旅をしていたのを知ってますか?」

「理子を助けた話ね。知ってるわ。具体的にどこをまわったのかまでは知らないけど」

「私も全部は知りません。優兄はイギリスにも行ったと行ってましたからアリアさんともすれ違ってるかもしれませんね」

「そうね」

「優兄を連れていた師匠の名前は水無月希」

「水無月……」

「そうです。アリアさんが思い至った人です」

「あの紫電の雷神レイン・ハートと並ぶ生きた伝説と呼ばれた世界最強の武偵じゃない!武偵に限らず、戦いに身を置くものなら誰でも知ってる超有名人よ!あの人を優は師事してたの?あいつの強さ

の一端が少しだけ分かったわ」

やっぱりすごい人だったんだ……

「その死因は聞いていますか？」

「なぜか、報道は控えめだったけど知ってるわ。依頼の最中に命を落としたって……死体も見つからなかったとも聞いてるわ……どこで亡くなったのかも死因も発表されなかった」

「水無月　希さんが亡くなったのはあそこです」

そう言って私は山の頂上を指差す。

森に阻まれてすべては見えないが巨大な民家のような建物が見えた。

「水無月希が京都で？それは、優が実家に帰ってる時に亡くなったってことなの？」

椎名の家は京都にある。

亡くなったのが京都なら推理と言えるほどのものではない考えだ。

私は驚いたアリアさんに頷きつつさくさくと道を歩きながら

「あの山の上は椎名の旧邸なんです。昔、あそこで事件がありました。水無月希はそのために命を落とし、多くの人間が不幸になった場所です」

「事件って何があったの？」

「6年前……あそこで優兄は罪を犯しました……誰が見ても仕方なかった罪……私はそれを罪とは見ていませんが回りの多くは優兄を恨みました」

「何をしたの優は！あいつが冷たい目で見られるのはなんで？」

そういえばアリアさんはホームズ家では居心地が悪かったという。

少しだけ優兄とアリアさんは似ているのだ。

だが、これ以上は罪の根本になる。

「私からはこれ以上話せません。罪は優兄から直接聞いてください」

アリアさんはまだ、何か言おうとした。

だがら、私は眼帯を外してアリアさんを見た。

アリアには右目に僅かに残る刀傷が見えるだろう

「1つだけ言うならこの右目を失明させ切ったのは優兄です」

「そんな……あいつはあんたのこと溺愛してたじゃない……なんで……」

「誤解しないでください。アリアさん。理由を知れば分かるはずです……私はこの傷を恨んでいないし、仕方ないと言えるんです。でも、他の人は納得できない人も多いんです」

「あんたの目のことで？」

私は静かに首を横に降る

「それ以外の罪もあるんです優兄には……」

会話が終わり、アリアさんが去った後、部屋に戻ると横を歩いていた近衛の日向が

「よろしかったんですか？あんなにアリアさんに話して」

「うん、優兄の友達だからね……多分、優兄も機会があれば話すんじゃないかな？」

「受け入れてもらえるんでしょうか？」

「じゃなきゃ困るよ……優兄にもそろそろ幸せになってもらいたいの」

そう、馬鹿みたいに回りとはしゃいでるように見えた優兄も家の人間と話すとどこか悲しげな顔をする。
それは一瞬だができればそんな顔をしてほしくない。
私は兄や家族が大好きだから昔みたいに笑って過ごせる日々が欲しい。
そのためには優兄には過去に向き直ってもらわないといけない。

「ですが、咲夜様……最悪の場合、優希様はまた、一人になってしまいますよ」

「う……ん」

それは最悪の結末だ。
優兄からアリアさん達が離れていく……兄は罪と並べて仕方ないと苦笑するんだろう……
だが、きっと心は泣いている。
でも、咲夜には勘ではあるが確信ある。
アリアさん達は誰一人として兄を見捨てないと……
それに、私は決めている。
誰が敵になろうと自分だけは兄を信じようと……

第１１７弾　椎名の当主

あの人に会うのも久しぶりだな……
木でできたドアを俺は軽くノックする。

「入りなさい」

「失礼します」

部屋に入ると畳が広がっている。
靴を脱いで奥のすだれがかかった場所の前まで歩いていく。
回りは薄暗くほんのりとすだれの中から明かりが漏れている俺はすだれの前で正座する。

「お久しぶりです志野さん」

「ええ、直接会うのは５年ぶりですか優希」

すだれの中で体を動かす気配がする布がする音から布団から上半身を起こしたんだろう。
咲夜の話では志野さんは体が悪いらしい。
椎名　志野、現在の特例的な椎名の家の当主に当たる。

「ええ、それぐらいです」

「最初に言っておきます。今回あなたを呼び戻したのはあくまで、体面的な問題で私の後は鏡夜に継いでもらいます」

まあ、分かってたことだ……

「明後日には掟に従い、鏡夜と戦ってもらいます」

あれか……椎名の家には昔から、決まりがある。
もし、当主の候補である男が二人以上いた場合、剣の勝敗にて決着をつける。

「その、勝負であなたは負けなさい。できるだけ自然に」

「……」

きついな……別に家に未練がある訳じゃないがなんか悲しいんだ……

「分かりましたか？」

「はい……」

「もう１つ、あなたは鏡夜を支える必要はありません」

これは掟にあるが負けた方は勝者を補佐していけという話だ。
だが、志野さんはそれを必要とせずさっさと用がすんだら出ていけと言うことだ。

「話はそれだけです。部屋に戻りなさい優希」

冷たく凍りつくような言葉……すぐにでも帰りたくなるがこの人と直接話せるのはこれが最後になるかもしれない。

「俺の方からもいくつか話があります」

「……聞きましょう。これが最後になるかもしれません」

「まず、神崎かなえさんの不当裁判の調査の継続をお願いします」

「その件はあなたに最大の譲歩はしました。神崎・ホームズ・アリアに対し神崎かなえとの直接面会を叶えてあげました」

「ですが……」

アリアの話ではあれは一回限りで再び5分のアクリル版に戻ってしまったそうだ。
土方さんに聞いた所、上から圧力がかかったらしい
それを撤廃できるのが椎名の家ではないのか

「イ・ウーが神崎かなえの裁判に干渉しています。これ以上は私達でも関われません」

やはり、全ての元凶はイ・ウーか……

「では、今後俺がイ・ウーとやり合うと言えば？」

「椎名は協力しません。それでもいいなら止めはしません」

十分だ。

「後、旧邸に入る許可を頂きたいんです」

「なんのためにですか？」

「師匠の……お墓参りと所要のために」

「……」

志野さんは迷ってるようだった。

だが、それも一瞬で

「許可します」

「ありがとうございます」

「明後日の決闘は午前に行います。決して逃げないように」

「はい」

そういうと俺は立ち上がり、扉に向かう。

ああ、もう生涯会わないかもしれないしな……

扉をあけながら俺は振り返る

「長生してくれよ……母さん」

息を飲む声が聞こえた気がしたが声をかけられるより早く俺は扉を閉じた。

第118弾　墓参り

サイドキンジ

なんでこんなことになってるんだ？
と言われれば時間は1時間くらい前に遡る。

「ここからは歩きになります」

車を止めて、山道を指差しながら秋葉が言う。

「どれぐらいで着くの？」

アリアが訪ねる。

「歩いて2時間くらいです」

というやり取りをしたのが1時間前になる。

理子は相変わらずフリフリのリボンのついたリュックを背負い鼻唄を歌いながら山道を軽快に登ってやがる。
アリアはこれはまた、小柄でてくてくと山道を歩いている。
レキはといえばショルダーバッグをつけて、肩にはドラグノフ狙撃銃を背負っているのに汗1つかいていない。
やはり、うちの女子共は化け物だな。

「情けないわねキンジ」

「仕方ねえだろ。アサルト止めてから運動量は減ってるんだ」

「くふふ、キー君、理子はインケスタだよー」

お前は別の目的で鍛えてるだろ！一瞬にすんな

「……」

レキ……お前はなんで汗ひとつかいてないんだ？

優はといえば先に行っているそうだ。

「後、１時間くらいです」

１番先頭を歩いている秋葉だが呼吸を乱していない。

左手に巨大な槍を持ってんのにな……

「ち、ちょっと休憩しようぜ」

こいつらのペースで昇ったら心臓が爆発しそうだよ

「では少しだけ休憩しましょう」

助かった……

ほっと息を撫で下ろしながら俺は近くの石に座るのだった。

サイド　優希

変わってねえなここも……
崩れ落ちた門に出来た穴を潜り抜けると広い場所に出る。
正面には焼け落ちた黒い建物が見え、午後3時だというのに　不気味な雰囲気を出すのに一役買っている。
中には燃え落ちてない建物もあるがここにはもう、誰も住んでいない文字通り廃屋だ。

「さてと……」

目的の場所は裏庭の方にある。
そちらに俺は足を向けた。

サイド??

暗い森の中で、水晶を覗き込む影がある。

「こっちは大丈夫そうねぇ」

がしゅとビーフジャーキーを噛み砕きながら、ローブの女は言った。
彼女の使い魔は椎名の旧邸に入り込み、椎名　優希を監視している。
彼女の依頼主の依頼の１つは監視であるがちょっかいを出しても構わないことになっている。

「アハハハ、少しだけ後で遊ぼうかな？」

ギチ……木と木がずれるような音が女が振り向いた場所から聞こえた。

サイド　優希

あった。
リュックから一輪の百合を取り出すと墓に置いた。
誰か前に来たのか？
墓は綺麗に掃除されており、花も枯れかけてはいたが備えられていた。
咲夜辺りだろう……近衛に守られてここに来ているのかもしれない……
バッグから水を取り出すとそれを墓にかける。

水が落ちていき彫られた名前に沿って流れていく

水無月　希

俺の知る限り世界最強の武偵だった人の名前だ……

「5年ぶりだな……師匠」

その場に座り、静まり返った空気を感じながら墓を見上げる。

「もう、6年も立つんだな。あんたが死んで……俺なんかのためにさ」

当然、墓は何も言わない。
それ以前にここの墓には遺骨すら入っていない。
炎の装飾が施されたガバメントを墓の前に置きながら

「師匠の銃だ……なんか取ってしまった感じになったけど今も活躍してるぜ……」

この銃は形見だ。
あの人の……

「あんたが怒ってないのは分かる……でも、俺は……」

誰もいないのも手伝い涙腺が少しだけ緩んだのか涙が頬をそう

「自分が許せない……あんたが死ぬ必要なんてない……死ぬのは俺でよかったんだって……」

仲間が聞いたらそんなことないって言ってくれるかもしれない……
でも俺は

ガタン

!?

物音に振り返ると廃屋の中で何かが動いている。
この屋敷は一般人が立ち入れる場所じゃない。
蒼神に手を付けた瞬間、それは廃屋から飛び出してきた。

「鬼!?」

そんな言葉が出たのは敵の特徴だった。
白い鬼の仮面に黒いローブに4本の手にはそれぞれ西洋式の剣が握られている。
ここで戦うのはまずい。
俺はワイヤーを発射して燃え落ちていない屋根に飛び移ると走り出す。
ダンと音がしたので振り返ると2対の鬼の仮面は物凄い速度で追ってくる。
俺は走りながら戦闘狂モードになると同時に失態に気づく。
しまったガバメントを墓に置き忘れた。
だが、今更、取りには戻れない。
まだ、デザートイーグルもある。
デザートイーグルを発射しながら一体の動きを止めると直進してきた相手と切り結ぶ。
鬼の仮面は4本を同時に振るってくる。
ちっ!
更に、機神も抜き、二刀流で受け流しながらナイフを先端に付けた予備ワイヤーを投げる。

鬼の仮面はそれを振り払いながら４本を同時に叩き落とした。
ズウウウウンと轟音を立てながら鬼の仮面が屋根をぶち抜いて落ちていった。
なうつうパワーだよ。
だが、まだ終わってない。
今のはかわしたが、後一体が無傷だ
切り刻んでくる相手に特攻する。

「飛龍一式風切」

擦れ違いざま居合いから鬼の仮面を切り裂くが浅い

「！？」

振り替えると理解する。
そうかこいつ……

黒衣の中から現れたのは木の骨格だ。
東京に現れた連中の上位種か？
ハードなことだな

鬼の仮面が動くそれだけなら対象できたが後方で爆音がする。

「！？」

屋根を突き破ったのは先ほど落ちた鬼の仮面
同時に前後かは襲いかかられ、剣で受ける

「っ！」

ギギギギギ

2対目が剣を振りかぶった瞬間右に転がりながらデザートイーグルを三点バーストで放つ、一瞬ひれんだ鬼の仮面たがずぐに追撃をかけてきた。

「くっ！」

墓をかばいながらでもきついぞ
そんなことを思った瞬間背後に気配

「しまっ！」

三体目の鬼の仮面が剣を振りかぶった瞬間それは真っ二つに切り裂かれた。

「風凪」

技の名前を言った少年

「き、鏡夜」

鏡夜は一瞬俺を見ていい放つ

「勘違いするな優希、俺はお前を助けにたわけじゃない。お前を倒すのはこの俺だからな」

第１１９弾　零式

新たな敵の出現に、鬼の仮面も出方を伺っているようだ。
下に落ちた鬼の仮面の動向も気になる。

「気を付けろよ鏡夜、あいつＡランク並みの力がある」

「Ａランク？ふん、雑魚だな」

鏡夜はずいっと俺の前に出ると赤い柄の日本刀に手を置いた。

「手を出すなクズ。お前の力なんか借りなくても十分だ」

そういや、こいつが戦うのを見るのは随分久しぶりだな。
俺が答えるより早く鬼の仮面が動いた。
爆発するような加速で４本の西洋式の剣鏡夜に振りかぶる。一瞬、
鏡夜と交差する。
普通のひとが見たらただ、すれ違ってだけに見えるだろう。
ぎちぎぎち

鬼の仮面が再び攻撃しようと振り返り走り出した瞬間、鬼の仮面が
真っ二つになって地面に倒れる。鏡夜はそれを蹴飛ばすと地面に落
下した残骸は炎を出して燃え始めた。

「飛龍零式瞬影

燃える残骸を見ながら鏡夜はふんと息を吐いた。
零式を極めてたのか鏡夜……
椎名の剣の一刀流の中の上位種の１つ、瞬影。

こいつは、居合いから剣を抜いて仕舞うまでの動作がまるで見えない。
超高速の斬撃だ。
子供の頃の俺は筋肉不足でできなかった技で今なお、俺も練習中の技。
そうか、お前俺を越えたか
子供の頃は泣き虫だったお前がな

ボンと爆発する音に振り向くと一体の鬼の仮面が正門に向かい逃げるところだった。
まずい、あんなもん町中に逃がしたら……

「……」

鏡夜はそれを見てるだけ

「くそ！」

屋根から飛び降りると走り出す。
だが、運動能力は格段に相手が上らしい。
森の中に、鬼の仮面は入っていく。

「優！」

正門から飛び出すとアリア達が丁度到着したらしかった。

「何かあったんですか？優君？」

そうだ、秋葉なら

「秋葉、東京で出た木偶人形だ！上位種らしいそいつと鏡夜と俺は交戦して一匹逃がした！お前なら風の乱れを追って追跡できるはずだ！仕留めてきてくれ」

「はい」

秋葉は事態を理解したらしくだん、と飛び上がる。
風を身にまとい１０メートルくらい飛び上がると森の中に消えていった。

「な、なんなのよ？」

事態を詳しく理解してないアリア達は困惑している。
ただ、レキだけは何かを感じているのか秋葉が消えた方を無表情に見つめている。
そういや、木偶人形の件、アリア達に話してなかったな……公安０に話さないように言われていたのもあるが……

「ユーユーそろそろ白状した方が理子いいと思うなー」

情報を秘匿されて
ああ……理子なんか怒ってるのか？

「実は……」

断片的に情報を伝える。
東京で起こっている事件と関連性を

「魔女連隊……厄介な連中がでてきたわね」

「おい、アリア、魔女連隊って？」

キンジが聞いてくる。

「北朝鮮やイランなんかで暗殺やテロなんてしてる犯罪集団だよキー君」

「なんだってそんな連中が優の家に？」

「さあな？最初は公安０に喧嘩を売ってまで手に入れたいもんが東京にあるのかとも思ったが違うみたいだな」

「じゃあ、東京は陽動？」

俺は頷いた。

「公安０を東京に釘付けにしてここに現れたんだ。連中が狙ってるのはし……」

「し？」

いや、これは言っちゃっいけないか……

「まあ、ともかく心当たりはある。そっちは任しといてくれ」

「待ちなさいよ優！秋葉を追わなくていいの？」

「やばくなったら撤退できる判断能力は秋葉にはあるさ。それより、俺忘れ物したからちょっと戻る。じゃな」

「待ちなさいよ！理子！キンジレキ！」

「りょーかい！逮捕だぁ」

右手を理子の腕に巻かれぐいっと右手の人差し指と親指で背中を引っ張っるのは無表情のレキ、

「すまん」

キンジには左手を捕まれてしまった。

「お、おいお前ら！」

「さあ、優忘れ物取りに行きましょう。絶対に逃がさないわよ」

にこりと微笑むアリアさん。

うん、逃げられないねこれ……

第１２０弾　罪の告白

もう、強制連行に近い形で先ほどの墓の前に来る。
アリアにはガバメントを押し付けられてるから犯罪者の気分が少し分かるな……
「もう、逃げないから離せお前ら！」
目的地に着いたため、理子達が俺を解放する。
人形は跡形もなく燃え落ちていた。
多分、証拠隠滅の機能があるんだろうな……
「……」
墓の前に置いていたガバメントをホルスターに戻す。
「このお墓が優の師匠の？」
誰かに聞いたんだろうな……咲夜あたりか……
「そうだよ」
アリアの問いに答えてやる。
「水無月　希、世界最強と呼ばれた武偵だね」
「俺も名前くらいなら聞いたことはある」
「レキは？」

アリアの問いにレキはこくりと頷いた。
知ってるってことだろう

「中東のテロリストの根拠地を一人で壊滅させたり、誘拐されたどっかの国のお姫様を助けた返し刃にその誘拐グループを壊滅させたりとかいろいろ噂はあるよ」

「一人で壊滅って……いくらなんでもないんじゃないの？」

「ああ……いや、事実だ」

思い出しながら俺は苦笑した。
アリア達が目を丸くする。
まあ、例をあげるとさる有名なテロリスト集団を壊滅的な打撃を与えた理由が

「私の昼寝を邪魔したから」

などとは知られたくない……
いろいろと規格外の化け物だったからな……あの人は
昼寝を邪魔されたというのも寝不足でホテルに入ってようやく寝れると布団に飛び込んだ瞬間ホテルの隣が大爆発
切れた師匠は実行犯を見つけて血祭りに上げた後、上へ上へとテロリストの上司を見つけていき、最後は

「ちょっと、アフリカに言ってくる」

と俺を置き去りにして、アフリカに乗り込んで行ってしまい。
数日後、アフリカにあるとある有名なテロリスト集団がのきなみ逮捕されたと報道があった。

名前はなかったがあれは師匠がやったことだ。
もちろん、聞いてみたんだが熟睡して機嫌がよかった師匠は

「〇〇ぅ？ああ、楽しく血祭りにあげてやったな」

テロリスト集団を楽しく血祭りにあげるなと言ったのは別の話したが……

「「「「……」」」」

みんな絶句してるぞ……
いやまあ、分かるんだけどね……めちゃめちゃな人だったのは俺も知ってるから……

「そ、それが本当だとしても」

まだ、信じられないのかアリアが続ける

「なんで水無月希はここで亡くなったの？あんたの言うのが本当なら……」

ああ……
多分、俺は今悲しそうな顔をしてるんだろう……

「水無月希は俺が殺したんだ」

「「「「！？」」」」

ああ……ついに言っちまったな……
みんな固まってるしレキは無表情だが、こちらを見ている。

こんな時でも動揺とかしないんだな……
「まあ、これだけ言ってもわからねえだろう？」
俺は壁に背をつけながら
「もう、話してやるよ。あの日の出来事を……」
俺は静かにあの日のことを思い出しながら口を開いた。

第１２１弾　忌まわしき過去ー出会い

「×だ」

少年は後ろに飛びながら刀を抜き放った。

「風凪！」

カマイタチがショートの髪をした女性に襲いかかる。

「×」

つぶやきながら、少女といってもいい若い容姿の女性は体をひねって、見えないはずの鎌鼬かわしきる。

「終わりか？　優希？」

薄く笑いながら彼女は言う

「まだ・・・」

いけると俺は言うはずだったが直後に腹に受けた衝撃に吹き飛ばされた。

地面を滑りながら起き上がろうとするが体が動かない。

ちくしょう・・・

「そこまでです！」

縁側に座っていた少女が言う。

「まだ、いける・・・秋葉止めるな」

刀をなんとか杖がわりにして立つが膝が笑っている。

「いいえ、止めます。　優様の負けです」

駆け寄りながら秋葉は救急箱を開ける。

「全部×だな優希」

声の方を舌打ちしながら俺が見るとショートの女性、水無月　望にやにやしながら立っていた。

体に装備された刀、銃は一切抜かれていない。

素手で俺を圧倒したのだ。

「やれやれ、数年間の世界巡りの修行も大した成果はなかったようだ」

「いえ、優様は強くなったと私は思います望様」

秋葉が援護してくれる。

「うんにゃ、お前の方が強いんじゃないか秋葉?」

目をつぶって面白そうに腕を組んで師匠が言う。

「そんなことは・・・」

「ま、どちらにせよ。　ハンデ付けても私には適わないってことだ

よ優希。　大人しく留守番してな」

「また、クエストですか？」

「ああ、なんか厄介な奴が入り込んだらしくてな。　こっちに直接依頼があったんだ」

「だから、俺も連れてけよ！」

「足でまといだからな。　いらん。　たまには、１人でやりたいし、お前一撃入れられなかったじゃないのか？」

そう、師匠に一撃でも当てられたらクエストに連れていくという約束だったが結果は今の通りだ。

「・・・」

「そう、ふくれることないさ。　お土産ぐらい気がむいたら買ってきてやるよ」

そういいながら、師匠は黒い防弾コートを揺らしながら門へ向かい歩いていった。

呼び止めようにも、無駄だとわかるからな・・・

ま、それならそれでいいか・・・

チャンスはまたあるさ

それから、数時間後

「・・・４９９９！・・・５０００！」

すぶりが終わると息をはいて座り込む。

「タフですね。　優希様」

「ん？　ああ、葉月さん」

１６０センチほどの身長近い槍を手にした長い黒髪の女性がすっと頭を下げて言った。

山洞　葉月、秋葉のお母さんで近衛である。

「課せられたノルマは３０００回だと秋葉に聞きましたよ？」

その秋葉は木に背をあずけて寝息を立てている。

「俺は弱いからね。　人の数倍努力しないと駄目だから３０００回と言われればそれ以上やるんだ。　師匠にも一発も当てられなかったし」

「望様を基準にしてはみんな弱くなってしまいますよ優希様。　あの方は規格外の化け物と言ってもいいでしょうから」

「ハハハ、まあ確かにそうなのかもしれないけどさ。　なんか、悔しいんだ」

刀を見ながら

「俺は師匠と旅した数年、強くなりたいと何回も思った。　救えなかった人もいたし、救えた人もいた。　でも、あと少し、力があればと思うこともあった」

「その経験はきっと、椎名の後継者として役に立つはずです。　私たちの上に立ち、私たちを指揮すれば優希様はもっと、大きな力を手に入れることができますよ？」

「うん、そうだな・・・」

個人で救える命には限りがある。
より多くの人を救うためには人の上に立ち、人を使えるようにならないといけないとアメリカであった知り合いに教えてもらった。
でも、それでも師匠のようになりたいと俺は思う。
圧倒的な強さでどんな、理不尽も粉砕する。
それは師匠にだけできることなのかもしれない。
だから、俺は椎名の家を継いで、自分も強くなり、複数の人と椎名の家を率いていこう。
そう、俺は旅の中で決めたんだ。

「雨が降りそうですよ優希様。　中に入りましょう」

「ん？　そうだな。　あ、秋葉」

木陰で寝息を立てている秋葉を見ると葉月が近づくと背中におんぶした。
まだ、９歳の少女だが秋葉を背負う、葉月の目は優しかった。

「この子ったら・・・優希様の前で」

「いいよ。　寝かせておいてやってくれよ」

「すみません。　優希様」

家の中に入り、2人と別れると俺は自分の部屋に戻るため、長い木の廊下を歩いていくと、弟の鏡夜のばったりと出くわした。

「あ、兄さん。　修行終わったの？」

「ああ、ちょっと休んだらまた、やるけどな」

「すごいなぁ兄さんは」

「すごくねえよ。　鏡夜も一緒に修行しないか？汗流して体鍛えるのは悪いことじゃないぞ？」

「え？　でも、僕刀怖いし・・・」

「まあ、無理には言わないけどな・・・」

「あ、それより、兄さん。　咲夜の熱が上がったんだ」

「咲夜の？」

「お医者さんには見てもらったけど兄さん時間あるなら咲夜のお見舞いに行かない？」

「行こう」

返事なんて決まっていた。

咲夜は俺の妹だ。
妹の心配をしない兄はあまりいないだろうしな。

咲夜の部屋に入ると少し息を乱しながら布団で寝ている咲夜が顔だけをこちらに向けてくる。

「あ、優兄・・・鏡兄」

「起きなくていいぞ咲夜」

俺はそう言いながら鏡夜と咲夜の横に座ると手を咲夜の額に当てる。

「熱いな・・・薬は飲んだのか？」

「うん、さっき飲んだよ」

「それならいいんだが・・・」

そう思いながら俺はあることを思い出していた。
そういや・・・

「ねえ。　優兄？」

「うん？」

「今回はいつまで家にいるの？」

不安そうな妹の布団をぽんぽんと叩きながら

「多分、半年ぐらいはいるんじゃないかな？　師匠しだいだけどな」

「望・・・は？」

「クエストで出ていった。　しばらく帰らないと思う」

「そっか・・・」

なんだか、残念そうだな・・・

「ごほ・・・ごほ」

「大丈夫？」

鏡夜が心配そうに言う。

「う、うん。　ごめん、優兄、鏡兄風邪が移ると行けないからもう、寝るね」

「ああ」

こうして、俺達2人は部屋を後にした。

さてと・・・
部屋に戻った俺は汗に濡れた服を着替えてから玄関に向かう。
早くしないと遅くなっちまうからな

「優希どこに行く？」

げっ！
おそるおそる振り返ると

「と、父さん」

椎名　明人、現、椎名の当主であり、俺たちの父親だ。

「ちょっ、ちょっと師匠の用事で・・・」

「望か？」

仕方ないという風に父さんは息をはいてから

「あんまり、遅くなるなよ？」

「分かってるよ」

「返事は、はいだ！」

後ろからそんな声が聞こえたが無視して俺は飛び出した。

そんな、俺を見ていた父さんはため息を吐いて

「まったく・・・望に似てきたな優希も・・・」

門を抜けて、山を駆け下りながらとある地点で、獣道に入る。

しばらく、行ってから広い空間があり、その先には洞窟があった。

昔、熊か何かがいたのかもしれないがその、洞窟の前には多くの薬草が生えているのだ。

前に教えてもらった風邪によく聞く薬草を・・・

あ、あった！

丁度、洞窟の前に咲いているのでそれをむしり取るとカバンに入れる。

よし、後は戻るだけだな

「・・・・い・・・・」

「ん？」

人の声が聞こえた気がするけど気のせいか？」

「・・・ぐす・・・痛い・・・」

いや、気のせいじゃないな。
声は洞窟の中から聞こえてくる。

「だ、誰かいるのか？」

声がぴたりとやんだ。
洞窟は暗闇に包まれており、周りも暗くなりかけている。
恐怖と戦いながら

「なあ！　誰かいるのか！」

「・・・」

俺は恐怖で凍りつきそうになった。
洞窟の中に2つの目が見えたからだ。
赤い、その瞳はまっすぐに俺を見ている。
こ、怖くねえ
一瞬、刀を抜きかけたがカバンから懐中電灯を取り出すとぱっと明かりを目の方に向けた。

「っ！」

明かりを嫌うように手を前に出したのは少女だった。
黒いフリルのついたドレスに綺麗な長い銀髪の髪
人間離れした可愛さだった。

「君は誰？」

顔を赤くなるのを感じながら聞くと少女は手で涙を拭いながら

「あなたは？　誰ですの？」

「俺？　椎名　優希」

「優希？」

「名乗ったんだからお前も名乗れよ」

「・・・リー」

「え？」

「ローズマリーですの」

そう、あいつは名乗った

第１２２弾忌まわしき過去ー銀の少女

「で？　なんで、こんなとこにいるんだよ？」

人に会いたくないというローズマリーの言葉に従い、迷ったが秋葉に連絡して救急箱を持ってきてもらうことにした。
ついでに、いろいろと頼んでおいた。

「怖い人が私を追ってくるんですの・・・」

「悪い奴か？」

俺が聞くとローズマリーははいとうなずきながら

「とっても、悪い人ですの」

「まあ、それは詳しくあとで聞くとして」

切り傷によく聞く薬草を石ですりつぶしてから、ローズマリーの足にすり込んでいく

「ひぅ」

しみるのか、小さく悲鳴を上げる。

「我慢しろよ。　っと縛るもんがねえな・・・」

カバンをまさぐるが丁度いいものが見当たらない。
ポケットからハンカチを取り出すと傷口に巻きつける。

「・・・」

ローズマリーはそれを興味深そうに見ていた

「手馴れてますのね」

「師匠と散々、世界を回ってたからな。　生傷と耐えることなかったから自然と覚えた」

「師匠ですの？」

「ああ、戦闘訓練の師匠。　よし、出来た。　にしてもローズマリーって呼びにくいな略してローズにしよう」

「ローズ？」

「外国人だから知らないか？　日本人は友達には愛称を付けて呼ぶんだ」

「友達？」

いちいち、きょとんとして聞いてくるなこの子・・・天然さんか？

「そうだよ。　ローズって歳いくつ？　俺と同じぐらい？」

「1歳？」

「嘘つくな！」

ばしっとローズの頭を俺は軽く叩く

「あう・・・痛いですの」

どう見ても、１０歳かよくても１２歳ぐらいにしか見えない。
頭を抑えるローズを見ながら

「そういや、お前・・・」

「優様」

風が髪を揺らし、空を見上げると秋葉が降りてくるところだった。
秋葉は風を使える一族だ。
短時間なら空を飛んだりできるから、一緒にいることも多い。

「頼まれていた物をお持ちしました。　その子は？」

カバンを受取りながら中身を確認する。

「ローズマリーだ。　ローズって呼んでやってくれ」

「わかりました。　よろしく、ローズ、私は山洞　秋葉。優様に仕える近衛です」

「よ、よろしくですの秋葉」

そう、この出会いこそが後に死ぬほど後悔することになる一幕の幕開けだったんだ・・・
屋敷に連れて行こうとするとローズは嫌がった。
自分はもう、大人なんだと思い。

しばらくなら、面倒をみようと秋葉にも口止めし、俺達は1ヶ月に渡る日々が始まったんだ。

ローズと出会い、半月後。
俺と秋葉は食料等を持って、よく洞窟に出かけて修行したり、遊んだりした。
最初は、距離を置きがちだったローズもしだいに俺たちと遊ぶようになっていった。
その日も、遊んだあとに別れ屋敷での夕食の時間

「ねえ、兄さん毎日どこ行ってるの？」

「ん？　修行だ修行」

「最近、優兄、秋葉と屋敷の外ばかり言ってるよね・・・」

すっかり、風邪の治った咲夜が不満そうに言った。

「外の訓練なんだよ。　秋葉はいると便利だしな」

ローズマリーのことは弟と妹にも秘密だった。
というのもローズマリーが

「私がここにいることを誰にも言わないで欲しいですの」

と言ったからだ。
女の子を守るのは男の務めと考えていた俺はすぐに快諾した。
秋葉も俺が頼めば嫌とは言わない。
まあ、いつか紹介することもできるだろうさ。

「私はもう少し、家にいて欲しいなぁ・・・」

「そうだよ兄さん。　明日は家にいてよ」

お？　なんか困ったな・・・
でも、ローズのご飯も届けないといけないし・・・
まあ、秋葉に任せればいいか？

「分かったわかった。　明日は家にいるよ」

「本当、優兄？」

「おう」

「みんないるな？」

声の方を3人で見る

「父さん。　今帰ったの？」

鏡夜の言葉に頷きながら明人が上座に座る。
仲居たちが食事を運んで明人前に素早く並べていった。

「ありがとう」

手を合わせてから明人が食事を開始する。
椎名の家は家族全員揃って食事することはあまりない。
俺も師匠に連れられて家を開けていることが多いし、母親は体が悪いためあまり、部屋からは出てこない。
そして、当主の明人は多忙なため、家にいることがあまりないのだ。
比較的、よく家にいるのは鏡夜と咲夜だけ

「今日はどこに行ってきたんだ？　父さん」

「東京だ」

簡潔に答えてくれる。
何をしに行っていたのか等は教えてくれない。
まだ、早いと判断されているのだができれば、教えて欲しいところだ。
家を継ぐのもあるが人脈を作りたいのだ。
師匠と外国を回って痛感したのは人とのつながりが重要だということ。
諸外国に知り合いがいればいざというときに協力してもらえるなど何かと便利なのだ。

「東京…行ってみたいな」

鏡夜が想像しながらなのか上を見上げながら言う。
家から出ることあまりないからな咲夜と鏡夜は……
よく出て京都市内が限度という有様だ

「別に東京行ったって京都と代わり映えしないって、ビルがにょきにょき立ってるだけだ」

一応、東京にも行ったことはあるからな。
もちろん、師匠について行ったときに警察関連と知り合いになった。
闇の公務員と言われる公安０の人達にも会ったがさすがに、一目見ただけで化け物クラスだと思い知らされたよ。
直接、戦闘することはなかったけど今、戦ったら絶対に勝てないよな・・・
もっと、修行して強くならないと

「兄さんはすごいな・・・世界中を旅していろいろな経験して」

「ああ、まあ大変なこともあったけどな・・・吸血鬼のブラドにさらわれたときはさすがにやばいと思ったし」

「吸血鬼」

想像したのか咲夜が顔を青くした。

「そうそう、こう闇の中からいきなり現れてかぷっとかんで血を吸うんだ。　咲夜なんて一瞬で干からびるな」

「ゆ、優兄のいじわる！　トイレ行けなくなるよ！」

「ハハハ！　まあ、家なら大丈夫だろ。　近衛もいるし俺たちもいるんだからな」

泣きそうな顔の咲夜に笑いかけながらあの時のことを思い出す。
そういや、理子ちゃんどうしてんだろうな・・・
ブラドから逃げる手はずは整えられてると師匠には聞いたけど連絡先知らないんだよな・・・
談笑の中、明人が口を挟んでくる。

「吸血鬼か・・・ルーマニアのブラドのことだな？　良く無事だったな優希」

「師匠が助けに来てくれたんだよ」

「希か・・・あいつなら確かに、ステルスの攻撃も、ものともしないだろうな」

「ステルス？」

「秋葉も使うだろ？　風とか雷とか肉体強化とかとにかく超能力みたいなものを使える奴の総称。　能力者とか呼び方もあるけどな」

咲夜の問いに答えながら俺はお茶を口に運んだ。

「優希、お前は旅の中でステルスと戦うことはなかったのか？」

「ほとんどなかった。　師匠にはステルスと戦う時は逃げられるなら逃げろと言われてたから」

「そうか・・・優希お前はまた、希と旅に出るのか？」

「うん、まあ師匠次第だけど。　またまだ、外国には行きたいし知り合いも多いから会いたいし」

やり残したことも多い。

外国では死にかけたこともあるけどきっと、それは未来の経験につながるだろう

「・・・」

父親は黙って俺を見ていたがやがて

「お前は椎名の家を継いでくれるんだな？」

「当たり前だろ？　そのために俺は努力してるんだから」

「優希」

食事中にも関わらず明人は立ち上がると立てかけてあった日本刀を手に取ると俺に渡してきた。

「これは？」

「抜いてみろ」

困惑した俺が言うと真剣な目で明人言った。

鞘から刀身が現れる。

一目見ただけでも名刀だとわかる。

「・・・抜けたか・・・・」

明人が言う。
訳が分からないので

「父さん?」

「それはお前にやろう優希」

「え?　いいの?」

「ああ、名は『紫電』、決して無くすな。　命の次に大事なものと思うんだ」

紫電か・・・
鞘に収めてから大事に手に持ってみた。

「ありがとう。　父さん!　大事にするよ」

「ああ」

満足そうに父さんは頷いた。
この時の俺は、この刀の価値なんて知る由もなかったんだ。

第１２３弾　凶刃の日

その日は、曇の空だった。
今日の夜には師匠も帰ってくる。
母親の葉月さんに修行を付けてもらっている秋葉の目を盗んで俺は、台所からぼた餅と握り飯を弁当だと言ってもらってからいつものようにローズの所に行った。
無論、父さんに貰った剣を持って

「ローズいるか？」

「優希？」

洞窟の奥からローズが現れる。
もう、ケガの気配もなく体調は万全に見えた。

「ほら、今日のご飯」

「ありがとうですの優希」

天使のような笑顔とはまさに、この笑顔だろう。
日本人にはない魅力がこの子にはあった。
旅で大勢の女性ともあったがその中でもトップクラスの部類に入るだろう。

「今日は、秋葉はいませんの？」

薬草や花が咲いている原っぱの大きな石に俺達は座る。

「秋葉なら修業中だよ。　母親にな」

「お母様に・・・うらやましいですのね」

「!?」

一瞬だがローズから殺気が発せられたような気がした。
それも化け物クラスの・・・

「優希?」

だが、次の瞬間にはきょとんとしたローズの顔
気のせいか・・・
汗を拭いながら空を見上げる

「優希」

声をかけてきたローズを見る。

「私後少ししたら、ここを離れようと思うんですの」

「家に帰るのか?」

もちろん、この子にも家はあるのだろう。
これまで、なんでここにいたのかはわからないが・・・
しかし、ローズは首を横に振り

「旅にでようと思いますの。　もし、よければ優希も来てもらいたいんですの」

「え？　俺もか？」

思わず自分をさして言うとローズはにこりとして

「はい」

うーん、旅か・・・悪い話じゃないんだけど師匠もいるし・・・家の件もあるしなぁ・・・

「ごめん、ローズ師匠もいるし、椎名の家から師匠なしで離れるのは無理なんだ」

「そうですの・・・どうしても駄目なんですの？」

「うーん・・・そうだな・・・まあ・・・」

そう、この言葉を言ったばかりに・・・

『師匠がくたばって家が無くなったらついていくんだけどな』

ほんの冗談。

子供なら誰だって冗談ぐらいはいう。

ローズは・・・

「そうですの」

と口元を緩めた。

「え？」

次の瞬間、俺の視界は銀と赤で埋めつくされた。

「決めましたわ。　あなたは私の騎士様」

「ん」

口と口が重なる。

かわいいと思っていた少女の熱い口づけ。

目の前に赤い瞳がそこにある。

「だから・・・しょう？」

椎名　優希の意識はそこで途絶えた。

サイド秋葉

「あれ？」

私が優様の不在に気づき、母との修行を切り上げてローズのいる洞窟に来たとき、そこには誰もいませんでした。
洞窟をのぞき込んでも誰もいません。
スレ違いになったんでしょうか？
なら、屋敷に戻りましょう。
母との修行後なのでステルスの風は使わずに走って山道をかけ登り始めた。
空を見上げると茜色に染まっていました。
逢魔が刻、美しくも闇が世界を支配する前兆だ。
早く戻らないと母親やみんなに心配をかけてしまうだろう。
屋敷が見える位置に足を踏み入れた瞬間

「なっ・・・」

思わず私は絶句しました。
だって、門の前に血まみれで倒れている近衛2人

「由美！　佳乃！」

駆け寄って、調べるがすでに2人は絶命していました。
一体誰が・・・
みんな！

悪寒に駆られて屋敷の門をくぐった瞬間轟音と共に本邸がある方から火柱が巻き上がる。
何か異常なことが起こっている。

「敵襲！」

そんな声がどこからか聞こえた。
屋敷に敵がいる。
それを認識した秋葉の動きは素早かった。
手放していない槍を手に燃えている方角に駆ける。

途中、何人かが黒い塊となって倒れていた。
炎に巻き込まれたのか・・・
確かめるまでもなくあれは死んでいるだろう。
人が焼けた独特の臭いが鼻につく
優様・・・

彼は無事だろうか・・・
そんなことを思いながら屋敷の本邸に続く道を走る。
しかし、その途中

「あら？」

「っ！　ローズ！」

目を丸くして立ち止まる。
炎を背景に陽炎に銀髪を揺らしながらローズマリーは微笑んだ。

「そういえば、あなたがいましたわね」

「！？」

猛烈な殺気を感じて槍を構える。

「まさか、あなたがこれを？」

「ええ、わた・・・」

言い終わる前に、秋葉はかけていた。
突撃の勢いと強烈な風を背中に受けた攻撃

「はああ！」

一撃必殺の豪風を巻き起こしながら槍が突く
ローズはそれをかろうじて避ける。

「言い終わる前に攻撃なんて無粋ですの」

槍を突き出したあとはわずかに隙ができる。
ローズマリーが右手を秋葉に向けた瞬間、秋葉は槍をもってない左手を振り抜いた
ローズマリーの衣装がわずかに切り裂かれる。

「っ！」

驚いたローズマリーが攻撃を中断して後退する。
直後に背後で爆発が起こる。
バキバキと木が切り裂かれて地面に轟音を立てて落ちた。

「かまいたちですのね」

かわされた・・・もしかしてと思っていたがやはり・・・

「今度は私の番ですの」

ローズマリーの周囲に陽炎が立ち上る。

次の瞬間、蒼い炎がローズマリーの周囲に燃え上がる。
すっとローズマリは右手を空にあげて振り下ろした。

「炎壁」

「!?」

秋葉の四方に巨大な火柱が巻き起こる。
風で!
空に逃げようとするが

「あ・・・は」

息ができない。
そうかこの炎で酸素が著しく薄くなっているんだ。

「うぐ・・・」

苦しい・・・酸素を・・・
考える能力が消失していく。
もはや、ステルスを使う余力は残されていなかった。

「さよならですの秋葉」

意識が途切れる寸前

「へぇ、面白そうなことしてるな」

声と同時に、私は誰かに抱えられ炎の中から連れ出されました。
新鮮な空気をめいいっぱい吸い込む。

「大丈夫秋葉？」

「お・・・かあさん」

母親の葉月、そして、ローズマリーと対峙しているのは水無月　希
剣も銃も抜かずにただ、面白そうに腕を組んでローズマリーを見て
いる。

「水無月　希？　なんであなたがここに？」

薄く笑いながらローズマリーが言う。
世界最強を前にして彼女には余裕があるように見えた。

「星伽の方で戻れと託を受けたんだよ。　戻ってみれば楽しそうな
ことしてるじゃないか？」

「できれば、あなたとは戦いたくありませんの」

「そんなこと言わずに遊ぼう。なぁ」

戦闘狂、水無月　希は戦うことが好きだ。
彼女が狙いを定めて戦って勝てたものはいない。

「・・・」

無言でローズマリーは右手を横殴りに振り抜いた。
巨大な蒼い炎が剣のように希に降りかかる。

「ハハハ！」

希は笑いながらそれを跳躍して交わすと手を横に持っていく。

「その技もらったぞ」

ごっと腕を振りかぶると蒼い炎がローズマリーをなぎ払った。
どおおんと大爆発が起き、ローズマリーが後退する。
なんとか、かわしたらしいがゴシックロリータの服はところどころが焼け落ちていた。

「っ、理不尽ですの」

「どうした？　もっと技を見せないのか？」

水無月　希は相手の技を1度見れば覚える。
どれほど、凡人が努力を重ねてやっと習得した技も1度見れば完全かそれ以上の力を振るう。
人は彼女をステルスマスターと呼ぶ。
風・土・炎・雷その全てを彼女は操れるのだ。

「赤い炎は星伽から覚えたが蒼い炎はまだでな。　全部さらけ出してから逮捕されてくれ。それとも私を倒すか？」

ローズマリーはにこりと微笑む。

「さすがは世界最強ですの。　私の負けですわ」

「何？　もう、終わりか？　あるんだろまだ、何か？」

拳をぱんと撃ち鳴らしながら希が言う。

「師匠」

「ん？」

その声に振り返った希が見たのは

「優か？　そこで見てろ。　今おもしろいと・・・」

ズン

冗談のような光景。

山洞　秋葉が見たのは椎名　優希が父親から貰った紫電で尊敬していたはずの希の体を貫いていた。

「な・・・に・・・」

希がローズマリーを睨むと彼女は満面の笑を浮かべ

「世界最強。　あっけないですのね」

剣が引き抜かれ希が1歩前によろめく。

「雷化は・・・そうかそいつは紫電・・・か・・・どうり・・・で」

黒色のコートの上からでも血があふれ出てくるのが遠目からでも分かった。

「希様！」

悲鳴をあげて葉月が飛び出す。
しかし、その前に立ちふさがったのは・・・

「優希様！」

気絶させるつもりだったのだろう。
秋葉をも上回るその手から放たれた暴風が優希を包・・・

風が霧散する。

「！？」

無表情の人影が霧散した風の中から飛び出してくる。

「くっ！」

葉月は風の障壁を展開するがそれは冗談のように風を抜けて葉月の心臓を貫いた。
葉月の目が見開かれ口からごぼっと赤い血が溢れてくる。
葉月と目があった秋葉は目を見開いた。

「お・・・かあ・・・」

椎名　優希は剣を葉月から引き抜くと彼女の体を蹴飛ばした。
どうっと葉月が人形のように地面に倒れ込む。
ふらふらと秋葉はその、前にいくと膝をついて主を見上げた。

「ゆ、優様・・・なんで・・・」

涙を流しながら彼を見上げる。

無表情な瞳の彼は紫電を振り上げる。
殺される。
そう、秋葉は思った。

「「秋葉」」

声と同時に秋葉は誰かに突き飛ばされた。
ごろごろと地面を転がりながら起き上がる。

「き、鏡夜様、咲夜様どうしてここに・・・」

優希弟妹の2人だった。

「ひ、避難してたんだよ。　だけど、秋葉が切られそうになってたから・・・」

震える声で鏡夜が言う。

「ゆ、優兄どうしちゃったの?」

「!?　ダメです!離れて!」

「え?」

秋葉が言うが優希が剣を薙ぎ払う。

「くっ!」

暴風を使い咲夜を吹き飛ばそうとするが一瞬、剣が早く、その刃が咲夜の右目を切り裂いた。

「あ、あああああああああ！」

耳を塞ぎたくなるような絶叫。

右目を押えながら咲夜が地面に転がった。

「痛い・・・痛い！」

「咲夜！」

走り出そうとする鏡夜を秋葉は必死に止める。

行っても、二の舞になるだけだ。

椎名　優希が剣を再び昨夜に振りかぶる。

「咲夜！」

鏡夜が悲鳴を上げた瞬間

「このアホ弟子が！」

どごおおおと音と共に椎名　優希が吹き飛ばされる。

希が渾身の力で蹴り飛ばしたのだ。

「まだ、動けますの？」

感心したような声に希ははっと笑をつくる。

「まあな。　伊達に世界最強は名乗ってない」

くすくすとローズマリーは笑いながら

「再生能力も効いてませんのね。　さすがは、神器の末裔だけありますわ」

「厄介だな」

そういいながら、希は炎の装飾がなされたガバメントを抜き放つと鏡夜達を見て

「早く逃げろ！」

ドンと放たれた銃弾が大爆発を起こす。

武偵弾だ。

母の亡骸を残して私達はその場を後にしました。

燃えていく建物を背景に俺の意識は目覚めた。
「え？」
「やっと・・・起きたのか馬鹿・・・」
理解できなかった。
覚醒した意識で最初に認識したのは熱い血が手を伝う感触。
その血の主は・・・
「し、師匠？」
心臓を貫かれ彼女は笑っていた。
「まったく・・・世界最強が・・・聞いて呆れるな・・・優希・・・
無理な話だがあまりこのこと引きずるなよ・・・」
「え・・・なんで俺・・・」
ぽんと頭に手が乗る。
「全ては操られてただけだ。　お前の責任じゃない・・・気に病むな・・・」
「あ・・・」
周りを見渡すと見知った人たちが倒れていた。
秋葉のお母さん葉月さん・・・それに、父さん
「お、俺が・・・やったのか・・・」

「罪を・・・忘れろとは言わない・・・だが、お前の意思でやったんじゃない・・・だからな・・・優・・・」

師匠が俺の体を突き飛ばした
ごっと、蒼い炎が師匠を包み込む

「し、師匠！」

炎に飲み込まれながらも彼女は笑っていた。

「がんばれよ・・・弟」

ごっと炎が希を包み、ぱらぱらと黒い粉がが地面に落ちていく。
がしゃんと言う音に目を向けると炎の装飾がなされたガバメントが少し焦げて2丁落ちていた。
それをやけどするのも構わず拾い上げて俺は泣いた。

「希・・・姉さん・・・」

旅にでてから禁止されていた呼称。
水無月　希は椎名の家を捨てた女性。
椎名最強と呼ばれながらも女性であったため家を継ぐことが許されなかった。
名前を変える前は椎名　希・・・俺の姉さんだった。

「世界最強討ち取りましたの」

その声に俺は憎悪の視線を向ける。

「ローズ・・・マリー貴様・・・」

「？」

しかし、ローズマリーはいつものようにきょとんと首をかしげる。

「暗示が解けましたの優希？　もう一度・・・」

「お前は絶対に殺す！」

地面を蹴り突撃する。

ローズマリーは首をかしげながらもその大剣でそれを受けた。

「優希・・・私の騎士様・・・」

その言葉をつぶやきながら・・・

「以上が俺の過去だ」

「「「「・・・・・・・」」」」

アリア、レキ、理子、キンジみんな無言だった。

当然といえば当然なんだろう

「秋葉が去ったあとのことは俺にもわからない。　だけど、状況的に俺は秋葉の母親を殺し、咲夜の右目を奪い・・・師匠を・・・姉さんを殺したんだ」

「で、でも優・・・それあんたローズマリーに洗脳されていてあんたの意思じゃないじゃない」

アリアが絶句しながら言う。

「そうかもな・・・でも・・・」

手を見ながら俺は言う

「この手で親しい人を人を殺めたことに変わりはない・・・少なくても・・・秋葉には操られてたから仕方ないなんて言えないんだ・・・」

「そうか・・・分かったよ優」

理子が男しゃべりで言ってくる。

「なんで、お前があそこまでローズマリーにこだわったのかな。優、お前、ローズマリーを殺す気か？」

「俺は武偵だぜ？」

殺したいとは思うだが俺は

「ローズマリーは逮捕する。　それが俺の過去への決着だと思ってる」

「秋葉に対してもか？」

理子の言葉に俺は頷く

「師匠に貰った命だ。　死ねとか言われない限り、俺は秋葉が望むなら何をされても構わないと思ってる」

憎いと当然、秋葉は思っただろう。
だが、秋葉はそれでも俺の傍から離れなかった。

「幻滅したなら言ってくれ・・・お前たちからも距離おくよ」

覚悟していた・・・人を殺めた過去を知られたら友達が離れていくんじゃないかと・・・

「離れません」

「レキ？」

最初に声をかけてくれたのはレキだった。
無表情ながらも俺を見ながらレキは

「優さんは優しい人です。私は知ってます。あなたは私の大切な人です」

大切な友達か・・・ありがとうなレキ・・・

「優」

理子が腕を組んで少し顔を赤くしながら横目で俺を見ながら

「お前は私をブラドから助けてくれた。　私は決して恩を忘れない。
過去に何があっても関係ない」

理子・・・ありがとう

「優、あたしはあんたをチームメイトにするって決めた日からあんたを見てきたわ。　あんたは、いい奴よ。　あたしのホームズの直感がそれを証明してるわ」

アリア・・・こんな俺でもいいのか？

「お前とはいろいろと腐れ縁だからな。　これからも友達だ」

キンジ・・・お前もいい奴だな

「レキ、理子、アリア、キンジ」

過去を知っても俺の仲間は離れないで居てくれる。
そう、兵庫の虎児や千鶴もこんな感じだったな・・・
転校したときはいろいろあったけど東京に行ってよかった・・・
こんないい奴らと知り合えたんだからな・・・

「ありがとう」

第１２４弾　闇の誘い

「そう魔女連隊のドールが本邸に・・・」

薄暗い部屋の中、重苦しい空気の中で布団から上半身を起こして志野は報告を聞いていた。

「いかがなさいますか？」

畳の上で正座して、刀を脇に置いた日向が言う。

しばし、考えるように志野が沈黙する。

「月詠達を呼び戻したいところですが魔女連隊の目的が不明な以上現状の戦力で対応するしかないでしょうね・・・」

「京都武偵局や府警に協力を要請しますか？」

「殺人人形が日本各地で存在してることだけはそれとなく伝えておきなさい。一般人には決して悟られないように」

「わかりました」

この殺人人形は各地で様々な呼び名があるが椎名の家ではドールと呼ばれている。

全国各地で目撃情報や襲撃情報があるが未だに、一般人には伏せられていた。

というのも、東京を発端に急激に出現率が上がったのはここ、数日だ。

といっても、彼らは白昼堂々人を襲うのではなく、闇にまぎれて裏

路地など、あまり普通の生活をしている人間が立ち入らない場所で暗殺のように人を殺している。
そのため、チンピラなどが多く犠牲になっている。
どうしようもない奴もいるが見捨てることはできない。
しかも、情報によればドールの力は武偵ランクで言うなら最低でもCランク、中にはSランク相当の化け物まで存在するだけに厄介だった。
そのため、今椎名の家は近衛を含めて最低限の戦力を残して討伐のために全国に散っている。
こんな時だからこそ、後継者の選定は終わらせないといけない。
ただでさえ、今の椎名の家は後継者の問題で荒れているのだ。
鏡夜を押す派閥と優希を押す派閥。
鏡夜の方が多少優勢であるが白黒付けさせるには2人の戦闘による優希の敗北が望ましいのだ。

「ドールを追った近衛からの連絡は？」

「ありません。　4時間ほど立ちますが戦闘中か追撃中かと」

「追った近衛は？」

「山洞秋葉です。優希様のご学友を案内している最中に敵と遭遇しました」

「・・・」

志野が息を飲んだ。
だが、静かな言葉で話を続ける。

「そちらは問題ないでしょう」

「はい、援軍を送る余裕はありません」

秋葉の力は椎名戦力の中でも上位に入る実力者だ。

そうそう、負けるものではない。

「ご苦労。　下がっていいですよ」

「はい」

日向はそう言うとその場を退出した。

「こほこほ・・・」

喉からこみ上げてくる咳きが苦しい、早く後継者を定めないといけない・・・

「次の宣戦会議はそう遠くないでしょうから・・・」

静かに彼女はつぶやいた。

それこそ、椎名の家の存在意義の一つなのだから・・・

屋敷に戻ると少し騒がしい気がするが概ねはいつもどおりだ。
廊下の掃除をしていた睦月に聞くとまだ、秋葉は戻っていないらしい

「あたしたちも追わなくていいの優？」

廊下を歩きながらアリアが聞いてくる。
ちなみに、レキ、理子、キンジも同様に付いてきている。

「追おうにもこの辺は山が多いし、空を飛ぶ能力がない俺らじゃ迷子になるか足手纏になりかねないからな・・・」

一応、ヘリは屋敷の格納庫にあるにはあるがどのみち、早期の離脱はできない。

「そうなると報告待ちだな」

「そうだな」

キンジの言葉に頷きながらソファーの置いてある応接室に入る。
仲居がお茶を持ってきてくれたのでそれを飲みながら

「ねね、ユーユー待ってるのも暇だからユーユーのこともっと聞かせてよ」

机を挟んで俺の正面のソファーを確保した理子が目を輝かせて聞いてくる。

「聞きたいことってだいたい話したぞ」

「んもう！　ユーユーの話に出てきたあの紫電って刀のことだよ」

「ああ・・・」

納得した。

あの刀は特殊だからな・・・

「盗むなよ？」

「大丈ぶ・だ問題ない！」

微妙にアクセントを外しながらどんとでかい胸を叩きながら理子は自慢げに言った。

部外者だがまあ、こいつらなら話してもいいかな・・・

「紫電はうちの宝だ。　ありとあらゆるステルスを無効化する」

「ステルスを無効化？」

アリアが仲居から紅茶を受取りながら目を丸くした・

「・・・」

レキはお茶をじーと見たまま動かない。

お前は全然変わらないなと思いながら

「ああ、俺も詳しくは知らないんだがある特殊な鉱石を使って作られたらしい」

そこで、レキが顔をあげた。

「・・・」

な、なんだ?無言だが話に興味でもあるのか?

「俺はステルスには詳しくないんだが白雪の燃えた刀とその紫電がぶつかったらどうなるんだ?」

ああ、キンジは白雪が一番わかりやすい例えになるか

「炎が霧散する。　白雪の刀はただの、刀に戻るな」

「ステルス殺しの刀ね。それ・・・あたしも欲しいわ」

「無理だろうな・・・似たような刀は世界に2本しかないからな」

「紫電ともう、1本はなんなのユーユー?」

「震電だ。　昔は、椎名の家が管理してたんだがローズマリーの事件で紛失した」

「そっかぁ・・・」

おいおい理子。　1本あったら持ってく気じゃないだろうな?

なんで、残念そうにするんだ?

ん?

ドアが開く音がしたのでそちらを向くと咲夜が顔だけを見せていた。

「優兄」

「どうした咲夜？」

「う、うん優兄が帰ってきたって聞いたからお話しようと思って」

「別に構わないぞ。　こいよ」

「失礼します」

アリア達がいるからかおずおずと近づいてきた咲夜だが

「って座るところがないな」

この部屋のソファーは小さめで1人用の椅子と3人が座れるソファーしかない。

「あ、椅子とってくるよ」

と、反転しようとするが

「さっちゃんこっちおいで」

「え？　きゃっ！」

理子が咲夜の腕をつかんで引き寄せると自分の足の上で咲夜を乗せる。

「あ、あの！」

「いい子いい子、理子のことお姉ちゃんってよんでね」
咲夜の頭をにこにことなでながら理子が言う。
「は、はいみ、峰お姉ちゃん」
「クフフ、理子的には理子お義姉ちゃんって呼んで欲しいなぁ」
「り、理子お姉ちゃん」
顔を真っ赤にしてうつむきながら咲夜が言う。
うん、我が妹ながらかわいいな
「よくできましたぁ！」
なんか、お姉ちゃんの意味が違う気がするがまあいいだろう・・・
アリアは特に何も言わない。
咲夜が男だったら顔を真っ赤にしてぎゃぎゃー騒ぐんだろうな・・・
「いいわね・・・」
ん？咲夜のことを見てアリアが何か言ったぞ。
まあ、咲夜はいい子だけどな・・・
「何がいいんだよアリア？」
はっとしたアリアが慌てて
「ち、違うわよ！　別にあたしの妹と重ねてなんてないんだから！」

妹いるのかアリア・・・

「メヌエットっていうんだけどね。　もう、あたしより年下のくせ上から目線で・・・」

ああ、なんとなくわかるな・・・お前子供体型だからな口に出さんぞ風穴開けられたくないし

「お前は子供体型だからな」

おまっ！キンジ！
空気を読み違えたのかキンジが言ってしまった。

「き、キンジ！か、風穴ぁ！」

「や、やめろアリアあああ！」

大慌てでガバメントを抜こうとしたアリアの両腕をつかんで止める。

「止めないで優！　キンジがあたしのこと子供体型って侮辱した！風穴あけてやる」

がすがすと俺の足を蹴りながらアリアが暴れるいたた！　本気でけるな！

「に、逃げろキンジ！　早く！」

「あ、ああすまない優」

「待て！　逃げるなキンジ！」

ダンと飛び上がったアリアが俺の腹に膝をめり込ませた。
ぐあ！
思わず手を離してしまったので弾丸のようにアリアはキンジが逃げたドアまで行くと飛び出していってしまった。
もういいや・・・キンジの自業自得だ・・・
アリアのことはもう、屋敷で伝達されてるだろうから大丈夫だろうしな

「いてて」

腹を押えながら椅子に戻る

「フフフ」

咲夜？
肩を震わせて咲夜が笑ってる。

「おもしろい人だねアリアさんと遠山さんって、理子お姉ちゃんも優しいしレキさんもおちゃめだし」

レキがお茶目？

「優兄、あのことみなさん知ってるの？」

あのこととは多分過去のことか・・・

「ああ、さっき全部話した」

「それで優兄を怖がらないんだ。　虎児さんや千鶴さんみたいな人

東京にもいたんだね」

「プーリンと知り合いなのさっちゃん」

「ぷ、ぷーりん？」

聞き慣れない名前に咲夜が戸惑う

「虎児のことだ咲夜、プリンみたいな頭だからぷーりんな」

ハハハ、何度聞いても面白い名前だな

神戸某所

「はくしょん！」

「馬鹿が風邪？」

「誰がアホや！千鶴！　誰か噂でもしてるんかな？アリアさんだったらええな」

「ありえない」

なんて会話してそうだ。

「1回だけだけどあったことあるんです。いい人ですよ。この目のことも笑って気にしない人でしたし」

よし、虎児今度会ったら殴る。

咲夜はやらん

「ゆ、ユーユー目が怖いよ」

はっ！

「大丈夫だ問題ない」

何が問題ねえんだよ！思わずあのセリフいっちまった。

「と、とにかくだ！　咲夜は虎児にやらん！」

「え？」

ぽかんとする咲夜って俺なに言ってんの

「クフフフ、ユーユーシスコンだ！　妹にまでフラグ立てるのは特殊なパッチがないといけないよー」

「ゆ、優兄わ、私たち兄妹だし・・・」

そこでなんで顔を赤くする咲夜！意味わからんこと口走るな！

「だあああ！うるさい！うるさいうるさーい！　そんなことあるわけないだろが理子！」

「怒っちゃやだぁユーユーぅ。　未来の妹が見てるよー」

おいこら！　それってお前と俺が結婚するって意味だぞ！

「誰が未来の妹だ！　咲夜はやらんと言っただろう！」

「ゆ、優兄お父さんみたいになってるよ・・・」

「えーじゃあレキュがお姉ちゃんだよさっちゃん」

「・・・私はおねえちゃんなんですか？」

ずれたことを言うレキ！

「お前らなぁ・・・」

結局、話はぼろぼろになったキンジが戻ってくるまで続いた。

アリアに追い回されてやられたんだろうな・・・
かわいそうに・・・
だが、トイレにいくためにみんなに先に行ってもらい夜の１９時の
食事に広間に行く途中
俺の携帯が鳴り響いた。
誰だ？秋葉？
ディスプレイに移されたのは彼女の名前だった。
嫌な予感がするぞ
通話ボタンをおして

「どうした秋葉？　何か・・・」

「・・・優希」

ゾッとするような可愛らしい声
聴き間違えるはずがない

「ローズ・・・マリー・・・なんでお前が秋葉の携帯から」

「文・・・見てくださいまし」

ただ、それだけを言って通話が切れる。

「お、おい！」

だが、受話器は何も言わずにツーツーと接続が切れたことを示す音
が聞こえるだけだった。
すぐに、秋葉の携帯にかけ直そうとしたが同時にメールが届いた。
画像付きか？
開くと写真が２枚添付されていた。

1枚はＧＰＳの写真と位置を特定する印、もう一枚は
血まみれになり木を背に倒れている秋葉が映し出されていた。

文字はただ、一言

『2人でくることをお待ちしておりますわ優希』

第１２５弾　激突（前書き）

再セットアップしてワードのＣＤをなくしてしまい速度が落ちてしまいました……すみません

第１２５弾　激突

ローズマリー……お前、秋葉に何かあったら絶対に許さないからな。
流行る気持ちを抑さえて部屋に戻り、武器を持ち出す。
マガジンの予備をありったけ持ち、刀を装備してから廊下を歩く。
ローズマリーは二人でこいと言った。
意図はわからんがわざわざ乗ってやる気はない。
どんな罠があるかわからねえんだ。
月詠や師匠……姉さんクラスなら遠慮なく助力を乞うが、二人とも違う理由で不可能だ。
だが、勝てるか？あの魔女に……
そんなことを考えていたら曲がり角から出てきた人影とぶつかる。

「きゃ！」

ぺたんとアニメ声で悲鳴をあげ尻餅をついた人物は……

「わ、悪いアリア」

「なによもう……」
アリアはそういいながら横にあった携帯を……
まずい！
今の衝撃で落ちたのか？
しかし、すでに手遅れでアリアは秋葉が倒れている画像を見てしまう。

「優……これ」

メールの内容もアリアは見るとキっと俺を見上げる。

「あたしを連れていきなさい優」

やはり、か

「駄目だ！危険すぎる！」

そう、頼めば俺の仲間はみんなきてくれるだろう。
だからこそ一人で行く気だった。

「武偵憲章第１条仲間を信じ仲間を助けよ。優、この犯人は二人でこいと言ってるのよ？なら、武偵で、あんたのチームメイトのあたしを連れていくこと！」

「……分かった……」

正直時間が惜しい、一秒でも早く、秋葉を救出し、手当しなければならないだろう。

「それでいいのよ」

アリアは満足そうに言った。

１０分後、俺達は家の車に乗り、指定された場所に向かっていた。
山奥だからガタガタと車が揺れている。
「勝利条件は秋葉を救出し全員で離脱。間違えるなよ？」

「ローズマリーは捕まえればママの免罪を減刑できるわ」

「そうだが、あいつとやり合うのは今じゃない」

装備をきちんと整えて、条件を揃えないとローズマリー相手だと下手すれば死人が出る。
世界に２０人といないＲランクに匹敵する強さをローズマリーは持っている。
いろいろと調べたがロシアであのＲランク武偵紫電の雷神と引き分けているのだ。
おまけに、追撃してきたロシア軍を壊滅させている。
戦うこと事態おかしな存在なのだ。
師匠なら……姉さんならなんとかなったかもしれないが……
「とにかく、ローズマリーと決着は今じゃない。守れ」

「分かった……我慢するわ」

「それとなアリア、もし、俺が死にそうになった場合は秋葉も俺も見捨てていいから逃げろ」

「何よそれ！優あんた死ぬ気なの？」

「そういう可能性もあるんだ。わかったな？」

「いいわ。その代わり逆の場合はあんたが逃げるのよ」

アリアが死にかけた時は見捨てろか……

「ああ……」

見捨てねえよ。武偵としゃ間違いなんだろうがな……

本心とは逆のことを言っておく。

「それにね。優あんたは死んじゃいけないわ」

「そりゃ、死にたくねえからな」

しかし、アリアは首を横に振りながら

「あんたの過去はあたしが思ってたよりずっと重かった。ローズマリーに操られてたから人を殺したんだと逃げることも出来たのにあんたはしなかった。罪と向き合って生きてる。あたしはそんな人好きよ」

「……」

告白じゃないのはわかるがドキッとするな好きなんて言われると……

この子とはそんなに長い付き合いじゃないけど……

「痛い……」

頭痛と共に何かが見えた。
血まみれになったアリアの姿……いや、今のはまさか過去か？

!?

「ち、違うわよ！好きっていうのは人間としてで男としてじゃないんだからね！」

失言に気づいたのかアリアがわたわたとしているのを無言で見つめる。
もしかして……お前とも昔、会ってたりしてな……
だが、思い出せない……もやがかかったように過去が……師匠と旅した記憶が取り出せないのだ。

「なあ、アリア、俺達昔、会ったことないか？」

「？」

きょとんとアリアはかわいらしく目を丸くする。

「あんたと会ったのは2年の最初よ？」

だよな……

アリアが言うならそうなんだろう

「優？」

アリアが更に何か言う前に

「そろそろだアリア、準備はいいな？」

「！？」

アリアはガバメントを取り出しながら頷いた。

「行くぞ！」

車が森を抜ける。

そこは伐採されたのか広場が広がっている。

その中に、3つの人影

ローズマリー、秋葉、それと、仮面をつけた男

秋葉は伐採されてない木の近くでうつ伏せに倒れている。

怒りの感情が戦闘狂モードを呼び起こす。

許さないぜローズマリー

「いらっしゃいませ。優希」

黒いゴシックロリータの服の端を掴みローズマリーは軽くお辞儀する。
そして、アリアの姿を見ると
「女……ですのね……理解しましたわ」
なんだ？
「アリアは任せましたの」
ローズマリーはそちらを見ることなく仮面に言う。
「ハハ、Sランクが相手ですかい？嬢さん」
「不満ですの？」
一瞬、ローズマリーは赤い瞳を仮面に向ける。
「いえいえ、約束は守りますよ？ツインテールの嬢ちゃんの相手は任せてもらってけっこうですわ」
あいつ……強いな
仮面の男（声で判断）には隙が見当たらない。
Sランクか……
「ローズマリー！俺はお前と話にきたんじゃねえんだよ！アリア！」
ローズマリーの返答を待たずに俺とアリアは打ち合わせたわけでもなく互いにガバメントを発射しながら左右に散る。

「優希……」

うっとりした顔でローズマリーはガバメントの弾丸を巨大な大剣でガードする。
なら、武偵弾！

どおおおおん
と爆音が山に響く。武偵弾炸裂弾
直撃したが恐らく、無傷だろう
秋葉の方へ駆け出す。
そう、勝利条件は秋葉の救出だ。
駆け出そうとした瞬間

「うあ！」

アリアの悲鳴に思わずそちらを見ると驚きの光景だった。

「ハハハ！最近のSランクはこんなもんか嬢ちゃん」

「く、何よあんた！」

アリアは男の攻撃を小太刀で受けていたが男はなんて素手で小太刀を殴っているのだ。
数発がアリアに浅く当たっている。
鬼道術か……
恐らく、拳を何かで強化してやがる。

「ちっ！」

走りながら携帯用のワイヤーナイフを男に投げる

「おおっと！」

男はそれを左拳で打ち払った。
一瞬だが、隙が出来たはずだ。

「はっ！」

アリアががら空きの胴体に小太刀を叩きつける。

「残念、いい攻撃だが・よ！」

右拳で男はアリアの右の小太刀をぶっ飛ばした。

「くっ！」

アリアは後退して空いている手にガバメントをとろうとする。

「遅い遅い！」

な、なに！
男が一瞬で、アリアに肉薄した。
なんてスピードだ。

「う……」

アリアの目が丸くなった瞬間

「ちょいさああ！」

スドンと大砲のような豪拳がアリアの腹にめり込んだ。

「がっは……」

アリアはぶっ飛ばされ地面を滑り、動かなくなる。
まさか、やられたのかSランクのアリアが？

「どこみてんだい？」

男がこちらに走ってくる。
くそ、秋葉まで後、数メートルなのに……
煙がはれるまえになんとか……

「飛龍一式！風切！」

反転してすれ違い様の斬撃

「おおっと！」

だが、攻撃は空を切った。
左のワイヤーを男に発射する。

「隠し武器か？いいね」

こいつなんだ！強い！
更に、男は接近して拳を振りかぶる。

「飛龍一式！風凪！」

「蒼天龍！龍殺し！」

ガアアンと刀と拳が激突する。
そのまま押し合いになるが

「!?」

刀の機神にひびが入りそれが砕け散った。
武器破壊か!
相当な業物の機神をこうも簡単に

「おら!もう一本!」

「ちっ!」

ワイヤーを発射して、木の上に逃れる。
「どこにいくんですの?」

「!?」

背後からぞっとする声が聞こえてくる。
振りかぶった大剣をワイヤー発射装置で受け止めるがぶっ飛ばされて地面に叩きつけられる。
っ……骨は折れてねえが……
ガバメントとデザートイーグルを抜きながら舌打ちする。
アリアは気絶。
Rランク1人Sランクを倒すクラスの謎の男。
普通なら撤退の状況だな
やばいな……まじでこいつはまずいぞ……

第１２６弾　敗退

剣は一本折られてもう、蒼龍は使えねえ……武器破壊が出来るならあの仮面の男と接近戦はかなり厳しいものになるだろう。
そして、ローズマリー……

「……」

俺は油断なく現場を認識する。
背後５メートルには秋葉、アリアまでは１００メートル近い距離がある。
二人を掴んで撤退……
無理だ。
車に乗り込む前に撃破されるのは目に見ている。
援軍を望むのは都合がよすぎる。
なら、どちらかを倒して……

マガジンには武偵弾が後、２発。
閃光弾と音響弾だ。だが、これ系の弾丸を持ってることを相手が気づいてるとしたら……
使うか奥の手……
たが、この場所で剣が破壊された状況で使うのはリスクが高すぎる。
やはり、武器はこのままでやるしかないか。

「へへ、ローズマリーお嬢さん、あいつ私にくれませんかね？」

仮面の男の言葉にローズマリーは見下すように男を見る。

「殺されたいんです乃？」

にこりと微笑ながら言う。
その周囲は高温のため陽炎のように揺れている。

「おー、恐い恐い。いやね。純粋に力比べしたいんですわ。椎名の後継。水無月希……いや、椎名希の弟とね」

「……」

陽炎は消えない。

「もちろん、手順は守りますよ。適度にやりますわ」

「……次の準備があますの優希」

クスクスと笑いながらローズマリーはお辞儀する

「それでは失礼しますの」

な、お前!
俺は驚愕した。
背後に跳躍したローズマリーは気絶したアリアをお姫様だっこで抱き上げたのだ。
ヴァンパイアの力で持ち上げて……

「目覚めたら厄介ですの」

ローズマリーはそういって注射器を取り出した。
させるかよ!
ガバメントで注射器を破壊しようと狙うが仮面の男が地を蹴る。

構わず発砲するが弾丸は地面から蒼い炎が壁のようにローズマリーと俺の間に巻き上がり弾丸を融解させた。
正面から駄目なら！
左のワイヤーを発射し、木に命中させ、巻き戻す。

「おおっと！待ちなさいな」

仮面の男も跳躍する。
武器破壊を恐れて破壊された機神の鞘で受け止めるが拳と激突した鞘はベニヤ板見たいに砕け散った。
当然、拳が俺の胴体にめり込んだ。

「ぐっ！」

ぶっ飛ばされ、ワイヤーで勢いを殺しながら地面に落下。
まだ、戦える。
ガバメント、デザートイーグルをフルオートで男に向かい発砲する。
横に走りながら男は　弾き、あるいはかわした。
こんな化け物、日本にまだいたのか！
その間に、ローズマリーはアリアに注射を終えた。
びくんとアリアが痙攣したように見えた。

「貴様！」

「よそ見してんなよと！」

再び、男が接近してくる。
とんでもない速さだ。
鬼道術で身体能力を向上させているのか……
銃が効かないなら刀で戦うしかねえ！

「……」

神経を極限まで集中させる。
接近してくる男に全神経を集中。
ゴッと男の拳が振るわれた。
４発の連打を体を捻ってかわす。
腰のワイヤーを発射しさらに、振りかぶる。

「飛龍一式！風切！」

ダンとその場を踏むと豪速の一撃を男に叩きこむ

「うお！」

男は拳で受け止めるがよろめいた。
武器破壊は姿勢を安定させないと使えないらしいな。
姿勢を崩したことにより追撃の攻撃を加える。
ワイヤーを発射し、突きを連打する。
ワイヤーがいつ飛び出すか分からない相手にとってはやりにくい攻撃だろう。
反撃の隙は与えない。
キン！
そんな音と共に、俺は驚愕した。
男が刀を指二本で受け止めたのだ。

「蒼天流、風取り、いやぁ、簡単にはとらせてくれませんな椎名の後継」

右で刀を掴みながら男が左手を振りかぶる。

剣を引こうとしたがまったく動かない。
刀を捨てて離脱をする選択をとらなかった刹那が命運をわけた。

「お返しだよっと！蒼天流！龍撃！」

左足を思いっきり蹴った。龍の一撃を思わせる一撃が顔面に激突し、
俺はぶっ飛ばされた。

「がっ……」

木に叩きつけられるがすぐに立ち上がろうとするもぐらりと視界が
揺れて左膝を地面に付ける。
世界が赤く染まる。
くそ……出血してる……

「ハハハ！留めだ。蒼天龍奥義！」

男は拳を振りかぶるが

「おっと！」

ゴオオオと爆風が男のいた空間を薙ぎ払う。
とんと、俺の体が誰かに抱き抱えられる。

「秋葉！」

気絶していた秋葉だった。
目を覚まして援護してくれたのか……

「離脱します！」

「ま、待て！アリアを……」

ローズマリーは動かないアリアを抱えながら微笑んでいる。

「アリアさんを助けるのは無理です。あなたを失うことはできません」

風が俺達の周りを包む。

爆風と共に舞い上がる。

「離せ秋葉！アリアが！アリアが！お前を助けにきたんだぞあいつは！」

「私は椎名の近衛。戦えば全滅します。あなたの命を優先する」

地面が遠ざかっていく……

「あ、アリア……アリアあぁぁ！」

アリアの方に手を伸ばしながら俺は意識を失った。

意識を失う瞬間、秋葉の声が聞こえた気がした。

「ごめんなさい……アリアさん」

第１２７弾　兄弟対決優希ｖｓ鏡夜―刹那の決闘

「優、あんたはいい奴よ」

アリア……

「……」

薄く微笑むローズマリーが動かないアリアの体に手を置いた。

やがて、蒼い炎が彼女を……

師匠の……姉さんの時のように……

駄目だ……やめろ！

「やめろぉおおお！」

はっとして起き上がると薄暗い部屋の中だった。

「ここは……」

布団をどけると頭に激痛がした。

「っ……」

包帯が巻かれており手当されたようだった。
部屋は畳の和室で昨日使った部屋ではないようだ。

「アリア……」

痛みをこらえながら立ち上がるり、ふすまを開ける。

「……」

レキがいた。
廊下でドラグノフ狙撃銃を肩にかけて体育座りをしていた彼女は顔を俺に向けてくる。

「レキ……」

言葉が見つからない。
脅されていたとはいえ、黙ってローズマリー達と戦い、アリアを奪われたのだから……

「事情は……聞いたか？」

「はい、秋葉さんから全て聞きました」

「それで……どうなってる？俺はどれくらい寝ていた？」

「2時間ほどです。捜索隊が山に入っていますがアリアさんは見つかっていません」

「そう……か」

今は椎名の家の主戦力は日本各地に散っている。
捜索に避ける人員も限られるだろう。
志野さんに会わないといけないか……
度重なる襲撃で実家もピリピリしてきたな……
魔女連隊もそうだがローズマリーに対抗できる戦力が今はいないからな……

「レキ、俺は今から……」

「優兄ぃ！」

うわ！
どーんと激突するように咲夜が背中からぶっかってきた。
左目には涙を浮かべている。

「大丈夫なの？頭の怪我」

「俺はな……」

咲夜の頭を撫でながら

「だが、アリアが……」

「アリアさんは今、捜索してもらってるよ。優兄ぃは休んで……」

「いや、志野さんに会う」

「お、お母さんに？」

「ああ、居場所がわかり次第強襲する。戦力を借りないといけないからな」

ローズマリーもそうだが仮面の男、Ｒランクとまでは言わないが化け物クラスであるのは否めない。

「……優さん」

俺が振り向くとレキが立ち上がっていた。

「その時は私も連れていってください」

「いいのか？」

「はい」

アリアを救うためには戦力が必要だ。

次に対峙する時は切札を使わせてもらう。

「ありがとうレキ」

「はい」

無表情でレキは頷いた。

ついてくると言う2人と別れて廊下を歩いていると

「「優！」」

キンジと理子が走りよってきた。

「どういうことだ優！なぜ、アリアをみすみす拐われた？」

男言葉で捲し立てる理子に俺は事情を話す。

「優、私も連れていけ」

「俺もだ優、どこまでやれるか分からないが……」

おまえら……

不覚にもじんわりきたぜ。

「ありがとう理子、キンジ、その時は頼むぜ」

二人と別れて志野さんの部屋の前に来る。
護衛の近衛に面会を願い出ると暫くして、中に入るようにと言ってきた。

「事情は分かっています」

入るなり、志野さん……いや、母さんは布団から上半身を起こして言った。
俺は畳に正座する。

「アリアの行方は何か分かりましたか？」

「……ええ、目星はついています」

その言葉に俺は歓喜した。

「どこですか？すぐに助けに……」

「それを貴方が知る必要はありません」
冷たく冷淡に、母さんは言い放ったが俺は引かない

「俺の責任なんです……だから」

「……優希」

母さんはじっと俺を見ながら

「ホームズ家の救出は近衛が実行しています。あなたは、明日の後継者選びの……」

「そんなことはどうでもいい！今の家にローズマリーに対抗できる戦力はない！月詠も戻ってないんだろ！」

腹が立った。

こんな時にまで、後継者の争いの心配か……

後継者選びなんてアリアに比べたらどうでもいい！

「確かに……」

母さんは表情を変えず

「殲滅は出来ませんが救出のみなら現行の戦力で可能です。あなたは、もう休みなさい。その怪我も癒えてはいないのでしょう？」

母さんは教える気はないようだった。

これ以上、話しても平行線でしかない。

「分かりました……」

アリア救出部隊は動いているらしい。

ならば、それに望みをかけるのも１つの出だ

「……優希」

部屋を出る前に母さんに声をかけられる。

「ホームズ家の娘は貴方にとって何なんですか？」

俺は振り替えると迷いなく言い放つ

「大切な友達で俺のチームメイトです」

「……そうですか」

母さんはそれ以後無言になったので部屋を後にする。
こうなった以上、自身の情報網を駆使するしかないだろう。
携帯を取り出すと電話をかける3コール後俺は相手が出たのを察知した瞬間

「アリアが拐われた」

「いきなりだね」

アリアの護衛を依頼してきた男。
何者か知らないが相当な人物だと俺は見ている。
千鶴に頼んでもよかったが時間が惜しい。

「ああ、単刀直入に聞く。アリアはどこだ？」

「ほぅ」

依頼主は面白そうに息をはいた。

「なぜ、僕が知ってると推理を？」

「推理じゃないカケだ。あんたはアリアの護衛を依頼するような人物だ。衛星やあるいは発信器なんかでアリアの位置を把握してるんじゃないか？」

「知ってると言ったら？」

「場所を教えてくれ。アリアが殺されてしまう前に」

焦ったような声で言う。

「ふむ……確かに僕はアリアが拐われた場所を知っているが君はローズマリーに勝つことはできないんじゃないのかな？」

「勝てないかもな。でも、関係ない。アリアだけは救出する」

「決意は堅いようだね。いいだろう。アリアは君の家の近くの旧椎名本邸だ」

「ありがとう……」

名前を呼びたかったが俺は相手の名前を知らない。

だから、礼だけ言って電話を切る。

半分はかけだったが一体、何者なんだろうな依頼主は……

いや、それより今は後1つ切札を……

そこに向かう途中

「優」

庭の曲がり角からキンジ、理子、レキ、ハイマキが現れた。
ハイマキは甲冑のような金属の鎧を着けている。

「お前ら……」

「行くんだろ？アリアを助けに」

キンジの声の感じが違う？こいつはヒステリアスモードか？
後に知ったことだがこれはヒステリアスモードベルセ、女を奪われた時になる攻撃的なヒステリアスモードなんだそうだ。

「いいの？」

来るなとは言わない。
一人で救出は不可能に近い。
仲間がいる。

「水臭いぞユーユー、理子達友達じゃん」

「……私は優さんと行きます」

「ぐるおん」

仕方ないやつだと言うようにハイマキが吠える。

「ありがとうみんな」

「さっさとアリアを助けにいこうぜ優」

「いや、キンジその前に取りにいかないと行けないものがある」

「取りにいくもの？」

理子が可愛らしく小首を傾げた。

俺は頷くと

「紫電、ステルス殺しのあの刀がいる」

俺の刀は破壊されてしまったからな

「話にあった例の刀か……確かに、ローズマリーに有効だな」

「どこにあるのユーユー？」

「宝物庫だ。時間がない行くぞ」

「はい」

と、レキ

「あ、待ってよユーユー」

早足で目的の建物の前にくると入口に人影があった。

やはり、警備がいるのは仕方ないか……最悪、倒してでも……

「遅かったなクズ」

「鏡夜……」

鏡夜は壁から背中を離すと
「お探しのものはこれだろ？」
「それは……」
鏡夜の手に会ったのは紫電だった。
見間違えるはずもない。
父親と姉さん、秋葉の母親を殺した刀
「それが今いる。貸してくれ鏡夜」
左手を前に出して言う鏡夜は目を閉じて馬鹿にしたように
「女を奪われて泥棒の真似事か？本当に貴様はクズだな」
「おい、お前！」
理子が殺気を放ちながら怒りの視線を向ける。
ハイマキは唸りだし、キンジは黙って鏡夜を見ている。
レキは変わらないが無表情で鏡夜を見ている
「クズでいいさ」
「何？」
鏡夜が目を開ける。
「だから、その紫電を貸してくれ。鏡夜は抜けないんだろ？」

「くっ……」

鏡夜は舌打ちした。

紫電にはとある鬼道術がかかっているらしい。

資格はないものには抜くことができない術。

これは震電にもかかってたらしい。

俺は抜けて、鏡夜は抜けなかった。

プライドの高い鏡夜にはさぞ屈辱だっただろう。

「必ず返す。だから、今夜だけ貸してくれ鏡夜！」

「そうやって……貴様はまた、俺を馬鹿にするのか？」

「……何言って」

「欲しいなら力ずくで奪え！明日を待つまでもない後継者選び、ここで決めてやる」

「時間がないんだ鏡夜！明日必ず戦う。だから……」

「抜け、優希」

そう言って鏡夜は紫電を腰につけ、違う刀を抜いた。

鏡夜……いい加減にしろよ

「どうする優？みんなでかかるか？」

すでに、みんな臨戦態勢だ。

だが……

「必要ない」

俺は戦闘狂モードよりも冷たい視線で鏡夜を睨む

「１０秒で終わる」

無理だと全員が思っただろう。

俺は鏡夜の前に立つと調達した刀を抜いた。

「合図はいらないな？」

「ああ」

言いながら、俺は１つのボタンを数回押す。

ドンドンとワイヤー発射装置が地面に落ちる。

「き、キンジあの装置」

「ああ、かなり重いな」

理子とキンジが絶句しているのが分かる。

そう、俺はいつもあえて重いワイヤー装置を着けている。

６個以上で数６キロの重み

「鏡夜、零式が使えないって思っただろ？」

濃密な殺気が鏡夜にぶつけられていく。

恐らく、鏡夜の目には俺が殺気でぼやけて見えてるはずだ。

「飛龍零式『陽炎』」

「え？」

理子が呆然とした声を出した。
優希の姿がぼやけて消えた瞬間、鏡夜が倒れたのだ。
その背後に優希は現れる。
紫電を手にしながら悲しそうに弟を見る。
鏡夜は思っていたんだろう。
兄を超えた絶対的な自信。
それを自分は圧倒的な暴力でねじ伏せたのだ。
重いワイヤーがあっては勝てない。
鏡夜……お前は強いよ……少なくてもブラドやシンやジャンヌには
俺はこの切り札を使わなかった。それだけでお前は強いんだ。

「……」

かける言葉が見つからず俺は弟に背を向けて歩き出した。
アリアを助けるために

第１２８弾　乱戦（前書き）

うーん、オリジナル章携帯だとなんか、書きにくいです

第１２８弾　乱戦

ちっ……遅かれ早かれそうなるとは思ってたが……
俺は武装した仲居達や近衛達を見てため息をついた。
総勢５０人はいるだろう。
鏡夜との戦いで時間をかけたつもりはなかったがお見通しだったか
……

「おい、優」

キンジの言葉を無視して前に出てきた近衛の日向抜刀してない刀を
左手にしながら警告してくる。

「優希様、あなたがしていることは反逆です。わかってますか？」

手に持つ紫電のことを言ってるんだろう。
本来こいつは後継ぎ以外の人間が持ってはいけない。
なので、今は誰のものでもないのだ。

「ローズマリーと戦うにはこいつがいる。どけ」

「っ！」

日向を含めた近衛や仲居達が怯む。
それだけ怒りを殺気に込めたのだ。

「……あなた達も分かってますか？優希様に手を貸すというならた
だではすみませんよ？」

「俺達は武偵だ。仲間を拐われたら助けに行くのは当然だろ？」

キンジが言う。

だが、日向はため息をついて

「武偵３倍則で最悪懲役になりますよ？」

逆らったのが一般の組織なら罪を消すことはできる。

俺にはそのコネもあるからな。

だが、逆らうのが椎名の家だというのは相手が悪すぎる。

今回ばかりは、公安０も俺には味方してくれないだろう

「その時はその時。みんなでイ・ウー辺りに行くよ。理子そういうとこ詳しいんだ」

確かに、イ・ウーなら椎名の家も簡単には手は出せまい。

だけどそれはそれでやだなぁ……

「あなたもですかレキ様？」

日向はみんな、従う意思を見せないので黙って日向を見ているレキに聞いた。

レキはドラグノフ狙撃銃を日向に向けながら

「私は優さんについていきます。あなたが優さんの敵なら私の銃弾があなたを射抜く」

「交渉……決裂ですね」

日向は再びため息をつくと右手で刀を掴んだ。

それに合わせ、周囲も各々の武器を構える。
ちっ、ローズマリーの前にハードすぎる戦闘だな……

「みんな、一点突破で抜けるぞ」

山に入ればこちらのものだ。

「殺してはいけません。捕らえなさい」

両者が動こうと筋肉にわずかに力を込めた瞬間だった。

「待って！みんな待って！」

着物は走りにくいのに息を切らせながら咲夜が俺達の間に入り込んだ。
全員が動くのをやめる。

「咲夜」

「咲夜様」

日向と俺が突然現れた咲夜の名前を呼ぶ。

「はぁはぁ、お、お母さんからの……当主代理からの伝言です。行かしてあげろと」

「え？」

「だ、だから優兄達を行かせていいそうです。紫電も一時的に貸すと」

「私はそんな命名を受けていません」

日向が探るように咲夜を見る。

「椎名の直系として誓います！これは当主代理の言葉です。優兄達を行かせてあげてください」

あの人が……いや、この状況であの人が行かせてくれる訳がない。

咲夜……お前

「申し訳ありませんが咲夜様」

日向が咲夜を睨み付ける。

「あなたは優希様になついておられます。素直に信用はできません」

「当主代理としての母の言葉でもですか？」

「はい、当主様は言われました。必ず生かして捕らえなさいと。残念ながら、命令変更は本人の口からじゃないと私は信じません」

「……」

必死の嘘だったんだろう。

咲夜は本来、嘘なんてつく子じゃないんだ。

それを俺のために……

「咲夜、もういい。」

「優兄ぃ……」

泣きそうになっている妹に頷いてから

「下がってろ後は……おい！」

最後は日向に向かい叫んでいた。

視界に飛び込んできたのは塀を飛び越えてきた木偶人形だったのだ。

阿修羅タイプが２０体

「敵襲！」

誰かが叫んだ瞬間、阿修羅タイプの木偶が仲居を斬り倒した。

悲鳴もあげずに切られた仲居が崩れ落ちる。

「くっ！」

完全に背後からの奇襲だ。

日向は舌打ちして俺と阿修羅タイプを見ながら阿修羅タイプに向かい走り出した。

阿修羅タイプはＳランクに匹敵する力をもつ。それが２０体、仲居達は銃を持っているが所詮、戦闘は補助が役目なのである。

だが、これは絶好の好機である。

「みんなこっちだ！」

「きゃ！」

乱戦になった広場から逆に走る。

咲夜をお姫様だっこしてな

「あっちはいいのか優！」

理子が走りながら聞いてくる。

一目見て、劣勢だが立て直すのは難しくないだろう。

だが、走りながら屋敷のあちこちで銃声や打ち合う音が聞こえてくる。

あの木偶人形を使うのがローズマリーの仲間なら間違いなく手引きだ。

こちらにこいと言うな。

「大丈夫だついてこいみんな」

その時、携帯が鳴った。

無視するか悩んでから

「キンジ！落としたら殺す！」

「きゃ！」

小さく悲鳴をあげながら咲夜はキンジの腕にお姫様だっこされた。

「大丈夫だ優。女性は優しくエスコートするさ」

ヒステリアスモードだもんな……

それより

「……」

画面を見るとアリアと表示されている。

まず、間違いないだろうな……
通話ボタンを押し込んでから耳に当てる。
「フフフ、繋がりましたの」
「貴様……」
一番不愉快な声に俺は携帯を握りしめる。
「アリアは無事なんだろうな？」
「いきなり、違う女性の話題は私焼いちゃいますの」
「お前のことなんかどうでもいいんだよ！アリアは無事なんだろうな？」
「殺しましたの」
「……え？」
頭の中が真っ白になる。
殺された？アリアが……
「フフ、嘘ですの」
「貴様……」
嘘と聞いてほっとした。
「でも、無事かは優希次第ですの」

「回りくどいことを、今からお前を逮捕しに行ってやるから待ってろ」

「まあ」

ローズマリーは喜んだらしい

「お待ちしてますの。後、先程アリアの無事を確認しましたので教えますの。アリアは後、3時間で……」

衝撃の言葉を言った。

「……ヴァンパイアになりますの」

第１２９弾　タイムリミットまで3時間

「フフフ」

ローズマリーは電話を切るとクスクスと笑った。

「来ますかね椎名の後継は？」

言ったのは蛇のような顔をした細身の男だ。
短い髪は黒
彼は、片手に日本酒を手にしている。
ローズマリーは不快そうにそれを見ると

「荒城、やめてもらえますの？私お酒の臭いは嫌いなんですの」

「こりゃ、失礼。まあ、決戦前なんで見逃してくださいや」
そう言いながら荒城が見た先には十字架に縛られたアリアの姿があった。
服はローズマリーが好むゴシックロリータの黒い服に着替えさせられ首には機械的な首輪がつけられていた。

「緋弾のアリア、期待外れもいいとこだな」

「彼女はまだ、覚醒してませんの」

「へえ」

荒城　源也はそう言うと日本酒を口に運んだ。
酔った様子はない。

「でどうすんのさ。あたしの人形達も長くは持たないよ」

ビーフジャーキをかみ砕きながら金髪の女が言った。
魔女連隊に名を連ねるドリス。
ローズマリーは魔女連隊のことを好ましい相手と考えていたが別に同盟を組んでる訳ではない。
イ・ウーの存在もある以上、全面対決はできない現状もあり、ローズマリーは優希、魔女連隊は椎名の戦力調査及び、公安０の能力調査が目的にあった。
荒城源也は傭兵である。
裏の世界では有名で大金さえ払えばどんな悪にも手を貸す。
今回の雇い主はローズマリーだった。

「３時間持てばそれで構いませんの」

「んじゃ、自立モードで適当に暴れさすかな。ローズマリー、約束忘れんじゃないよ」

「分かってますの」
ローズマリーはそう言いながら気絶したアリアに振り替えるとその頬に右手を置いた。

「フフフ、優希……もうすぐ私の願いが叶いますの」

「願いって何よ？」

ローズマリーはきょとんとして今、口を開いたアリアを見た。

「目がさめたんですのね」

「あたしをどうするつもりよ？」

アリアはもがくが拘束は外れない。

「餌になってもらいますの」

「餌ですって？」

ぎろりと力のこもったら視線をローズマリーに叩きつけながらアリアが言う。

「椎名優希を呼ぶ餌って訳だ嬢ちゃん」

荒城が言うとドリスが笑った。

「ああ、怖い怖い……ヤンデレっやつだね」

「優をどうするつもりよ！」

「騎士様になってもらうんですの」

ローズマリーはにっこりと顔を赤くして両手を頬に当てて目を閉じた。

「騎士様？」

意味が分からない単語にアリアが首を傾げ、そこで初めて、アリアは首に巻かれた機器に気付いた。

「っ、何よこれ……」

「特注の首輪ですの。優希の心を奪おうとする犬には丁度いいですわね」

「簡単に言うとねぇ、首輪には注射が仕込まれてい3時間後にプスってわけよ」

ケタケタ笑いながらドリスが言った。

「な、何の注射よ」

得たいの知れない注射があると聞きアリアの顔色が変わった。
ローズマリーは少しだけ怯えたアリアに快感を覚えながら

「優希にはヴァンパイアになる薬と言いましたが青酸カリですの」

天使のような微笑みを浮かべてローズマリーは残虐に言い放つ

「せ、青酸カリ……」

日本人にとっては自殺などでよくニュースで取り上げられ有名な毒だ。
体内に入ればほぼ確実に死ぬ。

「あ、あたしはこんな所で死ねないの！離しなさいよ！」

時間にして１０秒もなくアリアが死ぬ状況。
怯えたアリアに更に快感を覚えローズマリーはタイマーをアリアの前の机に置いた。
残り時間２時間５０分

「さあ、アリア私の目を見てほしいんですの」

「い、いや！」

アリアが目をきつく閉じるとドリスが舌打ちして無理矢理目をアリアの目を開ける。

アリアは暴れるが縛られていてどうにもならなかった。

ローズマリーは視線をアリアに合わせてゆっくりと言葉を紡ぐ

「さあ……アリア私の命令を聞きなさい」

催眠をかけられるとアリアは直感したが今のアリアには何もできなかった。

「助けてキンジ、お祖父様……優」

催眠で意識が途切れていくのを感じながらアリアは涙を地面に落とした。

荒城はその光景を見ながら

「おお、怖い……怖い……ヴァンパイアの催眠ってのは怖いねぇ。ん？」

荒城が顔をあげるとニヤリと笑みを作った。

「来たな……」

ドン！
爆発するような音と共に扉が吹っ飛ぶ
飛び込んできたのは椎名の近衛だった。

「はあああ！」

飛び込んでくるや近衛は手に氷の槍を作ると荒城に投げつけた。

「ちょいさぁ！」

荒城はそれを強化した拳で真っ正面から打ち砕いた。
目を見開いた近衛は更に攻撃を続けようとするが荒城が目にも止まらぬ速さで肉薄する。

「くっ！」

荒城の周りの温度が下がる。
何かの前兆だろう。

「遅い遅い！」

ドンと爆発するような音と共に近衛に１０発の拳が叩き込まれ地面に叩きつけられて動かなくなった。

「あらら？もう終わりかよ……後続も全滅したみたいだし椎名の近衛ってのもたいしたことねえなぁ」

「終わりましたの」

声に荒城が振り向くとローズマリーと再び気絶したアリアの姿が見

えた。

「準備は万端とさて……」

荒城は外から聞こえてきたヘリの音ににやりとして手をパンと打つ

「お姫様を助けられるかな？ま、助けてもなぁ……」

「荒城、ドリス、示し会わせた通りに」

「「はいよ」」

ドリスと荒城はそう言うと所定の場所に向かうのだった。
優希達と戦うために

「フフフ」

ローズマリーは微笑みながらアリアの頬を撫でた。

「後少しですの……」

アリア死亡まで後2時間29分57秒

１３０弾　レキｖｓ荒城源也　プロの戦い（前書き）

いよいよ。オリジナルも後半に入ります。
原作にそろそろ戻りたい……
次話は来週かな

１３０弾　レキｖｓ荒城源也　プロの戦い

「作戦を説明するぞ」

ローター音を耳にしながら俺はみんなを見る。

キンジ、レキ、理子そして、ヘリを操縦しているのは秋葉だ。

彼女は怪我をしていたが格納庫で待っていたのである。

「第１目標はアリアの奪還。第２にローズマリー及び協力者の逮捕だ」

「勝てるのか優？」

ヒステリアスモードで目が鋭いキンジが言う。

「全員倒せばいいだけだ」

「おまえ……」

少し、気を張りすぎてるのかもしれないな……鏡夜を倒して紫電を奪い、後先考えてないからな……

「敵は最低で３人、ローズマリーに仮面の男、そして、木偶人形使い」

だが、木偶人形も人数にいれるべきだろう。

木偶人形の数もわからないのに救出作戦をたった５人でやるんだ。

姉さんなら一人でも制圧出来たんだろうが俺達にはできない。

「秋葉は咲夜を守ってくれ」

俺は副操縦席に座る妹を見ながら言った。
あの場所に残すことはできなかった。
乱戦状態の場所に戦闘力のない咲夜を残すことはできなかったのだ。

「分かりました」

秋葉が参戦できないのはかなり痛い状況だが贅沢は言えない。

「優兄……」

心配そうに咲夜が振り返る。
俺は口元を緩めながら妹の頭を撫でた。

「心配すんなよ咲夜、姉さんほどじゃないが俺は強いしな。アリアを助けて無理そうなら逃げるさ」

援軍の当てがない訳じゃない。
3時間には間に合わないかも知れないが近衛の主戦力が戻ってくれば一気に形勢は逆転する。

「大丈夫だよさっちゃん理子達こう見えても結構強いんだよ」

咲夜を安心させるためか理子がニコニコしながら言う。
こいつの明るさはこういう時は救われるな

「優さんは私が守ります」

そう言ったのはレキだ。

「おい、レキ別に俺は守られなくても……」

「……守ります」

何か強い意思を感じる気がするがレキがねぇ……

っていて！

見るとハイマキが俺の腕を噛んでいた。

「ぐるおん」

調子に乗るなと言われた気がするぞ……

「おお、レキュがユーユーに愛の告白だぁ！」

ええ！

「そ、そうなんですかレキさん？」

お、おい咲夜！

「？」

レキが首をかしげる。

「いて！」

ガルルとハイマキが今度は足を噛んできやがった。

なんのつもりだ貴様！

「ハイマキやめなさい」

「ぐるおん」

ハイマキはチッと舌打ちしたように離れる。

なんなんだよまったく……

「優君見えてきました」

窓から外を見ると椎名の旧邸が見えてくる。

雑談してられねえな

「最終確認だ。ローズマリーの電話によれば奴等がいるのは地下４階だ。入口は俺が知ってる」

そう、ローズマリーがいるのはかつて、近衛達が戦闘訓練をしていた地下だ。ジャンクションのように様々な目的にも使われていた。

あそこだけは地下だけに無傷で残ったんだ。

多分、秋葉によれば何も残ってないはずだが……

「距離１００！」

秋葉の言葉に俺達はワイヤーをヘリに引っ掻ける。

「みんな死ぬんじゃないぞ！」

「0！」

バンとヘリのドアをあげるとホバリングしているヘリから飛び降りる。
ワイヤーで一気に地上の庭に降り立つとヘリとのワイヤーを切り離す。

ギチギチ
木を擦り合わせる音と共に阿修羅タイプが飛び出してくる。
「キンジ！」

俺は2番目に降り立ったキンジと背中を合わせると両側から突っ込んできた阿修羅タイプに発砲する。阿修羅タイプは野太刀でそれを切り払う

「私は……一発の銃弾」

静かなレキの声とドラグノフ狙撃銃の発砲音
タアアアン
阿修羅タイプの頭のコアが撃ち抜かれて沈黙する。
2体目はキンジに切りかかろうとするがヒステリアスモードのキンジは野太刀を見切るとコアにベレッタを押し当てた。
すかさずに発砲、コアが砕け散る。

「優！左だ！」

キンジの言葉に右を見ると東京で戦った木偶人形が20体現れるところだった。
ガバメントを二丁抜こうとするが

「みんな伏せろ！」

最後に飛び降りた男言葉の理子の声に俺達は疑わずに伏せる。

「クフフ、爆弾パーティーにようこそ♪」

彼女は妖艶に微笑むとポシェットからガラスの瓶を集団に投げつけると連鎖的に爆発が起きた。

吹きとぶ木偶人形達。

えげつねえことを……人間相手なら絶対に使えないぞ武偵はな

一体が爆発を逃れたのか突っ込んでくる。

「ぐるおん！」

迎撃に出たのはハイマキだ。

振りかぶる木偶人形の拳をかわして鋼鉄の鎧の頭で木偶人形をぶっ飛ばし、胸のコアを噛みちぎった。

おお、やるなおまえ

第一陣はこれで片付けたか……

「みんなこっちだ！」

地下への入口に俺を戦闘に走る。

場所はこの庭のはしにある。

階段が見えてくると中から再び阿修羅タイプが一体現れる。邪魔なんだよ！

「飛龍零式陽炎！」

ズンと残像を残して阿修羅タイプを一撃で切り捨てる。

「優！後ろ！」

ちっ！ぞろぞろと……

屋敷の中からは木偶人形達、阿修羅タイプや見たことないタイプの木偶人形がわらわらと現れる。

このまま階段を降りたら挟撃されるか……

だが、時間が……

その時、暴風が木偶人形達を吹き飛ばした。

「秋葉！」

見ると風に乗って秋葉がヘリから降りてくるところだった。

咲夜をかかえている。

「ここは私が食い止めます」

５０体以上の木偶人形を前に秋葉は言う。

「咲夜はどうする！」

「こうします」

ごっと咲夜の回りに風がまき起こる

「風神結界。対艦ミサイルの直撃でも破壊はできません」

秋葉がそう言うなら信じるか……

「分かった。秋葉、死ぬなよ」

階段に飛び込む。
木偶人形はいない。
一気に階段をかけおり地下一階に降り立つ。
そこは武偵高の体育館ぐらいの広間だった。
この広間を抜けないと次の階段には行けない。
侵入者の侵攻を遅らせるための作りだが歯がゆい。
木偶人形の大軍を想像したが人影は1つだった。

「おお！きたきた」

例の仮面の男だった。
手をポケットにいれて階段の前に立ってる。
一撃で落とす！

「お？」

走りながら男に濃密な殺気を叩きつける。
姿は陽炎のように……

「飛龍零式！陽炎！」

すれ違い様に切り捨てるが仮面の男は

「おわ！危ねえ！」

避けやがった。
ちっ！
後退して紫電を構える。
時間がねえってのに……

「今のはなかなかよかったな椎名の後継。だが、焦りすぎで技が完成してねぇな」

この男……

「なら試してみるか？」

刀を構えながら男と対峙する。

「へへへへへ、いいのかな？時間は？」

くそ……ん？

俺と仮面の男の間に一人立つ。

「レキ？」

俺が言うとレキは振り向いて

「みんなさん先にいって下さい。私が戦います」

「無理だ！そいつは接近戦のエキスパートだ！狙撃主のお前じゃ勝てねえよ」

「ぐるおん」

俺を忘れるなとハイマキがレキの横に立つ

「大丈夫です」

レキは俺達に振り替えると頷いた。

確かに……効果的なのは分かる……だが……

「優さん……私は負けません。はやくアリアさんを」

アリア……その言葉に俺は頷いた。

「キンジ、理子行くぞ！」

「レキ、死ぬな！」

「先に行ってるよ」

仮面の男の横をすり抜けるとき攻撃を警戒したが仮面の男はそのまま、レキの方を見て動かなかった。

Ｓｉｄｅ　荒城

「嬢ちゃん狙撃主だろ？泣かせるねぇ好きな男の子のために殿を引き受けるなんてよ」

「……」

人差し指を立てて俺は言う

「1発だ。この距離で嬢ちゃんが撃てるのはな。それで倒せないなら俺の拳が嬢ちゃんを砕く」

「私は一発の銃弾……銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えない……ただ、目的に向かって飛ぶだけ……

レキは問答には答えずにドラグノフを荒城に構え、ハイマキが戦闘体勢に入る。

ハハハハ、ローズマリーの嬢ちゃんには1人足止めしろと言われてるからな。

できりゃ椎名の後継と戦いたかったが……

タアアアン

レキの発砲と共に駆け出す。

弾丸は俺の横をすり抜けるかわしたぜ

「ぐるおん！」

ハイマキが突っ込むが交わす。

「おっとお！」

後は無防備な狙撃主だ

「もらったぜ嬢ちゃん！その綺麗な顔いただきだ！」

強化した拳でレキの顔を砕こうとした瞬間

チュン

「うお！」

気配を感じて交わす。

跳弾か！

だが、交わしたなぁレキが静かに目を閉じた。

諦めたか

ギイイイン

「！？」

背後からの音、更に跳弾射撃か！

振り替えるとハイマキが踏ん張って立っていた。

鎧に当てやがったのか！跳弾の跳弾だと！だが！

「おらあ！」

強化した左手で迎撃する。

弾と拳が当たった瞬間大爆発が起きた。武偵弾だと！

Ｓｉｄｅレキ

爆風に吹き飛ばされたレキはなんとか立ち上がりながら駆け寄ってきたハイマキを見る。
爆炎と煙が立ち込める。
近衛の訓練に使われていただけあって流石に部屋は丈夫だ。
「……」
レキは黙って煙の方を見ていたが静かにドラグノフを構え直した。
「く、ククク……ハハハハハハ！すげえな！鬼道術がなかったら終わってたぜ嬢ちゃん！いや、名前を聞いとこうか？」
「……」
レキは答えない。
「名乗るなら俺が先か」
荒城は言いながら仮面を外した。
「荒城源也。傭兵だよ」

不適に笑いながら荒城は言う。

「レキです」

簡潔に互いに名乗りあう。

「そうか、レキ。まずは詫びといてやるよ。お前は強い」

ゴッとレキの髪が揺れた。
ハイマキは低く唸り声をあげながら警戒する。
荒城源也が揺れて見える。
優の殺気によるあの技の特徴に似ている。
濃密な殺気

「ここからは本気だ。」
化け物クラス。
そういった相手をレキは知っている。
そして、目の当たりにしたこともある。

「あなたは強い」

荒城の言葉を返すようにレキは言う。

「うれしいねぇ」

「ですがあの人ほどじゃない」

「そりゃ誰だい？」

「水無月希」

その名を言うと男は頷いた。

「アメリカ軍を一人で壊滅させられる最強の化け物を引き合いに出されてもな……水無月希の知り合いかお前？」

「はい」

「そうかい。んじゃ、そろそろ始めますか殺しあいをな！」

「私は……一発の銃弾」

タアアアン

アリア死亡まで2時間02分22秒

１３０弾　レキｖｓ荒城源也　プロの戦い（後書き）

荒城源也

３２歳

身長１７２センチ

体重　６９

武器　拳

補足

有名な傭兵で裏の仕事である暗殺等や要人警護など金で動くプロ
蒼天流という流派の持ち主で拳や体をを強化する鬼道術を用いる戦闘スタイルを取る。
ランクはＳランクだが戦闘経験が豊富なため、学生とは一線を引いている。
レキの場合はプロの仕事をしていたため渡り合えた

第１３０弾　理子ｖｓ無限の人形使ドリス

タンタンと長い階段を降りながら次第に遠ざかっていく戦闘音を聞く。
レキ……ハイマキお前らなら大丈夫だよな……
戻る時間はない。
こうしている間にもアリアの身には危険が迫っているのだ。
「邪魔だ！」
階段に躍り出てきた木偶人形をデザートイーグルで破壊して蹴飛ばして進む。

「見えた！」
理子が次の入口地下２階のドアを発見する。
俺達は扉の両側につくと一気にドアを開け放ち部屋に飛び込んだ。
やはり、体育館クラスの広間が広がっている。
そこには、また一人の影があった。

「はっ、一階一階で敵とかゲームみてえだな」
戦闘狂の笑みで黒いローブの相手に言う。

「確かにねぇ」
ガシュとビーフジャーキーを噛み砕きながらその女性は言いながらローブを外した。
金髪に蒼い瞳。

「魔女連隊、極東遠征隊ドリス。一人か二人残りな。相手してやるよ」

思わず俺達は顔を見合わせた。

「キンジ、理子先に行け。ここは俺が」

デザートイーグルを相手に向けながら言うと理子がクフフと笑いながら

「はいはーい！理子が立候補しちゃいまーす」

「俺も残ろう。女の子一人を危険な場所に残して置くのは気が重いからね」

「ううん、キー君もユーユーも行って、時間はないんでしょ？」

「理子……」

心苦しいな……

レキもそうだが悪いなこんな命がけの場所に巻き込んで

「勘違いするな優、キンジ」

理子は男言葉で続ける。

「お前達には仮がある。それにオルメスとの決着はこんな形でつけたくない。だから、行け」

「戻ったらなんか奢ってやるよ」

「ええ？じゃあ、理子ユーユー女装してほしいなぁ」

なんでだよ！

「断る！」

「あ、ユーユー嘘つきだぁ。なんでも言うこと聞いてくれるんじゃないの？」

言ってないが……

「二人ともそろそろいいか？」

キンジの言葉にはっとすると理子と目を合わせて互いに頷くと俺とキンジは駆け出した。

ドリスの横を通るがドリスはニタリと笑いながらそれを見過ごした。

死ぬなよ理子

Ｓｉｄｅ　理子

「へー、あんたが残るとはねぇ」

ガシュとドリスがビーフジャーキを噛む

「そんなもの食べてるとおばさんくさいよ。お前」

ざわざわと髪が震え、ナイフを髪で2つ、ワルサーを両手に理子は構える。

「余計なお世話だ。イ・ウーから退学させられたんだろ理子？」

「どこかで会ったっけ？」

「カティ・グラッェがOBだからねぇ。話は聞いてんのさ」

「クフ、あんた達もしぶといねぇ。水無月希に組織を一度壊滅させられといてあっという間に立ち直るんだもん」

「あの女が潰したのはほんの一部だけだ。そう言えば、水無月希の弟は椎名の後継だったな。お前の男か？」

「さて？どうでしょうか？」

馬鹿にしたように理子はアドレナリンに狂ったような目でドリスを見る。

理子もまた、戦闘狂なのだ。

「その綺麗な顔。ズタズタにして椎名の後継の前に引きずり出してやろうかねぇ」

ニヤニヤしながらドリスは言った。
彼女の周囲の空間が歪んだ気がした。
木偶人形が部屋の隅から出てくる。
数は１０体、阿修羅タイプはない。

「……」

理子は黙って襲いかかってきた木偶人形の迎撃を開始する。
接近前にワルサーでコアを破壊すると次々と木偶人形は崩れ落ちていく

「申し遅れたね。私は魔女連隊、無限の人形使ドリス」

「峰・理子・リュパン４世だ！」

互いに名乗り会い。
戦いが開始される。
（これは、時間かかるなぁ……ごめんねユーユー、キー君。援護には行けそうにないや）

次々と現れる木偶人形、さらに阿修羅タイプが１体出てくるのを見ながら理子は思った。

アリア死亡まで1時間48分12秒

第１３０弾　理子ｖｓ無限の人形使ドリス（後書き）

ドリス

身長１６１センチ

年齢２４

体重　不明

所属　魔女連隊

能力　人形生成

ランクＳ

補足

魔女連隊に所属する人形使。

広範囲に宝石を埋め込むことより自立した人形を送り込むことができ、各国要人の暗殺も行ったりしている。

日本の裏の世界の戦力調査が目的で日本に来たが、能力に着目したローズマリーの接触により協力関係を結んでいる。

本来であれば日本を離脱してもいい状態であるが面白そうという理由で彼女は日本に残っている。

ローズマリーからは多額の報酬ももらっているがカティ・グラッェに許可を貰っているかは不明である。

なお、彼女は昔、水無月希が壊滅させた支部の捕まらなかった唯一の生き残りでもある。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5375r/

緋弾のアリア―緋弾を守るもの

2011年12月13日02時50分発行